

額見町遺跡Ⅱ

(B地区及びC地区一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2—



C地区SI90のL字型カマド付設置支柱竅穴建物

2007年 3月30日

石川県小松市教育委員会

額見町遺跡Ⅱ

(B地区及びC地区一部区域の調査)

— 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2 —

2007年 3月30日

石川県小松市教育委員会

例 言

1. 本書は小松市が施工する串・額見地区産業団地造成事業に伴って、平成6年から平成12年度までに小松市教育委員会が調査主体となって実施した額見町遺跡（ぬかみまちいせき）の発掘調査報告書である。本報告は平成17年度から平成21年度までに5分冊で、刊行を予定しており、本書はその第2分冊目、B地区及びC地区一部区域の報告書にあたる。
2. 発掘調査及び出土品整理は、小松市の単独事業として行なったものであるが、発掘調査費は小松市土地開発公社からの受託という形態をとった。
3. 発掘調査の調査地、調査面積、調査期間、調査担当者は次のとおりである。
《調査地》石川県小松市額見町な1番地外
《報告対象面積》（B地区及びC地区一部区域）約8,000㎡
《調査期間》（B地区）平成8年11月1日～平成8年12月17日
平成9年4月1日～平成10年6月29日
平成10年9月28日～平成10年10月1日
（C地区）平成10年9月23日～平成10年10月6日
《調査担当者》（B地区）望月精司・西田（大橋）由美子・岩本信一
（C地区）望月精司
4. 遺構の測量図作成については、向出泰央（臨時職員）・谷口佳代・柿崎とも・木戸真由美・中村悦子・望月智美ら測量補助員の協力の下、調査担当者である望月と西田、岩本が実施した。また、遺構全体測量及び基準点測量に関しては、アジア航測株式会社に委託した。
5. 出土品整理は、平成9年度から平成18年度までの中で、遺跡全体として行ったものであり、当該地区の整理は、その中で随時、出土品整理作業員を雇用し、望月精司が主に担当した。なお詳細な整理経過は第1分冊報告書「額見町遺跡1」第1章第3節の記載に基づく。
6. 遺物実測、製図、観察表作成、遺物構成把握、原稿執筆については、出土品整理作業員、江波圭、奥出桂子、柿田康子、国本久美子、谷口佳代、山崎千春の協力を得て、望月と西田が実施した。
7. 本書の編集は望月が担当し、執筆分担は目次に記載した。
8. 写真撮影は遺構を望月・西田が、遺物を望月が担当し、空中写真についてはアジア航空株式会社に委託した。
9. 本調査において出土した遺物を始め、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
10. 本書に掲載の写真等については、無断で複写、転載することを禁じています。転載利用の場合は小松市教育委員会へ使用許可を申し入れてください。
11. 発掘調査と報告書の作成にあたっては、次の方々、機関、団体からご協力、ご指導を賜った。ご芳名を記し、感謝の意を表したい（所属及び敬称略、五十音字順）。
赤澤徳明、穴澤義功、上村安生、宇野隆夫、大澤正己、柿田祐司、春日真実、亀田修一、川畑 誠、木立雅明、北野博司、金 鎬詳、小嶋芳孝、小林正史、権 五栄、酒井清治、坂井秀弥、笹澤正史、定森秀夫、城ヶ谷和広、菅原祥夫、杉井 健、杉本 宏、田嶋明人、出越茂和、戸調幹夫、西谷 正、丹羽野裕、浜中有紀、橋本澄夫、畑中英二、菱田哲郎、藤原 学、宮田浩之、森 隆、森内秀造、門田誠一、山中敏史、吉岡康暢、渡辺 一、
（財）石川県埋蔵文化財センター、額見町町内会

目 次

例 言	i
目 次	ii
凡 例	iii
報告書抄録	iv
第Ⅰ章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区 (望月 精司) ...	1
第1節 額見町遺跡と発掘調査概要	1
第2節 今回報告の調査区 (B区及びC区一部) 概要	6
第Ⅱ章 今回報告区域検出遺構	15
第1節 建物遺構 (西田由美子) ...	15
第2節 土坑及び窠状遺構 (西田由美子) ...	125
第3節 手工業生産遺構 (土師器焼成坑・鍛冶炉) (望月 精司) ...	147
第4節 その他の遺構と包含層 (望月 精司) ...	155
第Ⅲ章 今回報告区域出土の遺物 (望月 精司) ...	161
第1節 出土遺物概要と分類	161
第2節 各遺構出土遺物解説	167
付 表 額見町遺跡Ⅱ報告区域出土古代遺物観察表	260
第Ⅳ章 総 括		
一三湖台地集落群の古代前半期土器様相一 (望月 精司) ...	278
写真図版	305

凡 例

(遺構について)

1. 本書で示す方位は、座標北であり、座標は国土交通省告示の平面直角座標Ⅱ系に準拠した。また、水平基準は東京湾平均海面水準（T. P.）である。
2. 遺構名称は竪穴建物跡を SJ、掘立柱建物跡を SB、土坑を SK（土器器焼成坑も SK）、溝状遺構を SD、炉状遺構を SJ（鍛冶炉も SJ）、井戸を SE、特殊祭祀遺構を SX、ピットを P とし、土器溜まりはグリッド（Gr）名に土器溜まりを付した。P は調査地区ごとに遺構番号を付したが、他は遺跡全体での通し番号とした。
3. 現場で付した遺構番号を変更したのについて、SK42 と SK48 を土器溜まりの一部とみなしたため欠番、SK80 を竪穴建物内土坑に変更したため欠番、SK59・SK82・SK103 はピットへ変更したために欠番とした。
4. 遺構図の基本的な図掲載縮尺は、次の通りである。竪穴建物跡に関して平面図・断面図を 1/60 とし、掘り方平面図は 1/120（一部 1/75 あり）、造り付けカマド平面・断面図は 1/30、削平竪穴建物跡については 1/100 とし、断面図で一部 1/50 とする。掘立柱建物跡は平面・断面図を 1/100、土器溜まりは平面図を 1/80、土坑は平面・断面図を 1/40 とするが、一部 1/80 の場合もある。炉状遺構平面図は、1/40 とする。
5. 遺構図で示す平面図の + はグリッド杭の位置を、断面図は水平レベルラインである。これに付記する H = とした数値は標高値を水平基準から求めた海拔高で示す。
6. 竪穴建物平面図に記載する細かいドット網掛け範囲は被熱酸化範囲を、粗いドット網掛けはカマドソデ粘土範囲を、ストライプ網掛けは切石を示し、砂目ドット網掛けはソデ被熱を、掘り方平面図に示した薄いドットは柱穴を示す。また、竪穴建物跡及び掘立柱建物跡の柱穴内に示した網掛けは柱圧痕位置を示す。なお、土坑と竪穴建物の遺物出土状況図に示す土器を結ぶラインは接合関係にあることを示すもので、それに付記した図 No は遺物図版の図に付した番号と一致している。
7. 竪穴建物跡の土層断面図に示す数字は覆土層を、アルファベットは床下土層を示し（床下のみの場合数字で示すものあり）、その間の太線は床面ラインを示す。また、土層註に示す色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版 標準土色帖」に基づく。

(古代の遺物について)

1. 本書または観察表で示す遺物の種別や土器の器種名については、本文 161 ~ 166 ページに示したとおりである。また、観察表や本文に示す遺物属時期については、田嶋明人氏の北陸古代土器編年軸（田嶋明人 1988「古代土器編年軸の設定」『シンポジウム北陸古代土器研究の現状と課題（報告編）』及び田嶋明人 1997「加賀地域での 10・11 世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の 10・11 世紀代の土器様相』）に基づく編年標記であり、その編年の筆者暦年代観については観察表の巻末にまとめて掲載する。
2. 遺物図版の縮尺は鉄器を 1/2 に、それ以外を 1/3 に統一したが、一部須恵器中壺については 1/5 で掲載した。また、遺構図に掲載した造り付けカマド契口部材の石材実測図についても 1/4 とした。
3. 遺物図版で示す実測図断面に示される網掛けは、黒塗りが須恵器または須恵質製品、白抜きが土師器または土師質製品、ドット網掛けが陶磁器類、ストライプ網掛けが石器とした。また、土器の内外面に示される網掛けについては、細かいドットが赤彩、粗いドットが黒色焼成、砂目が黒直跡または油痕直跡であり、カマドの支脚や契口石材の網掛けは被熱部分を示す。
4. 須恵器や土師器、陶磁器類の実測図断面に示す「↖」はヘラケズリ調整の範囲を、外面や内面に記される「→」はケズリに伴う砂粒移動の方向を示す。また、砥石に示す「↖」は磨耗痕跡範囲を示す。
5. 須恵器、土師器の実測図においてロクロ（回転台など回転使用のもの含む）による成形や調整を行うものについては、口縁部ラインや底部ライン、内外面調整ラインを非ロクロ製品と意識的に分けるため、定規で線を引き、非ロクロ製品はフリーハンドで示した。ただ、中世土師器はロクロ使用でも回転惰力の弱いものはフリーハンドとしている。
6. 遺物説明、観察表で示す法量計測について、口径（受け部径・返り径）は口縁上端部（受け上端・返り上端）での直径を、底径は底部切り離し離上端部での直径を、高台径は台の外端部径を、頸部径（基部径）は頸部（基部）屈曲部の最小径を、胴部径（つまみ径）は胴部（つまみ部）最大径を、脚部径は脚下端部での直径を示す。なお、器高等の高さ計測については、器形の安定している部分での平均的な数値とし、立高や返り高は受け部下端から口縁部、返り部までの垂直高とした。
7. 遺物説明、観察表で示す胎土については、観察表巻末に凡例をまとめて掲載する。
8. 遺物説明、観察表の土器成形痕跡の中で、叩き出し成形に伴う叩き痕跡については、内堀信雄分類案に基づき（内堀信雄 1988「須恵器類に見られる叩き目について」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題』）、H 類を平行線文、D 類を同心円文とし、H a 類は平行線彫り込みに直交した木目のあるもの、H b 類は右上がり斜交の木目のあるもの、H c 類は左上がり斜交の木目のあるもの、H e 類は木目の見えないものとし、D a 類は木目の見えないもの、D b 類は同心円彫り込みに沿って同心円木目の見える芯材使用のもの、D c 類は柵目状木目のもの、SD 類は木製無文当て具の年輪痕跡のものとした。

報告書抄録

ふりがな	ぬかみまちいせき (Nukamimachi Sites)							
書名	願見町遺跡							
副書名	単・願見地区産業団地造成に伴う歴史文化財発掘調査報告書 2							
巻次	Ⅱ							
編著者名	望月精月・西田由美子							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 (電話) 0761-22-4111							
発行年月日	西暦 2007年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
願見町	石川県小松市願見町 な1番地外	市町村	遺跡番号	36度 21分 16秒	136度 24分 30秒	B地区 1996.11.01 ~ 1998.10.01 C地区 1998.03.28 ~ 1998.10.06	B地区及 びC地区 の一部 約 8,000	小松市が施 工する中・ 願見地区産 業団地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
願見町遺跡	集落跡	飛鳥・奈良・平安時代 集落遺跡 7世紀～9世紀前半 主体で、10世紀～11 世紀に土師器生産、 12世紀に灰窯遺構	竪穴建物 50軒、掘立柱建 物跡 91棟、土坑 65基、 竈状遺構 19基、土器溜ま り 7箇所、土師器焼成坑 5基、鍛冶所 4基	須恵器・土師器・朝鮮 系軟質土器・甕型土製 品・棟突状土製品・特 殊瓶・円面礎・各種時 鐘車(陶・石)・専用挽合 砥石・鋼製耳環・鉄鏝・ 刀子		集落成立期の7世紀 にL字型カマド付設 竪穴建物を検出する 朝鮮系移民集落で、 今回報告区域では10 軒のL字型カマド付 竪穴建物を検出。		
要約	6世紀代に墓域であった台地上に、古墳群の消滅とともに突如出現する古代集落遺跡である。7世紀初頭の集落成立時にL字型カマドを付設する竪穴建物様式を高い確率で選択している点から、朝鮮系移民を主体とした集落遺跡と判断される。7世紀後半に生産される朝鮮系技術を導入したような朝鮮系軟質土器生産や同時期に始まる鍛冶生産、須恵器窯製品を産出した際に生じる空道具片の出土など、当集落が手工業生産に携わったことを示す。当集落の近隣にある南加賀丘陵製鉄・製陶遺跡群が7世紀に変革期を迎えることと関連性が強く、広域での台地上集落群は丘陵部工業生産地帯の母村としての性格を持つ。7世紀後半は集落増加期であり、8世紀前半までに全盛期を迎えるが、7世紀後半の新たな建物様式の導入や近江系煮炊具、丹波系煮炊具の導入など、朝鮮系移民のみならず、西日本各地または西を經由しての移民流入によって集落の拡大が図られたことを示す。律令政府主導の下で計画的に設置・経営された集落と言え、それは地方支配政策、評制施行前段階策としての性格をもつ。当台地集落の成立は近隣地に置かれただろう江沼評や工業生産地と一体的なものであり、潟湖をその媒体として屯倉的な領域支配がなされた地域と性格づけられよう。							
SAMARY								
<p>The NUKAMIMACHI SITES are an ancient village ruins in the fee that appear suddenly on the plateau that was the grave region with the disappearance of the old tomb group in the sixth century. In view of the point to have selected the Ana building where L character type kitchen range is set up when the village is approved century seventh by short odds, this village ruins are judged to be ruins mainly composed of a Korean immigrant. The excavation of the kiln tool splinter caused when the blacksmith production and the Earthen kiln product that starts from existence of Earthenware group that introduces a Korean in be produced in the latter half of the seventh century technology and a simultaneous period are selected etc. show that this village was involved in the manual industry production. The vicinity Minamikaga hill steel manufacture and the pottery manufacture ruins group's in this village coming the revolution period in this in the seventh century has and the relation has the location village group on the plateau strongly said by the wide sense with the character as the mother's body village in the hill part industrial production zone. The latter half of the seventh century is a period of an increase of the village, and it is shown that not only Korean immigrants of the introduction of a new building style in the latter half of the seventh century and the Receptacle of cooking of the Ohmi system and the Receptacle of cooking of the Tanba system, etc. but also the expansion of the village was attempted by the immigrant inflow via West Japan various places or the wests though the glory period will come by the eighth first half of the century. It can be said the village that was set up and managed in premeditation under the Ritsuryo government initiation, and has the character as the steps measure by it before enforcing the criticism system of the local rule policy. The approval of this plateau village is an Enuma criticism, is industrial production ground that might have been put on the vicinity ground, is united, and it is thought the region where the seashore lake is assumed to be the medium and it was performed by area rule ton warehouse.</p>								

第1章 額見町遺跡の概要と今回報告の調査区

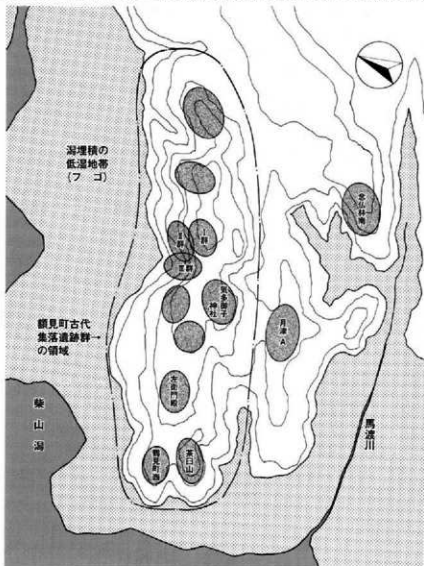
第1節 額見町遺跡と発掘調査概要

第1項 額見町遺跡と額見町古代集落遺跡群

額見町遺跡は、長軸 800 m、短軸 550 m の北東方に長い遺跡分布を示す 440,000 m² の広大な集落遺跡である。幾つかの集落単位が集合した結果、広大な面積の集落域となったものであり、大きくは額見町古代集落遺跡群と称したエリアが広義の額見町遺跡であると評価する。当地は昭和 20 年代の耕地整理によって起伏に富んだ台地地形が階段状に削り取られ、その際に台地南西端の茶白山周辺が削平を受けた。茶白山古墳や茶白山祭祀遺跡、茶白山遺跡はその時に発見された遺跡である。昭和 30 年以降、加賀三湖干拓工事に伴い、額見町遺跡から北東へ伸びる台地は土砂採取により大きく削平を受けたが、その際、埋蔵文化財調査を行った形跡はなく、存在したであろう額見町遺跡の北側部は消失することとなった。その後、大規模な開発等が行われなかったこともあり、当地は遺跡の発見が遅れ、昭和 56 年の石川県立埋蔵文化財センターが行った詳細分布調査まで、遺跡所在すら確認されずにあった。石川県立埋蔵文化財センターが平成 8・9 年度に発掘調査を行った額見町西遺跡にしても、平成 7 年に小松市教育委員会埋蔵文化財調査室が地主の依頼によって行った試掘調査において新発見した遺跡であり、当地上にはほぼ同一時期の集落遺跡が点在していたのだろう。明治 42 年及び昭和 37 年に行われた地形測量図をもとに、これまで近隣で調査してきた成果、遺存する地形等から額見町古代集落遺跡群の台地地形を復元したものが右図に示したものである。当地地帯は柴山湯に面して北東方に細長く伸びる台地で、馬渡川の開析谷に面する台地よりも若干小高い独立台地状を呈す、長軸 2400 m、短軸 750 m、約 150ha にも及ぶ広大な台地である。図に示した集落分布予想図は、旧地形をもとに想定したものだが、今回の調査所見で得たように、台地には複雑に小支谷や鞍部が入り込むため、さらに集落単位は分断されていた可能性が高い。今後の詳細な地形把握と分布調査により、遺跡分布の検討はなされなければならないが、既に削平を受けた地域は多く、これから検証することは困難を極めるだろう。

第2項 平成7年度～12年度発掘調査概要

今回報告する額見町遺跡は、平成7年度から12年度までの6年間にわたる発掘調査報告で、石川県立埋蔵文化財センター調査分も含め、38,500 m² の面積を発掘調査した。当調査で

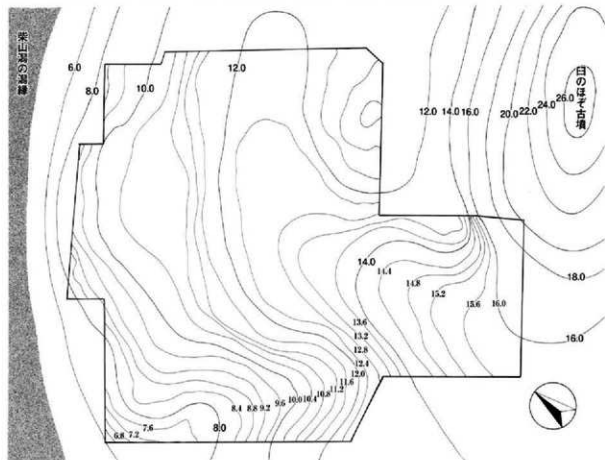


第1図 額見町古代集落遺跡群の復元地形と集落分布予想 (1/20,000)

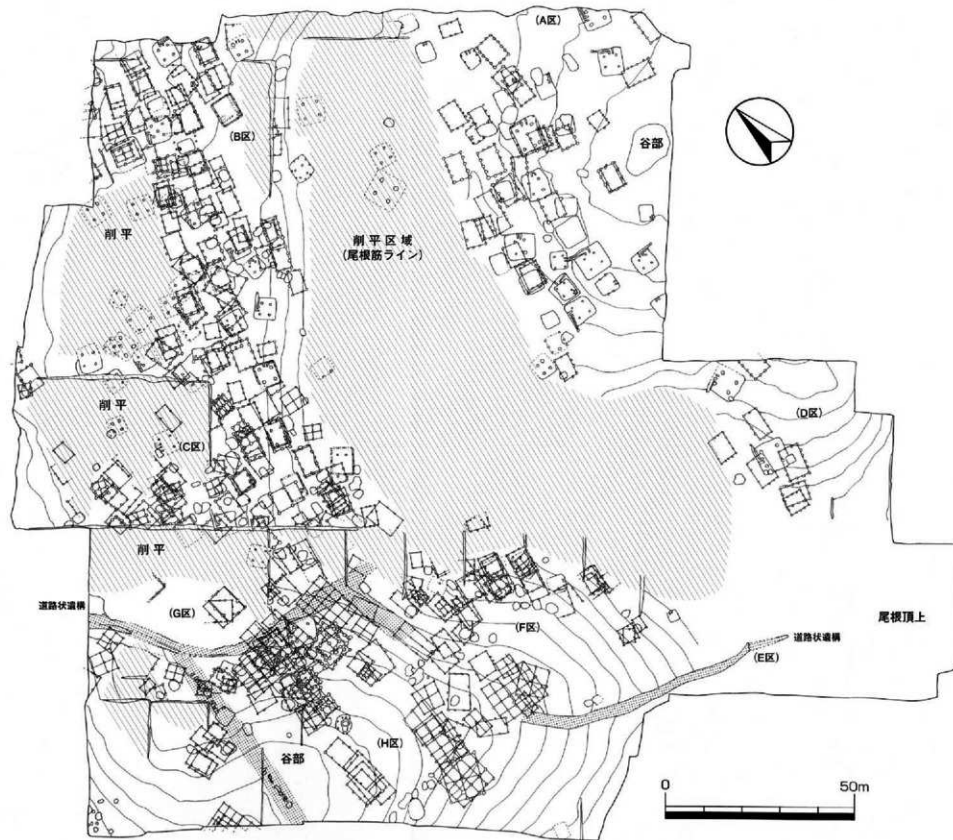
検出した遺構は、堅穴建物119軒、掘立柱建物330棟、土坑424基（うち土師器焼成土坑10基、製炭土坑7基、墓坑15基以上）、か状遺構58基（うち鍛冶か跡12基）、井戸3基、溝状遺構53条（うち道路状遺構5本）、集石遺構2基で、他に土器溜まり遺構を20箇所以上確認している。後述するように調査面積の多くが削平されていたため、相当数の遺構が既に消失した状態であり、遺跡が完存していれば、どれだけの建物数が存在していたのか、恠やまれるところである。14世紀頃の集石遺構2基と縄文時代に遡るであろう落とし穴土坑1基以外は全て、7世紀前半から12世紀に位置づけられる古代遺構であり、多くの遺構が密集、重複する状況であった。

当地の旧地形を調査所見に基づいて作成したのが以下の図だが、調査区の東側に存在する標高26mの尾根頂上部（臼のほぞ古墳立地）から南西側に張り出すようにして尾根筋が伸び、そこから北側へと緩く標高を減じる形で、馬の背状に尾根筋が伸びていく。東側尾根頂上部から北側へ伸びる尾根筋の間には谷部が入り込み、尾根頂部との比高差は15mにも及ぶ。谷部から見て、臼のほぞ古墳の立地する尾根頂上は、見上げるような高さであり、集落立地に際して古墳を意識したような選地を行っていたことは間違いない。また、北側へ細く伸びた尾根筋から北西方へは緩く張り出してテラス状の部分（テラス状部分の中央は鞍部が入ったように若干下がりが気味となる）を形成しており、そこから柴山湯の湯縁へは比高差7m以上の急傾斜となる。この張り出し部の南西側では、柴山湯から南東側へ伸びてくる支谷に狭く小さな谷が入り込み、楕円形状を呈する緩い傾斜地を形成している。比高差6m程度を測る傾斜面で、南西側へ谷は広がっている。

極めて起伏に富んだ複雑な地形を呈していることが復元地形コンタから見て取れると思うが、耕地整理においては尾根筋部分を削り取り、鞍部や谷部へ土砂を埋めるという造成を行っている。この結果、約14,000㎡、調査面積の36%が削平による破壊を受けてしまっていた。一部深い遺構に関しては、遺構基底部が遺存していたが、大半は遺構痕跡も残さない状態であり、特に尾根筋部分は遺構がどのような分布をしていたのか、把握できる状況にない。ただ、尾根筋でも削平を受けていない部分もあり、その箇所での遺構分布が確認できないことや鞍部から尾根部へと徐々にではあるが、遺構密度が希薄となる傾向などから考えて、尾根筋上での遺構分布はもとも

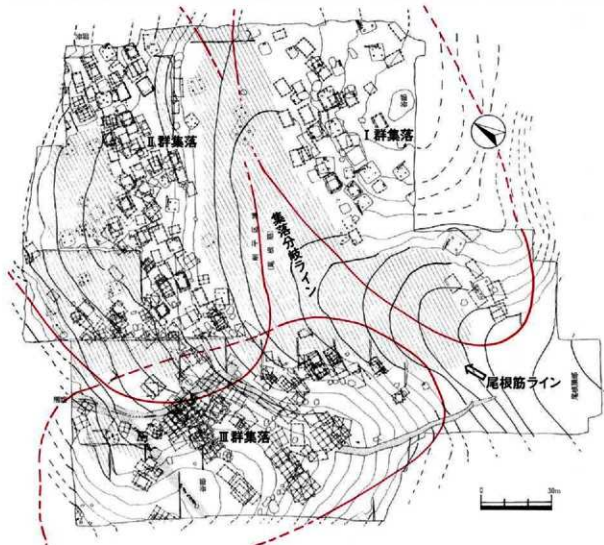


第2図 額見町遺跡発掘調査区域内の復元地形 (1/2,000)



第3図 額見町遺跡主要遺構配置図 (1/1,000)

と低かった可能性がある。尾根筋が集落の分岐線であった可能性もあろう。当地は榮山湯から吹き込む風が強く、風当たりの強い尾根部を避けて選地していたものと思われ、建物立地は緩傾斜地を形成する谷部や鞍部を中心になされていたと予想される。鞍部や谷部は黒色土壌積が厚く、粘土質の黄褐色土山が露出する尾根筋部分よりも比較的水捌けがよいという点も、建物選地の一つの要因であったろう。削平地が多く不確定要素は多いが、以上の集落分布傾向から想定すると、以下の集落群構成になるとみる。Ⅰ群集落はA・D地区に展開する鞍部緩斜面上の建物群、Ⅱ群集落はB地区からC地区そしてF地区北端へ南北に延びる鞍部緩斜面上の建物群、Ⅲ群集落はF・G・H地区に分布する榮山湯へ緩く傾斜していく広い緩斜面上の建物群である。Ⅰ群集落は7世紀前半の堅穴建物の検出例が多く、7世紀代から8世紀前半に主体を置く集落群と言える。Ⅱ群集落は7世紀前半から8世紀代までの長期集落と言えるが、主体は7世紀中頃から8世紀中頃で、最も建物検出例の多い集住区域と言える。Ⅲ群集落は7世紀前半の建物も確認されるが、それはⅡ群集落からの延長で捉えられるもので、総じて8世紀以降に主体を置く集落と言える。特に11世紀後半から12世紀の建物群が広く展開しており、Ⅰ・Ⅱ群集落では未確認の井戸や道路状遺構、大規模な土器廃棄場遺構等を検出する。全ての遺構を検証したわけではないため、今後、報告する中で、細部の修正が行われるものとみるが、大略的には、以上Ⅲ群の集落群構造を展開していたものと考えている。当集落群のまとりに基づき、報告書刊行順も、調査年度順に纏らわれず、Ⅰ群集落であるA地区とD地区の報告を報告書Ⅰとした。今年度はⅡ群集落であるB地区とC地区の一部の報告を報告書Ⅱとして刊行し、C地区の一部とF地区そしてG地区の一部の報告を報告書Ⅲ、G地区の一部とH地区の報告を報告書Ⅳ、さらに、鉄関連遺物報告と化学分析報告、考察を報告書Ⅴとして、平成21年までには完了させる予定である。



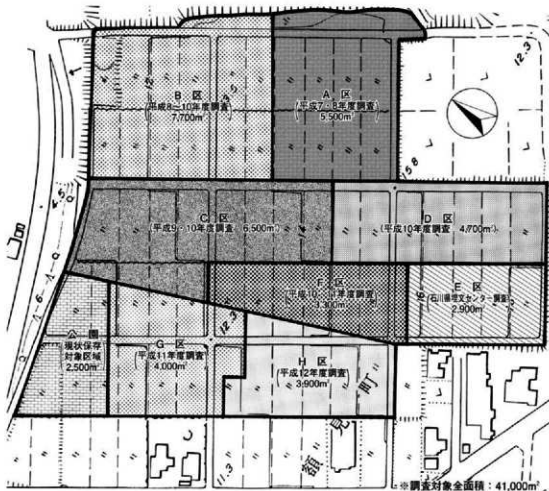
第4図 額見町遺跡の集落のまとり概念図

第2節 今回報告の調査区（B区及びC区一部）概要

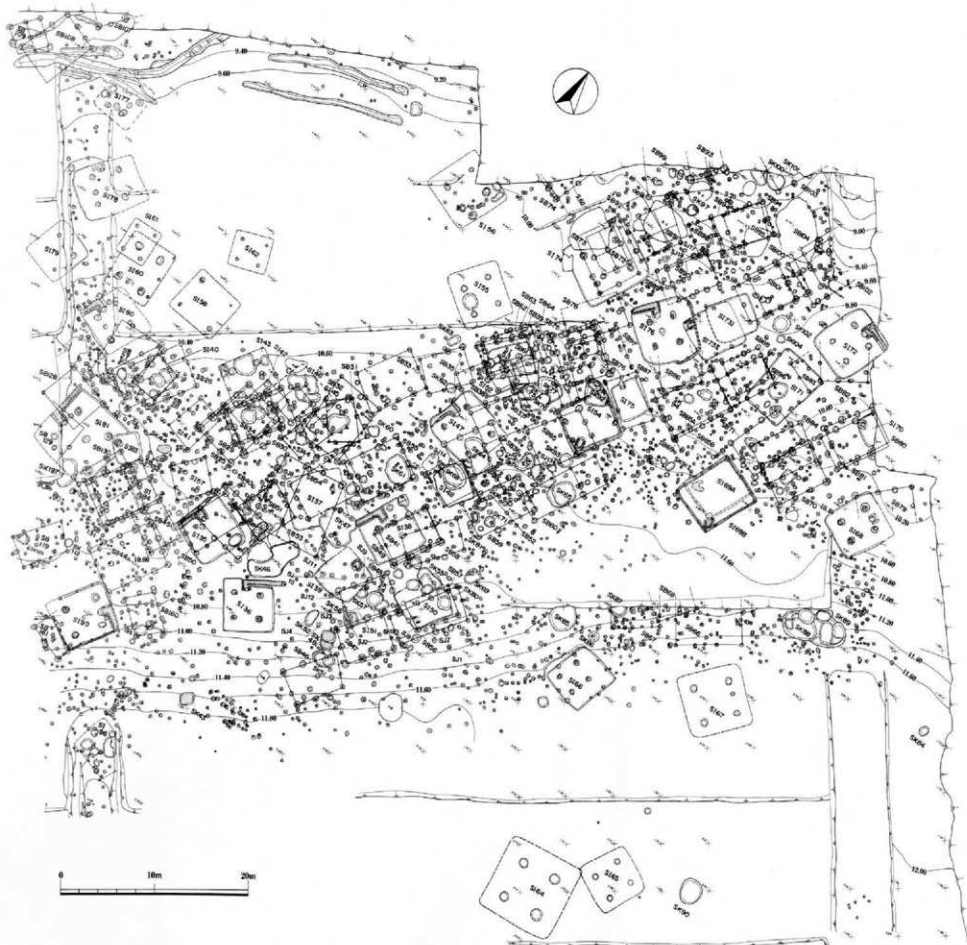
第1項 遺構構成と分布の概要

調査年度が2ヵ年にわたっているため、当区域をB地区、C地区とに分けてはいるが、遺構分布のまとまり自体は第4図でII群集落としたように、B・C地区からF地区の北側まで及んでいる。本来はそこを含めて報告すべきだが、半年度の報告量としては予算的に超過してしまつたため、B地区からC地区の北側の一部を含めて今回の報告分とした。対象区域をグリッドで示せば、南北ラインが「あ〜と」、東西ラインが「29〜48」で、調査面積はB地区の7,700㎡とC地区の7,700㎡とライン区域の970㎡で、合計約8,700㎡を測る。ただ、このうちの約3,500㎡近くは昭和初期の農地開発により削平を受け、遺構が消失してしまつていた。遺構の下層、基部は残存するものの、遺構上層が削り取られている区域はさらに広く、4,300㎡近くにも及ぶ。つまり、調査区域の約半分の区域が何らかの削平、破壊の被害を受けていたわけであり、遺跡の保存状態は決して良好とはいえない状況であった。それでも、以下に示すように、これだけの遺構数が台地集落で検出されたことは、遺跡存続期間が長いこともその要因だが、当地区が当集落群の中でも中核的な集落単位であったことを示すものであろう。

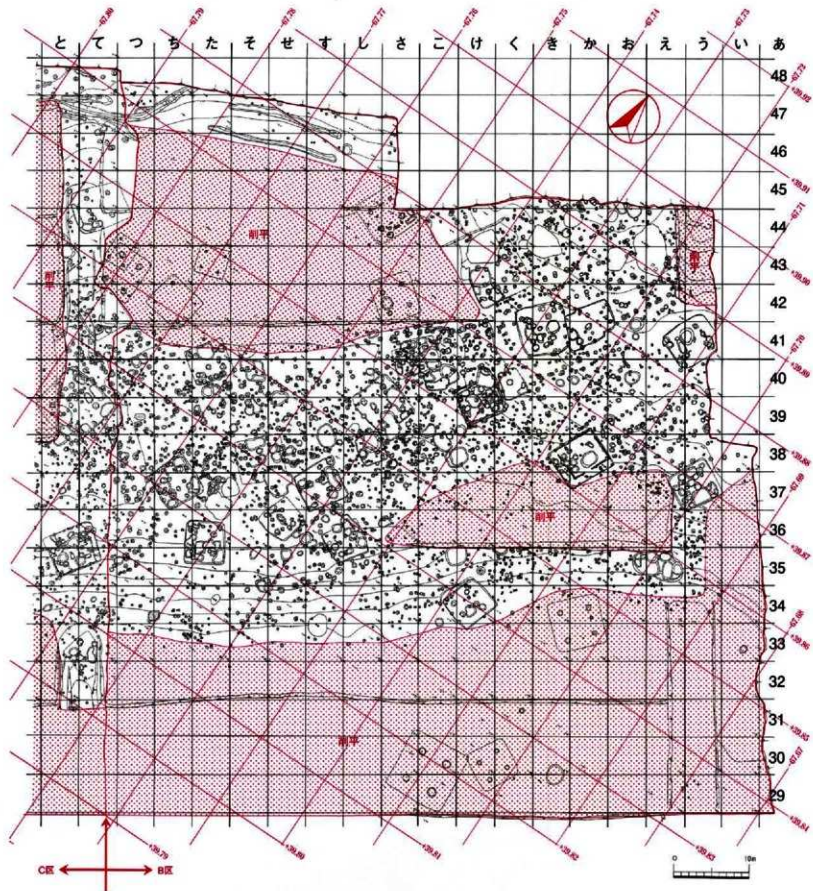
竪穴建物や掘立柱建物の建物遺構分布は、調査区を南北対角線に沿う形で、極めて密集して建ち並んでいる。特に、掘立柱建物の密集重複は顕著で、柱穴の並びから建物遺構を把握することは困難を極めた。加えて、遺構密集区が特に黒色土層からの遺構掘り込みであることと緩斜面上に立地するために掘立柱建物の柱筋が歪んだり、地山への掘り込みが浅くなるなどの条件が重なり、遺構検出及びその認定においては不安要素もある。ただ、密集区であることは確かであり、そのような条件下での建物であることを念頭に、掘立柱建物の可能性を考えられるものは全て掘立柱建物として提示を行った。当報告を行う段階で、掘立柱建物と認定していたものを柱筋やピット位置の不安定性から、掘立柱建物から外すべきかを検討したが、調査を行ってから10年近くが経過して



第5図 額見町遺跡発掘調査地区割図（1 / 2,000）



第6図 今回報告の調査区（B区及びC区一部）全体図（S= 1/400）



第7図 調査区の座標軸とグリッド配置（1/500）

おり、図面資料のみの判断で除外するよりも、その調査段階での現地での遺構把握の視点を重視し、一部を除いては、ほとんどそのまま提示することとした。

以上の遺構認定に基づき、今回報告で提示できた遺構は、竪穴建物がB地区41軒(SI35～SI76のうち、SI49・SI59・SI63は調査中に他遺構へ変更したため欠番となり、SI69・SI73は2軒の竪穴建物の重複と捉えたためにB地区総計は41軒となった)とC地区9軒(SI77～81、SI83～84、SI90、SI96、なお番号が抜けているものはC地区の次回報告分)のあわせて50軒、掘立柱建物がB地区80棟(SB25～SB104のうちSB42とSB43は調査中欠番となり、SB25とSB85は建替えがあるためにそれぞれ2棟分としたため総計80棟となった)とC地区11棟(SB107～109、SB119、SB128～SB132、SB160、161のうち番号が抜けているものはC地区の次回報告分)のあわせて91棟、土坑がB地区58基(SK42～SK105のうち、SK43、SK44、SK49、SK52は土師器焼成遺構のため土坑から除外し、SK42、SK48は上層土器溜まりへ、SK80はSI50の竪穴内土坑へ、SK59・SK82・SK103はビットへ変更したことによりそれぞれ欠番となり、SK46は3基の土坑重複、SK47・58がそれぞれ2基の土坑重複により、土坑総計は65基として報告する)とC地区7基(SK109・112・127・137・142・154・183、なお番号が抜けているものはC地区の次回報告分)のあわせて61基、炉状遺構がB地区18基(SJ01～SJ18のうち、SJ01とSJ03は鍛冶炉のため炉状遺構から除外し、各竪穴建物土内被熱面8箇所を加えて計18基とした)とC地区1基(SJ19)のあわせて19基、土器溜まりがB地区の6箇所(上層土器溜まり、お38Gr土器溜まり、か43Gr土器溜まり、き40Gr土器溜まり、さ35Gr土器溜まり、し36Gr土器溜まり)とC地区の1箇所(て36・37Gr土器溜まり)、土師器焼成遺構がB地区の5基(SK43・SK44・SK49 I・SK49 II・SK52)、鍛冶炉がB地区の4基(SJ01、SJ03及びSI37とSI72の竪穴建物内付設鍛冶炉各1基)、ほか小穴多数となった。

以上述べた各遺構の時期別推移については、竪穴建物は7世紀前葉9軒、7世紀中葉6軒、7世紀後葉16軒、8世紀前葉3軒、8世紀中葉3軒、8世紀後葉0軒、9世紀前葉1軒であり、掘立柱建物は時期把握可能なもののみの数値だが、7世紀前半7棟、7世紀後半16棟、8世紀前半10棟、8世紀後半6棟、9世紀2棟、土坑は7世紀前半4基、7世紀後半5基、8世紀前半7基、8世紀後半9基、9世紀4基となる。竪穴建物における7世紀後半の占める割合は過半数にまで及び、7世紀前葉から軒数は倍増する。8世紀代に入り、竪穴建物が減少するのは掘立柱建物へ建物様式が移行するため、それを示すように、掘立柱建物は8世紀前半以降も一定量の建物が存在する。土坑層属時期が8世紀代に中心を持つ様相と呼応しており、当区域においては8世紀後半以降、9世紀に入っても、一定量の建物遺構の存在が十分である可能性は高いと言える。掘立柱建物の時期層属が十分でないために積極的根拠に欠け、包含層出土土器の時期別量比(時期層属可能な須恵系食器類と土師器の破片数構成割合)はその可能性を表付ける。

つまり、7世紀前半で7%、7世紀後半で10%、8世紀前半で34%、8世紀後半で26%、9世紀前半で21%、9世紀後半で2%というように、8世紀後半以降の土器出土量に顕著な減少傾向は認められず、それは9世紀前半まで確実に建物が維持される傾向があることによる。ただ、竪穴建物を中心として、この区域においては、7世紀後半に建物数のピークがあることは間違いない、そのピークは8世紀前半まで持続するが、8世紀後半以降はやはり停滞の様相を帯びてくる段階と位置づけるのが妥当だろう。9世紀前半までその集落様相は継続し、後半に急速に衰退したものと理解されよう。

以上のように、今回報告地区の遺構は、A・D地区よりも新しい時期まで集落存続する傾向が強いが、それでも9世紀後半には衰退し、10世紀には集落として途絶える様相をもつ。この時期、当地区では土師器焼成坑が出現してくる。出土する土師器から、10世紀後半から11世紀前半まで営まれた土師器焼成坑と判断でき、その後、断絶時期を挟むが、11世紀末から12世紀前半には土師器廃棄場が営まれる。今回の報告地区では、この時期の建物遺構は確認されておらず、10世紀後半以降は集落中核部から外れた、手工業生産の場または祭祀に伴う土師器廃棄場としての位置付けがなされたのであろう。両遺構は一部重複するように存在しており、ここには9世紀以前の建物遺構の分布も途切れるなど、集落縁辺区域と位置づけられていた場所と考えられる。次項で述べるが、地形的には尾根筋から平坦部へ転換する境の緩斜面にあたり、集落群の切れ目に当たっていたと理解される。

次に、掘立柱建物の立地と建物分布の様相について概観する。建物の時期が7世紀前葉から9世紀前葉までと幅を跨ぐものの、建物遺構の主軸は比較的主軸とされており、特に掘立柱建物については、主軸を北から東へ32度前後振ったところに設定する建物が主体的である。そこから主軸方位を90度西へ振る建物もあるが、

概ねN-15～40°-Eの範囲で分布しており、時期的に法則性をもって主軸がずれていくような傾向は読み取りにくい。なお、主軸方位を90度西へ振る建物に関しては竪穴建物が多いが、これはカマドの付設される位置を主軸と設定しているため、カマドを付設する向きが建物の向きを規定するとは限らないことを示している。筆者は建物主軸を考える場合に入口の設定がどこにあるのが重要であると考えている。それは掘立柱建物においても同様で、どのような配置で建て並んだ建物群がどのような向きに入口をもって存在していたのか、復元することで建物主軸の理解は可能であるだろう。竪穴建物の場合、カマド煙道の位置も関連していたらうし、立地する地形、そして当地に直撃する北風の強さ等、自然条件も考慮する必要があるだろう。さらに、地形も建物主軸を考える要因になると考えている。前回の報告でも述べたが、建物主軸はほぼ地形コンタラインにのる形で、ちょうど平坦地が延びる方向に向く。コンタラインが方向を変えている部分でも建物主軸は他の建物と同様の軸を維持しているものがあり、必ずしも規制する要因とはならないが、当集落における大枠の建物主軸設定においては、風向きと地形は規制要因の一つであったことは間違いないであろう。

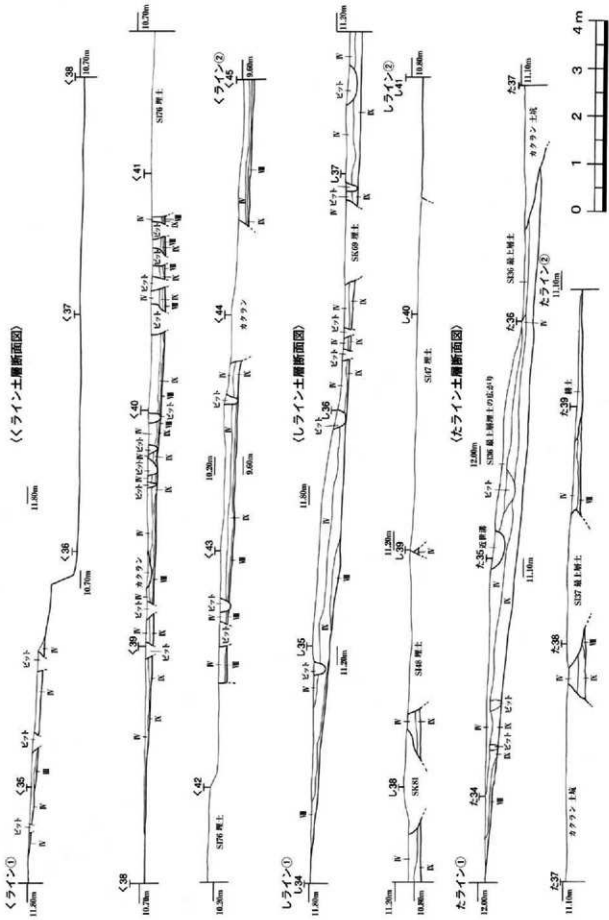
建物遺構の重複に関しては、竪穴建物同士の重複が目立たず、完全に竪穴が重複する事例は、SI73 IとSI73 II、SI76の3軒と、SI60とSI61、SI80の3軒、SI81とSI83の2軒があるだけである。このように、竪穴建物は意識的に重複を避けて建てられていた可能性があるのに対し、掘立柱建物は竪穴建物の密集箇所や掘立柱建物同士で重複する事例が目立つ。一箇所に類似した主軸で、竪穴建物と複数棟の掘立柱建物、そして土坑とが折り重なるように存在しているところもあり、掘立柱建物の重複は異常とも言える。竪穴建物が終了した時期以降に、竪穴建物と場所を重ねるようにして、掘立柱建物が建てられていたものだが、建物遺構が建てられる平坦な場所が限られていたために、このような珍しい建物重複となったものと考えておきたい。

第2項 基本層序

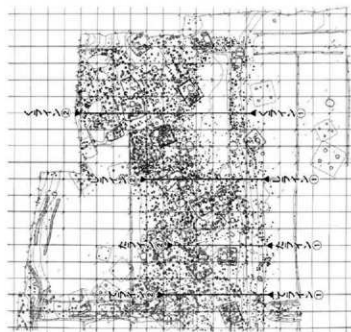
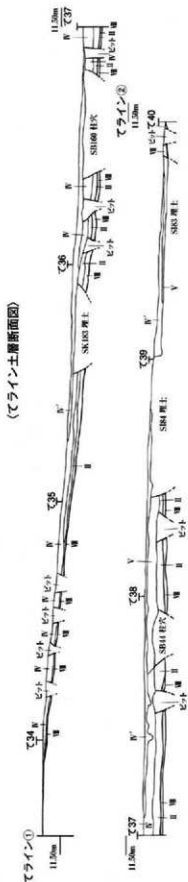
今回報告のB地区及びC地区北東側区域の包含層土層断面図は、地形傾斜の捉えられる平仮名ラインにおいて作成している。北東側から「お」ライン、「く」ライン、「し」ライン、「せ」ライン、「た」ライン、「て」ラインの6本で、特に基本的な土層堆積が把握可能な「く」ライン、「し」ライン、「た」ライン、「て」ラインを抽出し、図示した。前年度報告したA地区やD地区のような顕著な地形の起伏はないため、ほぼ全域において類似した地山土形成をしている。耕地整理による削平が著しかったために、基本土層も寸断される状態で、全体的な地形復元ができていないが、南東側尾根筋から4～5度で傾斜していた斜面が、建物密集区である、と36Gr～う38Gr付近のラインからは1度程度の極めて緩い傾斜または水平地となり、柴山湯を望む北西側斜面までは平坦地形となる。ただ、台地地形は北側に向かって、深く谷が入り込むため、SI76付近から北側は湯へ向かって傾斜しており、その部分での建物分布は徐々に希薄となっている。

断面図では粘質性のしまりの強い黄褐色土山土までの層を記しており、その上には黒色土と黄褐色土山土との漸移層的な層、そしてさらにその上にII層やIII層とした黒色土が存在する。この黒色土層には焼土や土器粒などの混在はなく、黒色系地山土と理解している。つまり、図示したように、今回報告の地区においては、削平されて黄褐色土山土が露出してしまった部分を除いては、この黒色系地山土がほぼ全域において存在しており、若干局部的な地形となる、と35・36Gr～こ35・36Gr付近については、特に当土層の形成が厚く確認される。

この黒色系地山土より上の層が古代遺物包含層となるが、黒色系地山土層の直上には概ねIV層が堆積しており、そのさらに上にV層とIV'層が堆積する。IV層は遺物や焼土粒、炭化粒を僅かに含有するものの、その混在量はV層やIV'層と大きな差があり、純粋な意味での遺物包含層はV層とIV'層のみと言っても過言ではない。古代遺構が埋り込まれる層に関しても、基本土層断面図を見ると、SB44柱穴以外はIV層上面から掘り込まれており、SB44の時期（古代I2期）とIV層掘り込みのSI76（古代II1期）の時期から考えて、IV層は集落成立初期から7世紀後半の中で堆積した包含層である可能性を持つ。つまり、IV層は集落初期の段階で堆積した遺物包含層ではあるが、7世紀後葉以降は、生活面下に存在する地山層的な位置づけがなされるものであり、IV層は包含層下層、IV'層やV層は包含層上層として、別に扱うべきものとする。このように考えれば、当遺跡においては明確な遺物包含層と呼べるものは極めて少なく、上記包含層下層は地山に類するもの、包含層上層も遺構上面に存在する表土層に近いものと理解される。と35・36Gr～こ35・36Gr付近に存在する中世1期の上層土器溜まり群やその下層に存在する古代遺物土器溜まり群が、それに該当するものと理解される。



第8図 額見町道線B区及びC区一部基本土層断面図1(1/80)



(B地区、C地区一部の基本土層ラインの位置)

朝見町遺跡基本土層注

- I層 黒褐色土 (10YR3/2)：黄土小塊、黄褐色土粒少量含有。
 II層 黒色土 (10YR1.7/1)：黄褐色土粒少量、黄土小塊、炭化粒微量含有。
 III層 黒色土 (10YR1.7/1)：黄褐色土粒少量、黄土小塊、炭化粒少量含有。
 IV層 黒色土 (10YR2/1)：黄土粒、土団片を少量含有するが、畑山に類する土。
 V層 黒褐色土 (10YR2/2)：黄土小塊、黄褐色土粒、炭化粒少量含有。
 VI層 黒褐色土 (10YR2/2)：黄土粒、炭化粒少量、黄土粒少量含有。
 VII層 黒褐色土 (10YR2/2)：黄褐色土粒、黄土小塊、炭化粒、土団片を多めに含有する。窟穴遺構の覆土層の上。
 VIII層 黒色土 (10YR2/1)：黄褐色土粒、炭化粒、黄土小塊微量含有。
 IX層 黒褐色土 (7.5YR3/4)：黒褐色土 (7.5YR2/3) を多量混化。砂質。
 X層 黒褐色土 (10YR2/2~3/1)：黄褐色土粒多め、炭化粒少量含有。
 XI層 黒色土 (10YR1.7/1)：土団の混在もなく、畑山土の可能性大きい。

第9図 朝見町遺跡B区及びC区一部基本土層断面図2 (1/80)

第Ⅱ章 今回報告区域検出遺構

第1節 建物遺構

第1項 竪穴建物

竪穴建物は、拡張建物を含めB地区で41軒、C地区今回報告分で9軒である。SI49、SI59、SI63が欠番となっている。C地区の竪穴建物については、SI77～81、SI83、SI84、SI90、SI96を報告する。規模については縦長×横長cmで記載する。建物主軸及び建物方位はカマドを奥に向けた位置を中心として北・南からの角度で表示している。また、今回報告の調査区では割平区域が含まれ、カマドが割平されている建物も多い。このようなものに関しては、長辺壁を輻軸として設定するか、北方位に近い軸を設定して、建物主軸を割り出している。竪穴建物構造の造り付けカマド類型は、昨年度報告の額見町遺跡Ⅰにすべて基づいている（望月精司2006「第Ⅶ章総括－額見町遺跡の古代建物構造と造り付けカマドについて－」『額見町遺跡Ⅰ』小松市教育委員会）。面積による建物類型も前年度報告に準じ、大が55㎡以上、大型が55～39㎡、中型36～25㎡、小型が25㎡以下としている。掘り方土坑の位置づけも昨年度報告に準じた。竪穴建物の出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

1. SI35

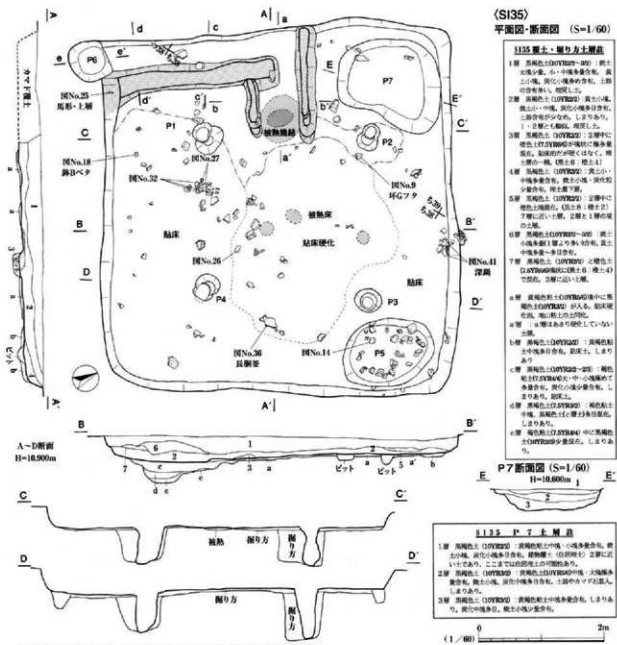
（**立地・規模・形態**）B地区の南端中央・ち35・36Gr、旧地形鞍部に位置する建物で、規模は558×530cmを測る。建物面積は29.6㎡、中型建物と位置付けられる。建物プランは若干隅丸のはほぼ正方形を呈し、西側壁にL字型カマドが付設する。壁高は32cm。竪穴主軸はN45°-W。

（**柱穴と他のピット**）中央に柱間寸法260cmを測る4本主柱を伴う。土層で柱痕跡が確認でき、柱径20～26cm、P3のみ深さ80cmを測り、他は58cmの深さを持つ。掘り方は、径63～80cm、深さは同様である。柱痕跡が残存するため、柱は切り取られて廃絶されたものと思われる。カマド右手に長径190cm、短径130cm、深さ33cmのP7と、建物右下の長径150cm短径110cm深さ10～14cmを測るP5を検出している。いずれも、貼床が上層になく、覆土にはカマド粘土やカマドソデ石・焼土が土器を伴って多量に廃棄され、特にP5では多量である。これらは建物に伴う大型ピットと考えられ、建物廃絶時にカマドを壊した崩壊土を入れて廃棄したものと思われる。

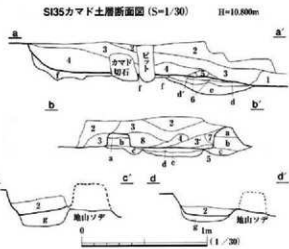
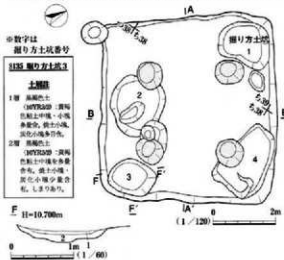
（**カマド**）中央から左へL字に曲がるL字型カマドである。焚口で顕著な被熱面をもち、カマドソデ石は内外に散乱する状態である。L字に屈曲する地点で、内側へ突出する障壁を伴い、この部分に石が据え付けてある。被熱は焚口から奥壁へ向かう長径80cmで広がっており、中央は還元して表面が白色化している。規模は、外寸幅114cm、奥壁から焚口カマドソデ端まで180cm、L字屈曲の障壁部分から末端まで220cm、焚口内寸60cm、ソデ幅は20cmを測る。ソデは直立しており、カマドの黒褐色土と、にぶい黄褐色粘土を版築状に構築し、筋状となつてみえる部分もある。基底部は、黒褐色土に黄褐色土塊を混ぜた土を叩き締めてソデのベースとしている。焚口基底部で25～30cm、煙道側基底部で35～45cmを測り、頑丈にベースを構築している。屈曲障壁部から煙道側のソデの崩壊度合いは著しい。建物廃絶時に意図的にカマドを壊したこと、平面図に表れていないのだが大型掘立柱建物跡に切られている箇所もあり、基底部のみが残存する状況である。カマド内部は全面貼床され、焚口から煙道先端へ傾斜してゆき、先端に円形ピットが掘り込まれている。また、カマド内部覆土で検出したソデ崩壊土中にカマドソデが焼けた土が混在する層を確認している。

（**覆土堆積と遺物出土、覆土内遺構**）壁際で壁崩壊土、その上層で2層に分層可能だが同一層に捉えられる人為的埋土を確認、この建物を一気に埋め戻したと考えられる。床面に凹凸が多いので、建物廃絶後すぐに埋め戻され床がバックされた状態となったと思われる。出土遺物は総数で、須恵器食器171点、須恵器貯蔵具221点、土師器食器具174点、土師器煮炊具3185点である。覆土内から出土する遺物が殆どであり、床に張り付けて検出される遺物は少ない。I 2期に位置づけられる遺物が主体的で、建物時期はこれと同様になるだろう。覆土上面にて、黒褐色土の覆土が被熱する焼土分布が認められる。径50cmの円形で、カマド側壁から260cm、右壁（北壁）から200cmに位置し炭化小ブロックも混在する。

（**床の状況と掘り方**）床はカマド周囲以外の全面が黄土粘土塊主体に黒土の混在土が床構築土として貼られていて、4本主柱に囲まれる範囲で特に強く硬化し、黄土粘土塊混在度合いが多い。貼床の厚みは4～7cm、左側では16cmと厚い部分もある。また、中央には弱い被熱跡が3箇所確認でき、炉跡と考えられる。床はフラットでなく、



SI35掘り方平面図 (S=1/130) 掘り方土坑3土層断面図 (S=1/60)



第10図 竪穴建物遺構図1 (SI35)

右側区域が他に比べ5 cm高くなっている。床下には長径190 cm短径170 cm深さ16 cmと、長径154 cm短径112 cm深さ20 cmを測る、2基の掘り方土坑が存在、黒褐色土に黄褐色粘土を含有する締まりをもつ覆土である。

2. SI36

〔**立地・規模・形態**〕 B地区南端た34・35Grの旧地形鞍部に位置、560×530 cm、プランが直線的ではほぼ正方形を呈す、面積30.8 m²の中型建物である。北側面にL字型カマドが付設する。主軸はN34°-W。壁高24 cm。

〔**柱穴**〕 4本主柱穴で、柱間寸法は265 cmだが、P4のみ柱1本分が外側へずれることになる。P4の柱中央を通すとP1・4間とP3・4間が270 cmとなる。土層から柱の抜き取り痕跡が確認できるが、下位で柱径を確認することが可能であり20～25 cmを測る。深さは床面からP1・2が70 cm、P3・4が60 cmを測る。掘り方は、径68～80 cm、深さ64～70 cmである。掘り方埋土が残った状態で、柱は抜き取られ埋戻しされている。

〔**カマド**〕 建物中央から壁に沿って右へ曲がるL字型カマドである。焚口には明確な被熱焼結層が認められ表面はやや還元し黄色味を帯びる。このすぐ奥に径10 cmの支脚抜き取りピットが検出されている。ソデは直立しており、左ソデ末端にはソデ石の一部が認められる。ソデの屈曲地点では障壁が確認できる。焚口は、内寸54 cmを測り、被熱焼結層の手前には床面に食い込んだ状態で焼土ブロックや炭化中ブロックが多量に検出されている。床の傾斜は焚口から内部へ入り5 cm程度むが、徐々に傾斜を強め、煙道断面ラインでは20 cm高くなる。ソデ幅は20 cm主体で煙道では基礎部で30～35 cmを測る。ソデは明褐色砂質粘土・褐色粘土・にぶい褐色粘土で構築され、焚口付近では焼土量の多少によって飯糰状を呈す。また、建物奥壁面に貼壁を施し、次段階で貼床を形成している。カマドの規模は、焚口から奥壁までの長さ130 cm、障壁から煙道を経て末端まで外寸390 cm、幅外寸100 cm。末端には長径52 cm短径40 cm深さ10 cmの楕円ピットが取り付け。

〔**覆土堆積と覆土内土坑**〕 壁際で壁前土層の軟質土層を確認でき、その上層にほぼ同一層に捉えられる層で2分可能な単一土層が堆積する。自然堆積層とは言えないものであり、一括埋め戻されたかと考えている。SI36の覆土内で上層土坑SK53検出されているが、詳細については第2節で述べる。

〔**遺物出土**〕 出土遺物は総数で、須恵器食器具134点、須恵器貯蔵具105点、土師器食器具84点、土師器煮炊具1,596点である。この他、土製支脚や土師カマド底部が出土する。カマド内外に煮炊具の一括廃棄が見られる他、意識的な廃棄遺物は基本として少なく、覆土からの出土が多い。時期は床に張り付いて検出されている土器やカマド内外の一括廃棄煮炊具から、Ⅱ1期を主体にⅡ2～Ⅱ2期の時期になるものと思われる。

〔**床の状況と掘り方**〕 床は、壁際のカマド左ソデ横間と右側間が地山床であるもの、殆どが貼床される。カマドから4本主柱間がよく硬直し、中央部分に窪みをもつ。床は黒色土に黄褐色粘土ブロックを多量に混ぜた土を貼っている。床面はフラットではなく、右側が10 cm高くなっており、寝間であった可能性があらうか。また、カマドに相対する壁側で床が次第に高くなっており、ここが出入口であった可能性がある。床下には、カマド周囲を除く全面に近い状態で幾つもの土坑が掘り込まれている。浅いものが多く、床と連結しているものもある。床下及びカマド床下の土層から、この建物は、最初の掘削後に貼床形成し、後にカマドを掘り込み奥壁を整えてからソデを取り付け、そしてカマド床を貼っている。

3. SI37

〔**立地・規模・形態**〕 B地区の南西側にあたる、せ・そ37・38Gr、旧地形で鞍部に位置し、上層が削平を受けている建物である。規模は推定で564×560 cm、正確な規模とは言えない。北・西側の削平が著しいため壁立ち上がりを確認できず、貼床の認められるラインまでの長さを計測したものであるが、本来の規模とおおよそ合っているように思われる。面積は31.6 m²、中型クラスになる。カマドは建物主軸からやや左寄りに取り付けられ、左側に曲がるL字型カマドを付設するものであるが、カマドソデ下からこのカマドとは別の被熱焼結層が検出されており、何らかの遺構が存在しその上に造り付けられた可能性をもつ。これについては後に述べることとする。また、建物中央の床と同レベルで鍛冶炉跡が検出されている。この鍛冶炉跡については第3節で述べる。掘り方からも被熱層を検出しており、鍛冶炉跡の存在を含め工房として機能していた可能性が高い。主軸はN47°-E。

〔**柱穴**〕 中央4本主柱穴である。主柱は均等配置されておらず、どれか2本の軸を通すと他2本が軸の外側や内側に1本分ずれる配置をとり、計画的でないものとなっている。柱間寸法は280～320 cmを測る。柱は抜かれて埋め戻されている。柱径は不明である。掘り方は40 cm、深さは検出床レベルから34～42 cmを測る。

(カマド) 建物の北側で、ソデ幅20cm、高さ最大8cmの屈曲するソデ土を検出した。更に北側にも幅35cmの厚いソデと考えられる粘土を検出、この粘土が貼床や堀り方のプランに沿うため、壁側のソデとした。よって、主軸中央から左寄りに位置し、壁に沿って煙道が左へ屈曲するL字型カマドと判断したものである。ただ、煙道幅が他に比べ狭すぎること、建物時期がⅢ期であることからL字型カマドがこの時期に付設するの疑問が残るもの。しかし、検出された事実があるわけで、ありのままを報告することとする。焚口付近では一段下がって浅い窪みとなっており、奥へ130cm地点で段状に立ち上がり、その奥はテラス状を形成、平坦となっている。段立ち上がりの側壁部分は被熱している。ソデ土は黒褐色土に焼粘土・大ブロックを極多量に含有し、焼けた粘土を混ぜ込んだものである。また調査時、ソデ土を除去した段階で左ソデ側に広がる被熱焼結層を検出。長径60cm、短径50cm範囲で認められ、ブロック状粘土を貼り付けて、床としている。検出時のソデ下層から被熱層が検出されたことで、L字型カマドが造り付けられた以前に何らかの施設があったものと考えられる。支脚や支脚抜き取りピットは検出されていない。また、壁側煙道ソデに正位で出土した坏Aは、カマドに伴うとは言えないものである。カマド規模は、壁までの縦長推定100cm、屈曲点から煙道長が推定185cm、幅外寸76cm、残存ソデ末端での焚口幅は内寸70cmを測る。

(礎土堆積と遺物出土、覆土内土坑) 壁高が2～8cmと浅いことから、埋土は非常に浅く単層のみである。本遺跡の竪穴建物覆土として典型的な覆土層と言えるものである。出土遺物は総数で、須恵器食器具58点、須恵器貯蔵具29点、土師器食器具21点、土師器煮炊具663点である。時期は、カマド床に張り付いて検出されている土器がⅢ期、他の遺物でもⅡ3～Ⅲ期とまとまっており、建物時期も同様になるだろう。覆土内で上層土坑が2基検出されている。1つは主柱穴P1・4の間に位置するもので、長径約200cm短径約160cmで白色粘土が混入するもの。もう1つはP3から壁までの間でP4側に寄る位置にあり、長軸約240cm、焼土混在土が覆土となるもの。これらの土坑は番号がついておらず、建物廃絶後の埋土層が利用された可能性がある。

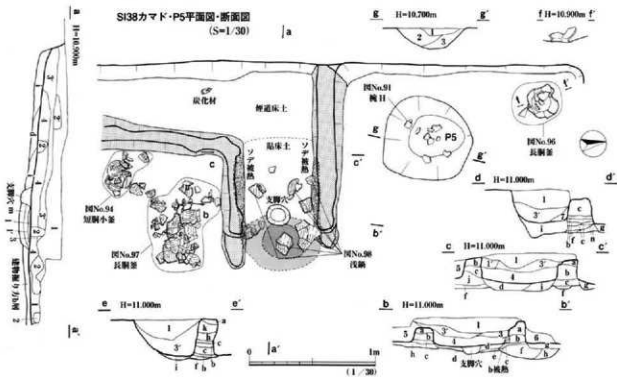
(床の状況と堀り方、堀り内被熱) ほほ全面で貼床を検出している。貼床は黒褐色土ブロックを3割から0.5割混ぜたものを貼っている。床の厚さは、3cmと薄い部分もあるのだが平均して10cm、厚い部分では14cmに至り、がっしりと床を作り上げている印象である。特に柱に囲まれる中央部分では黄褐色土ブロックの割合は多く、硬化も著しい。建物中央が硬化する例は通常であり、これが連続している場合が多いのだが、この建物では硬化面が飛び地的に2箇所認められる。出入口に繋がる可能性もあろうが、それにしても西側の硬化面は何を意味するのだろうか。削平のため、床が削られてしまっている部分があるが、残存する床は凸凹状を呈している。建物中央から右寄り箇所に、鍛冶炉が検出されているが、これについては後の生産遺跡において述べる。床下からは、やや大型の掘り方土坑1基と小型が3基検出されている。いずれもしっかりと掘り込まれているものであり、黒褐色土をベースとした軟質土が入る。その他、北側位置で被熱層を検出している。

4. SI38

(立地・規模・形態) B地区し・す37、す38Grに位置する。L字型カマドが西側に付設する4本主柱の建物である。竪穴主軸はN-62°-Eで、SI35とはほぼ同軸。竪穴規模は、540～580×520～580cm、建物面積は30.8㎡、中型規模である。基本的な方形プランであるのだが、東壁隅が張っており重みをもつ。カマド煙道先端がSK47に切られてしまっており不明だが、これ以外、残存状態は比較的良好である。壁高は30cmである。

(柱穴・他のピット) 中央4本主柱穴である。柱間寸法はP1～P4とP3～P4間が210cm、P1～P2間は215cm、P2～P3間は220cmを測り、きっちりした統一性はないが、ほぼ揃うと言えよう。柱穴の規模は、径が26.7cm、深さが46～80cmでP4が最も浅いものとなっている。すべての柱に柱痕が残っており軟質の黒褐色土、掘り方埋土の最上層で黒褐色土に混じるにふい黄粘土は硬くなっている。廃絶時には柱は切り取られている。P5がカマド右手に見られる。このピット覆土は、カマド崩壊に伴って埋まったモノと考えられるものであり、貼床も見られないため、カマド使用時には伴っていたピットと思われる。

(カマド) カマドは北西壁中央に焚口が位置して煙道が左側に曲がるL字型カマドである。規模は外寸で、横幅94cm、焚口から奥壁までの縦長164cm、L字屈曲点から煙道末端まで218cmを測る。焚口幅は内寸56cm、ソデ幅18～28cm。焚口被熱は中央が焼結、火皿状を呈す。ソデはL字屈曲点まで両ソデとも焼けて赤化している。また、床も転換地点まで被熱により硬質となっており、さらに焼土や炭化物が床に食い込む状態となっている。焚口より35cm奥の両ソデ中央には、支脚抜き取りピットが認められる。ソデの遺存は極めて良好と言え土層断面から版

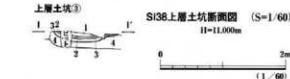
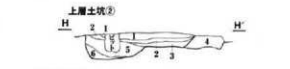
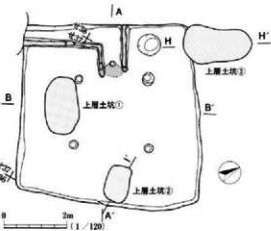


- SI38 カマド 断面土層図**
- 1層 黒褐色土 (30YR2/2) 可燃性中塊・小塊・中塊多量混合。建物土層と同質。
 - 2層 1層中に、可燃性中塊多量含有。炭化土層も混入。
 - 3層 黒褐色土層 (7.5YR2/2) のブロック状・塊状土層 (30YR2/2) の埋積土層 (黒土) 層と3層との間、カマドノリ土層のブロック層。
 - 4層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土カマドブロック層。2層カマド粘土の塊状土。
 - 5層 黒褐色土 (30YR2/2) 可燃性中塊・小塊・中塊多量含有。カマドノリ土層。2層ブロック層に比べ、黒土の混入が多い。粘土小塊・中塊多量混合。黒土の塊多量混入。ゆき、まじりこぼれる。カマドノリ土層下層。
 - 6層 黒褐色土 (30YR2/2) 可燃性中塊・小塊・中塊多量含有。黒土の塊多量混入。ゆき、まじりこぼれる。カマドノリ土層との混入層。
 - 7層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒土の塊多量含有。炭化土層。黒褐色土の塊・粘土多量含有。カマドノリ土層との混入層。

- SI38 カマド掘り方土層図**
- a層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の埋積層 (30YR2/2) の中塊多量混入 (黒土) 層と4層との混入層。
 - b層 黒褐色土 (30YR2/2) の埋積土層 (30YR2/2) の中塊多量混入 (黒土) 層と5層との混入層。ソラ土。
 - c層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。
 - d層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の埋積層 (30YR2/2) の中塊多量含有。まじりあり。カマドノリ土層。黒褐色土の中塊多量含有。炭化土層も混入。
 - e層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - f層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - g層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - h層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - i層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - j層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - k層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - l層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - m層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - n層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - o層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - p層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - q層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - r層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - s層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - t層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - u層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - v層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - w層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - x層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - y層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。
 - z層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の中塊・小塊多量含有。炭化土層も混入。

- SI38 P5土層図**
- 1層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒土の塊多量。黒褐色土の埋積土層の中塊多量含有。
 - 2層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒土の塊多量含有。黒褐色土の埋積土層の中塊多量含有。
 - 3層 黒褐色土 (30YR2/2) 黒褐色土の埋積層 (30YR2/2) の中塊多量含有。黒褐色土の埋積層 (30YR2/2) の中塊多量含有。カマドノリ土層との混入層。

SI38内 上層土坑位置 (S=1/120)



- SI38 上層土坑土層図**
- 上層土坑① 土層図
- 1層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 2層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 3層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 4層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 5層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 6層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
- 上層土坑② 土層図
- 1層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 2層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 3層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 4層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 5層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 6層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
- 上層土坑③ 土層図
- 1層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 2層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 3層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 4層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 5層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。
 - 6層 黒褐色土 (30YR2/2) 炭化土の中塊多量含有。黒土の中塊多量。炭化土の中塊多量含有。

第15図 竪穴建物遺構図6 (SI38)

築状に構築したことがわかる。その後、貼床を形成している。カマド焚口の内外、特に左側を中心に土器廃棄が一括して行われている。また、カマドから離れているが右壁隅にて土器器臺が逆位で検出されている。掘削時にカマド焚口手前からし字屈曲点付近のソデを含む手前一体に、カマド粘土塊大を多量に含む土が密集する状態でまとまって検出されており、カマドを手前に倒して壊したものと考えられる。

〈覆土堆積、覆土内遺構、遺物出土〉覆土は分層されているものの、ほぼ一層に属するものであり、一気に埋め戻しが行われたと考える。覆土内で3基の上層土坑を検出、上層土坑②は被熱層を有し焼土坑として位置づけられる。出土遺物はカマド周辺でまとまった出土があるが、その他は散乱する程度である。その総数は、須恵器食膳具81点、須恵器貯蔵具40点、土師器食膳具67点、土師器煮炊具892点である。遺物の時期は、床に張り付いて出土する短脚小釜（図番号94）や長胴釜（図番号95）、カマド付近一括廃棄の煮炊具類、これらの時期がⅠ期にまとまっており、他の遺物でも同時期主体である。建物時期はⅠ期でよいだろう。

〈床の状況と掘り方〉床は比較的一定レベルを保つようなフラットな状態である。貼床は4本主柱を中心に施されるが、壁際は地山床としている。主柱に囲まれた中央部分が最も硬化し、この周囲にも硬化がみられるが窪状となっている。カマド焚口の両サイドも地山床が硬化する。貼床は、厚み4cmを主体に、厚いところでは10cmもあるが部分的に僅かである。掘り方で検出された掘り方土坑の内、掘り方土坑①の覆土にはカマド土や焼土が混在するカマド廃棄に伴う埋土であるため、床下でなく建物床レベルで機能していた可能性が高い。これ以外の3基の土坑については、黒褐色土がベースとなつてふい黄褐色土ブロックが混在する本遺跡で典型的な掘り方土坑埋土と言えるものである。

5. SI39

〈立地・規模・形態〉B地区せ36・37そ36Grに位置する、堅穴規模が400～470×470cm、面積20.4㎡で、北側壁中央に通常小型カマドを伴う小型建物である。プランは南側壁が張り、垂みを伴う。主軸はN-11°-W。壁高が4cm最大10cmであり、北西側にかけて削平を受けている。

〈柱穴とその他のピット〉中央4本主柱穴である。柱間規模は、P1・2間が185cm、P2・3間が186cm、P3・4間が184cm、P4・1間が192cmを測り、P4が若干壁側へずれるが、ほぼ揃っている。柱穴規模は、径38～44cm、深さP2のみ40cmとやや浅めで、P2以外は46cmである。建物廃絶時に柱は抜かれ人為的埋土で埋め戻されており、P2ではカマドソデブロックも混在する。この他のピットでは、P2東側にはP5が位置する。床の硬化がP5際までしっかり及んでおり、同時に機能したと思われる。P5は、長軸160cm、短軸130cmの土坑状で、深さは床レベルを基準にして、34cmから40cm掘り込まれ、深いものである。壺破片やカマドソデ石が検出されていることから、廃絶時にはカマド関連が廃棄されたようだ。

〈カマド〉北壁中央に付設される通常タイプ、逆U字状を呈す無煙道型カマドである。形態類型ではc1類と位置づけられるもの（2006望月）。焚口の被熱焼結層奥に、小型釜を伏せた転用支脚をもち、この支脚の焚口側がよく被熱して黄白色を呈している。焚口のソデ構築石には白色砂岩を使用、右側が赤砂岩となって酸化している。左側は白色のままであった。カマド床は焚口から奥へ67cmの範囲のみ床を貼床されている。また床傾斜は7度と緩やかなものとなっている。堅穴建物廃絶時のカマド破壊行為として掘り付けられた釜類の破壊が認められる。カマドの規模は、横幅外寸115cm、縦長外寸110cm、焚口幅内寸65cm、ソデ幅20～25cmを測る。

〈覆土堆積、床の状況と掘り方、遺物出土〉覆土は削平を受けていることもあり、黒褐色土に黄土や焼土が多目に混入する1層のみ確認できるだけである。建物床は、ほぼ全面貼床され、中央が僅かに窪むがほぼフラットで、カマドと主柱を繋ぐ範囲に硬化が認められる。床下には小型の掘り方土坑が2基掘り込まれ黄褐色土ブロック等含有物の少ない黒色土であることが特徴となっている。確認可能な建物の構築順は、掘削後d層土を10cm入れて形成した後、中央に掘り方土坑を掘り込み、さらにこの部分の床を形成して叩き締めている。出土遺物は総数で、須恵器食膳具22点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具23点、土師器煮炊具331点。時期はⅠⅠ～ⅠⅡ期に及ぶが、主体はⅠⅠ期と言え、堅穴建物の時期も同様の時期になると考えられる。

6. SI40

〈立地・規模・形態〉B地区内の北西側寄りの削平区域に丁度かかる、つ40・41Grに位置する。主柱と考えられる片脚3本ずつ計6本と、掘り方土坑と考えられる土坑3基が内部空間内に収まる状態で検出。著しく削平を受けた側壁柱穴タイプの堅穴建物と位置づけている。規模は400～450×350cmと推定可能で、推定面積17㎡の小

型建物と考えられる。建物主軸は不明なのだが、北向きと設定するならば建物主軸はN-12°-Eとなる。

〈柱穴、掘り方土坑、遺物出土〉柱穴は径24～30cm四隅の深さ20cm、中間柱の深さ10cmを測り、柱穴の下底部のみ検出されている。柱筋の通りは比較的良いのだが、柱間寸法は揃わず、最短寸法でP3・4間の170cm、最長寸法でP5・6間の220cm、相対する位置に柱がそれぞれ位置しない規則性のないものである。また、全体を通してみると、P1やP5は飛び出さず、全体的に台形状を呈す竪穴建物となる。掘り方土坑は、長径160～170cm、短径120cm深さ25～35cmの楕円形状のものが2基、長短径とも95cmの隅丸形状のものが1基検出されている。覆土には、締まりがあり硬い覆土も確認できており、このような削平状態で検出されたために掘り方土坑としたが、掘り方そのものであった可能性もあるだろう。出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具7点、土師器煮炊具41点と極少、時期を特定することは難しい。

7. SI41

〈立地・規模・形態〉B地区内の、ち・つ39・40Gr北西側削平区域に位置、主柱と考えられる片側4本ずつ計8本の柱穴のみ検出された建物である。掘立柱建物というなら梁行にあたる部分には柱はなく、4間×1間となってしまうことと、掘立柱建物にしては柱が揃うこと、前回報告のA地区で検出されるような片側4本の壁側柱タイプ竪穴建物が出ていること(SI22)から、削平された竪穴建物として位置づけた。規模は推定で、500×350～380cm、推定面積19㎡程の小型建物になるだろうと考えている。建物主軸は不明だが、北向きと設定するならばN-17°-Eとなる。

〈柱穴、遺物出土〉柱穴規模は、径24～44cm、深さ10～24cmであり、深さにばらつきが見られるが、しいて言えば四隅は比較的しっかりとしている。柱筋の通りに関しては、左側は通っている。建物全体が長方形と推定すれば右側はP2やP5が外側に1本分ずれてしまう。左右の柱はほぼ相対して位置するが、柱間寸法は各々北から180cm、120cm、150cmとなっていて柱間に対する統一性はない。出土遺物は総数で、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具9点のみと非常に少なく時期不詳である。

8. SI42

〈立地・規模・形態〉SI41の北側に位置する。左側3本、右側4本、南側も合わせれば7本の側柱と考えられる柱穴を検出、掘立柱建物としては北側梁の本数が不足であり、また、同様に検出された掘り方土坑1基が柱内空間に収まる状態で位置することで、著しく削平を受けた壁側柱穴タイプの竪穴建物と位置づけている。規模は推定で、550×350～430cm、柱の並びだけで考えればプランは台形状を呈し、推定面積21.8㎡の小型建物となるだろう。建物主軸はSI41と同様に北向き主軸と設定すれば、N-16°-Eとなる。

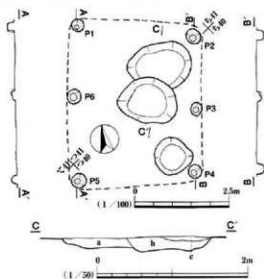
〈柱穴、掘り方土坑、遺物出土〉柱穴は径16～38cm、深さ10～20cmを測り、四隅がしっかりしているとも言えず、ばらけた状態の印象である。また、P3は他に比べ異質で柱でないのかもしれない。ただ、元來他の柱より浅めであったとすれば、最下底部のみ検出したためによるものかもしれない。柱間寸法は、左側は280cm、右側はP2・3とP4・5間が190cm、P3・4間が150cm。建物南側に位置するP6もこの建物に伴うものか若干疑問が残るものの、他の柱穴に非常によく似ていて捨てがたく、P5・6間、P6・7間の柱間寸法は両者とも190cmであった。掘り方土坑は長径265cm、短径195cmを測る。南側が有段状で、上面でしまりのある貼床下層部と考えられる覆土が検出されている。出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具25点と、極めて少ない出土である。掘り方土坑から出土する遺物がⅡ期に相当することや、本遺跡の建物規模と時間軸の変遷に照らし合わせてみても、Ⅱ期から下ってもⅢ期までのものと位置づけられよう。

9. SI43

〈立地・規模・形態〉SI42とほぼ同じ位置、削平を受けた竪穴建物である。掘り方土坑を取るようにして壁推定線を引くと、規模は530×500cmと推定可能で、これが最低ラインとなろう。よって、面積は推定265㎡だが、これ以上あった可能性はある。いずれにせよ中型建物になるだろう。建物主軸はN-37°-E。

〈柱穴、カマド被熱、掘り方土坑、遺物出土〉柱穴は4本検出されている。いずれもしっかりした掘り込みをもつものである。径は60～70cm、深さ70～90cmでP3が最も深く、他はほぼ同様の深さを呈す。柱は抜き取られて埋め戻しされており、P2にはカマドソア石が捨てられている。またP3だけに掘り方土坑が残存する。抜き取り方向は不明であるが、柱の設置に関しては、掘り方でP1・2では南側、P3・4では北側に各々スロープが認められるため、内側から柱を立てた可能性がある。主柱穴4本中P2のみ外側へずれて飛び出している。柱間は縦

(SI40) 平面図・断面図 H=10.700m



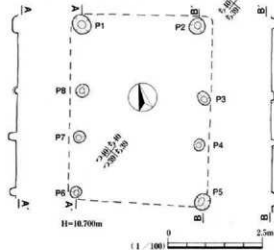
SI40 掘り方土坑土層図

a層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土大・小塊が(黄土:7・黄土:3)で混在。黒褐色土の小塊少量。黄土小塊少量含む。しまりあり。

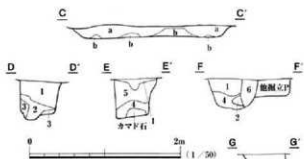
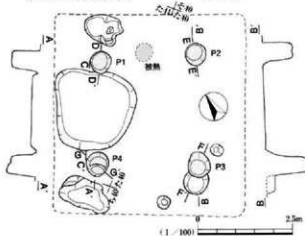
b層 黒褐色土 (0YR3/2)・黒色土中塊多量。黄土小塊・炭化小塊少量。明褐色土小塊少量含む。(黄土:8.5・黄土:0.5)しまりあり弱。

c層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土中塊が少量で混在。黄土小塊・炭化小塊少量含む。しまりあり。

(SI41) 平面図・断面図



(SI43) 平面図・断面図 H=10.700m

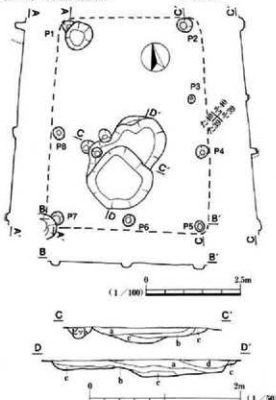


SI43 掘り方土坑土層図

a層 黒褐色土 (0YR3/2)に黄褐色土(0YR6/4)中塊が少量混在。黒褐色土小塊少量。砂質黄褐色土(0YR7/6)少量含む。しまりあり弱。

b層 黒褐色土 (0YR3/2)と黄褐色土(0YR6/4)の割合で混在。黒褐色土小塊少量含む。しまりあり。弱。

(SI42) 平面図・断面図 H=10.700m



SI42 掘り方土坑土層図

a層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土(10YR6/4)中塊が少量混在。黄土小塊・炭化小塊少量含む。しまりあり。弱。

b層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土中塊多量。黄土小塊多量混在。

c層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土・中塊(黄土:3・黄土:7)で混在。

d層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土・小塊(黄土:7・黄土:3)で混在。弱。

SI43 土坑穴土層図

1層 黒褐色土 (0YR3/2)と黄褐色土(0YR6/4)(黄土:9)で混在。黄褐色土は塊状で大量少量。小塊多量。黒色土塊。黄土少量含む。しまりあり。

2層 黒褐色土 (0YR3/2)・黄土中塊・黄土塊少量含む。しまりなし。水分多く硬状。

3層 黒褐色土 (0YR3/2)に黄褐色土(0YR6/4)が少量混在。黄土小塊少量含む。砂質。

4層 黒褐色土 (0YR3/2)と黄褐色土(0YR6/4)が(黄土:4・黄土:6)の割合で混在。ややしまり。

5層 黒褐色土 (0YR3/2)と黄褐色土(黄土:4・黄土:6)の割合で混在。黒褐色土小塊少量含む。しまりあり。黄褐色土は塊状。

6層 黒褐色土 (0YR3/2)に明褐色土(0YR6/4)少量混在。黄褐色土は塊状。黄土・黒褐色土塊少量含む。しまりあり弱。

第17図 竪穴建物遺構図B (SI40・SI41・SI42・SI43)

輪 280 cm 横輪 260 cm で、P2・3 間のみ 310 cm であった。P1・2 間の被熱は、削平により地山酸化部分だけがかるうじて検出されたカマド被熱である。カマド位置は左寄りの中央カマドとなろう。掘り方土坑は全部で3基。P1・4 間に長短径 210 cm を測る隅丸方形形状ともいえる大型のものが位置、また、P1 北側、P4 東側にもそれぞれ不定形で、北側のものは大型のものより 10 cm 程浅く、南側のものは大型のものと同じ深さをもつものが検出されている。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器煮炊具 12 点のみである。時期判断は、掘り方土坑から出土する I 2～II 1 期にあたる長胴釜に限られ、4 本主柱という建物形態からみても、建物の時期はこれ相当になるものと思われる。

10. SI44

〈立地・規模・形態〉B 地区内の北西側削平区域にやはり丁度かかる位置、そ 39・40 せ 39Gr に位置する。左側 4 本、右側 3 本、北・南側は 3 本ずつの柱で構成されるもので、一見掘立柱建物と似ているのだが、掘立柱建物にしては柱跡として貧弱すぎること、SI40 や SI42 の検出例のように柱で囲った範囲内に掘り方土坑が検出されたことから、削平を著しく受けた壁柱穴タイプの竪穴建物として位置づけられているものである。建物規模は、推定縦長 460～480 cm、推定幅 330 cm、推定面積は最低で 155 m²、小型の建物になろう。主軸は、北向きとして仮定すれば N-17°-E となる。勿論主軸が逆の場合もあるだろう。SI41 や SI42 とほぼ同じ主軸をもつ。

〈柱穴、掘り方土坑、遺物出土〉柱穴は、径 22～32 cm、深さ 10～24 cm を測る。P4 が深さ 24 cm 最も深く、14～16 cm が中心である。柱筋の通りは良い方だが、南側の柱筋を通すと建物全体の形はやや台形状となってしまう。長方形として収めようとすれば、南側の柱筋は通らないばかりか P7 が 1 本分外側へずれることとなる。掘り方土坑は、長軸 256 cm 短軸 248 cm で、有段で南側が最も深く 14 cm 程、この他は 2～6 cm 程度の、非常に浅いものである。覆土には、黒褐色土をベースに黄褐色土が 3 割混在し、所々ブロック状を呈して黒色土ブロックや焼土が少量混ざる、やや締まりのあるものである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器食膳具 4 点、土師器煮炊具 17 点と極めて少ない。掘り方土坑から出土する遺物で II 1～II 2 期のものがある。

11. SI45

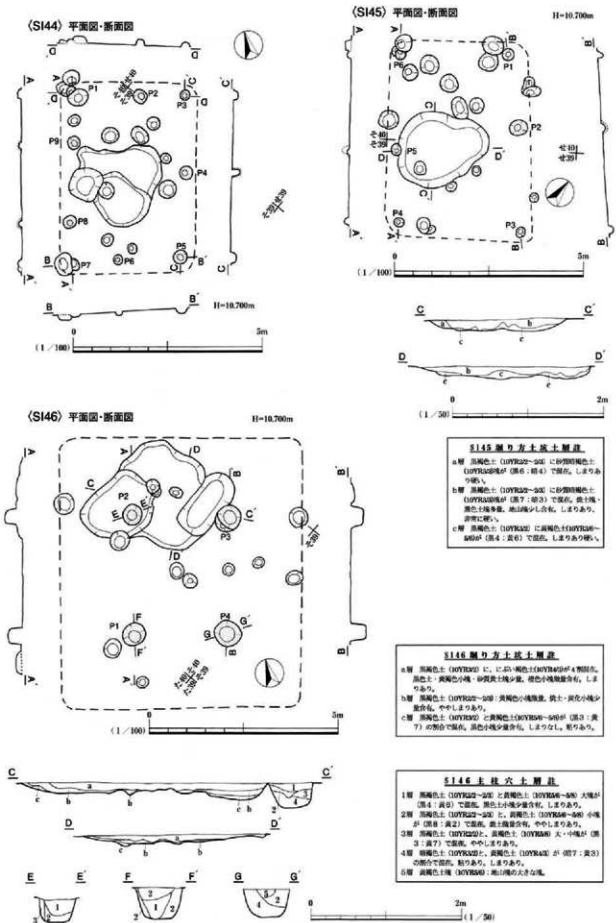
〈立地・規模・形態〉SI44 の北側に位置するもので、各々 3 本ずつの計 6 本の柱跡と、掘り方土坑 1 基を検出、削平を受け床や壁がとんでしまった壁柱穴タイプの竪穴建物としている。規模は、推定で縦 480～500 cm、横 320～350 cm、推定面積 16.4 m²。小型建物になろう。主軸は、北向きと仮定した場合 N-35°-W。

〈柱穴、掘り方土坑、遺物出土〉柱穴は、径 26～40 cm、深さは 10～18 cm を測り、底面のみが残存して検出されたもの。柱筋の通りは悪く、計画的に柱は立てられなかったようだ。掘り方土坑は、長径 250 cm、短径 200 cm の不整形円形で、中央左側に位置する。覆土の主体層は非常に硬く、床として機能していた可能性がある。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 4 点、須恵器貯蔵具 2 点、土師器食膳具 1 点、土師器煮炊具 29 点と極めて少ない出土である。掘り方土坑から I 2～II 1 期の遺物が出土しており、この時期あたりに建物は構築されたと思われる。この他土師土製品である土鍾やカマド台石が出土している。

12. SI46

〈立地・規模・形態〉北西側削平区域にかかる前述と同様の位置、4 本主柱穴と掘り方土坑のみ検出された建物である。掘り方土坑を含め 4 本主柱から壁までの長さも均等なるように復元壁ラインを想定すると、建物規模は、推定で縦 710 cm、横 640 cm となる。また、今回カマド位置が不明であるために北壁ラインを北向き軸として図版に示したが、大型掘り方土坑は主軸に対し左右に配置されることが本遺跡の検出例として多いので、縦・横推定長が逆となる可能性は高い。推定面積は最低でも 45.4 m²。大型建物であったことは間違いないであろう。北向き設定した場合の竪穴主軸は N-16°-E、但しこうなるとカマド位置の掘り方に大型掘り方土坑が配置されることになり、本来の主軸は N-106°-E もしくは N-74°-W であった可能性が高い。

〈柱穴、掘り方土坑、遺物出土〉柱穴は、径 56～74 cm、深さは 34～46 cm を測り、削平のため上面がとばされているとはいえ、円形にしっかりと掘り込まれたものである。柱間寸法は、縦軸 320 cm 横軸 250 cm とずれもなく規則正しく配置されている。建物廃絶時に柱は抜かれて埋め戻されている。掘り方土坑は北位置に大型のものが 1 基検出されている。長径 415 cm 短径 300 cm、底面に 2 か所の段を有し、段筋所底面は平坦に形成、中央底面は凸凹を呈すもの。出土遺物は総数で、須恵器食膳具 5 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器食膳具 8 点、土師器煮炊具 87 点と少なく、II 3～III 期の時期と判断される。この他土師土製品であるカマド底部 1 点が出土する。



第18図 竪穴建物遺構図9 (SI44・SI45・SI46)

13. SI47

〈立地・規模・形態〉B地区内ほぼ中央にあたる、さ・し39・40Gr内に位置する建物である。南側をSK64に切られて消失、また、立地位置が近代削平を大きく受ける区域にかかることもあり建物上面にもその影響が見られ残存状態は良好とは言えない状況であって、壁高は最大5cmである。建物東側の壁を明確に検出できないう状態であったが、左壁からSK64にかかる壁の周り込みと貼床確認範囲を検出、これにより建物の規模を測定している。建物規模は、確認できた範囲で660×600cm、面積39.5㎡の大型建物となろう。建物プランは殆ど歪みのないしっかりした直線的のやや長方形を呈す。建物西側壁中央にL字型カマドが付設される。建物主軸は、N-75°-Wで、西側に振る方位をとっている。

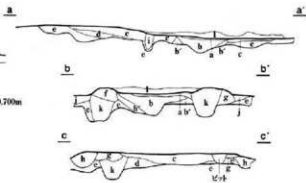
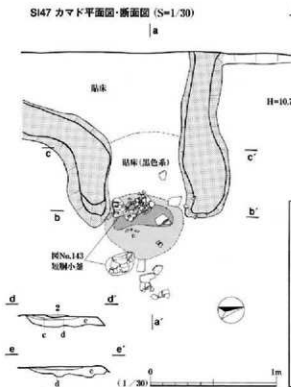
〈柱穴〉中央4本柱穴である。柱間寸法は、P1・2間とP3・4間の横軸柱間が320cm、P2・3間とP4・1間の縦軸柱間が380cmであり、柱はきっちり並列配置されている。柱で囲まれる内部空間は非常に広く122㎡を測る。廃絶時に柱は抜き取られており、抜き取り痕の周囲には、掘り方土が残存する。柱は抜き取られているものの「柱のあたり」がみられ、柱径は28～32cmであったものと思われる。また、全ての柱が右方向の東壁に向かって抜かれている。柱穴規模は、径がP1のみ65cm他は70cm程、深さはP1が60cm、P2が58cm、P3が56cm、P4が50cmと若干の差違があるが、柱間寸法・抜き取りからみても柱の規模に対する統一性やこの建物に対する管理性を思わせるものとなっている。

〈カマド〉西側壁に付設されるL字型カマドである。削平の影響が色濃く、ソデ高最大10cm程度、煙道ソデに至っては基底部分が検出されただけである。壁中央よりやや右寄りに焚口をもち、左ソデが150cm地点で左側に緩やかに曲がり、壁に近づくように煙道を狭める造りとなっている。煙道の先端部は削平により検出されていない。カマド内覆土もかろうじて2層のみ確認されている。床は貼床され、焚口より150cm地点までこの地点より奥の煙道に至るまで貼床の質は違う。また、床傾斜は焚口より85～95cm地点まで傾斜角3度とほぼフラットな状態、この地点より後では若干の段を持って傾斜角7度となってゆく。ただし、傾斜をもつ地点以後は床が剥き出しの状況であり、床まで既に削平されてしまっている可能性をもつので、この傾斜角は本来の角度でないかもしれない。また、焚口より85～95cm地点でピット形状の1層を断面で確認していて、焚口被熱の奥壁側先端に位置することや、カマド土崩壊土が覆土になっていることから、支脚抜き取りピットである可能性が高い。カマドの規模は、外寸幅130cm、奥壁から焚口カマドソデ端までの長さ130cm、カマド外側L字屈曲点から末端までの長さが残存長186cm推定長262cm、焚口内寸幅52cm、ソデ幅は25～40cmを測る。

〈床の状況、被熱炉床面〉床は、東隅以外の全面で貼床され、厚みは0.8～2cmである。特に4本柱内部空間は著しく硬化している。床面状態は凸凹となっていて中央部分が窪む。P2・3ラインより右側より3cm程度だが若干高くなっている。また、P3・4間の西壁付近では削平による影響のある区域でもあり、上面が削られてしまったために床は低くなっている。東隅の地山部分は、思いがけずまとまった面積を占めていて、他の床が全て貼床であるのに対し、この部分だけ台形に近い形状で地山であるのは妙な印象である。このような状況で地山が検出される場合、この箇所がステップであった可能性を持つようである。しかし、このステップ部分まで床硬化が続かないので、この箇所が階段状の出入口であったか否か判断し辛いところである。上面がかなり削平されているにもかかわらず、床面中央の著しい硬化や凸凹がしっかりと残ることは、この堅穴建物が廃絶後すぐさま埋没して床面がバツクされたことを示している。また、中央3カ所にて貼床被熱炉が検出され、いずれも上部より焼結している。床の構築順番は、掘り方として掘削後、土を投入して第1回目の調整をし、その後掘り方土坑を掘削、次に柱を立て、最後に貼床を施して床面を調整し構築したものと思われる。

〈覆土堆積、掘り方、遺物出土〉削平により覆土は1層のみ、出土遺物も極めて少ない。掘り方からは、P2・3間に大型の掘り方土坑を含む計4基が検出されている。掘り方土坑1は、黒褐色土に黄褐色土・にぶい黄褐色土が半分ほど混在するという、典型的な掘り方土坑の覆土を呈す。掘り方土坑2・3は深さ6～10cmと浅いものである。黒褐色土ベースに黄褐色土が1割混在して黒色土ブロックや焼土を少量含有する上層と、暗褐色土と黄褐色土が5割率で混在する下層の、両者ともしりある覆土となっている。大型のものが1基と小型のものが数基の組み合わせは、本遺跡ではよくあるパターンと言える。出土遺物は総数で、須恵器食器具7点、須恵器貯蔵具5点、土師器食器具7点、土師器煮炊具187点。床面から11期の土器が出土していることや遺物の主体がこの時期となるため、堅穴の時期も同様になると判断できるだろう。

S147 カマド平面図・断面図 (S=1/30)



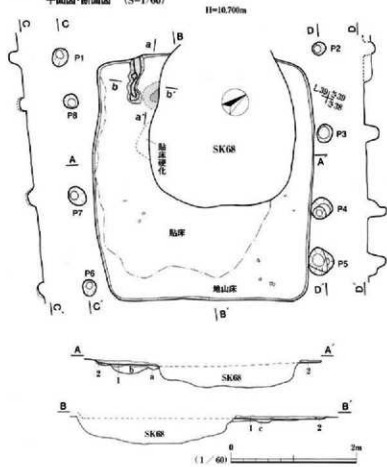
S147 カマド遺土・掘り方土層説

1層 暗褐色土 (3PYR340)：砂質黄褐色の土・黄土小・中塊多量。黄色土塊少量含有。
 2層 黄褐色土 (3PYR313)暗褐色土土層に属。砂質。ホマツツ層に属し、硬い。

a層 黄褐色土 (3PYR340)：地盤の硬層。
 b層 黄褐色土 (3PYR340)：土とろくろの黄土土少量含有。基本は地山土層。硬い。
 c層 黄土土 (3PYR340)：地山土層。土層よりなる。硬い。
 d層 暗褐色土 (3PYR340)：黄土土 (3PYR340)。黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層3) で掘出。黄土土・砂質黄褐色土含有。黄土塊少量含有。しまりあり。
 e層 暗褐色土 (3PYR340)：黄土土層の少量含有。しまりあり。
 f層 暗褐色土 (3PYR340)：黄褐色土層。黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層3) で掘出。しまりあり。
 g層 黄土土 (3PYR340)：黄褐色土 (3PYR340)含有。ホマツツ層に属し、硬くしまりあり。
 h層 暗褐色土 (3PYR340)：黄土土 (3PYR340)。黄褐色土 (3PYR340)が (掘り) (層4) (層4) の間に掘出する。ホマツツ層に属し、硬い。
 i層 暗褐色土 (3PYR340)と黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層3) で掘出。黄土小塊。黄褐色土塊少量。黄土土塊少量含有。しまりあり。
 j層 暗褐色土 (3PYR340)：黄土土 (3PYR340)。黄褐色土 (3PYR340)の間に掘出。ホマツツ層に属し、硬い。
 k層 暗褐色土 (3PYR340)と黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層4) で掘出。しまりあり。黄土土塊少量含有。

(S148)

平面図・断面図 (S=1/60)



S148掘り方 平面図 (S=1/120)

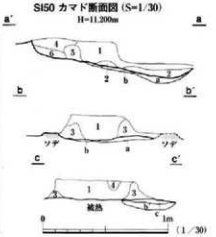
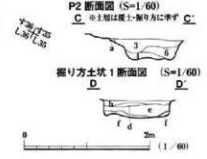
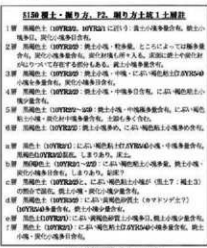
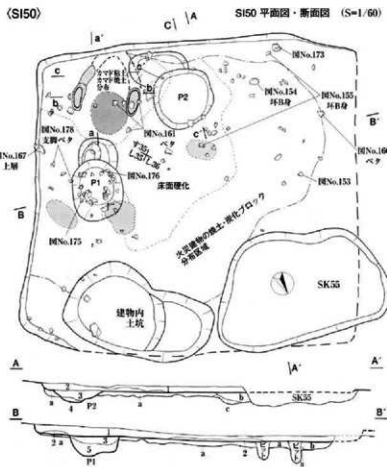
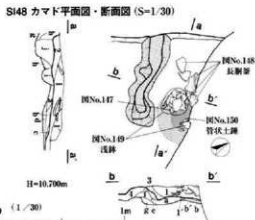


S148 遺土・掘り方土層説

1層 黄褐色土 (3PYR340)：黄土土 (3PYR340)。黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層4) (層4) で掘出。黄土小塊。黄土土塊少量含有。黄土土塊少量含有。しまりなし。
 2層 暗褐色土 (3PYR340)と黄褐色土 (3PYR340)が (掘り) (層3) で掘出。黄土土塊少量含有。しまりなし。

a層 黄褐色土 (3PYR340)：黄土土 (3PYR340)含有。黄褐色土 (3PYR340)小塊少量含有。
 b層 黄褐色土 (3PYR340)：黄土土 (3PYR340)と黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層3) で掘出。黄土土層。黄土土 (3PYR340)少量含有。黄土土 (3PYR340)少量含有。黄土土 (3PYR340)少量含有。黄土土 (3PYR340)少量含有。しまりあり。
 c層 暗褐色土 (3PYR340)と黄土土 (3PYR340)が (掘り) (層4) で掘出。

第20図 竪穴建物遺構図 11 (S147 - S148)



第21図 竪穴建物遺構図12 (S148・S150)

14. SI48

〈立地・規模・形態〉SI47の南側に位置、同じく削平区域にかかる関係で、遺存状態は悪く壁高は3cmしかない。また、SK68により北西側1/3以上を消失している。竈穴規模は、370～390×330～340cmのはほぼ方形プランで、主柱は壁外へ出るタイプのもの。竈穴だけの面積は127㎡。柱までを含めると405×400～450cmの台形状プランとなり面積は172㎡となる。竈穴外主柱穴タイプの小型建物、竈穴分類型でいうとIB類（望月2006）である。主柱はN57°-W、カマドは、北西壁に付設されるが半分を土坑で消失、建物規模からL字型カマドとなる可能性は薄いので、通常の小型カマドが付設すると思われる。

〈柱穴〉竈穴壁外に左右4本ずつの柱が並ぶ。柱穴規模は、径24～46cmでP5の径が最も大きい。深さは10～28cmで、四隅がしっかりしているということもなく、しいて言えば右側の列の方が良好な掘りこみをもつか。両者とも柱筋はきちんと通らぬ。左列ではP8がずれるし、右列ではP3がずれる。また、柱間寸法もP2・3間185cm、P3・4間が130cm、P4・5間が80cm、P1・8間が90cm、P8・7間とP7・6間が150cmである。いずれにせよ、何とか並んではいが、貧弱でランダムで簡易な印象の柱である。また、柱の掘立に関しては様々な方向から柱を立て、建物廃絶時には柱は抜かれて埋め戻されている。

〈カマド〉北西壁面に付設する半分破壊されている通常小型カマドである。竈口被熱の残存状況から、全体を予想することは十分可能である。北西壁面中央より竈口が左寄り、ソデがそのまま壁面に直行するタイプの、カマド分類で言えば無煙道型の「カマド構築粘土両側がまっすぐ竈穴奥壁へ取り付く」（a類）、カマド付設位置類型では2類（望月2006）と位置づけられる。ソデには黄褐色土粘土に砂と暗褐色地山土を混ぜた黄色ベースのもの、褐色土と黄褐色土が混在するe層のような土でもって構築されている。規模は、奥壁からソデ先端までの長さ73cm、幅外寸推定90cm、竈口幅内寸50cm、ソデ幅22cmである。また、奥壁より15cmから竈口に向け、床は貼られてしまっており、焼土や炭が多い。

〈覆土堆積、遺物出土、床の状況と掘り方〉覆土は1層のみ。床は、中央から南壁にかけて貼床されるが、これ以外の壁際にかけては地山床である。カマド手前では僅かながら硬化が認められ、床面はほぼフラットな状態で、カマド手前部分にかけて若干窪む。貼床は2～4cmと薄く、掘り方自体も非常に薄い印象を受ける。掘り方には、南壁際に掘り方土坑が1基検出されており、長径70cm短径50cmと小規模なものである。出土遺物は総数で、須恵器食膳具17点、須恵器貯蔵具11点、土師器食膳具7点、土師器煮炊具119点と、少ない出土である。カマドに張り付いて出土する煮炊具の時期がⅠ～Ⅱ1期に及ぶ。建物の廃絶時はⅡ1期回りとなろうが、建物の機能時の主体はⅡ2期と言えるだろう。覆土からはⅡ2期にあたる遺物が出土している。

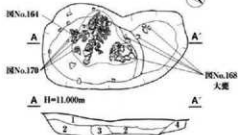
15. SI50

〈立地・規模・形態〉B地区内南側し・す35・36Gr、SE8南東に隣接して位置する。この建物は、北側区域でSK55と建物内土坑に切れ消失、また西・北側壁の立ち上がりか確認できなかったのであるが、南・西側壁からの掘り込みと貼床範囲から復元可能と言えよう。竈穴規模は縦450～500cm、横推定500～530cm、壁際に対し中央がやや膨らむ平面プランをもつ。推定面積298㎡の中型建物である。残存する南・東壁高は12cm。柱はなく、カマドは南側壁端に通常カマドが付設する。床面からは床被熱や炭化材が多く検出されているため、火災建物の可能性があり、詳細は後述する。建物主軸はN150°-W。

〈カマド〉南壁の東端から約1m地点に付設する。ソデは、竈口付近の基底部のみ残存、奥壁側は破壊されているが、屋外ピットも検出されていないため、壁に付設する無煙道型となるだろう。平面図には記載されていないが、床は、竈口被熱端から奥壁側へ45cm地点で若干段をもっており、この地点にかけて焼土・粘土の分布が顕著である。また竈口の被熱焼結部程ではないが床そのものが被熱を受けている。床はカマド竈口の被熱焼結部で窪み、奥壁まで10度の傾斜角を保っている。覆土断面の3層がソデの形をとっているように思われるが、竈口被熱焼結層の直上に位置しており、ソデ崩壊上にあたる。ソデは建物廃絶時に内側に倒れた可能性がある。カマド規模は、奥壁からソデ先端までの長さ106cm、幅外寸106cm、残存竈口幅内寸74cm、ソデ幅18cmである。

〈覆土堆積、竈穴内施設、覆土内遺構、遺物出土〉覆土は、黒褐色土をベースに、焼土や炭化物が多量に含まれ、下層を中心に焼土が極めて多量に含有する2層からなる。床直上部分では焼土や炭化物が張り付く状態で検出されている箇所もある。また、建物内では、カマドの右側に位置するP1とカマド竈口手前に位置するP2が検出されている。両者とも覆土上面で貼床を確認できないもので、建物使用時に併存して機能していたものと考えられ

SI50 建物内土坑 平面図・断面図 (S=1/60)

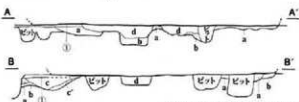
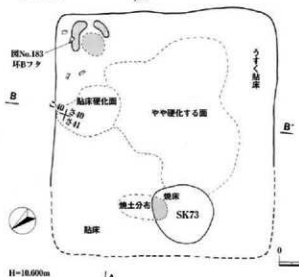


SI50 建物内土坑土層図

- 1層 黒褐色土 (SYR202) に少量のSYR204褐色土小塊多量含有。粘土塊多量。SK30埋れ方土層。
- 2層 黒褐色土 (SYR202) に少量の褐色土小・中塊多量含有。
- 3層 黒褐色土 (SYR202) 黒褐色土の中心部中塊多量。少量の褐色土小・中塊多量含有。(黒土・腐土)
- 4層 黒褐色土 (SYR202) と、少量の褐色土中・大塊 (黒土・腐土) の割合で混在する。褐色土のSYR202も混在。

(SI52)

平面図・断面図 (S=1/60)



第22図 竪穴建物遺構図13 (SI50・SI51・SI52)

る。カマド関連の付属施設と思われるが、P1がカマド焚口のすぐ手前に位置するため、カマド使用時に邪魔になっていたのではないかと疑問が残る。P1・2とも覆土にカマドソデ崩壊土と思われる含有物が多量に含まれており、廃絶時にこの小土坑に廃棄したものであろう。覆土内遺構では、北側壁の東側に土坑が1基確認されている。長径230cm短径112～135cmの括れをもつ不定楕円形のプランをもち、深さは建物検出時レベルから35cm、建物床レベルから10～15cmに及び、底面に段を有す。この建物内土坑から須恵器大罫(図番号168)が一括廃棄されておりⅡ3期にあたり、同じく出土した須恵器食膳具はⅢ古期にあたる。竪穴建物からの出土遺物は総数で、須恵器食膳具104点、須恵器貯蔵具94点、土師器食膳具26点、土師器器炊具571点である。床に張り付けて出土した環A(図番号161)がⅢ古期、同じく張り付けて出土した支脚(図番号172)がⅡ3～Ⅲ期にあたる。また、

P1からの遺物もⅡ3～Ⅲ期のものが主体となっている。信憑性の高いこれらの遺物から考えれば、建物の時期はⅡ3～Ⅲ古期とするのが妥当であろう。

〈床の状況と火災状況、掘り方〉床は、壁立ち上がりが確認できなかった部分を除くほぼ全面に貼床されており、カマドとP1・2に囲まれた区域が硬化する。貼床は、厚さ5～6cmを主体に最も厚い部分で14cmに至る。また、硬化区域の周囲も含め、床面では焼土・炭化物や炭化材の分布が顕著に見られる。更に床面3カ所に被熱を受けている。この被熱の位置が問題であり、炉としての機能をもつ焼床は、大抵中央付近で検出されるのだが、この建物の場合カマドに近い位置である。床面に広がる多量の炭化物、炭化材、焼土、そして被熱床。これらを合わせて検討すると、火災建物であった可能性が高い。また、覆土断面の下層ではAラインのカマド側1/2区域とBラインのカマド側1/2区域に炭化材を多く含む土を検出。この土層範囲が、床に広がる焼土や炭化物・炭化材の範囲と一致する。カマド付近の被熱床、通常被熱の少ない箇所である焚口被熱焼結から奥にかけてみられる被熱、これらを総じて考えれば、カマド付近から火の手が上がったと考えるのが妥当ではなからうか。しかし、カマドに付属するP1・2にソデ崩壊土が混入することや、カマド手前に位置するP1は使用していない時に蓋がされていた可能性が高く、突如の火災なら蓋の痕跡が検出されていいはずである。また、カマドの奥壁側が基底部から検出されないこと、これは削平されたというより壊されたと考えられるもの。よって、この建物は廃棄を目的として、カマドを壊し、その後意図的に火を放った可能性があるのではないだろうか。掘り方には、掘り方土Ⅰ基を確認、覆土は黒褐色土と黄色系砂質土の混在土、最上層に貼床と思われる土を確認している。

16. SI51

〈立地・規模・形態〉B地区内南側せ35・36Grに位置し、SI39東側を切って建てられている建物である。貼床と建物中央炉が検出されたために建物として判断した。鞍部にさしかかる東側の削平区域でもあるため、側壁の検出はされていない。南側をSK56により切られて消失、北側もSK54により切られて消失している。カマドや柱穴が検出されないため、掲載図に示した波線が本来の壁位置でないかもしれない。中央炉とした被熱部分がカマド焚口に検出されるような被熱と考えれば、本来の壁位置はもっと違う形になっている可能性があり、貼床との関係を考えれば壁際に付設するカマドであったのかもしれない。

〈床の状況と掘り方、覆土堆積、遺物出土〉貼床は黄褐色土に黒褐色土が3割混在する土層を主体として4～8cmの厚さで施されており、硬化はみられない。確認した貼床の範囲は、長径300cm短径250cmである。焼床面は地山被熱で焼結し、非常に硬いものとなっている。覆土は非常に薄いが堅穴建物覆土に特有の質をもっていると言える。掘り方土坑は検出されなかった。出土遺物は総数で、須臾器食器25点、須臾器貯蔵具3点、土師器食器3点、土師器煮炊具148点。床に張り付いて出土するものが多く、Ⅲ期からⅣ2古段階の時期にあたる。主体はⅣ1期辺りと考えられ、これ相応の時期に使用された建物にならう。この他土製支脚破片1点が出土する。

17. SI52

〈立地・規模・形態〉B地区中央、き40・41Gr主体に位置する建物で、SI53A・Bと重複し、この3軒の堅穴の中では最も時期が新しい。3軒の堅穴の位置関係は、SI52の北側にSI53A、SI52とほぼ同じ位置にSI53Bが存在する。この区域は削平を受けている区域ということ、掘立柱建物や土坑の重複も多く非常に遺構密度の高い区域である。SI52自体は、削平のため側壁立ち上がり確認できず、カマド基底部と被熱、貼床を検出している。主柱穴は見つからない。建物西側にはSK73小土坑が掘り込まれている。建物規模は推定390×350cm、堅穴推定面積136㎡である。堅穴東側に通常小型カマドが付設される小型建物である。堅穴主軸はN-127°-W。

〈カマド〉削平によりカマドの痕跡が残る程度である。カマドソデの基底部が極めて薄く残存するが、右ソデや奥壁は基底部すら検出できない状態である。ただ、残存する基底部プランからソデの奥壁側への廻り込みは復元可能である。逆U字状を呈す屋外へ煙道が延びない無煙道型カマドであったと思われる。新型でC2類（翌月2006）になるだろう。カマド規模は、奥壁からソデ焚口側端部までの長さが推定で64cm、外寸幅60cm、ソデ幅が残存幅で12～15cmを測る。

〈床の状況と掘り方、遺物出土〉貼床は、全面が施されておらず、床を貼っている部分と地山を使っている部分、そして、北西側ではSI53の覆土を利用している部分がある。カマド焚口近くで床の著しく硬化する小範囲区域が検出されており、中央ではやや硬化する程度。これまでの検出例と逆なのである。覆土が検出されていないこともあり、床レベルまで削平を受けてしまっているためにこのような検出状況になったか。この硬化する部分が東

壁に接していると考えられるなら、ここが堅穴への出入口の可能性があらうか。堅穴西側にはSK73が重複するため、床は消失しているが、SK73側面から被熱層が検出されており、この堅穴建物に伴う可能性をもつ。東側床は以前に建っていたSI53覆土が広がる区域であり、この区域での床硬化がみられなかったことから、範囲の判断が難しいところでもあった。しかし、SI52に伴う掘り方・掘り方土坑により推定範囲とした。掘り方土は、SI53と混在している箇所も多く、どちらの建物にどの掘り方土が伴うのかというこれも判断が非常に難しいところである。確実にSI52に伴うものと考えられるのは、黒褐色土に明褐色土粘土が多量に混在する土層を主体貼床として使用していることであり、この土をメインに焼土や炭化物が少量含有する層をもつためである。また、掘り方土坑は深さが掘り方と相違ないが、プランとして捉えられるものが2基検出されている。出土遺物は総数で、須恵器食膳具6点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器炊具54点、土製品2点と少ない。遺物は床張り付きで出土するものや掘り方土坑から出土する土器がⅡ3期におさまり、建物時期も同様の時期であらう。

18. SI53 A

《立地・規模・形態》SI53AはSI52同様の区域に立地するもので、3軒重複のうち真中の時期にあたる。西側側壁の立ち上がりの一部、深くしっかりした主柱穴、貼床と掘立柱建物柱穴により殆ど破壊されてしまっているカマド被熱のみ検出されている。削平による影響が著しい。また、西側はSI52・SK73に切られ、建物中央下ではSK74に切られている。主柱穴の位置と断面Bラインで確認できる掘り方の範囲から全体のプランが想定可能で、堅穴規模は、460×推定520cm、推定面積239㎡。小型か中型建物であったらう。平面プランはやや長方形、主柱穴は左寄りに配置される。カマドも中央から左寄りに付設されていたものと思われる。主軸はN-143°-E。

《柱穴》4本主柱穴が確認されている。P1～3は、長径60～70cmの方形プランを思わせるしっかりした掘り込みで、深さは床より60～80cmを測る。P4のみ柱の並列する均等配置から外れて外側に飛び出しまい、堅穴建物の主柱穴としては貧弱で異質だ。しかし他に柱穴が検出されなかったため、この堅穴の柱穴としたものである。柱間寸法はP1・2間が320cm、P2・3間が180cm、P3・4間が290cm、P4・1間が280cmである。柱穴には、掘り方土が両壁に残存、抜き取り痕を確認している。また柱の設置時には、P1～3に関しては、掘り方の南側がスロープとなっているので、カマド側から立てられたと予想する。

《覆土堆積層、床の状況と掘り方、カマド被熱》覆土堆積層は最大でも4cmしかなく、削平の影響が顕著に表れており、1層のみとなっている。カマド被熱はP1・2間中央に位置、南壁の左寄りにカマドが付設されたものと思われるが、ソデなどSI52構築時に取り除かれたのか全く残っていない。被熱自体も後の掘立柱建物柱穴などにより殆ど消滅してしまっており1/5程度が残存するのみである。床はSI52やSK74により半分に消失し、残存する床では北壁側を除き貼床されている。壁周辺では地山床である。貼床はSI52と同質のものを主体としており、堅穴中央では床硬化が見られる。掘り方には北壁側の位置を中心に5基の掘り方土坑を持っている。

19. SI53 B

《立地・規模・形態》SI52と堅穴軸を違えて同位置に存在するものである。SI52の床下調査時にしっかりとした4本主柱とカマド被熱が検出されたことにより判明した。よって建物規模は不明だが、これまで本遺跡では中央4本主柱をもつ堅穴建物に小型クラスのものはないため、1辺が500cm以上の建物であったらうと予測される。この4本主柱の配置から算出した主軸はN-26°-E。また、カマド被熱と主柱穴の関係から中央付設型のカマドであったと思われる。勿論通常のタイプかL字型かは不明である。SI53Aの柱穴に、この建物の柱穴が切られており、重複の中では最も古い時期に機能していたと堅穴建物と判断できる。

《柱穴とカマド被熱》4本主柱である。柱穴規模は径55～65cm深さ55～65cmを測る。柱間寸法は、P1・2間とP3・4間の横軸が260cm、P2・3間とP4・1間の縦軸が220cmの横長ではあるが並列に均等配置されている。覆土から、P1とP2は柱が抜かれて埋め戻されている。P3とP4は、下層中央に黒褐色土ベースの柱痕状の土が確認できている。これが柱であった可能性をもつ。しかし上層には黒褐色土に黄褐色粘土の小・中ブロックと炭化ブロックが含有する覆土が認められ、柱であったとしても、掘り方の中で切られたことになる。掘り方の中で本当に柱を切れたのか疑問もあり、柱の根元が腐ってしまったかして、腐っていない部分を抜き取ってその後埋めた可能性もあるのではないかと。また、掘り方には段垣が認められることから、P2・3・4はカマド側方向から柱が立てられており、P1のみ逆方向から柱が立てられている。柱径は、覆土断面等から復元して、22～26cm程あったものと思われる。カマド突口被熱は1/5程度が残存、被熱下底部にあたる地山被熱が残存する程度である。

〈SI53A・SI53Bの遺物出土〉出土遺物は両方の建物の総数で、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具96点である。SI53A掘り方からI2期、他にもI1～II1期にあたる土器が出土。主柱穴が建物中央に位置しないタイプなので、本遺跡の竪穴の傾向として、I2～II1期あたりが妥当と考える。また、SI53BはAの柱穴に切られているため、I2～II1期よりも古い段階になると考えられる。

20. SI54

〈立地・規模・形態〉B地区中央よりやや北側、くけ39・40Gr主体に位置する。竪穴規模は510×530×570cm、しっかりとした側壁ラインをもつ長方形の平面プランを呈す、面積29.6㎡、中型建物である。北壁側にSK92に切られて壊れているが、この他は良好な遺存状態である。南壁側に通常タイプのカマドが付設し、4本主柱が西・東壁際に並んでいる。側壁には壁周溝が廻り、この周溝内に小規模柱跡（支柱）が見られる。屋内4本主柱をもつ壁立式（宮本長二郎「日本の竪穴住居」『奈良国立文化財研究所シンポジウム報告 先史日本の住居とその周辺』1998年）の竪穴建物と言える。竪穴主軸は、N125°-E。壁高は16～26cm。

〈主柱穴〉主柱穴は4本、方形を呈すしっかりとした掘り込みをもつものである。主柱穴の規模は、径が50～65cm、深さは床レベルから測ってP15が65cm、P13・P14・P16は60cmである。掘り方のスロープからみて、縦壁を軸として柱は内側から縦壁側へと統一されて立てられている。4本主柱の柱間寸法は、P16・P13間とP14・P15間が492～495cm、P13・P14間とP15・P16間が230cmで、正確に並列に均等配置されている。これら主柱穴は建物廃絶時に抜き取られて埋め戻されているが「柱のあたり」は残存しており、主柱径22～28cmであった。

〈壁周溝、周溝内支柱〉壁周溝は、幅24～34cm深さ15～18cmで、土坑に切られて消失する北西部分以外は全周し、カマドの奥壁側にも掘り込まれている。壁周溝内には11本の支柱が見られ、土坑内の消失分も合わせれば計12本で構成される。支柱穴規模は、径24～40cm深さ40～60cm。P4・P7・P8・P11・P12では、柱痕が残存しており廃絶時に柱を切っている。逆に、P1・P5は廃絶時に抜き取られている。P2・P3・P6では下層で柱痕、上層に覆土を確認しており、柱を穴の中で切ったのであろうか。抜き取りは壁周溝に平行に時計回り方向で行われている。掘り方には段差やスロープが確認できるが、支柱は様々な方向から立てられたようで統一性はない。また、P7など斜めに柱を立てた痕跡をもつものもある。柱痕から判断して支柱の太さは、12～15cmが主体最大18cmと思われる。柱間寸法は140～185cmを測り、正確な統一性はないが、ほぼ相対する位置に支柱は配置されている。

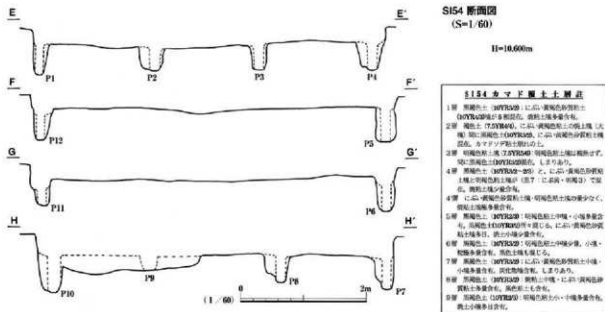
〈カマド〉カマドは南壁側に逆U字状を呈す無煙道型の通常カマドが付設されている。ソデには黒褐色土に濃い黄褐色土が混在する土や、黒褐色土に明褐色砂質粘土が混在する土が使われ、左ソデの焚口に近い部分でソデ被熱が認められる。床は貼床が施されているが段の土部分では地山を床としている。また、床は焚口の被熱焼結部分が若干窪み、その後5度の傾斜で奥壁側へ進んで焚口から35cm地点で平坦な段をもつ。そのまま奥壁側へ進み、焚口から105cm地点で奥壁に至る。カマドの規模は奥壁から焚口側ソデ末端までの長さが外寸で135cm、外寸幅95cm、焚口内寸幅52cm、ソデ幅20～22cmである。カマドは廃絶時に壊されている。竪穴埋土にカマドソデ土が散乱しており、カマド付近だけでなく、竪穴内の至る所に廃棄したようである。

〈床の状況と掘り方〉床は全面が貼床され、カマドを中心として放射状に、全体の約1/2が硬化している。床面中央が若干窪み、SK92付近の硬化しない箇所であるAラインでは東壁側から130cm地点の幅、Bラインでは北西壁から140cm地点の幅で、他より10cm高くなる。この辺りが寝間だろうか。貼床は2～4cm程度で薄い。床下には掘り方土坑が大型1基を中心に小土坑群となって存在する。黄褐色土ベースとするもの、黒褐色土ベースとするもの、暗褐色土をベースとするものと、3パターンの覆土をもち、土器を多数に混在する。

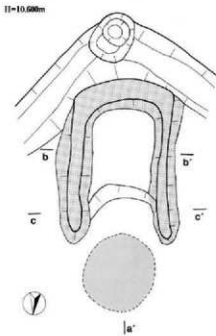
〈覆土堆積、遺物出土〉覆土は、カマドソデ崩壊土が部分的に確認できる他は、分層可能であるものの焼土同一層と判断できる一括埋土の特徴を持つものである。遺物は床に張り付けて出土するものは少なく、覆土内で満遍なく混入している状況である。総数で、須恵器食膳具107点、須恵器貯蔵具46点、土師器食膳具39点、土師器煮炊具860点である。この他、土製支脚等の土師土製品3点、石製品37点が出土する。II2期からII3期にあたり、建物もこれ相当の時期と判断できる。なお、坏B転用硯（図番号203）は覆土上層からの出土である。

21. SI55

〈立地・規模・形態、遺物出土〉B地区の北西側平区域き42・43Grに位置、しっかりした掘り込みをもつ4本主柱と掘り方土坑のみ検出された建物である。よって竪穴規模は不明であるが、想定して中型規模の建物であろう。柱穴は、方形掘り方プランをもち、深さ50～60cmを測る。建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されており、土層で



SI54
カマド平面図・断面図
(S=1/30)

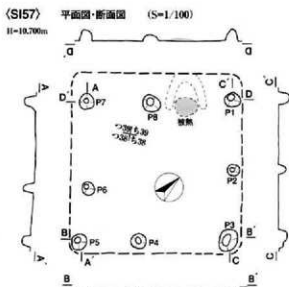
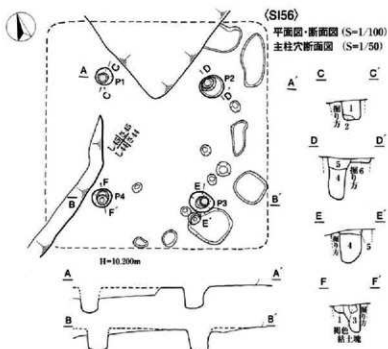
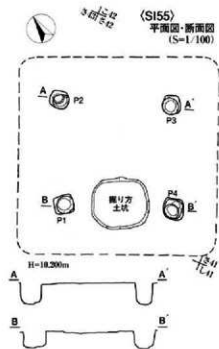


第25図 竪穴建物遺構図16 (SI54)

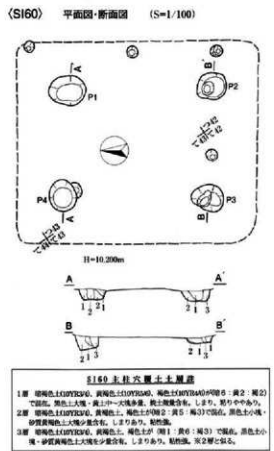
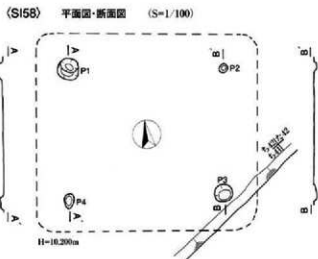
は掘り方掘土が側面に僅かに残るが、一括埋め戻し覆土である。柱間寸法はいずれも 280 cm で均等配置されたようだが、P1 のみ若干外側にずれる。主軸は北向きと仮定すると建物主軸は N34° -E となる。掘り方土坑は非常に浅く、深さ 2 ~ 5 cm である。覆土は黒褐色土と橙色粘土 3 割の混在土が主体で典型的な掘り方土坑覆土を呈している。出土遺物は、土師器煮炊具が 5 点のみ、時期は不詳である。

22. SI56

(立地・規模・形態・遺物出土) B 地区の北西側平区域中央のさ・L44・46Gr に位置、しっかりした掘り込みをもつ 4 本主柱と小規模掘り方土坑のみ検出された建物である。竪穴規模は不明であるが、掘り方土坑の位置等から予想すると 36 m 程の中型規模の竪穴となろう。P1 の区域がさらに削平を受けているため、検出された柱穴は小さく浅いのであるが、他のものは径 65 cm、深さ 55 ~ 60 cm を測る。全ての柱穴で柱根痕が認められ、その径は 25 cm であった。柱間寸法は P1・2 間と P3・4 間が 290 cm、P2・3 間と P4・1 間が 315 cm。この建物もカマドが完



- SI56主柱穴層上土質表**
- 1層 黒褐色土(IVY321)~(2)2: 棕色土(IVY360)中塊多量。炭化小塊・炭土小塊少量含む。
 - 2層 黒褐色土(IVY320~21): 棕色土中塊少量含む。しまり穴に多い。
 - 3層 黒褐色土(IVY319): 棕色粘土中塊少量含む。しまり穴に多い。
 - 4層 黒褐色土(IVY320): 棕色土小塊・炭化小塊少量含む。ややしまり穴なし。
 - 5層 黒褐色土(IVY320~22): 棕色土小塊・炭化小塊少量含む。炭土層少量含む。
 - 6層 黒褐色土(IVY320): 棕色土小塊少量含む。しまり穴あり。



第26図 聖穴建物遺構図 17 (SI55・SI56・SI57・SI58・SI60)

全に削平されているため、本来の主軸が判らないのだが、北向きで設定すると主軸はN20°-Eとなる。小土坑は非常に浅く、最も北側に位置する2基のもので深さ5cm、これ以外の3基は深さ2・3cmの極めて浅いものである。掘り方土坑とも考えられるのだが、プランが不定形のものもあり、掘り方の一部がころうじて残った可能性もあるだろう。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具12点のみと極めて少ない出土である。P2からI1期に位置づけられる土器が出土している。

23. SI57

〔立地・規模・形態・遺物出土〕B地区南西中央端すぐ隣がC地区の、ちつ38・39Gr、SI35西側に隣接して位置する。8本の柱穴とカマド地山被熱を検出したもので、柱の規模や並びから掘立柱建物とするには疑問があり、壁柱の掘立柱建物と位置づけした。本遺跡では掘立柱建物が存在する場合には、包含層段階から多量の土器や生活痕跡の残る土が認められることにより掘立柱を予測して包含層を掘削する。この建物は立地が鞍部にあたることもあり、削平された可能性は薄い。よってこの掘立柱自身の遺物が少なかったことや、貼床もはっきり認められなかったために、掘りすぎたかもしれない。柱穴規模は径35～65cm、深さ20～30cm、柱の底面に段状の窪みが残っているものもある。柱間寸法は140～230cmとばらけているが、比較的柱筋は通りがよい。但しP5のみ丁度柱1本分が外側へ飛び出すようにずれている。掘立柱規模は、21m程の小型建物と予想する。主軸はN46°-E。出土遺物は総数で、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具2点のみ。時期は不詳である。

24. SI58

〔立地・規模・形態・遺物出土〕B地区北西の削平区域にあたる、ち42Grを中心とした位置で、SI43とSI60に挟まれて位置する建物である。削平の極めて著しい区域にあたり、4本主柱穴の下半部分のみ検出された。径はP1が最も大きく60cm、P2が最も小さく20cmであり、深さも10cm未満である。P1では底面に一段下がったテラスを持つ。柱の根元のみが下がるケースもあるため、P1の状況を考えればP2などは柱の下がった部分のみ検出されたのであろうか。柱間寸法は北を軸として横軸間400cm、縦軸間350cm、並列に均等配置されている。主軸は、北向きと設定すればN11°-Eとなる。また、掘立柱規模は、予想して30m以上はあったものと思われる。中型規模以上の建物になるのだろうか。出土遺物は土師器煮炊具2点のみで、ハケ調整の釜胴部破片と部位不明の釜破片のみである。時期は不詳である。

25. SI60

〔立地・規模・形態〕SI58の西側に位置、著しい削平区域であり、4本柱穴と柱穴に平行するビット列のみ検出された。4本主柱穴は浅いながらも大きくしっかりした掘り込みをもち、規模は径70～100cmを測る。深さは15～30cmである。P2-3に見られるように底面に窪んだような若干の落ち込みが伴っており、これが柱であった可能性をもつ。柱径は25～30cmとなろうか。柱間寸法はP1・2間とP3・4間が375cm、P2・3間とP4・1間が285cmであり、柱が並列に均等配置されていたことがわかる。廃絶時に柱は抜き取られている。また、P1・2に平行に深さ15～25cmの小ビットが3つ並んで検出されている。これらのビットは壁支柱のようなものを予想させるので、ころうじてこの3つが残存したものではないかと思われる。主軸は、北向きを設定してN2°-E。また、掘立柱規模は予想して最低でも38mはあったのではないだろうか。大型建物であった可能性も十分あるだろう。出土遺物は、土師器煮炊具2点、粘土塊1点のみであり、時期は不詳である。

26. SI61

〔立地・規模・形態〕SI60と重複して存在する建物。やはり著しく削平を受けている区域なので、4本柱穴のみ検出したもの。柱穴規模は径25～35cm、深さはP3が4cmと浅く、その他は22～30cmを測る。柱間寸法は1・2間とP3・4間が220cm、P2・3間とP4・1間が285cmで、柱筋も通り、軸に並列に均等配置されている。主軸は北向きを設定して真北をとり、小型か中型規模の建物であったと予測する。遺物は出土していない。

27. SI62

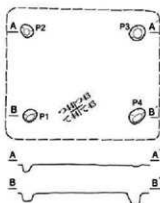
〔立地・規模・形態〕SI58・60～62と同様の位置・検出状況をもつ建物である。SI58の北側に隣接する。検出した主柱の規模は、径20～35cm、深さ6～15cmであり、P1が最も小さく浅い。柱間寸法は、P2～4は柱筋も通り、P2・3間が230cm、P3・4間が220cmと、きちんと配置されているのに対し、P1だけがかろうじて外側へずれてしまっている。掘立柱主軸は、前述の削平建物と同じように正確には不明だが、北向き主軸と設定してN16°-E。建物規模は、小型タイプとなるだろう。なお、遺物は出土していない。

(SI61)

平面図・断面図
(S=1/100)



H=10.200m

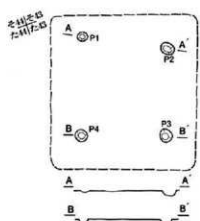


(SI62)

平面図・断面図
(S=1/100)

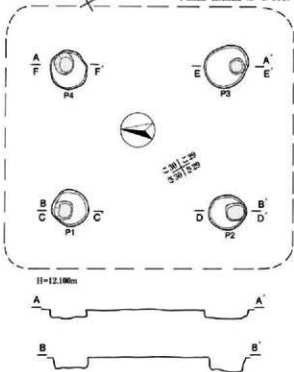


H=10.200m



(SI64)

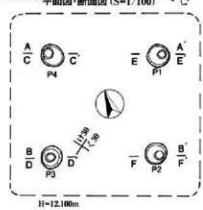
平面図・断面図 (S=1/100)



H=12.100m

(SI65)

平面図・断面図 (S=1/100)

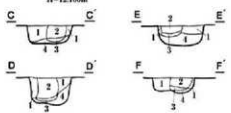


H=12.100m



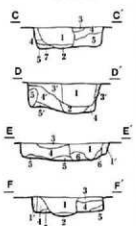
SI65 ビット断面図 (S=1/50)

H=12.100m



SI64 ビット断面図 (S=1/50)

H=12.100m



- SI64 主柱穴層土層構造**
- 1層 褐色土 (OYB62)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。1層にやややけ。
 - 2層 1層によく似た層の下方に存在する土層。
 - 3層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。1層にやややけ。層の上方層。
 - 4層 2層と同層が、褐色土 (OYB60)の侵入層が3層より多く、褐色土塊が多量に存在する。
 - 5層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。
 - 6層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。
 - 7層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。

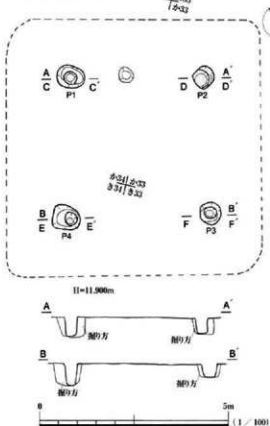
SI65 主柱穴層土層構造

- 1層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。1層にやややけ。
- 2層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。1層にやややけ。
- 3層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。1層にやややけ。
- 4層 褐色土 (OYB60)・褐色土 (OYB60)の堆積。中塊・小塊多量含有。褐色土塊多量。粘土塊多量含有。しまりややけ。1層にやややけ。



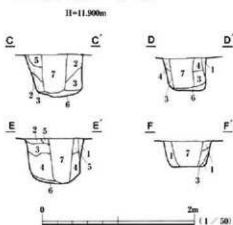
第27図 竪穴建物遺構図 18 (SI61・SI62・SI64・SI65)

SI67平面図・断面図 (S=1/100)



(SI67)

SI67ビット断面図 (S=1/50)



SI67 主柱穴層土土層表

1層	相模色土(10YR5/6)、黄褐色土(10YR5/6)が(厚4)で混ざり、黒色土小塊多量含有。砂質粘黄褐色土塊(10YR5/6)少量含有。しまりあり。黄褐色土は粘り強。
2層	相模色土(10YR5/3-5/6)に灰褐色土(10YR5/6)が(厚0;黄4)で混ざり、黒色土、炭化小塊、黄土相土小塊多量含有。砂質。
3層	黄褐色土(10YR5/6)、相模色土(10YR5/3-5/6)、黄褐色土(10YR5/6)が(厚1;黄5;黄4)で混ざり、黒色土小塊多量、炭化物小塊多量含有。中しまりあり。
4層	黄褐色土(10YR5/6)に相模色土(10YR5/4)が3割混ざり、黄褐色土小塊が多量。炭化土小塊多量、黄土相土少量含有。しまりあり。
5層	黄褐色土(10YR5/6)に、相模色土(10YR5/3-5/6)が1割混ざり、黄褐色土は粘り強。炭化大塊物多量含有。柱底の土と混ざっているが、意外に堅気。柱底の底面付近のみ硬化する。
6層	黄褐色土(10YR5/6)に相模色土(10YR5/4)が2割混ざり、褐色土小塊多量、黄土相土、炭化塊物多量含有。しまりなし。
7層	黄褐色土(10YR5/6)に、黄褐色土(10YR5/6)が2割混ざり、褐色土小塊多量含有。しまりなし。7層と混ざり、10YR5/5。

第28図 竪穴建物遺構図19 (SI67)

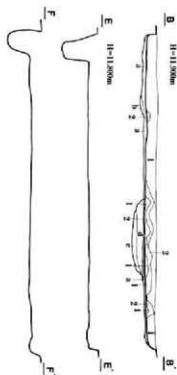
28. SI64

(立地・規模・形態) B地区南東側のA地区からB地区の境に南北に走る尾根部が削平された区域で、A地区とB地区の丁度中間地点にあたる。建物などが密集して存在する鞍部に対し、尾根部は殆ど遺構が確認されていないのであるが、わずかに確認した建物の1つである。削平を受けているため、4本の主柱穴のみ検出された。竪穴規模は、勿論正確には不明だが柱の配置から予想して、52㎡以上の大型建物相当もしくはこれ以上の建物であったと思われる。建物主軸は北向きと設定した場合、N-4°E。

(主柱穴、遺物出土) 掘り方やカマド被熱、掘り方土坑など、他の全てのものが削平されてしまっているにもかかわらず、柱穴は非常に大きくしっかり掘り込まれている。円形プランで、その規模はP1で径92cm、P3に至っては径118cmである。深さは22~26cmである。全ての柱穴底面で若干窪みを呈して柱圧痕が残存し、硬化している。柱間寸法は、P1・4間とP2・3間が390cm、P4・3間とP1・2間が460cmと、きっちりと並列配置されている。また、建物廃絶時に柱は抜かれ埋め戻されている。抜き取りに関しては、P1・2・4は北側方向へ抜き取っていると思われる。P3は判らない。柱の設置時には中心部から壁隅に向かう方向で柱が立てられた可能性がある。柱だけに関しては、計画性・規則性・統一性が何える設置・撤去となっている。出土遺物は、須恵器貯蔵具の瓶胴部1点、土師器食器具は内黒の高坏脚部片2点、土師器煮炊具ハケ調整の釜胴部破片を中心に10点のみ。これらの遺物はI・II期と判断されるが、建物規模から本遺跡の傾向として初段階の建物とみている。

29. SI65

(立地・規模・形態) SI64と同じく、B地区南側にあたる尾根部の削平区域に位置するものである。SI64の北東に隣接、4本の主柱穴のみ検出されたもの。柱穴規模は、径55~60cm深さ22~26cmを測る円形プラン、浅いがしっかりとした掘り込みをもつもの。柱間寸法はP4・1間とP2・3間が290cm、P4・3間とP1・2間が260cmと、きっちりと並列配置されている。この柱には柱痕が残っており、さらに柱痕下は柱圧痕が認められ硬化する。また、掘り方基底部には基礎固め・柱レベル調節と思われる層を確認しており、この層に接触する柱底端部が硬化す



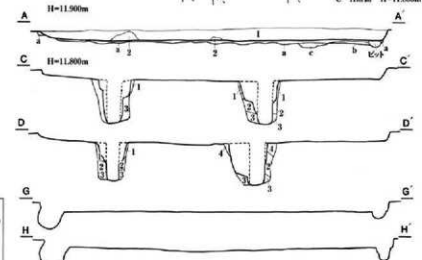
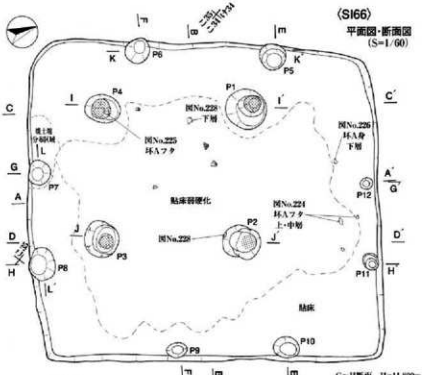
S166 掘り方土層遺構

- 1層 黄褐色土(OY7R25)：明褐色土(OY7R40)中塊多量、小塊・砂多量含有、底部に(OY7R25)中塊含有、含有。
- 2層 黄褐色土(OY7R25)：黄褐色土(OY7R40)中塊多量、小塊・砂・粘土塊多量含有。
- a層 黄褐色土(OY7R25)上、明・暗褐色土(OY7R40)大塊が混入し、底部に黄褐色土(OY7R25)中塊含有、含有。黄褐色土(OY7R25)中塊多量、小塊・砂・粘土塊多量含有。
- b層 黄褐色土(OY7R25)上、褐色土(OY7R40)中塊4層が混入、中々、多量含有。
- c層 黄褐色土(OY7R25)上、褐色土(OY7R40)が少量混入、黄褐色土(OY7R25)中塊多量含有。
- d層 黄褐色土(OY7R25)が、黄褐色土(OY7R40)中塊と混入、黄褐色土(OY7R25)中塊多量、粘土塊多量含有、粘り方土層に属す。
- e層 黄褐色土(OY7R25)に褐色土(OY7R40)が少量混入、黄褐色土(OY7R25)中塊多量含有、粘り方土層に属す。

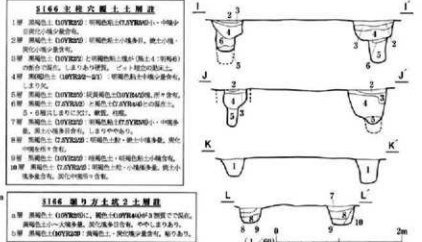
S166 土柱穴掘り方土層遺構

- 1層 黄褐色土(OY7R25)に、褐色土(OY7R40)と黄褐色土(OY7R40)大塊が中々・多量・混入して混入。黄褐色土(OY7R25)中塊多量含有。
- 2層 黄褐色土(OY7R25)上黄褐色土(OY7R40)大塊が中々・多量・混入して混入、中々・多量含有。
- 3層 黄褐色土(OY7R25)上、粘り方土層(OY7R40)の中塊多量、黄褐色土(OY7R25)中塊多量含有、粘り方土層に属す。
- 4層 黄褐色土(OY7R25)上、粘り方土層(OY7R40)の中塊多量含有、粘り方土層に属す。

S166 掘り方土層断面



S166 土柱穴断面 (S=1/60) H=11,700mm



第29図 竪穴建物遺構図 20 (S166)

る。この柱の設置に関しては、P4は東方向から、P1・2は西方向から、P3についてはおそらく東方向から、それぞれ柱が立てられたと思われる。要するに内側から外側へ統一して柱を立てている。この建物の主軸も、前述の建物と同様で、北方向を主軸に設定すればN-23°-Eとなる。竪穴規模は中型クラスになるだろう。なお、柱痕から判断し柱径は24～26cm。出土遺物は、須臾器食膳具の坏H天井破片1点、土師器食膳具の内黒高坏脚部片1点、土師器煮炊具2点のみ。これらの遺物から、建物は12期以内に建てられたと思われる。

30. S166

〔**立地・規模・形態**〕B地区中央から東寄りにあたる尾根部から鞍部へ下る途中に立地、やはり削平を受ける区域の、この34Grを中心に位置する。もともと4本主柱タイプの竪穴建物であったものを、4本主柱を埋めたのち、側壁柱8本へ増設築したと考えられる竪穴建物である。建物プランは、北東・東壁の増築分は直線の壁をもち、もともとあったと考えられる壁はやや崩張りで隅丸、全体に長方形を呈すプランである。竪穴規模は、530～560×500cm、壁高は14～20cm。面積27.3㎡で、中型クラスの建物となる。当初の4本柱穴の位置が中央とは限らないが、中央に位置したと仮定すれば、面積は20㎡程。20㎡程のものを7㎡程拡張していることとなる。カマドは確認されていないので、主軸は北向きと設定するならN-18°-Eとなる。拡張前の4本主柱時では、同じく北向き設定としてN-16°-W。

〔**柱穴**〕主柱穴の規模は、径43～62cm、深さはP3のみ62cmで他は全て70cmである。柱間寸法は、P1・2間とP3・4間が210cm、P4・1間とP3・2間が230cmで、並列に均等配置される。主柱穴覆土では最下層に柱痕、上層に抜き取り痕、最上層には貼床土が確認できる。最下層の柱痕検出については、柱底部分が腐ったために残り、上部柱を抜き取ったのではないだろうか。また、柱は全て内側方向へ抜かれたと思われる。最下底では柱圧痕が確認、柱径は、24・5cm程となるだろうか。拡張後の柱は8本で構成される壁側柱である。これら壁側柱の掘り方規模は、径20～38cm深さ2～42cmを測る。特にP9・10は深さ2cmで窪み程度の極めて浅いものである。掘り込まれずに柱を立てられたか。柱間寸法は、126～214cmとばらけている。ただ、北側と南側の壁支柱を見ると、相対する位置に設置されているし、西壁の柱穴も壁に対して均等に配置されているので、意識的に配置したことは認められる。しかし、P9・10は壁の長さに対して均等というわけでもなく、全体に北側へずれており、異なる印象を受ける。これらの覆土には、先程の4本主柱覆土とは異なる土が確認されている。また、壁側柱は、抜かれて埋め戻されている。

〔**床の状況と掘り方**〕全面に貼床されている。この貼床は2～6cmの薄いもので、掘り方は殆どない。建物中央区域では床の弱硬化がみられる。なお、貼床は拡張後の床になるわけで、拡張前の床が何処かにあったはずであるが、重ねられたとか離れ足されたという痕跡は認められなかった。また、床は平坦を呈しており、何処かが窪むとか何処かが高い等の変化はない。なお、南壁あたりP7の西側小区域に焼土塊の分布が確認されている。前述の掘り方の薄さに関して、拡張前の建物の傾向から、カマドが付設していた可能性は極めて高いと言える。焚口被熱は通常地山にまで及ぶので、この痕跡が検出されてもおかしくはない。要するに前段階の痕跡が掘り方内に見られず、よって拡張以前は床がもっと高いレベルに位置していたのではないかと考えられるのである。なお、床下には小規模な掘り方土境が2基確認されている。

〔**遺土堆積、遺物出土**〕覆土は、黒褐色土ベースに明褐色粘土や黒色土粘土の含有量によって2層に分層できるものの、単層に極めて近いものである。自然堆積層は認められず一括に埋め戻されたと思われる。出土遺物は、覆土への混入が殆どで、床から3cm以内の床直上で検出されているものもあるが多くはない。出土遺物は総数で、須臾器食膳具33点、須臾器貯蔵具8点、土師器食膳具12点、土師器煮炊具265点程度である。時期は、Ⅱ1～Ⅱ2あたりが主体と考えられる。この建物は、床の硬化の弱さ、カマドの付設する時期であるにも関わらず付設されていない点、P9・10の掘り込みを持たない点を挙げれば、住居でなかった可能性があらう。もしかすると、拡張をしたものの建設途中に取りやめたという可能性もあるのではないだろうか。

31. S167

〔**立地・規模・形態**〕B地区東側にあたる尾根部から鞍部へ下る途中に立地、やはり削平を受ける区域に位置するものである。か・き33・34Gr。4本主柱のみ検出され、削平区域でありながら立派な掘り込みをもつ。柱穴規模は径が55～75cm、深さはP1が56cm、P2が42cm、P3が34cm、P4が60cmである。旧地表に添った深さをもつ。これらの柱には柱痕と柱圧痕が確認されている。P1・2では基礎固め若しくは柱レベルのための土が入れられて

いる。柱間寸法はP1・2間が350cm、P1・4間が380cm、P2・3間が360cm、P3・4間が370cmであった。P3が、ずれてしまっているが、これを除けば柱筋は通る。この建物の主軸も、前述の建物と同様で、北方向を主軸に設定すればN-42°Eとなる。竪穴規模は推定40m以上の大型建物クラスになるだろう。出土遺物は、土器器食膳具の壺もしくは鉢の底部が1点、土器器煮炊具はハケ調整の釜削部1点のみである。

32. SI68

〔立地・規模・形態〕B地区中央北東端の旧地形鞍部に立地するもので、竪穴の北東壁部分が近代削平によって消失してしまっている。ただし、北壁の一部が検出されているので、全体規模の復元は十分可能だ。建物は壁をほぼ真っ直ぐにとるやや北軸側に延びて四角に近いプランをもっており、削平以外の部分は壁高を最大65cmにとる程、非常に良好な遺存状況である。建物規模は580×540cm、竪穴面積31.3㎡。北壁にカマド付設されていたと考えられ、中央4本主柱をもつ中型規模の建物である。主軸はN-28°E。

〔主柱穴、竪穴内施設〕4本主柱である。柱穴規模はP1径が100cm、これ以外のP2～4は径70cmを測る。深さは、P1が80cm、P2が75cm、P3が80cm、P4が95cmである。柱間寸法は、横軸であるP1・2間とP3・4間が250cm、縦軸であるP1・1間とP3・2間が310cmで、きっちりと並列に均等配置されている。しかし、P3・4は掘り方の下底部が上端に対しオーバーハンク、柱は斜めに立てられたようだ。これらの柱では、柱圧痕が認められており、径は26cm程である。また、建物廃絶時に柱は抜き取られて埋め戻されている。抜き取られ方は、P1がわからぬのだが、他の柱は内側に向かって抜いている。柱の掘立時では内側から壁側へ向かって柱を立てていて、こちらにも統制されたようだ。P3・4の間に連なる形でP5・6が確認されている。ピット番号を付けているが、底面が平坦な小土坑状である。カマド廃棄に伴う崩壊土と考えられる覆土をもっているため、建物の床レベルと同時に機能していたと考えられる。

〔カマド〕北壁側で竪穴被熱層と右ソツの一部を検出、削平により奥壁などは完全に消失している。規模は、縦残存長84cmで縦の奥壁からソツ端部までの推定長140cm、幅外寸で推定110cm程度、竪穴幅が内寸で推定70cm、ソツ幅22cmである。カマドの貼床など削平のため検出されておらず、地山被熱する竪穴被熱層が検出されているだけであり、カマド内部の傾斜も不明である。この竪穴被熱層から奥壁側へ向かう被熱端には支脚抜き取りピットがみられる。支脚は廃絶時に抜き取られているが、建物内から出土していない。また、かろうじて検出された右ソツでは、ソツ基底土の構築は見られず、地山にそのままソツ土を取り付けている。

〔覆土堆積、覆土内遺構、遺物出土〕壁際で壁崩落土の堆積層が確認できるが僅か、カマド崩壊土層がカマド付近から建物中心に向かって認められる。その他は、2層に分層可能であった埋め戻し土が確認でき、最上層は新しい時代と判断する流込土層が堆積する。出土遺物は総数で、須恵器食膳具42点、須恵器貯蔵具3点、土器器食膳具22点、土器器煮炊具563点である。覆土内混入が多く、カマド左手や建物中央にやや集中が見られる。遺構図に掲載している土器は殆どが床面に張り付いて出土したもので、時期はⅡ1期からⅡ3期に相当するが、時期の主体はⅡ2期辺りが妥当と考えられる。覆土内の上層から鉄製品（図番号243）が出土している。

〔床の状況と掘り方〕床は、西側壁や南側壁際では20～60cm範囲に渡って地山床を利用して、北壁は削平のため地山が露出した状態であり床がどのようであったかわからない。これら以外の床には、貼床が施されている。カマドと4本主柱を結ぶ内部では床の著しい硬化が確認できる。床面はほぼ平坦を呈しているのだが、P2・3を結ぶラインから右側の東壁側にかけて2～4cmの若干の窪みをもつ。また、P3の南側域は最大10cm程高くなっている。貼床そのものは薄い。床下には大型の掘り方土坑2基を中心に小型掘り方土坑が検出されている。大型の方は、深く、黒色土を中心に埋めるもので、建物の両サイドに位置する。小型掘り方土坑は、小円形プランで数基に及び、粘土混入土がメインに入れられた浅いものである。

33. SI69

〔立地、概要〕この建物は増築された建物である。建物の掘り方を調査時に、小型規模の壁周溝とカマド竪穴被熱を検出したことからもう1つ建物が存在すると判明した。最初に造られた建物を“SI69A”とし、増築された建物を“SI69B”とする。第33図を見て判るように、当初の建物の主軸から逆方位に変えて拡張しつつ建物を構築し直している。この建物の立地は、旧地形鞍部の比較的良好に遺存する区域であり、調査区の中央より北側の、かき37・38Grに位置する。この建物は主柱穴が屋外・屋内との差はあるが、SI54と同類のものに属するだろう。

〔SI69の遺物出土〕出土遺物は、SI69Bからの出土が殆どで、両者の総数は、須恵器食膳具56点、須恵器貯蔵具

23点、土師器食器類15点、土師器炊具597点である。床面に張り付いて出土する遺物は非常に少なく、床面から15cm程の覆土下層からのものを図化している。掘り方土坑からⅠ1～Ⅱ2期のもの、カマドから出土する遺物もⅡ1～Ⅱ2期であり、これらが比較的信憑性の高いものにあたる。ただ、下層のものもⅡ1～Ⅱ2期内に取り、SI69B建物の時期はこれ相応とみてよいだろう。また、SI69AはⅡ1期あたりであった可能性が高い。

SI69 B

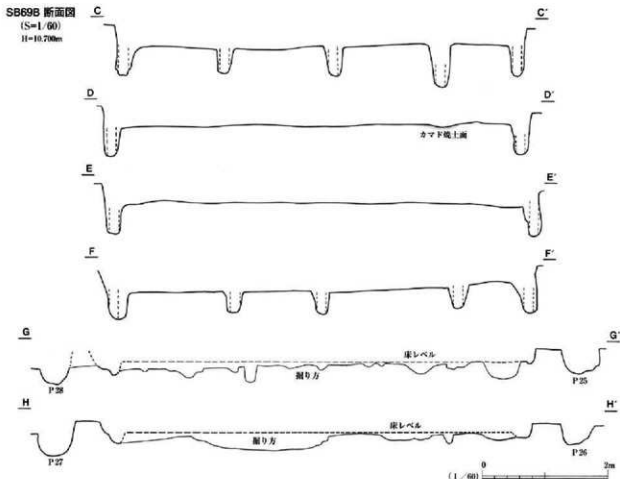
〈規模・形態〉拡張後の建物である。規模は、560～580cm×660～690cmで、面積は38.8㎡。中型ないし大型の建物である。カマドは南壁壁コーナーに付設し、北とは間逆に取り付けられている。主軸に対し右隅にカマドが付くと設定した場合、本竈穴の主軸はN-114°Eとなる。一方、カマドが主軸の左壁隅に取り付くと設定した場合は、N-155°Wとなる。建物には壁支柱を伴う壁周溝が廻り、一見壁立ち式の竈穴建物となることである。但し、この建物には竈穴外に4本の主柱を考えさせるような柱跡が検出されている。仮に主柱とするならば、検出された個の壁支柱との関係はどのようになるのだろうか。

〈屋外柱穴・壁支柱・壁周溝〉竈穴屋外に、4本の柱跡を検出している。主柱と呼べるものかどうか。この屋外柱穴の規模は、径が55～60cmの円形プラン、深さが30～40cmである。この柱は抜き取られており、覆土は、黒褐色土(10YR2/2)ベースに、基褐色土小・中ブロック少量、暗褐色土(10YR3/4)中・大ブロックが多量に含まれる。ほぼ黒褐色土が9割を占める層と、黒褐色土ベースに基褐色土(10YR5/6)大・特大ブロックが多く含む層、暗褐色土も多く含む層の2層が主体となる埋土である。ほとんど一括層で埋められている。壁周溝は、カマド奥にも及び全周する。壁周溝の幅は20～30cm、掘り込みの浅い部分や底面を丸く仕上げている部分もある。SI54壁周溝のようなしっかりした掘り込みとは違っておりある印象である。壁周溝内もしくは添う位置に支柱が掘り込まれる。支柱は、確かに壁に対して相対する位置に支柱をたてようとした意識はあるものの、支柱間寸法は全く揃わない。支柱穴の規模は、径26～38cm、深さ36～64cmである。全ての壁支柱には柱圧痕が残存する。この径が15cmであった。これら壁支柱の掘り方からみると、柱は様々な方向から立てられており統一性はない。また、建物廃絶時に柱は抜き取られ埋められている。

〈カマド〉南壁端の壁周溝手前に竈口が対角線上に位置して付設するカマドである。右ソファの一部が破壊されて基底部分のみ残存する。このカマドは、逆U字状を呈す無煙道型である。カマドの竈口被熱は著しく中央から左にかげざらによく被熱し、温度が上がったようで、薄い黄褐色系の赤褐色よりもさらに強い被熱色を呈している。ソファには、黒褐色土と暗褐色土、砂質黄褐色粘土を混ぜ合わせた土が使用されている。床は、奥壁まで貼床されている。床の状態は、竈口の被熱焼結部分が凸凹状を呈すが、それより先は緩やかに傾斜して5～9度の傾斜角をもつ。カマド内覆土は、含有物の違いや質の違いで分層しているのだが、基本的にカマドを壊した崩壊土である。カマド規格は、奥壁から竈口部のソファ未端までの長さ112cm、竈口幅寸58cm、竈口幅寸58cm、ソファ幅24cmである。また、構築順だが、カマドを構築した後に、竈穴の貼床を貼っている。またカマド奥に位置するP1からは土製支脚が出土している。

〈覆土堆積〉覆土には壁際の一部で壁崩壊土が確認できるが、その他は黒褐色土に褐色度ブロックが多量に含まれる層をメインとした一括埋土が認められる。この上層に壁崩壊土が被るので、自然に壁崩壊したというよりは、埋め戻し時に壁が崩れたのであろう。この多量の褐色土ブロックはカマドのソファ崩壊土関連のものであり、土層断面に掲載されていないが、建物内の至る所で、かなりの量のカマド崩壊土が確認されている。

〈床の状況と掘り方〉床は、硬化部分が最大6cm程度厚みもあるが、ほぼ平坦を呈し、床全面に貼床される。黄褐色粘土ブロックに暗褐色土ブロックと黒褐色土が混在する黄褐色土粘土が硬化して目立つ土や、同質ではあるが黒褐色土の割合が9割を占めるような黒褐色土ベースの土が使われている。但し、貼床は2～4cm程と薄い。床面の硬化は、カマドを中心に縦長に2カ所に分散して認められる。本遺跡の竈穴建物での硬化面はカマドを中心に建物の中央に認められることが多いので、珍しいケースとならうか。この硬化は、P5・6間、P13・14間、P12・13間の3カ所壁際まで続く。おそらくいずれかが出入口になると思われる。掘り方についてだが、貼床の下層の掘り方も薄い特徴がある。掘り方から地山被熱と小規模プランの周溝が検出されたことで、拡張前の建物が判別できたのだが、拡張前の床の痕跡は検出されなかった。拡張後の掘り方が薄いため、拡張前の床をかき上げたのではなく、以前の床はどれくらいかわからないがもっと高いレベルにあり、これを剥がしたか又は掘削し直して、新たな建物を構築したのではないかとと思われる。床下の掘り方土坑については、SI69Aで述べる。

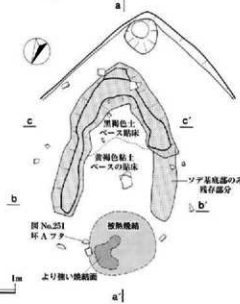


SI69B カマド 平面図・断面図 (S=1/30) H=10.600m



【1】SBカマド遺土土層表

- 1層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602) (図3・層1・表1) で構成。黄褐色土は、小〜大塊状で、粒間の隙・漆喰状があり、重なりあっている。カマドノミ面境線以上の一部、黄土小塊少量。大塊状多量。図3(2)の埋方(0P70402)中層に多量分布。やや、まわりあり、厚さに差あり。
- 1層 土層と異なる。黄土がみられない。
- 2層 黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)の多量分布。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。
- 3層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- 4層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- 5層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- 6層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- 7層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。

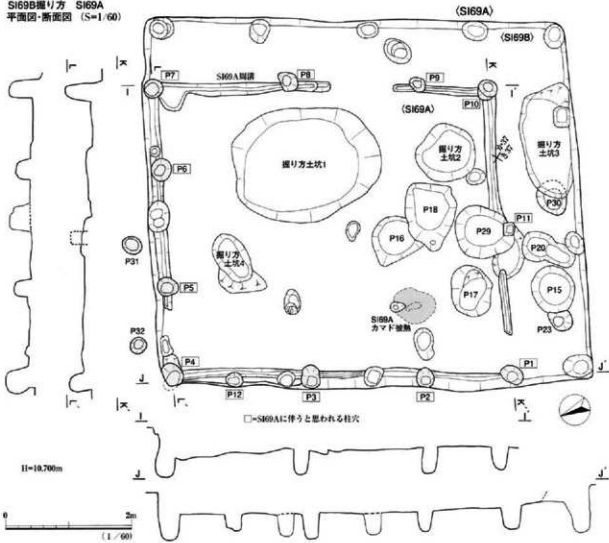


【2】SBカマド掘り方土層表

- a層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・砂質黄褐色土 (0P70402) (図3・層1・表1) で構成。黄褐色土は、塊状で、厚さ小〜中塊状。まわりあり。カマドノミ面境線以上の一部、黄土小塊少量。黄褐色土(0P70602)が少量分布。まわりあり。黄褐色土小塊少量分布。カマドノミ面境線。黄褐色土 (0P70202)がベースで、黄褐色土(0P70402)が少量分布。黄褐色土小塊。黄土小塊少量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。
- b層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- c層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- d層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- e層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- f層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- g層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- h層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- i層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。
- j層 黄褐色土 (0P70202)・暗褐色土(0P70402)・黄褐色土(0P70602)・黄褐色土(0P70802)の多量分布。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70202)・暗褐色土(0P70402)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70602)は、黄土の小塊状多量。黄褐色土(0P70802)は、黄土の小塊状多量。

第32図 竪穴建物遺構図23 (SI69B)

SI69B掘り方 SI69A
平面図・断面図 (S=1/60)

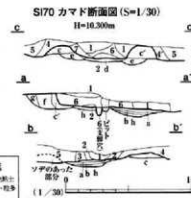


(SI70)
平面図・断面図 (S=1/60)



SI70Gr
掘り方土坑
1層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
2層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
3層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。

SI70カマド土層
1層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
2層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
3層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
4層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
5層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
6層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
7層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。



SI70カマド掘り方土層
a層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
b層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
c層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
d層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
e層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
f層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
g層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
h層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。
i層 黄褐色土 (G1YR20) 掘り方土坑
中層少量赤土、黄褐色土少量赤土。

第33図 竪穴建物遺構図24 (SI69A・SI70)

SI69 A

〈規模・形態・検出状況〉拡張前の建物である。建物規模は480×560cmで、南西壁が若干歪みをもち微妙な台形を呈すが、ほぼ長方形プランと言えようか。堅穴面積26.9㎡で中型クラスの建物になる。検出された地山被熱は、赤褐色を呈してカマド開口被熱と考えられるものであり、上面の焼結層が既になくなって、下層の地山被熱が残ったものであろう。この被熱の位置から推測して、西壁と南西壁の交差する西隅に取り付くようなコーナーカマドであったとするとソデの位置に無理があるように考えられるので、西壁の端に付設されるタイプであろうと思われる。この建物の主軸は、N45°-W、西向きに振る形となる。

〈壁周溝・壁支柱・その他の柱穴〉壁周溝は、幅が12～20cm、SI69Bと同じ深さを持つかSI69Bより深いもので5cm以内、南東壁や南西壁ではSI69Bよりも若干浅いものもある。北西壁の周溝では、SI69Bよりも内側に掘り込まれており、断面V字状を呈す。これらの壁周溝はSI69Bの掘り方で埋められていた。壁支柱は、横軸壁に各々4本、縦軸壁の北東壁に4本、南西壁に3本配置されている。これらの壁支柱は相対する位置に意識的に配置されているのだが、支柱間寸法の正確な均一性はない。支柱穴の規模は、径26～30cm、深さが掘り方レベルから22～40cmである。壁支柱は、P1が拡張後のP5と同じ、P4が拡張後のP8と同じ、P7が拡張後のP10と同じ、というように3本のみ拡張後にも使用されている。支柱の覆土の多くは、下層に黒褐色土(10YR3/2)に暗褐色土(10YR4/3)、褐色土(10YR4/6)ブロックが混在する層、その上層には、下層と同層なのであるが黒褐色土の割合が6割と多くなる層からなり、しっかりと詰まっている。ただし、P9は拡張後のカマドの真下にあたり、上記の覆土の中間に黄褐色の粘土ブロックの巨大な塊が詰められている。カマドの構築位置を見据えての埋戻しをしたためだろうか。また、P10では唯一柱痕が確認されている。柱の掘り方下層に暗褐色ベースの黄褐色粘土ブロック混在土の隙間に黒色土が混入する土が充填されており、この土がしまりも強く柱を立てる際の基礎固めのなものである可能性がある。この基礎固め土中に柱痕の黒色軟質土が検出されている。この壁支柱の柱は、おそらく根元で切り取られたのであろう。これら壁支柱はP10以外、全て抜き取られている。では拡張前と拡張後も継続して使用された3本の支柱はというと、P4の拡張後のP8ではP4時点ではなかった底面の段がさらに追加されてこの段下だった箇所は柱圧痕が確認できる。よって、拡張前の柱を一旦抜いて新たに柱を立てたことがわかる。他の2本では確認できないが、抜かれた可能性は否定できないだろう。この堅穴の壁外に、2本のピットが検出されている。P31とP32である。径が25～30cmで深さが10cm程度のものであり、壁に平行して並ぶことから、この堅穴に伴うものではないかと考えている。しかし、SI69Bの拡張後のように対する壁外にきちんと並ぶピットは検出されなかった。ただ、P23やP20あたりが相対するピットとなる可能性はあるものの、確実性はない。このP23・P20は拡張後の掘り方で埋め戻されていた。

〈掘り方土坑〉この建物(SI69A)と拡張後の建物(SI69B)両者の掘り方土坑について、状況を述べたいと思う。拡張後の床下調査によって検出された掘り方土坑は、大型のもの(掘り方土坑1)と、この南西側に集中して小規模なものが分布している。これらの掘り方土坑の覆土は大きく捉えて3パターンに分けることができ、パターンに含まれない特徴をもつものもある。1つ目は、黄褐色土をメインとしたc層中心の覆土をもつタイプ、掘り方土坑1・2・3が挙げられる。2つ目は黒褐色土をメインとしたe層中心の覆土をもつタイプで、掘り方土坑4・P29である。3つ目は土器を多く含むd層を中心とした覆土をもつタイプであり、P16・17・18である。P17やP18は拡張後の床を弱がし掘り方掘削時に検出されており、拡張前の建物に伴うものと思われる。また、P15からは土器・焼土・炭化物が多量に含まれていることから、もしかすると拡張後建物と同時に機能するような性格の土坑、灰溜めピットであった可能性がある。またP17やP29からは多量の焼土が検出されており、カマドに伴って機能していたと考えてもおかしくない質のものであって、拡張前の建物と同時に機能していた可能性がある。そうならば、拡張前の堅穴建物がコーナーカマドであった可能性は低くなるわけで、側壁に垂直に取り付くタイプのものであろうという考えと一致する。また、P16には炭が非常に多く含まれている。

34. SI70

〈立地・規模・形態〉この建物は、B地区北寄り端々39Grの旧地形鞍部に立地、SI68とSI72に挟まれた中間に位置する。北側が完全に削られ、堅穴のおそらく3/4が消失、柱穴も検出されていない。この堅穴規模の傾向から、柱穴が伴っていたとしても壁外となるであろうし、壁外とすれば、検出された右壁(北壁)の横で見つかったもいはいずのものである。柱穴の検出されないタイプの建物である可能性は高いと言えようか。建物の規模は、横

が300cm、縦は残存長で180cm、推定しても堅穴面積は15㎡以下の小規模な堅穴となるだろう。カマドは西隣壁に付設する対角線上的に焚口が取り付くタイプである。この建物の堅穴主軸は、N-145°-Wである。壁高は8～14cmを測る。

〈カマドと堅穴内施設〉カマドは削平をかわらうじて免れている状況であった。建物主軸右手の壁隅コーナーに付設される逆U字状プランをもつ無煙道型のカマドである。カマド規模は奥壁からソデ焚口側末端までの長さ100cm、幅外寸94cm、焚口幅が内寸で40cm、ソデ幅16～30cmである。ソデ幅は、奥壁が最も狭く16cmであった。焚口の被熱焼結層のすぐ奥に支脚抜き取りビットが検出されている。カマド床は貼床土に粘土ブロックが分布する。床は焚口から奥壁まで傾斜角4～5度、非常に緩やかに保って奥壁までゆく。側壁から奥壁の幅が16～20cm、側壁手前に粘土で奥壁を改めて構築している。また、構築順は、床を貼った後に、奥壁が取り付けられている。ということは、ソデも共に構築されたはずなので、床を成形後ソデ・奥壁を取り付けていると思われる。カマドの貼床は、最大厚5cm程度の薄いものである。カマド崩壊上は、カマド手前の削平付近まで及んでいる。手前に向かって壊された可能性があろう。また、カマドの左手には灰溜めビットと名付けた土塊状のものが検出されており、カマドソデ粘土（ソデ崩壊土）やカマド土器が多量に廃棄されている。カマド使用と同時に機能し、カマド廃棄時に土器やソデを廃棄したのだろう。

〈覆土堆積、遺物出土〉覆土堆積では、覆土の中心が1層・2層であるものの、ほぼ同一層に近い一括土である。3層・4層は、カマド付近の土、要するにカマド崩壊土である。このような土が床直上でみられ、この上に被って一括土層が乗っている。出土遺物は総数で、須恵器食器具7点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具58点と少ない。これらの遺物から、建物の時期はⅡ2期と判断される。

〈床の状況と掘り方〉床は、検出された部分では、全面を貼床が施されており、カマド手前では硬化も確認している。貼床は薄く2cmから最大でも5cm、堅穴掘削後、床面を微調整しただけといった印象の非常に薄いものである。検出されている床面は、中央の硬化部分が若干窪むが、ほぼフラットな状態であり、また、平面図がないのだが、床下には掘り方土坑が1基確認される。この掘り方土坑は全体の1/3がやはり削平されてしまっている。長径120cm、残存短径80cm、土層断面掘り方c層にあたるものである。

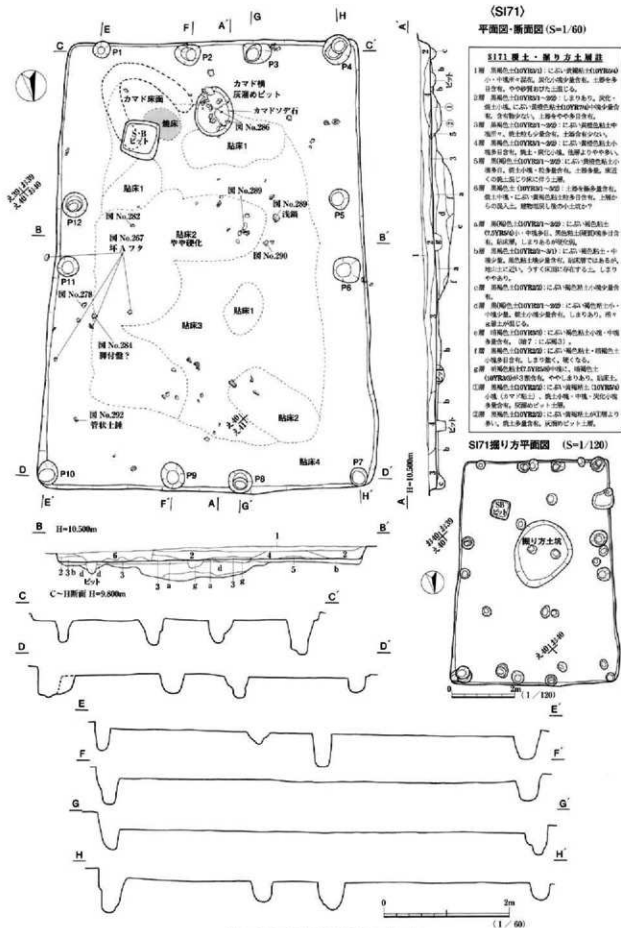
35. SI71

〈立地・規模・形態〉B地区北側の、E40・お39・40Gr、旧地形鞍部に立地する建物である。堅穴主軸は、カマド焚口被熱層に接する短壁を上位としてN-168°-Wとなる。壁間柱をもち、壁ラインはほぼ直線を保つが、全体プランが縦長い台形状を呈す。建物規模は700～710×460～530cmで、面積は349㎡。中型クラスである。

〈柱穴〉柱穴は建物の壁際から検出されている。壁際に4本ずつの柱穴が並び、合計12本で構成されている。柱筋の通りは決して良いとは言えず、どれかが1本ずれている状態である。例えば、南壁のP1は東壁の柱の並びから1本分内側にずれている。また、北壁でのP8、西壁でのP5が僅かにずれている。柱穴規模は、径26～45cm、深さ22～53cmを測る。規模は非常に不均一で、規格外性を欠くものである。これらの柱は、廃絶時に抜き取られて埋め戻されている。また、側壁際に立てられており、柱も細い。壁間溝に伴う支柱を思い起こさせるものであり、周溝を設けないタイプの壁立式構造をもつ堅穴建物と考えるのが妥当ではなかろうか。

〈堅穴内施設、カマド〉カマド焚口被熱と考えられる位置から西側に近接してビットが検出されている。ビット規模は、長径80cm短径60cmの卵形プランを呈するものである。深さは不明だが、底面には粘土が分布し、カマドソデ石が検出されている。カマドに付属する灰溜めビット的な機能をもっていたものと思われる。また、覆土にはカマド粘土・焼土・炭化物が多量に含まれ、建物廃棄時にはカマドを壊して廃棄したのであろう。カマドはソデが完全に崩壊しており、ソデ底部部の土痕跡も確認できていない。カマド貼床が焚口の被熱焼結層から壁端に向う一帯で検出されており、カマド対角線状に設置されていたと思われる。基本的には黒い床である。黒褐色(10YR2/2)粘土を叩き締めており、所々黄色の中ブロックが混じり、硬化はしないがしまりはある状態であり、焼土粒を多量に含むものである。なおこの床のレベルは標高984～987m。

〈覆土堆積、遺物出土〉覆土は、床面に接して土器・焼土粒を多量に含有する薄い層をもち、含有物の多小量により分層可能であるものの、ほぼ同一層と判断可能なものが堆積している状況である。自然堆積層とは考えられず、人為的に埋め戻したものとなっている。最上層には、基本層に砂を含む新しい時代に位置づけられる後世の流込土が堆積したものと考えられる。出土遺物は総数で、須恵器食器具99点、須恵器貯蔵具39点、土師器食器具12点、



第34図 竪穴建物遺構図25 (SI71)

土師器煮炊具 685 点である。また土錘 1 点、カマド石などの石製品 8 点も出土する。覆土からの出土は多く特に上層が目立つ。床面の遺物密集は、カマド被熱周辺に多く主に土師器煮炊具が目立つ。掘り方土坑から出土するものや、カマド付近に煮炊具の時期がⅡ 1～Ⅱ 2 期にまとまっていることから、建物はこれ相当の時期とみてよいただろう。

〈床の状況と掘り方〉この堅穴の床は、本遺跡でよく確認されているような黄褐色粘土塊が多量に含まれる特有の床の状態をもっていない。黒褐色土ベースの床である。また、硬化部分も少なく、硬化と考えてはいるが輪まりがやや強い程度で、極めて硬化する床面が確認できない特徴を持っている。床は、全面貼られているのだが地山に近いものもある。この地山であるが、本遺跡では大きく分けて 3 層から成っている。その最上層にあてはまる地山が黒褐色土地山であり、この建物は、この黒地山面に造られている。よって、床が黒褐色土であるのは当然のことであるだろう。貼床は大きくわけて 4 パターンの特徴がある。貼床 1 は、焼土ブロック、炭化小ブロックの混じりの多い貼床。貼床 2 は、黒褐色土に明褐色粘土の小ブロックが多く混在する土をベースに、硬化する明褐色粘土大ブロックが多量に混じる貼床。貼床 3 は、明褐色粘土ブロックが混在するが多くはなく、焼土や炭化ブロックが所々混じる貼床である。貼床 4 は、側壁周辺の範囲に及ぶもので、地山に近似的な明褐色大塊を所々含有するものである。掘り方には、堅穴の南寄り中央に掘り方土坑が 1 基確認されている。

36. SI72

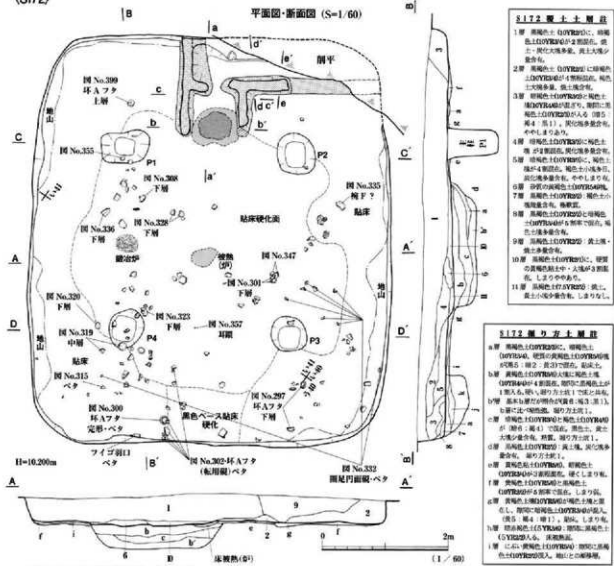
〈立地・規模・形態〉B 地区北端中央い・う 40～42Gr、旧地形の鞍部に立地する建物である。北端崖面に位置するため建物の北壁半分が消失する。これ以外では壁高 43 cm と残存状況は良好である。堅穴は壁の中程が膨らみ気味となっているが、兩九方形プランを呈すものである。規模は 620～640×550～570 cm²、面積 35.3 m²の中型クラスである。北位置に壁中央に突口が位置する L 字型カマドが付設し、中央 4 本主柱、中央に炉を伴う。また、この建物の床面には、鍛冶が跡が検出されている。これについては第 3 節で述べる。建物の主軸は、N-23°E、若干東に頭を振るがほぼ北向きに位置、鍛冶を伴い、工房と住居を兼ねた建物である。

〈柱穴〉中央 4 本主柱の柱穴で方形プランを呈するもの。規模は径が 56～64 cm、深さは P1 のみ 95 cm その他のピットは全て 75 cm である。柱間寸法は、P1・2 間と P3・4 間の東西軸間が 260 cm、P2・3 間と P4・1 間の南北軸間が 280 cm であり、並列に均等配置されている。これらの柱は、建物廃絶時に抜かれて埋め戻されている。抜かれた方向に関しては、P1 は判らないのであるが他の 3 本のピットは西側方向へ抜かれたと思われる。

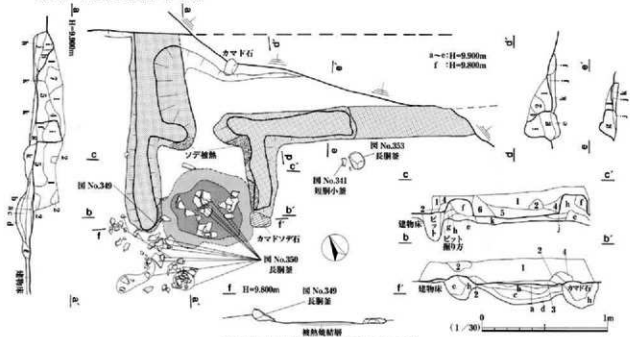
〈カマド〉カマドは、北側壁に付設する L 字型カマドである。カマド全体のうち煙道が側平より 1/2 失われている。ソデ幅は 26～30 cm が主体で、L 字屈曲地点から奥の左ソデに関しては 40 cm にも及ぶ。このように厚い造りで、ソデ基部から直立に取り付けられており、これが突口から奥壁へ向かい 70 cm 地点で西側（右側）へ曲がる。この屈曲地点で、両ソデとも内側へ障壁状に突出を設けている。この障壁部分までのソデには著しい被熱がみられる。床も良く焼けている。突口部分横のソデ末端には右側にソデ石、左側には長胴釜の胴部から口縁部を伏せたものをソデ石として転用している。両者ともソデや床に食い込んで、埋め込まれている。北壁に接する部分にもソデ石を構築している。突口の被熱焼結層は、中央がさらに強く焼けており黄褐色（10YR8/8）、その周りは赤褐色（5YR4/8）を呈す。検出床全面で貼床が検出されており、突口から奥壁までの直線ラインでは床傾斜角を示せないくらい平坦となっており、屈曲した煙道部分までは緩やかに上ってゆく。断面の d ライン地点までは同じ高さを保ち、e ラインでは約 10 cm 高くなっているのである。煙道ソデの奥側は側平のために基部しか残存していないが、煙道ソデでは版築状に構築しているところもある。カマド規模は、横幅外寸 120 cm、突口から奥壁までの縦長 158 cm、L 字屈曲点から排煙口側への残存長 160 cm 推定長 200 cm、突口幅は内寸 70 cm を測る。カマドの覆土からは 4 層・5 層がまとまって平坦な範囲で認められ、一気に天井が崩壊したのではなからうか。これ以外の区域では煮炊具の廃棄が突口周辺で認められる。また、カマド崩壊土はカマド突口手前から堅穴内の床硬化部分の範囲に 4 か所に分散して、それぞれ固まって砂質の強いカマド崩壊土が検出されている。なお、この堅穴の中でのカマドの構築順番は、カマドを造り付けてから堅穴内の床を貼っている。

〈床の状況と床被熱、掘り方〉床は、堅穴中央から左寄りの丁度掘り方土坑 1 が位置する区域一帯が、火皿状を呈して最大 10 cm も窪んでいる。この窪み以外は全体的には平坦さを保ちつつも、床面の状態は凸凹している。床は壁際以外で、黄褐色粘土が主体となる土を中心に貼床される。貼床硬化は、4 本主柱外側からカマドを結ぶ範囲で顕著に認められる。これ以外の貼床でも硬化に至らないが踏み固めたような感じである。

(S172)

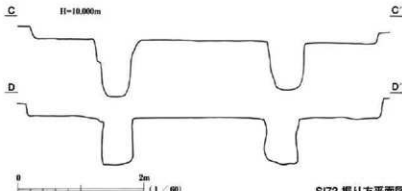


S172カマド平面・断面図 (S=1/30)



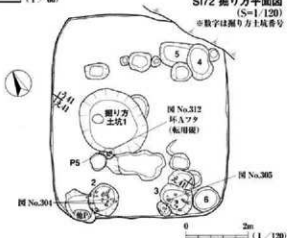
SI72 断面図 (S=1/60)

- SI72 カマド 掘り方土層図**
- 1層 赤褐色土 (GPRNo.29) 褐色土 (GPRNo.40) 黄土・灰土 (GPRNo.41) の層に属し、土質均一。
 - 2層 赤褐色土 (GPRNo.29) ベースに、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 3層 赤褐色土 (GPRNo.29) 褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 4層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 赤褐色土 (GPRNo.41) の層に属し、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 5層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 赤褐色土 (GPRNo.41) の層に属し、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 6層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 7層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 8層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 9層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。



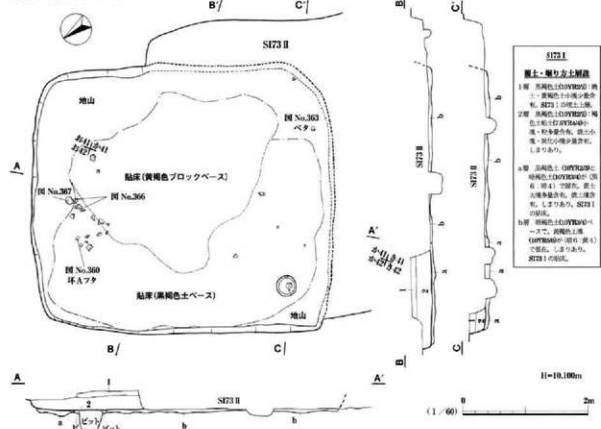
- SI72 カマド 掘り方土層図**
- 1層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 黄土・灰土 (GPRNo.41) の層に属し、土質均一。
 - 2層 赤褐色土 (GPRNo.29) ベースに、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 3層 赤褐色土 (GPRNo.29) 褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 4層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 赤褐色土 (GPRNo.41) の層に属し、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 5層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 赤褐色土 (GPRNo.41) の層に属し、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 6層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 7層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 8層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 9層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。

SI72 掘り方平面図 (S=1/120)
◎数字は掘り方土層番号



(SI73 I)

平面図・断面図 (S=1/60)



- SI73 I**
- 掘り方土層図**
- 1層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 黄土・灰土 (GPRNo.41) の層に属し、土質均一。
 - 2層 赤褐色土 (GPRNo.29) ベースに、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 3層 赤褐色土 (GPRNo.29) 褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 4層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 赤褐色土 (GPRNo.41) の層に属し、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 5層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) 赤褐色土 (GPRNo.41) の層に属し、陶器片・磁器片土 (GPRNo.42) が散在し、土質均一。砂層 (GPRNo.43) が少量存在する。カマドノ底。
 - 6層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 7層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 8層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。
 - 9層 赤褐色土 (GPRNo.29) 赤褐色土 (GPRNo.40) (層厚: 層4) で覆われ、赤褐色土・黄土・灰土の多量混合、やや土質均一。

第 36 図 竪穴建物遺構図 27 (SI72 - SI73 I)

続き、おそらくここがこの竪穴建物の出入口となるのだろう。竪穴中央では、長径42cm短径26cmの不定楕円形状に被熱床面が検出されており、炉であったものと考えられる。掘り方方には、中央左寄りに大型掘り方土坑が1基、壁際を中心に大小の掘り方土坑が検出されている。掘り方土坑は3つのタイプに分けられる。1つ目は、掘り方土坑1の黄色系粘土ベースで黒褐色土と混在する土が主体となるもの。2つ目は、先述の主体土に焼土・炭化物・土器が多量に含まれるもので、掘り方土坑2・3・5・6である。このうち掘り方土坑6では黄色土が多い。3つ目は、黒色系土が主体となっている掘り方土坑4である。

〈覆土堆積、覆土内遺構、遺物出土〉覆土堆積は、自然堆積土ではなく、人為的に埋められた一括埋土層となっている。この竪穴からは多量の遺物が出土している。出土遺物は総数で、須恵器食膳具214点、須恵器貯蔵具71点、土師器食膳具93点、土師器煮炊具2030点、硯などの須恵質土製品15点、土鍾1点、砥石やカマド石などの石製品22点である。床面に張り付く状態で出土した圓足円面硯(図番号332) 坏B蓋(図番号315) 坏A蓋(図番号297・300)、掘り方や掘り方土坑から出土した遺物の時期がⅡ1やⅡ1新期にまとまり、また下層から出土するもの多くが同様の時期に位置づけられるものであり、建物の時期もこれ相当であると考えられる。この建物からは転用硯や特殊遺物が目立つ。床直上(2～3cm上)で出土した坏A蓋(図番号302)、掘り方内からの出土する坏A蓋?(図番号312)、覆土中層からは銅製の耳環(図番号357)が出土している。覆土内に別の遺構が検出されている。SK105は、南壁右手のP3から黒褐色系貼床位置までの範囲に位置するもので、これについては第2節土坑で述べる。その他、覆土内で焼土遺構と考えられる焼土密集が11カ所認められる。この密集の全体範囲はSK105の位置と重複してP3辺りまでの区域である。これらの焼土密集の規模は、長径35cmの楕円形状のものが中心で、その他大きなものでは長径60cm程、小さなものでは10cm程のものを11カ所の内5カ所で確認している。いずれも焼土が多量で、炭化物・炭化材を含有するものもある。これらの被熱は、覆土が黒褐色土ベースであり、このような土での焼結は至らないことが多いので、質としては柔らかいものである。建物埋没されてから後、火を焚くようなことをこの場所で集中して行ったのだろう。

37. SI73 I

〈立地・規模・形態〉B地区北側の中央部分か41～42Gr、旧地形の鞍部に立地する。SI73Ⅱと重複し、SI73ⅠはⅡに切られて造られているため、重複部分上部を失っている。柱穴、カマドは検出されていない。建物の方位は北向き主軸としてN36°E。失われた床のプランは、掘り方で貼床の範囲など確認できている。竪穴規模は480×430cm、壁中央が若干張る方形を呈す。面積が20.6㎡、小型タイプである。壁高は20～33cm。柱もカマドもない竪穴状なので、掘立柱建物の土間的な役割とする例もあることから、調査時から注意していたが、この建物に伴うような掘立柱建物が近くにはなく、単独で機能した竪穴建物であろうと思われる。

〈床の状況、掘り方〉床はSI73Ⅱにより半分が失われている。とはいってもその貼床の範囲を捉えることができている。床上面のおそらく硬化していたであろう部分が削られている状態である。貼床は、黒褐色土と黄褐色土の混在する土で、貼床としての明確さに欠けるほやけたものが中央にあり、そこから西壁側へは黒色土ベース、黄土ブロックが所々混ざる程度のもの。貼床の厚みは4～5cmである。掘り方からは貼床土のみ検出、竪穴を掘削後に床面が平坦になるように貼床土で調整したのであろう。また、掘り方土坑は検出されていない。

〈覆土堆積、建物内遺構、遺物出土〉残存する覆土の状況だが、2層に分層されているものの、含有物の多少等の違いが若干ある程度で、ほぼ同一層と言える。壁縁に自然堆積土は確認されないため、一括埋め戻しと考えられる。また、南西壁際に小ピットが1つ検出されている。この建物からの出土遺物は少なく、総数で、須恵器食膳具22点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具5点、土師器煮炊具116点である。この他カマド石が1点出土している。床面からの出土遺物の時期の主体はⅡ2期であり、この時期の建物として位置づけられよう。

38. SI73Ⅱ

〈立地・規模・形態〉この建物は、SI73Ⅰを切って建てられたものである。また、SI76とも重複しており、SI76の北側に、SI76を切って位置する。この建物の柱跡は、長辺壁側に各2本ずつが並ぶ計4本の主柱をもち、カマドは西南壁側に付設されており、作り替えが確認できている。壁ラインは壁中央が張り気味の、きれいな直線とならないが、おおよそ隅丸長方形プランとでも言えるだろうか。竪穴規模は510～560×460～480cmを測り、面積は、25.2㎡の中型建物である。主軸はN148°W。北向きとは間逆の南向きの主軸となる。前回報告の竪穴建物分類でI B1類(望月2006)に位置づけられる建物である。なお、壁高は最大30cmを測る。

(柱穴) 柱穴は、長辺壁である東西壁沿いに各々2本ずつが配置される。柱穴規模は、径40cm深さ70cmで、全ての柱穴に柱痕が確認される。柱の太さは20cmである。また、底面には柱圧痕が確認できている。柱廻り方埋土はよく突き固められており、P4のみ、下層に他とは違う締まりに欠ける土が充填されている。これらの廻り方埋土は上位に限られ、下位では柱の回りに張り付く程度である。柱を建てる際、ある程度廻り方を掘削した後、柱を打ち込んだと考えられよう。これらの柱穴には当然抜き取り痕はなく、柱は廃絶時に少なくとも土も埋め込まれた上部で切り取られたか、そのまま放置されたと思われる。また、柱の設置時では、竪穴の内側から壁に向かって柱は建てられている。

(カマド) この竪穴建物のカマドは作り替えがなされている。同じ位置で主軸を変え、作り替えたもの。新カマドを“カマドA”、作り替え前の旧カマドを“カマドB”として報告する。

(カマドA) カマドAは、作り替え後の新カマドである。旧カマドは南向きに主軸を取っているのに対し、主軸を西側へ振って旧カマドの手前に造られている。カマドAは対角線上に近い主軸をもちN87°-W。奥壁に当たる部分は、旧カマド埋土で盛り上げられており、この盛土は壁際にそのまま至る。旧カマドを埋めた盛土部分とは、本遺跡でよく見られるカマド崩壊土に近似している。検出された両ソデの状況から盛り土部分が煙道としておらず、手前で逆U字状に奥壁が曲がると考えている。何か棚のようなものとして使っていた可能性もあるように思う。ソデ突口部分の未端では土器を転用しソデ石の代用としている。左ソデ未端には長胴釜、右ソデ未端には坏Aが各々逆位でしっかりと固定されていた。長胴釜は、口縁部・底部が切られたような状態の胴部のみが検出されているが、カマド底の土器廃棄で底部と接合できており、本来は口縁部を除く完形に近い状態であったと考えられる。これが、カマド廃棄時に壊され胴部のみが残存したのだろう。長胴釜の内部には粘土を詰めて固定している。この粘土の突口部がよく被熱している。被熱焼結層は、中央がさらに強く被熱し明褐色(75YR5/6)となっている。カマド床では、貼床を施したかどうかの検出が困難を極め、一部で1層のみ確認している。これにより突口被熱レベルとの復元が可能となり、傾斜角3度程で緩やかに傾斜して、突口より100cm程の位置で立ち上がったと考えている。右ソデ中央の残りは比較的良好であるのだが、断面図をとったラインは基底のみ残存するようなソデの痕跡が検出されている程度である。ソデには旧カマドと同じソデ土が使用されており、旧カマドとの重複部分では両者を分けることはできなかった。規模は、奥壁からソデ未端までの残存長90cm、推定長110cm。幅が外寸で80cm、ソデ幅が最小12cm最大30cm、突口幅が内寸35cmである。

(カマドB) カマドBは、作り替え前の旧カマドである。南壁右手に壁と平行に付設される逆U字状を呈す無煙道型である。カマド主軸はN-139°-W、南向きである。ソデは粘質のある暗褐色土と褐色土の混在土を中心とした土で構築されている。床は全面が貼床されており、床表面には炭・焼土が多量に分布、炭化材がそのまま残っているものもある。規模は、奥壁からソデ未端までの長さ105cm、幅外寸85×95cm、突口幅内寸55cm、ソデ幅18×23cmである。また、断面で突口の被熱焼結層からすぐ奥の位置に支脚抜き取りピットを確認している。

(覆土堆積、遺物出土、床の状況と掘り方) 覆土からカマド周辺ではカマド崩壊土が下層に見られるが、この他は一括に埋められたと認められる覆土層とされている。出土遺物は少なく、総数で須臾器食器56点、須臾器貯蔵具22点、土師器食器5点、土師器煮炊具347点である。その他、土師土製品として土師が1点、カマド石などの石製品が7点出土している。カマドBのソデ転用土器がⅡ2～Ⅱ3期に当たり、床面から出土する坏AもⅡ2期、重複するSI73Ⅰの時期も考慮し、この建物の時期はⅡ2期とみてよいと考えられる。カマドAを埋めた土から浅溝(図番号384)が出土しており、カマドの作り替えについての時期差は見られない。

(床の状況と掘り方) 床は、西壁柱穴間の極稀かな部分を除く全面に貼床されている。貼床は3～6cmの厚さで、掘り方が殆どなく、竪穴掘削の凸凹を補うように床調整したのであろう。床面にはカマドを中心に放射状に広がる床面約半分範囲に硬化が見られ、カマド手前では特に著しく硬化する。この硬化は壁端まで続かないものの南壁付近まで続いている。建物の出入口は南壁中央になろうか。床下には、小規模な掘り方土坑が2基検出されている。掘り方土坑1は、深さ8～22cmの底面が凹凸状で、覆土は暗褐色土(10YR3/3)5割に黄褐色土(10YR5/6)大ブロック3割が混在し隙間に黒褐色土(10YR2/3)2割が混入するもの。掘り方土坑2は、深さ20cmの底面を平坦に呈す。覆土は2層からなる。下層は、黄褐色土(10YR5/6)ブロック4割に暗褐色土(10YR2/3)4割と混在し、隙間に黒褐色土が2割埋まるやや粘性・締まりのある土。上層は黒褐色土(10YR2/3)ベースに黄褐色土小ブロックを少量含有する締まりのある土である。掘り方土坑1・2とも違う質の土が入れられている。

(S173 II)

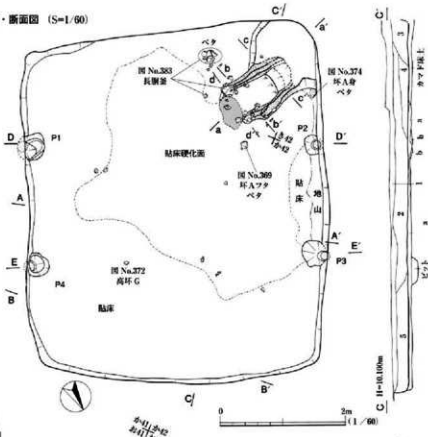
S173 I 掘り方土層構造

- 1層 黄褐色土 (GY302) 中に、褐色色粘土 (GY304)・黄砂 (小～大塊)・黄土小塊少量含有。掘り方土層構造。
- 2層 黄褐色土 (GY302) 中褐色。同前同。
- 3層 黄褐色土 (GY302) 中に、黄褐色土 (GY304) 粘土小塊・中塊少量含有。黄砂 (小～大塊)・黄土小塊少量含有。黄砂 (小～大塊)・黄土小塊少量含有。掘り方土層構造。
- 4層 黄褐色土 (GY302) 中に、黄褐色土 (GY304) カマドノアツキ土層・中塊少量含有。掘り方土層構造。
- 5層 黄褐色土 (GY302) 中に、黄褐色土 (GY304) カマドノアツキ土層・中塊少量含有。掘り方土層構造。
- 6層 黄褐色土 (GY302) 中に、黄褐色土 (GY304) カマドノアツキ土層・中塊少量含有。掘り方土層構造。

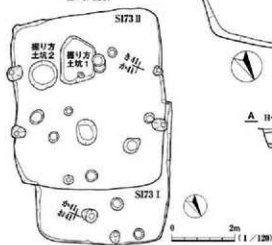
a層 黄褐色土 (GY302) 中に、黄褐色土 (GY304) カマドノアツキ土層・中塊少量含有。掘り方土層構造。

b層 黄褐色土 (GY302) 中に、黄褐色土 (GY304) カマドノアツキ土層・中塊少量含有。掘り方土層構造。

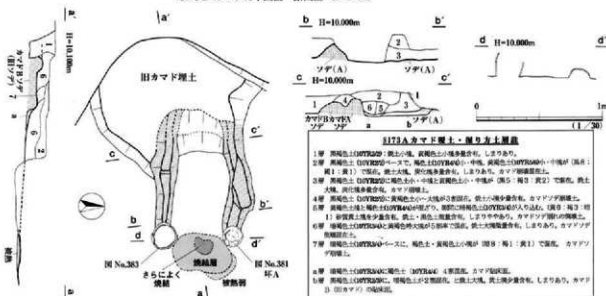
平面図・断面図 (S=1/60)



S173 I-II 掘り方平面図 (S=1/120)



S173 II カマドA平面図・断面図 (S=1/30)



第37図 竪穴建物遺構図 28 (S173 II)

39. SI74

〔**立地・規模・形態**〕B地区北側のき・く42～43Grの旧地形鞍部から西側尾根部へ差し掛かるあたりで、上層削平を受けている区域に位置する建物。SI76の西側に隣接している。建物の北西側に近代擾乱を受け、建物床の標高レベルより40～45cm決られて削られ消失している。また、西壁隅も上層削平を受けて壁が消失している。竪穴規模は730～750×740cm、面積は54.8㎡となる。大型建物である。特大建物としてもよいかもしれない。中央4本主柱、中央に炉を伴う。このような大型建物には必ずカマドが付設するのだが、検出されなかったため、擾乱部分にカマドが位置していたと考えて間違いないだろう。北西壁ラインに重みがあるが、建物プランはほぼ正方形を呈す。建物主軸はN59°W。壁高は12～18cmである。

〔**柱穴**〕中央4本主柱である。柱穴規模は、P1が径76cm深さ56cm、P2が径54cm深さ72cm、P3が径65cm深さ76cm、P4が径60cm深さ60cmである。これらの柱間寸法は、P1・2間とP3・4間が400cm、P2・3間とP4・1間が330cm、並列に均等配置されている。P1とP3には柱圧痕が残存している。P1は部分的にしか残っていない。掘り方底部では「柱のあたり」が残存、この径は22cmであった。建物廃絶時に柱は全て抜き取られ埋め戻されている。抜き取りは横軸を基準に内側方向へ抜かれている。また、柱設置については掘り方の段掘りとスロープから、建物中心方向から壁方向へ向かって柱を建てているものと判断する。

〔**覆土堆積、覆土内遺構、遺物出土**〕覆土では、壁崩れと考えられる土が壁際で若干認められ、4分層される人為的な性質の土が充填、所々軟質を示す。覆土内には、P1とP4の中間に上層土坑が1基確認されている。規模は不明だが掘り込みをもち、覆土には白色粘土が混在、この建物の時期とは異なるIV期の遺物が多く出土する。竪穴からの出土遺物は、P4周辺から南東壁中央辺りまでの一帯で多く出土するが、相対量としては少ない。床面張り付き状態で検出されている遺物は1点もなく、全て床面より5cm以内で浮いて、必ず層層が入る状態で検出されている。出土遺物は総数で、須器器食膳具53点、須器貯蔵具12点、土師器食膳具21点、土師器炊具335点、カマド石などの石製品が22点である。時期はほぼI1期にまとまる。建物もこの時期になるだろう。

〔**床の状況、中央被熱炉**〕床は、中央がフラットで、北東壁からP2・3を結ぶラインにかけ4cm程度窪む。これに対し、P3から南西・南東壁にかけての黒褐色土ベースで貼床されている区域あたりが、4cm程度が高い。床面には、粘土ブロックの分布が確認されている。この粘土ブロックの位置は図面上で、P1の左上部分、P3すぐ上部分、P4の上部分と左下壁との中間位の部分であり、黄褐色粘土がかたまて出土する。また、図面上でP1左下から壁間の中間と、カマドに相対する壁中央で、まとまった白色粘土と焼土分布が確認されている。床は、全体の3/4に貼床が施されている。この他は地山床であり、北東壁・南東根半分からP2とP3を結ぶ範囲で黒色系地山床、P1の西側で黄褐色系地山床、南西・南東壁の間でも地山床を確認している。4本主柱で囲まれた中央の非常にランダムな範囲で、床の著しい硬化が見られる。また、P1の西側から壁にかけての範囲と、中央硬化からP2・3を結ぶ小範囲でも硬化が認められる。これらの中で最も硬化するのが中央部分であり、他2カ所は中央硬化には及ばない。中央の炉は、貼床が被熱しているもので、2カ所検出している。

〔**掘り方、掘り方土坑**〕貼床は薄く、2cmが主体で最大でも4cmの厚さである。この貼床の下には、掘り方土が薄く検出されており、竪穴掘削から貼床構築までに1度調整を行っている。掘り方土坑はP1・4を中心とする位置に集中して3基確認されている。P1にかかる大型が1基、この他は小規模なものである。掘り方土坑1は、床を剥がしてからの深さで15cm程度の浅いものである。この中には黄褐色土(10YR5/6)ブロックをベースに暗褐色土(10YR3/4)が混在し隙間に黒褐色土(10YR2/3)が混入する粘性も粘りもある土で充填されている。掘り方土坑3は、不定形プランを呈し、P4側の底面が有段となっている。深さ2～5cm、一段下がって10cm程度の掘り方土坑1同様浅いもので、掘り方土坑1の覆土と似ているものである。

40. SI75

〔**立地・規模・形態**〕B地区北側中央、旧地形鞍部にあたる、く40Grに立地する。この建物は竪穴屋外の6本主柱で、煙道が竪穴外へ直結する通常小型カマドが付設されるもの。竪穴の規模は、380～400×290～320cm、竪穴面積は11.9㎡である。竪穴外の主柱までの規模は、600×400cmを測り、建物規模は24㎡となる。小型から中型クラスの建物になる。建物主軸はN50°W。

〔**柱穴**〕柱穴は、竪穴の短辺壁側の竪穴外に各々3本ずつ配置する。竪穴プラン・竪穴軸に対し、柱穴がずれているように思われるだろうが、意外と並びは良い。ほぼ長方形に収まる並びをしている。ただし、P6のみ1本分内側

にずれてしまうのだが、柱筋も通っており、P6を例外にすれば、長軸が600cm、短軸が400cmと、規格がしっかりする。柱間寸法は、カマド側の間隔は180cmと揃うが、カマドと反対側の柱間寸法はばらつく。P6・5間が162cm、P5・4間が118cmである。柱穴規模は、P6のみ径65cm、他5本は径40cm、深さは22～40cmで旧地形に添っている深さをもつ。

〈カマド〉カマドは、壁中央に付設される通常小型カマドで、壁穴外へ煙道が延びるタイプの戸外直結煙道型である。煙道長22cmで建物の柱穴までに至らない。壁穴から柱までの間がどのような構造になっていたのだろうか。本来もっと長かったものが削平のため上層部分が消失してしまったのだろうか。両ソデは真っ直ぐ壁に取り付き、ソデ手前末端にはカマド石が固定されている。ソデ土には、右ソデに粘土を混ぜたにふい黄褐色土が主体、左ソデには黒褐色土と粘土を混ぜた土を主に使用しており、両ソデで構築土が流れている。床は笑口焼結層から10度の傾斜角を保って奥壁に至り、壁で立ち上がり、壁外の煙道は25度の傾斜角をもつ。床面には奥壁近くを除き全面が貼床される。焼粘土を多量に混在する締まりの強いものである。笑口焼結層の裏に支脚が残存する。支脚は、頂部径で短径6.4cm長径7.3cm、底部径で短径7.8cm長径10.5cm、長さ19.4cm、幅が頂部6cm底部11cmを測る。頂部先端にはススが付着、底部片面は被熱し赤化する。重量は200g、材質は凝灰岩で被熱により脆くなっている。なお、この支脚地点から奥の床では、奥壁手前10cmまでの範囲に被熱が認められる。カマド規格は、屋外煙道端からソデ笑口末端までの長さ95cm、奥壁からソデ末端までの長さ73cm、幅外寸66cm、笑口幅内寸46cm、ソデ幅20～24cmで奥壁付近に至っては40cmを測る。煙道では煙道床下に掘り方が確認でき、さらにk層では被熱層が検出されている。この面が1次カマドの可能性をもち、これを埋めて煙道をかさ上げしている可能性がある。カマド廃棄では、支脚の抜き取りはなかったものの、カマド内に釜類カマド外に鍋類を廃棄している。

〈床の状況と掘り方、覆土堆積、遺物出土〉床は、ほぼ全面が貼床され、ほぼフラットな面を呈す。若干中央部分が窪むが、2cm程度のもの。北壁際の一部のみ地山床となっている。貼床は薄く、2cmしかなく、壁穴掘り込み後に床面を水平にするために施されたような印象である。カマド笑口を中心に不定形状に床の硬化が認められる。床には褐色の地山粘土ブロックを中心に貼られた部分と、黒褐色土をベースに硬化する褐色の地山粘土ブロックを混在させた土を貼った部分があり、褐色粘土の床では弱い硬化が認められる。また、床下には掘り方土坑が2基検出されている。いずれも貼床層を除いて10cm程度の深さをもつ浅いものである。覆土は15～20cm残存、壁崩落土が壁際で認められ、その上に1・2層と分層可能なのだが基本として類似土層である一括廃棄土が堆積する。床面の凸凹面も少なく、壁際の崩落土も確認されるので、埋め戻しまでに少し時間が経過しているのかもしれない。出土遺物は総数で、須恵器食器具12点、須恵器貯蔵具7点、土師器食器具7点、土師器煮炊具159点程度である。床に張り付く状態で検出されたのはカマド周辺に限られ、遺構図に図化しているものは全て床からの出土である。時期は1～1・2期にまとまっており、建物の時期も同様と考えられる。

41. SI76

〈立地・形態・規模〉B地区北側中央 北緯41°42'Gr、旧地形鞍部にあたる位置に立地する。重複するSI73 IIはSI76の後に建てられたものであり、SI76の方が時期は古いものとなる。本建物は、中央に4本主柱をもち、基本的に壁は通常の落ち込みを有するのだが、北東壁・東壁一部では壁周溝と支柱をもつ。北西壁中央には左へ曲がるL字型カマドが付設、カマド右脇に2基のビット、中央にはビットと被熱床炉を伴う。壁穴プランは隅丸方形型を呈す南壁、壁周溝・支柱を伴う壁ではP9あたりで角を持ち、北壁にも隅丸とは言えない直線的な面が確認できて、全体として多角形のプランを呈している。壁穴規模は、縦610～670cm壁周溝までを含めると700cm、横630～660cm。面積は40.6㎡で大型建物に位置づけられる。壁穴主軸はN46°-W。壁高は32～50cm。

〈4本柱穴〉中央4本主柱の規模は、掘り方で径70cm、深さ80～100cmである。柱はP2のみ内側に1本分ずれて、これ以外はきちんと配置されている。柱間寸法は、P1・2間とP3・4間の横軸方向では280cm、縦軸方向のP1・4間では300cm、P2・3間ではP2がずれているため290cmを測る。廃絶時に柱は抜き取られているが、下層で「柱のあたり」が残存する。また、4本とも柱圧痕が硬化面として残存する。これらより、柱の太さは20cmであることがわかる。掘り方下底部には、柱の基礎固めと考えられる層を確認している。廃絶時の柱抜き取りは横軸を中心として、P2～4は外側である南西壁方向へ、P1のみ内側方向である北東壁方向へ抜かれている。柱の深さは、P1とP4が同じ深さであるのに対し、P2は15cm、P3は10cm深くっており、一定ではない。

《壁周溝・支柱》壁周溝と支柱は、建物全体の約半周するように北東壁と南東壁半分にて検出している。支柱は全部で5本。支柱穴の規模は、径22～45cmで中柱が細め、深さ50～85cmである。柱間寸法はP7・8間120cm、P8・9間140cm、P9・10間とP10・11間が250cmである。これら支柱の柱通りは悪い。隅柱でもあるP7・P9・P10を通すと、中柱であるP8・P10がずれる。P7・P8には柱痕が残存しており、太さは12・3cm程であった。他3本は、建物廃絶時に抜かれ埋められている。抜かれた方向はP9が壁周溝に平行に南方方向へ、P10が壁周溝に平行に南東方向へ、P11が壁内穴カマド方向と思われる。また、支柱の設置段階においては、段場やスロープから見ても、多方向から設置したようだ。これら支柱の設置・廃絶時には、規則性もなく監督性もないと言えよう。なお、P10の覆土で黒褐色土上面が被熱しており、この上層は、黄褐色土粘土ベースに暗褐色土が混在し隙間に黒色土が混入する締まりの強い土で、再度埋められている。被熱層は、上面から10cm下がるレベルで2～3cmに渡っていた。壁周溝の規模は、幅12～16cmが主体で南東壁においては22cmの幅をもつところもある。深さは床のレベルから10～15cmである。壁周溝覆土では壁側に軟質の黒褐色土、床面側に褐色土と暗褐色土が混在する締まりのある土が確認できている。この側壁側の軟質黒褐色土が、「板」としての痕跡である可能性がある。

《建物の一部増改築》北東壁・東壁一部の壁周溝と支柱は、前述報告でのSI54やSI69と同様の構造である。さて、プラン的にこの検出壁以外の壁では隅丸方形である。この隅丸方形のラインを復元するように線を引いてみると、検出された壁周溝と支柱は、このラインを支柱が一本分外側へ飛び出すように位置している。以上を踏まえ、またこの部分が建物の一部に限られることから、建物の増改築が行われたものと考えられる。

《カマド》カマドは、北西壁の中央やや左手に焚口、煙道が左手に曲がるL字型カマドである。右ソデは直線的に奥壁に取り付き、左ソデが焚口末端から82cm地点で左に屈曲、この屈曲部内側に20cmの障壁部が設けられている。屈曲地点から煙道ソデは壁に若干窄まりながら排煙部に至る。そして煙道は段をもって壁外へへと続く。ソデには被熱が3カ所確認されている。障壁の焚口側は、上層部分が赤褐色（5YR4/8）、中層部分が暗赤褐色（5YR3/4）と褐色（7.5YR4/6）をし、焚口付近の両ソデ内側の被熱は赤褐色（5YR4/6）を呈す。床は、焚口の被熱焼結層で緩傾斜をもち、被熱焼結が切れる地点で傾斜転換し平坦となる。これが50cm程続いた地点で、傾斜角14度で一段上がり、平坦面が40cm程続く。更にその後は、19度の傾斜角となる。奥壁の床角度は、奥壁に近い部分でn層が検出され、この層の上面がうすうすと被熱していたことで判断した。しかし、この角度では煙道床の角度と繋がらない。一部分だけ盛り上げていたのかとも思うが不自然な印象だ。また、c層は床自体も熱を受けた痕跡が顕著に表面に現れ焼土が極多量に含有するとともに表面が固くなるというもので、被熱焼結層の奥から障壁を越える範囲に広がる層であることが確認された。このレベルが本来の床面である可能性は高い。n層はc層よりも上層になり、このn層上面の被熱層の更に上層に崩落天井土が確認できている。要するに、n・o層は埋土とは言い難いのである。カマド規模は、焚口側ソデ末端から奥壁までの長さ158cm、幅外寸103cm、焚口内寸幅60cm、煙道が屈曲する外側地点から建物壁までの長さ205cm、建物外の排煙部末端までの長さで216cm。煙道幅が、屈曲地点で外寸80cm、排煙部分の壁近くで外寸60cm、排煙部で外寸30cmである。ソデ幅は25cm、基底部のみ残存する部分については30cmに至る部分もあるが、25cmが主体である。

《カマド崩壊土の分布・カマド破壊の状況》調査時の掘削段階にて、手前では左ソデ幅の2/3を被る位置と、右ソデ全体を被る位置から障壁部まで、奥では奥壁までの範囲で、逆U字状にカマドの天井土を検出している。天井がこの部分だけ一気に落ちたものと考えている。この他、カマド崩壊土は、建物をセクションラインで区切った区画のカマドを含む1/4の区画内で、柱穴が覆い被るように逆V字状に極めて多量に検出されている。この土は覆土上面より10cm下から床面にまで及ぶもので、床やカマドとの境には間層が入っている。また、カマド崩壊土はカマドとは対角となる区画にも点在して廃棄されている。カマド廃棄に伴うカマド破壊については、煙道とカマド焚口から障壁までの範囲は壊し、他は天井がそのまま落ちている。カマドソデ石も取り外されたのち建物内に分散するかの如く捨てられている。建物内のカマドから向かって左壁に3点、カマド煙道際の壁に1点、カマドに相対する壁の左側に3点確認している。カマド石は、焚口に取り付けられたものと考えられ、被熱を受け非常に脆くなった凝灰岩である。被熱の度合いで白色を呈すか赤化している。

《床の状況》床は、北壁隅と南壁隅の2カ所を地山床としており、これ以外は貼床されている。カマド・主柱穴を含み南東壁中央を結ぶ範囲で、床は極めて硬化している。床は地山床と3種類の質の貼り床土で構築されている。床面の状態は、中央の被熱が付近が若干窪み、P2・3を結んだラインより右側も窪むものの4cm程度のものであ

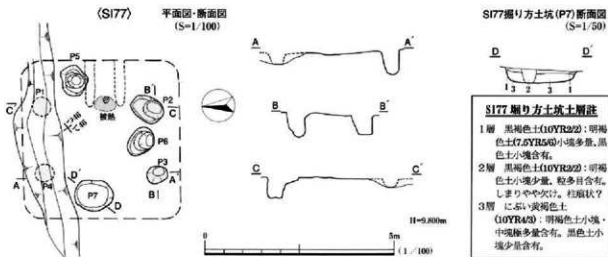
る。またP1・4を結ぶラインより左側は高まりがみられるが6cm程度のものである。殆ど平坦と言っても良いだろう。床面の凸凹も見られない。寝間を特定するならば、P1・4を結ぶラインより左側が可能性をもとうか。また、建物の出入口は、硬化面が狭く南東壁中央になるものと考えられる。

〈中央被熱炉、竪穴内施設〉建物中央にはP5とした径60cm深さ22cmの円形プランを呈する土坑状の穴が検出されている。P5と貼床をまたぎ不定格円の被熱を確認している。被熱は、貼床部分では貼床が焼け、P5では上層が焼けている状態である。被熱がP5に及んでいることから建物の廃絶時・最終段階においてはピットは埋まり、中央炉として機能したと考えられる。カマドの右手には、2つの不定格円プランのP6と灰溜めピットと名付けた土坑状の穴が確認されている。P6は3層の覆土から成るもので、焼土や炭が多量に含有するもの。カマドに伴う灰溜めの機能をもったのであろう。灰溜めピットは、床面でのプラン検出ができなかったもので、掘り方掘削時に検出している。土器を多量に含み、覆土は上下2層からなるもので、上層は黒褐色土(10YR2/3)と暗褐色土(10YR3/4)が5割率で混在し焼土小ブロックや黄褐色土層ブロックが多量に含まれる締まりのないもの。下層は暗褐色土(10YR3/4)ベースで黒色土ブロックを少量含む粘性のあるものである。カマドの脇にあるので、やはりこれもカマドとともに機能するようのものであったと考えたい。ただ、2つのピットが同時に機能していたのではなくて、先に灰溜めピットを使い、これを埋めた後にP6を使用したのではないかと考えている。また、灰溜めピットは、当初SB89のP6と考えていた。よって、土器の取り上げはSB89のP6で取り上げてしまっているが、この竪穴建物からの出土のものである。

〈掘り方、掘り方土坑〉貼床は厚さ4cm程、この貼床下からは掘り方土坑やピットが検出されている。掘り方土坑は検出されず、貼床は竪穴掘削底面を補う形で施されたものと考えられる。また、床面レベルで掘り方土坑プランが確認できたものもあり、貼床土を最上層にもたないものもある。床を切って掘り方土坑を造ったのだろうか、それとも構築時に掘り方土坑を埋めることと床構築を同時に行ったのであろうか。掘り方土坑は、主柱穴縦軸間に大型のものがそれぞれ1基ずつ配置され、主柱穴P1・3・4を結ぶ三角範囲を中心として小規模なものが多く配置する。掘り方土坑が多いので掘り方土坑4まで掘り方土坑ナンバーで名付けて他はピットナンバーを付けた。掘り方土坑の覆土は大きく分けて3種類に分けられる。1つ目は、黒褐色土、黄褐色土ブロック、暗褐色ブロック、褐色土ブロックなどが混在して斑状を呈するタイプ。2つ目は、上記のような斑状だがブロックが小単位で、上層に黒褐色土層をもつもの。3つ目は、黒褐色土のみが充填されているもの。グルーピングとして、1つ目は掘り方土坑1・2・P16・P17。2つ目は、掘り方土坑3。3つ目では、掘り方土坑4・P21・P22。なお、P13からは坏A蓋の転用硯(図番号420)が出土している。

〈床下検出の埋め戻しピット〉床下のP12、P18は掘り方土坑とは様相が違っている。P12は暗褐色土上に焼土が極多量に混在する覆土をもつ、深さ35cmのもの。上面レベルが床レベルよりも5cm程下がった位置で検出されている。覆土からカマドに関連するものであった可能性があり、建物廃絶時には埋められて床として機能していたと思われる。P18は、貼床下のレベルから深さ20cm程度のもので、上層に焼土ブロックを極多量に含有する黒褐色土、中層は暗赤褐色土ベースに暗褐色土と混在して黄褐色土ブロックが含有する焼土層、下層には赤褐色土特大ブロックが集中し隙間に暗褐色土が入り炭化物も含む層からなるもの。いかにも灰溜めピットの土層を呈している。おそらく以前は灰溜めとして機能し、建物廃絶時には埋まっていたと思われるものである。次に、P12やP18のような確実性は薄い、可能性が伺えるピットが3つある。P14は深さ20cm程度で、土器が多量に廃棄されている。覆土には、黄褐色土大ブロック6割に暗褐色土3割と黒褐色土1割が混在する中層、下層には7cm程の焼土層を確認できている。ここまでは、完全に灰溜め機能をもつと理解できるだろう。ただ、最上層は周囲と同じ貼床土で充填されているため、掘り方の段階のものなのか、建物機能時のものなのか判断しかねるものである。P19・20についても埋め戻されたものである可能性がある。P19・20はP1のすぐ左脇、煙道手前に位置するもので、P20がP19を切って掘り込まれているもの。これらの覆土は、P20は暗褐色土ベースで、褐色土・黒色土・黄褐色土ブロック・焼土・炭化物が非常に多量に含有する。P21はP20と同質の覆土をもつが焼土の割合がP20よりも多い。なお、P20は深さ15～18cm、P19は深さ15cm程である。

〈覆土堆積、覆土内遺構〉覆土ではカマド付近で大量のカマド崩壊土が認められ、これ以外では、含有する黄褐色土ブロックの大小と量による違いで2層層されているが、同一層と判断可能で、自然堆積層とは異なり、一括埋土と考えられるもの。また、南東壁の周溝の無い方の壁、掘削面上では下壁の左側にあたるところの丁度壁際の



第43図 竈穴建物遺構図34 (SI77)

中間地点で、覆土内被熱が確認されている。床面から30cm上の1・2層間に位置する。

〈遺物出土〉出土遺物の総量は、須恵器食器具190点、須恵器貯蔵具67点、土師器食器具51点、土師器煮炊具1,205点。床面よりも覆土の方が多く土器が出土している。床面、カマド廃棄に伴うもの、床下や掘り方土坑から出土する土器の時期は、ほぼⅡ1～Ⅱ2期にまとまり、P6出土の浅鍋(SB89 図番号77)もⅡ2期にあたるものである。この建物の時期は、Ⅱ1～Ⅱ2期でよいだろう。

42. SI77

〈立地・推定規模・形態・状況〉C地区北側のB地区との境、て46～47Grの削平区域に位置する。この建物は、柱穴と考えられるピットとカマド地山被熱のみが検出されている。地山被熱の東側奥には支脚抜き取りピットが検出されている。P1・P2については削平されているとは言えず、主柱とするには無理があるのかもしれない。ちなみに、P5は深さ20cmしかなく、P6は深さ83cmと非常に良好なのだが、対応するものがない。また、P7は当初SK107として扱っていたが、この竈穴の掘り方土坑とするのが妥当と考え変更している。設定した主柱穴が合っれば、主軸はN-90°E。推定復元面積20㎡程の小型建物となるだろうか。出土遺物は、須恵器食器具でⅡ1・2期に相当する坏G蓋の口縁部破片2点、土師器煮炊具10点、土製支脚1点が出土する。

43. SI78

〈立地・規模・形態〉C地区北側のB地区との境で、て44・45Grと45Grに位置する。近代に農道として使用されていた部分のみ残存し、建物の北東部分約1/2は削平により柱穴以外完全に消失している。農道部分も削平を受けていると考えられ、残存壁高は1～4cmしかなく、かろうじて残存するといった状況。中央4本主柱、おそらく壁付設の中央カマド、竈穴中央に被熱床をもつ建物である。主軸はN-48°W。竈穴規模は、推定で620×640cm程、推定面積40㎡程の大型建物になるだろうと思われる。

〈主柱穴〉中央4本主柱である。柱穴規模は、径50cm深さ80cm。柱間寸法は大体揃っているのだが、P2のみ外側へずれている。横・縦軸とも285cmである。柱は、建物廃絶時に全て抜かれ埋められている。P2は不明が、他は縦軸方向で壁側へ柱を抜いている。また、柱の設置に関しては掘り方の形状から様々な方向から柱を建てており、統一性はないものと思われる。

〈床の状況、掘り方〉北西側は、削平により床が削られ地山が露出している。カマドも地山被熱面のみが検出された。被熱面の両側に見られる窪みはカマド石の取り外し東路の可能性があるが、この建物規模にしては、笑口幅が非常に狭くなってしまいますので、この窪みはこの建物には関係ないのかもしれない。残存する貼床は薄く、厚さ4cm程度、最大8cmである。硬化面はP4・3を結んだ一帯に確認され、建物中央には床被熱が検出されている。掘り方には掘り方土坑が3基確認できる。掘り方土坑1は壁際に位置し、深さ15cm以内で細長く、底面が若干凸凹するもの。掘り方土坑2も細長く、底面が段を持ったり凸凹するもので、深さは20cm程度である。

〔覆土堆積、遺物出土〕 覆土はかろうじて検出できているといった状況である。当然遺物も少ない。出土総数は須恵器食膳具6点、須恵器貯蔵具5点、土師器煮炊具が47点である。P3からⅡ2期の坏A蓋の出土する他、ハケ調整の土師器長胴釜がⅠ・Ⅱ期、ロクロ成形の長胴釜がⅣ期と、時期の異なる遺物が出土している。大型建物としてはⅣ期に下るものが本遺跡ではない傾向があるため、少なくともⅡ2期までの建物とみてよいだろう。

44. SI79

〔立地・規模・形態〕 SI79南側に位置し、SI78と同様の削平状態で、建物の3/4は主柱穴以外完全に消失している。残存する部分も削平を受けており、残存壁高は4cm、最大でも8cmしかない。カマドは削平部分に付設していたようであり検出されていない。4本主柱構造の建物であり、主軸はカマドの位置を想定して、N-67°-W または N-157°-W。建物規模は460×推定530cm。推定面積24㎡程の、小型から中型規模の建物である。

〔主柱穴〕 4本主柱である。P1のみ完全削平を免れ、他は柱の下底部分8～15cmが検出された状況である。P1の柱穴規模は、径60～70cm深さ75cm、全ての柱の下底中央が窪み形となっている。覆土の最下底層に基礎固め土が残存する。柱の並びはP3が外側にずれているが、他の3本は柱筋も通っており柱間寸法も270cmと安定している。P3のために、柱間割りが台形となっている。また、建物廃絶時に柱は全て抜かれ埋め戻されている。

〔床の状況と掘り方、出土遺物〕 検出された床の北側は、削平のため掘り方が若干残る程度、この部分以外では貼床が検出されている。東壁の縁は地山床としている。貼床は薄く3～4cm程度の厚みである。床面では掘り方土坑のプランが見える状態で、大型の掘り方土坑が1基検出されている。出土遺物は、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具17点程度のみと極めて少ない。床面から検出された長胴釜（図番号447）がⅠ・Ⅱ期にあたり、Ⅰ期にあたる須恵器中葉胴部、Ⅰ・Ⅱ期にあたる土師器ハケ釜胴部破片が出土している。

45. SI80

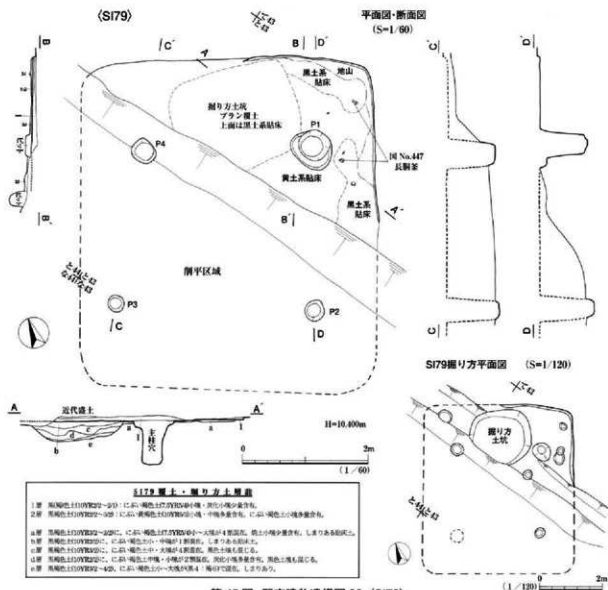
〔立地・規模・形態〕 SI79の東側に位置する建物。建物北側が著しく削平を受けており、約半分が柱穴下底部を除き消失している。この建物は、4本主柱で、L字型カマドが西壁に付設され、中央からずれたP1・4間の中程に被熱床炉をもつ。竪穴規模は、ある程度復元可能であり、縦横ともに推定550cm。30㎡程の面積になろうかと思う。いずれにせよ、中型クラスの建物となるだろう。主軸は、N-69°-W。

〔主柱穴〕 4本主柱である。柱穴規模は径50～70cm、深さはP1が90cm、P4が75cmである。削平されたP2・P3はP4と深さが同一であり、P1のみ深く掘り込まれている。柱の並びは、P4が柱一本分外側にずれ、他3本の柱並びは良好で筋も通っており、P1・2間で250cm、P2・3間で300cmである。建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。柱の設置に関しては、P1は東壁方向から、P4は南壁方向から柱を建てたと思われる。

〔カマド〕 カマドは右ソデや焚口の殆どが削平により消失するが、西壁中央からやや左寄りに焚口が付き、左手に屈曲するL字型カマドである。残存ソデ自体も削平の影響により薄いものである。左ソデ焚口側末端に小ビットが検出されており、ソデ石抜き取り痕かもしれない。焚口から奥壁側へ55cm地点で左に屈曲、この地点に内側に突出する15cmの障壁が存在する。煙道は、排煙付近に向かうに従って窄まってゆく。ソデの基底部は見られず、掘り方も浅い。床は焚口被熱で若干の傾斜を見せているものの、検出された部分に限って言えば排煙部に至るまで平坦であったようだ。床は、黒褐色土ベースで貼床されている。カマド規模は、奥壁側カマドソデ末端までの長さが125cm、幅は推定で外寸110～120cm。煙道ソデ屈曲部分から壁ではない立ち上がり部分までの長さ130cm、煙道幅が屈曲地点で外寸70cm内寸38cm、排煙部分で外寸60cm内寸25cm、ソデ幅28～30cmを測る。また、カマドは竪穴の貼床を施した後に構築されている。

〔床の状況、掘り方〕 床は、残存部分では良好な状態を示している。カマドの対壁側は削平により地山が露出する状態である。P1・4を含む中央では著しく硬化する貼床土が確認されており、黄色系粘土を突き固めて施されたもの。この硬化から壁側の区域では黒色系の土をベースとした貼床で、硬化していない。掘り方土坑の覆土がそのまま床として使用されている部分もある。床自体は2・3cmと薄く、竪穴掘削時に床面調整するため貼床したものであろう。残存床は、硬化部分がやや窪むものの平坦である。掘り方土坑は南壁側に不定形で細長いものと、他小規模なものが検出されている。掘り方土坑Iは深さが20cm程度、これ以外の掘り方土坑は10cm未満の浅いものである。

〔建物内施設、被熱炉床面〕 P1とP4を結ぶ丁度中間位置に、貼床の被熱炉が検出されている。また、西壁側のカマド煙道ソデから壁に添って360cmに至る範囲、面積にすれば約1.3㎡の三角形を呈す区域が確認されている。



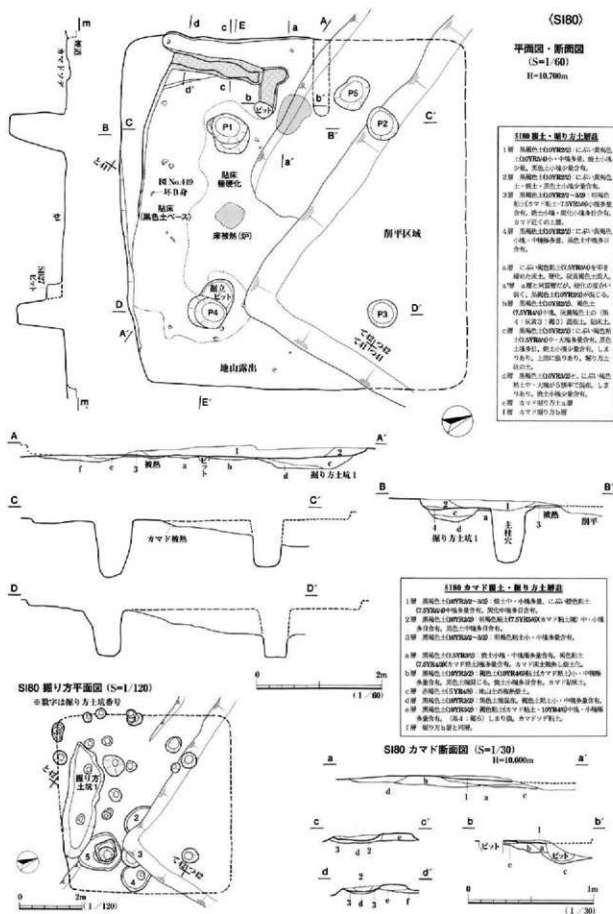
第45図 堅穴建物遺構図36 (SI79)

この部分は床面よりも14cm程高くなっており、地山である。またこの盛り上がり部分から更に西壁の立ち上がり
が確認できることから、欄として機能した可能性があるだろうと考えている。しかし、かなり低いという点、こ
の付近からの完形遺物もないので、自信はない。また、削平されたカマド右ソデの右壁にP5とした小ピットが検
出されている。

〈覆土堆積、遺物出土〉 覆土においては、最大で14cm残存するが、カマド付近土層と壁階で堆積土の他は単層
堆積層であり、一括埋め戻しの可能性がある。出土遺物の総数は、須恵器食膳具20点、須恵器貯蔵具15点、土
師器食膳具11点、土師器炊具197点である。出土する遺物の時期はI期からV1期までと幅広い。実測されて
いない遺物からはI・II期に位置づけられるものが目立つ。主柱穴から時期の新しいものが出土してはいるが、
掘り方土坑からI～II期に位置づけられるものが出土する。本遺跡のこれまでの堅穴の変遷(望月2006)から、
L字型カマドの付設する中型クラスの建物は、II2期までの時期に留まる傾向がある。総じて、建物の時期はII1
～II2期あたりが妥当と考えられる。

46. SI81

〈立地・規模・形態〉C地区中央で・と39・40Gr、旧地形鞍部から西への削平にかかる区域に立地する。西側のカ
マドにかかる部分が深い削平を受け全体の約1/8を消失、上層削平も見られる。更にSK127やSI83に切られて重
複するために壁を2カ所消失している。規模は800×770cm、面積59.2㎡の特大クラスである。中央4本主柱で、



第46図 竪穴建物遺構図37 (SI80)

西壁の中央から右に屈曲するL字型カマドを付設、建物中央に被熱炉を伴う。北壁中央が外側へ影らむラインをもち、東壁は直線的である。検出されている唯一の壁隔から予想すれば、全体的に隅丸方形型のプランになると思われる。主軸は、N-79°-W、西へ向く主軸方位をとっている。

(支柱穴) 4本支柱である。P1が側平により下底部のみの検出。規模は、径65～70cm深さ64～74cm。個別ではP2が64cmでP1もほぼ同様、P3が76cm、P4が74cmであり、旧地形に添った柱の深さとも言えよう。柱の配置は壁の壁に対して柱間軸が平行とならず、左回りにひしげった状態となっている。柱は、柱間軸に並列に均等配置されているものの、P1のみ外側に1本ずれる形となっている。横軸の柱間は380cm、縦軸の柱間は430cmを測る。これらの柱は、建物廃絶時に抜き取られ埋め戻されている。抜き取り方向は、P1が左から右の方向だが、他3本は横軸を中心に内側方向へ抜き取っていると思われる。柱の設置に関しては、スロープや段壇りから横軸を中心として南側から北方向へ掘り立てたものと思われる。

(壁内施設) P4の壁側にP5が検出されている。楕円形状プランを呈すもので覆土は、2層からなる。下底面近くに黒褐色土に、ぶい黄褐色土の小・中ブロックを極多量含有する層、その上層でこの土坑の主体となる黒褐色土にぶい黄褐色土小ブロックが多量および炭化小ブロックが多めに含有する。支柱の埋め戻し土と同一層の特徴を持つものである。焼土や炭化物の含有が目立たないので、貯蔵穴のような機能を果たしていたのだろう。

(カマド) カマドは、西壁中央に焚口が位置し、ソデが右に曲がる煙道をもつL字型カマドである。カマドの約1/2が側平を受け、左ソデは焚口の基底部分が僅かに残っているだけで消失している。焚口に見られる被熱焼結層は、中央が更に強く焼けて黄褐色を呈す状態、この奥に支脚抜き取りビットが検出されている。煙道は西壁に添いながら排煙部に進むに従って窄まっている形態となっている。ソデ煙道には、ぶい褐色粘土に黒褐色土が1割程度混在する土を使用しており、焚口のソデには、暗褐色土にぶい黄褐色の砂質粘土を混在させた土を使用している。また、ソデ下に基底土をしっかりと取り付けている。このカマドのソデは、案外厚みのないものである。床は、焚口付近で平坦を呈し、煙道で壁に対して傾斜を持つ床面となっている。焚口の高さに比べ排煙部付近eラインでは12cm程高くなり、煙道では緩やかな床面傾斜を呈している。床は、検出された部分全面が貼床されている。j層の土層註が抜けてしまったので、ここに記述しておく。j層は、黒褐色土(10YR3/2)に、ぶい黄褐色土小塊が極めて多量に含有する、締まりのあるh層と同質土層である。カマド規模は、奥壁からカマド焚口側のソデ末端までの長さが推定長190cm、幅推定長の外寸で94cm、屈曲地点が不明なのだが、右ソデ外側地点から壁までの煙道ソデ長330cm、排煙部末端まで含めると360cm、煙道幅がcライン付近で外寸70cm、eライン付近で外寸40cmを測る。なお、ソデ厚は14～21cmである。

(覆土堆積、覆土内遺構) 覆土は、壁際に3層や8層のような壁崩落土を確認し、カマド付近でカマド崩壊土を確認している他は、上下2層からなるものの同一層と判断可能な覆土である。廃絶後にしばらく放置されてから埋め戻されたと考えられよう。覆土内からは、SK142とした土層土坑が検出されているが、詳細については、第2節第1項土坑にて述べることにする。土器の実測が今回ないが、次回報告になるだろう。

(遺物出土) 出土遺物の状況では、覆土からの土器が多く上層から下層まで満遍なく出土する。特に中央辺りとカマド煙道前に多目である。床面直上や張り付いて出土するものは少ない。出土遺物は総数で、須恵器食器具169点、土師器食器具140点、須恵器貯蔵具172点、土師器煮炊具2,167点である。この他土製支脚、ロクロ成形の円筒土器、製塩土器などの土製品破片が13点、砥石や台石・カマド石などの石製品が19点出土する。時期としては、床に張り付いて出土するものがI1～I2期やI1新期、掘り方土坑やカマド内から出土するものがI1～I2期と、信憑性の高い遺物が同時期におさまっており、建物の時期はこれと同様であると考えられる。また、カマド煙道の壁隔で完形の坏耳身(図番号456)が下層から出土しており、この建物の構造物の存在を裏付ける出土状況となっている。この他、床に張り付いて金釘が、床より3cm浮いた状態で刀子が出土している。

(床の状況と床被熱炉、掘り方) 検出された床は、全て貼床されている。4本支柱で囲まれた中央部分が著しく硬化、この周辺は硬化していない。貼床は2～4cm程度の薄いもので、中央では地山粘土ブロックを叩き締めており、この周囲は黒土を混ぜた土を貼っている。床面は、ほぼフラットを呈すが、傾向として大抵中央付近が窪むことが多いのに対し、この建物は中央よりも周囲が若干窪んでいる。ただし、P3から壁にかけてのあたりは若干高くもなっている。中央で大小2カ所の貼床被熱炉を検出、特に大きな方は著しく焼結している。掘り方には、P1・4間に大型掘り方土坑が位置し、壁際を中心に小規模なものを配置する。小規模なものには、土器を混在させている

ものが多い。これらの土坑には2つのパターンが見られる。1つ目は、下層に黄土ブロック混在土、上層に黒色系土を覆土にもつ深いもので、掘り方土坑2・3・6である。2つ目は、下層に黄土混在土、上層が粘床土で構成される不整形で浅いものであり、掘り方土坑4・7・8である。掘り方土坑1・10は下層に焼土・炭化物が多量に含まれ、いわば焼土坑的なものと捉えることができ、カマドに伴うような灰溜めピットとして使われていた可能性があらうと考えられる。しかし、建物廃絶時には機能していなかった可能性が高い。

47. SI83

〔**立地・規模・形態**〕 C地区中央で、つ・つ39Gr、SI83の北東壁を切って位置する建物である。柱穴はなく、堅穴に掘り込まれた隅丸長方形形状を呈し、壁コーナーに無煙道型のカマドが取り付け付くものである。規模は、300×320×270～280cm。面積は8.5㎡と、本遺跡の中で最も小型の部類に入る。主軸は、N-43°-W。

〔**カマド**〕 西壁隅コーナーに設置される無煙道型カマドで、壁に付設しない逆U字状プランを呈すタイプである。カマドはソデが僅かに残存して、焚口の弱い被熱を検出している。ソデ基礎土は設けておらず、カマド貼床はソデ周囲にまで及んで施されている。この下層で建物の貼床と同じ土が確認されており、建物貼床を施してからカマド構築したと考えられる。奥壁の更に奥側から壁までの間に、ソデ崩壊土がまとも検出されており、この土中で土製支脚を検出している。更に関しては、焚口付近は平坦で、焚口被熱の奥壁側から15cm程カマド内に入った地点で緩やかな傾斜を呈し、また平坦となって奥壁まで。カマド規模は、奥壁から焚口側ソデの末端までの長さが外寸で70cm、幅が外寸で82cm、ソデ幅が16～24cm、焚口幅が内寸で42cmである。

〔**床の状況と掘り方、覆土堆積**〕 床は、東壁際と南壁際一部が地山床となっており、この他は全て貼床されている。貼床は浅いものであり、基本的に黒褐色土系で黄土粘土との混在土が主体だが、南壁隅区域では一部黄土系の粘土ブロックをそのまま固めて床としている。掘り方はなく、床下土坑や掘り方土坑は見られない。覆土は、カマド崩壊土が覆土中に認められ、これ以外は2層からなるものとなっている。これらの覆土は黒褐色土の色味の違いだけであり、同一層と判断してよいだろう。自然堆積層とは認められない人為的な覆土でもあり、一括で埋め戻されたと考えられるものである。

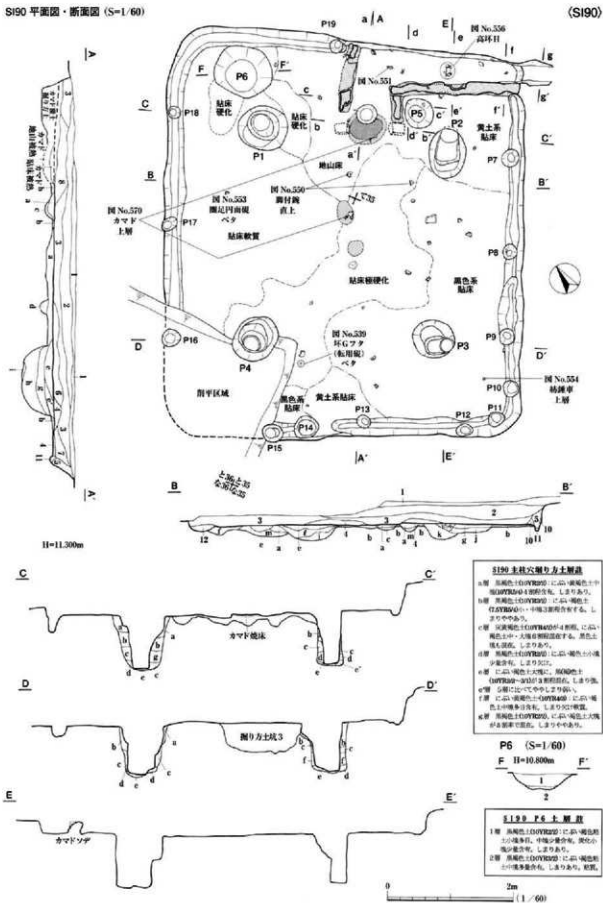
〔**遺物出土**〕 出土遺物は、覆土から出土するものが多く、床に張り付く遺物は少ない。建物内のカマド周辺から多く出土する。須恵器食膳具が148点、土師器食膳具が36点、須恵器貯蔵具が79点、土師器煮炊具が703点、この他土製支脚等の土製品4点、砥石や菅玉などの石製品13点である。時期はⅡ1～Ⅳ期と長期に至る。床に張り付いて検出された平瓶（図版516）や、カマド崩壊土出土である土製支脚は、この建物の廃絶時に伴っていたものと考えられ、この他の時期がⅡ2～Ⅲ期にあたる。またこの他に床に張り付いて出土する坏B身（図番号508）・土師埴F（図番号519）はⅡ2～Ⅲ3期にあたる。床直上で出土するものでもⅡ2～Ⅲ3期が多く、総じてこの建物の時期はⅡ2～Ⅲ3期あたりとみてよいだろうと考えられる。

48. SI84

〔**立地・規模・形態**〕 C地区中央で、つ38Grに位置する。この建物は、当初土坑と考えていたものが、カマド被熱と土器転用支脚及び貼床を検出したことにより、堅穴建物として位置づけたものである。貼床自体薄いもので、掘り方も見られない。黒褐色地山に構築される堅穴建物特有の、顕著な床硬化が検出されないようなタイプである。唯一検出される南側の壁立ち上がりは、プランがかなりの隅丸形を呈している。カマドだけは、コーナーカマドであったことは間違いないと考えられる。柱穴も検出されていない。規模は横長が最大で365cmを測り、縦長を大きく推測したとしても、小型規模の建物になるだろうと思われる。主軸は、N-124°-E。

〔**カマド被熱、遺物出土、覆土堆積**〕 カマド被熱は、顕著に検出されている。この被熱中に、下に石を置いてその上に小型釜を伏せた状態で載せ、床内に埋め込まれた状態で転用支脚が検出されている。出土遺物は総数で、カマド周辺から被熱や床に張り付く状態で煮炊具が中心に出土している。須恵器食膳具が17点、土師器食膳具が2点、須恵器貯蔵具が9点、土師器煮炊具が154点である。この他カマド石1点や匣鉢破片1点が出土する。遺物の時期は幅広く、カマド周辺の土器は張り付いて、時期を判断できるよい資料である。支脚に転用された短脚小釜（図番号531）はⅡ2～Ⅴ1期にあたる。また、この他の煮炊具も、Ⅱ2～Ⅴ1期の時期やⅤ1～Ⅴ2期の時期と2通りに見事に時期が集中している。Ⅴ1～Ⅴ2期のものは上層遺物である。この建物は少なくともⅤ1期には廃絶されたと考えられる。覆土は、壁際で壁崩れ土が確認でき、下底面で床の一部とも考えられる薄い層を確認できる他は、単層覆土である。

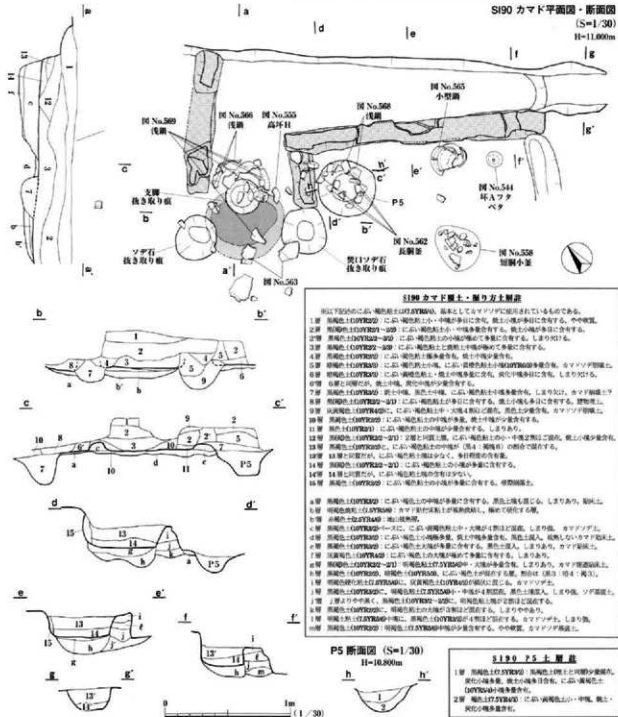
S190 平面図・断面図 (S=1/60)



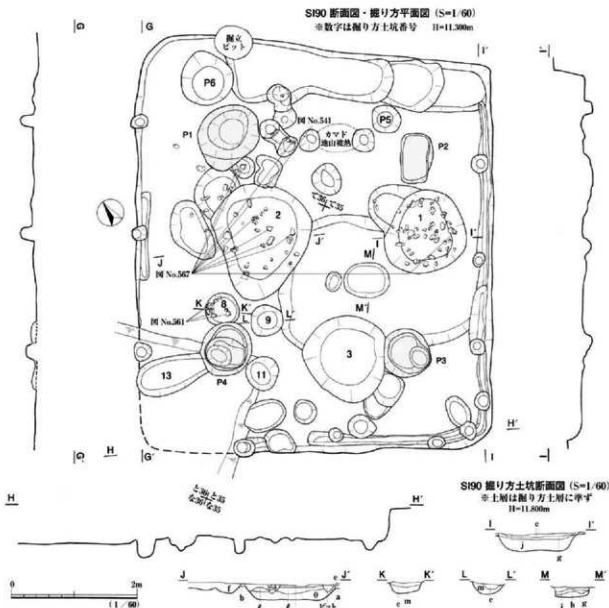
第50図 竪穴建物遺構図41 (S190)

- ### S190 竪穴土層遺構
- 1層 黒褐色土(D197R22) 中・小塊の褐色土・Pに混入したD197R20中塊少量含む。灰化小塊、炭土の塊散在含む。埋土上層の埋没遺構。
 - 2層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土の小塊中多量。炭土・炭化小塊散在含む。埋土上層の埋没遺構。
 - 3層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土の小塊多量。炭化小塊多量含む。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 4層 黒褐色土(D197R22) 褐色土(D197R20) 中・小塊多量含む。炭土・炭化小塊散在。埋没遺構。
 - 5層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊少量含む。埋没遺構。
 - 6層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土の小塊多量含む。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 7層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土(D197R20)少量散在。赤い褐色土の小塊多量含む。埋没遺構。
 - 8層 黒褐色土(D197R22) 褐色土(D197R20)少量散在。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 9層 黒褐色土(D197R22) 褐色土(D197R20)少量散在。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 10層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊少量含む。埋没遺構。
 - 11層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊少量含む。埋没遺構。
 - 12層 黒褐色土(D197R22) 埋没土中・大塊の埋没遺構を含む。褐色土塊少量含む。埋没土層の埋没遺構。

- ### S190 竪穴土層遺構
- 1層 黒褐色土(D197R22) 中・小塊の褐色土・Pに混入したD197R20中塊少量含む。灰化小塊、炭土の塊散在含む。埋土上層の埋没遺構。
 - 2層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊中多量。炭土・炭化小塊散在含む。埋土上層の埋没遺構。
 - 3層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土の小塊中多量。炭土・炭化小塊散在含む。埋土上層の埋没遺構。
 - 4層 黒褐色土(D197R22) 褐色土(D197R20) 中・小塊多量含む。炭土・炭化小塊散在。埋没遺構。
 - 5層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊少量含む。埋没遺構。
 - 6層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土の小塊多量含む。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 7層 黒褐色土(D197R22) に赤い褐色土(D197R20)少量散在。赤い褐色土の小塊多量含む。埋没遺構。
 - 8層 黒褐色土(D197R22) 褐色土(D197R20)少量散在。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 9層 黒褐色土(D197R22) 褐色土(D197R20)少量散在。炭土・炭化小塊多量含む。埋没遺構。
 - 10層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊少量含む。埋没遺構。
 - 11層 黒褐色土(D197R22) 赤い褐色土の小塊少量含む。埋没遺構。
 - 12層 黒褐色土(D197R22) 埋没土中・大塊の埋没遺構を含む。褐色土塊少量含む。埋没土層の埋没遺構。



第51図 竪穴建物遺構図42 (S190)



49. S190

〔立地・規模・形態〕 C 地区で・と 35・36Gr、旧地形鞍部に位置する建物である。西南壁の隅が削平により消失されるが比較的良好な遺存状態を示す建物である。この建物は、カマド付設備のみ重みをもつもの壁は直線的で、全体プランとしては北壁によりやや台形状を呈してはいるが、隅丸形状プランと言ってもよいだろう。4本主柱であり、北壁に右に屈曲するL字型カマドが付設し、壁周溝が廻って壁周溝内に支柱をもつ建物である。A 地区で検出されたS123と同様の構造の、4本主柱と壁支柱で屋根を支える構造である。建物の規模は、620～670×570cm、面積36.8㎡、中型クラスである。壁高は17～36cm。建物主軸は、N-35°-E。

〔主柱穴〕 中央の4本主柱は、いかにもしっかりとした掘り込みをもつ。柱穴規模は、径66～76cm深さが床から86cmである。下底面に柱痕が残存している。柱筋はP3のみ若干東壁側に柱がずれるため柱の中央を通らないのだが、他は柱筋がしっかりと通り、また柱間寸法も横軸間で310cm、縦軸間で350cmと、並列に均等配置されている。柱覆土では、下底部分で柱痕と考えられるような締まりに欠ける黒褐色土が検出されており、この上層に埋土が検出されているため、建物廃絶時に、柱の下底部分のみ切り取られた可能性がある。しかし、柱穴内で果たして本当に切り取ることが可能であったのか疑問も残るため、抜き取り時に柱の根元が腐っており、上部分のみ抜き取ったのではないかと予想している。これらの柱痕土の上層は建物埋土と同じ土であり、柱を取り外

した後、埋め戻しはされていない。柱覆土の上層は軟質である。また、P2のみ下層柱覆土と上層埋土の間の中間にカマドソデがブロック状にそのまま投げ込まれている。P2はカマド近くの所謂穴であり、カマド廃棄に伴い近くの穴へ廃棄したのだから。柱の設置については、掘り方の段差やスロープの状況から、P1とP2は縦軸を中心にしてカマド側へ、P3とP4は建物隅を結ぶ対角線を中心として内側から外側へと、柱を立てたと思われる。

〔壁周溝と壁支柱〕 壁周溝はカマドを除く壁に廻っており、規模は上幅で22～25cm最大35cm、下幅で6～10cm最大15cm、深さが4cm程度～25cmを測る。この壁周溝の中に壁支柱が検出されている。壁支柱は13本でランダムに配置されている。壁支柱穴の規模は、径20～24cmを主体とし大きなもので30～38cmに至り、深さも周溝面から20cm程の深さが主体、浅いものでは12～14cm、最も深いもので25cmである。柱間は50cm間隔の所もあれば、長い所では180cm間隔の所もある。要するに、配置も大きさも深さもばらばらである。覆土では、壁周溝部分で板敷痕跡と、板敷を固定したと考えられる土が検出されている。

〔カマド〕 北壁の中央から若干右側にずれて焚口が取り付け、L字型に煙道が曲がるカマドである。焚口には、カマドソデ石を抜き取った痕跡が両ソデ木端に見られ、非常に強い被熱焼結層の奥にも支脚抜き取り痕が確認できる。左ソデの約半分が破壊されているが、右ソデ及び煙道は良好に残っている。ソデは粘土と黒色系の土、これらの混在土で飯糰状に積み上げて造られており、ソデの基底部分も念入りに構築されている。床は全面が貼床されている。床は焚口の被熱焼結部分が若干窪むが、支脚抜き取りピットの奥壁側の末端辺りまで8度の傾斜をもつ。この奥は奥壁まで平坦を呈す。床の成形は、奥壁から煙道に至って深く掘り下げた掘り方に混在土を充填し、更にこの上面に貼床が施されている。焚口付近と排煙部付近では、掘り方はなく貼床のみであった。床面は緩やかな傾斜を持って焚口から排煙口に至っている。カマド規模は、奥壁から残存する右ソデ末端までの長さ120cm、但しソデ石の抜き取りがあるため、本来は長さが150cm程と推測可能だろう。幅外寸104cm、焚口幅内寸67cm、ソデの屈曲地点から壁までの煙道ソデ長180cm、煙道幅が屈曲地点で外寸78cm内寸53cm、排煙部付近の壁ラインでの外寸幅52cm内寸28cm、壁外の煙道幅外寸40cm内寸25cm。ソデ幅が18～22cmを測る。煙道は壁に添いながらも排煙部を窄めてゆくの形をとっている。

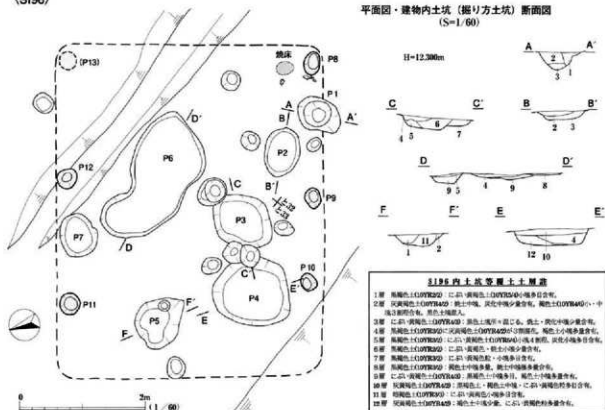
〔他のピット〕 煙建物内には、カマド右ソデ右脇に位置するP5と、建物西側に位置するP6の小土坑が見られる。P5は、上層に建物埋土と同様の土、下層には焼土や炭化小ブロックを多量に含有する覆土をもち、カマド脇という位置からも、カマドに伴う灰溜めの機能をもっていたものと考えられる。P6は、下底面にいびり褐色粘土塊を多量に含有する粘質締りのある土、上層にP5と同様の建物埋土と同じ土が覆土となっているものである。カマド付設側の壁際に位置することからも、貯蔵穴として機能した可能性が非常に高いとみえよう。

〔床の状況と中央床被熱炉〕 床は、全面が貼床され、著しい硬化は、P2・4を結ぶ範囲で中央に位置する被熱炉を含め極めて不整形なプランで認められ、P1・6周囲やP3右側区域にも硬化部分を確認している。また、P2のP3側へ柱間中程までの範囲では比較的軟質、西側（左側）も軟質な床となっている。この軟質範囲が中央区域の被熱炉にまで及んでいる。本遺跡での、カマドと4本主柱に囲まれた空間が最も硬化するという床の傾向に対して、特異な状況をもつと言えよう。また、この区域のみ若干床が低くなっている。他の床面は平坦を呈している。カマド付近一帯と、カマドに相対する壁中央部分には、明褐色粘土に黒褐色土が混入する地山に近い状態の貼床が施されている。明褐色土貼床は、薄い部分で2cm、厚い部分では15cmに至る。建物中央には貼床が被熱する炉が2カ所検出されている。床の状況は、他の建物の床と比べ、少し特異なものと言える。

〔掘り方〕 貼床の下に広がる浅い窪みを呈する掘り方の他に、掘り方土坑が大小の規模で確認される。径140cm程の3基の小規模土坑を中心として、この周囲にさらに小規模なピット状のものが隣接する。土坑覆土には、黒褐色土にいびり黄褐色土や明褐色土のブロックが多量に混在するものが主体を占めており、これらの土が非常に脆く締まりのない質を持っていることが特徴である。

〔覆土堆積〕 覆土堆積では、自然堆積層が確認できる。下層にカマド崩壊土が見られ、壁の崩落土が中央に向かって緩やかに平坦となっている土層が確認でき、この上に流込土が堆積している。前述した壁際の板敷痕跡土層はそのまま壁に取り付くように残存しており、板敷は床面に倒れなかったものと判断できる。板敷の長さがどのくらいあったのか不明であるが、倒れ込む程の長さで建物廃絶時に残っていないかたみえる。また、堆積層は、中心が窪む形状、典型的な自然堆積層を呈していると言える。また、これも前述しているが、柱の上層埋土も同様の土であり、この建物は柱も抜かれた後、とにかく放置されて廃棄されたと考えられる。

(SI96)



第53図 竪穴建物遺構図44 (SI96)

《遺物出土》出土遺物は総数で、須恵器食膳具が97点、土師器食膳具29点、須恵器貯蔵具64点、土師器煮炊具が872点である。この他に円面硯1点、陶製紡錘車1点、製塩土器などの土師土製品6点、石製品25点が出土する。遺物は覆土内に多く満遍なく混入しており、床面からのものは少ない。床に張り付いて出土するのは、カマド周辺の煮炊具が最も多い。建物内の床に張り付いて出土する遺物の時期がⅡ1期、Ⅱ1～Ⅱ2期に集中しており、またカマド周辺の煮炊具もⅡ2～Ⅱ1期に時期が収まっている。これらの信憑性の高い遺物から考えれば、建物の時期はⅡ1期を中心としてみてよいだろう。覆土内の下層や床直上から出土するものも時期の主体がⅡ2～Ⅱ1期となっている。この建物からは、陶足円面硯や転用硯、脚付鏡など注目すべき遺物が出土している。また、覆土上層から出土するものはⅣ・Ⅴ期の時期にあたるものが多い。

50. SI96

《立地・規模・形態・出土遺物》C地区南側の・と32・33Grの、旧地形で東側尾根部の鞍部側縁辺に位置する建物である。壁側柱穴とピットとして表記した掘り方土坑群、地山被熱のみ検出された。床や掘り方など完全に消失してしまっている。柱穴は5本 (P8・9・10・11・12) 検出されているが、更に北東側が削平されており、おそらくこの部分にも柱が位置していたと考えられ、6本の側壁柱で屋根を支える構造の建物であっただろう。柱穴規模は、径30cm、深さ15～25cm程度しか残存していない。柱間寸法はP9・10間で130cm、P8・9間で210cm、P11・12間で200cmであり、ばらけている。ただし、両者とも柱筋はしっかり通っている。地山被熱は、カマド狭口被熱の地山に及ぶ下底部分がかるうじて検出されているという状況である。これが南東側隅に検出されていることと、P8との関係から、カマドは東壁の右隅で、壁に対して垂直に付設するタイプであったのではないかと考えている。また、竪穴面積は予想して23㎡程、小型建物になると思われる。出土遺物は総数で、須恵器食膳具が2点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具が34点と極めて少ない。時期もⅠ期からⅤ期までと幅広い。P1からⅢ～Ⅳ期にあたる土師器浅鍋が出土している。また、Ⅰ・Ⅱ期にあたるハケ調整の鍋、Ⅲ期に属するロクロ成形の鍋破片が同量出土している。須恵器貯蔵具の平板底部が出土しており、南加賀地域ではⅢ期までにしかみられない器種である。これらを考え合わせれば、建物の時期はⅢ期相当になるのではないかと予想している。

第2項 掘立柱建物

今回報告する区域で検出された掘立柱建物は、拡張建物を含めB地区で80棟、今回報告分のC地区で11棟である。掘立柱建物番号は、A地区からの連番で付けられており、SB25～SB104がB地区となる。この内SB42・43は欠番となっている。C地区報告分は、SB107～109・128～132・160・161である。今回の調査区では、側柱建物が圧倒的に主体である。しかし、A地区では検出されていなかった総柱建物や附付建物も確認している。また、側柱建物の中では、棟持ち柱をもつものや東柱をもつものが確認されている。

文中表記では、長軸側を桁、短軸側を梁として、桁行×梁行として表示する。なお、桁・梁の区別が区別を付かない場合は、北軸に最も近い柱列を軸としている。建物主軸については、桁行を主軸と設定して、北からの角度を表示した。掘立柱建物の各名称は、奈良文化財研究所2003『古代の官衙遺跡 1遺構編』に基づき、引用参考しながら一部表記した。出土遺物については出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。

1. SB25

調査区西側中央のB地区とC地区の境、た・ち39・40Grに位置する。西桁に2列の柱穴が検出されたことで、切り合いから拡張して替えられた建物と判断した。拡張前をSB25A、拡張後をSB25Bとした。この建物は、重複の多い区域にあり、SI43・SB34を切って、SB29に切られていることを確認している。その他、SB30・SI42・SI46・SI41と重複する。SB25Aは桁行7.0m梁行5.0mで面積35㎡、SB25Bは桁行7.0m梁行5.2mで面積36.4㎡、いずれも4間×3間の建物である。建物主軸はN-15°E。柱間寸法は、桁間180cm、梁間160cmと、規格的である。柱筋の通りは、Aの方は良いのだが、Bの方は若干ずれる。掘り方プランは円形で、規模は径72cm深さ24～40cm、段堀りやスロープをもち、四隅柱が深めとなっている。覆土は抜き取りを示す土層である。その埋土は、黒褐色土に黄褐色ブロックが5割混在するものが主体となっており、Aでは焼土が含有せず、Bでは焼土や炭化物ブロックが多量に含まれている。建物の内部に西桁横に小ピットが2本分検出されており、この建物に関連するものかもしれない。出土遺物は、須恵器食膳具6点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具1点土師器煮炊具95点であり、VI～VII期のものが少量混在するが、I期のものが主体的である。

2. SB26

建物規模が桁行5.6m梁行4.6m、面積25.76㎡を測る。3間×3間の側柱建物である。調査区西側中央のB地区とC地区の境、ち・つ40・41Grに位置する。この建物は、SB27・SB28・SI40と重複しており、SB27を切っている。建物主軸はN-37°E。柱間寸法は、桁間150～180cm、梁間120～148cmで、東桁と南梁の柱間寸法は揃っている。掘り方だけの検出ではあるが、柱筋の通りはよい。円形ないし方形の掘り方プランをもち、掘り方には一段段堀りやスロープが見られる。掘り方規模は、径70cm、深さ16～44cmで旧地形に添う深さをもっている。段堀りやスロープの状況から、柱は北梁方向から掘り立てられたか。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具31点であり、時期はIII～IV期のものである。

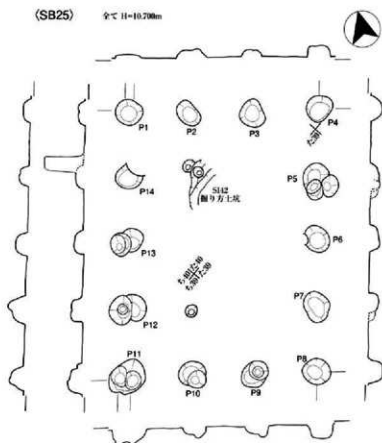
3. SB27

建物規模が、桁行6.4m梁行4.8mで面積30.72㎡、3間×3間の側柱建物である。SB26と同様の位置で、SI40・SI80・SB26・SB28と重複、SI80を切っていることを確認している。建物主軸はN-2°W、ほぼ真北といつてよいだろう。柱間寸法は、桁間200cm、梁間160cmで、規格的な配置である。掘り方プランは方形主体である。円形となって円化されてしまっているものの、検出当時は方形であったようだ。ただ、方形の向きや上端の並びに関しては、P9のみひしげた掘り方配置を取っている。掘り方規模は、径60～72cm、深さ56cmである。柱は抜き取られ、黒色系の土で埋め戻されている。出土遺物は、土師器煮炊具であるハケ調整の釜胴部破片3点のみ。II～III期の時期にあたるものである。

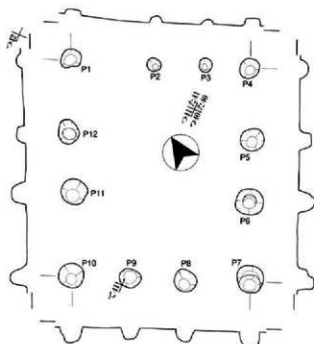
4. SB28

建物規模が桁行5.6m梁行4.4mで、面積24.64㎡を測る。3間×3間の側柱建物である。SB26・27と同様の位置で、SI40・SB26・SB27と重複しており、SI36を切っていることを確認している。建物主軸はN-30°E。柱間寸法は、桁間188cm、梁間128～180cmである。柱の並びは、東桁行は良いが、西桁行は中柱がややずれており悪い。梁行に関しては、北梁P3が外側にずれており、悪い。しかし、しっかりした掘り込みをもち、掘り方プランは円形で、径が60～64cmを呈す。深さは25～36cmで、旧地形に添う深さとなっている。掘り方には段堀りやスロープが見られ、

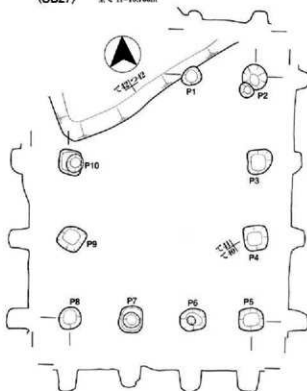
(SB25) 全てH=10.700m



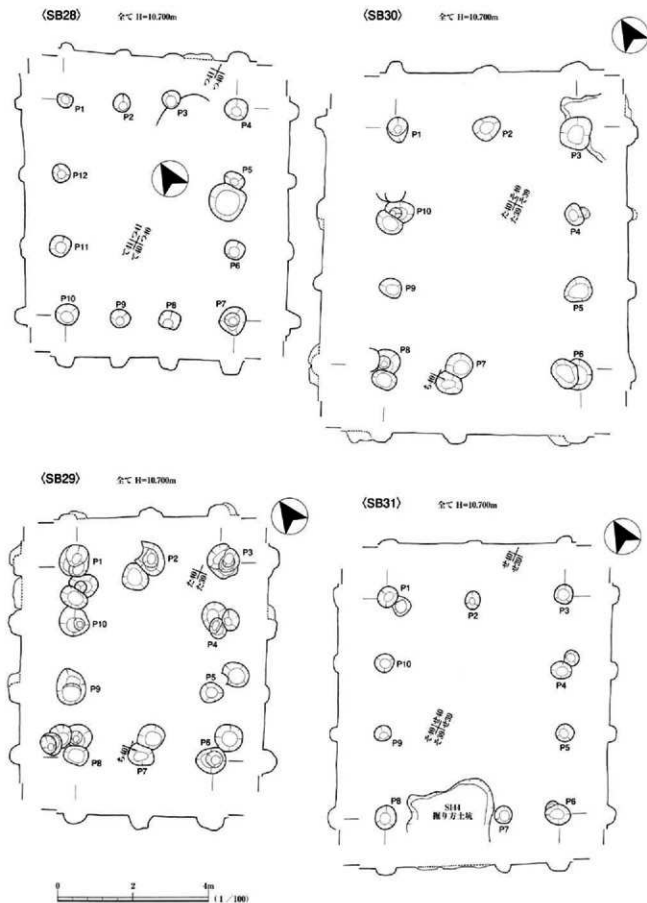
(SB26) 全てH=10.700m



(SB27) 全てH=10.700m



第54図 掘立柱建物遺構図1 (SB25・SB26・SB27)



第 55 図 掘立柱建物遺構図 2 (SB28・SB29・SB30・SB31)

柱を北梁行方向から立てている可能性がある。P7・P8では、柱痕跡を確認している。これら以外は全て抜き取られ、埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具12点であり、時期はⅤ1～Ⅴ1期のもものと確認されている。

5. SB29

建物規模が、桁行5.0m梁行3.8mで面積19.0㎡の、3間×2間の側柱建物である。B地区西南た39・40Grに位置する建物である。この建物は、SB25・SB30・SB34・SI42・SI43・SI46と重複する。建物主軸はN-38°-Eで、SB30やSB34とはほぼ主軸を同一にする。SB34を切って柱穴が掘られていることを確認している。柱間寸法は、桁間160cm、梁間180cmで、規格的な配置である。掘り方プランはほぼ円形を呈し、底面が若干窪む。規模は径64～80cm、深さ最大32cmである。柱筋はおおよそ良いが、P5のみ若干内側に入る。建物廃絶時には、柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具58点であり、時期はⅡ～Ⅲ期に位置づけられる。

6. SB30

建物規模が、桁行6.2m梁行4.8mで面積29.76㎡の、3間×2間の側柱建物である。SB29と同様の位置であり、SB25・SB34・SB29・SI42・SI43・SI46・SI44と重複する。なお、SI42を切っていることを確認している。建物主軸はN-39°-Eで、SB29やSB34とはほぼ主軸を同じにとるもの。柱間寸法は、桁間250cm、梁間は、北梁が180cm、南梁はP6・7間が296cm、P7・8間が184cmを測る。掘り方プランは、不整形や楕円形状、方形状となっており、径44～80cmと大小様々なプランを呈す。深さは16～30cm、基本的に立ち上がりをしきりもつものが主體的だが、側面がスロープ状となっていたり段差されていたりするものもあり、掘り方の向きや並びに統一性を欠くものとなっている。柱筋の通りは概ね良好だが、P4が若干ずれている。建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具48点であり、時期はⅡ～Ⅲ期に位置づけられる。なお、本建物はSB34の拡張建物である可能性がある。

7. SB31

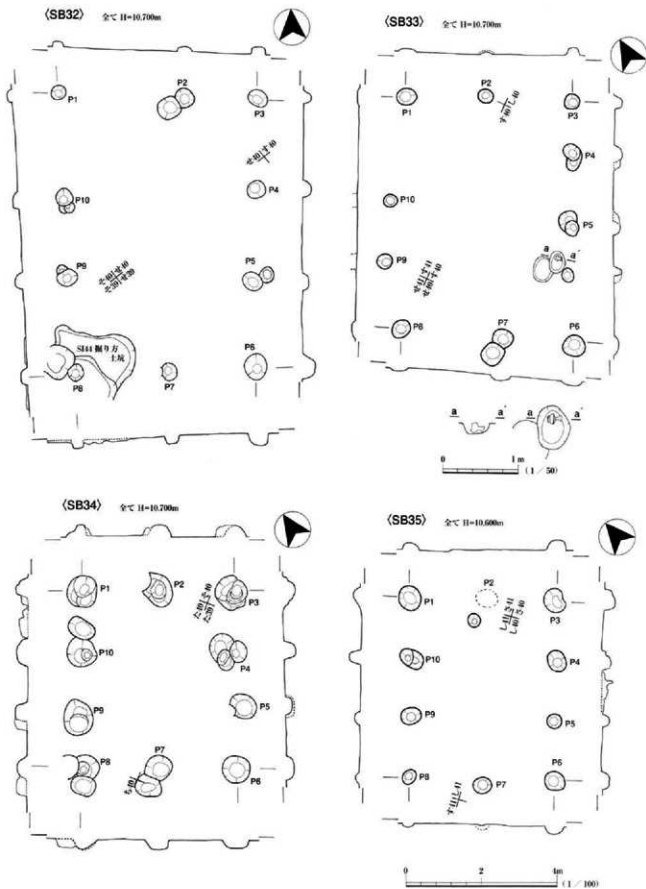
建物規模が、桁行5.8m梁行4.6mで面積26.68㎡の、3間×2間の側柱建物である。SB29・30と同様の位置で、SB32・SI45・SI44・SI46と重複する。建物主軸はN-32°-Eで、SB29・SB30・SB34とはほぼ主軸を同じにとる。柱間寸法は、桁間160～220cm、梁間136～228cmで、柱間を均等には配置していない。柱筋は、P2が内側へずれ、またP9も若干外側へずれるものの、通らないことはない。プランは円形を呈し、径42～64cmを測る。深さは10～24cm、桁行は旧地表に添う深さを呈している。また、比較的四隅の柱がしっかりしてプランも大きい傾向にあるが、中柱が浅いものもある。P6のみ柱痕跡が残っており、廃絶時に切り取られたようだ。確認できたのはこの柱だけだった。出土遺物は、土師器食膳具1点、土師器煮炊具6点のみで、1期あたりのものか。

8. SB32

建物規模が、桁行7.2～7.4m梁行4.8～5.2mで面積36.5㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。西桁が外側へ飛び出すように配置されるために、建物全体プランがやや台形状のひしゃげたものとなっている。SB29～31と同様の位置で、SB31・SB33・SB54・SI44・SI45・SI46と重複する。建物主軸はN-2°-Eで、SB27と同主軸である。柱間寸法は、桁間208～252cm、梁間188～328cmと、柱間を均等に配置していない。P5が若干内側へずれて配置されているもの側面が通らないことはなく、柱筋の通りは比較的良いと言えるだろう。プランは円形や不整形を呈し、径38～68cmを測る。深さは12～32cm、旧地形に添ったものとなっている。また、廃絶時には柱は抜き取られて埋め戻されている。覆土からは、掘り方側面に残る掘り方埋土と埋め戻し土を確認している。統一性・企画性・監督性のない簡易な印象の建物である。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点、凝灰岩のカマド石1点、中世遺物が混在して出土する。時期はⅡ～Ⅲ期に位置づけられる。

9. SB33

建物規模が桁行6.2～6.4m梁行4.4～4.6mで、面積28.35㎡、4間(3間)×2間の側柱建物である。B地区す・せ40・41Grに位置し、SB32・SB35と重複するもの。建物主軸はN-32°-E、SB32と同主軸である。西桁の柱筋が通らず、東桁側ではP7が丁度1本飛び出すように配置されており、P7の筋を通そうとすると建物がひしゃげた形状となる。建物北東部分が削平を受ける区域に入っていることもあり、掘り込み自体は浅いが、東桁行・南梁行の方は底面からの立ち上がりがしっかりしている良好なものとなっている。



第 56 図 掘立柱建物遺構図 3 (SB32・SB33・SB34・SB35)

西側の中柱2本は、全く柱筋がとらず、非常に浅い。またこれらの柱穴の覆土は焼土や炭化物などの含有物も少なく、もしかすると、建物建設を途中で断念しているかもしれない。プランはほぼ円形を呈し、径は40～60cm、深さ10～20cmである。また、建物内ピットから完形の長頸瓶が検出されており、埋納された可能性をもつが、この建物に伴うかどうかはわからない。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具6点のみ、時期は不詳であるが、掘立柱建物としては古代に位置づけられる。

10. SB34

建物規模が、桁行4.7m梁行4.0mを測り、面積188㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区た39・40Grに位置、SB25・SB29・SB30・SI42・SI43・SI46と重複する。建物主軸はN-34°-E。柱間寸法は、桁間140～160cm、梁間200cmである。P5のみ若干ずれるために桁行の柱間は均一にならない。とはいうものの、側桁が通らないことはなく、このP5を除けば、非常に柱筋の通りは良いと言える。柱穴はしっかりしており、やや方形を呈するもの、円形、不整形のプランをもって側面に段堀やスロープをもちながら掘り込まれている。規模は、径64～88cm、深さ28cm。深さは揃っている。段堀やスロープは、北側に多いようであり、北方面から柱を立てているかもしれない。この建物は、桁行・梁行がきっちりして、しっかりした印象を受ける。廃絶時には柱は抜き取られて埋め戻されている。出土遺物は須恵器食膳具1点、土師器煮炊具5点で、時期はI・II期にあたる。

11. SB35

建物規模は桁行4.72m梁行3.8mを測り、面積179㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区中央西寄りの、し40・41Grに位置、SB33・SB38と重複する。建物主軸はN-41°-E。柱間寸法は、桁間152cm、梁間192cmである。なお、P2は検出されなかった。また、P7は若干外側に位置。桁行の柱筋の通りは良く、柱間寸法も各々均等に配置されており、規則性をもつ。掘り方プランは基本的に円形であり、P3のみやや不整形を呈す。その規模は、径32～64cm、深さ10～28cmである。掘り込みの深さから、P3あたりが一番深く、P8が最も高かったという旧地形に添って掘られたことが分かる。建物廃絶時に、柱は抜かれ埋め戻されている。出土遺物は土師器煮炊具3点で、時期はI・II期?ということである。

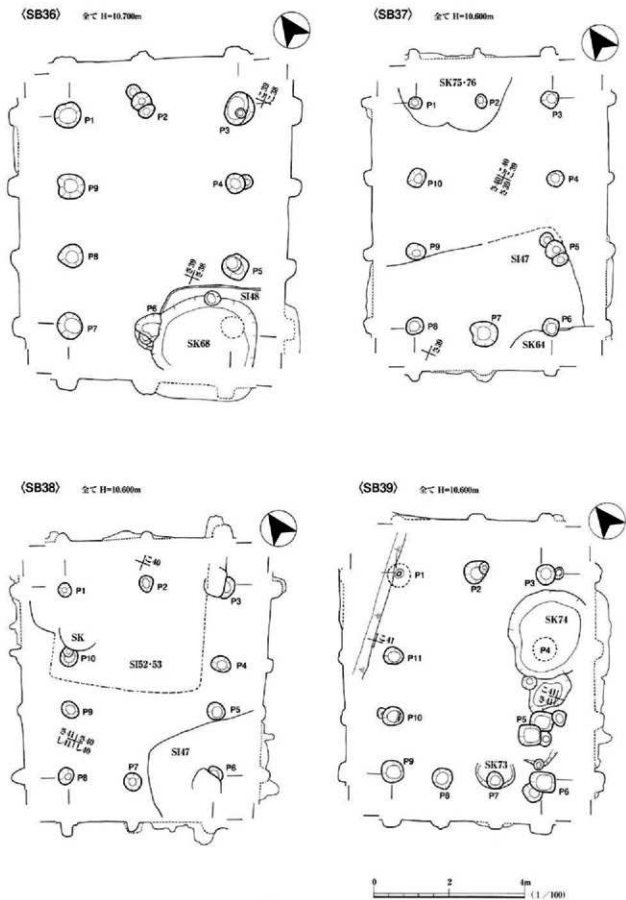
この建物の北側にSB39が位置する。SB39は、SB35と殆ど主軸が同じであり、また、柱の配列がそのまま続いてもおかしくない位置関係となっている。SB35ではP2が検出されず、またSB39では南梁の柱が2本なのである。SB39の時期がI期。両者の時期は同じでもあり、両者は1つの建物でないかと思われるのである。もしかすると、SB39の南梁2本の柱は間仕切りであった可能性もあるのではないだろうか。ただ、その断言できないのは、もし大型建物であったなら、もっと柱穴が大きくしっかりしているべきと考えるためである。2棟が繋がっていないかたとしても、2棟連続した建物であった可能性も高いと考えている。

12. SB36

建物規模が、桁行5.6m梁行4.4mを測り、面積246.4㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区中央の、さ・し38・39Grに位置、SB37・SB52・SB55・SI47・SI48・SK64・SK68と重複する。なお、SI47、SI52を切っていることが調査時で確認されている。建物主軸はN-32°-E。柱間寸法は、桁間は基本的に180cmだがP1・5間が220cm、P5・6間が160cmとなっており、梁間は200～240cmである。柱穴は前記のような差はあれ、柱筋の通りもよく、しっかりと掘り込まれている。柱穴プランは、円形若しくは不整形であるが、方形プランも見えて抜き取り時に不整形となってしまったもの方形プランを持っていた可能性もある。柱穴規模は、径40～88cm、深さ20～33cmである。側面には、段堀やスロープが見られる。その方向は一定となっておらず、柱の掘り立てに監督性はなかったものと思われる。出土遺物は須恵器食膳具4点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具25点であり、時期はII3～III期にあたる。

13. SB37

建物規模が、桁行6.0m梁行3.6mを測り、面積21.6㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区中央、と39・40Grに位置する。この建物はSB36・SI47・SI52・SI53A・B・SK64・SK75・SK76と重複、SB38と隣接する。建物主軸はN-32°-Eをとる。柱間寸法は、桁間250cm、梁間180cmである。掘り方プランは円形や不整形を呈し、規模は径40～60cmでSK内に位置するものは小さく、深さは15～20cmである。P7のみ径も大きく、この柱穴だけ並びの上で外側にずれているが、これ以外のものに関しては柱筋の通りはよいものとなっている。出土遺物は土師器煮炊具3点のみであり時期は不詳である。ただ、古代の建物であることは確かだろう。



第 57 図 掘立柱建物遺構図 4 (SB36・SB37・SB38・SB39)

14. SB38

建物規模が、桁行4.92m梁行3.84～4.12mを測り、面積19.58㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区さ40・41GrのSB37の西側に隣接し、SB35・SB39・SB61・SB63・SI47・SI52・SI53A・Bと重複、遺構密度の高い区域に位置する建物である。建物主軸はN-36°-Eで、SB37とほぼ主軸を同じにもつ。柱間寸法は、桁間120～250cm、梁間164～208cmである。柱穴は円形プランを呈し、規模は径20～44cm、深さ12～40cmを測り、掘り方箇面に段層を有するものもある。深さに関しても非常に浅いものと深いもの、断面が火皿状となっているものもあれば細長いもの、逆に底面から立ち上がりをしっかりもつものと様々である。柱筋の通りに関しては、桁行は良く、梁行はP2とP7の中柱が通らない。東桁行のラインが東側に偏っているために、建物全体のプランはやや台形状を呈す。全体的に無計画で簡易な印象の建物である。建物廃絶時には、柱は抜き取られ、埋め戻されている。その埋め戻しの土は黒褐色土に黄褐色土ブロックが含有する人為的な土であり、掘り方箇面には、掘り方土が残存する。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点で、時期を判断することは難しく不詳である。

15. SB39

建物規模が、桁行5.36m梁行4.0mを測り、面積21.44㎡、3間×2間(3間)の側柱建物である。前述したSB34との関連が何れである建物でもある。SB38と同様のB地区中央さ41Grで、SB38・SB61・SB62・SB63・SI52・SI53A・B・SK74と重複する遺構密度の非常に高い区域に位置する建物である。建物主軸はN-39°-Eで、SB36やSB37とほぼ主軸を同じにもつ。柱間寸法は、桁間が148～220cmである。梁間は北東側が200cm、南西側は3本列となっており3間の内中央寸法が140cm、両サイドが132cmとなっている。柱穴は、方形や円形プランを呈す。ただし、調査時の検出掘削直後には方形プランと確認されている。柱穴の規模は、径44～60cm、深さ10～24cmである。建物北側・西側が側平区域にあたり、特に北側は著しい側平区域となるため、P1の形状は不明なのだが、これらの柱穴の4隅が比較的しっかりと掘り込まれている。南西梁行の2本に関しては、簡素な掘り込みを持っている。柱筋の通りはよい。そして、覆土で黒褐色土に黄褐色土ブロックが多量に含有する土を確認しており、これらの柱は、建物廃絶時に抜かれ埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具9点で、時期はI期にあたるものが出土している。

16. SB40

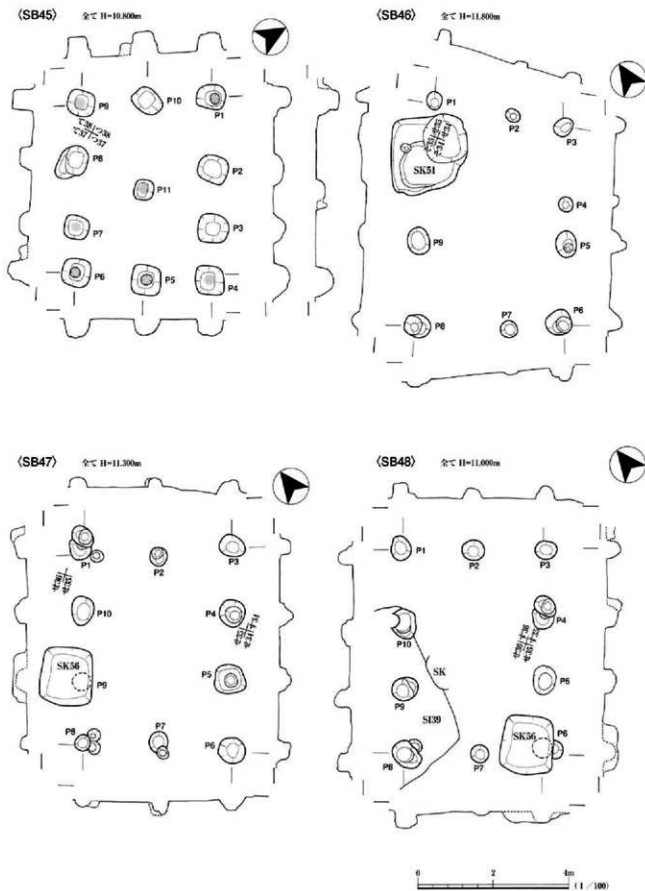
建物規模が、桁行6.48m梁行4.8mを測り、面積30.59㎡、4間×4間の側柱建物である。B地区南側の、さ41・37・38Grに位置、SI35・SB50・SB51・SB53と重複する。建物主軸はN-101°-E。ただし主軸に関しては梁行方向がほぼ北方向に沿っているため、北に対し横向きに配置された建物と考えられる。柱間寸法は、桁間140～180cm、梁間120cmを測る。柱穴配置としては、ずれているものもある。南側桁行ではP11・P12が若干外側に、梁行では、P7が若干内側に位置し、P15は竪穴建物内で検出されたこともあり、外側にずれていて柱筋が通らないが、これを除けば柱筋の通りは比較的良好と言えるだろう。柱穴は円形プランを中心に、抜き取りの影響が不整形を呈すものももち、柱穴規模は、径72cm深さ20～44cmである。桁行の深さが旧地形に添うものとなっており、梁行では隅柱を深く掘り込んでいる。また、底面が窪み程度の段を有するものもある。全体的に監督性は薄いが、規格性の高い建物。出土遺物は須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具13点であるが、時期は不明である。但し、古代の建物となることは確かだろうと思われる。

17. SB41

建物規模が、桁行5.76m梁行3.84mを測り、面積21.95㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区中央の、さ41・37Grに位置し、SI38・SB49・SB58と重複する。建物主軸はN-30°-E。柱間寸法は、桁間・梁間とも194cm、柱は均等に配置されている。柱穴プランは円形プランを中心に方形プランもみられ、柱抜き取りの影響が不整形を呈しているものもある。柱穴規模は、径64～80cm、深さ36～60cmである。この建物はSB49・SI38を切って建てられている。出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具7点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具66点と多い。SB49として遺物を取り上げていないため、両者のものが混在する状況と思われる。時期はII期のものが主体で、V期のものが混在する。また、中世I期の遺物も混在して出土している。SB41柱穴の状況から、II期であろうと思われる。

18. SB44

建物規模が、桁行7.0m梁行5.0m、面積35.0㎡を測る、4間×3間の側柱建物である。C地区南側でB地区と



第59図 掘立柱建物遺構図6 (SB45・SB46・SB47・SB48)

の境つて46・47Grに位置し、SI90・SB45と重複する。SB45に切られていることを確認している。建物主軸はN-35°-E。柱間寸法は、桁間160～180cm、梁間140～180cmである。掘り方プランは円形を中心に方形・やや不整形円状を呈しており、規模は径56～68cm、深さ32～68cmを測る。深さのレベルはほぼ一定となっている。柱抜き取り痕跡が確認できており、掘り方土が側面に残存するものもある。柱圧痕が検出されている柱穴があり、その径は最大26cmであった。柱圧痕が確認されていないものでも、掘り方下底に窪み状の落ち込みを捉えているものもある。柱筋の通りに関しては、P1・P6・P8・P10がやや外側にずれ、特にP8では、柱1本分が外側に位置する。掘り方にはスロープや段差を有するものが見られるが、一定方向から柱を立てたと考えられるものではなく、様々な方向から柱を立てたと思われる。出土遺物は、須恵器食器具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具16点であり、時期はI2期が主体、V2～VI1期のものが少量混在する。

19. SB45

建物規模が、桁行4.6m梁行3.52m、面積16.19㎡、3間×2間で、中央に東柱1本を有する側柱建物である。C地区南側でB地区との境、つ37・38Grに位置し、SI35・SB44・SB131・SB132と重複、いずれの建物も切っていると調査時に確認している。建物主軸はN-60°-W。ただし主軸に関しては梁行方向がほぼ北方向に沿っているため、北に対し横向きに配置された建物と考えられる。柱間寸法は、桁間120～176cm、梁間176cmである。掘り方プランは方形を呈し、底面に柱圧痕が検出されているものがある。柱圧痕を結ぶと、柱筋の通りは良い方だ。P5が若干外側にずれ、P11もずれるのだが、中心から外れている程度である。また、この柱圧痕の最大径は28cmであった。掘り方の規模は、径60～76cm、深さ24～60cmを測り、掘り方の外側に段差やスロープをもっているものが多く、外側から柱を掘り立てたものとみている。掘り方の並びに関しては、掘り方外側のラインにおいて、P3～5が揃っているが後はばらけており、この3本辺りが基本となって掘削されたと思われるが、掘削人に正確な技術はなかったようだ。また、深さに関しては一定とはならず、四隅と梁行は深くしっかりしているのだが、桁行の中柱は浅いものとなっている。覆土からP2・P11で下底に基礎固め土を確認している。

また、建物廃絶時に、柱は抜き取られているが、一部の柱穴で「柱のあたり」が確認できる。柱穴径は22～24cmあたりと思われる。この建物は、規則性・監督性が若干垣間見られるような建物であり、東柱が1本だけだが、倉庫の可能性は否定できないと考えている。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器煮炊具9点であり、時期はII2～II3期が主体、V期ものが少量混在する。

20. SB46

建物規模が、桁行5.2～6.0m梁行3.52～3.8mを測り、面積約19.76㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区南側の尾根部削平区域にかかる、せ・せ34Grに位置する。建物主軸はN-35°-E。柱間寸法は、桁間112～220cm、梁間140～240cmである。掘り方プランは円形・楕円形で、径36～72cm、深さ12～36cmを測る。柱の配置は、北梁行と西桁行のP1が梁行側と桁行内側に配置されていることにより、北梁行が狭まって全体がひしゃげた形となっている。ただし、柱筋は通っている。深さに関しては、旧地形に添った深さの並びを持っており、南側が最も地形的に高く、P1辺りが最も低いことを示している。また、比較的隅の柱はしっかりした形状をとっているのに対し、中柱は浅く小さなものとなっている。全体として計画性に乏しく、簡易な印象を受ける建物である。またこの土坑のすぐ近くに土師器焼成坑や屋外炉などが位置している。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器煮炊具16点、カマド石等の石製品5点で、時期はI～II期に位置づけられるもの。また、中世I期にあたる埃や塵等が21点出土する。

21. SB47

建物規模が、桁行5.2m梁行4.0m、面積20.8㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。B地区南側の尾根部削平区域にかかる、す・せ35Grに位置し、SB48・SK56と重複する。建物主軸はN-38°-E。柱間寸法は、桁間176cm、梁間200cmを測る。柱穴プランは円形や不整形円形、方形状を呈し、側面に段差やスロープをもつものもあり、下底面が窪んで段をもっているものもある。柱穴の規模は、径40～76cm、深さ16～32cmと旧地形に添ったものである。柱穴の配置はP2が内側にずれており、北梁行の柱筋の通りは悪いが、他の柱筋の通りはよい。覆土は抜き取り・埋め戻しを示すものとなっている。出土遺物は、須恵器食器具9点、須恵器貯蔵具2点、土師器食器具4点、土師器煮炊具41点、石製品1点で、III～IV期に位置するものである。また、中世I期のものが4点が混在している。

22. SB48

建物規模が、桁行5.4m梁行3.72m、面積20.08㎡。3間×2間の側柱建物である。B区南側す・せ35・36Grに位置、S139・S150・SB47・SK56と重複、SK54・57・58とも重複しこれらの土坑が建物に取まるように位置する。建物主軸はN-38°-Eで、SB47と同主軸をとる。柱間寸法は、桁間160～180cm、梁間は160cmなのだがP7・8間のみ250cmである。柱穴プランは円形を中心に不整形となっているものもあり、柱穴規模は径48～84cm、深さ10cm～48cmを測り、側面に段層を有するものが多いが、一定方向ではない。しっかりと深く掘られているのだが深さは一定ではなく、また旧地形に添った状態を呈する並びも見られる。柱穴の並びはP7のみ軸に平行に東側へずれる程度で、規則正しく並んでおり、柱筋の通りもよい。廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されており、この痕跡が覆土で確認されている。この建物の西・南では、屋外被熱が密集している。出土遺物は、須恵器食器具2点、土師器煮炊具29点である。これらはⅡ2期にあたるものである。この他中世Ⅰ期に相当する土師器片が2点出土、混在する状況である。

23. SB49

建物規模が、桁行5.6～6.32m梁行3.8m、面積22.64㎡。3間×2間の側柱建物である。B区南側し・す37Grに位置し、S138・SB41・SK56と重複する。建物主軸はN-28°-E。柱間寸法は、桁間180～228cm、梁間は160～250cmである。柱穴プランは円形を中心に不整形・楕円形を呈すが、SB41との重複と抜き取りもあって、このようなプランになったものと思われる。柱穴規模は径72～80cm、深さ20～32cmを測り、P7・8は径28cm深さ10cmである。建物の全体プランが、南梁行のP8が外側にずれるために全体に台形状となっている。P8のずれ以外では配置は良い。柱筋の通りは、上記のように南梁行は通りが悪く、これ以外が良い。プランや深さ、柱の並びなど、P7・8が異質で本当にこの建物のものであったのか、という疑いさえ出てくるのだが、現地での確認で判断したこともあり、他に柱穴が検出されていないため、この建物の柱穴として位置づけしている。出土遺物は、SB49として取り上げているものはなく、SB41と重複のためまとめて取り上げている。よって、時期は不明であるが、建物の建て替えの可能性ももたれるし、また、Ⅱ1期とⅠ2期と2時期の遺物が出土しているの、どちらか一方がこの建物のもつと判断することもできようか。

24. SB50

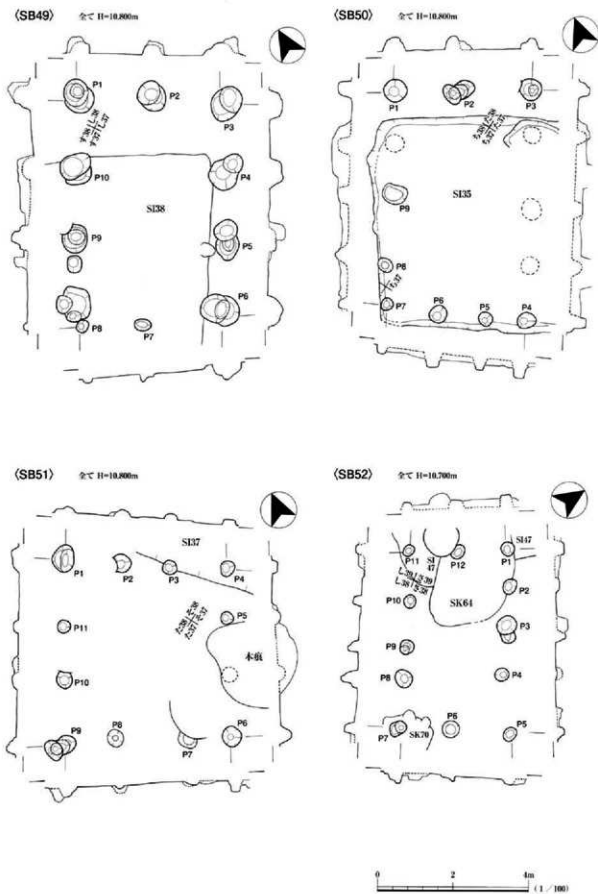
建物規模が、桁行西側5.68m東側6.0m、梁行3.6m、面積約21.0㎡を測る。4間×2間(3間)の側柱建物である。B区南西端のC地区との境た・ち37・38Grに位置、S135・SB40と重複する。建物主軸はN-23°-E。柱間寸法は、桁行側が堅実建物との重複により柱穴が検出されていない状態であり、梁間は北側が180cm、南側が104～128cmである。柱の並びは、北梁行の並びがしっかりして柱筋も通るので良好だが、他は南桁行で柱筋が通らず、西桁行の柱配置も不均一である。ただ、全体がひしゃげた形になろうとも、四隅の柱は通るので、建物は建つものと思われる。非常に簡易な建物になるのだろう。柱穴プランは円形、規模は北位置の柱で径60cm、重複している柱は30cm程である。深さは32cmを測るが、それぞれの底面レベルは一定ではない。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器煮炊具1点で、時期はⅠ1期と判断されるものである。

25. SB51

建物規模が、桁行4.6m、梁行4.4m、面積20.24㎡、3間×3間の側柱建物である。B区南の、そ・た37・38Grに位置、S137・SB40・SB50・SB53と重複する。建物主軸はN-22°-Eで、SB50やSB54と同様の主軸をとる。柱間寸法は、桁間96～160cm、梁間108～188cmであり、正確な配置規格はない。柱穴プランは円形を呈し、柱穴規模は、径32～68cm、深さ12～28cmを測る。四隅が比較的しっかりしていると言えようか。柱筋の通りは良いと思われるが、柱穴の配置はばらつき、P1はプランも大きく外側に飛び出している。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点で、時期は不詳である。

26. SB52

B区中央の、さ38・39Grに位置、S147・S148・SB36・SB59・SK64・SK70と重複する。建物主軸はN-55°-W。桁行4.68m、梁行2.56～2.8m、面積12.54㎡、4間×2間の側柱建物である。柱間寸法は、桁間84～152cm、梁間124～140cmである。北梁行が狭い為、建物全体のプランがやや台形状を呈す。柱穴プランは円形で、規模は径28～42cm、深さ12～44cmを測る。柱筋の通りは、P4・5・11が内側へずれるため桁行の通りは悪い。深さも旧地形に添っている所もあるが、一定とはなっていない。柱穴も小さく、段層の状況からも柱も細かった



第 60 図 掘立柱建物遺構図 7 (SB49・SB50・SB51・SB52)

ものと想定でき、簡易的な印象を受ける建物である。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具10点、時期はⅡ2～Ⅲ期である。なお中世Ⅰ期の遺物が3点出土、混在する。

27. SB53

B区南側せ・そ・た37・38Grに位置、SI37・SB40・SB51・SB54・SK47・SK46と重複する。建物主軸は、N-5°-E。桁行8.0m、梁行が北側6.8m南側7.8mの、身舎の建物プランが台形状を呈し庇がつく、片庇の建物と考えているものである。入側柱列と桁行が平行で、この部分の梁行柱間寸法は260cmである。5間×3間（4間？）の建物である。柱の配置としては、柱間寸法に非常にばらつきが見られ、入側柱P7の柱筋が通らないが、この他は柱筋の通りは良い。柱穴規模は、径44～68cm、深さ12～40cm、プランは円形や不整形を呈し、側面に段淵を有するものもある。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具16点、カマド石1点が出土する。中世Ⅰ期の遺物が1点混在するが、建物の時期はⅡ2～Ⅲ期に位置づけられる。

28. SB54

建物規模が、桁行6.48～6.64m、梁行4.12～4.72mで、建物面積29.99㎡、3間×3間の側柱建物である。建物全体のプランが台形状となるもの。B区中央南寄り、せ・そ38・39Grに位置し、SI37・SB32・SB31・SB53・SB55と重複する。SK79とも重複し、この土坑が内部の北東端に位置する。建物主軸はN-30°-E、SB41やSB51と同じ主軸をもつ。柱間寸法は、桁間192～224cm梁間100～160cmである。柱穴の配置に関しては、P8・9・11が外側にずれているために、西桁行と南梁行の柱筋の通りは悪くなっている。柱穴規模は、径40～56cm、深さ20～54cm、プランは円形を呈し、側面には段淵を有するものもある。柱穴自体はこぢんまりしているのだが、梁行の中柱は別として、意外と深くしっかり掘られている。ただ、柱そのものは細かったものと思われ、配置状況などからもいっても、簡易な要素が見える。出土遺物は、土師器食膳具7点、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具50点と、柱穴から出土する量としては多い。時期はⅡ1～Ⅱ3期に位置づけられる。また、この他中世Ⅰ期の遺物が2点出土し混在する。

29. SB55

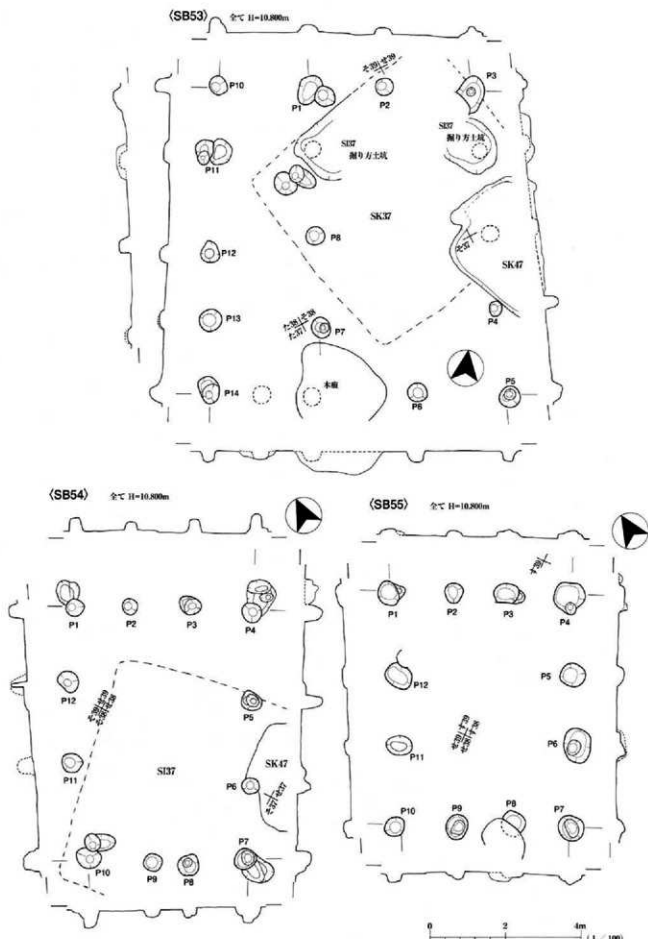
建物規模が、桁行6.12m、梁行4.6m、建物面積28.15㎡の、3間×3間の側柱建物である。B区中央す・せ38・39Grに位置、SB54・SK61と重複する。SK61は建物の内部に収まるように位置している。建物主軸は、N-35°-E。柱間寸法は、桁間250cm梁間144～160cmである。柱穴プランは円形・方形・楕円形を呈し、規模は径48～86cm、深さ8～20cmを測る。上層がかなり削平されている建物である。柱の配置に関してはP1のみ外側にずれるが、柱筋の通りは概ね良い。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具13点であり、時期はⅢ～Ⅳ期に位置づけられるものである。

30. SB56

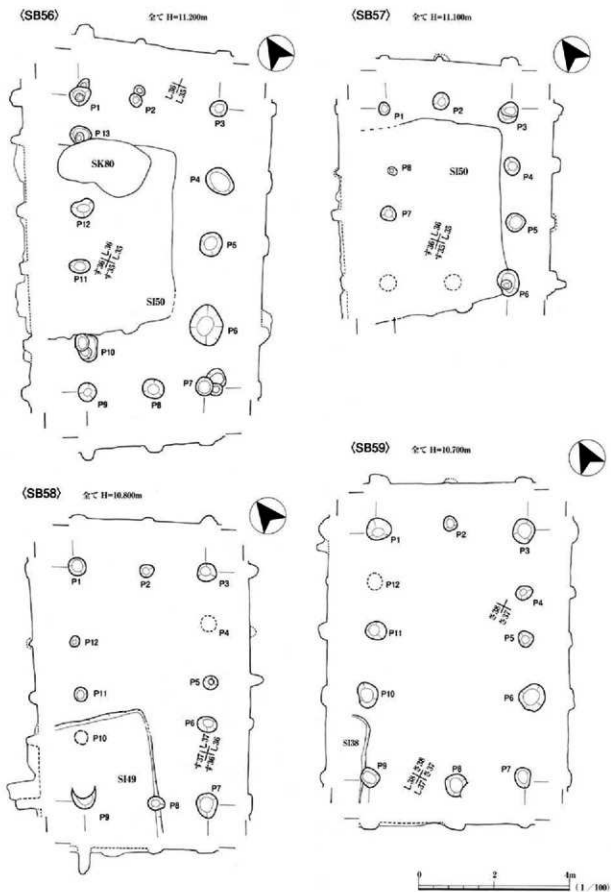
建物規模は桁行7.4～7.8m梁行3.0～3.68mで、南梁行が窄まり、建物プランとして台形状を呈す、建物面積25.38㎡、5間（4間）×2間の側柱建物である。B区中央東寄りの、し・す35・36Grに位置、SI50・SB57と重複する。また、SJ7・SJ8の被熱層が建物内外で重複して確認され、建物の東側にSJ1とする鍛冶炉跡が隣接する。主軸はN-34°-E。柱間寸法は、桁間100～220cm梁間128～220cmであり、柱穴配置においては統一性のないランダムな配置となっている。柱穴プランは円形・楕円形を呈し、規模は径32～56cm、深さ6～32cmを測る。深さとしては、梁行にて旧地表に添った形状を呈して東側の地面が高かったことを示しているが、全体には四隅のみしっかり深いということもなく、様々な深さと形状をもっている。柱筋の通りは良いが、無計画で簡易な建物であったと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具11点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具40点、カマド石などの石製品2点と、掘立柱建物としては、出土量は多い。時期はⅠ2～Ⅱ2期相当にあたる。また、この他中世Ⅰ期に位置づけられる遺物が12点出土し混在している。

31. SB57

建物規模は桁行4.6m梁行3.2mで、建物面積14.72㎡。3間×2間の側柱建物である。B区中央東寄り、し・す35・36Grに位置、SI50・SB56と重複する。この建物の近くには、SJ7・SJ8被熱層が確認される。主軸はN-34°-E。柱間寸法は、桁間104～160cm梁間148～176cmである。柱穴は円形・不整形で、規模は径32～68cm、深さ8～48cmを測る。柱穴は、四隅のみしっかり深いということもなく、様々な深さと形状をもっている。P2が梁行ラインの外側に位置、P5も外側に飛び出るように配置されているが、柱筋が通らないということはない。



第 61 図 掘立柱建物遺構図 8 (SB53・SB54・SB55)



第62図 独立柱建物遺構図9 (SB56・SB57・SB58・SB59)

P8は非常に小さく完全に内側にずれているのだが、堅穴建物の下底で検出したものでもあり、もともと浅かった為にこのような形状で検出されたのではないかと予想する。いずれにしろ小型で計画性に欠く建物である。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具19点、カマド石などの石製品3点で、時期はⅡ～Ⅲ?期に位置づけられるものである。また、この他中世Ⅰ期の遺物が1点出土し混在している。

32. SB58

建物規模が、桁行6.0m梁行3.32mで建物面積1992㎡、4間×2間の側柱建物である。B区中央東寄り、し・す37Grに位置、SI38・SB41・SB49と重複する。主軸はN-42°E。柱間寸法は、桁間108～200cm、梁間132～200cm。柱穴プランは円形・不整形・楕円形を呈し、規模は24～60cm、深さ8～70cmと、様々な形状・深さを呈している。柱の配置に関しては、P12がずれており柱筋が通らない。P1・6・7は若干外側に飛び出す様に配置されているものの柱筋は通っている。計画性に欠く建物と言える。出土遺物は、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具14点で、時期はⅡ～Ⅲ期にあたる。また、中世Ⅰ期の遺物が4点出土し混在する。

33. SB59

建物規模は桁行6.4m梁行4.0m、建物面積25.6㎡、4間×2間の側柱建物である。B区中央こ・さ35・36Grに位置、SI48・SB52・SB60と重複する。主軸はN-30°E。柱間寸法は、桁間128～212cm梁間180～200cmである。柱穴プランは円形・不整形・楕円形を呈し、規模は36～68cm、深さ12～28cmであり、旧地形に添った深さを持っている。柱の配置では、桁行のP6・10が若干外側に飛び出す如く位置、梁行でも中柱それぞれが飛び出して配置され、P2では柱筋が通らない。上面削平の影響により、いずれの柱穴も浅いのだが、掘り込みはしっかりしていると云えよう。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具22点で、時期はⅠ期に位置づけられる。

34. SB60

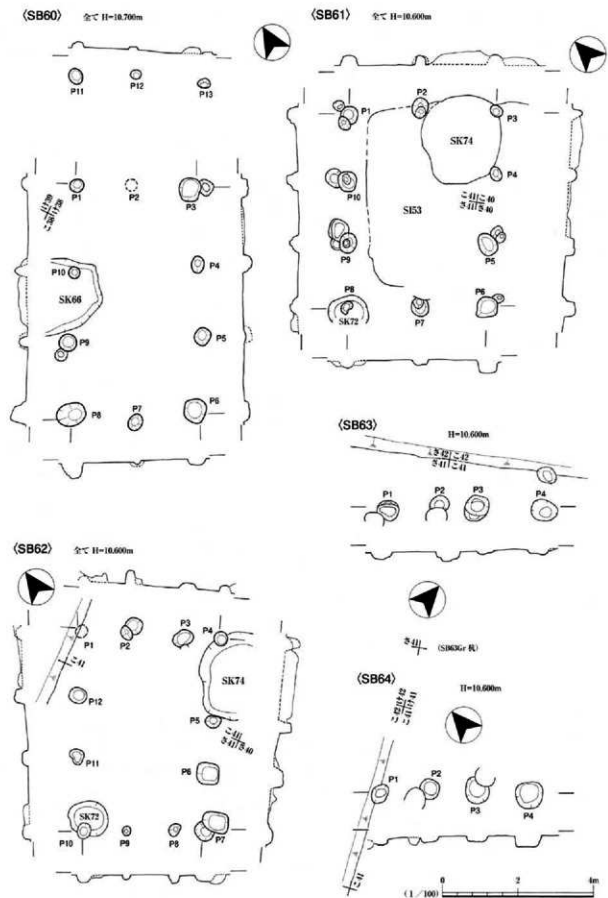
この建物は桁行8.72m梁行3.2mの4間×2間の側柱建物に間仕切りの付くタイプ、若しくは、3間×2間部分が身舎で北梁行に廂の付くタイプであろうと思われるものである。建物面積は2790㎡。B区中央け38・こ37・38Grに位置、SB59と重複し、SK65・66とも重複するが、SK65は建物内部に収まる形で位置している。主軸はN-31°E。柱間寸法は、桁間のP1・P3から南側部分で184～228cm、P1・P3から北側の梁間が両方とも272cmである。桁間は、南梁間で160cm、北梁間は148～184cm、P1・3間の梁間寸法で140～192cmを測る。桁間128～212cm、梁間180～200cmである。柱穴プランは円形、規模は28～76cm、深さ6～36cmである。柱穴の並びに関しては梁行の中柱の柱筋が通らず、桁行の並びから若干ずれるもの何となく柱筋は通っていたものと思われ、建物は成立したものと思われる。ただ、よく掘り込まれているしっかりした柱穴を持つ反面、貧弱なものも多く、崩付きとするには疑問が残るものでもある。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具20点で、時期はⅢ～Ⅴ1期に位置づけられるものである。

35. SB61

建物規模が、桁行5.08m梁行3.8mで面積19.3㎡、3間×2間の側柱建物である。B区中央北西寄り、こ・さ40・41Grに位置、削平区域であり、また遺構密集区に位置する建物である。重複する遺構は、SI52・SI53A・B・SE38・39・62・63・SK74である。主軸はN-46°E。柱間寸法は、桁間160～180cm、梁間180～200cmである。柱穴プランは円形・方形・楕円形を呈し、径28～52cm、深さ16～32cmを測る。柱の配置に関しては、西桁行・南梁行が均等配置されており、これらを基準に他が掘り込まれたと予想するが、P4が外側に若干ずれている。柱筋の通りは比較的良好である。建物廃絶時に柱は抜かれ埋め戻されており、覆土で焼土などが多量に入る人為的崩土を確認している。出土遺物は、土師器煮炊具7点のみで、時期はⅠ～Ⅱ?期に位置づけられるものである。

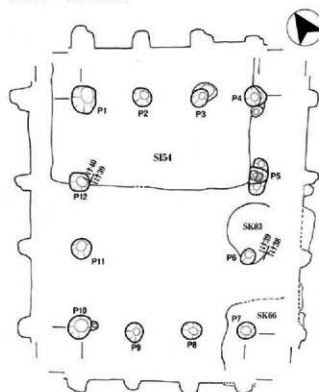
36. SB62

SB61と同区域の遺構密集地帯に位置する。主軸はN-38°E。建物規模は、桁行5.08～5.2m梁行3.2～3.8m、面積17.99㎡、3間×3間の側柱建物である。南梁行が穿まる形状で全体に台形状のひしゃげた形状となっている。柱間寸法は、桁間140～216cm、梁間80～148cmである。柱穴プランは円形・方形・楕円形を呈し、径20～52cm、深さ16～36cmを測る。建物自体ひしゃげているが、柱筋の通りは良い。深さや形状にばらつきがみられ、計画性に欠く印象であり、簡易的な建物であった可能性は高いと判断する。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具7点であり、時期はⅡ2～Ⅲ期に位置づけられるもの。また、この他中世Ⅰ期に相当する遺物

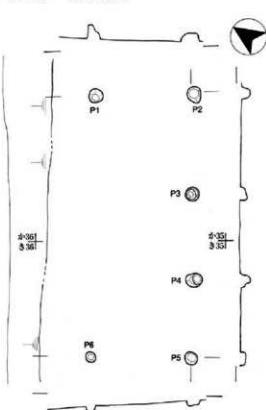


第63図 掘立柱建物遺構図10 (SB60・SB61・SB62・SB63・SB64)

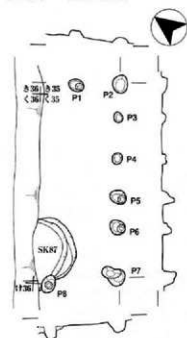
(SB65) 全て H=10.600m



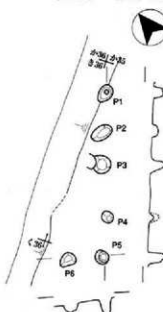
(SB66) 全て H=11.800m



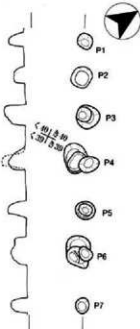
(SB67) 全て H=11.600m



(SB68) 全て H=11.600m



(SB69) H=10.300m



第 64 図 掘立柱建物遺構図 11 (SB65・SB66・SB67・SB68・SB69)

破片が2点出土し混在している。

37. SB63

SB61・62と同区域の遺構密集区に位置する。この遺構は、おそらく桁行と考えられる1柱穴列のみ検出されたものである。検出されたのは3間分で、長さ4.2m、桁間寸法100～180cm。主軸はN-47°Eと考えられる。柱穴は円形・方形を呈し、径44～68cm深さ6～24cmを測る。上部削平の影響で、浅いがしっかりとした掘り込みをもち、底面に有段、深さは旧地形に添っているもの。遺物は出土しておらず、時期不詳である。

38. SB64

SB61・62と同区域の遺構密集区に位置する。この遺構も、しっかりと掘り込みをもつ1柱穴列のみ検出されたものである。検出されたのは3間分で、長さ4.0m、桁間寸法120～140cm。梁行と考えられようか。主軸はN-40°E、SB39の主軸と同じであり、SB39の底的なものとも思われる所であるが、SB39が1期の年代を示し、柱穴の規模等からも別のもと思われる。柱穴は方形を呈し、径40～72cm深さ12～28cmを測る。削平の影響でP1が貧弱であるのだがP4と同じレベルの深さをもっており、本来同様の柱穴であったと予想可能で、両端の柱穴が深く中柱が浅いタイプのもと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具21点で、時期はⅡ2～Ⅱ3期に位置づけられる。

39. SB65

建物規模が、桁行6.2m梁行4.4m、面積27.28㎡、3間×3間の側柱建物である。B地区中央、け39・40Grに位置、S154と重複、S113とも建物南東で重複する。主軸はN-35°E。柱間寸法は、桁間172～232cm、梁間120～152cmであるが、相対する位置に柱がきれいに配置されている。柱穴プランは円形・方形を呈し、径48～72cm、深さ24～60cmを測る。掘り方欄面に12本中9本が段掘をもっているが一定方向ではない。柱筋は、P9が若干外側にずれ、P5もずれて平面図上表現されているのだが、S154によるものであり、全体的に柱筋の通りはよかったものと考えている。建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されており、覆土で確認している。出土遺物は、須恵器食膳具7点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具35点、カマド石など石製品1点であり、時期はⅡ2期に位置づけられる。

40. SB66

建物規模が、桁行6.92m梁行残存で3.72mを測り、推定面積35.43㎡、3間×推定2間の側柱建物である。B地区北東側の削平区域、か・き35Grに位置、SB68と重複する建物で、西側の特に削平の著しい部分にかかり、全体の1/4を消失している。主軸はN-56°E。柱間寸法は、桁間200～260cm、梁間252～260cmを測る。柱穴プランは方形・不整形を呈し、径26～44cm、深さ12～36cm、上面削平の影響が色濃く現れていると思われる。柱筋の通りは良く、深さは旧地表に添って掘り込まれている。遺物は出土しておらず、時期は不詳である。

41. SB67

SB66の南に位置するもので、SB68と重複する。SB66同様に西側が削平され、おそらく全体の1/2を消失している側柱建物である。主軸はN-55°E。建物規模は、桁行5.08m、梁行残存で2.0mを測り、桁行5間×梁行は2ないし3間か。残存南梁行の2倍と想定すれば、25.4㎡程となる。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径24～48cm、深さ8～32cmを測り、上面削平の影響が色濃く現れている。桁行の深さは旧地表に添っているのだが、全体的には深さにばらつきがあり、簡易な印象を受ける。基本的に柱筋の通りは良いのだが、P8のみずれが生じている。出土遺物は、土師器煮炊具1点のみで、時期は不詳である。

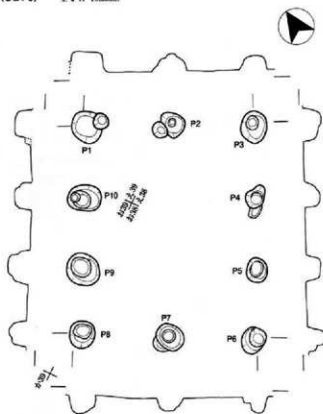
42. SB68

SB66・67間で両者と重複し、西側削平により建物の一部しか残っていない建物。桁行と思われる並びは4間で残存長4.4m、梁行と思われる方は1間分しか検出されず、残存長1.68mである。柱間寸法は、桁行80～140cmと不均一であり、梁行は100cm。柱穴配置ではP4にずれがあるが、柱筋は通るものである。主軸はN-36°Eとしておく。柱穴プランは円形・不整形・楕円形と様々で、径32～48cm、深さ18～44cmと様々な値をもつ。計画的に建てられたものではなく、簡易な建物なのであろう。出土遺物は土師器煮炊具1点のみで、時期は不詳である。

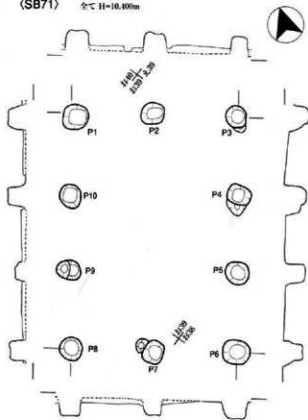
43. SB69

B地区北寄りの、き39・40Gr、SB85A・Bの南梁行に重複するもので、1柱穴列のみ検出されたものである。柱穴規模は、径40～60深さ28～60cmを測り、しっかりと掘り込まれている。この柱穴列は、SB85Bの南梁行

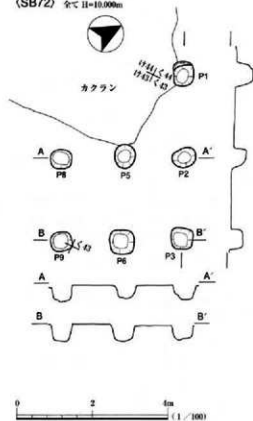
(SB70) 全てH=10.600m



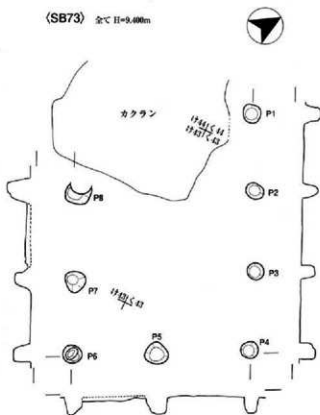
(SB71) 全てH=10.400m



(SB72) 全てH=10.000m



(SB73) 全てH=9.400m



第65図 掘立柱建物遺構図 12 (SB70・SB71・SB72・SB73)

の可能性があったものの、両者の覆土が違うことなどから、別のものとして扱っている。検出された柱穴列は5間で長さ688mを測る。柱間寸法は112～200cm、プランは円形で側面に段堀やスロープをもつものである。柱圧痕が検出されており、その径は20～24cmであった。柱筋はP4が若干ずれるものの、通りは良いものと思われる。この柱穴からの遺物は出土しておらず、時期不詳である。

44. SB70

建物規模は桁行5.6m梁行4.52mを測り、面積25.31㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区北東へ・お38・39Grに位置、SB71・SB84と重複する。建物内部に被熱床が検出されているが、この建物に伴うか否かは不明である。主軸はN34°EでSB81と同じである。柱間寸法は、桁間180～200cm、梁間224cmである。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径48～92cmで平均80cm程、深さ40～60cm、P1以外の全ての柱に段堀が確認される。段堀は一定方向を呈しておらず監督性は伺えないものの、しっかりとした掘り込みをもつ。柱筋の通りは良い。また、覆土では掘り方土が側面に残存する他、下底部分で基礎固め又は柱根本のレベル調整土と考えられる層を確認、埋め戻し土も確認、廃絶時に柱は埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具41点と、掘立柱建物としては多く、時期はⅡ3～Ⅲ期に位置づけられる。

45. SB71

建物規模は、桁行6.2m梁行4.4mを測り、面積27.28㎡、3間×2間の側柱建物である。B地区北東へ・か38・39Gr、SB70・SB84と重複する。主軸はN20°E。柱間寸法は、桁間200～212cm、梁間216cm。柱穴プランは円形・方形を呈し、径60～72cm、深さ48～60cmで、しっかりした柱穴をもつ。円形プランは元々方形であった可能性がある。柱筋の通りは良い。P5・6・7・10には柱跡が残っている。これら以外の柱は廃絶時抜き取られ埋め戻されている。また、殆どの柱穴下底で基礎固め又は柱根本のレベル調整土と考えられる土が検出されている。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具14点と、砥石1点が出土し、時期は、Ⅰ1～Ⅱ2期に位置づけされる。

46. SB72

建物規模は、桁行4.4m梁行3.2mを測り、面積14.08㎡、2間×2間の高床・総柱建物である。建物の一部が近代擾乱により消失している。B地区北西く・け43Gr、SI74・SB73と重複する。主軸はN60°W。柱間寸法は、桁間220cm、梁間160cm。柱穴は方形を呈し、径56～64cm、深さ36～44cmで、しっかり掘り込みをもつ柱穴である。方形プランの上端ラインが直線と揃うということはないが、柱筋の通りは良好、並列に均等配置されている。P5のみ柱跡が残存し、この径が24cmであった。これ以外は廃絶時に抜き取られている。また、P9のみ基礎固めと思われる土を下底で確認している。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具2点と、カマド石が1点出土し、時期はⅡ期に位置づけされる。

47. SB73

SB72と同様の位置と主軸である。建物規模は、桁行6.2m梁行4.6mを測り、面積28.52㎡、3間×2間の高床柱建物である。SB72同様に建物の一部が近代擾乱により消失するもの。柱間寸法は、桁間188～220cm、梁間220～240cm。柱穴は円形で、径44～64cm深さ40～60cm、P1のみ深めだが他は同じような深さを呈し、しっかりした掘り込みをもつ。側面に段堀やスロープが見られるが一定方向には定まっていない。P1・3～5で柱筋を確認しており、この径は15～20cmを測る。これ以外は抜き取りされている。また、P3・5で覆土底面に地盤固めか根固めの土を確認している。柱穴の並びに関してはP3が外側にややずれるものの、総じて柱筋の通りは良好である。出土遺物は、須恵器食膳具3点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具12点であり、時期はⅡ2期である。

48. SB74

B地区北西端、け・こ44Grに位置。側平によりかなりの部分が消失する建物であり、桁行と思われる2間分、梁間と思われる1間分の柱列が検出されたもので、側柱建物と考えるもの。柱間寸法は、桁間128～160cm、梁間140cm。主軸はN20°Eとしておく。柱穴プランは円形で、規模は径40～64cm、深さ20～40cmである。梁行側が拡張して替えられており、P3では柱を抜いた後しっかりと土を入れて上層を貼った痕跡を覆土で確認している。柱筋の通りは良い。出土遺物は、須恵器食膳具1点のみ、Ⅰ～Ⅱ1期に見られる時期のものである。

49. SB75

B地区北西側け40・41・こ41Grに位置し、SB76・77・78と重複する建物である。建物規模は、桁行5.72m梁行4.6

mを測り、面積26.31㎡、3間×2間の側柱建物である。主軸はN-51°-W。ただし主軸に関しては梁行方向がほぼ北方向に沿っているため、北に対し横向きに配置された建物と考えられる。柱間寸法は、桁間192cm、梁間220～240cm。柱穴は円形・方形・不整形を呈すが、円形・不整形プランも元々方形であった可能性がある。柱穴規模は、径52～80cm、深さ20～40cmで、しっかりした掘り込みをもつ。全ての柱穴底部に柱圧痕を検出しており、柱筋の通りは非常に良好である。柱圧痕から測った径は30cm弱。覆土には側面に掘り方埋土が残存、他は抜き取り後の埋め戻し土である。P9のみ柱基礎固め土を確認している。柱抜き取り痕跡をP4・6・7で確認しており、抜き取り方向は全て西梁行方向であった。完全ではないが柱配置は計画的で規格性をもつと言えよう。また、南桁行の掘り方上場ラインが揃っており、この柱列を基準として、この建物は建てられたと考えている。柱穴掘削当初のみ指導者・監督者がいたのかもしれない。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具16点、カマド石が1点であり、時期はⅢ期前後と位置づけされる。

50. SB76

建物規模が、桁行3.0m梁行2.72mを測り、面積8.16㎡、2間×2間の高床・総柱建物である。SB75と同じ位置にあり、SB75・78と重複する。主軸はN-43°-E。柱間寸法は、桁間148～152cm、梁間128～140cm。柱の内側に添柱を持つものが多い。柱穴は方形を呈し、径52～64cm深さ12～32cm、四隅の柱が深めである。しっかり掘り込みをもつが、総柱としてはやや規模が小さい。また、P8-9のみ柱圧痕を検出している。柱筋の通りは、P3が若干外側へずれるが良好であり、南桁行はプラン上端外側ラインが揃っている。建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されておらず、柱穴側面に掘り方埋土が残存しているものもある。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具5点、カマド石等の石製品2点が出土し、時期はⅡ～Ⅳ期に位置づけられるものである。

51. SB77

建物規模は、桁行3.32～4.12m梁行3.4～3.72mを測り、面積13.24㎡、2間×2間の高床・総柱建物と考えているもの。B地区北側け40・41Gr、SI54・SB76と重複する。主軸はN-42°-E。柱間寸法は、桁間176～200cm、梁間140～208cm。柱穴は円形を呈し、径28～56cm、深さ10～34cmで、掘り込みは比較的しっかりする。覆土はSB76に似て、柱抜き取り土層となっている。総柱建物としては柱穴も小さく、建物プランが台形状のひしゃげた形を呈しP8が軸から外れることもあり、建物が建つかどうか疑問も残るが、柱筋は通っている。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具3点で、時期はⅡ～Ⅳ期に位置づけされるものである。

52. SB78

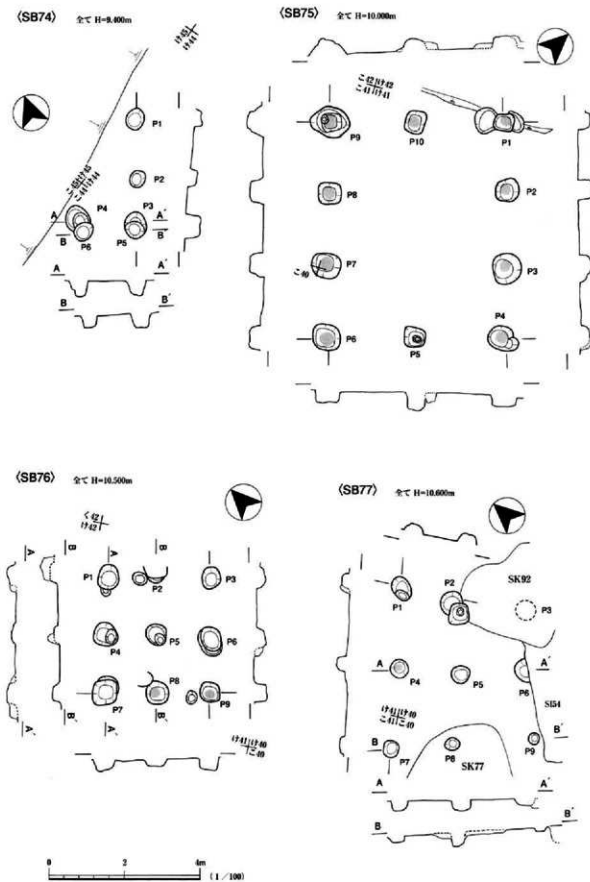
B地区北西側、く・け41・42Grの削平区域に位置するもので建物の西側約1/2を消失している。SI74・SB75・76と重複する。主軸はN-42°-E。建物規模は、桁行6.4m梁行残存3.8mを測り、推定面積で24.32㎡程になろうか。4間×2間若しくは3間の側柱建物である。柱間寸法は、桁間140～192cm、梁間180～200cm。柱穴は円形・不整形を呈し、径28～52cm、深さ20～40cmで、桁行は旧地形に添った深さをもつ。柱穴の配置に関しては、P3が1本分外側に飛び出すようにずれ、P6も内側にずれており、P3を通過すると全体がひしゃげた形状となってしまう。規格性の乏しい建物である。柱穴には添柱と思われる小ピットが付随するものが多い。出土遺物は、土師器煮炊具9点で、時期はⅠ・Ⅱ期に位置づけされるものである。

53. SB79

B地区北東端い・う38Grに位置、SI68と重複する。削平により建物の東側が消失、梁行は1間分のみ検出された。主軸はN-49°-E。建物規模は桁行6.08m梁行残存2mを測り、面積は推定24㎡程になろう。おそらく3間×2間と思われる側柱建物である。柱間寸法は、桁間180～240cm梁間200cm。柱穴は円形、径48～60cm深さ8～32cmで、梁行は旧地形に添い、桁行はP5のみ浅いが他は底面レベルが揃う。桁行の柱筋の通りは良いが、梁行P2がずれている。廃絶時には柱は抜き取られている。遺物は、出土しておらず、時期は不詳である。

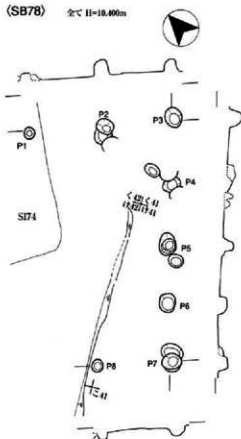
54. SB80

B地区北西端、う38～40・え39Grに位置し、削平により建物の北側を消失する建物である。SI70・SB81と重複する。主軸はN-35°-E。桁行3間分が検出されており、残存建物規模は、桁行残存5.6m梁行4.32mを測る、側柱建物である。面積は残存で24.19㎡。柱間寸法は、桁間180cm、梁間216cm。柱穴は円形・方形を呈し、径52～80cm、深さ22～52cmで、しっかりした掘り込みをもつものである。柱圧痕が検出されているものがあり、径が25cm程である。柱筋の通りは良い。廃絶時には柱は抜き取られており、単層の埋め戻し土が覆土となっている。SB81との

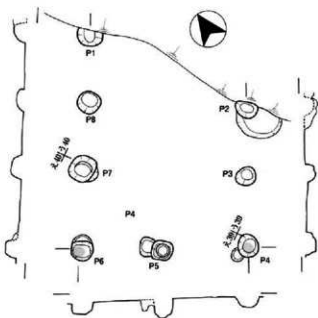


第66図 掘立柱建物遺構図13 (SB74・SB75・SB76・SB77)

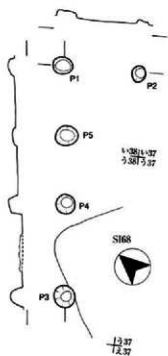
(SB78) 全てH=10.400m



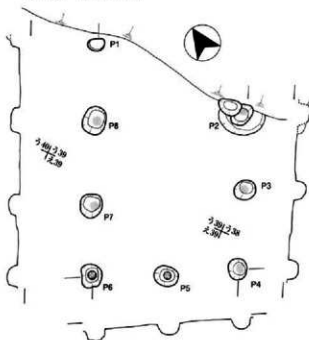
(SB80) 全てH=10.300m



(SB79) 全てH=10.400m



(SB81) 全てH=10.300m



0 2 4m
(1/100)

第 67 図 掘立柱建物遺構図 14 (SB78・SB79・SB80・SB81)

切り合いは、SB80が新しいものと覆土層で確認されている。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器食器具1点、土師器煮炊具17点で、時期はⅡ期頃と位置づけられるものである。

55. SB81

SB80と同位置で、削平により建物の北側を消失、桁行3間分が検出されているもの。主軸はN34°-E。残存建物規模は、桁行残存6.2m、梁行3.8mを測る個柱建物である。面積は残存部分で23.56㎡。の柱間寸法は、桁間180～220cm、梁間188～200cm。柱穴は円形・方形を呈し、径56～72cm、深さ28cmで、しっかりと掘り込みレベルが同一を呈す。全ての柱穴に窪みを伴う柱圧痕が検出されており、径は最大24cm最小20cmであった。柱筋の通りは総じて良好だが、P6のみ若干外側に位置しており、P6を通すと桁行と梁行が直行せず、梁行に重みが生じる。廃絶時には柱は抜き取られており、単層で締まりのない埋め戻し土が覆土となっている。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具5点で、時期はⅡ～Ⅳ期と位置づけられるものである。但し、Ⅱ期頃とされるSB80に切られているため、SB81もⅡ期頃のものとして判断される。

56. SB82

B地区北端う・え40Grに位置、SI71・72・SB83と重複する。SI72の調査を先行したため建物北側は検出されおらず、北東も削平されている。桁行と考えている3間は残存長5.2m、梁行検出の1間は残存長で2.8mを測る個柱建物と思われるもの。柱間寸法は、桁間120～180cm、梁間192cmである。面積は、3間×2間と想定すれば、19.66㎡となる。柱穴は円形・楕円形を呈し、径26～48cm深さ20～36cm、柱筋の通りは良い。廃絶時に柱は抜き取られ、単層で締まりのない土が覆土となっている。遺物は、出土しておらず、時期は不詳である。

57. SB83

桁行1間分と梁行2間分が検出された個柱建物である。SB82の南側に位置する建物で、SI72の調査を先行したため建物北側は検出されていない。残存桁行長3.2m、梁行3.6mを測る。柱間寸法は、桁間・梁間とも180cmである。柱穴は円形・方形を呈し、径36～44cm深さ32～44cm、柱筋の通りは良い。円形として掲載図面上に表現されているが、調査時には方形を呈していたようだ。柱穴は小さいが深くしっかりと掘り込まれている。出土遺物は、土師器煮炊具1点のみで時期は不詳である。

58. SB84

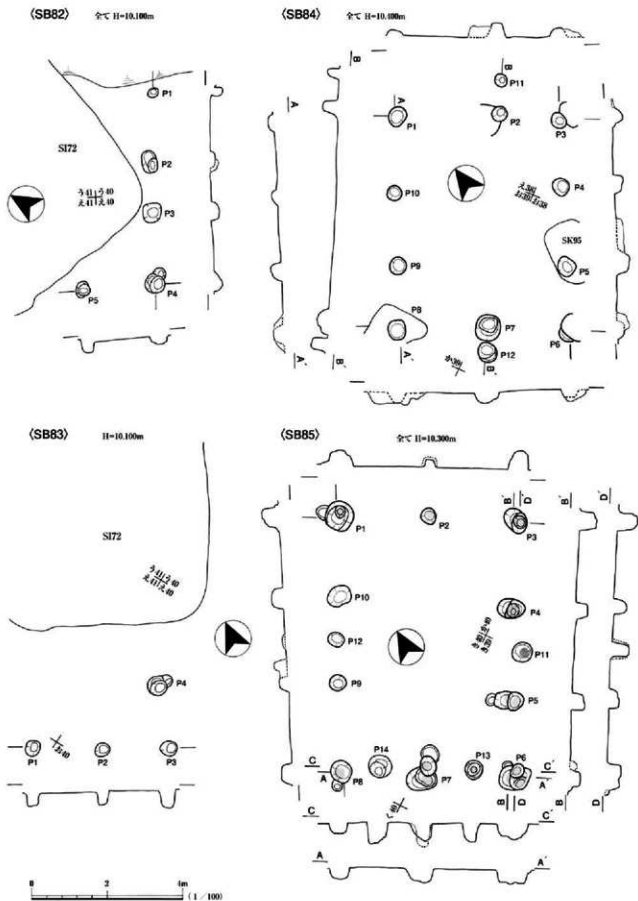
建物規模が、桁行5.6m、梁行4.4m、面積24.64㎡を測る、屋外に棟持柱を伴う個柱建物である。B地区北側、え・お38・39Grに位置、SB70・71と重複する。主軸はN32°-E。柱間寸法は、桁間160～200cm、梁間160～268cm、柱穴は円形を呈し、径40cm、深さ12～32cmを測る。梁間寸法が均等でない配置をしており、この梁間中柱に繋がるように屋外に柱穴が検出されたことで棟持柱とした。ただ、棟持ち部分が桁行軸に平行とならずひしゃげるため、疑問も残るもの。棟持柱とした柱穴は径32～56cm深さ32～44cmを測る。但し、個柱にしろ、両者棟持柱にしろ、柱筋の通りは良い。出土遺物は、須恵器食器具2点、土師器食器具1点、土師器煮炊具11点、カマド石1点が出土し、時期はⅡ期と位置づけられる。

59. SB85

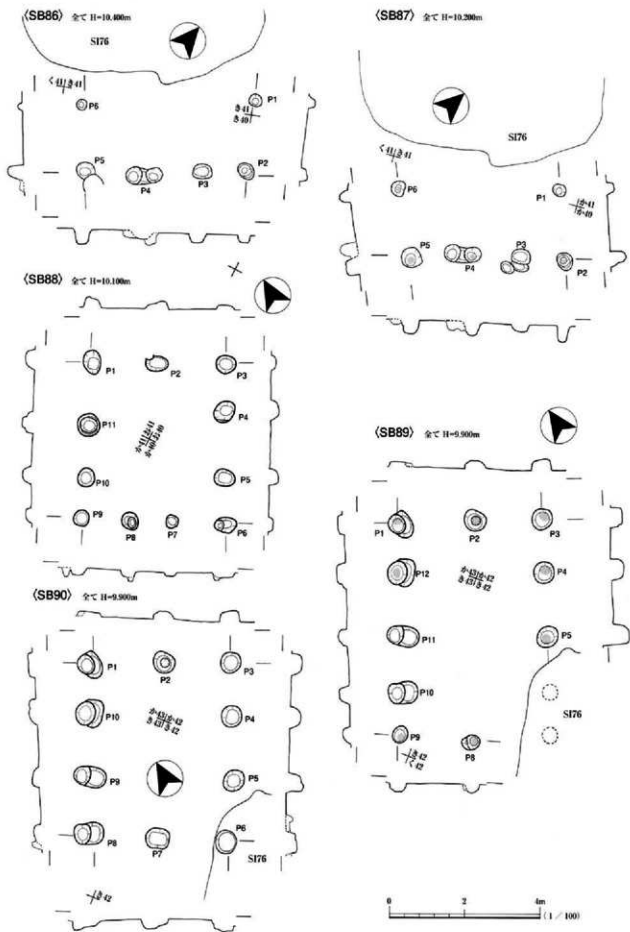
B地区北側、か・き39・40Grに位置、SB69・86・87・96と重複する。主軸はN31°-Eで、SB88やSB96と同様の軸をもつものである。この個柱建物は西桁行に2列の桁行をもつ。内側の列をA、外側の列をBとする。両者の関係は、Bの覆土がAを切っていることを確認しており、拡張して替えられたものと判断している。建物規模は、桁行A6.8m B6.68m、梁行がA4.6m B4.8mを測り、面積はA31.28㎡、B32.06㎡である。柱間寸法は、桁間がP11・12を含めなくて220cm、梁間はA220～232cm。BはP13・14が違う可能性があり、これらを含めなければ232～240cmである。P11・12は桁行中央に位置、この建物に伴うのかわからないのだが、均等に配置されているものである。伴うのであれば、Bの方なのであろう。柱穴は円形を呈し、径40～76cm、深さ32～48cmである。柱筋の通りは良く、梁行では旧地形に添った深さをもっており、梁間の中柱は浅いものの、しっかりと掘り込みをもつものである。なお、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食器具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具25点であり、時期はⅡ2～Ⅱ3期と位置づけられる。

60. SB86

SB85西側の、き40・41Grに位置、SI76・SB87と重複するが、SI76の調査を先行させたために梁行3間分と桁行1間分が検出された個柱建物である。主軸はN58°-E。梁行長は4.72m、桁行長は残存で2.6mである。柱間



第 68 図 掘立柱建物遺構図 15 (SB82・SB83・SB84・SB85)



第69図 掘立柱建物遺構図16 (SB86・SB87・SB88・SB89・SB90)

寸法は、桁間176cm、梁間112～160cm。柱穴プランは円形を呈し、径24～48cm、深さ12～44cmを測る。柱の並びに関しては、P1がずれるために内梁行が広がる形状をとり、桁行・梁行を直角にするとP1が通らなくなる。これ以外の柱筋の通りは良好である。ただ、柱穴の深さはばらばらであり、柱穴の配置から考えても簡易的な建物であったと思われる。なお、遺物は出土しておらず、時期は不詳である。ただ、古代の建物であることには違いないだろう。

61. SB87

SB86と同様の位置と状態を示す建物である。検出された3間分の梁行は4.0m、桁行は1間分検出され、長さが32mである。建物主軸はN-50°-W。柱間寸法は、桁間180cm梁間112～160cm、側柱建物である。柱穴プランは円形を呈し、径36～50cm、深さ20～44cm、掘り方側面には段場やスロープが見られる。廃絶時に柱は抜かれ埋め戻されていることを覆土で確認しており、下層に崩り方堀土が残存するものもある。柱圧痕が残っているものが検出されており、この径は20cmであった。柱の並びは良くなく、桁行柱を通すと、建物はひしげた形状を示すこととなり、また、P4も若干内側にずれている。柱も細く、深さもばらつきが見られ、SB86同様に規格のない簡易な印象の建物である。遺物の出土はなく、時期不詳だが、古代の建物でよいだろう。

62. SB88

建物規模が、桁行4.2m、梁行3.6m、3間×2(3)間の側柱建物である。建物面積は15.12㎡を測るB地区北側、お・か40・41Grに位置し、SI71・SB96と重複する。主軸はN-31°-E。柱間寸法は桁間・梁間とも100～180cmである。柱穴は円形・不整形・楕円形を呈し、径32～60cm、深さ10～28cmを測る。P6・9が外側に飛び出る様に配置されるが、柱筋の通りは良好である。廃絶時には柱は抜き取られ、埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器煮炊具3点、カマド石等の石製品4点で、時期はⅡ1～Ⅱ2期に位置づけられる。

63. SB89

B地区北側、お・き42・43Grに位置し、SI76・SB90・SB98と重複する。建物規模は桁行5.6m梁行3.88m、面積21.72㎡の、4間×2間側柱建物である。主軸はN-34°-E。柱間寸法は、桁間120～180cm、梁間180～200cmである。柱穴プランは円形や不整形を呈し、径40～56cm深さ12～40cmを測る。深さが桁行で旧地形に添う状態を示すところもあるが、しっかり掘り込まれているものである。柱穴には柱圧痕が残存するものが多く、この径が最大で24cmであった。P8が外側にずれるもの、P8以外の柱筋の通りは良い。また、廃絶時に柱は抜かれ、埋め戻されている。SB90と重複する事に関しては、土層断面でSB89がSB90を切っていることを確認しており、SB90が古い。出土遺物は、SB89で須恵器食膳具6点、土師器煮炊具37点であり、時期はⅡ2期に位置づけられるもの。この他中世1期の重破片1点が出土混在する。なおSB90から出土する遺物の時期はⅡ2～Ⅲ期に位置づけられていることから、両建物はⅡ2期間に拡張し建て替えられたとすることも可能であろう。

64. SB90

SB89と同様の位置・重複をもつ建物である。建物規模は、桁行4.6m梁行3.6m、3間×2間の側柱建物である。建物面積は16.56㎡、主軸はN-35°-Eである。柱間寸法は、桁間140～160cm梁間180cmを測る。柱穴は、円形・方形を呈し、径60cm深さ16～40cm、側面に段場やスロープをもつものが多く、しっかりと掘り込まれている。また、柱筋の通りも良い。柱は抜き取り埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具12点、この他カマド台石1点が出土し、時期はⅡ2～Ⅱ3期である。

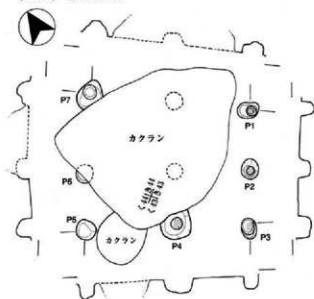
65. SB91

B地区北西の、お・き43・44Grに位置する建物でSB92と重複する。近代攪乱により建物中央を消失するもの。2間×2間の高床・総柱建物と考えられるもので、建物規模は桁行3～3.4m、梁行4.2m、建物面積13.44㎡、主軸をN-54°-Wにとる。柱間寸法は桁間140～200cmで、梁間180～240cmである。柱穴は円形・方形・不整形で、径44～80cm、深さ36cmを測り、掘り方側面や底面に段場を有するものがある。柱圧痕が4本だけ認められ、その径は最大28cmであった。柱の配置や並びについては、柱筋は通るのだが、P1がずれるために、北端のみ重んだ形状となるようである。これで総柱建物として成立するの疑問が残るものの、他の部分の検出があるので、成り立つのであろう。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点のみ。時期は不詳である。

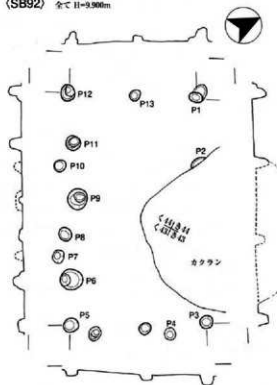
66. SB92

SB91の南側に位置し、北東梁行に近代攪乱を受ける建物だが、規模復元は十分可能で、建物規模は、桁行6.09

(SB91) 全てH=9.800m

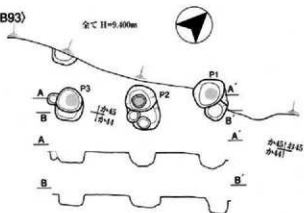


(SB92) 全てH=9.900m

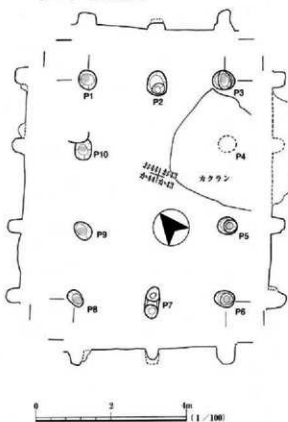


(SB93)

全てH=9.800m

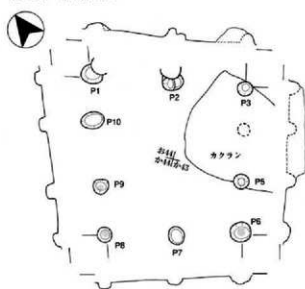


(SB94) 全てH=9.800m



(SB95)

全てH=9.900m



第70図 掘立柱建物遺構図17 (SB91・SB92・SB93・SB94・SB95)

m 梁行 3.88 m、面積 23.59 m² の 4 間 × 2 間、側柱建物である。北東梁行は 3 間である可能性があろうか。主軸は N-62° -W。柱穴プランは円形で、側面に段階を有するものがあり、径は 28 ~ 56 cm 深さ 16 ~ 36 cm と中柱が浅い傾向をもちつつ、深さは旧地形に添ったものとなっている。柱の並びに関しては、P4 がやや外側にずれ、P9 は完全に内側に配置されて柱筋が通らない。この 2 本を除けば柱筋は通っている。廃絶時には、柱は抜き取られ埋め戻されている。なお、南西桁行では、軸の外に位置して小ピットが検出されており、関連があるのだろうか。また、南梁でも同じような屋外に位置するような小ピットが 2 つ検出されている。出土遺物はなく、時期は不詳である。

67. SB93

B 地区北側、建物の殆どが削平のため消失しており、柱穴 3 本列のみ検出された建物。柱穴プランは円形・方形を呈し、径 80 cm 深さ 32 cm を測る。削平区域であるにもかかわらず、しっかりと掘り込みをもち、深さは旧地形に添っている。南北軸とすれば検出された 3 本列は梁行でよいのだろうか。この梁行の長さは 3.6 m を測る。主軸は N-48° -W。これら検出された柱穴の覆土から、外側に更に柱穴を確認しており、内側列を A、外側列を B とした。A 柱穴では柱圧痕を検出、この径は最大 36 cm である。また、B では締まりの強い黒褐色土に明褐色粘土を混する土が埋められており、これを切って A が構築されたことを確認している。これら柱穴・柱の規模から、おそらく総柱建物と判断可能であり、B 建物から A 建物へ立って替えられている。よって、面積は推定で 13 m² 程になろうかと思われる。出土遺物は、須臾器食器 1 点、土師器煮炊具 5 点で、時期は I 期と判断される。

68. SB94

建物規模が、桁行 5.8 m、梁行 3.8 ~ 3.92 m、3 間 × 2 間の建物面積 22.04 m² を測る側柱建物である。B 地区北側、お・か 43・44 に位置し、SB95・98 と重複する。建物の内外には堆山被熱層が確認される。主軸は N-40° -E。柱間寸法は、桁間・梁間とも 180 ~ 200 cm である。柱穴プランは円形を呈し、径 52 ~ 60 cm、深さ 32 ~ 52 cm を測る。柱穴内には柱圧痕の残存するものがあり、最大径が 22 cm であった。柱の配置に関しては P8 が若干外側に配置するために南西梁行がやや広がる形状を呈すが、柱筋の通りは良好と言えよう。建物廃絶時には柱は抜き取られている。なお、重複する SB95・98 は出土遺物より同じ時期に立てられていたものと考えられる。覆土の斬り合いから、SB94 が最も古いものと判断している。出土遺物は、須臾器貯蔵具 2 点、土師器貯蔵具 2 点で、時期は II 期に位置づけられる。

69. SB95

SB94 と同様の位置で検出したもの。建物規模は、桁行 3.8 ~ 4.2 m、梁行 3.6 ~ 4.0 m を測り、面積は 15.2 m² の 3 間 × 2 間側柱建物である。主軸は N-39° -E。柱間寸法は、桁間 120 ~ 180 cm 梁間 168 ~ 208 cm である。柱穴プランは、円形・楕円形で、径 36 ~ 56 cm 深さ 16 ~ 26 cm を測る。柱 3 本分に柱圧痕が確認されており、この径が最大 18 cm であった。柱の深さに関しては、基本的に旧地形に添っているものと考えられ、柱の並びに関しては桁行と梁行が直角にならず、歪んだものとなっている。ただし柱筋は通っている。柱穴の規模や配置から、計画性のない簡易な建物と言えるだろう。なお、出土遺物は、土師器煮炊具 1 点のみで、時期は不詳である。

70. SB96

建物規模は桁行 5.4 m 梁行 3.32 m、建物面積 17.92 m² の 3 間 × 3 間、側柱建物である。B 地区北側お・か 40・41Gr に位置し、SI71・SB85・SB88 と重複する。主軸は N-30° -E。柱間寸法は、桁間 160 ~ 180 cm、梁間 112 cm を測る。柱穴プランは円形・不整形・楕円形を呈し、径 30 ~ 72 cm、深さ 20 ~ 48 cm。柱穴側面に段階やスロープが見られる。柱穴の配置は軸からずれるものも見られるが、柱筋の通りは良好である。柱穴はしっかりと掘り込まれた良好なものがある反面、浅いものもあって一定ではなく、旧地形に添った深さを呈する並びも見られたりと、様々である。建物廃絶時に柱は抜き取られ埋め戻されている。また、P8 の下底に基礎固め若しくは柱根本のレベル調整のための土を確認している。出土遺物は、須臾器貯蔵具 1 点、土師器食器 1 点のみ、時期は不詳である。また、この建物は SB85 と繋がるように隣接して位置しており、桁行同士が繋がる状態であるが、柱穴の規模などから別のものと現地で判断している。

71. SB97

B 地区の SI76 南側に位置、柱穴 1 列のみ良好な状態で検出されたもの。柱穴プランは円形で径 40 cm 深さ 20 ~ 38 cm を測る。P3 がずれるものの、しっかりと掘り込みをもち、3 間ないし 4 間分、長さ 4.6 m である。側柱建物の一部であろう。出土遺物は、須臾器食器 1 点、土師器煮炊具 5 点で、時期は II 期頃? と判断される。

72. SB98

SB94・95と同様の位置である。建物規模は、桁行2.44～2.68m、梁行3.52～3.8、2間×2間の側柱建物として検出したものである。建物面積9.36㎡、主軸はN-40°-E。柱穴プランは円形・楕円形を呈し、径32～50cm、深さ20～28cmを測る。柱穴の配置は均等ではなく、P3がずれることにより、P3方向が広がる如くひしゃげた形状を呈す。柱穴には柱圧痕が残存しており、隅柱に認められる。この径が最大22cmであった。また、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されており、この覆土がSB94P1に近似する。この建物は、小型の簡易な小屋といった印象のものであるが、SB94が隣接することもあり、何か関連するものかもしれない。出土遺物は、土師器煮炊具2点で、時期はⅠ・Ⅱ期に位置づけられる。

73. SB99

B地区北端に位置し、削平のため建物西のおそらく半分を消失している建物。規模は桁行6.8m、梁行残存長で3.52m、3間×2間が妥当だろう。推定面積27.2㎡程になろうかと思われる。柱間寸法は、桁間200～260cm、梁間250cm。主軸はN-47°-E。柱穴は円形・不定形を呈し、径は38～50cm深さ16～26cmを測り、旧地形に添った深さをもつ。P4のみ柱圧痕を検出している。柱筋の通りは、P3が外側にずれる状態であるものの、比較的良好である。出土遺物は、土師器煮炊具4点のみ、時期はⅠ・Ⅱ期に位置づけられる。

74. SB100

建物規模が桁行5.2m梁行4.48m、面積23.29㎡を測る、3間×2間の側柱建物である。B地区北側、え・お42・43Grに位置、SB101と重複する。主軸はN-33°-E。柱間寸法は桁行140～180cm、梁行216cm。柱穴プランは円形・方形・不整形を呈すが、本来方形であったと思われる。柱穴規模は径60cm、深さ28～48cmを測り、柱穴底面に柱圧痕が検出されており、この径が最大30cmである。掘り込みはしっかりしており、特に四隅は深い。また、底面で段を有するものが多い。P4のみ若干ずれるが、柱筋の通りは非常に良い。また廃絶時には柱は抜き取られており、埋め戻されている。重複するSB101との関係だが、覆土でSB101をSB100が切っていることを確認しており、SB100はSB101の柱穴を利用しながら、縮小して北へずれて新たにSB100を建てたものと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具15点、カマド石1点であり、時期はⅡⅠ～Ⅱ2期に位置づけられる。

75. SB101

SB100と同位置で、SI73と重複する。建物規模は、桁行5.2m梁行4.2m、面積21.84㎡の、3間×2間、側柱建物である。主軸はN-32°-Eで、SB100と同じ主軸である。柱間寸法は桁間168cm、梁間200cm。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径38～64cm、深さ28～52cmを測る。西桁行のみ柱圧痕を確認しており、この径が20cm程である。柱筋の通りは良く、建物廃絶時には柱は抜き取られ埋め戻されている。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具1点で、時期はⅡ～Ⅳ期に位置づけられるものである。

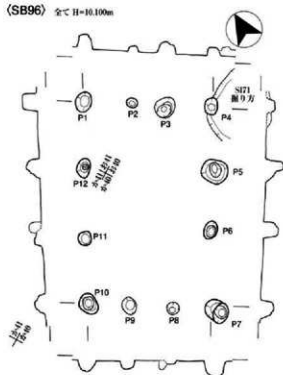
76. SB102

B地区北端え42・43Grに位置、北側削平により、おそらく桁行と考える3本分の柱穴と南梁行が検出されている側柱建物。なお、SB100・104と重複する。桁行は、3間ないし4間になるのだろう。残存する桁行は5.2m梁行5.08mである。面積は推定して、桁間3間ならば26.5㎡、桁間4間ならば34.5㎡程になるだろう。主軸はN-25°-Eである。柱間寸法は、桁間160～180cm、梁間120cmであり規格性が高い。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径は40～52cm深さ24～40cmを測るしっかりした柱穴で、四隅がより深いものとなっている。梁行の柱穴全てに柱圧痕を確認しており、この径は最大18cmであった。また、これらの柱は廃絶時抜き取られており、覆土には縛りに欠ける人為的な土が入っている。柱筋の通りについて、梁行で柱圧痕を通らないのは、柱圧痕の一部のみ検出されたためと思われる。よって、概ね通りは良いと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具9点であり、時期はⅡ3期に位置づけられる。

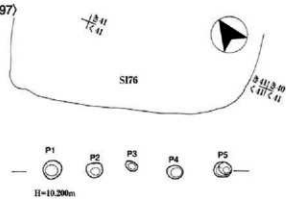
77. SB103

B地区北端え・お44・45Grに位置、建物の殆どが削平区域にかかることもあり、おそらく桁行と思われる3本のみ検出されたもの。梁行も予想可能だが、土坑によって位置不明となっている。主軸はN-32°-E。残存桁行3.8m、柱間寸法は桁間180cm。柱穴プランは方形・不整形を呈し、径は52cm深さ20～28cmを測る。P3のみ柱圧痕を確認、この径が24cmであった。柱痕跡も確認されており、この径は24～26cmである。この建物は柱を切り取って廃絶

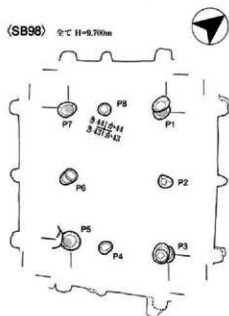
(SB96) 全てH=10.100m



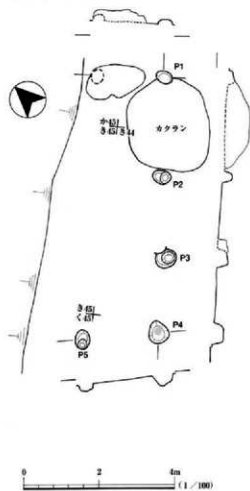
(SB97)



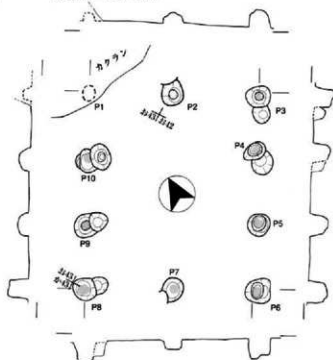
(SB98) 全てH=9.700m



(SB99) 全てH=9.500m

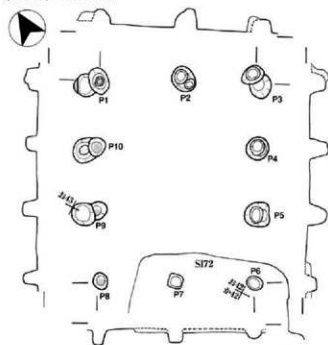


(SB100) 全てH=9.800m

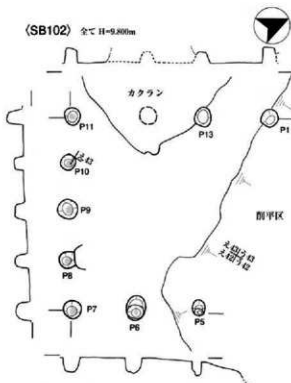


第71図 掘立柱建物遺構図18 (SB96・SB97・SB98・SB99・SB100)

〈SB101〉 全てH=9.800m

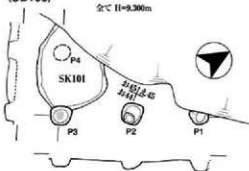


〈SB102〉 全てH=9.800m



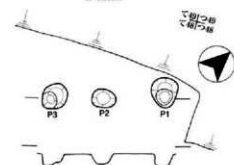
〈SB103〉

全てH=9.300m

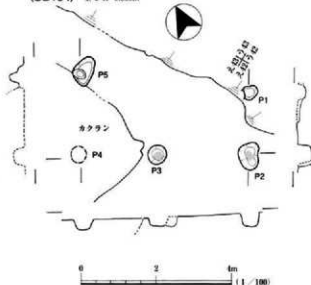


〈SB107〉

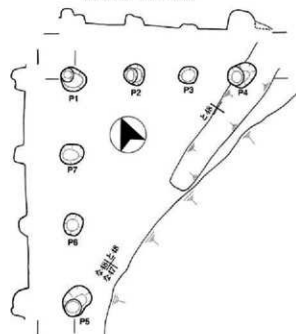
H=9.200m



〈SB104〉 全てH=9.800m



〈SB108〉 全てH=9.500m



第72図 掘立柱建物遺構図19 (SB101・SB102・SB103・SB104・SB107・SB108)

している。また、P2の下層で基礎固め・柱根本のレベル調整土と思われる土層を4cm確認している。柱筋の通りが良い。遺物は出土しておらず、時期は不詳である。

78. SB104

SB102と同様の位置であり、SB102と重複する。北側削平により、桁行と思われる1間分と南梁行のみ検出されている側柱建物である。残存桁行は3.6m、梁行4.4mを測る。3間×2間になるものと予想すれば、面積は推定24㎡程にならうか。柱間寸法は桁間180cm梁間200～228cmであり、主軸はN-20°-E。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径48～72cm、深さ20～36cmを測り、しっかりした掘り込みをもつ。2本の柱圧痕が確認されており、柱筋の通りが良い。出土遺物は須恵器食器具1点のみ、時期は不明である。

79. SB107

C地区北端、て48Grに位置、削平により建物の殆どを失っており、3本の柱穴列のみ検出されたもの。長さは30m、桁間寸法は150～160cmである。この並びが桁行とすれば、主軸はN-43°-Eとなる。柱穴は円形・方形を呈し、径48～76cm深さ24～32cm、柱筋の通りが良い。柱穴上端から4～5cm下で柱痕跡が確認でき、上層には軟質黒褐色土が認められる。柱の径は15～17cmであった。廃絶時、柱は柱穴内で切られたようである。なお、遺物は出土しておらず、時期不詳である。

80. SB108

SB107のすぐ南側に位置するもので、削平により建物の1/2を消失、SB109と重複する。建物規模は、桁行6.0m梁行4.4m、面積26.4㎡の3間×3間、側柱建物である。主軸はN-24°-E。柱間寸法は、桁間180～220cm梁間120～160cmを測る。柱穴プランは方形・不整形で、径48～80cm、深さ24～52cm、段縁をもつものがあり、四隅が深めに掘り込まれている。下底には柱根固め若しくは地盤固めの層が3～8cm存在し、P2はこの層の下に更に白色粘土を詰めている。柱筋の通りも良い。出土遺物は須恵器貯蔵具1点のみ、時期は不詳である。

81. SB109

SB108と重複、削平により一部を失っているが復元は十分可能である。建物規模が、桁行3.4m梁行3.2m、2間×2間の高床・総柱建物である。面積は10.88㎡、主軸はN-36°-E。柱間寸法は、桁間160～180cm、梁間160cm。柱穴プランは円形を呈し、径44～68cm、深さ28cmを測る。P3・5のみ柱圧痕を検出しており、この径が20cm、2本だけ廃絶時に柱を切り取っている。この他のものは抜き取ったようだ。P3が若干広がり気味だが、柱筋の通りが良い。出土遺物は、須恵器食器具1点、土師器煮炊具3点で、時期はIV～V期に位置づけられる。

82. SB119

建物規模は、桁行4.8～5.32m、梁行3.2～3.4m、面積16.69㎡を測る。3間×2間の側柱建物である。C地区中央南、そ・な37Grに位置する。主軸はN-32°-E。柱間寸法は、桁間112～212cm、梁間152～180cmで、北梁行部分がやや窄まるような形状を呈し、規格性に欠ける柱配置となっている。円形・不整形・楕円形を呈し、径28～48cm最大72cm、深さ26～44cmを測る。柱穴は深い細くて、柱筋の通りも悪いことから、簡易な建物であると判断できる。P2・6・8・9で柱痕跡を検出、径は16～20cmであった。これら以外の柱は抜き取られている。出土遺物は、土師器煮炊具9点で、時期はIV期に位置づけられる。

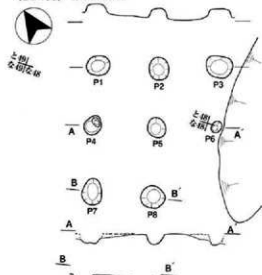
83. SB128

C地区中央で・と40Grに位置、SB181と重複する。削平により建物の1/3を消失する。建物規模は桁行5.08m梁行4.12m、建物面積20.92㎡。3間×2間の側柱建物である。主軸はN-106°-E。柱穴は円形・方形を呈し、径56～72cm、深さ44cmを測る。四隅がやや深めだが、似たような掘り込みレベルもち、良好な柱穴と言える。柱穴配置に関してはP5がやや外側にずれるが、総じて柱筋の通りは良い。隅柱2本に柱圧痕が残存、また全ての柱の下底部で、基礎固め・柱根本のレベル調整土層を確認している。廃絶時には柱を抜き取り埋め戻しが行われている。出土遺物は、土師器煮炊具19点で、時期はI・II期に位置づけられる。

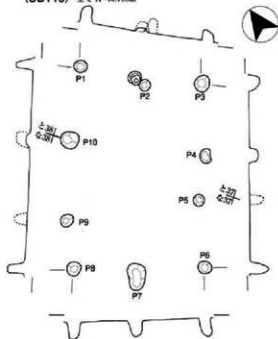
84. SB129

C地区中央で39・40Grで、SB181・SB128と重複し、削平のため一部分のみ検出したものである。どちらの柱列が梁行・桁行なのか復元不可能なのだが、仮にP1・2の列を梁行と設定しておく。残存する桁行は3.6m、梁行3.0mで、主軸はN-4°-E。柱穴は円形で径48cm最大66cm、深さ20cmを測る。P3としていたものは形状が他に比べ異質であり、違うものなのかもしれない。どの柱穴にも下底部に、基礎固め・柱根本のレベル調整土層が確認

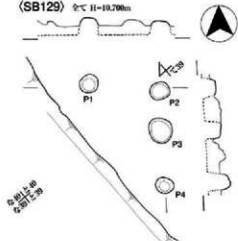
〈SB109〉 全て H=9.300m



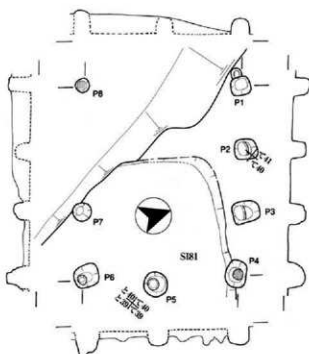
〈SB119〉 全て H=10.700m



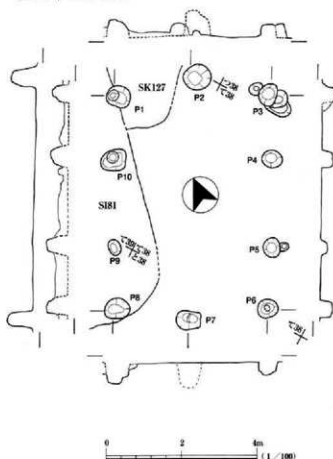
〈SB129〉 全て H=10.700m



〈SB128〉 全て H=10.700m



〈SB130〉 全て H=10.700m



第73図 掘立柱建物遺構図20(〈SB109〉・〈SB119〉・〈SB128〉・〈SB129〉・〈SB130〉)

されている。また、建物廃絶時に柱は抜かれ、埋め戻されている。出土遺物は須恵器食膳具1点、土師器煮炊具25点で、時期はⅠ・Ⅱ期に位置づけられる。

85. SB130

建物規模が、桁行5.6m、梁行4.0m、建物面積22.4㎡の、3間×2間の建物である。C地区中央で・と38・39Grに位置、S181・S183・SB131・SB132と重複する。梁行の中柱が、両方とも外側に飛び出して設置され、この柱穴が他よりも深く掘り込まれ規模がしっかりとしていることから、棟持柱と判断した。この建物は、近接棟持柱構造もしくは半独立棟持柱構造と考えられる。主軸はN-25°-Eにとり、柱間寸法は、桁間160cmまたは240cm、梁間200cmである。柱穴は円形・方形を呈し、径52cm深さ16～52cm、棟持柱は径68cm深さ68cmを測る。また、柱痕跡が検出されているものは、棟持柱2本とP9である。これら以外の柱は抜かれ埋め戻されている。棟持柱は別として、柱筋の通りは良く、掘り込みや配置に関しては有る程度の規格性をもつ建物と思われる。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具11点で、時期はⅡ～Ⅳ期に位置づけられる。また、現地ではSB130がS181・83を切って構築されたことを確認しており、S181がⅠ～Ⅱ期、S183がⅡ～Ⅲ期にあたることから、SB130はⅡ3期頃からⅣ期頃にあたることとなる。

86. SB131

SB130と同様の位置で、S181・SB45・SB130・SB132と重複する。3間×2間の側柱建物で、P9が1本分飛び出す様に配置されている。P9を通すとP7・8がずれ、建物全体が歪となり、P9を通さなければ桁行・梁行軸が直角となって柱筋も通ることとなる。桁行5.36m、梁行4.4～4.68mを測る。建物面積は22.88㎡、柱間寸法は、桁間200～248cm、梁間140～200cmである。主軸はN-57°-W。柱穴プランは円形・不整形を呈し、径48～60cm深さ16～52cmを測る。深さに関しては南桁行が旧地表に添い、また中柱が浅めの傾向をもつが、総じてしっかりと掘り込みをもつ。建物廃絶時には、柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具44点、カマド台石1点が出土し、時期はⅡ2～Ⅲ期に位置づけられる。

87. SB132

SB130・131と同様の位置である。建物規模は、桁行5.8m梁行4.8m、面積27.84㎡、3間×2間の側柱建物である。主軸はN-33°-E。柱間寸法は桁間172～200cm、梁間220～260cm。柱穴プランは方形・円形・不整形・楕円形と様々で、径36～76cm深さ16～36cmを測る。中柱が比較的浅く、梁行では特に小さい。また、柱穴の配置に関しては、P7が若干内側にずれるものの、総じて柱筋の通りは良いものである。建物廃絶時には柱は抜き取られている。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具11点であり、時期はⅡ2～Ⅲ期に位置づけられる。

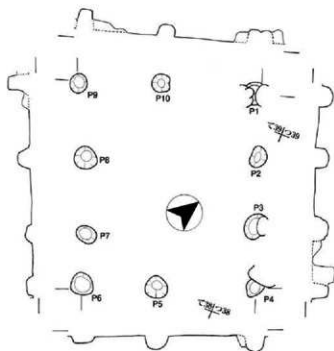
88. SB160

C区つて35・36Grに位置、SB130と同様の構造をもつ建物であると考えられるもの。梁行の中柱が壁面より外側に位置し、しかもしっかりと深い掘り込みを伴う。ただ、この建物は桁行の長さが左右で異なり、西桁行では4.08m、東桁行では4.44mを測る。梁行は3.12mである。柱筋はしっかりと通るのだが、建物の南側のバランスが悪い。柱穴は円形・方形を呈し、径40～64cm深さ24～48cmを測る。方形プランの場合、径の大きなものが多いのだが、この建物の場合非常に小さい。深さに関しては北梁行方向が徐々に低くなるという旧地形に添った深さを持っている。建物廃絶時には、柱は抜かれて埋め戻されている。柱間寸法は、桁行120・128・140・152cm、桁行は148・152・160cmであり、全てがばらついているということは言えない数値である。主軸をN-48°-Wにとる3間×2間の、近接棟持柱構造若しくは半独立棟持柱構造をもつ、側柱建物である。面積は13.55㎡。出土遺物は、土師器食膳具1点、土師器煮炊具23点で、時期はⅠ・Ⅱ期に位置づけられる。

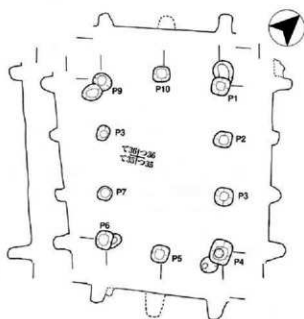
89. SB161

SI90南側に位置し、SI90の調査を先行したため、梁行と思われる3本の柱穴列が検出されたものである。また、桁行方向の柱穴と思われるピットが2カ所検出されている。梁行は4.2mを測り、柱間寸法212cmである。桁行の柱間寸法は180cmを測る。3間×2間の建物と予想するならば、面積は23㎡程にしろかと思われる。建物主軸はN-17°-E。柱穴は方形・楕円形を呈し、径48～72cm深さ12～26cm、覆土には黒褐色の締まりのないもの認められ、廃絶時には柱は抜き取られている。掘り込みも、旧地形に添ったものとなっているが、立ち上がりのしっかりしたものである。なお、遺物は出土しておらず、時期は不詳である。

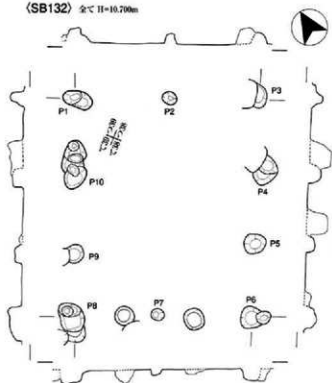
(SB131) 全てH=10.700m



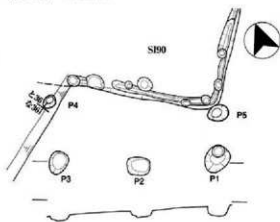
(SB160) 全てH=11.100m



(SB132) 全てH=10.700m



(SB161) H=11.000m



0 2 5m (1/100)

第74図 掘立柱建物遺構図21 (SB131・SB132・SB160・SB161)

第2節 土坑及び炉状遺構

第1項 土坑

今回報告する地区から確認された土坑は75基である。下記のように土坑分類されるような特徴のものが検出されているが、今回新たに、A地区では検出されなかった土師器焼成坑が4基確認され、これについては第3節で詳細を述べるものとする。土坑番号はA地区からの連番を付している。B地区ではSK42～105、この内土師器焼成坑がSK43・44・49・52、欠番はSK48・59・82・103である。竪穴建物に伴う施設として判断したSK80と、土器溜りの一部として判断したSK42も欠番とした。C地区今回報告分は、SK109・112・127・137・142・154・183である。よって報告対象は、土師器焼成坑と欠番となった土坑を除く65基分とする。

土坑分類については、昨年度報告に準じている。A類土坑を通常の土坑、B類土坑を土師器の比較的多い大型土坑で、当初は粘土掘削が目的とされ、その後土師器廃棄として利用されたとするもの。C類土坑は柱穴状の小型土坑。D類土坑は竪穴建物の掘り方土坑状を呈す土坑。E類は被熱焼結した小型炉の床下土坑位置づけ。F類土坑は焼成土坑で、土師器焼成坑ではないが、何かを焼いたとされる土坑である。内訳は、A類土坑25基、B類土坑18基、C類土坑4基、D類土坑11基、E類土坑1基、F類土坑4基、E類とF類の混合したものが1基、B類とE類が混合したもの1基である。また、出土遺物については、出土量を破片数換算で数量とし、時期については田嶋明人氏の北陸古代土器編年で表記する。では、詳細を述べてゆく。

1. SK45

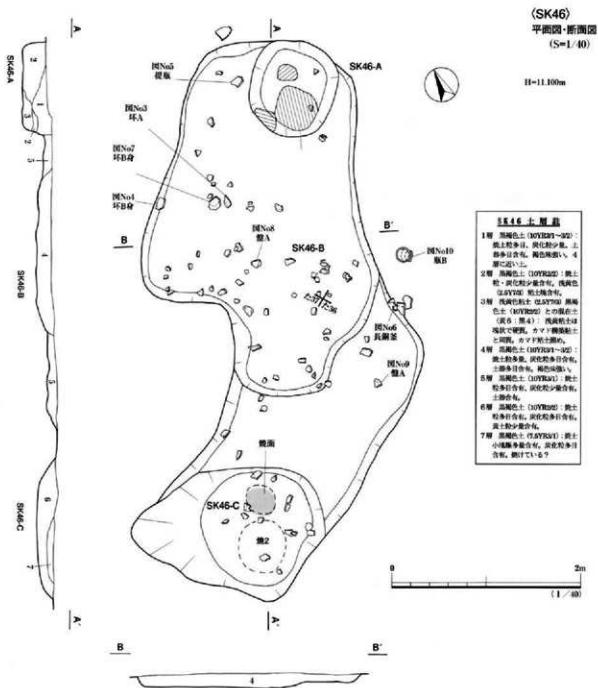
B地区C34Gr内、SI66の南側に隣接するもの。規模は長径123cm×短径113cmを測る、やや楕円の小型土坑である。覆土下層に白色粘土を含有する土層をもち、上層に褐色土ベース土層、上下の間層的なものとして黒褐色土が入る。土坑の性格は不明なのだが、土坑分類型は通常の土坑として位置づけているA類とするのが妥当と思われる。出土遺物は、須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具2点のみ、時期は不詳である。

2. SK46

B地区C36Grの、SI35・36・37間に位置する。3基の土坑が密集したもので、各々SK46-A、46-B、46-Cとした。SK46-Aは北側に位置、長径100cm×短径90cm、深さ30cmを測る小型土坑である。底平坦面に竪穴建物カマド構築粘土が検出されており、粘土溜めの機能をもっていたものと予想する。形状が柱穴状であることから、土坑分類型はC類に位置づける。SK46-Bは中央に位置し、長径370cm×短径240cm、深さ15cmを測り、不整形を呈すやや大型で浅いものである。B類土坑としたが、土器が流れ込み溜まった印象である。南側に位置するSK46-Cは、長径204cm×短径140cm、深さ20cmの不整形プランを呈す小型土坑である。覆土上面に被熱層が検出されており、この土坑は被熱焼結した小型炉の床下土坑と位置づけが可能で、分類型はE類となる。また、更に底面地山でも径30cm円形の被熱面が検出されており、何かを焼いた痕跡として分類されるF類と位置づけできる。SK46全体での出土遺物は、須恵器食膳具68点、須恵器貯蔵具35点、土師器食膳具12点、土師器煮炊具543点、カマド石等の石製品10点である。時期はI2～II1期・III期・V2期と判断される。なお、本土坑はSB53と重複、SI36と隣接し、出土遺物の時期が重なっている。

3. SK47

B地区C37Grに位置し、2基の土坑が重複、各々SK47-①、SK47-②とした。SK47-②を切ってSK47-①が形成され、これらの上面に鉄滓を多量に含有する流入土を確認している。両者とも隅丸方形を呈して深く、底面からの立ち上がりもしっかりしている。SK47-①の規模は、長径270cm×短径186cm、深さ34cmを測り、SK47-②は長径430cm×短径290cm、深さ32cmを測る。両者とも埋土に焼土・炭化小ブロックを多く含有し、土師器の出土は少ないが典型的なB類土坑と判断される。隣接する竪穴建物に関連すると思われるが、ただ、SK47-①は確実にSI38棟道に切っており、またSK47-②は確実にSI37を切っている。前述したが、この土坑からは多くの鉄滓、靱状滓が出土することが目立ち、中には炉壁も出土している。いずれも廃棄されたものであり、近隣の鍛冶炉との関連も示唆されようか。出土遺物は、SK47全体で須恵器食膳具100点、須恵器貯蔵具40点、土師器食膳具17点、土師器煮炊具687点、土製支脚・出雲型土製支脚を含む土師土製品5点、カマド石・砥石・石製紡錘車を含む石製品5点である。時期はIV2古段階が主体で、I・II期のものが混在する如く少量出土する。尚、隣接する建物は多いのだが時期の重なりは見られず、少し離れたSB60が唯一時期の重なるものとなっている。



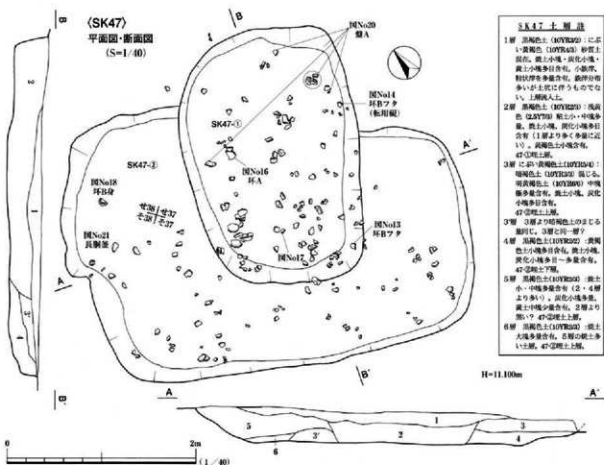
第75図 土坑遺構図1 (SK46)

4. SK50

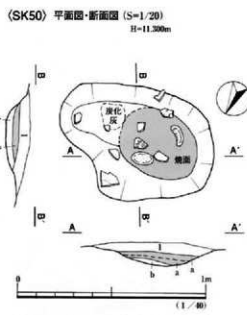
B地区そ35Gr, SK52土師器焼成坑の上面に位置する長径86cm×短径64cmの被熱面を有す小土坑である。下底面付近の黒色土層b層上面にて地山粘土を貼った層が被熱焼結するもの。よって焼成土坑とされるF類土坑とする。なお、土師器焼成坑との関連性はない。出土遺物は、須恵器食膳具11点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具113点で、時期はⅡ2期主体～Ⅲ期までと判断され、1期のものが混在する。

5. SK51

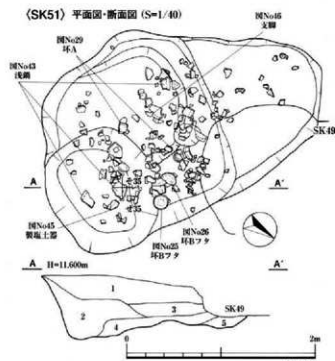
B地区そ34・35Grに位置する、土坑の一部がSK49に切られるものの下層は残存する不整形大型土坑である。規模は、長径320cm×短径205cm、深さ40～70cm。底面は凹凸で土坑状ビットが集中するような形状を呈す。B類土坑とする。遺物は上層出土が主で、須恵器食膳具66点、鉄銑を含む須恵器貯蔵具20点、土師器食膳具15点、



- SK47 土層表**
- 1層 赤褐色土 (10YR5/2) に点状小塊多量含有。灰褐色土 (10YR6/3) 砂質土層。黒土小塊・灰化小塊・黄土小塊多量含有。小砂質。軽浮砂多量含有。軽浮砂が多いが土に伴うものではない。上層土上。
 - 2層 赤褐色土 (10YR5/2) 赤褐色土 (10YR5/2) 軽土・中塊多量。黄土小塊・灰化小塊多量含有 (1層より多量に多い)。灰褐色土小塊多量。47-①層土上。
 - 3層 ①の赤褐色土 (10YR5/2) 暗褐色土 (10YR3/2) 質。灰褐色土 (10YR6/3) 中塊多量含有。黄土小塊。灰化小塊多量含有。47-②層土上。
 - 4層 赤褐色土 (10YR5/2) 赤褐色土小塊多量含有。黄土小塊。灰化小塊多量・多量含有。47-③層土上。
 - 5層 赤褐色土 (10YR5/2) 黄土・中塊多量含有 (2・4層より多い)。灰化小塊多量。黄土中塊少量含有。2層より厚。47-④層土上。
 - 6層 赤褐色土 (10YR5/2) 黄土小塊多量含有。5層の黄土多い土層。47-⑤層土上。



- SK50 土層表**
- 1層 赤褐色土 (10YR5/2) 赤褐色土 (5YR4/6) 中・大塊多量含有。灰化小塊多量含有。灰褐色土 (10YR6/2) 小塊少量含有。黄土層。土層分層。
 - 2層 赤褐色土 (5YR4/6) 硬質黄土と赤褐色土 (10YR5/2) 間の (赤褐色土) 層? 地山面として取った土が土化した? 灰化の浅。下は灰褐色土。かなり軽く硬質する。
 - 3層 褐色土 (10YR4/3) より厚い。灰化した土層? 含有物なし。土層上層?



- SK51 土層表**
- 1層 赤褐色土 (10YR5/2) 黄土・灰化小塊。黄土の塊多量含有。
 - 2層 赤褐色土 (10YR5/2-2) 黄土小塊・灰化小塊少量含有。
 - 3層 赤褐色土 (10YR5/2) 黄土中塊多量含有。灰化中塊多量含有。灰化小塊多量含有。黄土中塊少量含有。2層より厚。47-①層土上。
 - 4層 赤褐色土 (10YR5/2) と黄土・大塊の褐色土 (10YR6/3) 黄土・大塊多量。灰化中塊多量含有。
 - 5層 赤褐色土 (10YR5/2-2) 黄土小塊多量。黄土小塊多量。黄土小塊多量含有。

第 76 図 土坑遺構図 2 (SK47・SK50・SK51)

土師器煮炊具 435 点、支脚・土鍾・製塩土器・手捏ね品等の土師土製品 22 点、カマド石等の石製品 5 点が出土し、時期はⅡ 3～Ⅲ期とされる。尚、本土坑は SB46 を切っており、隣接する SB47 と時期が重なっている。

6. SK53

B 地区た 35Gr の、SI36 内東端の上層に位置する。建物覆土と異なる赤味を帯びた覆土をもつことと遺物の時期に差があったため、土坑として扱ったものである。規模は、長径 110 cm × 短径 62 cm の楕円形を呈し、深さは不明。分類型では A 類に位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具 17 点、須恵器貯蔵具 10 点、土師器食膳具 4 点、土師器煮炊具 102 点が出土する。時期は、Ⅱ～Ⅳ期と判断されるが、Ⅱ期が主体と思われる。

7. SK54

B 地区せ 36Gr、SI51 を切る形で位置するもの。規模は、長径 260 cm × 短径 232 cm、深さ 22 cm の浅い楕円形の土坑である。底面は一段低くなる部分もみられるが、比較的平坦面を形成する。覆土に灰白粘土ブロックを多量に含有、下層に進むに従い灰白粘土の含有は少なくなってゆく。出土遺物は須恵器食膳具 60 点、須恵器貯蔵具 10 点、土師器食膳具 15 点、近江系長刷副部破片を含む土師器煮炊具 207 点、出雲型土製支脚を含む土師土製品 2 点、石製品 3 点である。時期はⅣ 2 新～Ⅴ 1 期が主体で、Ⅱ 2～Ⅲ期のものが混在する。土坑分類は B 類でよいだろう。なお、この土坑は SB48 と出土遺物の時期が異なるため関連性はないものと判断され、隣接する多くの建物についても同時期の遺物は確認されていない。

8. SK55

B 地区す 36Gr 内に位置し、SI50 埋没後に本土坑が掘削されている。不整形円形を呈し、長径 286 cm × 短径 184 cm、深さ 38 cm の B 類土坑である。底面は凸凹し、覆土には黄土・灰白粘土・炭化・焼土ブロックを多量に含有する。出土遺物は、須恵器食膳具 66 点、須恵器貯蔵具 12 点、土師器食膳具 22 点、土師器煮炊具 253 点、土師土製品として土鍾 1 点、カマド石・砥石等の石製品 6 点が出土し、時期はⅢ～Ⅳ 1 新时期と判断され、Ⅰ・Ⅱ 2 期のものも混在する。なお、本土坑は SB57・58 間に位置しており、いずれも時期の重なりが見られるものの、関連については両建物間にこのような位置で掘り込むのかという疑問が残るところである。

9. SK56

B 地区せ 35 に位置する。長径 152 cm × 短径 140 cm の隅丸方形を呈し、深さ 52 cm を測る。覆土の特徴は薄い。底面からの立ち上がりが直立に近く、もっと長方形であったなら墓坑としての位置づけも可能であったかもしれない。柱状の小型土坑として C 類土坑と位置づけしておく。出土遺物は、須恵器食膳具 14 点、須恵器貯蔵具 3 点、土師器食膳具 3 点、土師器煮炊具 90 点、土製支脚 1 点、石製品 1 点が出土する。時期はⅡ 2～Ⅲ期あたりと判断される。なお、本土坑に収まる如く SJ02 が約 20 cm 上面で存在するが関連性はない。また、重複する SI51・SB47 は時期の重なりがみられるが、SB48 は出土遺物の時期が異なり関連性はないものと考えられる。

10. SK57

B 地区せ 36Gr 東端、SI39 を切る形で位置する小型土坑で、規模は長径 110 cm × 短径 95 cm、深さ 22 cm の円形プランを呈し、底面を平らにもつ浅いものである。覆土は、黒褐色土に褐色粘土中ブロックを多量、焼土小・中ブロック少量を含有するといった特徴の薄い一般的なものである。出土遺物は、土師器煮炊具 13 点・砥石 1 点と少なく、時期は不詳である。A 類土坑に位置づけられると判断される。

11. SK58

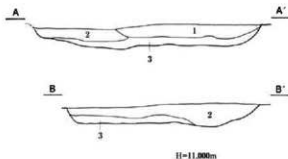
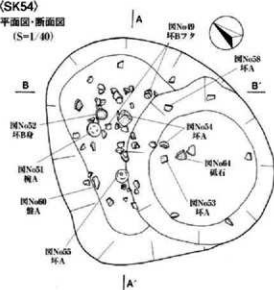
B 地区す・せ 36Gr の南西端で SK54 に切られて位置する小型のもので、2 基の土坑が重複する。大規模で浅い方を SK58-①とし、この上に小規模で深い SK58-②とする土坑が掘り込まれている状況。SK58-①は、隅丸方形の径 150 cm を測るもので、深さは 13 cm。SK58-②は、楕円形を呈すと思われる、径 120 cm、深さ 38 cm を測り、底面で一段深く掘り込まれている。両者とも覆土は一般的で、土坑分類は A 類土坑と判断される。出土遺物は両者で、須恵器食膳具 4 点、土師器食膳具 3 点、土師器煮炊具 31 点である。時期は不詳だが、SK58-①からはロクロ成形の煮炊具主体、SK58-②からはハケ調整の煮炊具主体で出土している。SK54 から出土する遺物がⅣ 2 新～Ⅴ 1 期とされるため、この土坑はⅣ 2 期以前のものとして判断される。

12. SK60

B 地区す・せ 39Gr に位置する長軸・短軸とも 120 cm を測る、不整形円形の小型土坑である。深さ 10 cm と頗る浅いが削平区域であるためであろう。覆土は堅穴建物の掘り方土坑状を呈し、出土遺物は須恵器食膳具 1 点、土師

(SK54)

平面図・断面図
(S=1/40)



SK54土層表

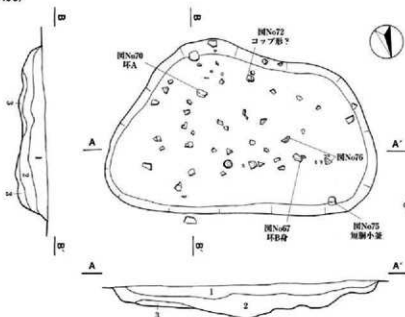
- 1層 赤褐色土 (10YR3/2~3/2) : 黄土小塊・黄土小塊多量含有。灰白粒土小塊・炭化小塊多量含有。土器多し。
- 2層 赤褐色土 (10YR3/2) : 灰白粒土小塊多量含有。黄土小塊・黄土小塊・炭化小塊多量含有。
- 3層 赤褐色土 (10YR3/2) : 黄土小塊・炭化小塊・黄土小塊多量含有。

(SK55)

平面図・断面図

(S=1/40)

H=10,000m



SK55土層表

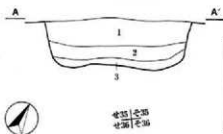
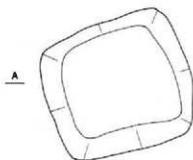
- 1層 赤褐色土 (10YR2/2~3/2) : 黄土・灰白粒土小塊・黄土小塊多量含有。炭化小塊少量含有。
- 2層 赤褐色土 (10YR2/2~3/2) : 灰白粒土小塊・黄土小塊・中塊多量含有。炭化小塊・黄土小塊多量含有。
- 3層 赤褐色土 (10YR2/2) : 黄土・河原色土 7AYR6/6 中塊多量含有。地口層砂状。

(SK56)

平面図・断面図

(S=1/40)

H=11,000m



SK56土層表

- 1層 赤褐色土 (10YR2/2~7AYR6/6) : 黄土小塊多量含有。土器・中塊多量含有。黄土小塊多量含有。炭化小塊多量含有。
- 2層 赤褐色土 (10YR2/2) : 炭化小塊多量含有。黄土小塊・黄土小塊多量含有。
- 3層 赤褐色土 (10YR2/2) : 2層より濃い。黄土小塊少量。黄土小塊多量含有。

全高1.25m
全幅1.20m

(1/40)



77 図 土坑遺構図3 (SK54・SK55・SK56)

器器炊具6点のみ、時期は不詳である。分類属性はD類土坑に位置づけられる。

13. SK61

B地区す38・39Grの側平区域に位置し、長軸330cm×短軸250cm、深さ20cm、浅い不整形大型土坑である。底面はやや凸凹しており、覆土には掘り方土坑的な要素も見られるが、規模から一応B類土坑としておく。出土遺物は須恵器食膳具10点、須恵器貯蔵具6点、土師器食膳具6点、土師器炊具80点、石製品4点である。時期はⅡ2期主体と判断され、Ⅰ期のものが混在する。高、本土坑とSB55は、遺物の時期も異なり関連性は薄い。

14. SK62

B地区し40GrでSB35と重複して位置する。規模は、長軸104cm×短軸90cmの円形を呈す、深さ15cmの小型で浅い土坑である。覆土は一般的、底面は平坦を呈す。出土遺物は少なく、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具1点、土師器炊具16点、石製品1点であり、時期はⅢ～Ⅳ1期と思われる。土坑類型はA類としておく。

15. SK63

B地区し41Grの北端、SB35の西側に隣接して位置し、長軸149cm×短軸90cm、深さ24cmを測る平坦底面をもつ楕円形の小型土坑である。覆土は軟質で、中層以下でカマドソテ粘土を多量に混在しており、堅穴建物に伴う廃棄土坑の可能性が高い。土坑分類はA類としておく。遺物は出土しておらず、時期不詳である。

16. SK64

B地区さ・し39Gr内に位置し、SI47埋没後に掘り込まれたもので、規模は長軸394cm×短軸240cm、深さ30cmを測る、不整形円形の大型土坑である。底面は北へ向かい一段下がるが、ほぼ平坦を形成する。覆土上面でⅠ層が被熱する硬化しない硬面を確認、よって本土坑の性格は、大型で土器を中心に廃棄した土坑の埋没後、上面にて灰を敷いて何かを焼成したと捉えられる。土坑類型は、B類、E類の2つに位置づけられよう。出土遺物は、須恵器食膳具45点、須恵器貯蔵具36点、土師器食膳具17点、土師器炊具272点、土製支脚・土鉢等の土師土製品3点、カマド石・砥石等の石製品5点である。時期はⅡ3～Ⅲ期主体と思われるが、土師器はⅣ・Ⅴ期と判断され、2時期のものが混在している。なお、本土坑はSB36と出土遺物の時期が同じである。

17. SK65

B地区け・こ38Grに位置する。規模が長軸300cm×短軸250cm、深さ32cmを測る隅丸方形の大型土坑である。底面が北東側へ一段下がっておりテラスを形成している。覆土の特徴は、3・4層にて焼土を極めて多量に含有し、土層はテラス側からの流土層のなもととなっている。土坑類型はB類と位置づけする。出土遺物は、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具31点、土師器食膳具17点、土師器炊具292点、土製支脚1点、金床石等の石製品2点が出土する。時期はⅡ2～Ⅲ3期主体と思われ、Ⅰ・Ⅳ～Ⅴ期の土師器が混在する。なお、本土坑はSB60内に取るように位置するが出土遺物の主体時期が異なり関連性はないものと判断する。それよりも隣接するSB65の主体時期と重なり、同時期に機能した可能性もたれる。

18. SK66

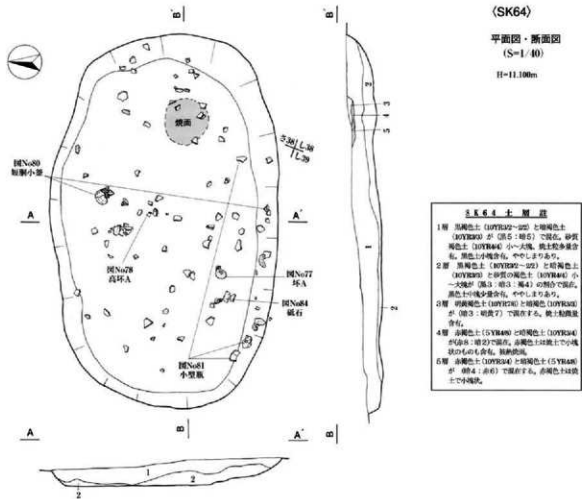
SK65西隣に位置する不整形の大型土坑である。規模は、長軸285cm×短軸200cm、深さ13cm、底面は凸凹し、土坑分類型はB類。出土遺物は須恵器食膳具41点、須恵器貯蔵具28点、土師器食膳具10点、土師器炊具141点、カマド石等の石製品9点、土鉢1点。時期はⅡ2～Ⅲ期と判断されるが、主体はⅡ3～Ⅲ期と思われる。

19. SK67

SK66西側に隣接、長軸220cm×短軸154cm、深さ20cmを測る、やや無花果形の小型土坑で、底面は西側で一段低くなる。覆土は掘り方土坑土層的で、D類土坑と位置づけられる。出土遺物は須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具9点、土師器食膳具2点、近江系長胴釜を含む土師器炊具42点で、時期はⅡ2～Ⅲ3期と判断される。

20. SK68

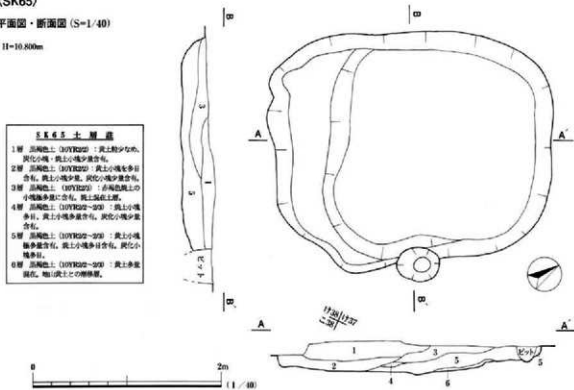
B地区し38Grに位置し、規模は長軸272cm×短軸250cm、深さ50cm、やや隅丸方形の大型土坑である。覆土にはカマド土、焼土塊や炭化材等が多量に認められ、また遺物も多量に廃棄されている。本土坑は、重複するSI48堅穴建物を切って掘り込まれており、堅穴建物廃絶後の窪地を利用したものと思われる。規模等から典型的なB類土坑と位置づけする。出土遺物は、須恵器食膳具101点、須恵器貯蔵具66点、土師器食膳具14点、土師器炊具392点、土師土製品1点、カマド石・砥石を含む石製品5点であり、時期はⅡ2期終末が主体と判断され、Ⅲ3期も含まれる。なお、本土坑は多くの建物と隣接するが、その中でSB52が同時期となっている。



(SK65)

平面図・断面図 (S=1/40)

H=10.800m



第78図 土坑遺構4 (SK64・SK65)

21. SK69

B地区さ・36Grに位置する小型土坑で、長軸140cm×短軸134cmの不定楕円形を呈し、深さ16cmを測るものである。底面はやや平坦で、まばらに点在する被熱面を確認しているが、硬化は見られず生焼け状態となっている。また同時に炭化材塊を検出している。本土坑は、何かを焼くために掘削され、その後廃棄土坑として機能したと思われる。土坑分類はF類とする。出土遺物は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具10点と極めて少ない。時期はⅡ1～Ⅱ2期に位置づけられようが、Ⅳ1～Ⅳ2期のもも混在する。なお、この土坑はSB56～58と隣接しており、いずれも時期の重なりが見られる。

22. SK70

B地区さ38Gr南端に位置し、長軸130cm×短軸122cm、深さ13cmの不整形小土坑である。覆土は軟質の掘り方土坑的なもので、D類土坑ということができ、底面は凸凹状である。出土遺物はなく時期は不詳である。

23. SK71

SK70東隣に位置する。長軸120cm×短軸114cm、深さ26cmを測り、底面はやや平坦を呈す、ほぼ円形の土坑である。覆土は掘り方土坑埋土に似ており、分類はD類土坑として位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具7点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具4点、土師器煮炊具60点、時期はⅠ・Ⅱ期主体で、Ⅲ～Ⅳ1期のものが混在すると判断される。なお、本土坑はSB32・59と時期の重なりが見られる。

24. SK72

B地区さ41Gr削平区域に位置する小土坑である。プランはほぼ円形を呈し、底面は平坦で、長軸106cm×短軸90cm、深さ15cmを測る。土坑分類型はA類と判断可能だが、プランが円形でもあり、柱穴状小型土坑としてC類と位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具7点のみ、時期はⅡ2～Ⅱ3期が主体であり、Ⅲ～Ⅳ1期のものが混在する。なお、本土坑は、SB62ピット(Ⅱ2～Ⅲ期)に切られ、またSB61ピット(Ⅰ～Ⅱ期)を切って掘り込まれている。よって、Ⅱ2～Ⅲ期の時期に機能したと判断可能だろう。

25. SK73

B地区さ41Gr削平区域に位置する円形の土坑である。SI52・53とSB62ピットを切る形で存在する。規模は、長軸105cm×短軸94cm、深さ13cmを測る。底面はやや平坦を呈し、覆土には焼土・カマド粘土ブロック・炭化材が混じるため、堅穴建物に関係した土坑である可能性をもつ。土坑分類型はA類と位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具5点、土師器煮炊具8点であり、時期はⅡ2～Ⅱ3期と思われる。なお、この土坑はSB38(時期不詳)・SB62(Ⅱ2～Ⅲ期)・SB61(Ⅰ～Ⅱ期)内に入る形で位置し、SB35(Ⅰ～Ⅱ期)に隣接する。SI52(Ⅱ2期)を切って作られているためⅡ2期以降は確実なのだが、前記の全ての遺構時期と重なっている。

26. SK74

B地区こ40・41GrのSI53を切る形で位置する大型土坑で、規模は長軸254cm×短軸214cmの不整形楕円形を呈す。深さは40cmを測り、削平区域であるため本来はもっと深く掘り込まれていたものと考えられる。底面は平坦で遺物を多量に伴い、覆土にはカマドソデ土ブロック・焼土を多量に含有し、ソデ石も検出されている。よって、本土坑は堅穴建物廃絶に関連して機能した土器を伴う大型廃棄土坑で、分類型をB類と位置づけする。出土遺物は、須恵器食膳具37点、須恵器貯蔵具45点、土師器食膳具10点、土師器煮炊具170点、土製支脚1点、カマド台石等の石製品3点が出土し、時期はⅡ3期古段階と判断される。なお、本土坑は多くの建物と重複・隣接するが、その中でSI54・SB36には出土遺物で時期の重なりが見られる。

27. SK75・76・77

B地区こ40Gr内の削平区域に位置する3基の土坑が密集するものである。全体規模は長軸470cm×短軸280～340cm、不整形プランを呈す。3基それぞれについて記述してゆく。SK75は西側に位置する長軸258cm×短軸160cmを測る楕円形状のもので、深さは10～18cmを測り、底面に1段の窪みを有する浅い土坑である。覆土は掘り方土坑の特徴をもっており、土坑分類型ではD類に位置づけられる。遺物の出土は、須恵器食膳具17点、須恵器貯蔵具13点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具39点、カマド石1点であり、時期はⅣ3古段階期と判断される。SK76は南側に位置する長軸320cm×短軸138～168cmを測る不整形丸方形の土坑であり、深さは10cmと頗る浅いものである。土坑分類はB類。出土遺物は須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具6点、石製品2点と極めてまばらに点在する程度で出土、時期は不詳である。SK77は北側に

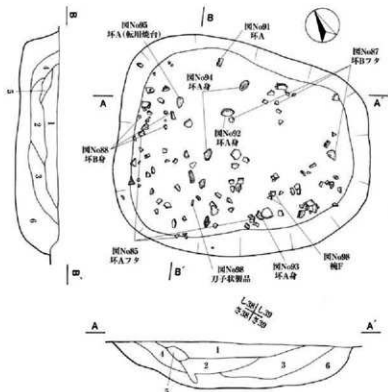
(SK68)

平面図・断面図 (S=1/40)

H=10.800m

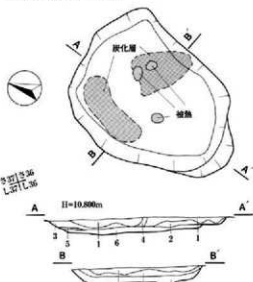
SK68土層構造

- 1層 黒褐色土 (KYR20) 黄褐色土層に包み込まれる。黒褐色土 (KYR20) 塊、黄土小・中塊、黒色土小塊少量含有。明褐色 (KYR20) の塊土中塊多量。これら含有物は2層に達し、しまりなし。
- 2層 黄褐色土 (KYR20) に包み込まれる。黄褐色土層 (KYR20) が (図6・黄4) で形成。明褐色土 (KYR20) 中・大塊、明褐色土 (KYR20) 塊上中・大塊、灰化砂小・大塊、黒色土の塊状がそれらに少量に混在 (包みこし) の層、しまりなし。
- 3層 黒褐色土 (KYR20) 黄褐色土小塊、明褐色土中塊、灰化砂小量含有。
- 4層 黒褐色土 (KYR20) 明褐色土小塊、灰化砂材多量、赤褐色土小・中塊、黄土粒少量、黒色土粒、包み込まれる。黄褐色土中塊少量含有、しまりなし。
- 5層 明褐色土 (KYR20) と黒褐色土 (KYR20) が5層で混在。灰化砂小塊、明褐色土小塊を多量含有。黒褐色土小塊少量含有。明褐色土 (KYR20) 中塊の多量含有、しまりなし。
- 6層 黒褐色土 (KYR20) と黄土 (KYR46) が (黄土層) で混在する。黄土粒少量、黄土粒少量含有。灰化砂塊少量含有、しまりなし。



(SK69)

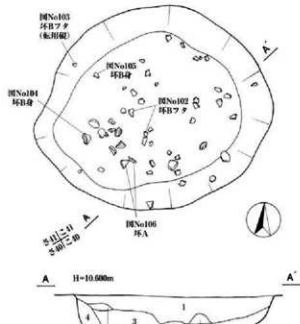
平面図・断面図 (S=1/40)



SK69土層構造

- 1層 黒褐色土 (KYR20) と褐色土 (KYR46) が (図6・層1) で混在する。黄褐色土小塊多量。灰化砂塊少量含有、しまりなし。
- 2層 黒褐色土 (KYR20) と褐色土 (KYR46) が (図6・層4) で混在する。黄土中塊、灰化砂中塊、黄褐色土大塊少量含有、しまりなし。
- 3層 黒褐色土 (KYR20) 塊と、黄土中・大塊少量含有、しまりなし。
- 4層 黄褐色土 (KYR20) と黒褐色土 (KYR20) が (図4・黄6) で混在する。黄土、黒色土、灰化砂、赤小塊含有、しまりなし。
- 5層 黒褐色土 (KYR20) 黄褐色土が5層で混在。黄土塊、黒色土塊塊少量含有、しまりなし。
- 6層 黒褐色土 (KYR20) と黄褐色土混在 (図6・黄4)。黄土小塊、灰化砂小塊含有、しまりなし。

(SK74) 平面図・断面図 (S=1/40)



SK74土層構造

- 1層 明褐色土 (KYR20) 黄土中塊多量含有。黄土粒上中・大塊土中塊多量含有。
- 2層 明褐色土 (KYR20) に包み込まれる。黄土中塊多量含有、しまりなし。
- 3層 明褐色土 (KYR20) 灰化・黄土中塊多量含有。包み込まれる。黄土中塊多量含有、しまりなし。
- 4層 明褐色土 (KYR20) に包み込まれる。黄土中塊多量含有。黄土中塊多量含有、しまりなし。



第79図 土坑遺構図5 (SK68・SK69・SK74) (1/40)

位置する長軸 288 cm × 短軸 210 cm、深さ 10 ~ 20 cm を測るもの。底面に落ち込みをもち、出土遺物は須恵器食膳具 13 点、須恵器貯蔵具 13 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 93 点であり、時期はⅡ 3 ~ Ⅲ 期と判断される。なお、土坑分類型は B 類とする。これら 3 基の前後関係は、土層断面から SK76 が最も古く、次いで SK77、最も新しく掘り込まれたものは SK75 と考えられ、出土遺物の時期とも一致している。よって、SK76 はⅡ 3 期以前となるだろう。なお、SK75・76・77 と隣接する建物等との関連性についてだが、SK76 は時期が漠然としており判断出来かねるので除外する。SK75 は周辺の建物と時期の重なるものはなく、少し離れた SB60 が唯一同時期にあたるものとなる。SK77 と時期の重なりがみられるものは、SI54、SB36・62・65・75 である。

28. SK78

B 地区す 37・37Gr、SB58P5・6 間に位置するのだが、SB58P6 を切って掘り込まれたもの。規模が長軸 134 cm × 短軸 104 cm、深さ 30 cm を測る楕円形の小土坑である。覆土は通常で、分類型は A 類とする。出土遺物は、須恵器貯蔵具 3 点、土師器煮炊具 22 点、カマド台石 1 点と少なく、時期はⅡ 3 期主体でⅡ 3 ~ Ⅲ 期と判断される。

29. SK79

B 地区せ 38Gr に位置する小土坑で、長軸 140 cm × 短軸 104 cm、深さ 28 cm を測る。プランは不整形形を呈し、土坑分類型は A 類土坑と位置づけしておくが、覆土は自然堆積層である。出土遺物は、須恵器食膳具 1 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器煮炊具 26 点と少ない。時期は不詳だが、土師器煮炊具はハケ調整の釜が殆どであり、1 期 ~ Ⅱ 3 期までなのだろう。なお、この土坑は SB55 との関連性はなく、SB54 では時期の重なりがみられる。

30. SK81

B 地区す 37・38Gr 西側に位置する、長軸 110 cm × 短軸 84 cm、深さ 10 ~ 13 cm を測る隅丸方形の小型土坑である。底面には方形の落ち込みをもち、このために中部でテラスを形成する。A 類土坑としてよいだろう。遺物は極めて少なく、須恵器食膳具 4 点、須恵器貯蔵具 2 点、土師器煮炊具 4 点で、時期はⅡ 3 ~ Ⅲ 期と思われる。なお、この土坑は SB52 内に取るように位置しており、出土遺物の時期は重なっている。

31. SK83

B 地区け・こ 39Gr に位置し、SB65 を切って掘り込まれている不整形形の土坑で、長軸 160 cm × 短軸 146 cm、深さ 38 cm を測るもの。底面はほぼ平坦を呈し、覆土には暗褐色土に黄褐色土やにぶい黄褐色土が 2 ~ 5 割混在し灰白色粘土ブロックや焼土を多量に含有する層を中心として、この上層に焼土と炭化材を更に多く含む層、最も下層では暗褐色土に灰褐色土が混在するメイン土に灰白色粘土を多量に含有する層をもつ。いずれも細りのある層である。遺物の出土はほぼ上層に限られ、須恵器貯蔵具 3 点、土師器食膳具 2 点、土師器煮炊具 47 点、カマド石 1 点である。時期は、Ⅱ 3 ~ Ⅲ 期に位置づけられる。以上から、竪穴建物関連の土坑と判断可能であろう。土坑分類型は A 類としておく。なお、近接する SI54、SB60 と出土遺物の時期が重なっている。

32. SK84

B 地区い 33Gr、調査区西端の削平区域で検出された小型土坑である。周囲が削平され尽くしている中で、かろうじて検出されているもの。規模は、長軸 114 cm × 短軸 90 cm、深さ 18 cm を測る。出土遺物は、土師器煮炊具 1 点・中世の塊 1 点のみ、時期不詳である。覆土は一般的だが、軟質土である。分類型では A 類と位置づけする。

33. SK85

B 地区け・こ 35Gr 内に位置する大型土坑である。北側が近代削平を受け消失している。規模は、長軸 280 cm × 短軸残存長 262 cm、深さ 46 cm を測る、隅丸方形の深いものである。底面が平坦でもあり、粘土接觸坑とするには不整形さに欠けるように思われる。また、最下層での土層から、粘土溜め土坑として機能していた可能性もたれるが、最終的には土器廃棄を目的として使用されたものと思われる。土坑分類型では B 類と位置づけしておく。遺物の出土は上層に集中し、下層からの出土は少ない。その総数は、須恵器食膳具 13 点、須恵器貯蔵具 7 点、土師器食膳具 4 点、土師器煮炊具 95 点である。時期はⅡ 2 期主体でⅡ 1 ~ Ⅱ 2 期と判断される。なお、この土坑に近接の竪穴建物 SI66 も同様の時期と判断されており、関連する可能性がある。

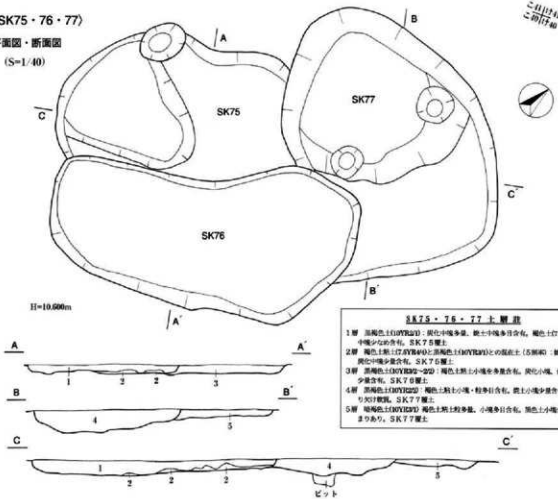
34. SK86

B 地区け 35Gr はほぼ中央に位置する。長軸 112 cm × 短軸 102 cm、深さ 38 cm の円形を呈す小型土坑である。底面は基本的に平坦なのだが、中央で 8 cm 深い小ピットを形成している。覆土全体にカマド粘土が混在、竪穴建物に関連した廃棄土坑である可能性が高い。土坑の形状から分類型は C 類とする。出土遺物は須恵器食膳具 5 点、

〈SK75・76・77〉

平面図・断面図

(S=1/40)



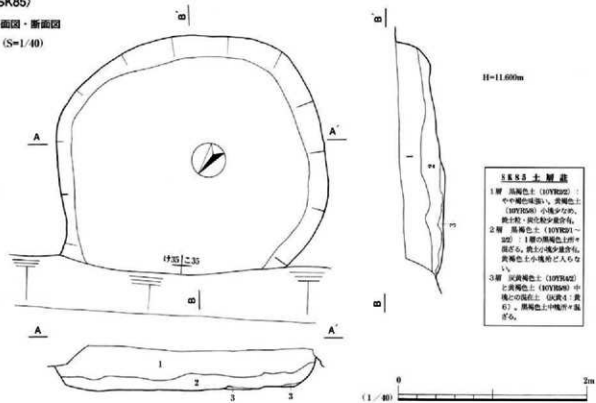
SK75・76・77土層表

- 1層 赤褐色土(10YR5/2)：黄化中塊多量、粘土中塊多量含有、褐色土(7.5YR4/0)中塊少なめ含有、SK7了層上。
- 2層 褐色土(7.5YR4/0)と赤褐色土(10YR5/2)との混成土(5層)：粘土中塊、黄化中塊少量含有、SK7了層上。
- 3層 赤褐色土(10YR5/2)～(2.5)：褐色土類土小塊中量含有、黄化中塊、粘土中塊少量含有、SK7了層上。
- 4層 赤褐色土(10YR5/2)：褐色土類土小塊・粒多量含有、黄化中塊少量含有、土量9割程度、SK7了層上。
- 5層 褐色土(10YR5/2)：褐色土類土多量、中塊多量含有、黄化土小塊含有、土量9割あり、SK7了層上。

〈SK85〉

平面図・断面図

(S=1/40)

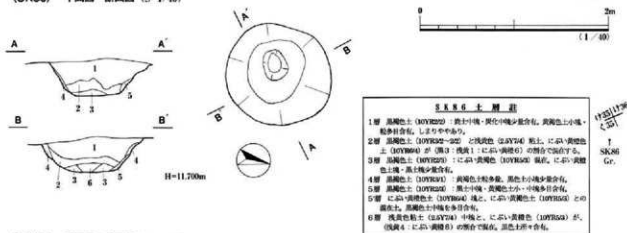


SK85土層表

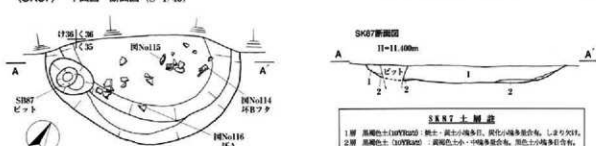
- 1層 赤褐色土(10YR5/2)：中中褐色味強い、赤褐色土(10YR5/0)中塊少なめ、黄化中塊少量含有、黄化中塊、黄化中塊少なめ、土量9割程度、SK7了層上。
- 2層 赤褐色土(10YR5/2)～(2.5)：1層の赤褐色土層+黄化中塊少量含有、赤褐色土中塊中量+黄化中塊少なめ、土量9割程度、SK7了層上。
- 3層 赤褐色土(10YR5/2)と赤褐色土(10YR5/0)中塊との混成土(6層)：赤褐色土中塊中量+黄化中塊少なめ、土量9割程度、SK7了層上。

第80図 土坑遺構図6 〈SK75・76・77、SK85〉

(SK86) 平面図・断面図 (S=1/40)



(SK87) 平面図・断面図 (S=1/40)



第81図 土坑遺構図7 (SK86・SK87)

土師器煮炊具9点と少なく、時期はⅡ3期あたりと思われる。なお、近接するSI66は時期が異なっている。

35. SK87

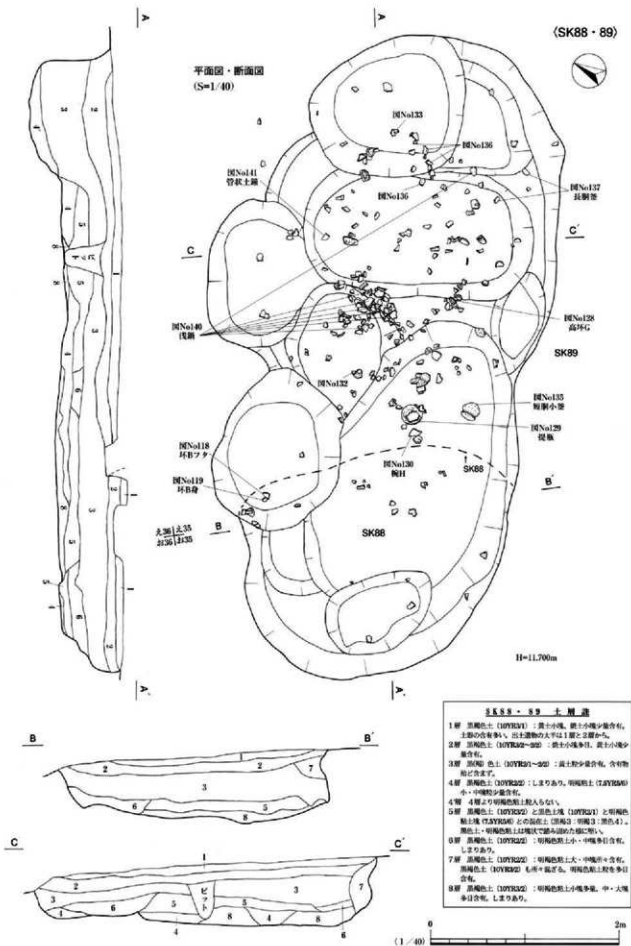
B地区く・け35Gr北西端に位置、近代削平により約半分しか残存していない。規模は長軸204cm×短軸残存長108cmを測り、本来は2m四方の円形であったものと予想される。深さは18cmと浅く、底面は平坦で南側に若干のテラスを形成している。土器は少ないが、B類土坑と位置づけできる。出土遺物は須恵器食膳具5点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具22点であり、時期はⅢ～Ⅳ2段階と位置づけられる。

36. SK88・89

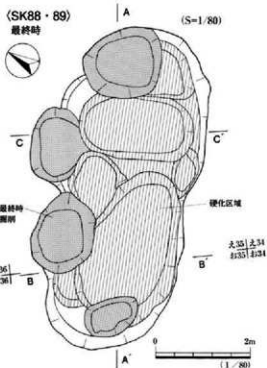
B地区え・お35Grに位置する大型土坑である。この土坑は当初1基と考えて調査していたものの、出土遺物の時期が2時期に渡ってかなりの時期幅があったために、2基の土坑として取り扱ったものである。この関係については後に述べる。SK89は、長軸686cm×短軸260～365cm、深さ42～92cmを測る。小円坑が複数重なって形成されるもので、底面は凸凹を呈し、遺物は上層から主に出土しており、下層からの出土は少ない。覆土では、5層にて土を踏み固めた様な硬化を持つ層を確認しており、これを中心に北側に3つの小円坑が広がるが、硬化をもたないことが確認され、硬化面の範囲から更に北側に掘り込まれていることが判明。要するに、当土坑は掘削順をおおよそ追うことができる粘土採掘坑と判断できる。出土遺物は、須恵器食膳具9点、須恵器貯蔵具10点、土師器食膳具6点、土師器煮炊具102点、砥石1点で、時期はⅡ1～Ⅱ2期と考えられる。SK88は、SK89が放棄され埋没後、土坑西側の窪みに土器等を廃棄したものである。出土遺物は須恵器食膳具66点、須恵器貯蔵具13点、土師器食膳具26点、近江系長刺釜胴部破片を含む土師器煮炊具430点、土師1点であり、時期はⅤ2～Ⅵ1期と思われる。土坑分類型は、SK89をB類、SK88をA類と判断できよう。なお、この土坑に隣接して、出土遺物の時期がⅡ2期主体のSI68、また出土遺物の時期がⅡ1～Ⅱ2期にあたるSI69Bが位置している。これらの建物と、SK89出土の遺物の時期が重なっている。

37. SK90

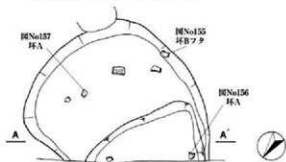
B地区き29・30Grに位置し、SI65北東に隣接する土坑である。規模は長軸266cm×短軸220cmの円形、深さ50cmを測り、底面は有段を呈す。削平区域に位置する割に大型を保つため、本来の規模はかなりあったものと



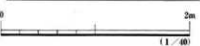
第82図 土坑遺構図B (SK88・89)



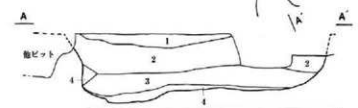
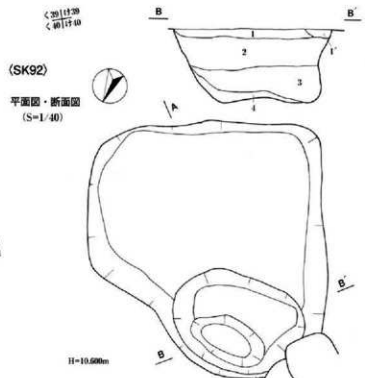
(SK101) 平面図・断面図 (S=1/40)



- SK101土層表**
- 1層 黒褐色土 (0YR22/2-21) : 黒褐色土小塊・黒土小塊少量含有, 土質均一, 硬質。
 - 2層 黒褐色土 (0YR22/2-22) : 灰化中塊・黒土小塊少量含有, 明褐色土中塊, まばらに散在。
 - 3層 黒褐色土 (0YR21) : 明褐色土の小塊多量含有。

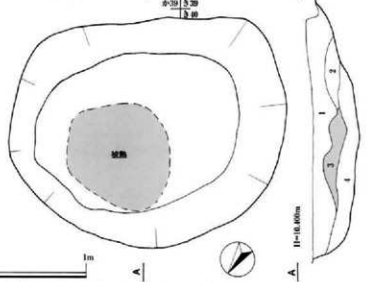


- SK93土層表**
- 1層 黒褐色土 (0YR22/2-21) : 明褐色土 (7.5YR5/6) 中・小塊多量含有, 硬質土小塊少量含有。
 - 2層 黒褐色土 (0YR21) : 黒褐色土中塊多量含有, 明褐色土中・小塊多量含有。
 - 3層 黒褐色土 (0YR21) : 明褐色土 (5YR6/6) 粘粒土多量含有, 砂土, 黒土 (黒じり) の明褐色土 (7.5YR5/6) を多量に混入して, これが硬質土のため, プロックによってはあまり割けていない。70%含有。
 - 4層 黒褐色土 (0YR22) : 黒土小塊・明褐色土小塊少量含有。



- SK92土層表**
- 1層 黒褐色土 (0YR22/2-3/2) : 黒土小・中塊多量含有, 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘土中塊少量含有, 土質を多く含む土層。
 - 1層 1層 (0YR22/2) の土層, 粘土との境界線。
 - 2層 黒褐色土 (0YR22/2-3/2) : 黒土中・小塊多量, 明褐色土少量含有, 明褐色土中塊多量含有, 中・中じりあり。
 - 3層 黒褐色土 (0YR22/2) : 黒土中・大塊, 明褐色土少量含有, 明褐色土中塊少量, 小塊・粘土多量含有, 土質均一。
 - 4層 黒褐色土 (0YR22) と明褐色土 (7.5YR5/6) の混在土, 粘土層の境界線。

(SK93) 平面図・断面図 (S=1/20)



第83図 土坑遺構図9 (SK88・89, SK92, SK93, SK101)

予想できる。土層は自然堆積となっている。遺物は皆無で、遺物の出土しないB類土坑と位置づけした。

38. SK91

B地区き38・39Gr、S169・SB85に隣接して位置するものである。規模は長軸110cm×短軸70cm、深さ38cmを測る小土坑で、底面はやや凸凹を形成して遺物は含まない。覆土は通常であり、土坑分類は、遺物の出土しないA類土坑として位置づけ可能だが、性格は不明である。

39. SK92

B地区け40GrのS154を切って位置する大型土坑である。長軸268cm×短軸250cm、深さ78cmを測る。北側に突出部分をもつ隅丸方形を呈する不整形プランである。底面は北側に一段深くなって楕円形の落ち込みをもつが、この他は平坦面を形成している。大型土坑の割には遺物が少ない方であり、上・中層での出土が目立つ。出土遺物は須恵器食膳具27点、須恵器貯蔵具25点、土師器食膳具13点、土師器煮炊具241点、カマド石や砥石等の石製品11点で、時期はⅣ2古段階と判断される。本土坑は、大型土器廃棄坑としての性格をもつものと考えられ、B類土坑と位置づけられる。なお、この土坑はSK75やSK47のような大型土坑と同様の時期となっている。近接する建物が多いのだが、同時期のものは見られず、SB60・SJ13のみと時期が重なっている。

40. SK93

B地区き40Grに位置する長軸148cm×短軸120cm、深さ24cmを測る楕円形の土坑である。底面には若干の落ち込みが見られ、南側にテラスを形成していた可能性がある。この土坑の覆土中間層で被熱層が存在する。この層は、黒土混じりの明褐色粘土ブロック層を床として貼土し、これが被熱したもので、所によってはあまり焼けていないブロックもある。本土坑はE類の可能性ももつのだが、何かをこの土坑内で焼いた跡と考え、F類土坑として位置づけしておく。出土遺物は、須恵器食膳具8点、須恵器貯蔵具4点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具28点、カマド石等の石製品4点であり、時期はⅠ・Ⅱ・Ⅳ期以降と判断され、混在している。

41. SK94

B地区き40Grに位置する隅丸方形の小型土坑で、長軸105cm×短軸96cm、深さ40cmを測る。底面は平坦、覆土は通常で、黒褐色土をベースとして明褐色粘土粒やブロック・焼土含有の多少はあるものの、ほぼ単層を呈す一括土と判断できる。遺物は少なく、A類土坑とするのが妥当と思われる。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具3点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具25点であり、時期はⅠ・Ⅱ期と判断される。

42. SK95

B地区お38Grに位置し、長軸134cm×短軸120cm、深さ23cmを測る、隅丸方形の浅い土坑である。底面は平坦で、覆土は一般的なものであり、分類はA類土坑と位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具2点、土師器煮炊具6点と極めて少なく、時期はⅠ・Ⅱ期頃と思われる。本土坑は、SB84(Ⅱ2期頃)を切って掘り込まれているため、時期はⅡ2～Ⅱ3期と判断できよう。なお、SB70・71には時期の重なりが見られる。

43. SK96

B地区か・き40Grにまたがって位置し、規模は長軸130cm×短軸103cm、深さ38cmを測る、円形プランを呈すもの。底面は平坦、覆土も通常で、性格は不明であるが、A類土坑と位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具2点、土師器煮炊具12点と少なく、時期はⅠ・Ⅱ期と思われる。

44. SK97

B地区き44Gr内西端中央に位置する。長軸126cm×短軸116cm、深さ26cmを測るほぼ円形で底面は平坦を呈す、小型土坑である。覆土は地山ブロックや炭化物が含まれる黒褐色土層主体の一般的なもので、A類土坑に位置づけられる。出土遺物は須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具16点であり、時期はⅣ2期と判断される。なお、この土坑はSB89・90内に収まるように位置するが、時期も異なり関連性はない。この他近接する建物の中で、SB98・99と出土遺物の時期が重なっている。

45. SK98

B地区き42・43Grに位置する土坑である。長軸256cm×短軸128cm、深さ28cmを測る楕円形の浅いものである。底面は平坦を呈し、覆土は黒褐色土に焼土・炭化物・明褐色粘土の小ブロックを各々少量含有するといった一般的なものである。A類土坑と位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具25点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具102点、砥石1点で、時期はⅣ2期とされる。なお、周辺の建物との関連性は、いずれも

薄く、唯一時期の重なりがみられるのはSB60である。

46. SK99

B地区か41Grに位置、プランは不整形円形を呈し、長軸174cm×短軸120cm、深さは26cmと浅い。底面はやや平坦で、覆土には焼土が比較的多く含有するが一般的なものと捉えられ、A類土坑と位置づけしておく。出土遺物は須恵器食膳具10点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具64点であり、時期はⅡ2～Ⅴ1期と判断される。なお、この土坑はSB88のピットを切って掘り込まれている。

47. SK100

B地区お44・45Gr北端に位置し、北西崖面の大きな削平を受け、少なくとも全体の1/4以上を消失する土坑である。長軸は残存長で150cm、短軸は108cmを測り、深さ30cm、底面に若干窪みをもつが全体的に平坦な面を形成する。プランは隅丸方形と予想可能である。覆土は掘り方土坑的なものであり、D類と判断してもいいだろう。出土遺物は須恵器食膳具1点、土師器煮炊具2点の僅か3点のみの出土で、時期は不詳である。

48. SK101

B地区お44・45Gr北端、SK100に隣接して位置する。SK100と同様に少なくとも全体の1/4以上を消失する土坑である。長軸は残存長190cm、短軸180cm、深さ22cmと浅い。北側に向かって若干の窪みを形成し、出土遺物は、須恵器食膳具7点、須恵器貯蔵具5点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具17点と少なく、時期はⅡ2～Ⅲ期にあたるかと判断される。覆土はSK100と同様であり、D類土坑と分類しておく。

49. SK102

B地区お41・42Grに位置する。プランがほぼ円形で、長軸190cm×短軸170cm、深さ32cmの平坦面を呈す。覆土は通常だが、最下層に粘りをもつのが特徴であり、A類土坑と位置づけられる。出土遺物は、土師器食膳具1点、土師器煮炊具23点と少なく、時期はⅡ～Ⅳ期と判断される。

50. SK104

B地区お41Gr、SK102の東側に隣接する。規模が長軸・短軸ともに90cm、深さは36cmを測る円形土坑である。底面は平坦で、覆土は掘り方埋土に似ていることからD類土坑と分類できよう。出土遺物は、須恵器食膳具4点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具3点、土師器煮炊具32点であり、時期は不詳である。但し、土師器煮炊具は殆どのものがハケ調整の釜や瓶であり、Ⅱ3期頃までに取ると思われる。

51. SK105

B地区え41Gr杭を含んだ位置、SI72 堅穴建物の上層に位置する土坑である。明確なプランは確認出来ないものの、堅穴建物との覆土の違いや土器の集中廃棄がみられ、建物覆土内からの土器出土状況と様相が違っていたことから、土坑として判断した。規模は、長軸約215cm×短軸約126cm、深さは16cmを測り、断面から底面はやや凸凹した形状をもっていたものと思われる。この土坑内では、黒褐色土被熱と何か所も点在する炭化層を確認している。よって、本土坑は堅穴建物廃絶後の窪みを利用した焼成土坑のF類として位置づけ可能で、その後土器廃棄坑として使用されたと思われる。出土遺物は、須恵器食膳具12点、須恵器貯蔵具2点、土師器食膳具9点、土師器煮炊具86点、カマド石等の石製品5点であり、時期はⅡ期と判断される。

52. SK109

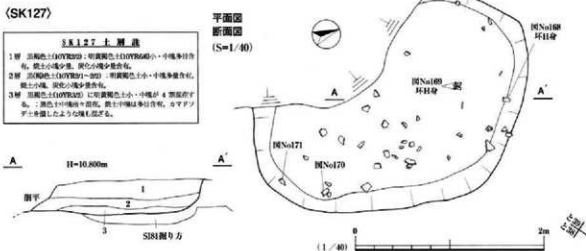
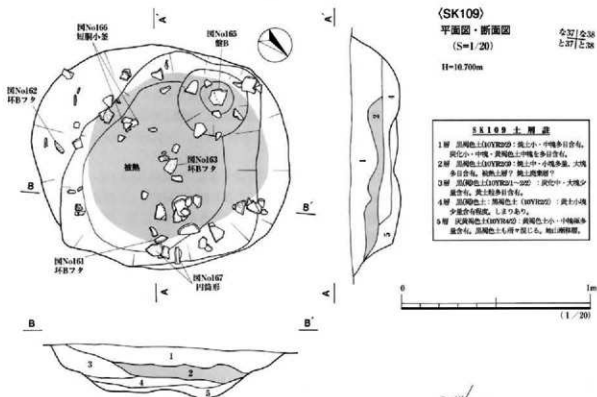
C地区な37Gr内に位置する、長軸137cm×短軸118cm、深さ26cmを測る小土坑で、底面は凸凹するほぼ円形を呈すものである。中層にて、覆土3・4層の黄土ブロックが被熱により赤化するような黒褐色土被熱が認められ、焼成土坑のF類土坑と位置づけする。出土遺物は須恵器食膳具26点、土師器食膳具3点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具118点、焼成粘土塊1点であり、時期はⅤ2～Ⅵ1期と判断される。本土坑は、SB119内に位置しており、時間的に重なるので関連が伺われる。なおSB112との関連性はないものと判断される。

53. SK112

C地区と37Grに位置し、規模は、長軸98cm×短軸90cmの円形を呈し、深さ15cmの小土坑である。底面は平坦で、出土遺物はⅣ期にあたる土師器煮炊具3点のみ、覆土も通常で特徴のない土層となっている。用途不明であるが、A類土坑として位置づけしておく。なお、若干重複するSB119は出土遺物の時期が重なっている。

54. SK127

C地区と38・39Gr内に位置、全体の1/4を近代削平により消失するが、復元は十分可能である。規模は長軸



第84図 土坑遺構図10 (SK109・SK127)

296 cm × 短軸 232 cm、深さ 35 cm を測り楕円形状を呈す。底面は平坦で、覆土下層からカマドソデ崩壊土と考えられる土が検出されており、竈穴建物に関連する土坑の可能性のある大型で典型的なB類土坑として位置づける。出土遺物は、須恵器食膳具 14 点、土師器食膳具 2 点、須恵器貯蔵具 8 点、土師器煮炊具 74 点、カマド石等の石製品 2 点である。これらの遺物の時期は I 1 新～I 2 期と判断されるが、この土坑が S181 (I 1～I 2 期) を切っ て掘り込まれているため、土坑の時期は I 2 期としてよいだろう。なお、本土坑には多くの建物が隣接、これらの中で時期の重なりが見られるものは、SB44・129・160 である。

55. SK137

C 地区つ 38Gr 北側に位置する小土坑。規模は、長軸 127 cm × 短軸 63 cm の楕円形プランを呈し、深さや底面形状は不明であるが A 類土坑と位置づけできる。出土遺物は、須恵器食膳具 5 点、須恵器貯蔵具 1 点、土師器煮炊具 24 点であり、時期は II 期頃と思われる。なお、隣接する S184 と S132 には時期の重なりがみられる。

56. SK142

C地区のつ39Gr内SI81 竪穴建物のカマド奥口に相対して位置する、竪穴建物内上層土坑である。B地区SK105のように土器集中がみられて異質なことから土坑として対処したものである。SI81 埋没後に掘り込まれたものと考えている。その範囲は、長軸105cm×短軸55cmで、ほぼ楕円形を呈するのではないかと予想される。深さは27cm。覆土・底面形状など不明である。土坑分類型はA類とするのが妥当であろう。出土遺物は、須恵器食膳具93点、須恵器貯蔵具20点、土師器食膳具22点、土師器煮炊具362点、土製支脚等の土師製製品2点、砥石やカマド石等の石製品3点である。時期はI期～VI期・中世遺物も混在するが、主体はIV期頃になると思われる。

57. SK154

C地区で41Gr、SI80とSI81の中間地点に位置する小規模で浅い土坑である。規模は、長軸125cm×短軸100cm、深さは6cmを測る。この土坑が位置する区域は削平区ではないので、この深さは元からこの程度である。底面は平坦、覆土は掘り方的な土層として判断可能であり、D類土坑するのが妥当であろう。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具9点のみであり、時期は不詳である。

58. SK183

C地区つて35Grに位置する土坑である。規模は長軸136cm×短軸115cm、深さ15cmと浅く、楕円形状を呈するものである。底面は平坦で、覆土はSK154と非常によく似ている。出土遺物は須恵器食膳具2点、土師器煮炊具2点、砥石1点と極めて少なく、時期はII3～IV期相当のものである。用途不明であるのだが、この土坑も掘り方的な土坑としてD類と位置づけておく。尚、SB160とは遺物時期が異なり、関係をもたないと思われる。

第2項 炉状遺構

今回報告する区域から、炉状遺構が検出されている。単独で検出され、被熱面をもつもので、炉として機能したと考えられる。地床や屋外炉などと言われるものである。遺構記号はSJとし、遺構番号は連番で付けた。今回報告するものは、B地区ではSJ01～18で、C地区今回報告地域ではSJ19である。この内、SJ01・03は鍛冶炉跡であり、これについての詳細は第3節の手工業生産遺構で述べることにする。なお、SJ05は竪穴建物SI57内に位置していることから、竪穴建物のカマド被熱として判断したので、欠番とする。また、遺構番号の付いていない炉状遺構が3基確認されている。今回の報告のために、SJ①～③と新たに番号を付けた。この他としては、第1節第1項で既に報告済みである竪穴建物覆土内で検出された炉状遺構がある。そして、これも第2節第1項で報告済みなのだが、土坑状を呈して上面に炉状遺構をもつものがある。

前回報告のA地区では14カ所検出されたのに対し、今回の報告区域では増加していることから、やはり掘立柱建物の増加が要因の1つだろうと考えている。全体の検出状況だが、旧地形鞍部内に限られており、近代削平を免れた部分に検出できている。また、今回報告地区の南東一帯に比較的集中が見られる。炉状遺構は、掘立柱建物内に入るように検出されているものや、掘立柱建物に隣接して検出されているものが殆どであるが、どの建物に付設するのか、また本当に掘立柱建物に付設するのか等、炉状遺構との関係が明確に判断される検出状況ではないので、隣接・近接する建物との関連の可能性だけを考えるに留まっている。ただ、唯一SJ07から出土する坏AがSB56P6から出土するものと接合できており、この建物との関連は強いと言えるだろうか。炉状遺構からは遺物が出土しているが、A地区で出土するような土製支脚や炉石の検出は、4基のみ認められている。要するに煮炊き施設としての炉床が依存したものと予想されるような、判断基準となりうる遺物の検出である。確実に遺構に伴うと思われるものは、掘り方上面で焼石1点のみ検出されたSJ02と、SJ13から石製支脚の出土である。他の2基は、SJ08とSJ19であり、煮れた所で各々1点ずつ石が検出されている。出土遺物は、比較的煮炊具が多いものの、須恵器が混在する出土状況となっている。

炉状遺構には、人為的に炉としての貼床を施して構築するものや、地山が直接被熱しているものがみられる。炉を構築するために予め掘削し貼床を施しているものは、土坑状の掘り方とも言えるような床下を形成するタイプで、炉の部分だけを掘削をするものと、炉とその周辺一帯を貼床するものがある。これをAタイプとしておく。逆に、貼床をもたないものもある。地山が直接被熱するタイプのもので、黒褐色土の地山が焼け一見被熱しているかどうか判断の難しいものである。黒褐色土地山が被熱した場合、粘土が焼けた時のような、何回にも被熱が及ぶ時に焼結して硬化し、顕著な赤褐色土を呈するような状態にはならない。ただ、生活面での被熱であるから

か、通常の黒褐色地山よりも焼土が多量であり、僅かに含まれる生活痕とも言えるような地山粒が焼けて赤褐色を呈し、更には炭化粒が多く含まれることが特徴と言える。これをBタイプとしておく。そして、竪穴建物の埋没跡に被熱が見られるタイプをCタイプとしておく。しかし、これらの被熱は竪穴建物上面に偶然位置しただけとも考えられるものであり、もしかするとある程度窪地となった跡地を利用したのかもしれない。人為的に構築されたかどうかは不明なのである。さて、遺構番号別では、Aタイプに位置づけられるものは、SJ02・08・13・15～19、SJ①。Bタイプでは、SJ04・06・07・12・14・②・③。CタイプはSJ09～11である。

炉状遺構数は、SJ番号を付したもので今回報告分のB地区では18基、C地区今回報告分では1基、タイプ別にするとAタイプが9基、Bタイプが7基、Cタイプが3基である。そして既に報告済みの竪穴建物覆土から検出したもの(Bタイプ)が13基、土坑状を呈した炉状遺構が5基(Aタイプ)であり、以上総数は34基に及ぶ。

1. 人為的な構築がみられる炉状遺構 (Aタイプ)

Aタイプの被熱には、様々な掘り方が見られる。ピット状を呈するもの、浅い土坑状となっているもの、貼床を厚く施すもの、極薄く施すものなどである。そして、炉の部分だけでなく、炉の周辺にも掘り方をもつもの。但し、掘り方と言っても、明確な土坑状の落ち込みをもつものではなく、規模としては小規模なものである。また、貼床には粘土を基本として貼っているものの方が比較的少なく、掘り方には、黒褐色土ベースに地山黄褐色ブロック等が混在する程度の覆土が多い。掘り方埋土の状態は、竪穴建物の掘り方土坑を思い起こさせる。地面を予め掘り下げ、別の土を投入、床を貼り、火を焚く—何のためにこのような手間を掛けたのだろうか。やはり、火を焚くという行為を持続させるための場所を設定したと考えられるのである。では、詳細を述べてみる。

(1) SJ02 セ35Gr内の炉状遺構密集区域に位置するもの。被熱部分は径28cmの円形を呈し深さは5cmである。この被熱部分には黒褐色地山に粘土を混在させたものを貼っており、これが焼け、黒褐色土が灰黄褐色土に変色し尚かつ粘土が赤褐色に変化している。更にこの被熱部分の周囲に縁部等高線に添う形でなるま型範囲に、床として構築した掘り方がみられる。掘り方層は、被熱面から北側に長径50cmの楕円形プラン、南側に長径80cmの長楕円形プランをもち、深さ5～8cm、底面からの立ち上がりもなく浅く広い火皿状を呈するものである。掘り方覆土は、上面に焼土や炭化物が多量に混在する黒褐色土主体のもので、北側貼床では更に下層をもち焼土や炭化物の含有量が少なくなっている。出土遺物では煮炊具破片が多い。その総数は、須恵器食膳具18点、須恵器煮炊具5点、土師器煮炊具97点、製塩土器3点であり、中世遺物5点が混在する。時期は須恵器がVI～VII 2期、土師器がIV 2～V 1期、製塩土器がIII 4期と判断される。なお、SJ02と時期の重なる遺物が出土している近隣遺物はSI51とSB47である。

(2) SJ08 す35Grに位置するもので、黒土地山に被熱範囲のみ黄土を貼って構築している。被熱面は焼結硬化しており、炭化物は目立たない。この被熱面の規模は長径52cm×短径30cm、円形プランで断面は火皿状を呈す。出土遺物の総数は土師器食膳具1点、土師器煮炊具2点のみであり、時期は不詳である。

(3) SJ13 こ38Grに位置する。掘り方規模は、長径93cm×短径53cmの不整楕円形を呈し、深さ18cmを測る。底面から若干立ち上りを有すが、明確なものではなく火皿状を呈して尚かつ底面が凸凹する。掘り方覆土は黒褐色土と黄褐色土との混在土で、上面6cmが被熱し上面全面に及んでいる。出土遺物は、長胴釜など土師器煮炊具がまとまって出土、遺物総数は、須恵器食膳具1点、須恵器貯蔵具6点、土師器煮炊具56点、カマド石1点、石製文脚1点であり、時期はIV 2期と判断される。なお、この炉状遺構と時期の重なる遺物は近くにはなく、SB60・109、SI51が同時期にあたる。

(4) SJ15 か43Grに位置、掘り方を予めピット状に掘削して上層に粘土を貼って炉を構築しているものである。掘り方規模が長径46cm×短径40cmの卵形楕円形を呈し、深さは30cmに及ぶ。底面に平坦面を有す。上面中央に長径37cm×短径30cm程の不整楕円形を呈して被熱面が認められ、上面から9cmの深さで被熱層を形成する。非常によく焼けており、表面が被熱焼結する層である。掘り方には黒褐色土をベースに地山ブロックである明褐色粘土粒が多目、炭化物や焼土が多量に含まれる土を充填し、最上層の6cm部分に火皿状に粘土を貼っている。よって、掘り方土にまで、被熱が及んでいる。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具3点、土師器煮炊具19点である。時期は須恵器がIV 2期、土師器がVI 3期と判断される。

(5) SJ16 か43Grに位置、SJ15の西側に位置するものである。構造はSJ15と同様である。掘り方規模が長径38cm×短径32cmの円形を呈し、深さは25cm、底面が平坦でピット状の断面プランをもつ。粘土を貼り付け

ているのは上面から2cm程の厚みのみ。被熱層は、掘り方部分も含め上面から6cmに及び断面では火皿状を呈しており、上面では径26cm程の不整形プランを呈し部分的に被熱焼結がみられ、全体に硬くなっている状況である。掘り方には黒褐色土に明褐色粘土粒や明褐色焼土粒が多目に含有する土を充填している。出土遺物は、須恵器食膳具1点、土師器煮炊具7点のみであるが、土師器では短胴小釜・浅鍋・甗が出土している。時期はⅣ2期と判断される。

(6) SJ17 か43Gr、SJ16の南側に位置する。貼床規模は長径53cm×短径45cmの不整形楕円形を呈し、深さ9cmを測る。浅い土坑状といった掘り方である。被熱は貼床プランの南側に偏って認められ、その規模は長径33cm短径×25cmを測る。被熱の厚みは上面から4cmである。掘り方には黒褐色土をベースに明褐色粘土ブロックや焼土が多目に含まれる土を充填している。最上層では、粘土被熱層1～2cmを部分的に検出している。この層は粘土が貼られて被熱しているものと考えられ、検出時にはかなりの部分が既に剥離した状態であったと思われる。よって、炉床の構築方法は、床下の深さこそ違え、SJ15・16と同様と思われる。出土遺物は、須恵器食膳具3点、土師器煮炊具33点であり、時期はⅡ2～Ⅱ3期とされる。なお、この炉状遺構は、SB98内に取るように位置している。この掘立柱建物と時期が重なり、SB98の規模からも竈窟が連想される。ただ、この他にもSB89・90・94の近接する建物とも時期が重なっている。

(7) SJ18 き43Grに位置するもの。掘り方のプランは長径60cm×短径55cmの、片方が窄まり気味の楕円形を呈し、深さは20cm、底面に平坦面をもたない掘り鉢状の断面プランをもつ。覆土には下層に黒褐色土をベースとして明褐色粘土小ブロックと焼土ブロックを多目、炭化小ブロックを少量含有する土を充填し、その上層に、焼土ブロックを多量に含有する下層と若干違う土を用いている。この上層が被熱しているので余計に焼土の含有量が目立つのだろう。被熱は掘りプランの南側に偏っており、綺麗な楕円形気味の円形を呈している。その規模は長径48cm×短径32cmを測り、被熱の深さは3～5cmに及ぶ。出土遺物は、須恵器食膳具3点、土師器煮炊具11点、この他中世遺物が1点混在する。時期は不詳である。

(8) SJ19 つ36Grに位置する。確認された掘り方の規模は長径130cm×短径50～70cm、深さが10～12cmで、プランとしては細長いものであり、旧地形鞍部の等高線ラインに添った形で配置している。この掘り方の南端に被熱層が認められ、被熱よりさらに南側では長径110cm短径70cmに渡って焼土分布が認められるが、基本は地山土である。構造としては非常にSJ2と似ているものである。被熱面の規模は長径28cm×短径17cm、深さは5cm程である。貼床は前述しているように黒褐色度ベースの土であり、最上層でも黄色粘土は貼られていない。また、焼き締まりも比較的弱いものである。出土遺物は、須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具4点、土師器煮炊具52点であり、煮炊具が目立って出土している。時期は、須恵器食膳具からⅤ期と判断される。なお、この炉状遺構と時期が重なる建物は、今回調査区ではSB60・109である。

(9) SJ① お38Gr、SB70に取るように位置するもので、床を貼って炉として構築されるもの。規模は長径40cm短径32cmを測るが、その他については詳細不明である。

2. 地山被熱する炉状遺構 (Bタイプ)

Bタイプと位置付けしたものは、直接地山が被熱しているものである。SJ04・06・07・12・14・②・③である。この中で最も大きな規模のものはSJ12の長径58cm×短径53cm。最も小さなものは長径34cm×28cmのSJ07である。被熱の深さは、判断できているものでは8～9cmを測る。Aタイプのように被熱焼結しているものは殆ど見られない。出土遺物は、SJ07が須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具14点石製皿1点であり、時期はⅡ期と判断される。なお、SJ07と遺物時期の重なる近接建物はSB56・57・48・S150である。また、この他の炉状遺構では出土遺物は皆無である。

3. 竪穴建物覆土で検出された炉状遺構 (Cタイプ)

Cタイプと位置付けしたものは、竪穴建物覆土内で検出されたSJ09～11である。SJ09の径46cmを測るものが最も規模が大きく、最も規模の小さいものではSJ11で長径35cm短径33cmを測る。SJ10は、他に比べ被熱が弱くなっている。出土遺物は、SJ09で須恵器食膳具2点、須恵器貯蔵具2点、土師器煮炊具8点で時期はⅤ1～Ⅴ2期である。SJ10では須恵器貯蔵具1点、土師器煮炊具4点のみで時期はⅣ2期とされる。SJ11では須恵器食膳具3点、須恵器貯蔵具1点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具16点だが、時期不詳である。

第 3 節 手工業生産遺構（土師器焼成坑・鍛冶炉）

順見町遺跡は、各種手工業生産を生業とする集落遺跡であることは、遺跡の概要のところでも述べたが、特に今回報告する B 地区からは、比較的多くの手工業生産遺構が検出されている。SI72 の堅穴建物内に付設される鍛冶炉を除いては、B 地区の南側、ほぼ 30 m 四方の区域に土師器焼成坑 5 基と鍛冶炉 3 基がまとまって分布しており、次回報告予定の C 地区 SK146 の土師器焼成坑に関しても、これに隣接した区域に存在する。建物の密集する鞍部平坦地から東側の尾根筋へと傾斜していく建物の希薄地に分布する傾向が強く、集落内でそのような位置付けがなされていた区域であった可能性をもつ。このような手工業生産遺構のまとまりは H 地区にもあり、そこでは鍛冶炉の密集分布が確認される。

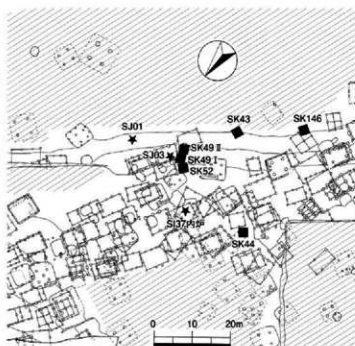
第 1 項 土師器焼成坑

今回の報告区域では土師器焼成坑が 5 基検出されている。SK52 が 7 世紀に位置づけられる以外は、いずれも 10 世紀以降のもので、集落としては衰退期にあたる時期に土師器生産が行われたことになる。南加賀窯跡群での土師器生産が終焉する段階以降の生産であり、南加賀窯跡群の工人集落として経営がなされていた当集落遺跡の性格を示す資料と言えるものだろう。以下に、各遺構の説明を行う。

1. SK43

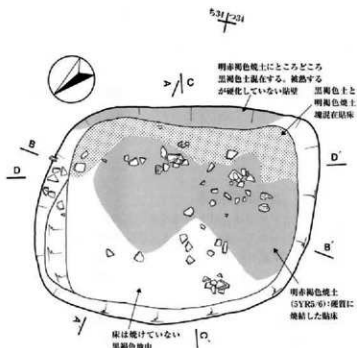
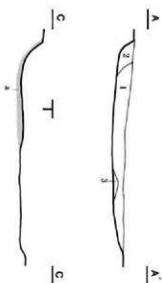
尾根筋側の削平区近く存在する土師器焼成坑で、周辺に建物遺構は存在していない。斜面 5 度の傾斜地に奥壁を山側に設定して、床面をほぼフラットに掘削するもので、縦軸長 230 cm、横軸長 293 cm の横長型隅丸方形プランを呈す。奥壁は比較的生気味だが、側壁及び前壁は固気味に立ち上がり、特に前壁は明瞭な壁の立ち上がりをもたない。奥壁深 20 cm、床長縦 200 cm × 横 240 cm、床面積 43 m² 程度の規模で、平面プランや壁の立ち上がりなどを含めても、この時期の土師器焼成坑としては異例とも言える、定型な土師器焼成坑形態を持つ。焼成坑の被熱は床面中央付近のやや奥壁寄り最も顕著で、奥壁も強く被熱するが、焼結するような強いものではなかった。床面の奥壁際は被熱が弱く、側壁及び床面前壁寄りにいたっては被熱の痕跡すら確認できない。この部分は黒褐色地山のままであったために、被熱痕跡が確認しにくかったとも考えられる。被熱焼結の確認できる奥壁や床面の奥側については、黒褐色地山の上に黄褐色粘土で貼土したために明瞭に焼結したものであり、製品を置いたと思われる床面中央から奥壁にかけての貼土理由としては、黒褐色地山から上がる湿気を防止することが目的であったろう。

理上に明瞭な灰層を確認できなかったが、埋土下層には燃料材であろう炭化材片と稲藁状黒灰の粒が混在しており、100 点を越える土師器小片が遺存していた。土師器小片は長副釜片 1 点、短副小釜片 2 点以外は全て碗類の食膳具破片で、内黒焼成坑 B と通常土師器の碗 A・B で構成される。組成や碗類の器形、法量から見て、窯場での生産が終焉する古代Ⅶ 1 期に併行する時期の土師器焼成坑と判断される。土師器片は過度の焼成や急激な昇温により焼き弾けた製品が多く確認され、また、通常、つくはずがない箇所に見える黒斑が見られる破片や粘土の状態で運んでしまった土師器片があり、これについては意識的に製品固定の道具として、焼成坑の中で使われた窯道具的なものであろうと判断した（写真図版 33-84~86）。焼き弾けた破片群についても、当焼成坑の湿気の多い地盤を考えれば、意識的に床に敷かれていた可能性は高く、焼成中



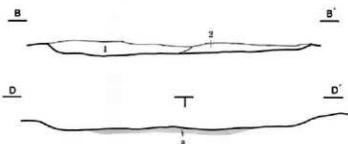
第 86 図 B・C 地区の手工業生産遺構密集区域

(SK43) 全てH=11.90m

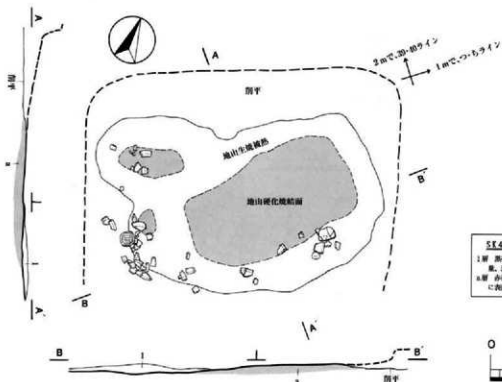


SK43 焼成坑土層図

1層 黒褐色土 (SYK32) : 炭化材や腐炭質炭化物多量。焼土小塊・土器破片多量を含む。
 2層 黒褐色土 (SYK32) : 炭化物類と焼土多量混在。炭化塊多量を含む。
 3層 明赤褐色土 (SYK5) と黒褐色土 (SYK32) との混在土。
 a層 明赤褐色土 (SYK5) : 炭化土上の焼結したもの。黒褐色地層との境は焼結した状態のために急変を呈す。



(SK44) 全てH=10.60m



SK44 焼成坑土層図

1層 黒褐色土 (SYK32) : 炭土塊多量。炭化小塊・土器破片多量を含む。
 2層 赤褐色土 (SYK4) : 焼成土。焼成土の境は焼成土の境に近くは無く焼成土とする。

第 87 図 手工業生産遺構 1 (土師器焼成坑: SK43, SK44)

破損した土師器片をそのまま遺棄したものは極めて少なかったのではないかと考えられる。

2. SK44

比較的堅穴建物や掘立柱建物の乱立する鞍部区域に立地する。地山近くまで削平を受けているため、旧地形の復元は困難だが、比較的平坦な地に構築されていたものと考えられる。削平により、土坑としての壁立ち上がりは把握できていないが、焼結遺存した床面範囲から推察するに、横軸長 3.0～3.5 m、縦軸長 2.0～2.5 m 程度の規模の略方形または楕円形状を呈す土坑プランであったと推察される。床面は黄褐色土・地山のままで、被熱焼結の強い部分では 15 cm 近い赤褐色被熱層を形成していた。

埋土に灰層の確認はないが、SK43 に近い炭化材片混在の黒褐色土が存在し、150 点を越える土師器片が混在していた。長副釜片 4 点と焼成粘土塊 1 点以外は、椀類などの土師器食器片で、SK43 同様、内黒焼成椀 B と通常土師器の椀 A・B で構成され、時期もほぼ同様と考えられる。当焼成坑で注目されるものは、歪みの激しい土師器椀破片 28・29 と焼成粘土塊 30 の存在である。椀破片は焼成前に強く歪んだり、ちぎれたりしたまま焼かれたもので、製品製作の過程の中で破損してしまったものである。通常は生粘土に戻して再利用されるものだが、焼成前の土器片として意識的に焼成坑内に入れられたものであり、それは 30 の焼成粘土塊に関しても同様の意味があると考えている。このような土器生産段階での粘土残滓を焼成道具として使う視点については、拙稿で詳しく論じているので参考とされたい（望月精司 2005「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術—二ツ梨一貫山窯跡の事例検討を中心として—」『窯跡研究』創刊号 窯跡研究会）。

3. SK49

尾根筋へ上る斜面に存在する土師器焼成坑で、プラン確認当初は 1 基の土師器焼成坑と予測していたが、調査の結果、2 基の土師器焼成坑が斜面に縦に並んで構築されていることがわかった。土層堆積の切り合い関係から斜面下方の SK49 I の後に SK49 II を構築したことが確認できるが、出土土師器食器片形態からは時期差を読み取ることが不可能であり、SK49 I の廃絶後すぐに SK49 II が掘削されたものと予想される。

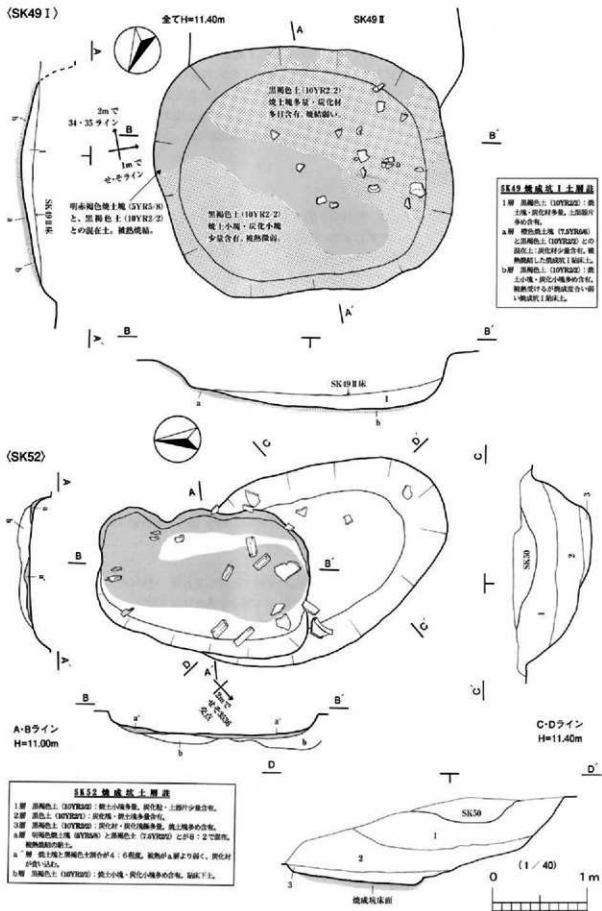
SK49 II は SK49 I を前庭部的なスペースとして使用し、その斜面上方へ焼成坑を構築したもので、縦軸長 308 cm、横軸長 288 cm の縦長楕円形プランを呈す。奥壁、側壁ともに比較的開き気味に立ち上がり、前壁は立ち上がりわずに開口状に緩く傾斜する。奥壁深 33 cm、床長縦 278 cm × 横 250 cm、床面積 59 m² 程度の規模で、SK43 に比べて、やや大型ではあるが、焼成坑形態が崩れて楕円形化している。焼成坑の被熱焼結度合いは奥壁中央付近上部が最も顕著で、続いてその周りの奥壁と床面奥壁寄り、床面中央付近については被熱度合いが弱く、焼結した感じはない。側壁や前部付近の床面においては被熱痕跡すら確認できない状況であった。床面は黒褐色土に黄褐色土を混在させる粘土であり、特に奥壁から床面奥付近は厚く貼られている。

埋土には土師器食器片を大量に混在させる黒褐色土が堆積しており、特に下層は炭化小塊や炭化材片を多量に混在する灰層的な土層を呈していた。出土遺物は SK49 として上げているため、焼成坑 I と識別しきれていない部分もあるが、400 点を越える SK49 出土土師器小片のうちの 7 割以上は焼成坑 II に伴うものと判断される。土師器小片は長副釜片 1 点、短副小釜片 2 点、鍋類片 5 点、匣鉢片 9 点、土師 1 点、焼成粘土塊 1 点以外は全て椀類の土師器食器破片で、内黒焼成椀 B と通常土師器の椀 A・B、皿 A で構成される。組成や椀類の器形、流量から見て、SK43 に後出する時期、古代Ⅶ 2 期に位置づけられるものと判断される。土師器片には焼き弾けた製品が多く確認され、黒斑の付く破片や粘土の状態まで歪んでしまった土師器片など、意識的に焼成坑の中で使われた窯道具的なものも多く確認される（写真図版 34-93～95）。ただ、当焼成坑の場合、焼成破損品をそのまま遺棄したような破片も多く、焼成坑下方で土師器片の分布が広がっている。

SK49 I は縦軸長 260 cm、横軸長 312 cm の縦長楕円形プランを呈す。奥壁が焼成坑 II によって破壊されているため、その部分での壁の立ち上がりは不明だが、側壁、前壁ともにやや開き気味に立ち上がる。床長縦 217 cm × 横 262 cm、床面積 4.1 m² 程度と、焼成坑 II よりもひとまわり小型で、床面中央が窪み形状を持つ。焼成坑の被熱焼結度合いは奥壁付近と床面中央付近が強く、その他の箇所は焼結する感じはないが、ところどころ焼上り化し、被熱していることが分かる。床面、壁面ともに黒褐色土に黄褐色土を混在させる土が黒色地山に貼られている。埋土は焼土塊や炭化塊を含有し、土師器小片を多く混在させる土層である。

4. SK52

これまで述べた土師器焼成坑は 10 世紀以降のものであるが、当焼成坑は 7 世紀代に位置づけられるものであり、



第 89 図 手工業生産遺構図3 (土師器焼成坑: SK49 I、SK52)

観見町遺跡内で唯一の7世紀代土師器焼成坑事例である。SK49の斜面下方に位置し、類似する時期の竪穴建物が隣接して作られている。SK50に切られているため、焼成坑の上部でのプランや壁の状態は不明なのであるが、床面がフラットで広い範囲で被熱焼結している点と焼成坑内に遺存する炭化材、焼き弾けのある土師器片の存在から、土師器焼成坑と認定した。ただし、土坑としての窪みは楕円形を呈すが、斜面に対して斜めに作られている点や、長軸220cm、短軸160cmと焼成坑としては小規模である点など、定型化された土師器焼成坑とは異なる形態を有していると言える。埋土は最下層に炭化材や炭化塊を極多量に含む灰層の土層があり、その中で焼け弾けのある土師器が少量確認された。須臾器がないため、確実な時期の把握は困難だが、古代Ⅱ1期からⅡ2期の中で考えてよいものだろう。

第2項 鍛冶炉

今回の報告区域では、竪穴建物内で2基、屋外で2基の計4基の鍛冶炉が確認されている。さて、上記の土師器焼成坑は土師器焼成のために発生する火や煙により、屋外である方が都合がよいのだが、鍛冶炉に関しては、火の発生する範囲が狭いことと鍛冶作業における炎の色の識別を容易とするため、太陽光線を遮断できる屋内であることが都合がよいとされている。つまり、竪穴建物内設置は必然的とも言える状況であって、逆に屋外で作業されること事態が不自然とされる。このように考えると、屋外炉とされるSJ01、SJ03についても何らかの覆屋が存在していた可能性がある。SJ03は位置的にSB48の建物内に所在するが、掘立柱建物の柱穴に極めて近接する箇所に位置しており、鍛冶炉に伴う建物と判断することには無理がある。SJ01も含め簡易な覆屋的なものがあったのだろう。明確なピットの並びは捉えきれないが、鍛冶炉周辺には小ピットが複数確認できており、柱並びがはっきりしない簡易的な建物が存在していた可能性は十分にある。以下に、各遺構の説明を行う。

1. SJ01

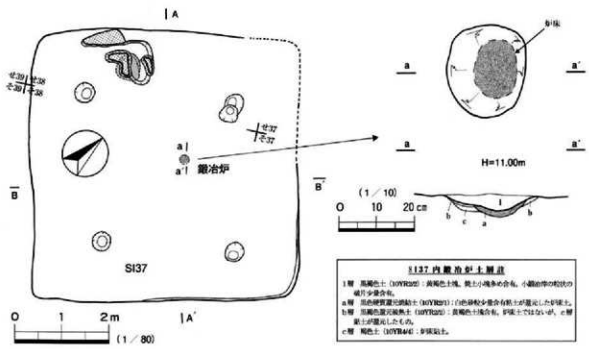
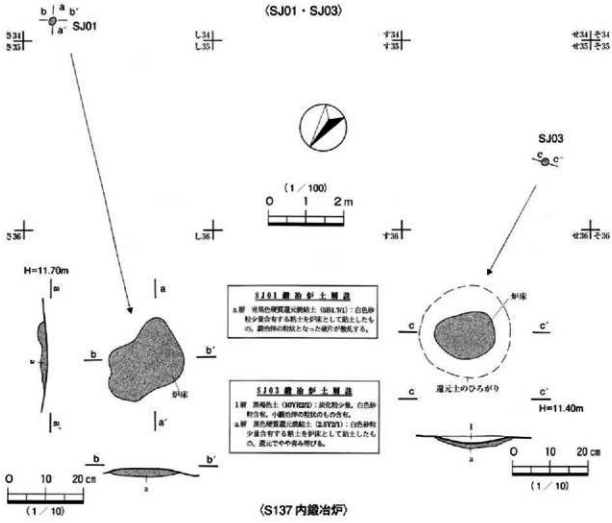
SJ01は斜面上方に位置する鍛冶炉で、周辺には掘立柱建物や竪穴建物などの建物遺構が存在しないなど、居住区ではない箇所を意図的に選定している感がある。包含層直下で検出できたもので、還元焼結した炉床のみ20cm四方の範囲で不整形楕円形状に遺存していた。炉床土は砂粒を混在させる粘土を黒褐色土堆山直上に貼り、硬質に焼結したもので、還元炉床土厚は25cmを測る。周辺包含層からは鍛冶滓や羽刃片、鉄製品が出土しており、炉床上面や周辺からも極小サイズの椀形鍛冶滓を始めとして、鍛冶滓の小さな断片が多く出土している。炉壁等は消失しているが、炉床の大きさからして、小型の鍛冶炉であった可能性は高い。なお、当遺構の帰属時期については、土器出土もなく、古代であること以外は、推察する根拠をもたない。

2. SJ03

SJ03は先述したように、SB48内に位置するが、西側隅柱に極めて近接しており、同時併存である可能性は極めて低い。包含層直下で検出できており、当鍛冶炉調査後にSB48の掘立柱建物柱穴を確認している。掘立柱建物帰属時期は出土土器から古代Ⅱ2期と判断でき、鍛冶炉の帰属時期はそれを越えない古代と予想しておきたい。鍛冶炉は炉壁などの炉本体が消失した状態で検出しており、還元焼結した炉床のみを調査した。炉床は12×18cmの規模で楕円形状に浅く窪んでおり、小さな鍛冶滓を含む埋土が堆積していた。その周りには還元焼結した砂質土が分布しており、炉床土の上に砂質還元土が薄く存在していた可能性がある。底に溜まった椀形鍛冶滓を剥がれ易くするためのものであろうか。炉床土はSJ01と同様の砂質帯びる粘土で、黒色地山土に直接貼られている。厚さ10cm程度で、酸化被熱層などは確認できていない。周辺包含層からは椀形鍛冶滓、鍛冶滓をはじめとして、精錬炉の炉体構築芯材として使用された可能性を持つ炉材石（溶解した鍛冶滓の付着する石）や炉壁が溶解した粘土質溶解物、製錬炉の炉壁片なども出土する。当鍛冶炉に伴うと断定できないが、当グリッド出土の鍛冶関連遺物は周辺グリッドよりも突出して多いことを考えれば、当遺構関連遺物と位置づけ問題ないものと理解する。

3. SI37 内鍛冶炉

古代Ⅱ期前後の時期に位置づけられるSI37竪穴建物の床面に構築された鍛冶炉である。炉床の掘り込みが竪穴建物床面からであること、付設位置が四本主柱穴間の中央付近であることから、竪穴建物に付設された鍛冶炉であると理解される。ただ、当竪穴建物を専用の工房施設と位置付けられるかどうかについては疑問もあり、居住用竪穴建物の廃絶家屋を鍛冶場に転用した可能性もあるとされている。鍛冶炉は炉壁等の炉体が除去された状態のもので、炉床のみが遺存していた。炉床規模25×23cmを測る楕円形状で、全体的に浅く窪み形状を呈す。



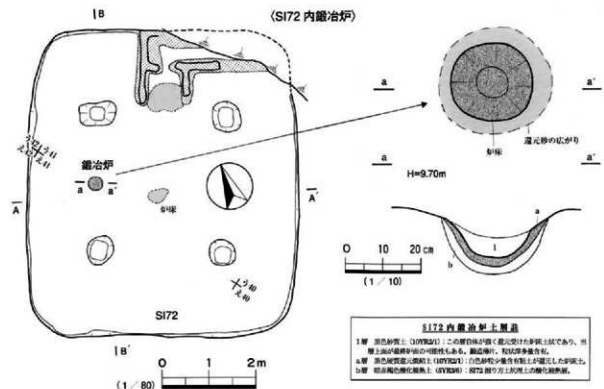
第90図 手工業生産遺構4 (冶炉：SJ01、SJ03、S137 内蔵冶炉)

炉床下底面は 15×11 cm程度で、その部分はSJ01・03同様の黒色還元焼結砂質土だが、その周辺は褐色土が還元被熱した状態で、異なる土が貼られていた。周辺土は炉壁構築土にも似ており、その基底部分であった可能性がある。炉床中央の砂質土については、先述したような椀形滓の剥離を容易にする目的があったものかもしれない。当鍛冶炉埋土中には小鍛冶滓片が混在し、堅穴建物埋土からは鍛冶滓、椀形鍛冶滓、羽口、鉄製品等が多数出土する。ただし、いずれも床面から出土しているわけではなく、当鍛冶炉に伴うものであるかは判断できない。鍛冶作業終了後のものと考えるのが妥当だろう。

4. SI72内鍛冶炉

古代Ⅱ期に位置づけられるSI72堅穴建物の床面で検出された鍛冶炉である。鍛冶炉の設置する箇所は堅穴中央から左側、四本主柱穴の左柱間中央に位置しており、床面から掘り込まれていることを考え合わせれば、堅穴建物内に付設された鍛冶炉であると位置づけられる。さらに、当堅穴建物内には床面出土で羽口や鍛冶滓が出土すること、そして食膳具や転用硯、定型硯、堅穴建物造り付けカマドで使用された煮炊具も床面に廃棄されていることを考え合わせれば、当堅穴建物を居住用として使用するとともに、鍛冶工房としても機能していたと理解されるだろう。堅穴建物の中央床面に火処としての炉を設け、鍛冶炉の設置位置は堅穴建物中央ではなく、主柱脇の空間であったことも、居住建物の中での鍛冶作業空間としての位置付けが明確になされていたことを示す。当堅穴建物はL字型カマド付を設ける朝鮮系移民建物であり、なおかつ定型硯、転用硯、金銅製耳環など華奢品を所有する、上位ランクの居住建物でもある。そのような建物に鍛冶炉が付設されていた点が、当集落内での製鉄技術者の位置づけを示すものと考えられよう。

鍛冶炉は炉床のみ遺存していたもので、炉床規模は 20×20 cm程度を測る略円形を呈す。炉床と考えられる黒色還元焼結粘土が深く窪むように存在し、それに沿って下層に酸化被熱層が薄く存在する。その上には黒色に強く還元した砂質土が厚く載っており、その還元土が周辺に広がっている感じであった。図で炉床土とした粘土質還元層は1次床面、その上の還元砂質層は面を確定できないが、複数作業中での炉床土であったと理解しておきたい。これまで述べたいずれの鍛冶炉でも確認できるものであり、椀形滓溶着防止のための離れ砂的なものだったのだろう。この還元砂質層からは多量の粒状滓と鍛造薄片が出土している。前述した羽口も含め、極小サイズの椀形鍛冶滓、鉄製品など、製品加工工程の最終段階に近い作業を主とする鍛冶炉であったと予想される。



第91図 手工業生産遺構図5（鍛冶炉：SI72内鍛冶炉）

第4節 その他の遺構と包含層

今回の報告区域においては、これまで述べた遺構の他に、土器溜まり遺構と溝状遺構、ピットがある。ただ、土器溜まり遺構以外については、特に説明を要する遺構はなく、西側で検出される数条の溝状遺構についても、近世以降のものとして判断される。以下に、土器溜まり遺構と包含層の遺物出土状況について述べる。

第1項 土器溜まり遺構

1. 古代の土器溜まり遺構

今回の報告区域では、6箇所の古代土器溜まり遺構が確認される。さ35Gr土器溜まりと、し36Gr土器溜まりは隣接するが、他の遺構については、お38Gr、か43Gr、き40Gr、て36・37Grと、分布がばらつく傾向があり、土器出土量も多いとは言えない。その中で最も土器出土量の多い遺構は、お38Gr土器溜まりで、須恵器食膳具46点、土師器食膳具11点、土師器煮炊具566点、須恵器貯蔵具22点を数える。須恵器環A蓋の完形や口頸部を欠損する双耳瓶の完形、有台器種底部の転用碗など、残りのよいものもあるが、多くは破片での出土で、土器の時期もⅡ2期、Ⅳ2、Ⅴ2期とばらつき、まとまりを持たない。か43Gr土器溜まりでは須恵器食膳具4点、土師器煮炊具27点、須恵器貯蔵具12点、き40Gr土器溜まりでは、須恵器食膳具7点、土師器食膳具1点、土師器煮炊具15点、須恵器貯蔵具4点が、て36・37Gr土器溜まりでは、須恵器食膳具14点、土師器食膳具2点、土師器煮炊具9点、須恵器貯蔵具8点が出土するが、出土量は少なく、特殊器種等の出土も認められない。

土器溜まりの分布が隣接する、さ35Gr土器溜まり・し36Gr土器溜まりは、その土器分布が南西側へと伸びて、後述する古代末期の上層土器溜まりの下層に滑り込んでおり、包含層で上げた遺物出土状況から見れば、これらの土器溜まりは単体のものではなく、さ35Grからさ35Grにかけて分布する大規模な土器溜まり群であったと理解可能である。ただ、さ35Gr土器溜まりの出土須恵器がⅡ3～Ⅲ期にまとまることや、さ35Grからまとまって出土する須恵器食膳具がⅣ2古期に位置づけられることなどから考えて、大規模な土器溜まり群とは言っても、複数の土器廃棄の集合体的な性格のものであったと考えられる。この場所は地形的に尾根部へと上がる傾斜転換点にあたり、鞍部状の小規模な窪地に土器が廃棄されたものと考えられよう。古代末期に位置づけられる上層土器溜まり遺構が、当土器溜まりの上層に重なるように存在しており、そのことから考えても、地形的にこの区域が窪地であったことを物語るであろう。

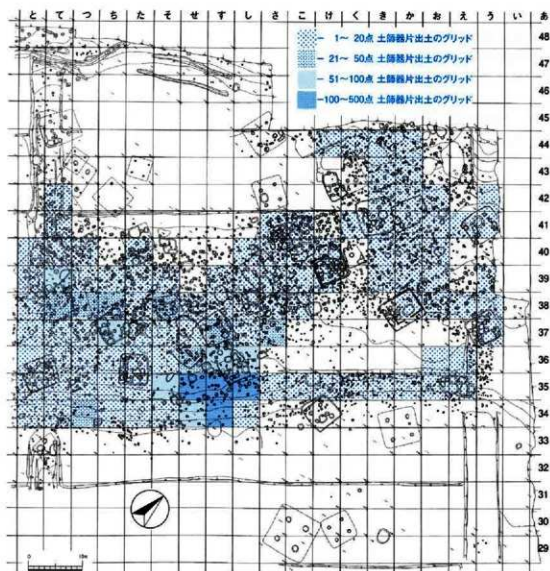
2. 古代末期の土器溜まり遺構

今回の報告区域では、古代末期に位置づけられる掘立柱建物などの明確な建物遺構は確認されていないが、土師器食膳具を中心とした大量廃棄遺構が、す35Grを中心とした区域に確認できている。これらをまとめて上層土器溜まり遺構とした。せ35Gr、す34Gr、す35Gr、し35Grの4つのグリッドにまたがって存在しており、中世Ⅰ～Ⅱ1期に位置づけられる1,143点の土師器食膳具（一部煮炊具と土製品含む）と7点の白磁や東濃産灰輪陶器が出土している。特に、す34Grのグリッド杭付近では約2m四方の範囲で、土師器食膳具の完形品を中心とした集中廃棄が見られ、ここだけで250点もの土師器食膳具が出土している。同じ向きに重ねられているような意識的な埋納の様子は見られず、何かの目的で使用したものをまとめて廃棄したものと理解されよう。

当上層土器溜まりは、前述したように、古代土器溜まり群の上へ廃棄されたものであり、この区域を中心として、周辺の包含層や堅穴建物の埋没後の窪地へ、散乱したかのように分布している。これらの遺物は、全体で1,713点の土師器食膳具と22点の陶磁器片で構成されており、遺物時期も上層土器溜まり遺構の時期とほぼ同じである。細片資料が多く、固化できるものは少ないが、遺物出土点数は、上層土器溜まり遺構よりも多く、白磁についても包含層出土の方が多い。周辺へ散った要因は定かではないが、何かを意図したのではないだろう。

第2項 包含層

包含層として提示したのは、特に遺構として特定できずに、グリッドで上げた遺物であり、遺構認定できなかったもの全てを含んでいる。堅穴建物や土坑など、その下層で遺構が特定できたものは、遺構埋土層として遺構帰属させて取り上げたが、掘立柱建物の柱穴上層埋土や掘り込みが浅く遺構認定にいたらなかった土坑資料など、包含層としてあげているため、純粋な意味での包含層資料として提示しているものではない。当遺跡は台地に営まれた集落であり、純粋な意味での包含層は、谷部や鞍部などの窪地に廃棄された土器溜まり層と理解さ



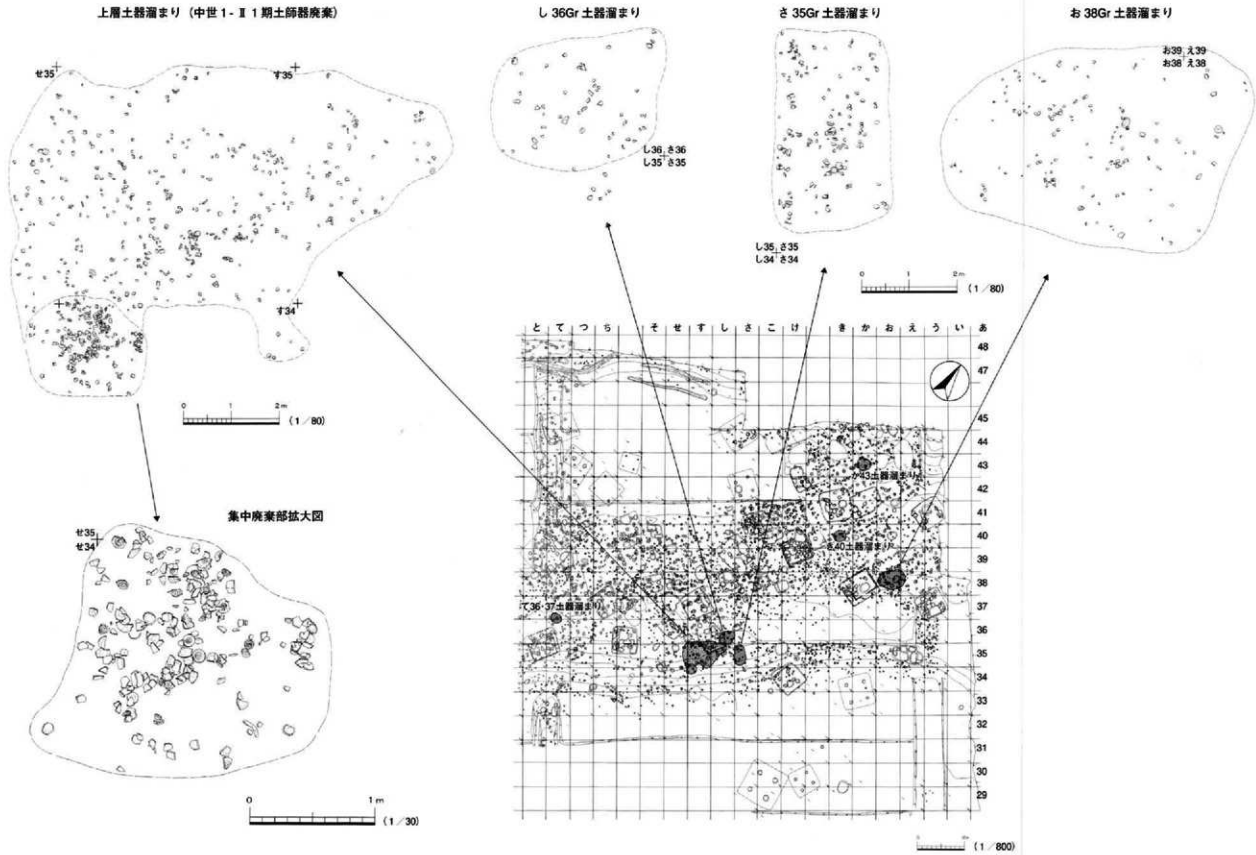
第92図 古代末期土師器土器溜まり・包含層出土量分布図

れる。今回の報告地域で言えば、古代の土器溜まりで述べた、さ35Grからそ35Grにかけての大規模な土器溜まり群が該当するもので、と37・38Grからし37・38Grにかけての土器出土量の多い区域は、下層に掘立柱建物や遺構の特定できていないものが密集したことに伴う、遺構埋土層遺物を多数含んだためのものであろう。

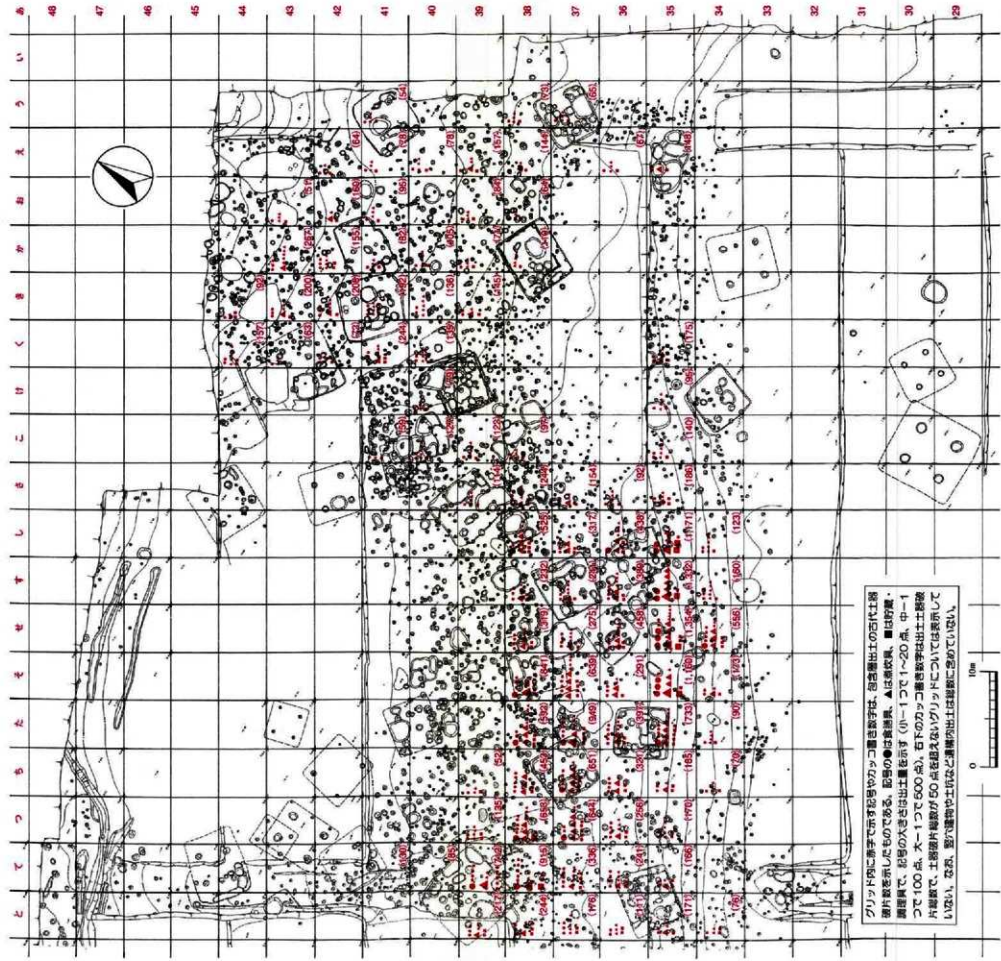
以下には、土器用途別の出土土器破片数を提示したが、調査区域が前回報告のA地区よりも広いものの、包含層遺物総量はA地区の28%減となっている。前回の報告でも指摘したことだが、用途別比率を各遺構と比較すると、包含層は竪穴建物よりも須恵器率が高く、食膳具と貯蔵具が目立つ傾向があり、それは土器溜まり遺構や土坑等と共通する傾向を持つ。

出土遺構ごとの用途別古代遺物破片数 ※ () 内のパーセント表示は用途別割合を示す

出土遺構名	須恵器食膳具	土師器食膳具	土師器煮炊具	須恵器貯蔵具	土製品	石製品	遺構別計
竪穴建物	2,072 (8.4%)	947 (3.8%)	19,866 (80.9%)	1,149 (4.7%)	123 (0.5%)	409 (1.7%)	24,566
掘立柱建物	137 (9.3%)	44 (3.0%)	1,204 (81.4%)	67 (4.5%)	0 (0.0%)	27 (1.8%)	1,479
土坑・坑状遺構	1,129 (13.3%)	280 (3.3%)	6,397 (75.1%)	567 (6.6%)	44 (0.5%)	102 (1.2%)	8,519
土器溜まり	153 (13.4%)	18 (1.6%)	833 (73.3%)	114 (10.0%)	1 (0.1%)	18 (1.6%)	1,137
包含層・ピット	5,531 (18.3%)	894 (2.9%)	19,872 (65.7%)	3,359 (11.1%)	109 (0.4%)	494 (1.6%)	30,259
用途別計	9,022 (13.7%)	2,183 (3.3%)	48,172 (73.0%)	5,256 (8.0%)	277 (0.4%)	1,050 (1.6%)	65,960



第93図 土器溜まり遺構平面図 (S=1/80) と分布図 (S=1/800)



第94図 古代土器古層出土量分布図 (1/400)

第Ⅲ章 今回報告区域出土の遺物

第1節 出土遺物概要と分類

第1項 出土遺物の総量と時期別比率

今回報告の対象としたB地区とC地区北側区域より出土した遺物は、遺物収納箱(645×380×145mm)で278箱を数える。内訳は須恵器(陶磁器含む)がB地区74箱+C地区14箱、土師器がB地区149箱+C地区24箱、石製品がB地区8箱+C地区1箱、鉄滓・鉄製品がB地区6箱+C地区2箱で、遺物片総数で示すと須恵器14,321点(食器具9,022/貯蔵具5,256/土製品43)、土師器53,277点(食器具2,183/煮炊具48,172/土製品234/中世食器具2,688)、石・石製品1,050点、鉄滓・鉄製品2,800点となる。A地区の種別量比に比べると、須恵器がやや少なく、土師器が多い傾向を持つが、これはA地区のような古代前半代の土器廃棄場が乏しい代わりに、中世(暦年代的に11世紀後半から12世紀前半に位置づけられるため、正確には古代末期の遺物だが、土器編年上では中世土器に該当するために中世と表記した)の土師器食器具廃棄場が存在するため、両地区とも堅穴建物への廃棄遺物を中心としている点から、概ね類似した構成を示すと言える。当報告地区の調査面積はB地区7,700㎡、C地区850㎡の合計約8,550㎡だが、このうち約3,800㎡は包含層や遺構覆土の大半が削平を受けており、実質的な調査面積は4,700㎡程度となる。これはA地区の実質的調査面積4,500㎡に近い数値であり、これを報告書Ⅰで出した箱数比率指数(1,000㎡換算での箱数比率。田嶋明人「古代の土器と中世の土師器」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』第5回北陸中世土器研究会1992年)で示すと、59.1となる。A地区の指数が61.1であるから、近似した数値と言えるものであり、遺物廃棄においては、両地区とも類似した高い遺物出土状況であったと評価できるだろう。

遺物の時期は、「額見町遺跡Ⅰ」で述べた縄文時代の土器や石器を別にすると、7世紀初頭、つまりは田嶋明人編年の古代1期以降の遺物となる。ただ、B地区内ピット(P469)出土のもので、古墳時代中期に位置づけられる可能性が高い土師器煮炊具の略定形品が1点(第166図42)確認できており、6世紀以前の遺物が僅かだが混在している可能性をもつ。しかしながら、堅穴建物を始めとして、この時期の明確な遺構は確認されておらず、破片として混在していたとしても、膨大な古代の土師器群の中では誤差の範疇と位置づけられよう。古代の遺物は、7世紀初頭の古代Ⅰ1期から9世紀前半代の古代Ⅶ期までが中心で、遺構資料はもとより、包含層資料でもⅦ期以降は大きく遺物量を減少させる。Ⅶ～Ⅷ期(9世紀後半～11世紀前半)を通して遺物出土量の少ない状態が見られ、土師器焼成坑など、それまで確認できなかった土師器生産遺構が顕在化する。古代集落の終焉時期であり、次の田嶋編年中世1期以降の中世集落とは別に考える必要がある。当地区では、中世Ⅰ-Ⅰ期(11世紀中頃)になると再び遺物出土が確認でき、中世Ⅰ-Ⅱ期(11世紀後半)をピークに一定量の土師器食器具廃棄遺構を検出するが、12世紀後半以降の遺物は皆無に近く、当遺跡の中世集落は短期で消滅したものと理解される。ここで言う中世は、暦年代的には平安時代末期の範疇だが、前述したような新たな集落展開が見られることと土器様相においても大きな転換様相を看取できるため、意識的にこれらの時期の遺構や遺物については、古代末期に位置づけず、古代とは切り離す形で、中世の遺物、遺構と位置づけておきたい。

古代遺物は堅穴建物からの出土が多く、全出土量の37%を占める。堅穴建物の時期は7世紀前半が10軒、7世紀後半が18軒、8世紀前半が6軒、8世紀後半と9世紀前半が各1軒と、7世紀を主体に確認できる。ただし、堅穴埋土上坪には堅穴建物の時期よりも確実に新しい遺物廃棄が確認できており、中世の遺物も含め、8世紀後半以降の遺物を定量含んでいる。土坑からの古代遺物出土は12.5%程度を占めるが、A地区で見られたような1,000点以上の土器を出土する大型の土器廃棄土坑はなく、出土量が多い方でも500点前後のものである。遺物出土量の比較的多い土坑は、7世紀前半と後半が各1基、8世紀前半が5基、8世紀後半が3基、9世紀前半が2基で、土器溜まり資料についても8世紀前半以降の時期が目立つなど、堅穴建物の時期よりも新しい時期に中心を持つ。前回報告のA・D地区のⅠ群集落に比べると相対的に新しい時期が中心であり、特に掘立柱建物や土坑を見る限り、8世紀後半においても集落の盛期が存続する可能性を有している。ただ、掘立柱建物は時期幅狭ができていないものも多々あり、包含層資料による時期幅属量比が参考となる。

食器具のみでの比率だが、各時期に分けた食器具破片概数(20点程度の内括りで表示した)では、古代Ⅰ期が須恵器300+土師器280、Ⅱ1～Ⅱ2期が須恵器460+土師器60、Ⅲ3～Ⅲ期が須恵器1,780+土師器160、Ⅳ

期が須恵器1.940 + 土師器180、V期が須恵器1.060 + 土師器80、VI期が須恵器180 + 土師器20となる。各時期幅が異なるため、年代幅での表示区切りをすると、西暦600年から60年間で580点、40年間で520点、40年間で1,840点、60年間で2,120点、40年間で1,140点、60年間で200点という出土量推移になる。つまり、包含層遺物に関しては、7世紀前半を100%として換算すれば、後半に135%へ微増、8世紀前半に一気に475%へ激増し、8世紀後半の365%、9世紀前半の295%まで減少傾向を見せながらも、緩やかな減少傾向を見せる。9世紀後半になって35%へ激減し、集落の急激な衰退を予感させる。

以上の様相は、土坑出土遺物の様相に近く、獨立柱建物は8世紀前半以降、9世紀前半代まで継続して営まれている可能性を示している。ただ、竪穴建物が存在するまではそこへの土器廃棄が中心となるため、竪穴建物数の減少する8世紀前半をもって、包含層資料が増加するのは当然のことであり、特に8世紀後半以降の土器出土量の多さは、竪穴建物から獨立柱建物への移行が相乗効果として現れているものである。遺構層時期から考えても、当地区集落は7世紀後半から盛期を迎えることは間違いない、8世紀前半ないしは中頃までを含む形で集落の盛期は存続したものと見る。その後の集落推移は激減という状況ではなく、9世紀前半代までは集落を維持し、後半代になって衰退終焉したものと理解される。

第2項 出土遺物の分類

1. 古代遺物

古代遺物は大半が土器・土製品で構成されるもので、僅かの金属製品と石製品が装身具や工具、武器、部材などに使われる程度である。金属製品は鉄製品が主で、刀子、鉄鏃、釘、金具類、鍛造道具類、紡錘車、鎌、鋸先などが確認でき、銅製品では耳環がある。石製品は、紡錘車、緑色凝灰岩の管玉未成品、砥石（大型砥石含む）、金床石、造り付けカマドや炉の芯材などがあり、ほとんどは砥石とカマド部材で占められる。古代の土器・土製品は、須恵器と土師器に分けられ、それ以外の素材である国産施釉陶器や舶載磁器類などの出土は確認できていない。基本的に須恵器は食器具と貯蔵具、土師器は食器具と炊具に機能分化しているが、一部、須恵器に飯や長割釜、赤彩土師器に小型壺など、例外的なものも少量ながら確認される。以下に、須恵器と土師器に分けて、本報告で提示する器種名の概要を説明する。

(1) 須恵器の器種分類

『額見町遺跡I』の報告でも述べたように、これまでの小松市の筆者記述報告書に準拠し（『二ツ梨一貫山窟跡』2002年、『八里向山遺跡群』2004年）、食器具については田嶋明人氏の1988年北陸古代土器編年での分類案（『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会）、貯蔵具類については1999年の北野博司氏の分類案（『須恵器貯蔵具の器種分類』『北陸古代土器研究』第8号 北陸古代土器研究会）を基本とするが、一部新たに器種名を分類に加えたものもあるため、以下に提示しておきたい。

a. 食器具器種

杯、盤、碗、皿、鉢、高坏に大きく分け、合子型蓋杯を坏H、坏Hの蓋が逆転して無蓋の坏身器種となったものを坏G、その口縁部が外反するものを坏Fとし、無台の坏身に於たる坏Aと坏Gそして類似器種をもつ碗については、その識別を次頁に示しているので、参照願いたい。また、坏A・Bと盤A・B、碗A・Bと皿A・BについてはAが無台器種、Bが有台器種であり、坏と盤及び碗と皿の違いは口径に対する身の立ち上がりの高さから分けている。鉢と坏G、そして出現期の坏A、坏Bは有蓋器種であり、その場合、蓋と身を明示する。なお、坏・盤と碗・皿の識別基準についても、次頁で示しているので、参照願いたい。

高坏は、合子型有蓋坏部に脚部の付く器種を有蓋高坏とし、長脚と短脚に分ける。単に高坏と記すものは無蓋高坏である。無蓋高坏は、伝統的な長脚2段スカシをもち坏部に後形成をするタイプを高坏H、同様の坏部器形で脚部スカシを持たないタイプを高坏E、坏部に後形成を持たずに脚部が相対的に短くなるものを高坏G（高坏Gに関しては坏部が小型で坏型を呈す高坏G小と坏部が浅い椀形でやや大型となる高坏G大とに細分する）、坏部が大型の盤形状を呈し、脚部は短めに広がる、承盤とも言われるタイプを高坏F、坏B蓋を逆転させたような身の浅い坏部器形で、長い脚部が付くタイプを高坏Aとする。以上が主な食器具器種だが、金属器根拠の特殊器種で、碗にスカシ付きの脚の付く装飾性高い高脚碗や棧碗、環状突帯付蓋をもつ有台坏など、仏器的な特殊器種があり、それについては個別に本文中で説明する。

(鉢bと坏G、坏Gと坏Aの識別について)

鉢は6世紀後半に出現する金属器模倣の器種で、古代Ⅰ1期古段階の無蓋で深身、沈腰抽杖の鉢aから、新段階で坏型の無台坏身に返りのあるつまみ蓋を伴う鉢bへ主体を移していく器種である。この鉢bについては、坏Gとの識別点を、金属器模倣的な細部での精緻な作り（薄手作りで、ケズリやカキ目調整、丁寧な内面調整など）においており、田嶋氏が古代の土器研究会シンポジウム報告（田嶋明人 1997「北陸での7世紀の土器」『古代の土器研究会第5回シンポジウム 7世紀の土器』）の中で特徴としてあげる「器厚は底部中央で薄く、口縁部への傾曲部直前できまど厚くなり、屈曲部で再び薄くなって直立した口縁部に至る。……（中略）……外面は通常ヘラケズリしない」器形の坏Gと作り方の意識の点で識別可能と考えている。さらに、坏Gと坏Aとの識別については、坏Gに見られた器厚の極端な凹凸をヨコナデにより平滑にし、器厚を均一に仕上げ、体部外傾器形化させるといった、つまり食器具容器としての意識の違い、坏B身内面調整との共通性により、その違いを提示している。坏Aについては、古代Ⅱ3期以降、無蓋器種にはほぼ統一される様相にあるため、特に断りのない場合、無蓋坏身をさすが、Ⅱ1・Ⅱ2期の有蓋主体時期では、蓋と身を明示することとしている。また、さらにこの時期の坏A蓋について、厳密には坏B蓋との識別が困難な部分があるが、識別を容易なものとするため、口縁部に返りをもつものについては坏A蓋とし、折り曲げ口縁のものについては坏B蓋として便宜上区分した。坏Aの蓋が全て返りをもつものでないことは承知しているが、蓋の形態からのみでは身の認定要素がでない以上、この時期の相対的な量比の観点から、上記の類別根拠が有効と判断した。なお、坏Gと坏Aの器種認定については、西弘海氏の平城宮報告で示した分類と差異があるので、その点は十分に承知願いたい。

(坏A・盤A・椀A・皿A、坏B・盤Bと椀B・皿Bの識別について)

当器種の識別根拠は成形技法痕跡をその拠所としている。つまり、坏盤類は大型円盤を底部土台として、内面境に見込みの窪みもち、成形台へ切り離し技法によって成形するものであり、椀皿類は小型円盤を底部土台として、体部を長く引き伸ばし、内面見込みの確認できない、成形台回転糸切り離し技法によって成形するものである。前者の技法は、北野博司氏が「底部円盤紐水挽き技法」（北野博司他1994「須恵器坏類の製作技法」『日本考古学協会第60回総会発表要旨』）または木立雅朗氏が「板おこし細作り技法」（木立雅朗2000「須恵器坏類の製作実験ノート」『立命館文学』565号）と名称付けた成形技法であり、後者は服部敬史氏等が「底部円柱作り」（服部敬史他1979「南多摩原址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号 神奈川考古学同人会、ただし、筆者は当技法について「底部円柱紐水挽き技法」が妥当ではないかと考える）と名称付けた成形技法に相当する。

b. 貯蔵具器種

貯蔵具は小型貯蔵具類、鉢類、壺類、瓶類、甕類に大別される。

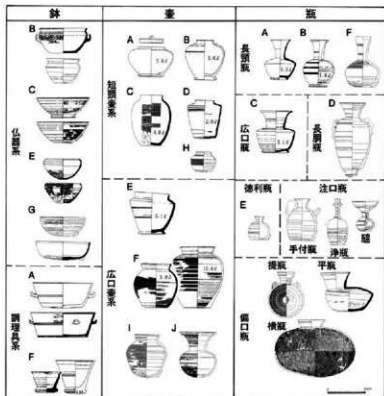
小型貯蔵具類は以下で述べる壺・瓶類のミニチュア品として作られたものであり、儀器的な性格を有するものと理解される。ただ、小型鉢については、鉢類にその原型はなく、専用器種と言えるものである。口縁部外屈する仄皿型の器形をしており、胎土には大粒砂粒混入等煮炊具に類似した胎土を意識的に使用する。火に掛けるまたは中で火を使う器として使用されたようで、脚を付す燭台形態を持つものもある。壺・瓶のミニチュアとしては、有蓋短頸壺Aや広口壺E・Fのミニチュア、長頸瓶A・B、広口瓶C、徳利形瓶Eのミニチュア、横板・平板・提板のミニチュアがあり、一部水滴等文房具使用器種もあるが、主に儀器的用具としての位置付けがなされる。

次に、鉢類だが、貯蔵具に包括してはいるものの、厳密に言えば鉢B（頸部がく字に括れる鉢で、把手付きのものもある）、鉢C（体部碗形を呈す有台碗に類似する鉢で、平鉢とも言われる。無台器種もある）、鉢E（口縁部内湾の鉢鉢器形のもの）、鉢G（金属器系の鉢を大型にしたような形状のもので、体部沈腰の入るものが多い）などは仏具的容器であり、鉢A（底部平坦な槽形の鉢で、深いバケツ状のものもあるが、浅身器形が主体で、把手付きを基本とする）や鉢F（底部厚く円盤型に張り出す円筒型体部をもつ鉢）はこね鉢、つき鉢の調理容器に用途区分されるため、貯蔵具とは区別すべきであるが、器種分類上、貯蔵具に一括して入れることで容易となる部分があり、一括して提示してある。

壺類は短頸で広い頸部器形を呈すものである。口縁部直立で短頸の器種と口頸部長めに外傾する器種とに分けられ、前者は一般的に短頸壺と呼ばれる器種、後者は広口壺と呼ばれる器種である。短頸壺は有台で有蓋、葉壺型の球壺型を呈す壺Aと有台・有蓋基本だが、胴部がやや長めとなる壺B、平底を基本とし、長胴器形を呈す壺C、平底で長胴器形を呈すが肩張り器形呈す壺D、短胴気味器形の小型のもので底部はヘラケズリ等で丸底気味とする壺Hに分けられる。ただ、上記分類に特定できないものについては、単に短頸壺とするものもある。後者

の広口壺系統のものは、肩張り器形だが、口頸部外傾、有台を基本とする、通称肩衝壺の壺Eと平底の肩丸器形で、口頸部外傾する、通称直口壺の壺F、頸部がやや括れて口縁部長めに外傾する器形で、球胴気味器形、底部叩き出しやヘラケズリ、カキ目調整で丸底気味とする、小甕に近い形状を持つ壺Iとに分けられる。これに関しても、上記分類が困難な広口系統の壺は単に広口壺とするものもあり、特に胴部に波状文や列点文などの装飾を施す器種は「広口装飾壺」にしたものもある。

瓶類は胴部に比べて頸部を強く絞り込んだ器種である。細長い口頸部をもつ長頸瓶と口縁部へ大きく外反する広口瓶、口頸部に比して長胴を呈す長胴瓶、短めの口頸部を呈す徳利形瓶、口頸部とは別に注口をもつ注口瓶、口頸部を胴部成形軸上に設定しない偏口瓶などがある。長頸瓶は口頸部別作りの



第95図 貯蔵具類器種分類図（北野1999を加筆改変）

風船技法（北野博司2001『須恵器の風船技法』『北陸古代土器研究』第9号 北陸古代土器研究会）が基本で、有台で胴部肩張り器形を呈す瓶A、有台で胴部肩丸器形を呈す瓶Bとに大きく分けられるが、器形的に瓶Aに類似するもの、風船技法ではなく胴部から口頸部までを順次成形していく長頸瓶が7世紀代に存在する。胴部装飾を施すものも多く、底部はヘラケズリ調整を施す丸底気味のものが主体だが、スカシ付きの台脚を付すものも少量存在し、これについては瓶Fとしておく。広口瓶は、瓶Aに類似した肩張り胴部器形を持つ、有台の瓶Cのみである。長胴瓶も胴部両肩に板状把手を付す無台の所謂及耳瓶、瓶Dのみであるが（瓶Dでは当形態を基本とする）、東海から関東地域においては有台で把手を付さない器種が長胴瓶の基本形となる）、当器種においては様々なサイズがあり、それによって若干形態に差がある。また、出現期のものは両肩と胴部下位の中央に把手を付す三耳瓶の形態をなすが、当タイプは胴部が長くはならない形態を基本としており、これに関しては長胴瓶にすることに疑問もある。徳利形瓶は平底を呈す器種で、やや長胴気味となる器形と重心の低い短胴器形とがあるが、瓶Eとして1器種に扱っている。ミニチュア品が主体を占める器種で、その大型的存在と言えるだろう。これに輪状把手を付すものは手付瓶、注口を付すものは注口瓶となる。注口瓶は左記徳利形のもの他、胴部穿孔のみで注口部を別付けする小型の胴部に比して長大な口頸部をもつ罎、細身の長頸瓶に注口部の付く浄瓶、そして口縁部以外の肩部等に複数の口頸部が付く多口瓶などがある。偏口瓶は風船技法で胴部成形する器種であり、胴部成形時に円盤閉塞した場所とは異なる箇所山口頸部を接合するものである。扁平胴部の側面に口頸部を付す水筒形の提振瓶や扁平胴部の中心からややずれて口頸部を付す原瓶形の平瓶、叩き成形で依形または崩形に成形した胴部の側面に口頸部を付す横瓶がその代表的器種である。偏口瓶という用語自体は一般的といえないが、これら器種は包括される特徴を有するものであり、従来、そのような用語規定されてきたものではないが、ここでは偏口瓶と総称しておきたい。なお、ここでは分類できなかったが、鳥形瓶についても偏口瓶の特殊なものと考えている。ただ、胴部形状を復元できなかったため、今報告では土製品に入れた。

甕類は、胴部成形において粘土継ぎみ+叩き成形により、胴部粗形を作り出すもので、底部を丸底に叩き出し成形することを基本とした器種である。総体的に大型法量を持ち、広い頸部をもつ、据え置き型の器種である。口頸部の長短、胴部の球胴・長胴の違いはあるが、概ね形態に大きな差はなく、甕においては形態差での大分類は存在しない。例外的なものとして、広口で身の浅い鉢状形態をもつ浅甕（把手付器種が多い）と頸部が比較的

狭く、直立短頸口頸部をもつ長胴短頸壺に類似した長胴狭口甕（有蓋であるものもあり）とが確認できているが、前者は鉢、後者は短頸壺との容器・用途としての類似性が指摘でき、器種の識別根拠がややあいまいな部分を持つ。どちらかと言えば、甕は容量により特大甕、大甕、中甕、小甕に分類可能であり、口頸部は特大甕、大甕が長頸タイプ、中甕、小甕が短頸タイプといった形態の違いが見られる。ただ、9世紀以降においては特大・大甕においても短頸化し、法量による口頸部の形態差が失われていく。

c. 須恵質土製品

土製品については、分類ではなく、当道跡で確認できる土製品の内容を提示する。まず、上記鳥形瓶1点の他、円面甕が18点、転用甕は装面甕や無脚円面甕として甕として形状を整えたものが4点（坏蓋転用のものは除外）出土する。馬形土製品は1点、土製紡錘車はやや扁平形のもので1点、管状土鉢が2点、須恵器甕で使用される貯蔵具専用焼台の破片が20点出土している。全体的な傾向として、定型甕をはじめとして甕類が多く、他の特殊土製品も少ないながらも確認される。また、須恵器甕道具である貯蔵具専用焼台が今回報告地区からは広く点在するように出土しており、製品に着着した土崩壊土片や須恵器転用置台片など須恵器に着着した不要物を製品の出荷に際しては、はつたものであると評価される。

(2) 土師器の器種分類

須恵器と同様に、「額見町道跡1」報告に基づき、分類名を付したが、以下に示しておく。

a. 食膳具器種

食膳具は器種分類とともに、古代においては色による識別について分ける必要がある。つまり、焼成段階に内面に発炭素材を入れて黒色に焼成させる内黒品と赤色酸化鉄を胎土に混ぜ合わせることで赤い発色の製品を作り出す赤色品、黄土と鉄粒を混ぜた赤色塗布材により器面のみを赤く焼成した赤彩品、色調の変化をさせるための造作を特しない通常品とに分けられる。なお、9世紀以降、外面赤塗布し、内黒焼成する碗皿類が出現するが、これについては外赤内黒品とする。器種では、坏や盤、皿は須恵器と同様の器種名とし、碗については糸切りロクロ成形の無台碗を碗A、へら切りロクロ成形の無台碗を碗F、非ロクロ成形碗を碗H、ロクロ成形有台碗を碗Bとする。高坏は中実脚の非ロクロ成形品を高坏H、中空脚でロクロ成形品かつ坏部が坏形・碗形呈すものを高坏G、中空脚でロクロ成形、坏部の倒置形呈す高盤器形を高坏Aとした。

なお、碗A・碗Bで特大法量が一部存在し、須恵器鉢Cに匹敵する法量をもつが、碗A・Bは多様な法量分化を示し、鉢との境界がつきにくいものもあるため、本稿では全て食膳具として扱った。ただ、赤彩品などで鉄鉢器形や小型甕、短頸壺の貯蔵具類もあり、これについては特殊仏器類として、貯蔵具に分類する。ただ、数量は極めて少なく、数量提示では食膳具に含めて提示した。

b. 煮炊具器種

煮炊具については、学史上、伝統的に使われてきた甕という用語を、貯蔵具の甕との混同を招くため、使用しない。従来の土師器甕は釜とし、甕とセットで湯釜として使用される長胴のものを長胴釜、煮炊きで使用される短胴のものを短胴釜とした。成形方法により、外面ハケ目調整の非ロクロのものと同様に調整または叩きを行うものに分けられ、前者をA類、後者をB類とした。甕は従来どおり、蒸し器使用の底部穿孔または筒抜け状のもので、成形・調整により釜同様、A類、B類に分類される。鍋については、従来の広口浅身で丸底器形のもの、浅鍋とし、球胴深身器形ものは深鍋とした。古代I期においては深鍋と長胴釜との識別の困難なものがあるが、基本的に把手付のタイプにあるような器形ものは深鍋とした。これについても釜同様、成形・調整によりA類とB類に分けられる。また、底部がやや平底気味で碗Hに体部器形が類似する上記の鍋よりも容量の小型の器種が古代I期に多く使用されるが、これについても煮炊き痕跡から鍋として使用されたものと理解され、小型鍋と呼称する。他に、長胴釜に甕の掛け口にかけるための甕が巡る羽釜がある。

これら煮炊具と類似した混和材を混入させる胎土で、被熱痕跡やスス痕跡を伴う脚台付の鉢が出土する。8世紀後半以降に出現し、9世紀代において確認される器種であり、獸蹄状の裝飾を持つ三足が付くものもある。仏器的用具として使われる火舎に近い器種と考えており、前者は台付鉢、後者は獸足鉢と呼称する。鉢類として分類されるものだが、ここでは火を受けた痕跡があることと煮炊具の胎土が使われていることより、煮炊具器種に包括して提示する。

c. 土師質土製品

分類項目ではなく、当遺跡で確認できる土製品の内容を提示する。まず、煮炊きに伴う用具として、甕形土製品が38点、円筒形土製品が5点（煙突状含む）、支脚形土製品が60点出土する。A地区（甕:84点、円筒:6点、支脚:103点）に比べると全器種において出土量が少ない傾向を持つ。生産用具としての製塩土器片についてもA地区の234点に比べ1/3以下の74点であり、土師器焼成に伴う焼成道具として使われたであろう匣鉢状土製品についても21点と少ない。ただ、漁労網罟として使用される管状土鉢は31点とA地区12点の倍以上が出土しており、溝縁を向く斜面であることに関係があるのかもしれない。また、祭祀用具として、土製馬形が1点と手づくね土器が3点出土している。

2. 中世遺物

当報告地区より出土する中世遺物については、大量の土師器食器類と僅少の土師器煮炊具及び東濃産産と思われる灰陶陶器または山茶碗と中国産白磁で構成される。越前系の焼き締め陶器も少量出土するが、近世以降のものであり、ここでは除外しておく。土器・陶磁器以外に当期に位置付け可能な遺物を確認できておらず、金属製品も中世へ下るものはほとんどないと見ている。

(1) 土師器の器種分類

a. 食器器種

食器類は13世紀以降に位置づけられる非ロクロ成形の土師器が僅かに確認されるが、図示できるものはなく、ほぼ全てロクロ成形の底部糸切り摩しによるものとして大過ない。古代の土師器食器類に比べて作りは雑で、口縁部に歪みやうねりを伴うなど、ロクロ回転による挽き出しは弱い。このため、因では口縁部ラインやヒダ稜線、底部ラインをフリーハンドで表現しており、古代のロクロ成形土師器の定義ラインとは意識的に変えて表現している。食器類は、法量により碗と小皿に分類でき、小皿は1法量、碗は2法量程度確認される。碗・小皿ともに底部形態により、輪高台と柱状高台、厚底、平底に分けられ、アルファベット記号ではなく、形態名称をそのまま使用する。また、焼き上がり状態から、内面を吸炭させて黒色に焼成する内黒品と通常の焼き上がりだが、赤色酸化鉄粒を胎土に練り込んで赤く発色させる赤色品、白色粘土を使用して意識的に白く発色させる白色品、それと通常土師器発色の通常品とに分けられる。

b. 煮炊具器種

当期の土師器煮炊具は、ほとんど存在しておらず、煮炊き具は鉄製鍋へと移行した後の段階と位置づけられる。古代に見られたようなロクロや叩き成形品は存在せず、非ロクロ成形品に限られ、作りは雑で極めて厚手となる。長胴釜や短胴小釜のような器種は確認されず、小型鍋や浅鍋状の器種が存在するのみである。ロクロ成形の土師器煮炊具生産からは、成形技法、器形ともに完全に断絶しており、異なる技術系統のもとで出現してきた器種であると言える。

(2) 陶磁器の器種分類

陶磁器類は全て食器類であり、広域流通の搬入品に限られる。東濃産産と見られる灰陶陶器と中国産と見られる白磁が確認できており、灰陶陶器は高台の付く碗器形の有台碗のみ、中国産白磁は有台碗に加えて、無台の小皿が存在する。なお、器種名については須恵器や土師器の土製陶類と意識的な違いを示すため、陶磁器で使われる「碗」の文字を使用した。

以上、分類を提示したが、本報告においては、鉄滓や羽口、炉壁等の製鉄及び鍛冶に関連する遺物は除外して報告してある。これは、当遺跡群の取り扱いについて、遺跡全体での検討が必要であり、地区別に報告する性格のものではないと判断したからである。当遺跡は生産・鉄加工の工程を行っていることが、集落の成立や遺跡としての性格を物語る重要な要素と見ており、遺跡全体での報告を科学分析結果とともにまとめ、報告書Vとして別冊で刊行する予定である。よって、今回の報告では、鉄生産に関連する遺物群の報告は一切行わず、それと切り離して処理できそうな鉄製品、つまり、鉄滓や炉壁とともに出土していない鉄製品のみを報告する。

第2節 各遺構出土遺物解説

遺構出土の遺物について、個別の説明は観察表に譲るとして、特徴的なものや特記の事項、時期を代表できるような一括資料の土器様相などを中心として、竈穴建物、掘立柱建物、土坑、土師器焼成坑、土器溜まり、舟状遺構（鍛冶台含む）、ピット、包含層の順で提示する。

第1項 竈穴建物出土遺物

竈穴建物から出土する遺物は多く、破片数では156ページで示した出土遺構別器種破片数構成表のように、4割未満であるが、遺物破片の大きいもの、残りのよいものが多く、箱数としては過半数を占めている。構成としては、食器具が13%、煮炊具が76%、貯蔵具が11%で、時期の古いものが中心ということもあるが、竈穴内へのカマド使用土器の廃棄により、煮炊具の比率が高い。以下では、出土量の多い遺構を中心に述べることにする。

1. SI35 出土遺物

須恵器は埋土中層以上より出土するものが多いため、図示したものを当竈穴建物に伴う資料とすることはできないが、5・6の坏Hや9・11・14の坏Gは下層出土であり、全体的に須恵器の時期のまとまりと土師器煮炊具類時期との整合性から、図示したもののほとんどは概ね古代Ⅰ2期を中心とする資料と判断される。須恵器坏HにはⅠ1期に位置づけられるものが少量確認されるが、口径が大きめのものは南加賀産である場合が多く、能美窟産の7・8は身口径10cm前後に小型化している。坏Gは能美窟産がほとんどで、南加賀産は南群のものに限られる。古代Ⅰ2期資料における各窟群産の型式的な差異を示す良好な資料と言えよう。坏Gは身口径8cm台後半、蓋口径9cm台後半のもので、身底面にケズリは施されませんが、蓋のつまみ形態や返りの大きさなどⅠ2期の中でもやや古い様相を残す傾向が強い。高坏は高坏G小型、貯蔵具では小型短頸産の壺Hや伝統的な長頸瓶形態の瓶F、壺などを確認できるが、須恵製の瓶や馬形など新たに登場する器種も確認できている。全国的にも古い事例と言えものだろう。

土師器食器具は椀Hと椀Fで構成される。椀Hの26・27は内面黒色しないもので、内外面ミガキ調整が入る通常の内湾器形26と外面ハケ目調整を施す作りの雑な27とがある（ただし、小破片では内面黒色椀Hや内面黒色の高坏Hが少量確認される）。椀Fは底面ヘラ切り、体部下位手持ちケズリの28と回転ケズリを伴う深身の29、浅身の30とがあり、28・29は内外面赤彩する。28はミガキ調整なし、30は内面ミガキ調整のみ、29は両面をミガキ調整するなど様々な作りをしているのが特徴と言え、この時期に赤彩土師器椀Fが存在することは無理があるが、30の盤形呈す赤色土器は椀Fの定型前のものの可能性がある。

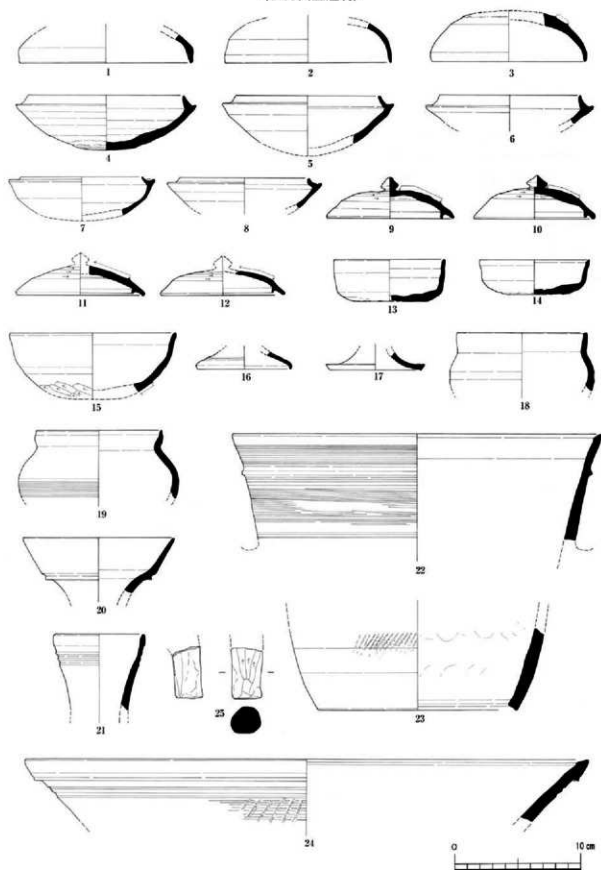
土師器煮炊具は短胴小釜、長胴釜、瓶ともに伝統的なハケ目調整を基本とする。短胴小釜は6世紀以来の伝統的な技法（在来型技法）である外面縦～斜め方向ハケ目調整仕上げ、内面ヘラナデ後縦ケズリ調整仕上げのものに統一される傾向があるが、長胴釜においてはこのような在来型技法のものに加えて、内面ハケ目調整を施す胴部張りの弱い36も出現しており、底部H a 叩き出し成形する朝鮮系技法の40も確認できる。叩き成形を施す長胴釜は地元C系胎土で、他の煮炊具は長胴器形の長胴釜がB系を呈す以外はほぼ地元A系で占められる。なお、瓶については在来型技法の42とハケ目調整に一部ロクロナデやカキ目調整が入る43とがあり、後者の胎土が朝鮮系と同じC系であったこともあり、これについても朝鮮系と位置づけた。ただ、42の在来型瓶についても、底部は中央浅渡しの二孔式底部のもので、在来形態は筒抜け単孔であることを考えれば、これについても朝鮮系という位置づけが可能であると考えられる。ロクロ系の43は叩き成形などを確認できないが、作りは在来型土師器とは明らかに異なっており、底部浅渡しのための2方向穿孔など、特徴的である。他に土師質土製品として、製塩土器片7点と甕形土製品片2点があり、甕形はハケ目調整の在来型である。

2. SI36 出土遺物

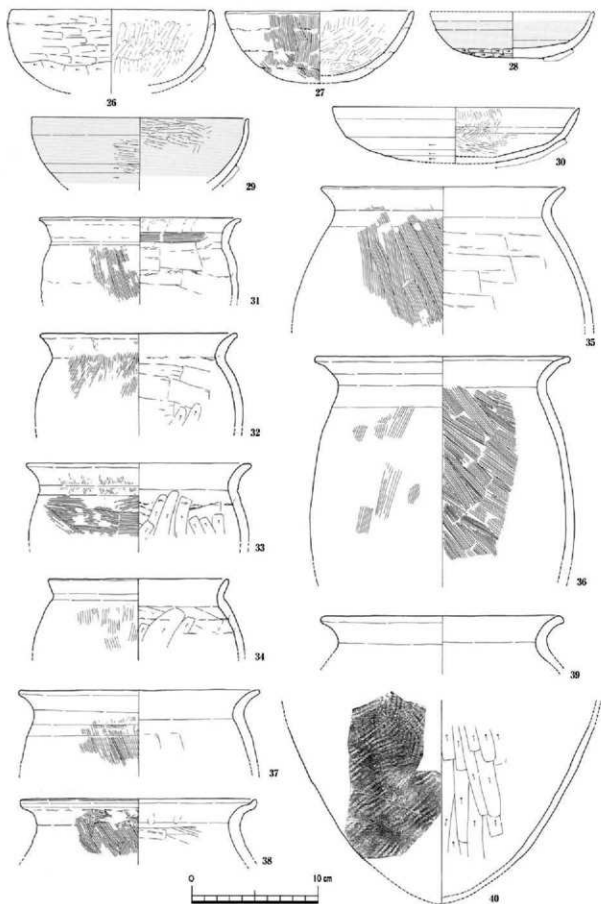
埋土中層より出土するものには一部古代Ⅲ期からⅤ期頃までのものが確認されるが、他の資料は土師器煮炊具を中心に、概ね古代Ⅱ1期を中心にⅠ2期からⅡ2期の範囲に位置づけられる。ただ、須恵器については下層や床面資料に乏しく、埋土出土のものも時期的に近いものは含めて提示している。須恵器食器具では50・51・52の坏A蓋身小型資料、49の椀G、54の高坏G大型が当該竈穴建物時期のものであり、47・48の坏H蓋身は古代Ⅰ1期新～Ⅰ2期にやや遡る資料、53の坏B身はⅡ2～Ⅱ3期に下る資料となろう。

土師器食器具は破片出土が多いが、須恵器同様に図化できる下層出土資料は少ない。その中でも当期のもの

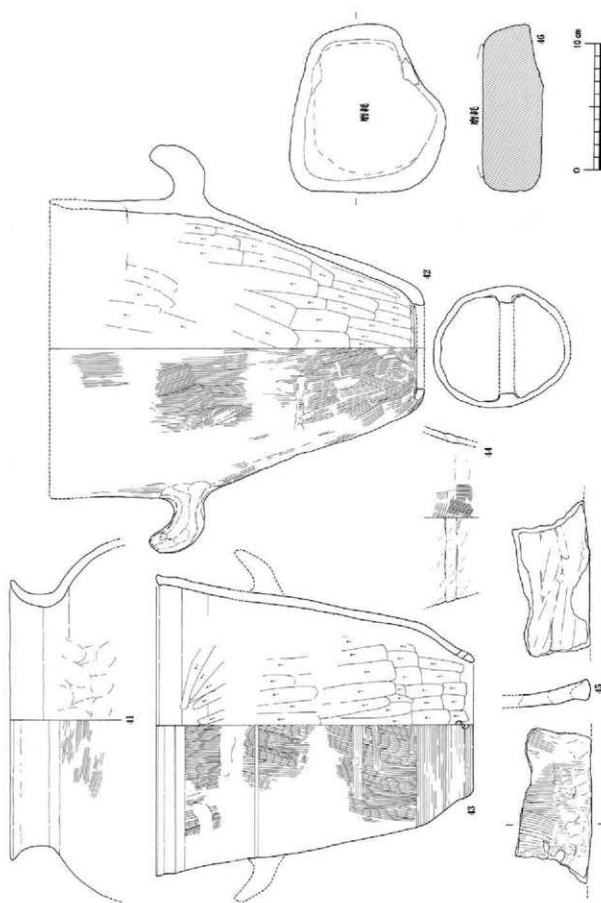
〈SI35出土遺物〉



第96図 竪穴建物出土遺物1 (SI35-1、全てS=1/3)

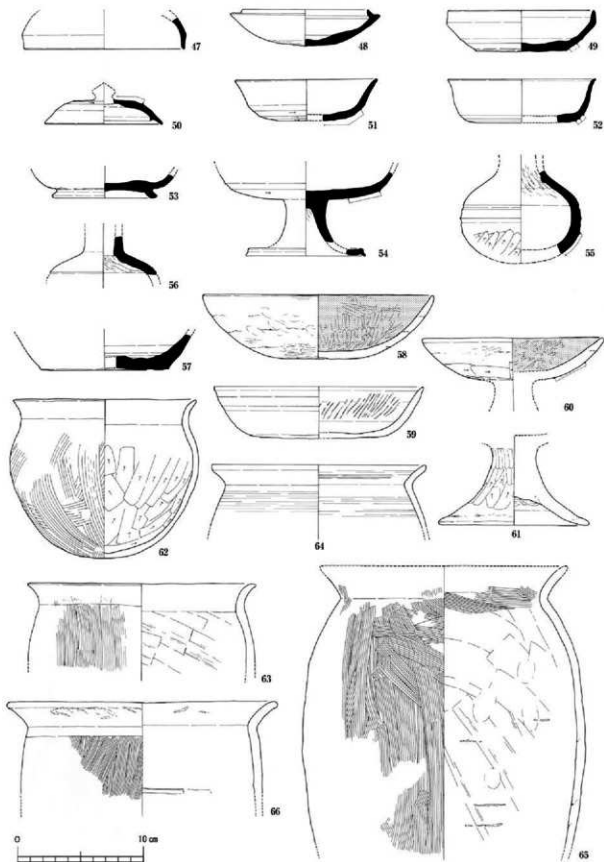


第97図 竪穴建物出土遺物2 (SI35-2、全てS=1/3)



第96図 聖穴遺構出土遺物3 (S35-3、全てS=1/3)

(SI36出土遺物)



第99図 竪穴建物出土遺物4 (SI36-1、全てS=1/3)

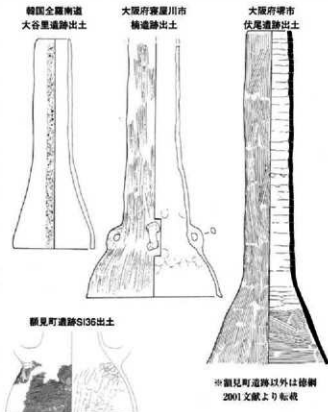
判断したものを図示した。58の内黒焼成椀Hは口径18cm台の大型のもので、当器種の中では体部が聞く低身器形をしており、新しい様相のものとも評価できよう。60・61の内黒高坏Hは小型高坏で、脚部は比較的短くなっている。在来型器種は全て地元A類胎土のものである。59の椀Fは底部へラ切りのロクロ成形品で、内面に放射状暗紋を施す赤色土器である。これをⅡ1期資料とすれば、当器種の最古段階の資料と言えるのだが、器形的に見ると、宮部の飛鳥Ⅳ期の環Aを模したような印象を受ける。資料自体は堅穴塚外からの出土であり、資料の信憑性が乏しいことと、宮場胎土のものであるという点から、後出の資料とするのが妥当だろう。埋土中出土の赤彩椀Fと同様にⅡ2期以降とみたい。

土師器煮炊具は、64の短胴小釜でカキ目調整を施すB類が確認される以外は、全て在来型技法のA類で占められる。胎土も地元A類が主体で、地元B類胎土はカキ目調整施す短胴小釜等限られている。ただ、長胴釜の胴部は張り目に乏しい傾向があり、古代Ⅱ2期以降の特徴を有している。さらに、浅鍋が定量存在することも特徴で、69・71の口縁部が大きく伸びずに深身を呈する器形は、浅鍋が定型化した段階であっても初期の段階、つまり、Ⅱ1期的な特徴を有するものと言えるだろう。

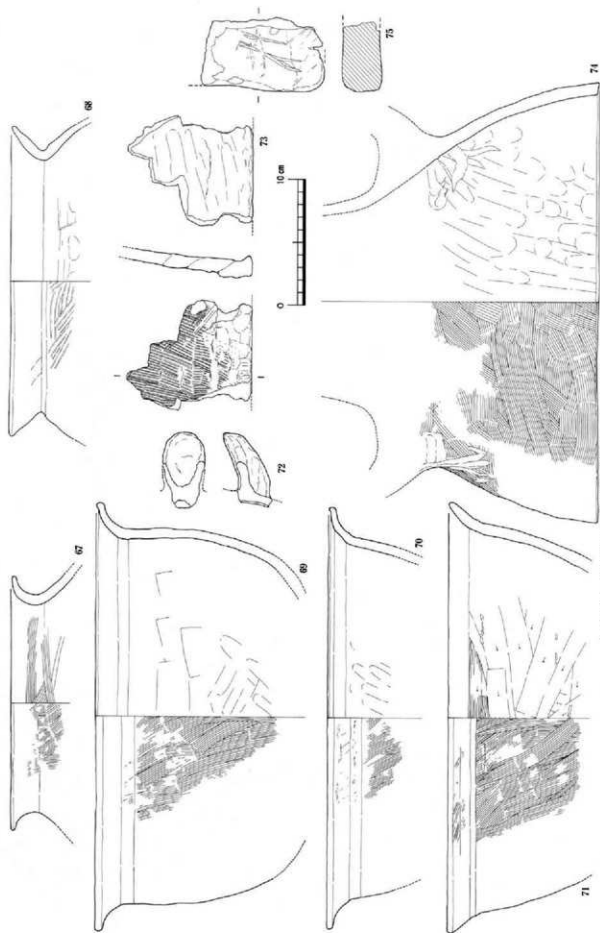
なお、その他の土師土製品としては、甕形土製品と煙突状土製品、支脚形土製品、製塩土器がある。甕形土製品はハケ目調整の在来型技法によるもので、複数破片が出土している。煙突状土製品とした74は、下底部が裾広がりし、上向き把手が付くもので、当初、瓶とも考えたが、端部がしっかりと面整形していることや甕にしては口縁部へ強く聞く器形であること、瓶の外側ハケ目調整とは工具や調整の方向が異なっていること、そして瓶と考えた場合、把手が下向きに付いてしまうことなどにより、甕形罐を逆様にしたような形態のもの、つまり、古墳時代前期に山陰で顕在化する「山陰型甕」のような形態を想定した。外面ハケ目調整、内面ナデ調整のもので、外面被熱痕跡はないが、内面は薄くススけるなど、排煙に伴うような使用痕が認められる。胎土は地元A類であり、焼成良好品である。当資料に類似した形態のものが大阪府寝屋川市輪違跡（5世紀後半）で出土しており、下底部の径も35cm前後と近似した大きさを示す。輪違跡のものは下底部から徐々に窄まり、把手が付される箇所より上へは筒状に長く伸びる形態をしており、その上部については堺市伏見遺跡（6世紀前半）で確認されるような煙突状の形態のまま口縁部に達するものと理解される。このような土製品について、徳納克己氏は土製煙突として扱い、朝鮮系渡来人との関連性を示したことは注目される（徳納克己2001「カマドに伴う煙突について」『平成11年度中主町内遺跡発掘調査年報』中主町教育委員会）。ただ、氏は上記論稿の中で円筒形土製品なども含めて土製煙突としており、明らかに形態の異なる円筒形土製品と同一器種に扱うことは無理があるだろうが、円筒形土製品の祖形となる可能性はあるだろう。ただ、円筒形の土管状土製品とは別に扱うことは必要であり、系統的には山陰型甕に繋がる土製品の可能性がある。この点については、紙数の都合もあるため、別稿で再考の機会を持ちたいと考えている。

3. SI37 出土遺物

理土が薄く、遺物の出土量は少ないが、カマド出土の須恵器食膳具や煮炊具等の資料を見ると、ほぼ古代Ⅱ3期からⅢ期古段階の時期にまとまっており、当期の堅穴建物資料としては数少ない一括資料となろう。特に、80の土師器長胴釜はこの時期の成形方法が確立される以前の良好な資料である。胴部上半のカキ目調整の部分では叩き痕跡は認められないが、口縁部外

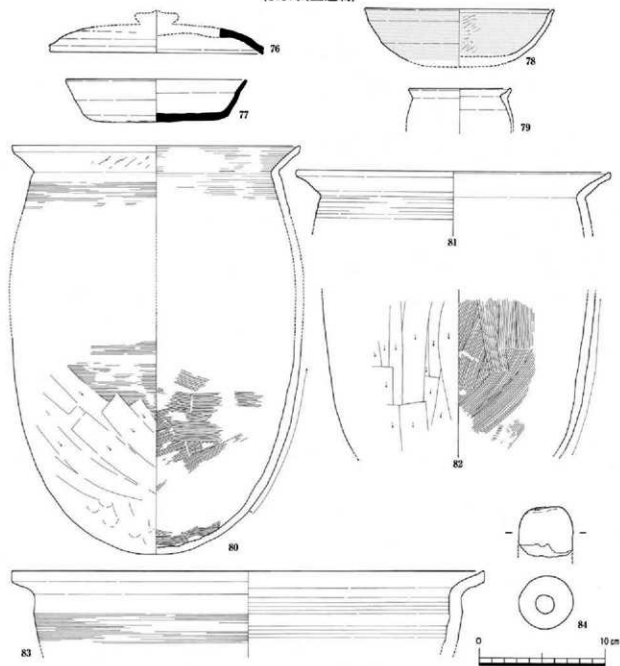


第100図 煙突状土製品図 (S=1/10)

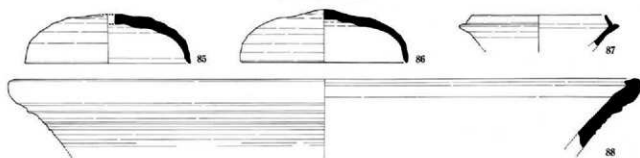


第 101 図 竪穴墓出土遺物 5 (S136-2, 全て S=1/3)

〈SI37出土遺物〉



〈SI38出土遺物〉



第102図 竪穴建物出土遺物6 (SI37、SI38-1、全てS=1/3)

面には平行線文印きの痕跡を残しており、粘土紐積み印き成形で1次成形を行い、カキ目調整後に胴部下半を丸底化したものと言える。丸底化は内面からのハケ目工具による押し出しと底面の指押さえで粗形を作り、外面のケズリ調整で仕上げる方法で、丸底化に叩き出し成形は採用されていない可能性が高い。土師器短胴小釜も含め、釜類はⅢ期からⅣ1期には定型化された成形技法が確立した可能性が高く、窯場生産品であっても、伝統的技法との折衷的要素がⅢ2期頃までは併存したことを示すだろう。また、土器胎土については、須恵器食膳具を始めとして、土師器椀Fや土師器短胴小釜・長胴釜・浅鍋は、ほぼ南加賀窯場に統一されており、8世紀前半の土器供給が南加賀の窯場製品にほぼ統一されていく状況を示す。なお、図示はしていないが、埋土中より龍形土製品片が出土している。

4. SI38 出土遺物

一部埋土中にSI39からの廃棄と思われるⅠ2期～Ⅱ1期の土師器資料やⅣ1～Ⅳ2古期の土坑（上層土坑3）または中世Ⅰ～Ⅱ期の小土坑（コーナー土坑）が重複するが、カマド付近や埋土下層からはまとまった時期の遺物が出土している。概ね古代Ⅰ1期の時期のもので、今報告資料の中では最もまとまった当期資料群である。

この時期の堅穴建物資料の特徴を示すように、須恵器が少なく、食膳具は内黒焼成品が主体的に存在する。須恵器坏Hは蓋が口径13cm程度のものであるのに対し、身は口径10.6cmと小型化しており、若干の時期差も感じるが、蓋が南加賀窯産、身が能美窯産であることにその要因がある可能性を持つ。つまり、当該時期は、南加賀窯では坏Hに依然として大型法量を残すが、能美窯では小型化してくる古代Ⅰ1期新段階とするのが妥当であろう。土師器食膳具は内黒焼成の椀Hと高坏Hを主体に構成される。椀Hは口径12cm台の口縁部内湾器形の通常タイプの他、口縁部短く外屈する深身器形のものが見られる。

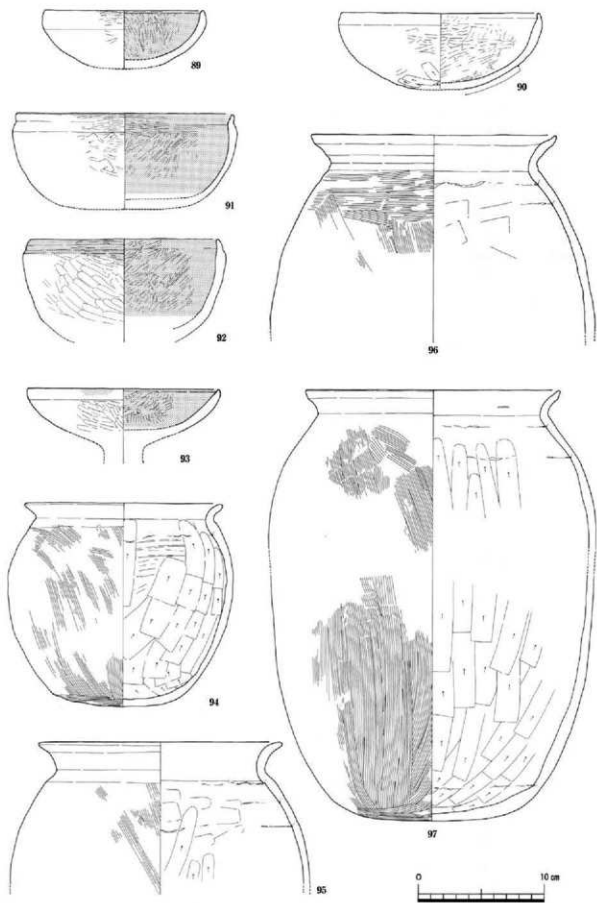
煮炊具は短胴小釜と長胴釜、そして深鍋状器形の98を図示した。短胴小釜、長胴釜ともに外面ハケ目調整、内面ヘラナダ後のケズリ調整を基本とするもので、長胴釜の胴部やや張り気味となる器形など当期の特徴を示している。ただ、96の長胴釜は胴部横ハケ目調整で、口縁部外面に横ナダするなど、特徴的な作りをする。なお、深鍋状としたものだが、口径33.8cmを測る大型のもので、口縁部は瓶のようにまっすぐ伸びたまま薄くなる器形をもつ。ただ、この口縁部内面を観察すると、乾燥状態で剥離したような痕跡があり、粘土離れ目状の掘り縁となっている。外面はかなり乾燥した状態で、胴部横ハケ目調整を消してナダ調整（ミガキ調整にも近い）が施されており、製作途中に剥離したため、口縁部としたものである可能性が高い。当器形や調整等から察するに、この時期に定量的存在する把手付き深鍋が原型であると予想される。外面にススなどの痕跡はないが、内底面には薄くコゲ状の痕跡が残る。

5. SI39 出土遺物

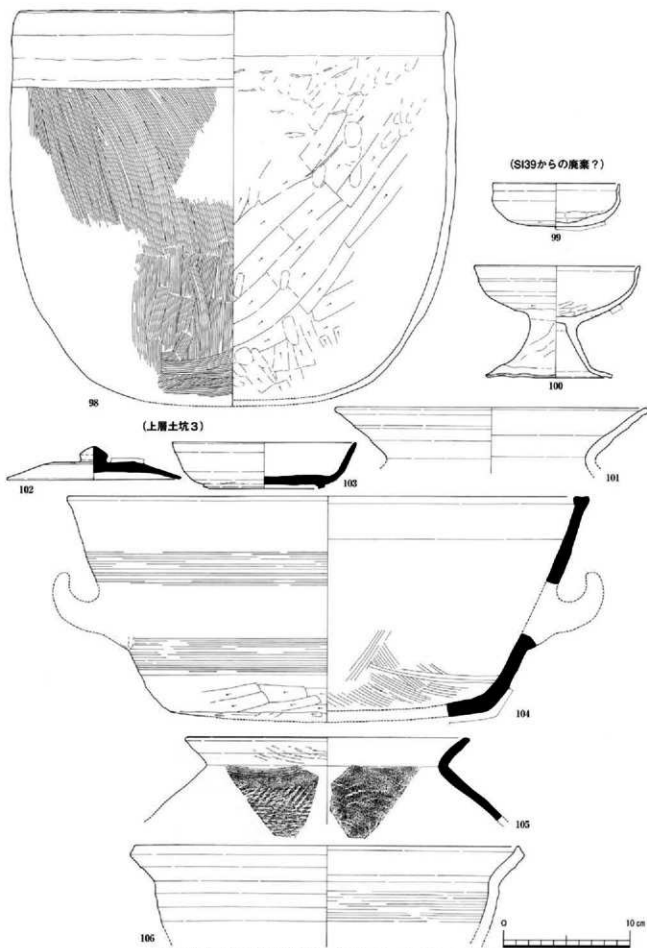
前述したSI38の埋土中に混在する99～101の土師器資料はSI39との共存性を確認できる根拠はないものの、101の特徴的な口縁部を有する長胴釜とSI39の長胴釜（122）とが同一器種である点から、同一時期の資料をまとめて、SI39からの流れ込み資料と位置付ける。よって、99～101についても、ここでもまとめて述べることにしたい。

当堅穴埋土でも上層で中世Ⅰ期土師器の混在があるが、カマド周辺及び下層資料においてまとまった土器群が確認される。須恵器や土師器食膳具が僅少なために、時期比定は難しい部分もあるが、110の著しく口径の縮小した坏H蓋の存在と111の2方スカシ高坏脚が小型化している点、119の在来型土師器長胴釜器形がかなり胴の張りを弱くしているもの内面ハケ目調整とはなっていない点などから考えて、古代Ⅰ2期に位置づけるのが妥当と考えられる。また、SI38流込みの99・100は土師器だが、いずれも須恵器食膳具同様の作りをするもので、99は坏G身を、100は高坏G大型タイプを模したものである。坏G身は底面口縁ケズリ調整を施す赤色土器で、高坏Gも脚を絞り伸ばす技法がとられる赤色土器である。赤い発色を意識した須恵器系食膳具であり、朝鮮半島の軟質土器に共通する意識が存在していた可能性を持つ。高坏脚部に黒斑が残っている点から、密窯焼成でないことは確実であるが、脚部に焼き歪みや坏部底面に焼成による焼きヒビがあり、高温での焼成を物語る。

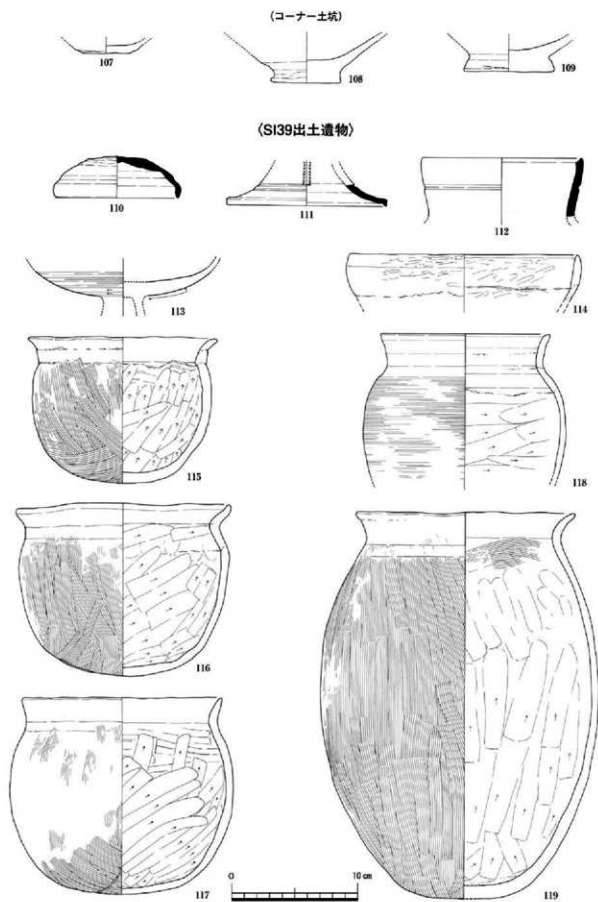
朝鮮系軟質土器という観点で共通するものに、カキ目調整や叩き成形を施す煮炊具群がある。食膳具と同じ地元B類胎土をもつもので、薄手に作り上げ、焼成良好品である点も共通する。しかも、118の短胴小釜に見る口縁部器形や122の長胴釜の口縁部を長く引き伸ばす器形、125の瓶の底部一本横渡り形態をもつ点など、在来型の煮炊具には見られない特異な器形をしており、朝鮮半島にその原型となる煮炊具が存在した可能性があらう。



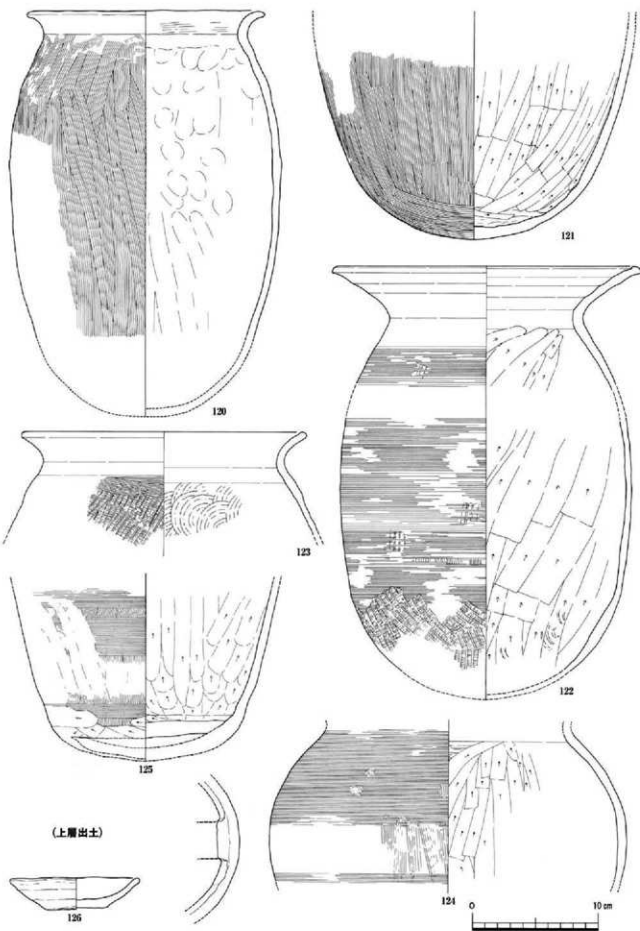
第103図 竪穴建物出土遺物7 (SI38-2、全てS=1/3)



第104図 竪穴建物出土遺物8 (S138-3、全てS=1/3)



第105図 竪穴建物出土遺物9 (SI38-4、SI39-1、全てS=1/3)



第106図 竪穴建物出土遺物 10 (SI39-2、全てS=1/3)

ただ、当煮炊具群は成形途中のカキ目調整を施す前に外面縦ハケ目調整や内面ケズリ調整など在线上型と言える調整技法を併用しており、朝鮮系煮炊具の初期の段階でも、このような在线上型煮炊具技法との融合が行われていたことを示すであろう。在线上型煮炊具生産を基盤に、このような朝鮮系煮炊具が成立していった可能性も否定できない。これら朝鮮系煮炊具と共存する在线上型煮炊具は、内外面粗いミガキ調整を施す114の小型鍋と、外面縦ハケ目調整、内面ヘラナデ後の縦ケズリ調整の在线上型技法を持つ短胴小釜と長胴釜で構成される。古代ⅠⅠ期のものに比べると、短胴小釜はやや胴の高さが低く、長胴釜は若干胴が細くなっている傾向が見られるが、116・117・121の底面に「×」のヘラ記号をもつなど、釜類製作の伝統的な部分を踏襲したものとされている。定型的な浅鍋も確認できない点など、古代ⅠⅠ期の様相を色濃く残しており、煮炊具群が大きく変化していく初期の様相を示す煮炊具資料と言えよう。

6. S146 出土遺物

削平された鑿穴のため、出土量は少ないが、須恵器食器具や140の浅鍋から判断するに、概ねⅡ3～Ⅲ期の資料と考えられる。数少ない当資料の中で注目されるものは138の外面赤彩を施す大型の土師器蓋である。砂粒を多く含む胎土で、ロクロ成形するが、ミガキ調整はなく、作りが粗雑な感じを受ける。つまみはなく、天井頂部に輪状の貼り付けがあり、倒蓋形坏部をもつ高坏の可能性もある。口縁部は返り状の段があり、厚手である。鉢などの蓋かと思われるが、確証はない。

7. S147 出土遺物

出土量は少ないが、時期にまとまりがある資料である。141の須恵器坏日蓋の器形や14cmを測る口径、142の深身を呈す大振りの内黒土師器輪日、143・144の土師器煮炊具器形や技法など、典型的な古代ⅠⅠ期に位置づけられる資料であり、中でも古段階に位置づけることが可能と判断される。額見町遺跡の中では最古段階に位置づけられる鑿穴建物資料と言えよう。

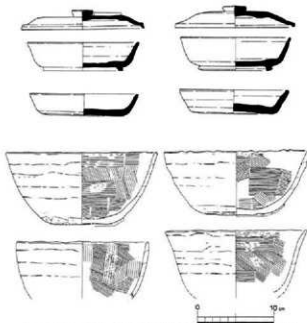
8. S148 出土遺物

埴土層より出土する145・146の須恵器は古代Ⅱ2期のものだが、カマド付近から出土した147～149の土師器煮炊具資料は古代ⅠⅠ期のものである。比較的大型の小型鍋が存在し、長胴釜は在线上型の技法で作られるが、若干胴部の張りが弱いことと外面口縁部ナデが胴部上位に及んでいることなどから、Ⅰ2期に下る可能性が高い。共存する浅鍋はⅠⅠ期の小型タイプとは異なり、しっかりと口縁部を長く外反させる器形のもので、外面ハケ目調整、下位から底面をケズリ調整するⅡ期の様相をもつタイプである。しかし、口縁部器形と胴部のバランスなど定型的特徴をもっていると言え、Ⅰ2期の数少ない浅鍋資料と言えよう。なお、埴土出土の須恵器坏B146だが、体部下位から底面にケズリ調整を施す初期の形態をなすもので、内面には顕著な磨耗痕を残す。

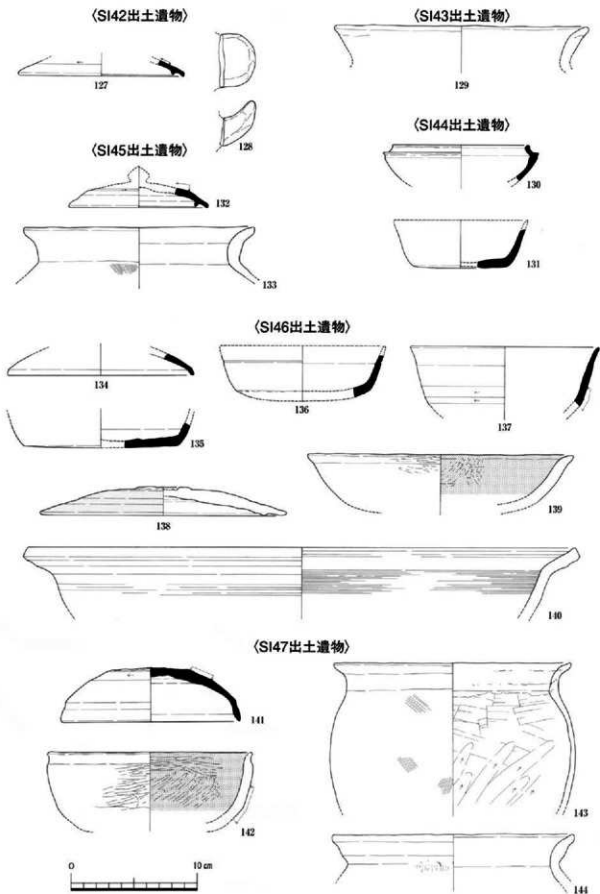
9. S150 出土遺物

鑿穴建物内に大量に土器廃棄されており、Ⅱ3期新段階からⅢ期古段階に位置づけられるまとまりをもった良好な資料と言えよう。須恵器は151の返りをもつ坏A蓋が確認されるが、掘り方土坑内のものであり、他は扁平器形の坏B蓋身と無蓋坏Aで構成される。一器種一法量段階の資料であり、坏B蓋口径で17cm程度、身で14cm後半台、坏Aで13.5～14.5cmにまとまる。全て南加賀産のもので、160と163には刻書または絵画状のヘラ描きがある。他の器種では横軌口縁部と破片化した2個体分の大甕が出土している。大甕片は70点程度の出土量があり、時期は須恵器食器具よりやや古いか同時期頃のものである。

土師器食器具は169の赤彩施Fのみ図示したが、赤彩の坏B蓋や碗類、内黒高坏片が出土する。煮

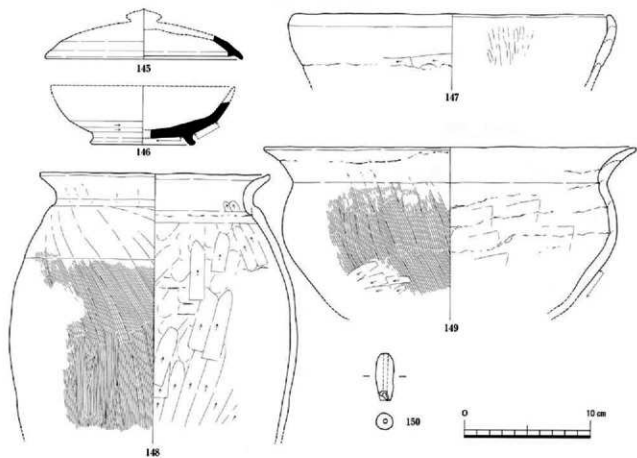


第107図 戸津62号窯の須恵器食器具と埴土土器

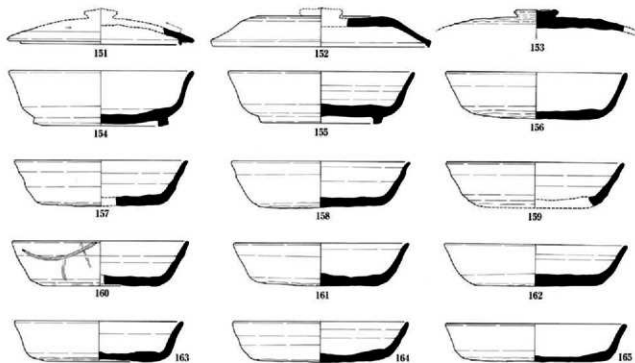


第108図 竪穴建物出土遺物 11 (SI42、SI43、SI44、SI45、SI46、SI47、全てS=1/3)

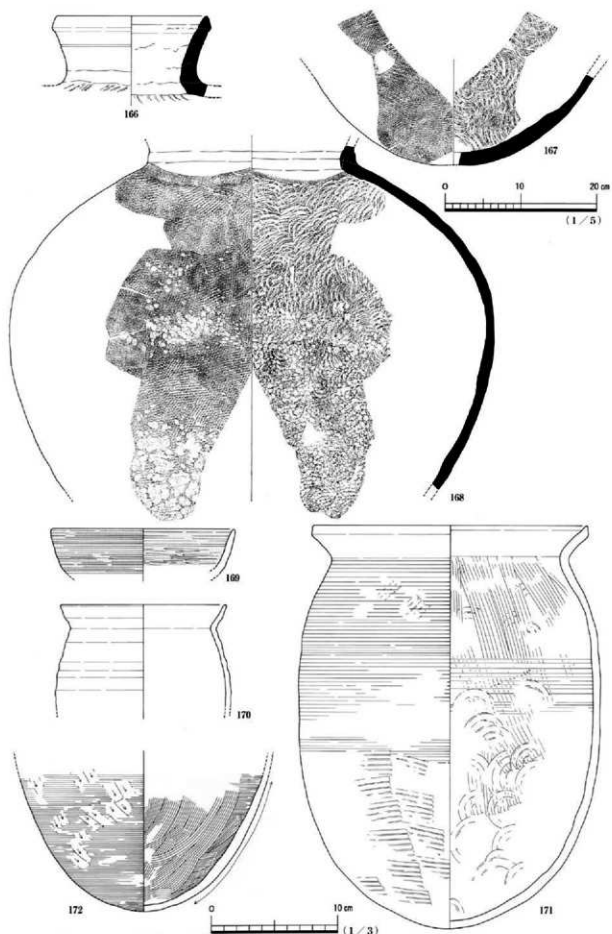
(SI48出土遺物)



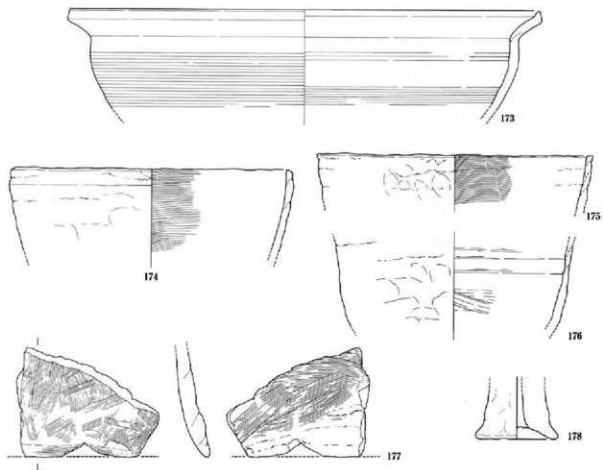
(SI50出土遺物)



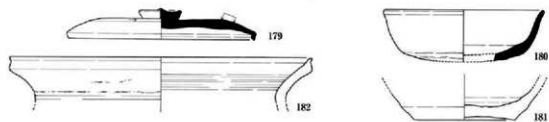
第109図 竪穴建物出土遺物12 (SI48、SI50 - 1、全てS=1/3)



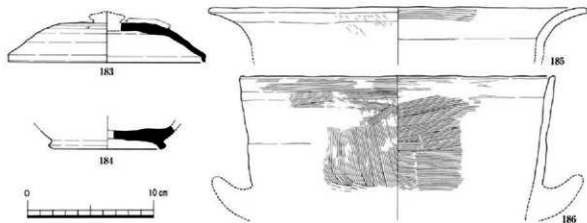
第110図 竪穴建物出土遺物 13 (SI50-2、167・168はS=1/5、他は全てS=1/3)



〈SI51出土遺物〉



〈SI52出土遺物〉



第111図 竪穴建物出土遺物 14 (SI50-3、SI51、SI52、全てS=1/3)

炊具は竈場産の短胴小釜と長胴釜、浅鍋が出土する。171の長胴釜は胴部叩き成形後に内面ハケ目調整し、内外カキ目調整、最終工程で底部叩き出し成形する定型前の北陸型煮炊具で、172の長胴釜も内面胴部下ハケ目調整、外面ケズリ調整後カキ目調整で仕上げる定型前の様相をもつ。これに対し、浅鍋は定型化された器形、調整を有しており、北陸型煮炊具確立前段階の様相をよく示している資料と言えよう。

当竈穴建物からは土製品資料が豊富に出土している。内外面ハケ目調整を施す地元生産の甕形土製品、支脚形土製品、製塩土器で、特に製塩土器は37の破片に及ぶ。口縁部に面をもつ小型鍋状器形のもので、全体的に薄手に作られ、よく焼燃を受けている。外面は粘土組織み痕と指頭痕を残し、内面は全体に横ハケ目調整が施される。胎土から南加賀産と予想される。第107図に示すように、南加賀産の中心支脚である戸津支群62号竈の前庭部で出土する製塩土器によく似ており、上記須恵器についても当竈生産品と思えるほどの類似した器形・法量を示す（「戸津古窯跡群Ⅰ」小松市教育委員会1990年）。

10. SI54 出土遺物

カマド周辺からの土器出土は少ないが、下層付近と掘り方土坑からまとまった資料が出土している。須恵器食膳具の有返の坏A蓋主体構成と体部外傾器形の坏A身が有蓋重ね焼き主体である点、坏B身が定量存在する点などから、古代Ⅱ2期に位置付け可能と判断する。古代Ⅱ2期の段階で坏B身が食膳具組成の主体を占める様相は珍しいが、194～197に見るように、体部外傾器形で深身を呈す点や、高台がしっかりと踏ん張る形態で、体部下位から底面にケズリ調整を伴う197が確認される点など、Ⅱ3期の坏Bよりも古相を呈しており、Ⅱ2期の範疇と考えて妥当だろう。ただ、その中では新相に位置付けられる資料群と言えよう。なお、坏B身の底部部分を割り揃えて転用視とした203があるが、これは内底面を視面としたものである。

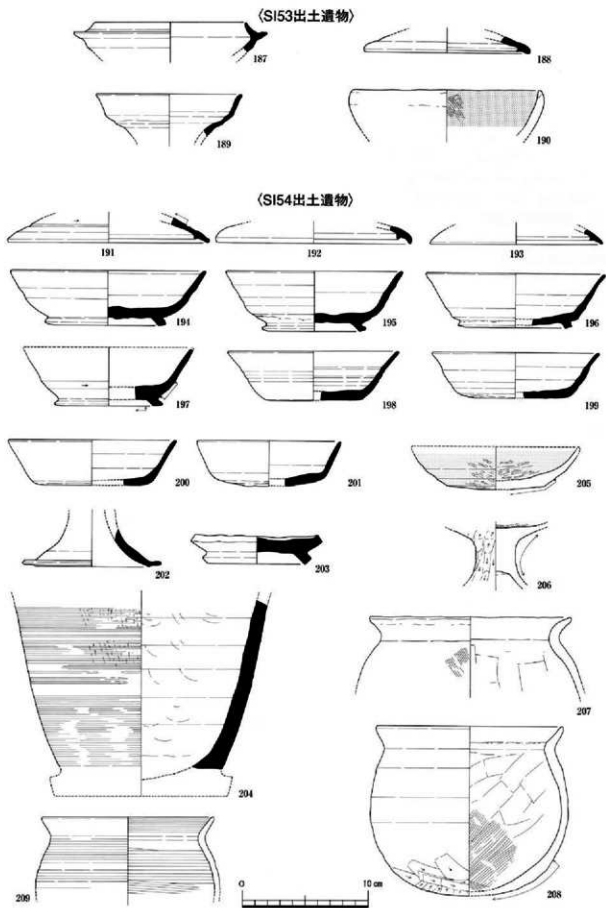
土器器は内外面赤彩の碗F 205と内黒高坏H 206が確認される。碗Fは体部開く器形のもので、竈場生産品の胎土を持つ。内黒高坏は脚部の短くなった形態を有し、短脚化してくる段階の資料と言えよう。図示していないが、赤彩碗の破片が竈穴建物埋土から数点出土しており、土器器食膳具は赤彩碗類主体を占める段階と位置づけられる。

煮炊具はカキ目調整や叩き成形を残す朝鮮系と在来型煮炊具とが併存する様相をもつ。短胴小釜は207の在来型技法によるものと、朝鮮系技法（須恵器系）のカキ目調整による209・210、内面はヘラナデだが、ロクロ成形台上で成形した後に内面からハケ目調整で押し出し、外面ケズリ調整で丸底にした、朝鮮系の208とがある。長胴釜も内外面ハケ目調整を施す来型系統の211～213と口縁部に胴部をロクロ・カキ目調整する朝鮮系の214とが存在する。在来型系統は砲弾型胴部に口縁部が短く外屈する特徴的な器形呈す211・212と口縁部受け口状を呈し内面ハケ目調整、外面胴部下ケズリ調整をする213とがあり、特に後者は近江系煮炊具と呼ばれる。浅鍋は口縁部が長く外反する定型的な器形となった段階のもので、外面ハケ目調整の在来型系統の215とロクロ成形の216とが併存する。また、朝鮮系の深鍋器種の可能性がある三角形板状把手217の存在、ロクロ成形飯218の存在も、当地域に朝鮮系煮炊具が定着し、在地化している段階の様相と位置づけられよう。胎土も当煮炊具に多く見られる地元B類の他に、地元C類胎土が定量存在し、竈場生産品も少量ながら見られるなど朝鮮系煮炊具生産から北陸型煮炊具生産へ移行する段階の様相と理解されよう。なお、土製品では支脚形土製品を図示したが、壘土出土のものであり、造り付けカマドとの関連性は不明である。

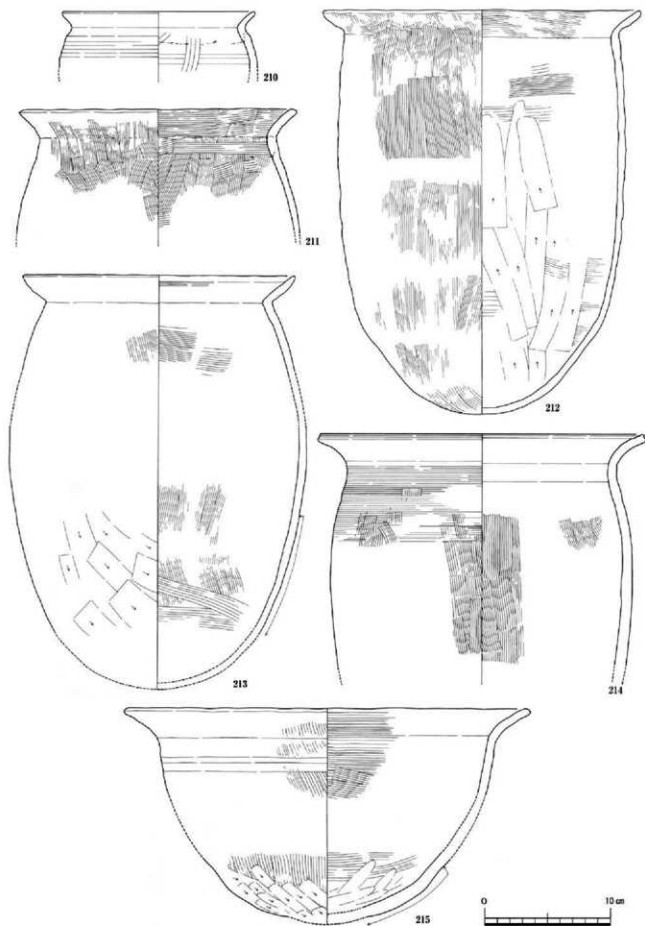
11. SI68 出土遺物

竈穴建物の北東側が削平されており、カマド付近の土器が遺存していなかったため、竈穴建物に伴う煮炊具の出土はほとんどない。また、埋土層にⅠ期の資料が混在しており、これらを除外すれば、234の坏A蓋、236の坏B身、238の高坏G大等の古代Ⅱ2期段階の資料としてまとまる。なお、SI54と同様に、坏B身底部転用視237が出土している。体部下位で割り揃えるもので、高台部を視面として使用する無脚円面視に見立てたものと言える。視面には墨痕と磨耗痕が確認される。

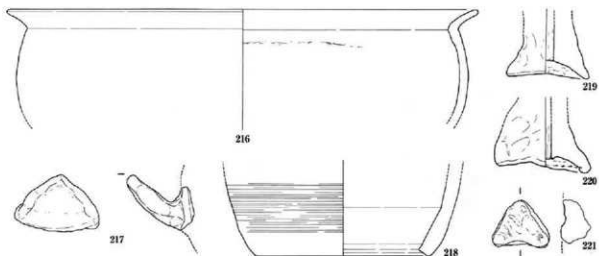
土器器は内黒高坏H 241とロクロ成形の飯242を図示した。いずれも地元B類胎土のもので、内黒高坏は比較的脚部が短くなる段階のものである。飯は叩き成形痕をもたないロクロ成形のタイプで、Ⅱ2期に見られた朝鮮系煮炊具の系統とは様相を異にする。類似したものがⅡ2期の標識資料として上げる南加賀産戸津六ヶヶ支群4号竈で生産されており（小松市教育委員会「戸津古窯跡群Ⅲ」1993年）、当資料をⅡ2期に位置付け得る妥当性を示す。なお、口縁部下に稜を形成する当飯タイプは、棒状把手が付されるもので、Ⅲ期以降主流化する口縁



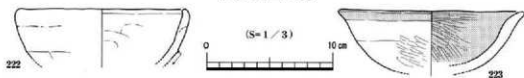
第112図 竪穴建物出土遺物15 (SI53、SI54-1、全てS=1/3)



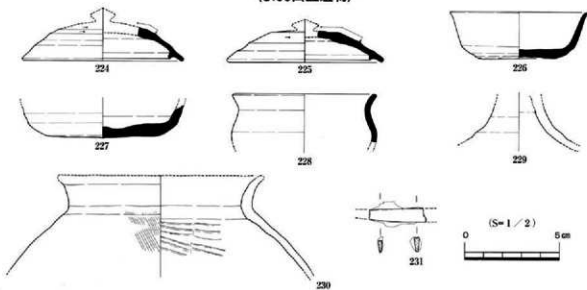
第113図 竪穴建物出土遺物 16 (SI54-2、全てS=1/3)



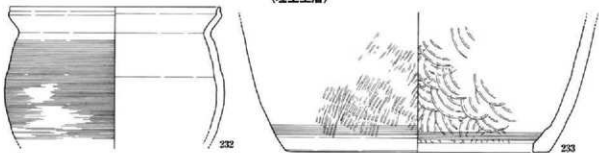
(SI56出土遺物)



(SI66出土遺物)

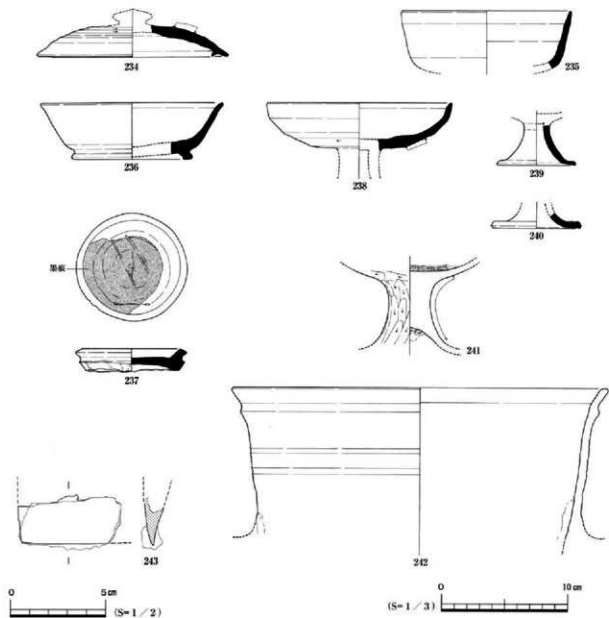


(埋土上層)

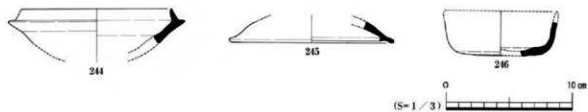


第114図 竪穴建物出土遺物 17 (SI54-3、SI56、SI66、231のみS=1/2、他は全てS=1/3)

(SI68出土遺物)



(埋土上層)



第115図 竪穴建物出土遺物 18 (SI68、243のみS=1/2、他は全てS=1/3)

部後形成するタイプのものに系統的に繋がるものと理解される。

他の出土品としては243の鉄製品が出土している。銀先と思われる鍛造品で、当遺跡では数少ない農耕具資料である。

12. SI69 出土遺物

竪穴建物の拡張建替えが確認されるが、当資料はいずれも建替え後の竪穴に遺存していた資料である。須恵器食膳具を始めとして出土量は多いとはいえないが、カマド周辺で数個体の煮炊具資料が窺察されている。

数少ない埋土下層及び床面近くの須恵器食膳具から、古代Ⅱ2期の資料と判断される。坏A蓋は口径15cm程度の比較的大振りものが多く、返りは小さくはなっているが、天井部器形などⅡ2期の新段階の様相とはいえない。252・253の坏A身器形なども古い様相であり、254の坏B身とした口縁部内面に沈線を巡らす薄手の坏部破片も、金属的な印象を受ける。Ⅱ2期の古段階に位置付けるのが妥当だろう。土師器食膳具は内黒輪Hと赤彩碗Fが破片で出土するが、図化できるものではなく、組成的に須恵器主体構成と言える。

煮炊具は破片を見る限り、在来型技法によるものが多く、258の瓶は器形や内外面ハケ目調整である点など、伝統的な技術を踏襲するものである。257の浅鍋についても、器形は比較的定型化したものとなっているが、内外面ハケ目調整の後に外面下半を手持ちケズリ調整する在来型技法のもので、主体は在来型の煮炊具と言える。ただ、長胴釜胴部破片で叩き成形痕を残すものが一定量あり、256の長胴釜は胴部内外面ともハケ目調整だが、口縁部にロクロ挽き出し状の技法を使う。259の瓶も外面ハケ目調整、内面ケズリ調整だが、粘土積層成形時に叩き成形技法を行うもので、朝鮮系技法と在来型技法との融合が顕在化してくる段階の資料と言える。なお、当煮炊具胎土は、在来型、朝鮮系を問わず、地元B類が大半を占めている。

当竪穴建物の上層埋土から260の鍛造鉄製品が出土している。扁平で平坦な断面形を呈す三角形鐵の刃部破片と思われるもので、未成品の可能性もある。

13. SI70 出土遺物

竪穴建物の北東側が崖面で削り取られており、出土遺物は僅少である。カマド脇ピット中の土師器長胴釜が外面ハケ目調整、内面ケズリ調整の在来型技法である点や埋土下層の須恵器食膳具から見て、古代Ⅱ2期頃と判断される。須恵器は有蓋の坏A身と無蓋の坏A、それに深身の有台坏に体部穿孔したような器種263が出土する。外面に沈線が巡る薄手のもので、特殊な坏かとも考えたが、円形の穿孔が四方に開くと予想し、坏B伏せ型器形を呈す円面視脚部とする。

14. SI71 出土遺物

極めて浅い不整形の竪穴建物であり、出土遺物の一括性にどれだけの信憑性が持たれるか不安な部分もあるが、比較的時期のまとまった須恵器食膳具を出土していることから、埋土上層のものも含めて図示した。

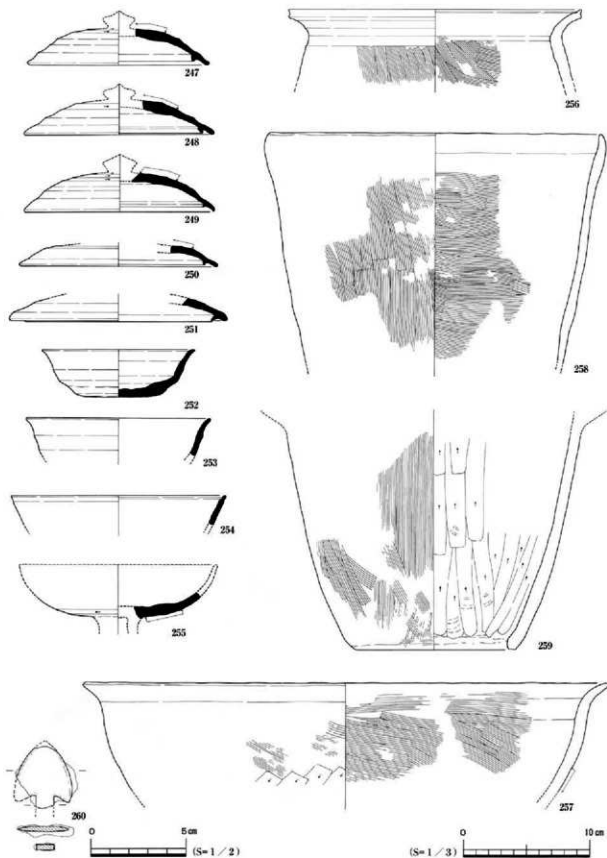
須恵器食膳具のうち、265の坏H蓋や283の高坏Hは古代Ⅱ1期でも古手の様相、266の坏H身は口径10cm程度まで小型化する能美窯産の古代Ⅱ2期のものだが、他の須恵器は古代Ⅱ1～Ⅱ2期に位置づけられる。主体はⅡ2期と言えそうだが、その中でも古手の段階に中心があるだろう。282の坏B身は体部下位から底面にかけてケズリ調整をする高台高く踏ん張る形態のもので、当該期に位置づけて問題なからうが、281の小型坏B身は口径10cm程度のものであり、時期判断しにくい。高台が高く丁寧な作りをする能美窯産であり、Ⅱ2期に存在する器種の可能性もある。土師器は出土量が少なく、ハケ目調整の在来型技法によるものでほぼ占められる。長胴釜、短胴小釜、浅鍋、瓶があり、ほぼ古代Ⅱ1～Ⅱ2期に位置づけられるものと見る。なお、291の土師器は口縁部を外に巻き込む椀状器形のもので、ロクロ成形品でもあり、後出するものと思われる。

15. SI72 出土遺物

出土量の多い竪穴建物資料であり、須恵器坏A蓋を始めとして、多くの図化資料がある。時期的に古代Ⅱ1期のまとまりを持った資料群と位置づけるが、ただ、311の返りが脆弱化した中大流量の坏A蓋や314の坏蓋扁平つまみ、325の坏B身は埋土上層出土であり、時期的に後出する資料の可能性が高い。また、293・294の坏H身についても、口径11cm台で立ち上がりの内傾する新しい様相を持つが、坏H小型化の早い能美窯産のものであり、下っても古代Ⅱ1期新段階のものとして位置づけられるだろう。

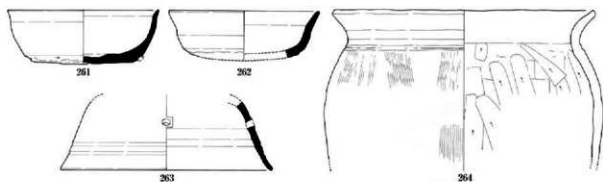
以上を除く資料が当竪穴建物に伴う一括性高い資料群と言える。食膳具は須恵器が主体で、有蓋坏Aが大半を占める。特に、坏A蓋の出土量は多く、17個体を図化した。口径は11～14.5cm程度にばらつくが、口径と器形

(SI69出土遺物)

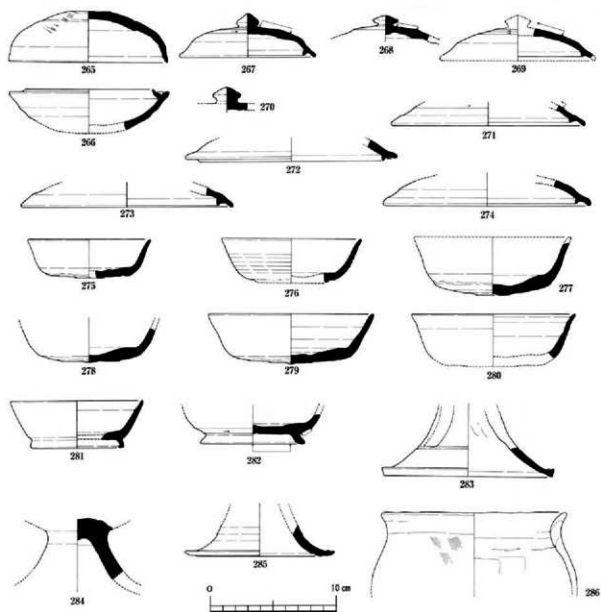


第116図 竪穴建物出土遺物19 (SI69, 260のみS=1/2, 他は全てS=1/3)

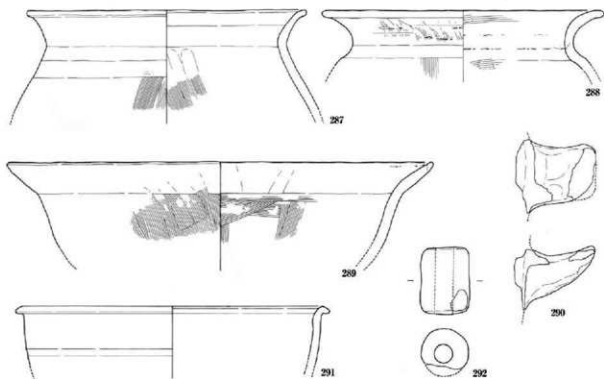
(SI70出土遺物)



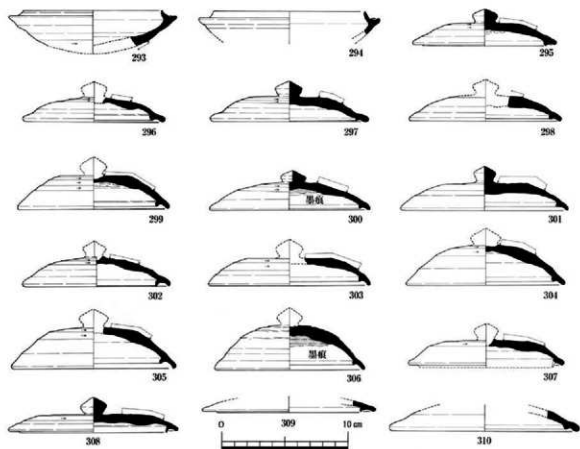
(SI71出土遺物)



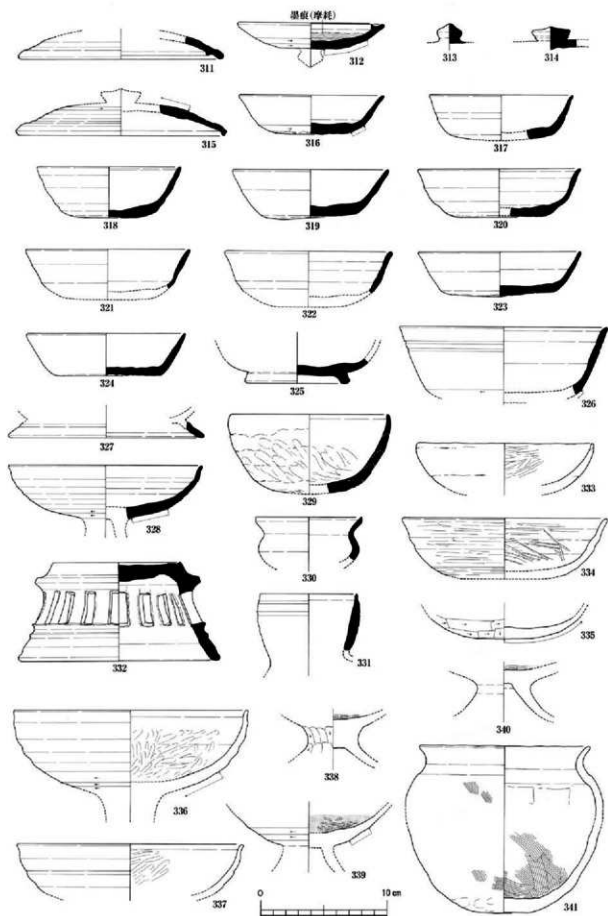
第117図 竪穴建物出土遺物20 (SI70、SI71-1、全てS=1/3)



(SI72出土遺物)



第118図 竪穴建物出土遺物 21 (SI71-2、SI72-1、全てS=1/3)



第119図 竪穴建物出土遺物 22 (SI72-2、全てS=1/3)

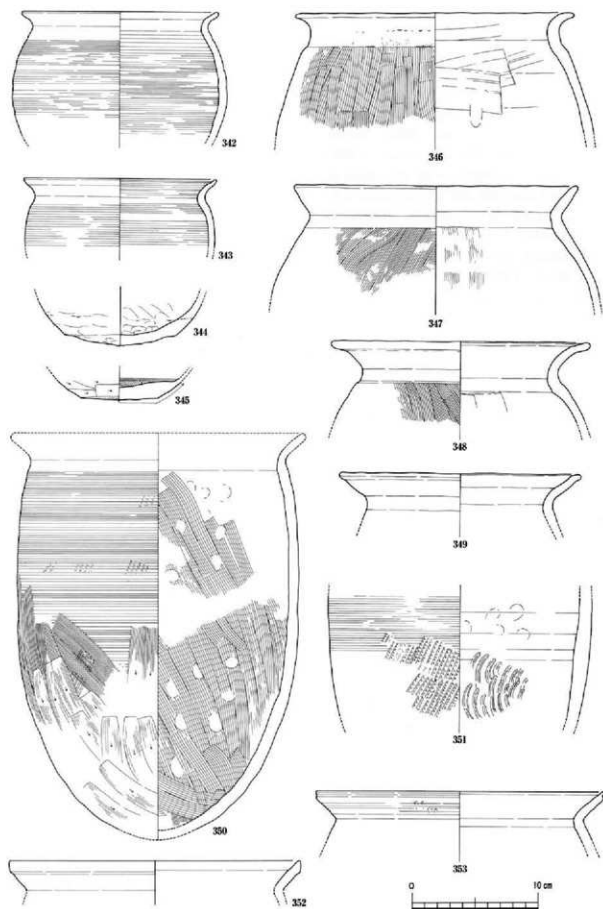
から整理すれば、およそ口径13cm未満に分布する小法量と13～14.5cmの中法量に分類できる。内面平坦部に墨痕を残すもの(300・306・312)が確認でき、特に312には磨耗痕も確認できた。墨留めや転用視として使用したものであり、306と312は意識的につまみ部を打ち欠いている。坏A蓋小法量でつまみの意識的打ち欠き事例は多く、299・302・304なども同様に転用視にする目的でつまみ打ち欠きが行われた可能性を持つ。つまみは宝珠形だが、やや扁平気味となったものが目立ち、返りは依然として長くシャープに作る古手の様相をもつ。これに伴う坏A身は、体部外傾器形のもので、内底面を平滑に仕上げるものが多い。ただ、底面が広く平坦な323のような新しい器形は少なく、依然として底部が小さく厚く作る伝統的な作りを主体とする。坏A蓋、身とも南加賀窯産に統一されており、その中でも北群産が主体を占める。

他の器種としては床面出土の315の坏B蓋が注目される。口縁端部を三角にシャープに作り出すもので、326の体部沈線を巡らす坏B身がこれに伴う可能性を持つ。初源期の坏B事例であり、坏部は深身に金属系の装飾や端部の丁寧な作りをする。高台は高く踏ん張るものであろう。高坏G大は浅い椀形の器形で、口縁部を薄手に作り上げる器形など、336・337の土師器高坏Gに近似する器形を持つ。土師器は内面ミガキ調整を施す赤色品で、須臾器模倣器種を赤色土師器で作る風習は朝鮮半島の軟質土器生産に基づくものと言えよう。これと対照的に非口口成形の土師器模倣Hを須臾器で作ったのが329である。外面の粘土継積み指ナデ成形と内面のナゾりで粗形を作り、口縁部のみ回転使用したような作りのものである。土師器模倣Hをモデルに須臾器胎土で製作したものと見えよう。

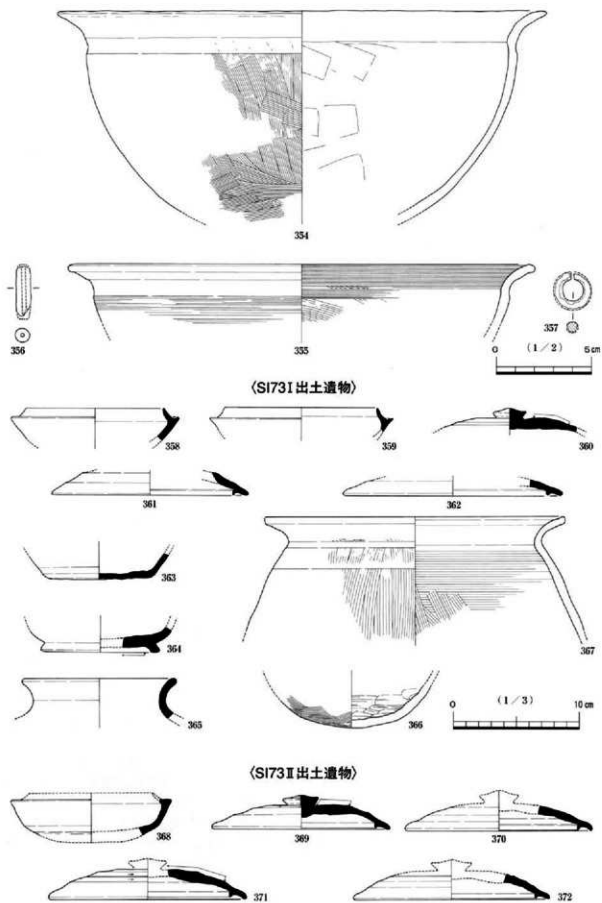
以上の豊富な須臾器食膳具に対し、土師器食膳具は少なく、明確な赤彩土師器が出現してくる前の段階と理解される。内黒品から赤彩品への過渡的な様相を示し、模倣Hは内黒でないものが少量確認される程度である。内黒品はほぼ高坏に限られ、その中でも口口成形成品の高坏Gが主体を占めるようになる。赤色粒を練りこんだ赤色品が少量存在し、336の高坏G大や334の模倣Fは当期の代表的な土師器食膳具と言えるものである。なお、赤色品模倣Fは外面に横方向のミガキ調整、内面に放射状暗紋が施される。

煮炊具は埋土中上層出土のものが一部あるが、図示したものうち、341・342・346～349・350・351・353・354は当堅穴建物に伴うⅡI期の資料と言えよう。在来型煮炊具が主体を占めるものの、朝鮮系煮炊具が少量存在しており、胎土には地元A類は確認されず、在来型も地元B類かC類となっている。在来型長胴蓋の器形は胴部の張らぬ器形が主体的だが、内面ヘラナデ調整のものが少量存在するなど、I期の様相も残す。朝鮮系長胴蓋350は叩き成形とカキ目調整を作り上げられるものだが、底部叩き出し時の内面当てを指で行う点や胴下半を最終調整でハケ目調整仕上げとする点など特徴的である。また、353の長胴蓋口縁部器形は朝鮮系器形とも言えるものだろう。浅鍋は内面ヘラナデの深身器形のもので、定型化段階と言えようが、初期の様相を残すものと言えよう。なお、355のカキ目調整の浅鍋については、当堅穴建物よりもやや下る時期の資料である可能性が高い。

特殊器種としては332の須臾器貫足円面視と357の銅製耳環が床面直上から出土している。耳環は腐食が著しいが、一部塗金が残っているもので、この時期のものとしては新しい事例だろう。円面視は当遺構から出土するのは脚部のみだが、今回の整理において「顔見可遺跡I」で報告済みのA地区土器廃棄場のな谷部包含層(く18・16Gr)出土の視面部分と接合し、完形近くまで復元できたため、復元個体として掲載した。視面は無垢無溝式のもので、脚部は長方形透かしを比較的に密にもち、透かし下に稜を2段もつ。大型ではないが、視面の厚い重厚な作りをするもので、南加賀窯産と判断される。視面が上を向くように正位で焼かれており、視面に室内降灰したザラザラした面をそのまま残す。火彫りで表面が薄く剥離した部分もあり、視面には墨痕並びに磨耗痕も確認されないなど、視としての使用痕跡は確認できない。出土状態から判断して、堅穴建物廃絶時に視が破損または意識的に破壊して、脚部のみを堅穴建物へ廃棄し、視面部分は遠く離れた土器廃棄場へ捨てた可能性がある。当堅穴建物内には先述したように、坏A蓋転用視が複数点廃棄されており、使用痕のない円面視とは対照的である。当期の定型視は実用品という意識よりも、華奢的な高い階層を誇示するような象徴的な文物の性格が強かった可能性があり(奈良文化財研究所「古代の陶視をめぐる諸問題—地方における文書行政—」2003年の全体討議にて話題となった)、そのような土製品としての性格が祭祀的な廃棄対象になったものと考えられる。A地区谷部の土器廃棄場には須臾器大壺や貯蔵具などの廃棄、または同じような時期の須臾器椀鉢や須臾器鉢鉢等の特殊土製品が廃棄されており、祭祀的な行為の後にその用具類を廃棄するような、集落の中で聖域のような位置付けがなされていた可能性を持つ。



第120図 竪穴建物出土遺物 23 (SI72-3、全てS=1/3)



第121図 竪穴建物出土遺物 24 (SI72-4、SI73I、SI73II-1、357のみS=1/2、他は全てS=1/3)

16. SI73 出土遺物

2軒の竪穴建物が重複する資料だが、ここでは出土量の多いSI73 IIのみを取り上げる。埋土下層及びカマド周辺から比較的まとまった資料が出土しており、369・373・374・377・379の須恵器食膳具から古代II 2期に位置づけられるものと言える。坏A蓋は口径14 cm台で扁平器形、つまみも扁平となるが、まだ返りはしっかりとしている。坏A身、坏B身ともに口径14 cm前後で、体部外傾器形なども類似する。坏Bの高台はしっかりと踏ん張る器形をしており、古い印象は受けるが、全体的な器形は定量化されたものである。当竪穴建物の須恵器は南加賀室南群産が過半数以上を占めており、能美窯産も定量含まれる。

土師器は食膳具がほとんどなく、381の底部ヘラ切りの須恵器器形坏Aが確認される程度で、煮炊具は382の短胴小釜、383の長胴釜、384の浅鍋ともにカキ目調整、叩き成形を施し、在来型はほとんど見られない。特に、383の長胴釜は能美窯産の可能性が高く、器形や技法的にも初期北陸型煮炊具生産と言えるものである。

17. SI74 出土遺物

埋土で重複する上層土坑の出土遺物がII 2期に位置づけられる以外は、古代I 1期にまとまる資料である。当期の竪穴建物資料としては、須恵器食膳具率が高く、坏Hを複数個体出土するが、能美窯産が主体を占めるなど特異ではある。坏H身口径で11 cm台、蓋口径で12 cm台と小型化しており、I 1期でも新相に位置づけられる可能性を持つが、小型化の進行の早い能美窯産である点は注意が必要だろう。土師器食膳具は内黒高坏Hと内黒高坏Hのみで、高坏坏部は大型で浅い器形を呈すなど、古手の印象を受ける。煮炊具は在来型技法の小型鍋と短胴小釜、長胴釜、甑があり、古代I 1期の典型的構成を示す。地元A類胎土を主体として構成されているが、一部B類胎土も含まれる。

18. SI75 出土遺物

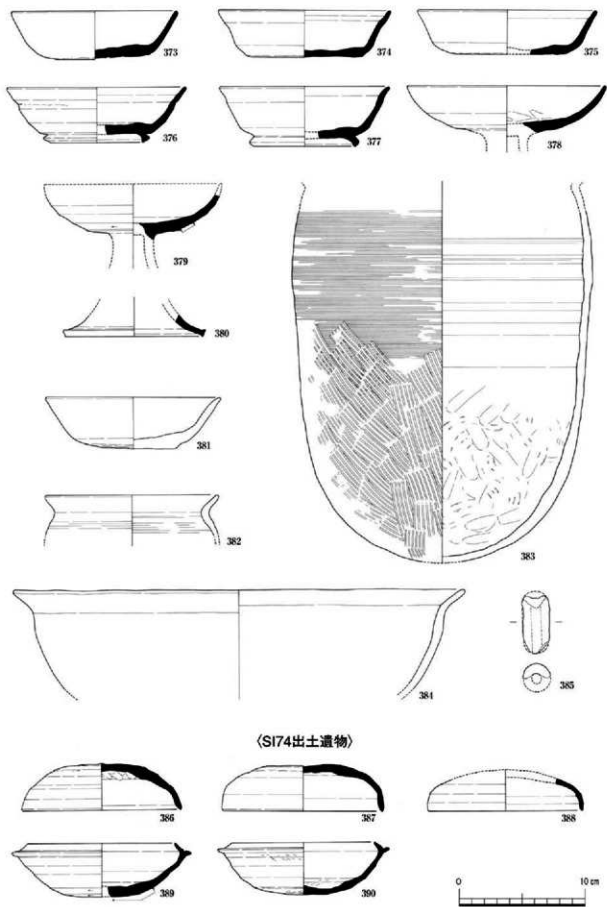
埋土上層からは古代II 2期の須恵器食膳具が出土するが、竪穴建物のカマド周辺に廃棄される土師器煮炊具資料は古代I 1期のものであり、竪穴建物に帰属できるような須恵器食膳具資料は図示できていない。土師器煮炊具は、小型鍋と短胴小釜、短胴釜、長胴釜、手付深鍋、小型浅鍋が出土する。釜類の調整技法は、外面ハケ目調整、内面ヘラナデ後のケズリ調整を基本とする伝統的なものであり、胎土が地元A類に統一されている点、小型鍋の主体的な存在や409の短胴釜器形など古代I 1期のな様相を持つ。ただ、410の長胴釜の胴部器形が比較的胴張りとならない点や411の手付深鍋が小型化・球胴化している点、412の小型ながらも浅鍋器形が存在している点は、後出するII 2期のな様相ともいえ、古代I 1新时期からII 2期の幅で捉えておくことが妥当と判断される。

なお、409の短胴釜だが、胴部中位には外面から1 cm弱の小孔が焼成後に穿たれている。当器種としては珍しくスの付着や内面コゲ痕など使用痕跡がほとんど確認されない暗定形品であり、祭祀的な使われ方をした土器かもしれない。

19. SI76 出土遺物

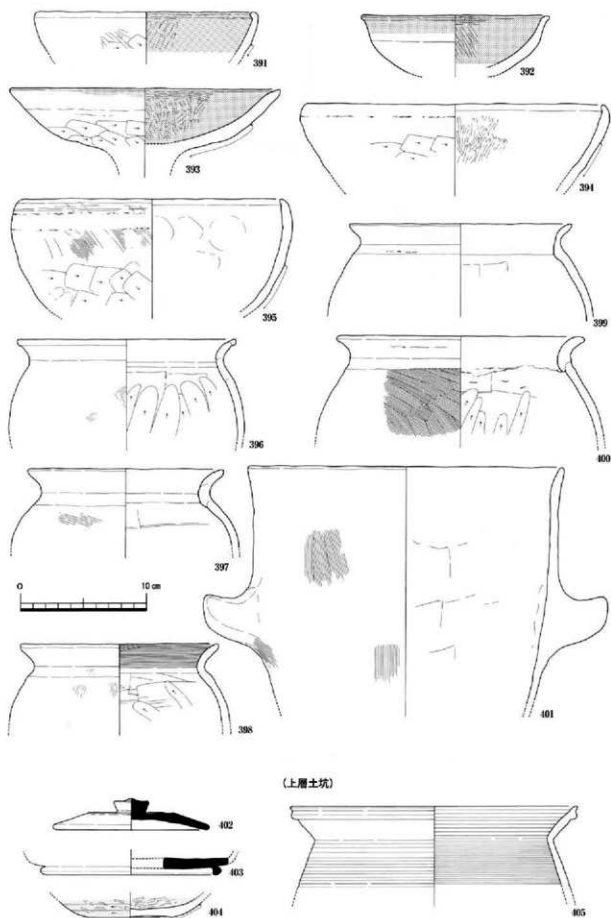
竪穴建物の東側壁でSI73 IIと一部重複しているため、混在遺物もあるが、須恵器食膳具では419と420の坏A蓋、425の坏A身、429・430の坏B身が当竪穴建物に伴う資料と判断できる。坏A蓋身の器形から古代II 1期に位置づけられる可能性を持つが、先述したSI72出土須恵器群よりは後出の特徴を持つ。高台が高く深身器形など当器種の古相特徴を有すものの、定型的な器形を持つ坏B身が確認されることを考慮すれば、やはり古代II 2期の範疇で捉えることが妥当と考えられる。ただ、その中でも最古相と位置づける能美窯の湯屋B-1室に伴行する時期のものと考えておきたい。そのような視点で考えれば、417の坏A蓋小流量や423・424の坏B蓋、432の高坏Gも当竪穴建物に伴行する資料と位置づけられよう。

当竪穴建物から出土する土師器は相対的に少なく、内黒焼Hや赤彩焼Fの破片はあるが、図示できたものは435の内黒高坏Hのみである。坏部の開く脚部の短いタイプで、当期の一般的な土師器高坏器形と言える。土師器煮炊具は在来型技法によるものが乏しく、438の底部回転ヘラ切りの短胴小釜、439の内外面カキ目調整施す短胴小釜、440の内外面ハケ目調整で仕上げられるが、継積み成形時の叩き痕跡を残す長胴釜、441の口縁部成形にロクロ、胴部下半底底に叩き出し成形を行う手付深鍋など、朝鮮系技法による煮炊具器種が大半を占める。浅鍋はハケ目調整の在来型技法だが、器形は口縁部長く外反する定型的なものであり、新しい器種や技法への転換の早い煮炊具構成を示す。なお、441の手付深鍋については、叩き出し成形の内面当て具に木製無紋当て具を使用するもので、当期の須恵器器形でも確認されない工具と言える(写真29-50)。把手は三角形板状形態をもち、



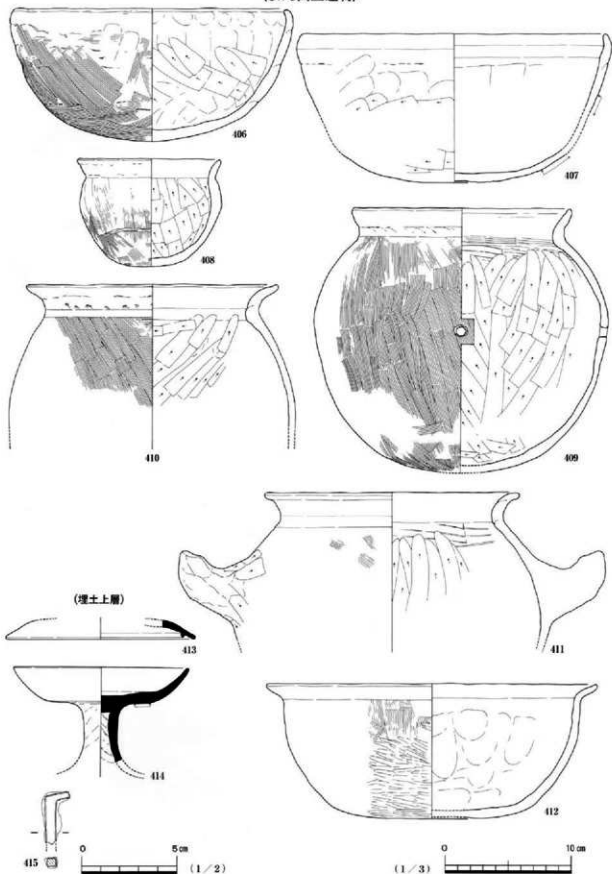
〈SI74出土遺物〉

第122図 竪穴建物出土遺物 25 (SI73Ⅱ-2、SI74-1、全てS=1/3)



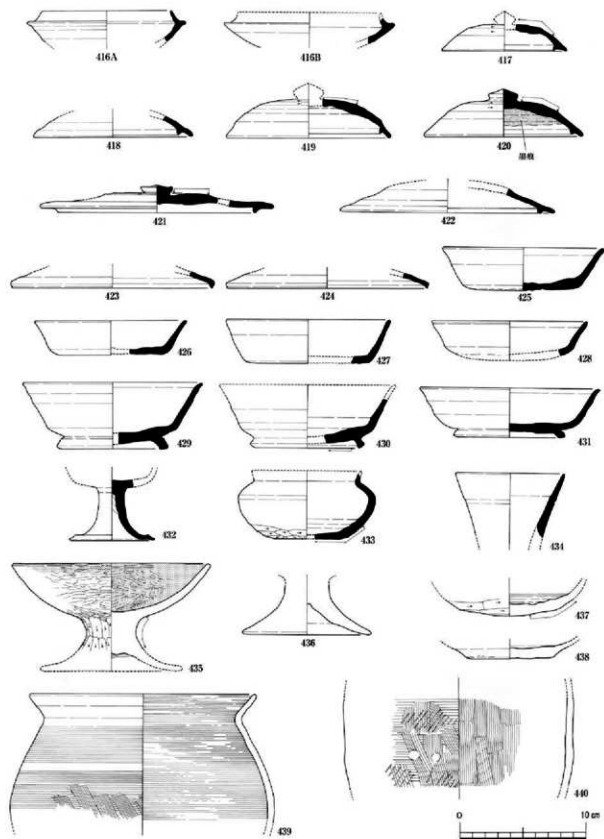
第123図 竪穴建物出土遺物 26 (SI74-2、全てS=1/3)

〈SI75出土遺物〉

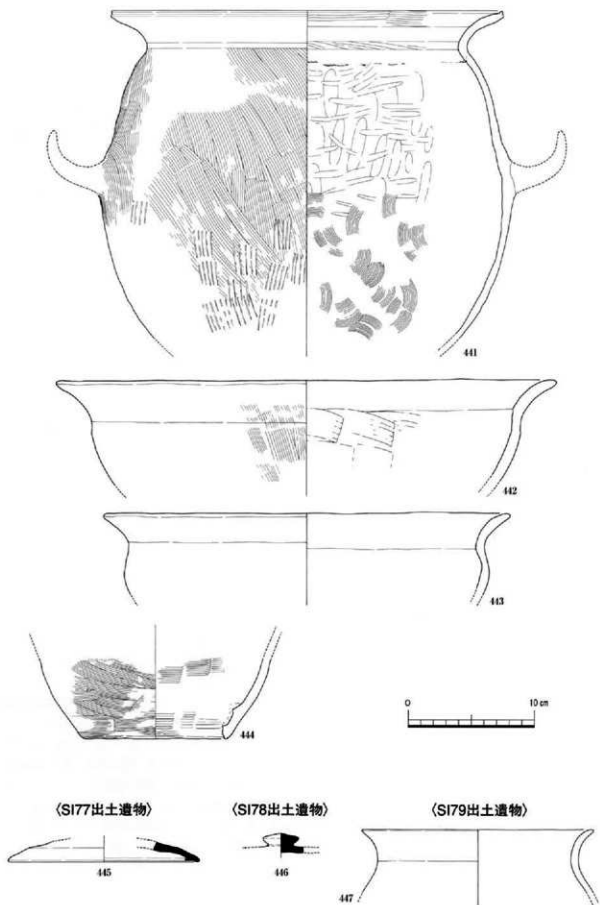


第124図 竪穴建物出土遺物27 (SI75、415のみS=1/2、他は全てS=1/3)

〈S176出土遺物〉



第125図 竪穴建物出土遺物28 (S176-1、全てS=1/3)



〈SI77出土遺物〉

〈SI78出土遺物〉

〈SI79出土遺物〉

第126図 竪穴建物出土遺物29 (SI76-2、SI77、SI78、SI79、全てS=1/3)

かなり薄手に作られている。明き成形などから朝鮮系としたが、口縁部器形や胴部球形を呈す特徴などは大和系煮炊具と言えるものである（藤原宮西方官衙遺跡SE1205出土の甕AB1b類に近似する）。また、444のハケ目調整の甕であるが、底部内面に浅渡し受けの窪みをもつ、特異な形態のものである。

20. SI81 出土遺物

竪穴埋土中上層から古代Ⅱ3期～Ⅳ1期の資料が混在して出土するが、下層から床面付近を中心に出土する須恵器・土師器資料は、古代Ⅰ期の範疇に入るものと言える。須恵器は坏Hでほぼ構成される。口径の大きな457で身口径11cm台、主体的法量と言える455・456で身口径10cm台であり、坏Hの小量化が遅れる南加賀窯北群産であるとも考慮すれば、古代Ⅰ1期新段階を主体とした時期と判断される。この時期に組成の中に加わってくる精製品の有蓋銅器種が461（有蓋銅身a）と460（銅蓋）で確認できること、462の低脚を呈する有蓋高坏や、465の短い口頸部を呈す甕の存在など、当期に伴う一括性を示している。ただ、坏H小量化の早い能美窯産の坏Hについては、459のように身口径9cm前後まで矮小化しており、窯差による型式差という点を考慮しても、Ⅰ2期への過渡の様相も含んだ資料と位置づけられよう。

土師器食器具は碗Hと高坏Hのみで構成され、碗Fは出現していない。碗Hは口縁部が短く外屈するタイプと内湾するタイプがあり、いずれも内外面をミガキ調整する伝統的なタイプである。ただ、Ⅰ1期には主体を占める内黒焼成品は少なくなっており、この点も過渡的な要素と考えられよう。高坏Hも内黒焼成しないものが定量存在しており、内黒焼成品であっても、477のように坏部が小量化している点は新しい様相と位置づけられるものかもしれない。

土師器煮炊具は小型銅が定量存在し、短胴小釜、長胴釜、手付深鍋、甕ともに伝統的なハケ目調整を基本とする。小型銅は481・482の伝統的な口縁部内湾器形に加えて、483の口縁部が薄くのびる器形のものや484の口縁部外反器形を呈す小型浅鍋状を呈すものが出現しており、これについてもⅠ2期的な様相と言えるだろう。ただ、いずれもミガキ調整を基本とする点で、Ⅰ1期の範疇にある器種である。短胴小釜、長胴釜、手付深鍋、甕ともに、外面ハケ目調整、内面ヘラナデ後縦ケズリ調整を施す在来型技法に統一されており、胎土も在来型A類であるなど、Ⅰ1期の範疇にある。長胴釜の胴部の張りも依然として強く、短胴小釜487の胴部外面にはⅠ1期に多く確認できるヘラ記号が記されている。

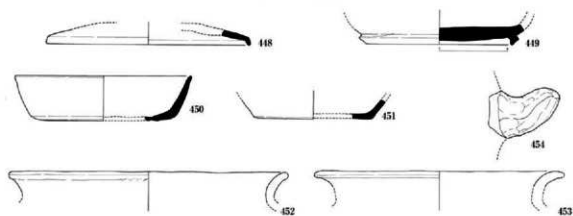
他の遺物としては、砥石と製塩土器がある。埋土中上層から土製支脚や円筒形土製品が出土するが、これについてはⅡ3期以降に位置づけられる可能性が高く、混入品と判断した。製塩土器は図示した498の他に2個体出土しており、498の地元Eと地元A、搬入品Aと、いずれも異なる胎土を示す。なお、498の製塩土器については、口縁部が若干内湾気味となる薄手のもので、古手の器形を呈する。

21. SI83 出土遺物

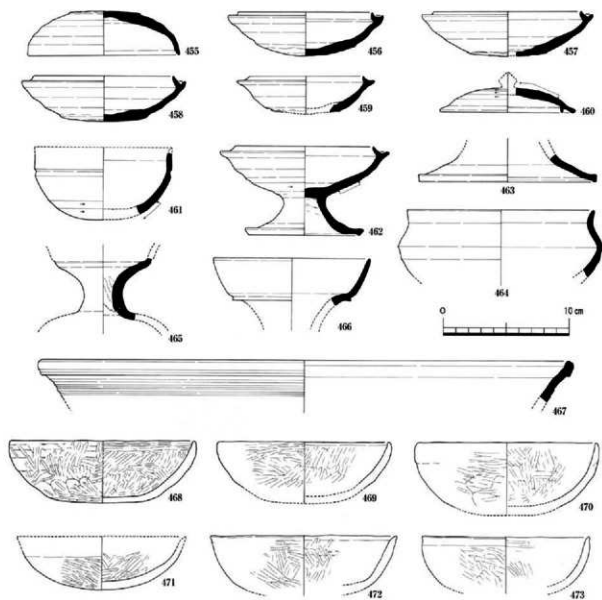
小型竪穴遺物であるため、総体的に遺物出土は少なく、特に煮炊具については残りのよい資料がなかったため、食器具中心の説明となるが、比較的下層からまとまった時期の資料が出土している。501の坏A蓋や508の坏B身、515の平瓶は古代Ⅱ2期以前に遡る資料だが、その他は概ね古代Ⅱ3期新相からⅢ期古相頃に位置づけられるものと言える。共存する土師器食器具は、519の赤彩碗Fや520の赤彩坏Aなど、窯場産（南加賀）となっており、521の内黒焼成の高坏Hは脚部がかなり短い、当器種の終焉期の様相を呈している。

なお、その他の資料として、使用痕跡をもつ脚部穿孔型の土製支脚の完形品や、管玉加工途中の緑色凝灰岩角柱形剥片が出土している。当緑色凝灰岩については、濃緑色を呈す材質の硬いもので、緑色凝灰岩の中でも碧玉的な石材を呈すものである。同一石材のものが、製品（管玉）として1点、中世Ⅰ期の土坑（C地区SK110、次回報告分）から出土している。土師器小皿の完形品数枚とともに出土しているため、副葬品的にまたは祭祀的な行為に基づいて廃棄されたものと予想されるが、製作は遡ることが予想される。同質の石材のものは、近隣に所在する6世紀前葉の矢田僧屋16号墳主体部（管玉7点、小松市教育委員会「小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ」2006年）や5世紀中頃の念仏林南遺跡27号住居跡（当資料は製玉加工剥片、小松市教育委員会「念仏林南遺跡Ⅱ」1995年）からも出土しており、5・6世紀の月津台地において、碧玉質の石材を使った製玉が行われていたことを物語る。額見町遺跡の資料は、時期的にかなり下る資料だが、華奢品として伝世的に古代まで伝承されていたものであろう。当竪穴出土資料の場合、未成品である点は気になるが、その色彩から華奢品の対象にあったものと予想したい。

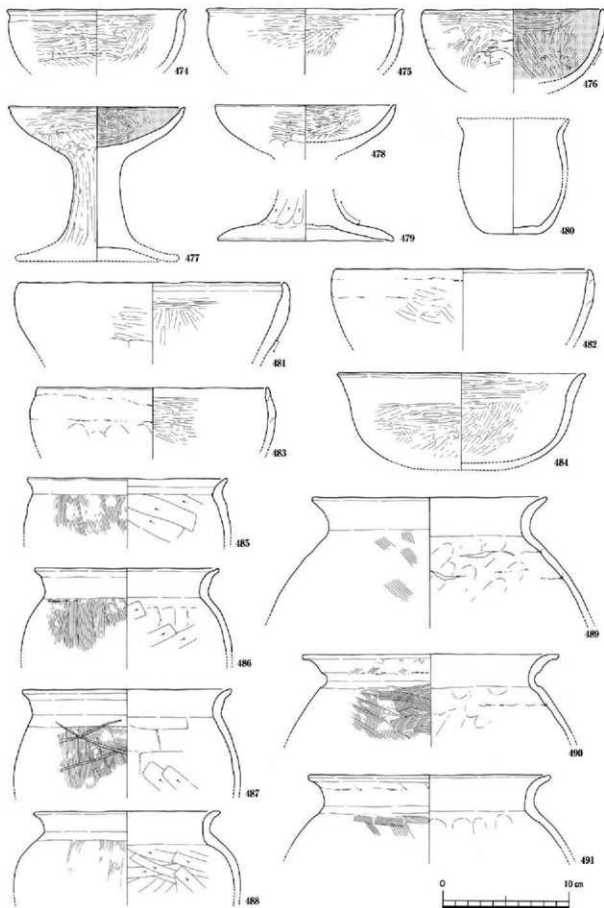
(SI80出土遺物)



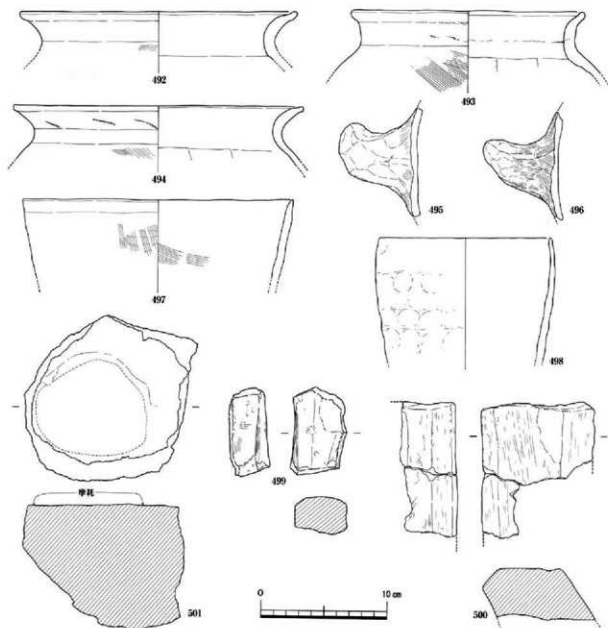
(SI81出土遺物)



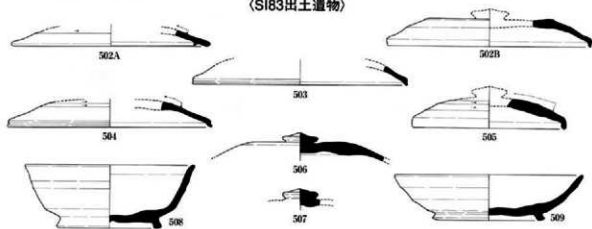
第 127 図 竪穴建物出土遺物 30 (SI80、SI81-1、全て S=1/3)



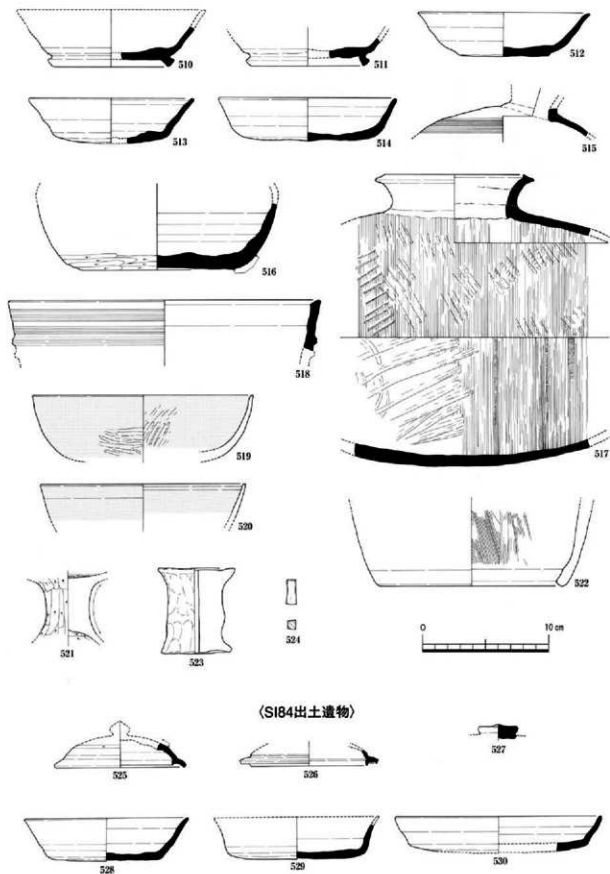
第128図 竪穴建物出土遺物31 (SI81-2、全てS=1/3)



(SI83出土遺物)



第129図 竪穴建物出土遺物32 (SI81-3、SI83-1、全てS=1/3)



(S184出土遺物)

第130図 竪穴建物出土遺物33 (S183-2、S184-1、全てS=1/3)

22. SI84 出土遺物

小型竪穴建物資料であるため、出土した遺物は僅かだが、カマド周辺を中心に古代Ⅳ2期～Ⅴ1期頃に位置づけられる煮炊具群が出土しており、当期の竪穴建物資料としては、数少ない基準資料と言える。528～530の須恵器食膳具の法量、形態などから考えて、Ⅳ2新时期からⅤ1期に位置付けられる資料と判断するが、煮炊具群については長胴釜や浅鍋の口縁部器形から見て、Ⅳ2新时期の範疇でおさまる可能性があり、より時期は特定されるであろう。

当資料で注目されるのは、535・536の長胴釜の底部叩き出しに使用される内面当て具文様である。当期としては特殊と言える車輪文風の変形格子当て具が使用されており、南加賀窯産の土師器煮炊具としては最古事例となる。ただ、須恵器窯ではⅣ2期に位置づけられる二ツ梨一貫山窯17号土師器焼成坑から出土した短頸タイプの小甕に、同様の当て具文様の底部叩き出し痕が確認でき、Ⅴ2期以降になると須恵器窯や土師器長胴釜の当て具文様として複数の須恵器窯で散見されるようになる。古代Ⅴ期に越前、加賀南部地域において、新たな当て具文様を導入してくるが、当車輪文風当て具事例は、その出現期がⅣ新时期であることを補足する事例であると評価できよう。なお、525～527の資料は埋土混在資料だが、525と526はⅠ2期の坏G資料であり、525は能美窯産、526は南加賀窯南群産のものである。

23. SI90 出土遺物

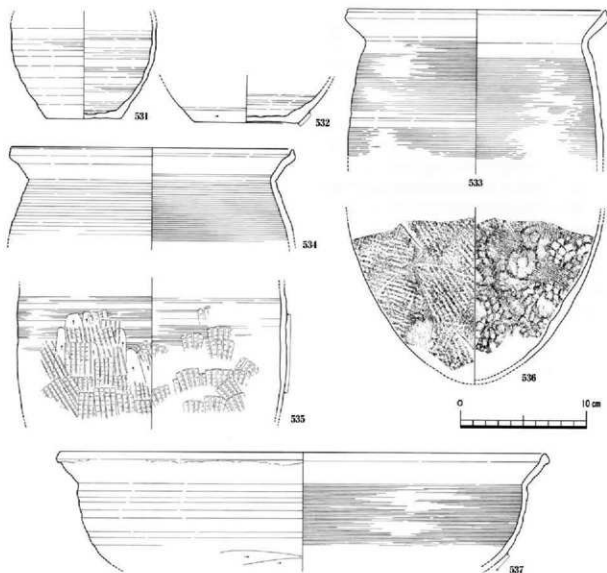
竪穴埋土中上層から古代Ⅳ1期～Ⅴ1期の資料が混在して出土するが、下層から床面付近を中心に出土する須恵器・土師器資料は、古代Ⅰ1期からⅡ2期の範疇に入るものと言え、特にカマド周辺からまとまった煮炊具資料が出土している。

須恵器食膳具では538の中層出土坏H身が古代Ⅰ1期に、545・549の坏A蓋身が古代Ⅱ2期に位置づけられる可能性が高い以外は、古代Ⅰ2期からⅡ1期の坏G（坏A）で占められる。能美窯産と南加賀窯南群産、北群産とがあり、それぞれ産地によって器形特徴に違いがある。能美窯産の546～548は身口径で9cm前後と小型法量を呈し、身が坏G的な内底面凹凸をもつなど、Ⅰ2期的な様相を残すが、身体部器形がやや外傾、外反気味であることや蓋（539・540）のつまみ形態や返りの微弱化などは、Ⅰ2期資料としたSI35の坏Gよりも後出する様相と判断される。南加賀窯南群産の542・544は能美窯産よりひとまわり大きいが、返りのまだしっかりとした器形で、北群産543も近似した器形特徴を持つ。産地により器形や法量に違いがあるが、南加賀窯産の坏G法量や坏H器種のはほぼ消滅状態から判断するに、Ⅰ2期に遡らせることはできず、古代Ⅱ1期の範疇で考えるのが妥当であり、能美窯産坏GがⅠ2期的様相を残すことを考慮すれば、Ⅱ1期の中でも古相に位置付けられるだろう。

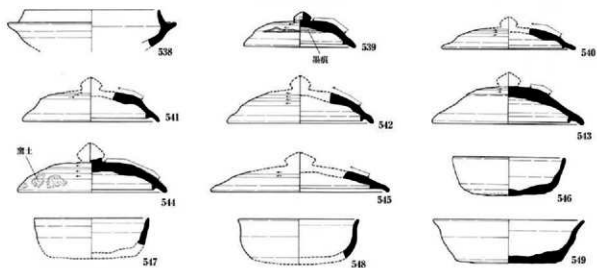
また、下層から床面にかけた550の銅鏡模様の御付き鏡が出土している。口径の小さな深身器形をもち、体部上位に沈線を施す、低い脚部が付される特徴を持つもので、このような銅鏡を忠実模倣した形態の御付き鏡が存在することも、当資料がⅡ1期の中でも古手に考え得る要因だろう。極めて薄手に精緻に作り上げた能美窯産で、内面降灰の状況から有蓋器種と推察される。特注品のなものと位置付けられるだろう。同じ能美窯産の特注品としては、竪立て付圓足円面鏡の破片がカマド脇の床面から出土しており、また、南加賀窯南群産の須恵器紡錘車の完形品1点が下層から出土している。紡錘車はケズリ調整により仕上げる作りの丁寧なもので、使用による欠けや摩耗痕は確認されず、これに関しても特殊品の扱いができると考える。竪立て付き円面鏡については、全国的に出土例の少ないものでもあるため、本項の末尾にて詳しく検討する。また、円面鏡に関連して、上記須恵器食膳具で、黒溜めに使用されたような内面に広く黒痕をもつ坏G蓋539が出土する。黒痕部分の磨耗程度が低い点から磨擦行為は行われなかったものと考えられるが、額見町遺跡最古の円面鏡と同様に、転用黒溜めとしても、当遺跡では最も古い事例である。

土師器食膳具は出土数が少なく、高坏Hの坏部破片を円示できた以外は、碗H破片が少量出土するのみである。赤彩碗類の出土もあるが、埋土上層出土であり、混入品と考えられる。高坏Hは脚部が不明のため、時期的な特徴を提示しにくい。依然として内里が主体的で、内面ミガキ調整は丁寧な施される。

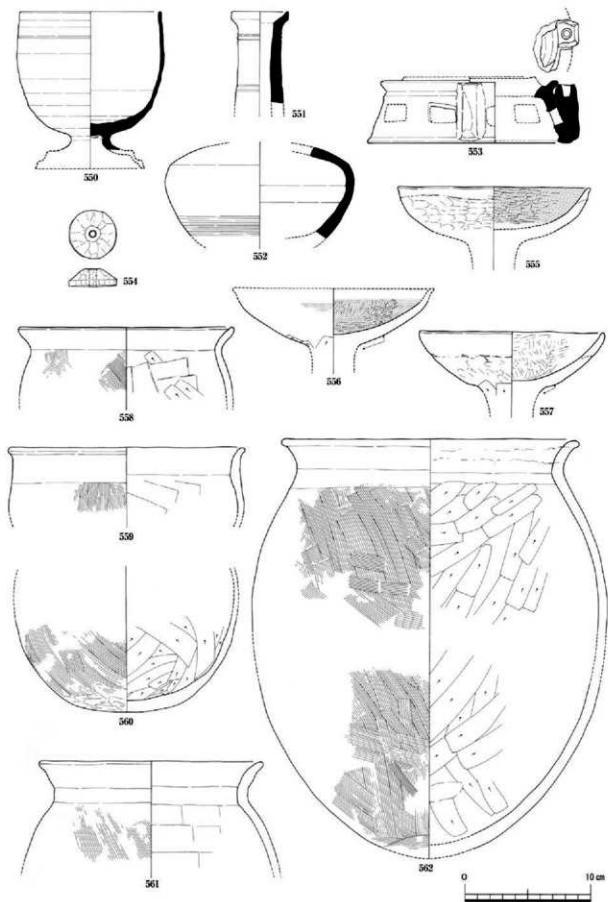
土師器煮炊具はいずれも外面ハケ目調整、内面ヘラナア後のケズリ調整による在来型技法を基本とするもので、古代Ⅰ期からの煮炊具系統にあるものだが、胎土が地元B類主体となる点や569のような浅鍋の定型化された器形のものが出現する点は、Ⅱ期的な要素と言える。Ⅰ期に主体的に存在した定型化された小型鍋は確認されず、



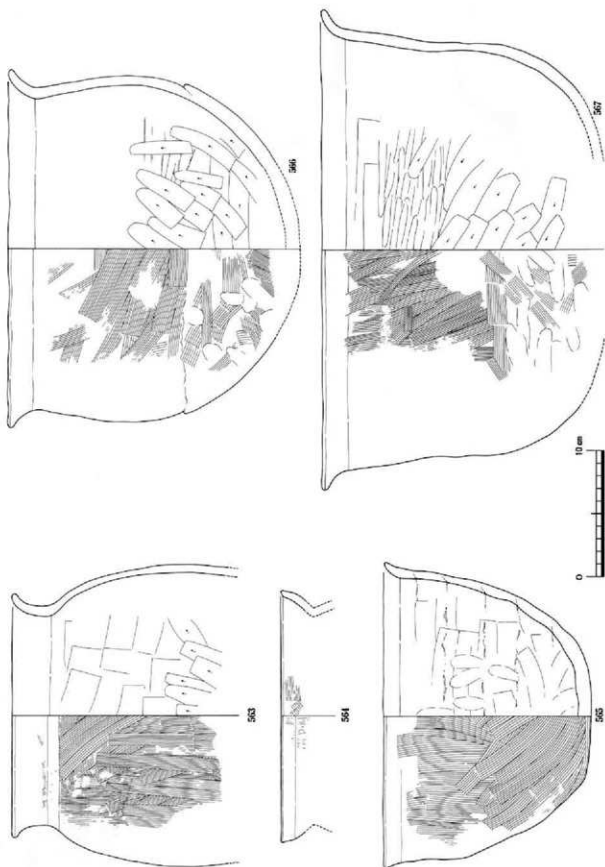
(SI90出土遺物)



第131圖 竪穴建物出土遺物34 (SI84-2、SI90-1、全てS=1/3)



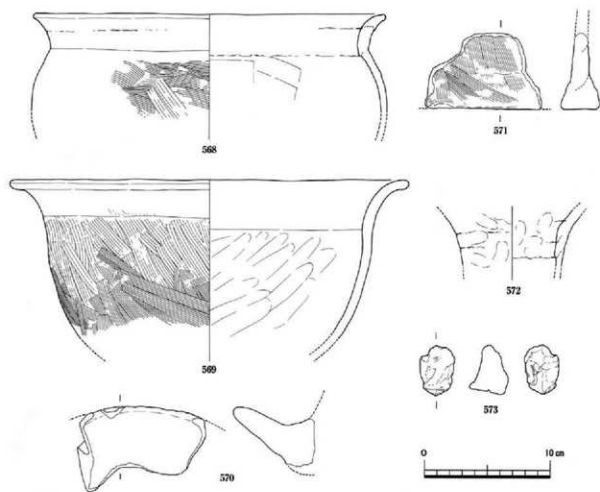
第 132 図 竪穴建物出土遺物 35 (SI90-2、全て S=1/3)



新133圖 壺穴層出土遺物36 (S190-3, 全てS=1/3)

565の短胴小釜的な成形技法をもつものが確認されるのみで、当器種の終焉期的様相をもつ。また、長胴釜では口縁部受け口状を呈す近江系長胴釜が確認される点もⅡ期の特徴と言えるものだろう。つまり、技法は在来型を踏襲するが、新たな器種や土師器生産体制が始まる段階と評価できるものであり、562の胴部の張りが強く厚手を呈す特徴的な作りをもつ長胴釜や、566の深鍋と言えるような球胴器形の厚手の煮炊具、567・568のかなり深い器形を呈す定型的な浅胴器形など、在来型からの変化途上にある段階と言える。定型化されていないこの時期の煮炊具特徴をよく示す資料群であると評価されよう。

その他の土製品としては、570・571の甕形土製品と572の製塩土器がある。甕形土製品はハケ目調整のもので、底部と下端部の破片が出土する。製塩土器は体部外傾気味に立ち上がる器形のもので、7世紀代に見られる器形のものである。



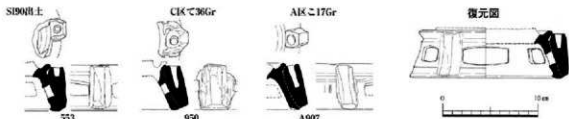
〈SI96出土遺物〉



第134図 竪穴建物出土遺物 37 (SI90-4、SI96、全てS=1/3)

《額見町遺跡出土の筆立て付円面硯について》

S190の床面から筆立て付円面硯の筆立て部破片が出土していることは述べたが、同様の特徴を有す筆立て部破片がC地区包含層（て36Gr）より出土しており、また、『額見町遺跡1』で報告したA地区包含層（こ17Gr）出土の筆立て部破片とも、胎土や色調、焼成具合、円面硯の形態や厚さ、筆立て部の形状など、同一の特徴を有することが今回の報告において確認された。極めて特殊な器種が、生産地でもない限り、ひとつの集落遺跡で同一の色調、焼成で同一形態を示す個体として、3個体存在することは可能性として皆無に等しく、破片どうしの接合関係はないが、同一個体と考えるのが妥当と判断した。しかしながら、この3つ破片が同一個体となると、3つの筆立て部をもつ圈足円面硯ということになる。図示したものは3つの筆立てが付されるという前提で、横長方形スカシの大きさと間隔を割り出し、六方スカシに復元したもので、6箇所あるスカシ間の、1つおきに3つの筆立て部が貼付されるという形態を復元した。



第135図 額見町遺跡出土の筆立て付圈足円面硯（1/4）

当円面硯は、全体的に器高の低い圈足円面硯であり、横長方形スカシである点や硯面隆部が高く盛り上がる形態である点など、圈足円面硯の中でも古い形態を呈すものと言える。豊浦寺の創建瓦を生産することでも有名な宇治集上り瓦窯出土の円面硯や陶邑TG64窯・TG70窯、近江山ノ神窯などで出土する円面硯に類似した特徴を持っており（西口2003）、集上り窯の時期である飛鳥Ⅰ～Ⅱ併行に対応するのは無理としても、陶邑窯の飛鳥Ⅱ～Ⅲ、山ノ神窯の飛鳥Ⅲなど、7世紀中頃から第3四半期に比定されるものと考えられる。S190で共伴する須恵器群が北陸古代Ⅱ1期古段階に位置づけられる点で時期的な矛盾はなく、当整穴建物に伴う円面硯であると理解して大過ないだろう。

さて、当圈足円面硯の三方に付される筆立て部は、円面硯成形が完了した後に、幅2cm前後、厚さ1.5cm前後、高さ4.2cmの粘土柱を貼付け、外側を多面体に取り整形したもので、上端は硯面外堤部より若干下がったところで高さを揃えてある。孔は上端がほぼ8mm径の円形に統一されているが、深さや穿孔状態は三者三様で、全ての筆立てが機能していたとは言いがたい。950は上端から真っ直ぐ穿孔され、下部に向かってすぼまり気味となるもので、深さも19mmと筆が立つ十分な深さを持つ。孔径から細い筆管のものと思われ、毛先を下にして置くためのものであったろう。これに対し、553は真っ直ぐ穿孔されるが、深さが1cmに満たずに、筆立てとしては浅すぎ、A区907についても、深さは十分だが、穿孔が斜めにずれて側面に貫通してしまっているなど、筆立てとして機能していたのか疑問視される。筆立て機能については、本来、筆を休め置くためのものであり、筆先が乾かないように筆を下にして置かれたものであると理解されている（門田2000）。複数の人間が一つの硯を同時に使用したり、複数の筆を同時に使用しながら、墨書行為が行われない限り、一つの硯に複数の筆立てが付されることは不自然である。孔の形態などから見て、当筆立てについては、圈足円面硯の製品の付加価値を高めるために、装飾的に付加さ

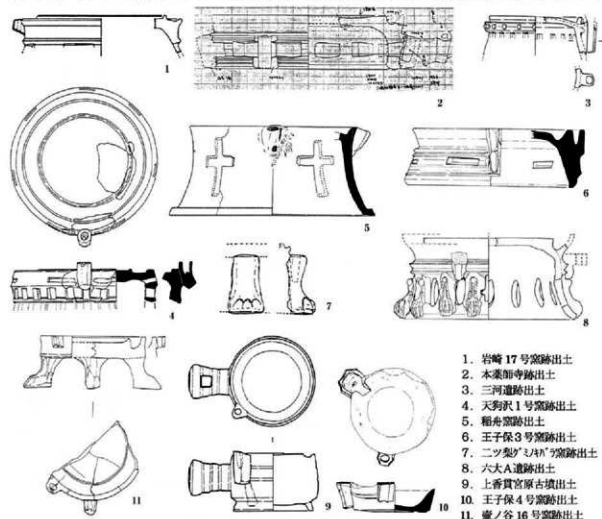


第136図 7世紀の圈足円面硯（1/5）

れた性格のものであった可能性が高いだろう。初期の定型硯自体、華奢品の価値により所有されていた性格も強く、筆立て装飾の付加は定型硯の価値をさらに高めたものと推察される。

何故、このような高いランクの円面硯が竪穴建物に廃棄されるのか疑問視されるが、SI72で出土するほぼ同時期の圓足円面硯同様に、L字型カマド付設竪穴建物である点が注目されよう。加えて、両竪穴建物からは転用硯等の初期の墨書行為に基づく硯が複数出土しており、居住者は盛んに墨書行為を行う立場にあった人物像であった可能性がある。当硯の所有者は、当集落構成員を戸籍登録、計帳管理するような未端の地方行政に携わり、渡米系移民集落の中で族長クラスにあたるような人物ではなかったかと予想されるのである。

これまで述べた、筆立て付円面硯であるが、全体的に見て出土事例は数えるほどしかなく、管見では山梨県天狗沢1号窟、静岡県上香貫宮原古墳、愛知県岩崎17号窟、三重県六次A遺跡(湖漣痕のみ)、石川県輪島市稲舟窟、小松市ニツ梨グミノキバラ窟、福井県武生市王子保3号窟、同4号窟、京都府園部壺ノ谷16号窟、奈良県三河遺跡、奈良県本薬師寺跡の11例(静岡県吉美中村遺跡A地点出土圓足円面硯の硯面周縁部や内堤外側部に円孔を穿つものがあり、これも筆立て退化と門田氏に評価されているが、本稿では除外した)を上げるに止まる(吉田1985、門田2000を参考とし、杉本宏氏からもご教示)。確認例は徐々に増えつつあるが、それでも最近の円面硯事例の多さを考えると、稀有の存在であることは間違いないと、それだけに円面硯としての付加価値が高かったと言えよう。しかも、当事例は先述のとおり7世紀第3四半期に位置づけられるものであり、国内の筆立て付円面硯では最古とされる岩崎17号窟出土事例(7世紀第3四半期)と並ぶ、国内最古級となる。脚部形態が低く、横長方形スカシをもつ点や硯面の重厚な形態など岩崎17号窟事例に類似するが、筆立て部形態も含めれば、本薬師寺跡事例が最も似ている。岩崎17号窟以外の事例は7世紀後葉から8世紀前半に位置づけられるものであり(ニツ梨グミノキバラ窟出土については8世紀後半か9世紀前葉に下る)、当事例を生産する能美窟において、



1. 岩崎17号窟跡出土
2. 本薬師寺跡出土
3. 三河遺跡出土
4. 天狗沢1号窟跡出土
5. 稲舟窟跡出土
6. 王子保3号窟跡出土
7. ニツ梨グミノキバラ窟跡出土
8. 六次A遺跡出土
9. 上香貫宮原古墳出土
10. 王子保4号窟跡出土
11. 壺ノ谷16号窟跡出土

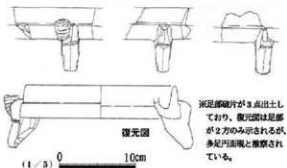
第137図 日本国内の筆立て付円面硯(1/5)

(杉本1987・西口2003・武生市1991-92・三重県2002・望月1996・門田2000より)

どのような系譜で当製品製作技術が導入されたのかが注目されることである。

額見町遺跡事例のように、筆立て付円面硯は圓足円面硯に筆立て部が付加されるのが一般的だが、三足獣足円面硯に付加される壺ノ谷16号室事例、中空円面硯に付加される王子塚4号室事例、上香貫宮原古墳事例などもある。また、圓足円面硯でも蹄脚風風に獣足装飾の付加される六次A遺跡事例や3~4箇所の獣足装飾を施し、その部分に筆立て穿孔が施されるニツ梨タミノキバラ窟跡事例など装飾性に富んだ硯に付加されるものもある。

筆立て部の形態は、硯面の外縁部に筒状の短い筆立て孔の貫通するタイプと外縁部から脚部端にかけて長い筒状の筆立て部が貼付されるタイプとがあり、いずれも、筆立て上面が硯面外縁の外堤部上端にはは合うように貼付け整形されている。ただ、額見町遺跡事例で想定した複数の筆立て部を有する円面硯は現在のところ確認例はなく、本事例のみが特異な存在と位置づけられることとなる。しかしながら、第137図に示すように、上香貫宮原古墳出土事例が完形である以外は、過半遺存するものはなく、筆立てが付される硯面外縁部が1/3以上を残すものも僅かしかない。このため、図示したものの大半が1箇所の筆立て部を付する円面硯であるとは確定できておらず、額見町遺跡事例が特異とされるには早計の感もある。この点は今後の課題だが、ただ、日本国内の筆立て付円面硯の直接的系譜が通れるとされる韓国扶餘官北里百濟遺跡出土の筆立て付多足円面硯(吉田1985及び亀田修一氏よりご教示を受けた)は、3つ遺存する獣足のうち一つにのみ筆立てが付されていることが確認できており、筆立ての形態についても最も日本のものに近似している。韓国の筆立て付円面硯事例が官北里遺跡のものだけであるため、予測の範囲を超えないが、日本における筆立てはやはり1個付設が主流であった可能性が高いと言わざるを得ないだろう。



しかしながら、陶製発祥の地である中国の事例ではその第138図 韓国扶餘官北里遺跡出土筆立て付多足円面硯とは限らない状況がある。中国では陶硯が後漢代に出現し、筆立て付円面硯は唐代になって出現する。広東省広州市華僑新村50号墓出土灰陶圓足円面硯や広東省高州良徳1号墓出土青磁圓足円面硯では、硯面の上に水容れ一つ挟んで直立する2本の円筒状筆立てが作り出されている。日本のものとは筆立て形態がだいぶ異なるが、江西省豊城縣洪州窟出土黄陶蹄脚円面硯や江蘇省揚州市木橋遺址出土青磁蹄脚円面硯では、硯面縁部に円筒形の筆立てが2個並列して貼付される(吉田1992)。後者は日本のものに近い筆立て形態であり、日本国内における筆立て付円面硯と系譜的に繋がる可能性があろう。中国の筆立て付円面硯はいずれも2個の筆立てが並列して貼付されており、これが主流の形態であった可能性が高く、筆立てを2個付設するもとの理由があったと言える。それが朝鮮半島へ伝播する中で、筆使いの方法や硯の所有・使用が変化し、一つの硯には一つの筆立てが付加されるようになったのかもしれない。複数の筆立ては、中国のもとの使用方法の名残として、装飾的に残存した可能性はあり、硯の付加価値を高める要素にもなりえた可能性もないとは言えないだろう。

額見町遺跡の筆立て付円面硯事例は単なる特異な形態のものとしてではなく、日本における筆立て付円面硯の成立や系譜を考えるうえで重要な資料と評価されるのである。

参考文献

- 杉本 宏 1987「飛鳥時代初期の陶硯—宇治華上り瓦窟跡出土陶硯を中心として—」『考古学雑誌』第73巻第2号
 武生市教育委員会 1991「王子塚遺跡群Ⅲ」、同1992「王子塚遺跡群Ⅳ」
 西門壽生 2003「畿内における陶硯の出現と普及—飛鳥郡原地域出土資料を中心として—」『古代の陶硯をめぐる諸問題—地方における文書行政をめぐる—』奈良文化財研究所
 三重県埋蔵文化財センター 2002「六次A遺跡発掘調査報告」
 望月福司 1987「古代土製歌脚小考」『龍木田遺跡』小松市教育委員会
 円田誠一 2000「筆立ての形態的検討に於ける陶硯の系譜—壺ノ谷16号室出土の須恵器円形硯によせて—」『壺ノ谷遺跡群・桑ノ内遺跡』佛教大学校地調査委員会
 吉田忠二 1985「日本古代陶硯の特質と系譜」『國學院大学考古学資料館紀要』第1輯
 吉田忠二 1992「中国古代に於ける円形硯の成立と展開」『國學院大学紀要』第30巻

第2項 掘立柱建物出土遺物

掘立柱建物出土遺物は総体的に少なく、1遺構からまとまった遺物出土もほとんどないため、各遺構から出土した遺物の概要については、以下の遺構別遺物時期一覧表に示すことで代えたい。よって、本文では特筆すべき遺物を出土した遺構のみを取り上げ、以下に述べる。

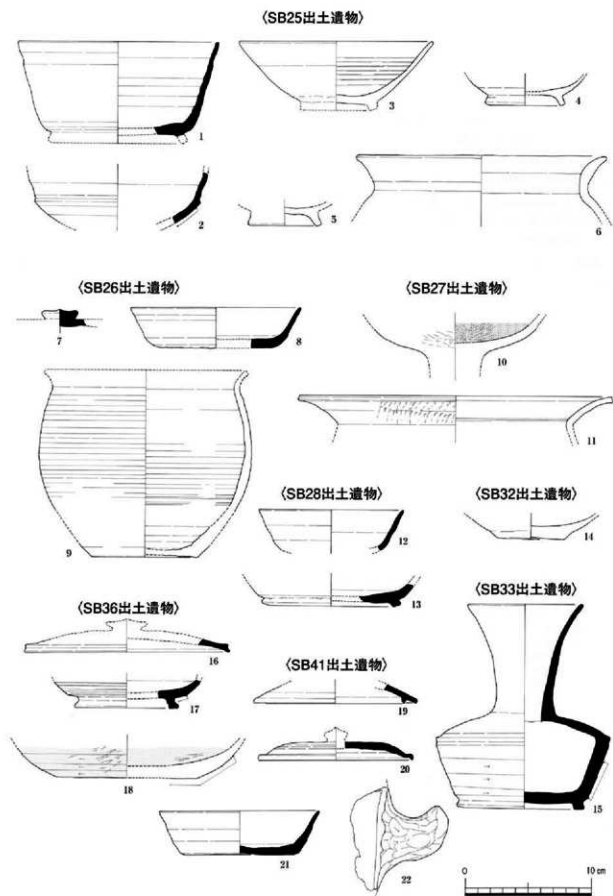
SB33の柱穴からは図示できるような遺物が出土していないが、建物内に掘られた浅い小穴からは15の須恵器版Aが出土している。口縁部の一部欠けがあるものの、完形品と言えるもので、破壊行為も行われずに土中埋納されている。一般的な長頸瓶よりも小型法量を有しており、特殊性をもつが、定期的には口縁部器形や高台、肩部の張る器形等から古代Ⅳ1期前後に位置づけられよう。完形品埋納という視点から、掘立柱建物の地鎮祭における酒を注ぐ容器のようにも思えるが、内容物は遺存しておらず、内面の付着物も特に確認できていない。

SB47からは比較的まとまった資料が出土する。40の土師器碗は胎土と器形から中世1期に下る資料だが、他の土器は古代Ⅲ～Ⅳ1期に位置づけられる資料で、内外面赤彩の土師器碗Aが出土している。なお、41の梯状を呈す鍛造鉄製品については、断面長方形を呈す点から、長頸瓶の蓋被部の可能性が高いものである。

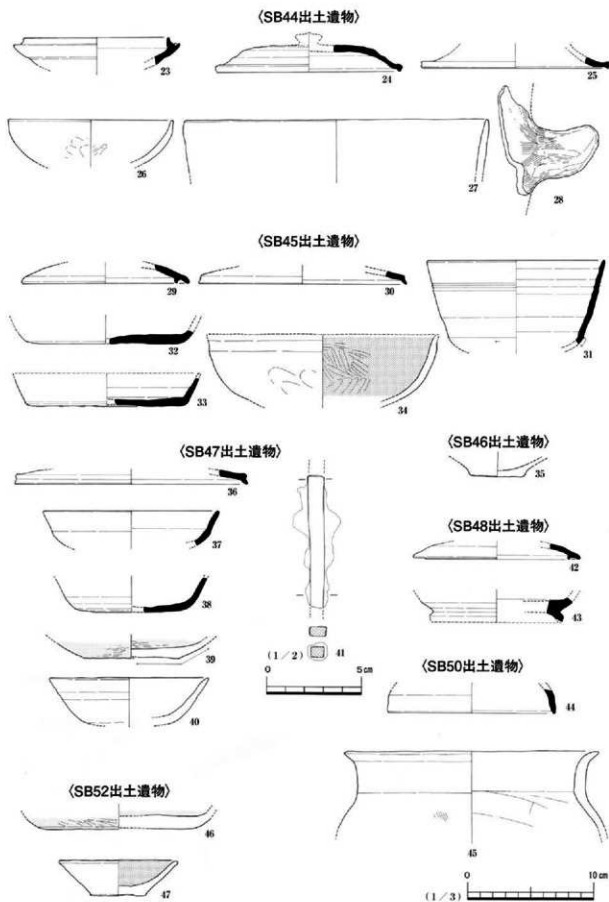
SB88から出土する74の須恵器環A蓋は外面に溶解した窯土が付着するもので、内面には焼成時発泡による割れがある。当集落遺跡で他にも確認される製品選別時の廃棄品である可能性が高い。

SB89からは比較的まとまった資料が出土している。75の須恵器環A蓋中の扁平器形や法量、76の環B蓋の存在、77の土師器浅溝の口縁部長く外反する器形などから、古代Ⅱ2期に位置づけられ、特に浅溝は一つの柱穴にまとめて廃棄されている。祭祀的な柱穴廃棄の可能性を持つ。

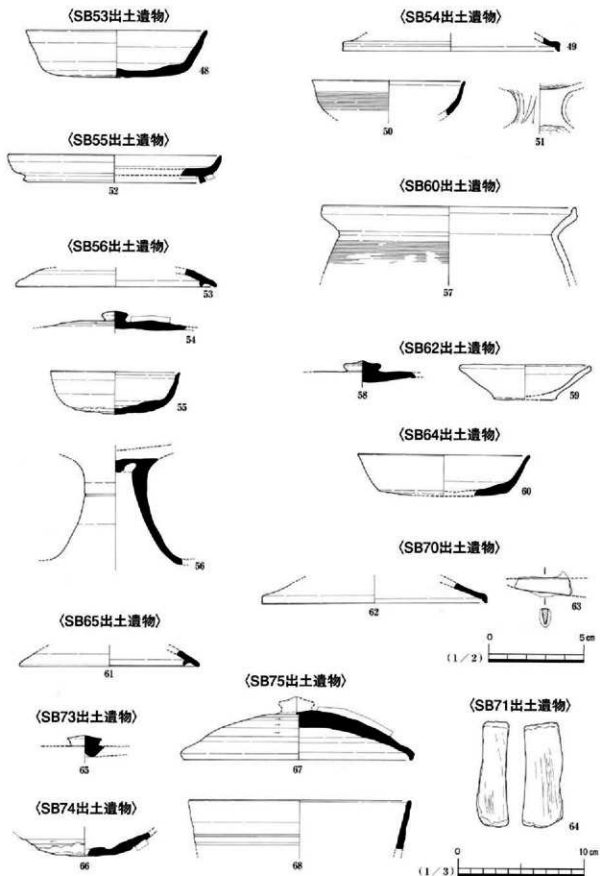
遺構名	遺物の概要	遺構名	遺物の概要
SB025	遺物106点。古代Ⅰ期主体。Ⅵ1～Ⅵ1期少混在。	SB064	遺物25点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期須恵器・土師器。
SB026	遺物36点。古代Ⅲ～Ⅳ1期須恵器・土師器。	SB065	遺物50点。古代Ⅱ2期須恵器・土師器。
SB027	遺物3点。古代Ⅱ1～Ⅱ2期の須恵器。	SB070	遺物46点。古代Ⅱ3～Ⅲ期須恵器・土師器。
SB028	遺物21点。古代Ⅴ1～Ⅵ1期須恵器。	SB071	遺物18点。古代Ⅱ2～Ⅲ2期須恵器・土師器。
SB029	遺物62点。古代Ⅱ～Ⅲ期？須恵器・土師器。	SB072	遺物4点。古代Ⅱ期？須恵器。
SB030	遺物59点。古代Ⅱ～Ⅲ期？須恵器・土師器。	SB073	遺物16点。古代Ⅱ2期須恵器・土師器。
SB031	遺物7点。古代Ⅰ期？土師器。	SB074	遺物1点。古代Ⅰ～Ⅱ1期須恵器。
SB032	遺物30点。古代Ⅱ～Ⅲ期？と中世1期混在。	SB075	遺物19点。古代Ⅲ期前後須恵器・土師器。
SB033	遺物7点。柱穴土器は古代だが、時期不明。	SB076	遺物8点。古代Ⅱ2～Ⅲ？須恵器・土師器。
SB034	遺物6点。古代Ⅰ～Ⅱ期？須恵器・土師器。	SB077	遺物4点。古代Ⅱ2～Ⅲ？須恵器・土師器。
SB035	遺物3点。古代Ⅰ～Ⅱ期？土師器。	SB078	遺物9点。古代Ⅰ～Ⅱ期土師器。
SB036	遺物30点。古代Ⅱ3～Ⅲ期須恵器・土師器。	SB080	遺物19点。古代Ⅱ期頃？須恵器・土師器。
SB037	遺物3点。時期不明古代土器。	SB081	遺物20点。古代Ⅱ～Ⅳ期？須恵器・土師器。
SB038	遺物2点。時期不明古代土器。	SB084	遺物15点。古代Ⅱ2期頃の須恵器・土師器。
SB039	遺物12点。古代Ⅰ期須恵器・土師器。	SB085	遺物29点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期須恵器・土師器。
SB040	遺物14点。時期不明古代土器。	SB088	遺物9点。古代Ⅱ1～Ⅱ2期須恵器・土師器。
SB041	遺物86点。古代Ⅱ1期とⅤ期、中世1期混在。	SB089	遺物44点。古代Ⅱ2期須恵器・土師器。
SB044	遺物20点。古代Ⅱ2期主に、Ⅴ2～Ⅵ1期混在。	SB090	遺物18点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期須恵器・土師器。
SB045	遺物10点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期主に、Ⅴ期混在。	SB093	遺物6点。古代Ⅰ期とⅤ1期混在。
SB046	遺物43点。古代Ⅰ～Ⅱ期と中世1期混在。	SB094	遺物4点。古代Ⅱ期とⅤ期混在。
SB047	遺物61点。古代Ⅲ～Ⅳ1期主に、中世1期少混在。	SB097	遺物6点。古代Ⅱ期頃？須恵器・土師器。
SB048	遺物33点。古代Ⅱ2期主に、中世1期少混在。	SB098	遺物2点。古代Ⅰ～Ⅱ期土師器。
SB050	遺物2点。古代Ⅰ期須恵器・土師器。	SB099	遺物3点。古代Ⅰ～Ⅱ期土師器。
SB051	遺物2点。時期不明古代土器。	SB100	遺物19点。古代Ⅱ1～Ⅱ2期須恵器・土師器。
SB052	遺物17点。古代Ⅱ2～Ⅲ期主に、中世1期少混在。	SB101	遺物4点。古代Ⅱ～Ⅳ期須恵器。
SB053	遺物21点。古代Ⅱ2～Ⅲ期須恵器・土師器。	SB102	遺物11点。古代Ⅱ3期須恵器・土師器。
SB054	遺物63点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期主に、中世1期少混在。	SB109	遺物4点。古代Ⅳ～Ⅴ期須恵器・土師器。
SB055	遺物16点。古代Ⅲ～Ⅳ1期須恵器・土師器。	SB119	遺物9点。古代Ⅳ期土師器。
SB056	遺物71点。古代Ⅱ2～Ⅲ2期主に、中世1期少混在。	SB128	遺物19点。古代Ⅰ～Ⅱ期土師器。
SB057	遺物24点。古代Ⅱ～Ⅲ期？須恵器・土師器。	SB129	遺物26点。古代Ⅰ～Ⅱ期土師器。
SB058	遺物22点。古代Ⅱ～Ⅲ期主に、中世1期少混在。	SB130	遺物14点。古代Ⅱ～Ⅳ期？須恵器・土師器。
SB059	遺物27点。古代Ⅰ期須恵器・土師器。	SB131	遺物56点。古代Ⅱ2～Ⅲ期須恵器・土師器。
SB060	遺物23点。古代Ⅲ～Ⅳ1期須恵器・土師器。	SB132	遺物12点。古代Ⅱ2～Ⅲ3期須恵器・土師器。
SB061	遺物7点。古代Ⅰ～Ⅱ期？土師器。	SB160	遺物24点。古代Ⅰ～Ⅱ期土師器。
SB062	遺物12点。古代Ⅱ2～Ⅲ期主に、中世1期少混在。		



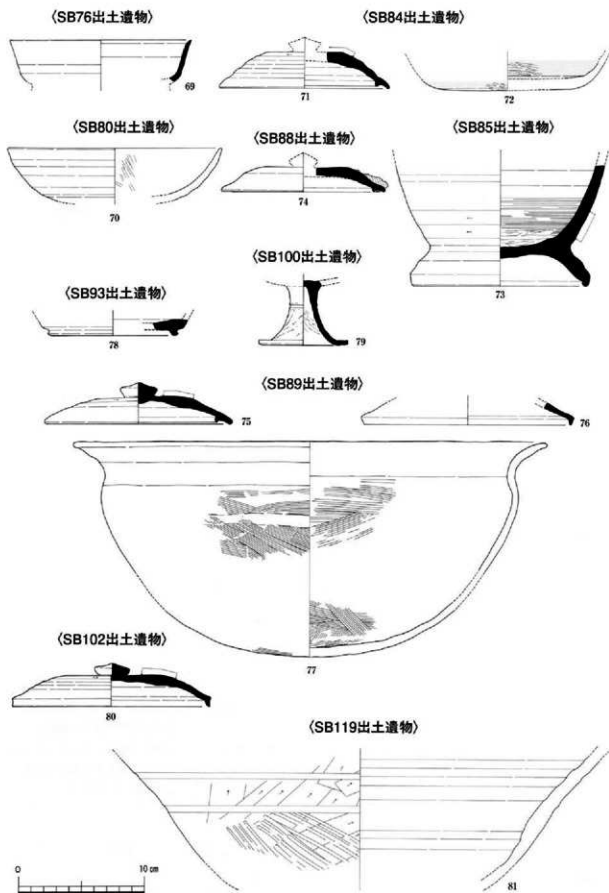
第139図 掘立柱建物出土遺物1 (SB25～SB41、全てS=1/3)



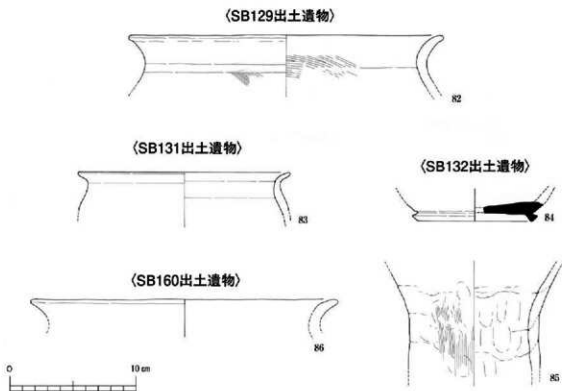
第140図 獨立柱建物出土遺物2 (SB44～SB52、41のみS=1/2、他は全てS=1/3)



第 141 図 独立柱建物出土遺物 3 (SB53～SB75、63のみS=1/2、他は全てS=1/3)



第 142 図 掘立柱建物出土遺物 4 (SB76 ~ SB119、全て S = 1 / 3)



第143図 掘立柱建物出土遺物5 (SB129～SB160、全てS=1/3)

第3項 土坑出土遺物

膨大な遺物を出土する大型土坑がないため、全体的に土坑からの遺物出土量は、A地区に比べると少ないが、それでも8,187点の遺物出土が確認されている。156ページの出土遺構ごとの用途別破片数構成表に示すとおり、全体の12.4%を占める量で、遺構種別としては竪穴建物に次いで多い。器種構成は、須恵器食膳具が13.4%、土師器食膳具が3.4%、須恵器貯蔵具が6.6%、土師器煮炊具が74.9%、土製品と石製品が1.5%で、破片数としては竪穴建物の構成比率と大きな差は感じられない。ただ、土坑出土の土師器煮炊具が小破片主体であるのに対し、竪穴建物では土師器煮炊具の一括廃棄が多く、出土箱数比較では倍近い開きがある。

以下では、出土量の多い土坑を中心に述べるが、遺物出土は比較的多いものの、複数時期の遺物が混在しているものについては除外し、時期にまとまりを持った資料や特筆すべき資料を出土する土坑を中心として取り上げる。なお、土師器焼成坑に関しては、土坑とは別に扱うこととする。

1. SK47 出土遺物

古代Ⅰ1期に位置づけられる須恵器坏H身や石製紡錘車が僅かに混在して出土するが、主体は古代Ⅳ2古期に位置づけられる資料と判断される。器種は須恵器坏B蓋・身、坏A、盤A、土師器長胴釜、浅鍋、甗が確認されており、須恵器・土師器ともに南加賀窯産で占められる。13・14の須恵器坏B蓋中法量は類似する器形のもので、14の内面には転用祝使用痕である強度の磨耗痕と墨痕が確認される。13には墨痕の確認はないが、14同様に強度の磨耗痕があり、20の盤Aについても同様の磨耗痕が確認される。これらについても転用祝の可能性であろう。なお、19の須恵器坏B身大法量は、外面体部下半に工具で施したような細かなクロロヒダをもつもので、作りも精緻であり、金属器的な表現を意識したものかもしれない。

2. SK51 出土遺物

古代Ⅰ2期に位置づけられる極限まで小型化した段階の須恵器坏H身24が1点のみ出土するが(能美窯産であり、坏H最終段階の型式である)、他は古代Ⅱ3期～Ⅲ期に位置づけられる良好な一括資料である。須恵器は全て南加賀窯産だが、土師器については南加賀窯産に加えて、地元B類が定量存在し、能美窯産の可能性のあるものも1点(長胴釜41)のみ確認される。須恵器食膳具は一器種一法量の様相をもつ坏B蓋・身と高坏Gで構

成される。坏Bは扁平で口径が大化する古代Ⅲ期古段階に位置づけられる矢田野山1号室Ⅰ次室に対比でき、高坏Gが終焉期的な器形という点でも符合する。これに伴う土師器食膳具は南加賀産産の赤彩碗Fで、外面下位から底面をケズリ調整し、内外面を丁寧にミガキ調整する。大型で器高の低いものであり、須恵器の時期に対比して問題がない。土師器煮炊具については短胴小釜と長胴釜、浅鍋で構成され、短胴小釜と浅鍋はロクロ成形の北陸型煮炊具に統一される。いずれも定型化された器形のもので、浅鍋は外面下半ケズリ調整のものと叩き成形のものがある。これに対し、長胴釜は、須恵器成形技法をもつ39～41が存在するものの、内外面ハケ目調整を施す来型技法の36～38が定量共存しており、北陸型へ統一される状況とはならない。ただ、胎土からいざいも南加賀産産であることが確認できており、胴部下外面をケズリ調整するなど、底部については叩き出し成形を行う来型技法を併用する北陸型煮炊具の可能性を持つ。古代Ⅱ3期新段階に位置づけられる二ツ梨豆岡向山窓C地区土師器生産関連遺物群（小松市教育委員会2005『小松市内遺跡発掘調査報告書Ⅰ』）ではまとまった土師器煮炊具が確認されているが、定型的な北陸型煮炊具と北陸型と来型との技法融合した煮炊具、来型技法による煮炊具が併存しており、窯場での生産が開始されても、依然として来型技法による煮炊具生産は存続していたことを示している。

その他のものとしては、製塩土器と土製支脚、管状土鍾が出土する。製塩土器は底面木葉痕をもつ平底タイプで、小型を呈す南加賀産産のものである。土製支脚は中空タイプで、鼓形を呈す分類ⅠA2b類（『顔見町遺跡Ⅰ』207頁の土製支脚分類案）に該当する。胎土は地元B類である。管状土鍾も地元B類胎土である。

3. SK54 出土遺物

須恵器食膳具を中心にまとまりある土器が出土している。図示した48～50の須恵器坏B蓋の口縁部器形や51・52の坏身全体の器形と法量、53～59の扁平ながら体部外傾化し、底部の薄くなった坏A、そして60の体部外傾器形の盤A、61の土師器赤彩碗Aの口径縮小した内湾器形などから判断して、概ね古代Ⅳ2新～Ⅴ1期に位置づけ可能な資料と推察する。当遺跡の中では数少ない当期のまとまった資料と言えるものであり、図示した資料は多いとは言えないが、破片では肩張り器形の長頸瓶Aと丸肩器形の長頸瓶B、そして双耳瓶も出土しており、当期の器種組成を満たしている。須恵器産地は、60の盤Aが能美産産である以外は、土師器も含め通常の南加賀産産に統一されている。

4. SK55 出土遺物

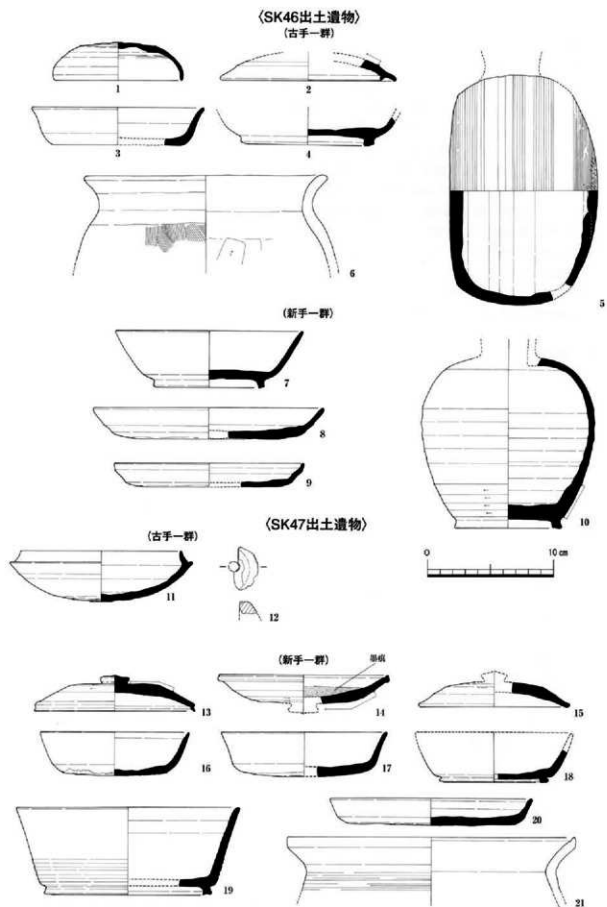
当土坑からも須恵器食膳具を中心として時的にまとまりをもった土器が出土している。図示した65の須恵器坏B蓋、67・68の坏B身、69～71の坏Aは、いずれも古代Ⅲ期新段階からⅣ1期に位置付け可能な、法量と器形、口縁部形態をしており、概ね当該期に位置づけられるものと考えられる。併せて肩張り器形の須恵器長頸瓶Aや土師器赤彩碗A、底面糸切り痕を残す短胴小釜が出土しており、時的に符合する資料と言える。須恵器・土師器ともに、南加賀産産にはほぼ統一されており、地元産胎土は確認できない。なお、72の須恵器底部破片だが、筒状に立ち上がる平底器形のもので、底面をヘラ切り後にナデ調整するものである。内面調整が丁寧に仕上げられる薄手の作りのものであり、特殊品と言える。内底面の調整から壺・瓶類とは思わず、器形から判断してコップ形と推察した。

5. SK64 出土遺物

当土坑から出土する土器は多いが、破片が主で、図示できた資料は少ない。ただ、77の須恵器坏Aの扁平器形や法量、78の高坏A類の存在、79の土師器短胴小釜の丸底器形、80のハケ目調整を施した地元産短胴小釜の存在などから判断して、古代Ⅱ3期新段階からⅢ期頃に位置付け可能と推察する。なお、特殊品として、81の土師器小型瓶が出土している。口径17cm、器高15cmを測るもので、両面に把手をもつ筒抜け底部形態のものである。器形はロクロ成形品に似るが、口縁部が波打ち、内外面をナデ調整で仕上げるなど手づくね状の作りをするものであり、ミニチュア品的な性格を帯びる祭祀具的なものだろう。地元B類胎土のものである。

6. SK68 出土遺物

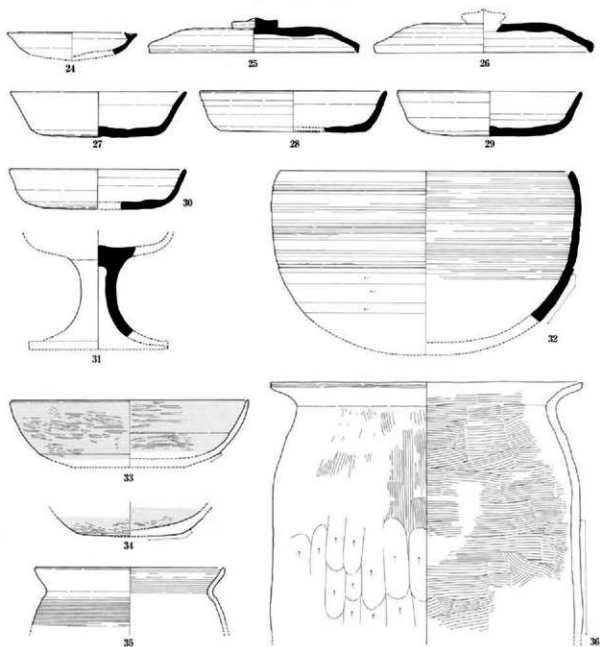
当土坑からも須恵器食膳具を中心として時的にまとまりをもった土器が出土している。85・86に示した須恵器坏A蓋の扁平器形と微妙化した返り形態、88・89に示した須恵器坏B身の深身に体部外傾を呈す器形や強く踏ん張る高台形態などから、古代Ⅱ2期に位置づけられる資料と言える。しかし、87や92～94に示した扁平器形を呈する坏B蓋や坏Aの存在は、古代Ⅱ3期的様相とも言えるものであり、総合的に判断し、Ⅱ2期の終末



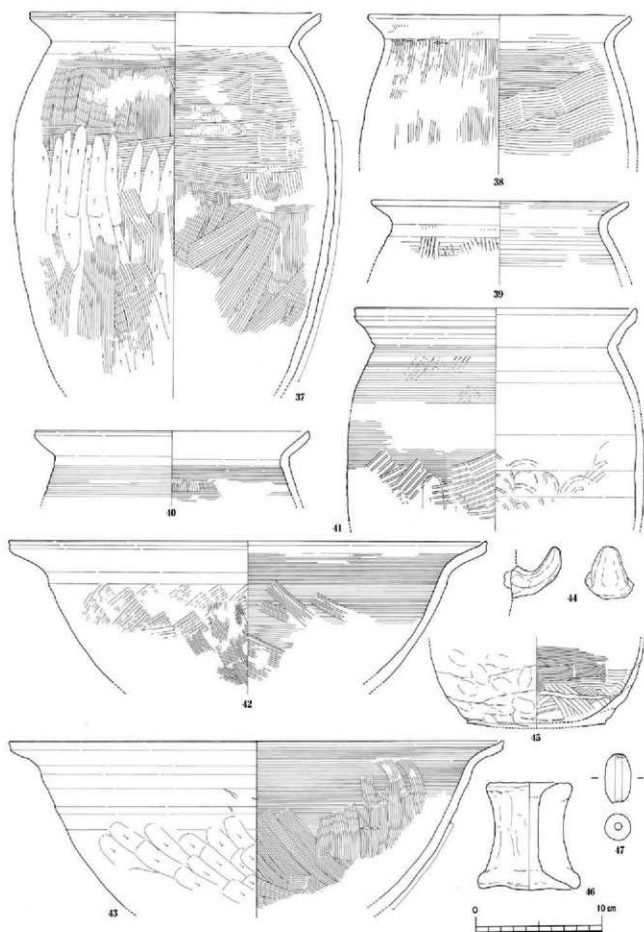
第144図 土坑出土遺物1 (SK46、SK47-1、全てS=1/3)



(SK51出土遺物)

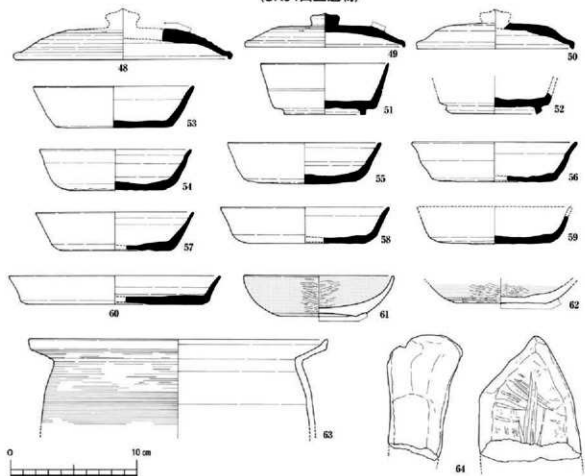


第145図 土坑出土遺物2 (SK47-2、SK51-1、全てS=1/3)

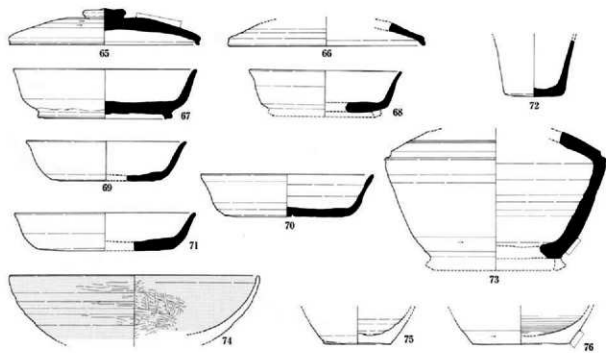


第146図 土坑出土遺物3 (SK51-2、全てS=1/3)

〈SK54出土遺物〉

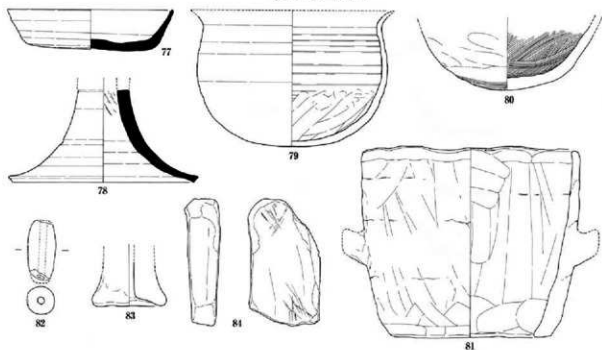


〈SK55出土遺物〉

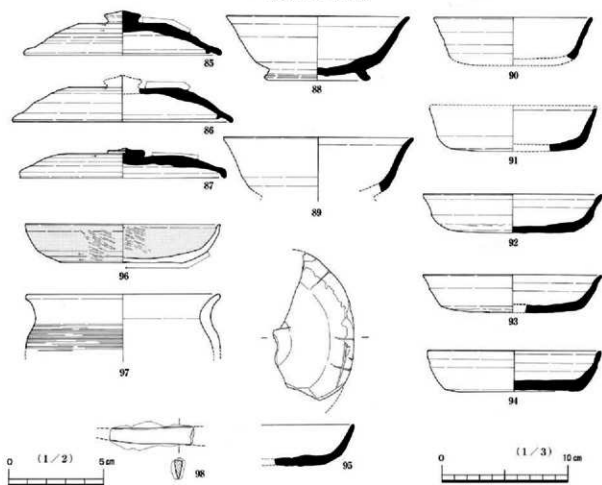


第147図 土坑出土遺物4 (SK54、SK55、全てS=1/3)

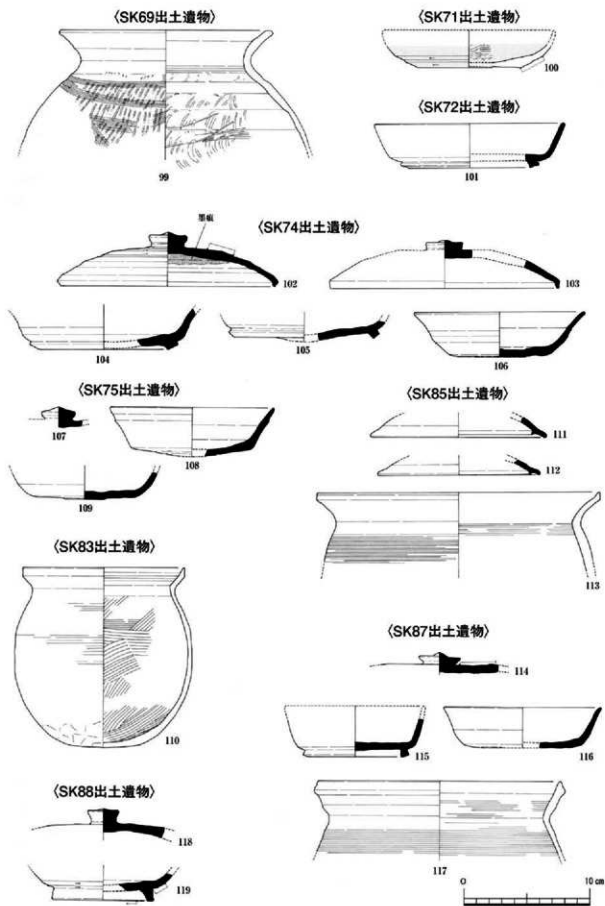
〈SK64出土遺物〉



〈SK68出土遺物〉



第148図 土坑出土遺物5 (SK64、SK68、98のみS=1/2、他は全てS=1/3)



第149図 土坑出土遺物6 (SK69、SK71、SK72、SK74、SK75、SK83、SK85、SK87、SK88、全てS=1/3)

段階資料と位置づけるのが妥当と言えよう。共存する土師器は、扁平器形で底径の大きな赤彩輪F 96、カキ目調整の短胴小釜97、そして図示はしていないが、内黒高坏やハケ目調整の在来型長胴釜と叩き成形の北陸型長胴釜が出土している。貯蔵具も甕をはじめ、横瓶や長頸瓶A・F、壺Iがあり、当期を特徴付ける各器種が出土する。胎土は須恵器で能美窯産が少ないながらも定量存在し、この点に関してもⅡ2期的な様相と言えるだろう。

なお、95の南加賀窯産須恵器環Aは焼き重みが著しく、口縁部に焼きヒビのような亀裂が複数入ったもので、片側に壺土や須恵器溶着片が付着している。須恵器室内で環A片を置台として転用して窯詰め焼成されたものであり、製品に付着して当遺跡に持ち込まれ、製品出荷の際に、不要な製品付着物として削り落とされ、廃棄された遺物と判断される。包含層からも同様に製品付着壺土を削り落とした際の剥離壺土片が複数出土しており、当遺跡での須恵器製品選別・出荷作業を表付ける資料と言えるだろう。包含層で複数出土している貯蔵具専用焼台の出土についても同様の意味をもつと理解しており、このような須恵器生産関連遺物が出土することが当遺跡の大きな特徴と言えるものだろう。その他の遺物としては、98の両端を欠損した刀子の刀部片が出土している。身幅が9mm程度の小型のものである。

7. SK74 出土遺物

遺物出土量は少ないが、図化できたものは須恵器食膳具のみである。一器種一法量の様相を持つ環Bと環Aで構成されるもので、環B蓋の器形や環B身高台の踏ん張る器形、体部外傾器形を呈す環Bや環Aの特徴から判断し、古代Ⅱ3期でも古段階に位置づけられる資料と考えられる。なお、102・103の環B蓋については、内面に墨痕を伴う磨耗痕が確認でき、転用碗または墨溜めに使用されたことが推察される。

8. SK89 出土遺物

遺物出土量が500点を越える、大型の土坑である。遺物の時期は概ね2時期あり、古手のものは古代Ⅰ1期に、新手のものは古代Ⅱ1期～Ⅱ2期に位置づけられる。

古手の資料は、120・121の須恵器環H身と129の須恵器提瓶、131の土師器高坏Hがある。土師器高坏HはⅡ3期まで残る器種だが、脚部がまだ長く、地元A類胎土であることから1期に帰属させた。在来型の土師器短胴小釜も器形や調整など1期に帰属させることも可能だが、Ⅱ期以降に定着する地元B類胎土であり、新手資料に含めた。提瓶はやや生焼けの半完形資料で、胎土や器形などから南加賀北群の戸津・林文群で生産されたものと考えられる。なお、須恵器環H身だが、口径の大きなもので、特に121については能美窯産であり、当窯産で口径12cm以上を測るものはⅠ1期の中でも古段階に位置づけられる資料と言える。

新手資料は上記以外の土器であり、122～124の環A蓋小法量の器形や125の環A蓋大型法量の存在、127の体部外傾器形を呈す環A身等、須恵器食膳具の特徴から、古代Ⅱ1期新段階からⅡ2期古段階に位置づけられる資料と判断される。須恵器は全て南加賀窯産のものであり、中でも北群産主体で構成される。土師器食膳具は赤彩輪Fの出土が確認されておらず、130の非ロクロ椀日や内黒高坏H、132の須恵器系高坏Gで構成されるなど、非ロクロ成形土師器食膳具からロクロ成形品へ移行する過渡の様相を示している。煮炊具は在来型技法による短胴小釜や長胴釜が主だが、カキ目調整をもつ朝鮮系短胴小釜136も確認され、破片だが胴部叩き成形をもつ長胴釜も複数個体確認されている。在来型煮炊具に朝鮮系煮炊具が定量加わってくる段階の資料であり、近江系長胴釜と言える受け口状口縁部をもつ137が確認されることも、当期の特徴と言えよう。なお、140の浅鍋は上半カキ目調整の完形に近い資料で、この時期のロクロ成形浅鍋としては良好な資料と言える。ロクロ成形台上で大きな平底の粗形を成形してから、底部を丸底化するために内面から指ナソリで押し出し成形したものである。押し出し後、体部下半にケズリ調整を施すが、底面には施されておらず、それは底部が薄く延びてしまったために、ケズリ調整できなかったことによるものだろう。

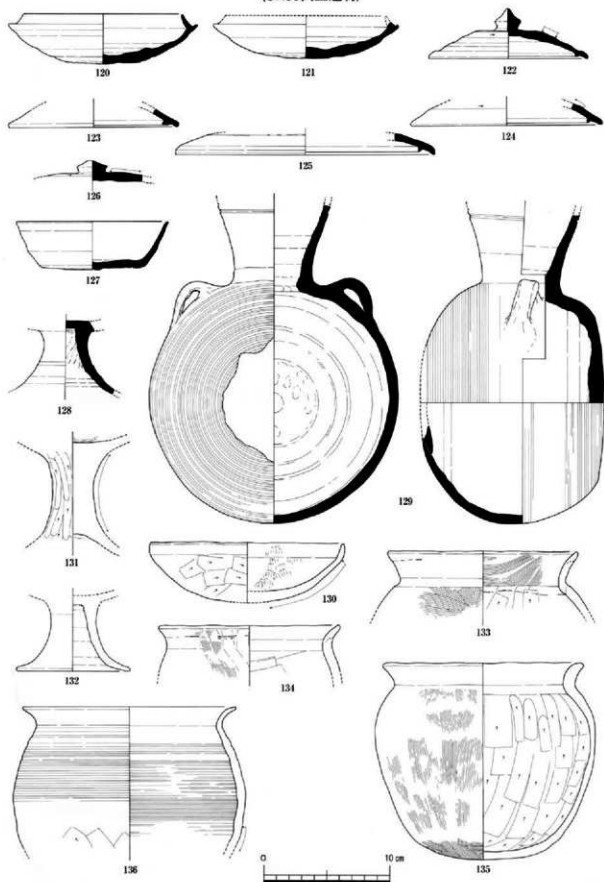
9. SK92 出土遺物

当土坑からも複数時期の土器が混在して出土するが、主体となるのは図示した古代Ⅱ2古期に位置づけられる資料である。良好な資料群とは言えないが、須恵器食膳具の各器形や土師器赤彩輪Aの器形、長胴釜器形など、当期の特徴を示している。全て南加賀窯産の須恵器、土師器で構成される。

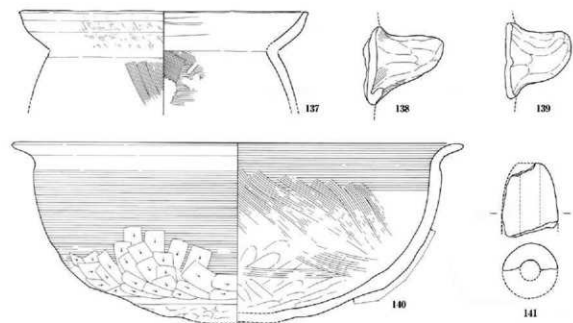
10. SK109 出土遺物

遺物出土量は少ないが、当遺跡では数少ない古代Ⅱ2～Ⅲ1期のまとまりをもった資料である。食膳具は須恵器が大半を占め、環B、環A、環E、盤A、盤Bで構成される。土師器食膳具は両面赤彩輪Aが少量存在する程

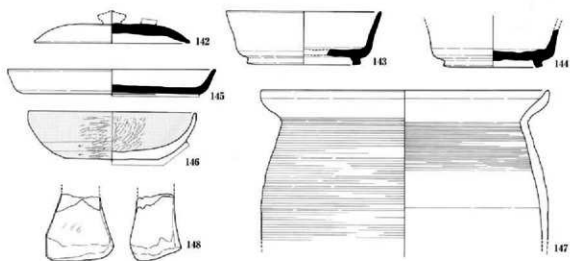
(SK89出土遺物)



第150図 土坑出土遺物7 (SK89-1、全てS=1/3)



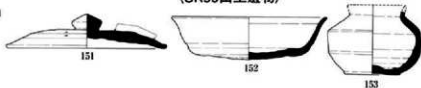
〈SK92出土遺物〉



〈SK97出土遺物〉



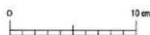
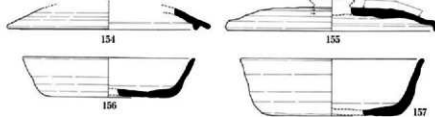
〈SK99出土遺物〉



〈SK98出土遺物〉



〈SK101出土遺物〉

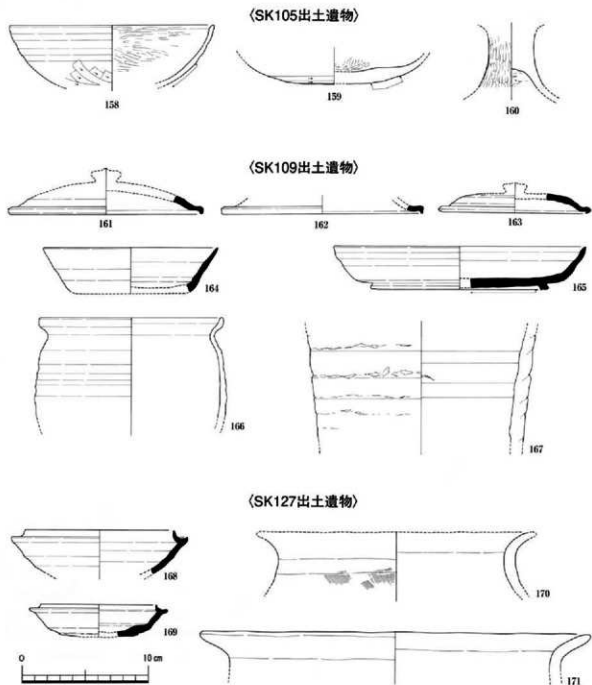


第151図 土坑出土遺物8 (SK89-2、SK92、SK97、SK98、SK99、SK101、全てS=1/3)

度で、南加賀室ではⅥ1期に生産が開始される外面赤彩内面黒色の椀皿類は含まれていない。なお、167の粘土粒積み痕跡を残す円筒形の土製品は、南加賀室産胎土のもので、極めて厚手に作られたものである。

11. SK127 出土遺物

遺物出土量は少ないが、古代Ⅰ1期新段階からⅠ2期に位置づけられる資料が出土している。須恵器環H身と土師器長胴釜、浅鍋が図示できており、須恵器環Hには口径9.1cmに矮小化した能美窯製品が確認される。Ⅰ2期に位置づけられる資料であり、最小径の環Gが伴う段階と理解される。これに伴う南加賀室南群産環H身は、口径11.8cmを測るもので、口径の縮小化と立ち上がり低下の様相を看取できるが、南加賀室ではⅠ1期新段階に位置づけられる。これらを2時期に渡る資料と見ることが可能だが、型式変化の早い能美窯に対し、型式変化の遅い南加賀室という、生産地の様相差とも理解可能であり、この点が当期の須恵器編年を考える上で重要な編年指標となる。



第152図 土坑出土遺物9 (SK105、SK109、SK127、全てS=1/3)

第4項 土師器焼成坑出土遺物

第II章の手工業生産遺構で説明したように、今回報告地区からはSK43、SK44、SK49、SK52の4基の土師器焼成坑が検出されており、土師器焼成に伴って廃棄された土師器片や土師質土製品がその土坑内から出土している。混在した須恵器も土坑内から出土するが、土師器焼成坑の時期に位置づけられる須恵器はなく、全て混入物と捉えられたため、ここでは出土遺物から除外して提示した。

1. SK43 出土遺物

当土坑からは、当焼成坑で焼成廃棄された土師器片106点が出土している。短胴小釜底破片2点と長胴釜胴部破片1点以外は、全て食膳具破片で、うち内面黒色焼成されたものが9点存在する。器種は内黒品が全て椀B、通常土師器は椀Aと椀Bがあり、椀Bには定量の足高台品がある。内黒椀B(11・12)は内面ミガキ調整を施すもので、外面は赤彩せず、ロクロ調整で、体部下位にケズリ調整を施す。高台は比較的しっかりとした角高台で、底面に糸切り痕を残す。通常土師器は椀Aが主体で、底面糸切りをそのまま残す作りの確かな薄手のものである。1のような口径11cm台のものもあるが、主体は2～4の口径12～12.5cmのものであり、底径は5cm前後を測る。椀Bは7のような口縁部外反器形を呈すやや大型のもので、これは8・9のような足高台が付されるものと理解する。当焼成坑内に遺存する遺物が少なく、比較する題材に欠くが、主要器種が通常土師器椀Aであることと、古代的な内黒椀生産や北陸型煮炊具生産が少量ながら存続していることから、窯場での土師器生産が概ね終焉時期を迎える古代Ⅷ1期に対比でき、後述するSK44と同時期に位置づけられる資料と判断される。

2. SK44 出土遺物

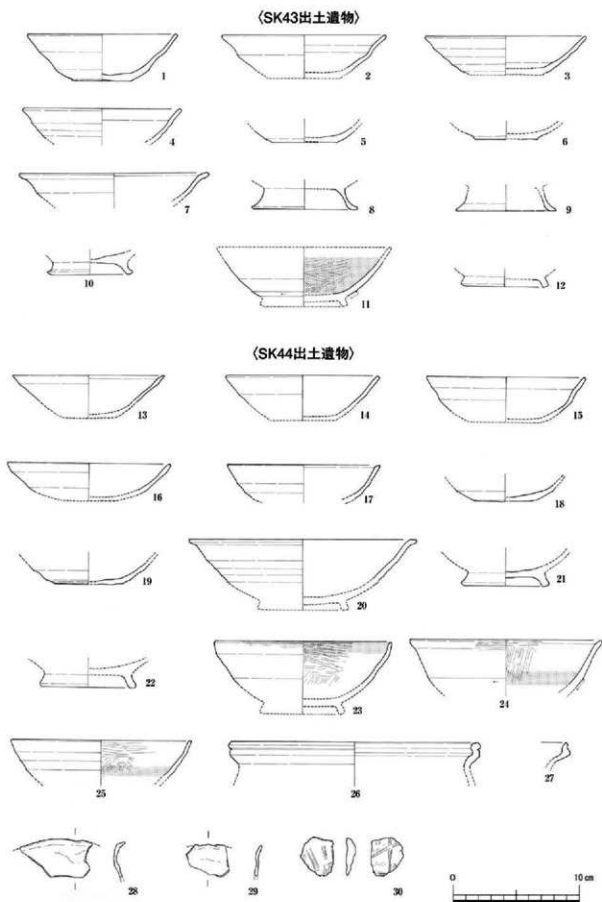
当土坑からは、当焼成坑で焼成廃棄された土師器片182点が出土している。北陸型煮炊具の特徴を残す長胴釜破片2点と浅鍋破片1点、そして生産に関連する焼成粘土塊1点が出土する以外は、全て食膳具破片で、うち内黒焼成されたものが11点存在する。器種は内黒品が全て椀B、通常土師器は椀Aと椀Bがあり、SK43と同様の器種組成を示す。内黒椀B(23・25)は口縁部椀形を呈す薄手のもので、内面ミガキ調整を施し、外面はロクロ調整で仕上げられる。外面赤彩は認められないが、外面を赤く発色させる焼き方を意識的に行った感があり、外面赤彩を意図した製品と位置づけられる。なお、24の内黒椀は南加賀窯産胎土のもので、内外面が灰色を呈し、内面黒色のとんだ状態のものである。時期的にもⅧ3期に位置づけられる可能性があり、窯場産土師器片を当焼成坑の焼成道具として再利用した可能性がある。通常土師器はSK43同様、椀A主体で、底面糸切りをそのまま残す薄手で雑な作りを呈す。口径は12～12.5cm程度にほぼまとまる比較的口径の小さなもので、底径は5cm前後を測る。椀Bの通常法量は不明だが、20のような口縁部外反器形で、口径18cm程度の大型のものが確認される。これに関しても、高台は高く踏ん張る形態と予想され、全体的にSK43に組成、器形特徴が共通する。

SK43と当土坑資料を同時期と位置づけ、幅年の位置づけをすれば、南加賀窯の古代Ⅷ1期古相資料とした二ツ梨一貫山窯F地区8号土坑に類似する内容を持つ(小松市教育委員会「二ツ梨一貫山窯跡」2003年)。ただ、椀Aの法量は確実に当焼成坑資料のほうが小型化しており、内黒椀を外面赤彩しない点からも、二ツ梨一貫山窯8号土坑に後続する時期、Ⅷ1期でも新相段階に位置づけられる資料と言えよう。類似した様相を呈す資料としては、加賀市耳間山遺跡PO-1資料が上げられる(加賀市教育委員会「耳間山遺跡」1994年)。当資料では、口径12cm台の小型を呈す椀Aの一群があり、内黒椀の衰退や足高台をもつ大型椀Bの存在など、当焼成坑に対比可能な様相をもつと理解される。

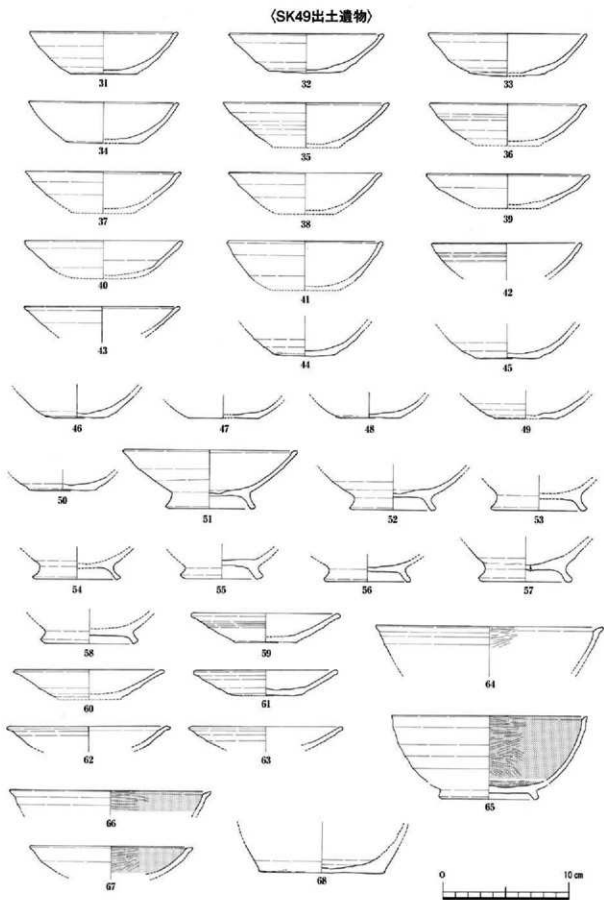
3. SK49 出土遺物

当土師器焼成坑は2基の焼成坑が重複するが、両焼成坑で出土する土師器に時期差は認め難く、出土遺物のほとんどが後に掘削されたSK49Ⅱ内埋土や当焼成坑からの廃棄土内に含まれているものであったため、ここでは2基の土師器焼成坑遺物を一括して掲載した。当焼成坑で焼成廃棄された土師器片は416点と多く、大半が土師器食膳具器種だが、他に北陸型煮炊具の特徴を残す長胴釜破片1点や短胴小釜破片2点、浅鍋破片5点、管状土鉢1点、そして土師器生産関連の窯道具と予想される匣鉢形土製品9点、焼成粘土塊1点なども出土している。土師器食膳具では、内面黒色焼成されたものが29点存在し、器種は大半が椀Bだが、一部Ⅲと思われる器種が確認される。通常土師器においても、ⅢAは存在し、数は少ないが定量を占める。主体となる器種は椀Aで、これに椀Bが定量加わる。

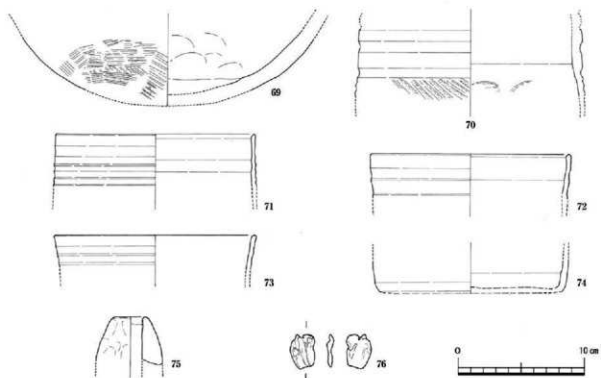
内黒椀B(64～66)は口縁部内面に稜をもち、体部椀形を呈す深椀椀形のもので、高台は断面方形のしか



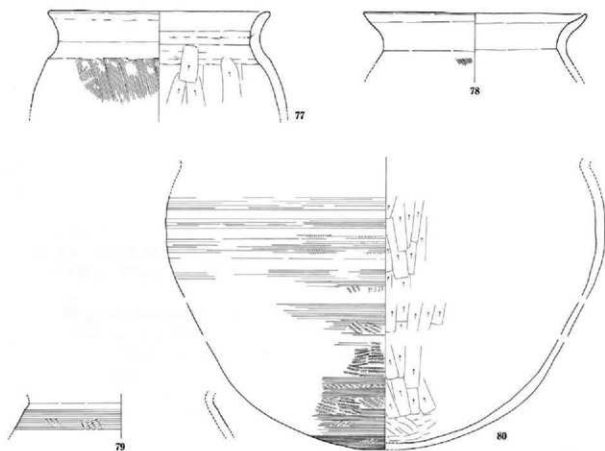
第153図 土師器焼成坑出土遺物1 (SK43、SK44、全てS=1/3)



第 154 図 土師器焼成坑出土遺物 2 (SK49-1、全て S = 1 / 3)



〈SK52出土遺物〉



第155図 土師器焼成坑出土遺物3 (SK49-2、SK52、全てS=1/3)

りした形態をもち、底面に糸切り痕を残すものである。なお、67は内黒皿と考えられる器種で、底部は不明だが、作りは内黒碗Bに類似する。いずれも、内面はミガキ調整を施す丁寧な作りで、外面はロクロ調整で仕上げる。内黒焼成の外面への炭化部分の濡れの状態から、合せ口焼成で焼かれていることが観察でき、外面を赤く発色させる、外面赤彩を意識した焼成方法など、古代Ⅵ期に南加賀窯で確立した内面黒色焼成（合せ口による内黒土師器焼成は南加賀窯や能美窯特有の技法である。望月精司1997「古代末期における土師器生産形態の変質」『北陸古代土器研究』第7号、北陸古代土器研究会）を継承する製品と位置づけられる。この内黒焼成に関連して、当焼成坑からは匣鉢形土製品が複数個体出土している。南加賀窯で内黒皿類生産が始まると同時に出現してくる土製品で、椀皿類を内黒に焼成する際に、発炭材から発生する炭素の濡れを防止するために、合せ口がずれないように入れ子にした容器と理解している（望月精司2005「古代土師器焼成坑出土の焼成粘土塊と土師器焼成技術」『窯跡研究』創刊号、窯跡研究会）。匣鉢のように製品を入れて焼成した窯道具であり、当土製品の存在は、当遺跡での土師器生産が南加賀窯の古代土師器生産技術を継承していたことを物語る。匣鉢形土製品は、底部ヘラ切り技法による円筒形を呈すもので、内口径は15cm前後を測る。この口径は、当焼成坑から出土する内黒碗Bの口径とは合わないが、南加賀窯で出土する匣鉢形土製品の主体となる内口径はⅥ期から概ね15cmと変化がなく、図示した匣鉢形土製品については、もう少し小ぶりの椀を焼成するためのものであったのだろう。南加賀窯の匣鉢形土製品には大型品用の内口径16cm前後や18cm前後のものも存在している（望月精司1993「匣鉢状窯道具」『二ツ梨豆岡山古窯跡』小松市教育委員会）。

通常土師器は碗A主体で構成される。底面糸切り痕をそのまま残す薄手で雑な作りを呈しており、口径は11.5～12.5cmと、SK43・SK44よりもやや小型化する。器高もやや低下し、そのふん底径が若干大きくなる。碗Bは大型法量のものもよくわからないが、通常法量は13.5cm程度で、高台が高く踏ん張る形態を持つ。当法量について、大型碗とは言えないが、高台が足高状を呈することは、SK43・SK44で存在した碗B大型法量形態を継承する器種の可能性もある。皿Aについては口径11cm台と、碗Aよりも小型法量を呈する低平な器種で、碗Aと同じような底径をもつ。ただ、碗Aが口縁部内湾気味であるのに対し、皿Aは口縁部が反外気味となる器種で、外面ロクロヒダの顕著なものが多い。器形や法量から見て、古代Ⅵ期に出現する皿Bを継承する器種であり、この時期に出現してくる小皿とは別系統の器種であると理解する。その他の器種としては、Ⅵ期以来の古代的な技法による北陸型煮炊具が各器種生産されており、底部叩き出しに伴う内面当て具は木製無文当て具が使われている。また、管状土鍾なども生産されており、古代に通常見られる土師器器種の生産が行われていると言える。

以上の土師器様相を、SK43・44と比較すると、碗Aの小型化と深輪型の内黒碗Bの存在など（明瞭な深輪型内黒碗Bは出越Ⅲ期からとされるが、その走りとなる深輪形化は出越Ⅱ2新期、つまり古代Ⅴ2古期併行期にあると見る。出越茂和1997「北陸古代後半における椀皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号）、SK43・44に後続する時期の資料、古代Ⅴ2古期に位置づけ可能と判断される。SK43・44に皿Aはなく、Ⅵ期と断絶感もあるが、この時期は本来、消滅傾向にある器種であり、当焼成坑での定量化は偶発的なものであったと理解されよう。SK43・44においても少ないながらも、Ⅵ期から継続的に生産されていたと見るべきである。従来、古代Ⅴ2期の土師器様相は、古代Ⅴ1期から中世的な土師器生産へ大きく転換していく時期と把握されてきたが、当土師器様相を見る限り、内黒碗焼成や窯道具使用、皿Aや北陸型煮炊具の継続的な生産など、南加賀窯での古代土師器生産を強く継承するものと言える。ただ、北加賀地域では確認できない土師器様相であることは確かである（出越前掲論文）、南加賀地域特有の土師器様相ないしは南加賀窯関連遺跡ならではの様相と言えるものだろう。

4. SK52 出土遺物

SK52から出土する土師器は極めて少なく、その中でも当焼成坑において焼成破損廃棄された土師器となると、10個体にも満たない。78の外面ハケ目調整を施す在来型長胴釜、79の外面叩き成形後のカキ目調整を施す朝鮮系長胴釜、80の外面叩き成形後のカキ目調整を施す朝鮮系深鍋など、いずれも土師器煮炊具であり、食膳具器種の焼成は確認できない。いずれも、焼成に伴う焼け弾け痕跡をもつもので、77の在来型技法による長胴釜は当土坑への混在品と見られるが、これも含めて、全体的には古代Ⅱ1期からⅡ2期頃に位置づけられるものと考えられる。胎土は全て地元B類であり、当胎土が当遺跡内ないしはその近隣地で生産された土師器であることを物語る。なお、焼成する煮炊具のうち、半数が朝鮮系技法による煮炊具であったが、ハケ目調整やケズリ調整などの在来型技法を併用するものがあり、地元の土師器製作者との技術的融合の産物と評価されるだろう。

第5項 土器溜まり出土遺物

古代に位置づけられる土器溜まり遺構と中世(11世紀後半代前後)に位置づけられる土器溜まり遺構とがあり、以下に項目を分けて述べることにする。

1. 古代の土器溜まり遺構出土遺物

今回の報告区域では、6箇所の古代土器溜まり遺構が確認されるが、遺物を図示できたのは、お38Gr土器溜まり、お35Gr土器溜まり、し36Gr土器溜まりの3箇所のみである。

《お38Gr土器溜まり》 出土遺物は土師器煮炊具が主体を占めるが、大半が破片出土であり、図示したものは須恵器のみである。1・2・4・5の古代Ⅱ1～Ⅱ2期に位置づけられる一群と3・8の古代Ⅴ期に位置づけられる一群とに分けられ、複数時期において土器廃棄が行われたことを示す。須恵器は残りのよいものも多く、8の双耳瓶は口頸部を欠いて埋納した完形品である。7の壺A底部片は胴部以上を欠損するため、時期判断できないが、内底面に顕著な磨耗痕を残す底部完形品である。壺器種の底部内面が顕著に磨耗していることと胴部下端できれいに割り揃えられていることから、墨痕の確認はないが、転用視と判断した。

《お35Gr土器溜まり》 広範囲に及ぶ土器溜まりだが、図示した土器は時的にまとまりがあり、単一時期の土器廃棄資料と位置づけられる。須恵器食膳具の完形や半完形がまとまって出土しており、9～17の坏蓋・坏身器形から、古代Ⅱ2期新相段階からⅡ3期に位置づけられるものと理解される。16の坏B身以外は貯蔵具も含め全て南加賀北群産であり、坏蓋内面に磨耗痕の見られるものが目立つ。注目される器種としては19の須恵器瓶がある。胎土は須恵器と同様のもので、三角形板状把手が付されるタイプである。胴部沈線を施す点などA地区SI23出土の須恵器瓶に類似しており、同様の器形を呈すものと理解される。なお、同様の器形を有す土師器瓶がA地区SI12でも出土している。これについては、朝鮮系煮炊具と位置づけられているものである。

《し36Gr土器溜まり》 遺物出土量はありますが、出土土器に時期のまとまりがなく、図示した須恵器は古代Ⅲ3期からⅤ期にかけて位置づけられるものである。このような共存資料の状態のため、時期の帰属は困難だが、27の転用視は注目される資料である。中壺サイズの硬質焼成された須恵器壺底部付近の破片を楕円形に割り揃えて作ったもので、平面形を整えるように縁部を細かく調整している。長さ12.8cm、幅10.7cmを測り、視面として使用される凹面には顕著な磨耗痕を残す。凸面の接地面付近にも擦れたような磨耗痕が見られ、縁部の割り揃えた面においても一部磨耗が確認される。明瞭な墨痕は認められないが、比較的長期において使用された転用視と考えられよう。外面の11b部明りきと内面のDb部相当部から、古代Ⅱ中期の須恵器である可能性が高く、胎土は能美産と推察される。額見町遺跡において須恵器片を使用した転用視は複数存在するものの、当製品については形状や整形の丁寧さなど他とは明瞭に区別できる秀品と言えらるもので、俗に「猿面視」と呼ばれる転用視と評価できる。定形視に近い位置づけがなされるような転用視であったと考えられよう。

2. 中世の土器溜まり遺構出土遺物

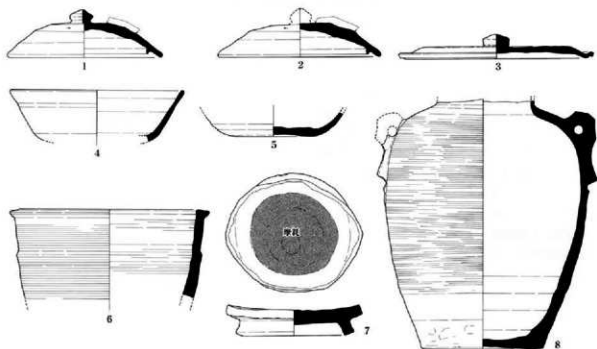
土師器食膳具を中心とした大量土器廃棄遺構が、お35Grを中心とした区域に確認できており、ここから出土する中世に位置づけられる遺物を上層土器溜まり遺構出土遺物として報告する。上層土器溜まり遺構は、お35Gr、お34Gr、お33Gr、し35Grの4つのグリッドにまたがって存在しているが、特に同時期に位置づけられる中国産白磁と東濃産灰軸陶器については、他のグリッド出土のものについても、ここで取り上げることとする。

a. 土師器食膳具の概要

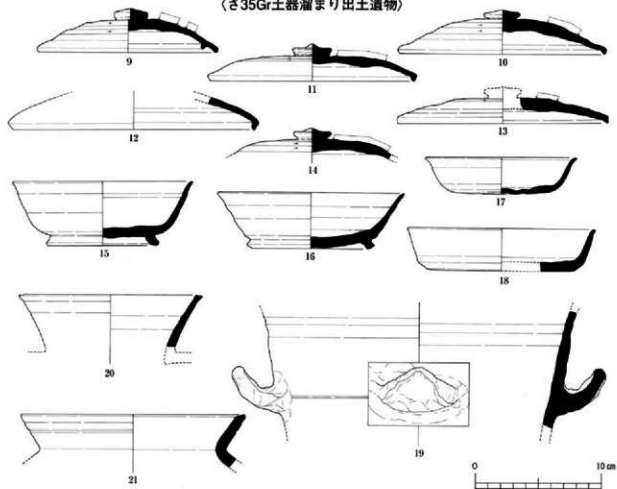
上層土器溜まりから出土する土師器食膳具は975点の破片数を数える。他のグリッドや古代遺構などの上層に混在するものも含めると2,048点あり、そのうちの396点、つまり2割が内黒焼成品である。上層土器溜まり資料に限っては15%が内黒で、他は通常焼成の土師器である。通常土師器には赤色酸化鉄粒を練り込んだ赤色土や白色粘土を使用した白色品、通常土師器色のものがある。黒、赤、白といった色彩を意識したものであり、黒は漆器や瓦器を、赤と白は紅白觀念を土器に投影したものと理解される。

全ての食膳具器種は、底部回転軸切り離しのロクロ成形品だが、ロクロの情力は弱く、口縁部は歪み、全体的に作りが粗雑なものである。器種は椀と小皿に大別され、底部形態からそれぞれ平底、厚底、柱状高台、輪高台に分類される。平底と厚底、厚底と柱状高台の識別については、当初底部厚で分けていたが、形態的に高台状に底部突出するものとそうでないものとの識別根拠から、底部が厚くても台状ではないものについては全て平底とし、厚底は分類から除外した。

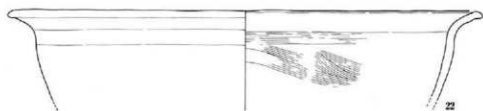
〈お38Gr土器溜まり出土遺物〉



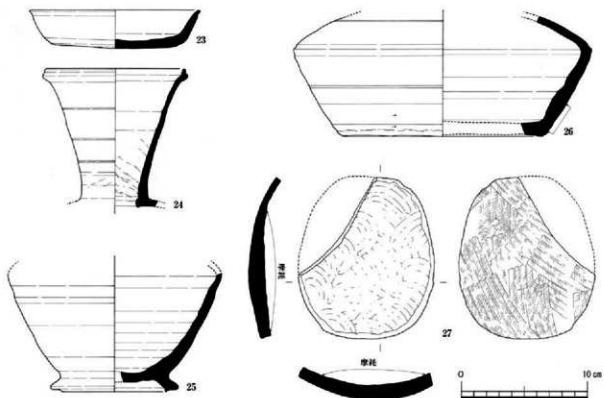
〈さ35Gr土器溜まり出土遺物〉



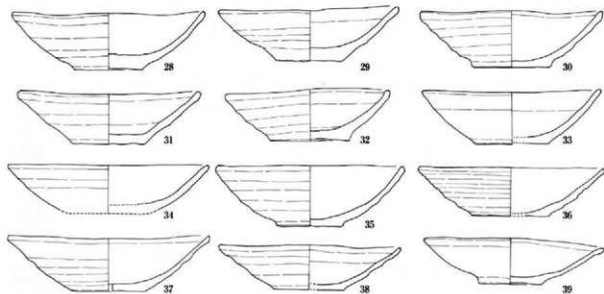
第156図 土器溜まり出土遺物1 (お38Gr土器溜まり、さ35Gr土器溜まり-1、全てS=1/3)



〈し36Gr土器溜まり出土遺物〉



〈上層土器溜まり出土遺物〉



第157図 土器溜まり出土遺物2 (さ35Gr土器溜まり-2、し36Gr土器溜まり、上層土器溜まり-1、全てS=1/3)

器種構成は、通常土師器が平底碗 44%、柱状高台碗 4.2%、輪高台碗 1.4%、平底小皿 31.1%、柱状高台小皿 6.7%で、内黒土師器が平底碗 4.4%、柱状高台碗 2%、輪高台碗 4.2%、柱状高台小皿 2%で構成される。この数値は、底部識別個体点数での割合表示のため、どうしても破片数が多くなる器種が高くなるが、実測点数に示すように、小皿と碗とはその割合が逆転するのが実態であろう。

土師器胎土について、観察表での胎土表示はH-Oで表示してあるが、Hは平安末期胎土という意味で、ここではアルファベット部分の分類のみ表記する。胎土は5類に分けられ、A類とB類は地元産胎土と考えている。両者とも細砂粒を多量含有する破面のガサツク粘土質胎土で、古代の地元A類胎土に類似する胎土と言える。光る鉱物を少量含有し、濁った淡褐色系呈土A類と、光る鉱物を多く含有し、赤色酸化鉄粒を混在させて赤く発色させるB類とに分けられる。これ以外はもともと地元でない胎土であるが、その中ではD類胎土が最も多く、地元圏内での生産を予測させるものである。細砂粒を少量混在するも、全体的に粉っぽい胎土で、白色系統の粘土素地をもつ点は、能美地域に産地を持つ可能性がある古代地元B類胎土に近い。なお、この胎土は白色粘土そのものの発色を呈すD1類と鉄分含む、ぶい橙色か酸化鉄粒練り込む発色を呈すD2類に細分される。

以上の胎土に対し、C類とE類は出土量が少なく、搬入品の様相を持つ。C類胎土は緻密で粉っぽい胎土特性をもち、海抜骨針を含む。古代土師器搬入A1類としたものに類似しており、松任地域や金沢地域に多く見られる胎土と言える。酸化鉄粒を練り込んだ橙色を呈すC1類が主体的だが、胎土素地のまの白色を呈すC2類も少量存在する。E類胎土は極めて微粒の砂粒を素地を含むシルト質の胎土特性をもつもので、石英質の鉱物を多量に含有するなど、古代地元D類としたものに類似している。古代においても胎土は多く確認されているものではないため、搬入品の位置づけをすべきものだろう。C類が北加賀地域の海側胎土とすれば、D類は末産胎土に類似している点など山側胎土と位置づけられるものかもしれない。

b. 土師器食膳具の器種別類型概要

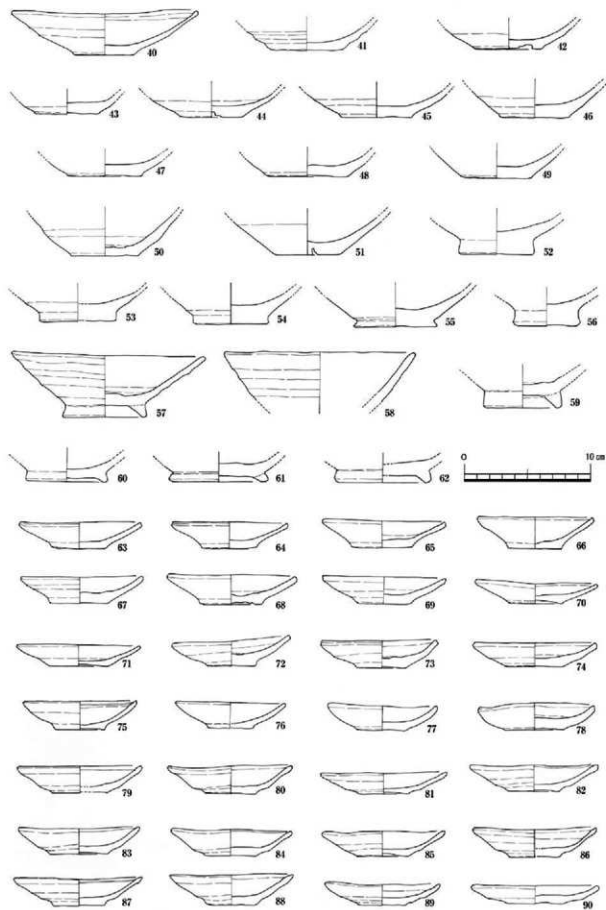
《通常土師器食膳具》

平底碗 全体的な器形から、体部碗形で底部が厚く突出するa類と、体部碗形で大きな底径をもつb類、体部大きく開く器形で薄手のc類に分けられる。a類はA類胎土、b類とc類はD類胎土(D2類主)で、B類胎土は底部破片のみの図のため、器形分類していないが、底径小さく、体部立ち上がりのやや立つ器形のものである。底部が厚いものであり、器形的にa類に近い可能性を持つ。全体としてはD類胎土が主体的だが、A類とB類は同系胎土であり、合わせれば拮抗した占有率であった可能性もある。a類(28・29)は内底面にロクロ調整時の螺旋状痕をもち、外面にロクロヒダ状を残すもので、b類は、体部が開き気味で外面ロクロヒダを顕著に残すb1類(30・31)と、口径が小さく、内面に螺旋状痕をもつb2類(32)、b2類に近いが内面仕上げが平滑で、やや薄手に作られるb3類(33)の3つに細分される。c類も、やや厚手で体部は内湾気味となり、口縁部上端揃み上げて体部外面にロクロヒダを顕著に残すc1類(34・35)と、口縁部形態と体部外面ロクロヒダはc1類同様だが、底部薄手で大きめの底径を呈すc2類(36・37・38)、小型底部で体部碗形を呈し全体的に火色発色をもつc3類(39・40)とに細分される。主体はD類胎土のb・c類で、複数の作り手が存在していることを示唆する。法量は口径13～16cmに分布するが、口径13cmの32を小法量、16cm弱の37を特大法量として分けることができ、主体の14～15cmが一般的な法量と位置づけることができよう。

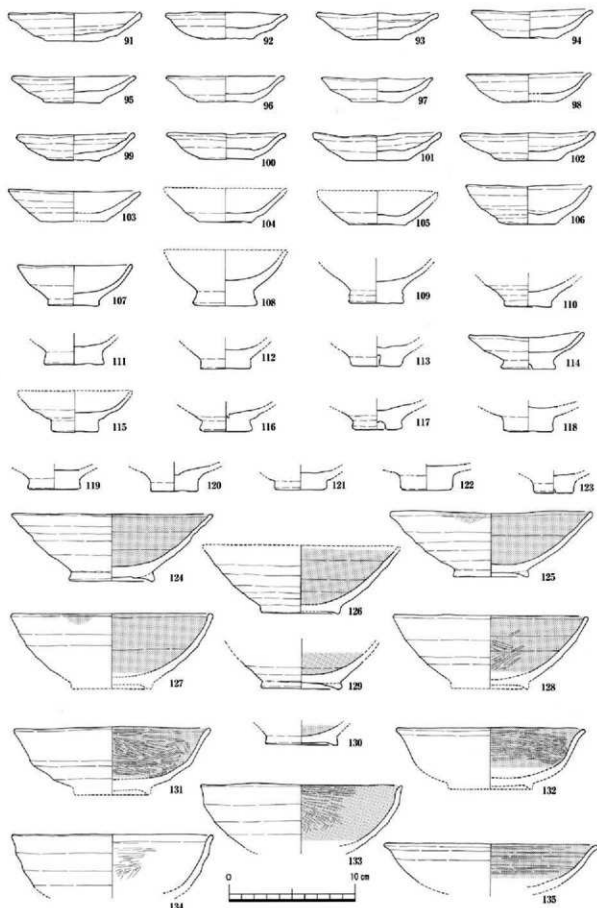
柱状高台碗 口縁部まで遺存する資料はなく、体部下半以下の資料のみである。明瞭に柱状を呈すものは52と56のみで、他は底部が若干突出する程度のものである。胎土は地元産と言えるA類、B類、D類で、平底碗と同様である。

輪高台碗 当器種についても遺存良好資料は少なく、分類まではいかないが、胎土によって概ね器形に特徴がある。A類胎土は58と61で、体部が厚手で固く直線的に立ち上がり、隅丸方形高台が短く踏ん張って付く。62のB類胎土も同様の高台器形をしており、これからも同系地元産であることが窺い知れる。D類胎土の60も、類似した高台形態であるが、台径が小さく、比較的薄手を呈す特徴を持つ。これに対し、北加賀系のC類胎土は体部が薄く直線的に開く器形で(57・59)、外面に顕著なロクロヒダをもち、内底面に螺旋状痕跡を残すものである。高台は径が小さく足高気味となるもので、断面三角形を呈す特徴を持つ。

平底小皿 全体的な器形から、体部が直線的に開き口縁部上端を若干揃み上げて面を作るa類と、体部下位碗形に立ち上がり口縁部で丸くおさまるb類、体部下位碗形後開いて立ち上がる体部薄手作りのc類、体部立ち気



第158図 土器溜まり出土遺物3(上層土器溜まり-2、全てS=1/3)



第159図 土器瀧まり出土遺物4（上層土器瀧まり-3、全てS=1/3）

味に直線的に立ち上がる d 類、全体的に厚手で口縁端部内面が丸く厚手で口縁部を残り e 類の 5 類に分けられる。a 類と b 類は A 類胎土主に一部 B 類胎土、c 類と d 類は D 類胎土 (D2 類土)、e 類は C 類胎土と E 類胎土で、器形類型と胎土類型との整合性が認められる。胎土の主体は A 類胎土で、次いで D 類が占め、搬入品の位置づけの C 類胎土と E 類胎土は僅かしか確認できない。

各類型とも、さらに細分が可能で、a 類は体部薄手で口縁部上端をシャープに揃み上げる a1 類 (63~67) と、底径大きく底部も薄手に仕上げる a1' 類 (70~71)、器形は a1 類に近似するが体部厚手で口縁部端面形成する a2 類 (68・73・74)、底部厚く突出気味で口縁部端面形成する a3 類 (69・72)、口縁部端面形成も全体的に極めて厚手で雑な作りをする a4 類 (78) の 5 種に、b 類は底部厚いが体部は薄手となつて口縁部外反する b1 類 (92~98・100) と、底部突出気味で全体的に腕形に立ち上がる極めて薄手の作りをする b2 類 (75・76)、b2 類同様の器形だが厚手を呈する b2' 類 (77)、b2 類をひしゃげた形とした扁平器形の b3 類 (89・90) の 4 種に、c 類は底径が小さく突出気味で、体部外面にロクロヒダを残し、口縁部内面に沈線状の窪みを持つ c1 類 (80・82~84・86・87)、体部底部とも薄手でやや扁平気味となる c2 類 (81・85)、比較的厚手で口縁部内面に稜を形成して端部へ先細りとなる c3 類 (88)、口縁部肥厚してやや外反気味となる c4 類 (99)、口縁部外側に肥厚するタイプで扁平器形を呈す大型の c5 類 (91) の 5 種に、d 類 (103・104) は体部外面にロクロヒダを残す大型で厚手の d1 類 (103) とロクロヒダなく通常サイズの d2 類 (104・105) の 2 種に、e 類は全体的に扁平器形で大型呈す e1 類 (101・102) と、通常口径で口縁部内面に沈線状の窪みを持つ e2 類 (79) の 2 種に分けられる。以上のとおり、平底小皿については完存する資料が多かつたため、かなり細かく類型提示を行ったが、胎土との整合性など、類型は作り手のまとも作りを示している可能性がある。それは器種を越えての作風の共通性 (平底小皿 c 類と平底碗 c 類での、体部薄手作りやロクロヒダ、発色などでの共通性) からも裏付けられるが、ただ、確認できたのは一部の類型に過ぎない。

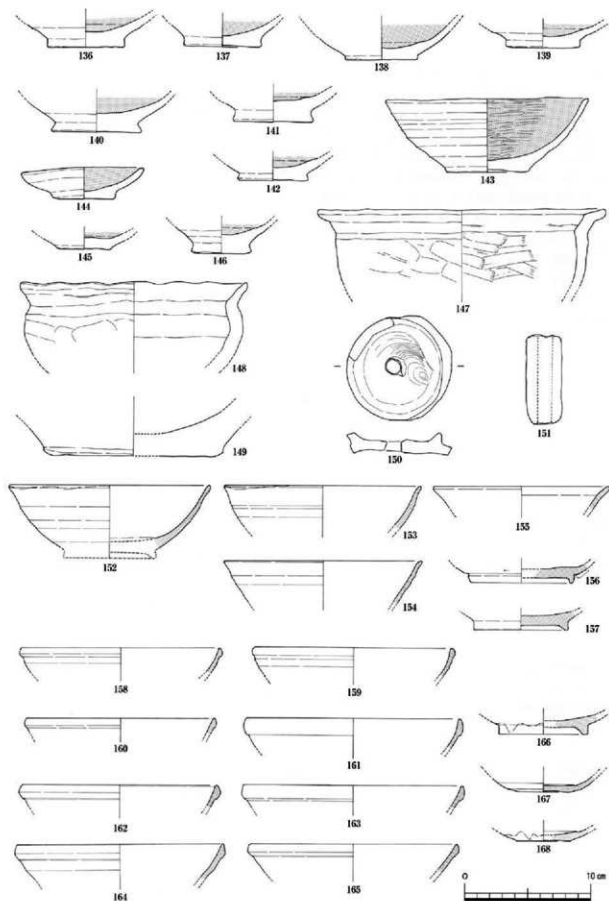
柱状小皿 全形のわかる資料が少なく、器形分類までいかないが、体部器形において深い腕形を呈すもの (106~113) と浅い腕形を呈すもの (114~116)、体部が闊いて皿形を呈すもの (117~123) とがある。台は高いものから低いものまで様々であり、上記器形との関連性は希薄である。胎土は A 類、B 類、C 類、D 類、E 類があり、A 類が主体的で、特に深い腕形を呈すものは A 類か B 類や D 類の地元胎土に限られる。搬入品の C 類や E 類の胎土は全て体部皿形を呈すもので、A 類・D 類胎土に体部皿形を呈すものも一定量見られるが、当器形の過半数は搬入品系胎土が占める。

当器種の底部には粘土の練り込み不足による隙間状の空洞が確認されるものが多い。これは底部円盤を円柱で作ったための痕跡で、所謂底部円柱造りと言われる成形技法によるものか、底部円盤を同じ底径で量産するために粘土円柱を作って適当な厚さに輪切りにして底部円盤を作ったものであろう。粘土円柱を作る際に粘土練り込みが弱く、粘土の隙間が生じたまま上記の工程を行ったために、113・114・117・123 のように外底面に陥没痕が出たものだろう。116・120 については内底面に陥没痕を残すが、これについても同様の理解が可能と判断される。なお、このような痕跡は 44 や 51 のような底部厚作りする碗にも確認できており、同様の技法によって底部円盤作りを行っていたことを示唆するといえよう。図示していないが、柱状高台の底部破片の内底面に反転した糸切り痕を残すものが複数確認でき、この点からも底部円盤製作に円柱作り技法が採用されたことを物語る。

〈内黒土器器食諸具〉

通常土師器に比べて作りの丁寧なものが多く、口縁部のゆがみが少ないなど古代的な土師器成形に近い。通常土師器よりも優品扱いされた器種であり、古代的な技法を継承する可能性はある。ただし、内黒焼成方法は古代の南加賀窯や当遺跡土師器焼成坑の合わせ口焼成とは異なり、地元胎土のものでも伏せ置き法による内黒焼成が行われたことを示す、外面口縁部の炭化の濡れが波状に認められる (望月精司「古代末期における土師器生産形態の変質」『北陸古代土器研究』第 7 号、北陸古代土器研究会 1997 年)。後述する底部技法など、古代の成形技法からは系統的に断絶するものと理解するのが妥当だろう。

内黒品は碗を主として構成されており、小皿類は柱状高台小皿 146 を 1 点図示できたのみである。体部腕形を呈すもので、A 類胎土、内面ミガキ調整は施されない。腕類は器種組成率では平底碗が定量存在することとなっているが、図示したとおり、全形のわかる資料はなく、底部破片にとどまる。前述の器種組成率で示した、底部破片計測において、底面黒塗のものもこれに含んだ可能性があり、その辺は差し引いて考える必要がある。



第160図 土器溜まり出土遺物5（上層土器溜まり-4、全てS=1/3）

このように、内黒品で主体を占める器種は輪高台碗と柱状高台碗であり、特に輪高台碗が目立つ。当器種においては通常土師器を凌ぐ量であり、それは当器種が何をモデルに、どのような目的で作られているかを強制的に物語るのであろう。

輪高台碗 胎土により器形や調整方法が明瞭に異なる器種で、土師器食膳具の中ではC類胎土の占める割合が最も高い。A類胎土は全て低平な貼付高台で、高台貼付の際に底面糸切り痕を全てナゲ消すものである。内面調整も成形時のロクロナゲのままとするものを基本とする。当タイプは、底径小さく、体部上半が直線的に開いて立ち上がり口縁部内面で肥厚するa1類(124～126)を基本とするが、体部が碗形に立ち上がるa2類(127・128)もあり、a2類については部分的に粗いミガキ調整が施されるもの(128)もある。A類胎土と同様に南加賀地域系地元胎土と言えるD類胎土も貼付高台によるものである(b類)。ただ、a類に比べて台径が大きく、高台も高めであり、底面のナゲ消しはなく糸切り痕を残す(129)。体部は碗形に立ち上がった後に口縁部で外反する器形を呈しており、横方向の回転使用したような粗いミガキ調整が施される(135)。間隔の疎らなミガキ調整で、底面付近には施されなかった可能性が高い。これに対してC類胎土は内面に丁寧なミガキ調整を全面に施すものである。底部欠損するもののみであるため、詳細は不明であるが、北加賀地域のものであれば、高台は貼付ではなく、底部縁辺を縮み出して作るタイプであった可能性が高い。体部器形は、体部下位で張りをもって立ち上がり口縁部で長めに外反するc1類(131・132)と碗形で深く、口縁部短く外反するc2類(133・134)がある。

柱状高台碗 前述の輪高台碗で定量を占めたC類胎土は確認できず、搬入系ではB類胎土(143)が確認されるのみである。底部が厚いだけで突出する器形のものではないが、内面には横方向の粗いミガキ調整が施される。体部器形など輪高台碗c2類に近似しており、同じ北加賀系と言えるものである。当器種において主体を占める胎土はA類(136～139)で、底部が円盤状に突出するものである。柱状を呈すほど厚いものではなく、厚底碗的な器形を呈す。内面ミガキは施されず、底面の糸切り痕は明瞭に残る。D類(140～142)も内面ミガキ調整の施されないもので、底部の突出する器形を呈す。体部境から底面へやや裾広がりとなる器形を呈しており、A類よりも底部はやや柱状を呈す。

c. その他の器種について

出土量の95%以上を土師器食膳具が占めており、他の器種は僅かの土師器煮炊具と管状土鍾や紡錘車等土師質土製品、そして国産施釉陶器と中国産白磁が数点出土する程度である。

(土師器煮炊具)

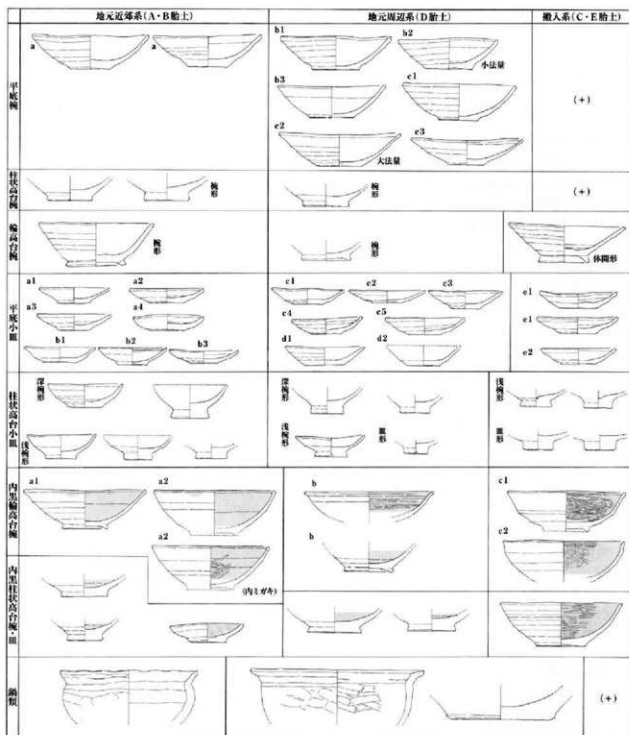
当遺構より出土した土師器煮炊具は、図示した3点の銅のみである。A類胎土の148とD類胎土の147・149で、149の底部破片は大型の平底器形を呈す。底面には糸切り痕があり、大型の浅鍋的な器種であったと思われる。147・148は口縁部外屈する小型浅鍋器形で、内外面ともロクロによる調整痕はなく、外面には指頭痕、内面にはヘラナア痕を残す。外面に煤が付着しており、煮炊きに使用された器種であることを物語る。浅鍋の器種ではあるが、器形や技法など古代煮炊具の系譜から完全に逸脱したものであり、当期の土師器生産が古代とは異なる、全く新たな技術系、土器様式の中で行われていたことを示す。

(土師質土製品)

通常土師器の輪高台碗の底部を転用した紡錘車と管状土鍾が各1点出土しているのみである。前者はB類胎土、後者はD類胎土で、管状土鍾151は中彫らみしない円筒状の大型のタイプである。転用紡錘車150は輪高台碗の底部を焼成前に切り揃えて、底部中央に1.2cm程度の円孔を穿つたもので、円孔周縁には使用による細かな欠けが認められる。

(陶磁器類)

包含層出土のものも一緒に図示しているが、上層土器溜まり出土のものは152の国産灰輪陶器碗と161・164～166の中国産白磁碗のみである。灰輪陶器碗は、胎土等から東濃産と推察されるもので、施釉が口縁部のみで掛け内面にのみ見られる点や体部から口縁部への器形、口径の大きさなどから考えて、灰輪陶器から山茶碗への過渡期にあたる、明和27号室式期の新相から西坂1号室式期の古相頃にかけてのものではないかと推察される(山内伸浩「結語」『白土原14号窯発掘調査報告書』多治見市教育委員会1994年)。白磁はいずれも破片であり、161・164・165の口縁部は幅広の玉縁状口縁形態を呈するものである。山本信夫氏の大家府白磁分類のIV1類に該当するものと予想され、166の底部破片の削り出し高台形態で軸に細かな貫入が入る特徴等から



第161図 上層土器溜まり遺構出土土器器型分類図(S=1/5)

見ても、山本福年で言う、C期に位置づけられるものと推察される。山本C期の暦年代観については11世紀後半から12世紀前半とされており(山本信夫「大宰府白磁分類と編年(基礎編)」『石川県立埋蔵文化財センター研修資料』1993年)、尾野善裕氏の近年提示した東濃産灰軸陶器編年観(尾野善裕「尾張・美濃の施軸陶器の研究と課題」『奈良文化財研究所平成13年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修(陶磁器調査課程)資料』)における明和27号壺式期～西坂1号壺式期の暦年代観である、1030年代を前後する時期から1060年頃という年代観等を考え合わせ、当陶磁器群を単一のものとして位置づければ、11世紀後半代とみるのが妥当と判断される。

他の包含層出土の陶磁器類も、東濃産灰軸陶器と中産白磁であり、当土器溜りから散逸したものと見てよいだろう。東濃産灰軸陶器は全て有台の碗であり、156の体部下位ケズリ調整で三日月状高台をもつものは、丸石

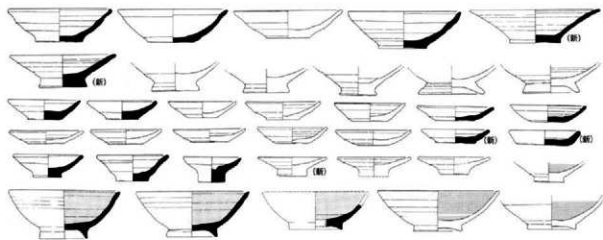
2号窯式に遡る可能性があるが、これ以外は、153～155の内面施軸のみの体部破片や157の内底面に施軸が認められない底面破片などから、西坂1号窯式期を中心として一部明和27号窯式期に遡る時期のものと考えられる。中国産白磁碗は、158～160の口縁部破片が幅狭の玉縁状口縁をもつタイプで、これには全て細かな貫入の入る陶器質の胎土をもつ。山本分類のⅡ1類に該当するが、162・163の幅広玉縁状口縁を呈する山本Ⅳ1類と同時期のC期に位置づけられるものであり、上層土器溜まりで出土する陶磁器類と同一時期の資料と見てよいだろう。なお、数量は少ないが、白磁碗の底面破片167・168も出土している。平底で内底面の見込み部に段をもつ特徴があり、山本分類のⅤ類とされる、C期に位置づけられるものである。

d. 上層土器溜まり出土土器器に関する編年的位置づけ

これまで述べた上層土器溜まり遺構出土土器器群について、共伴する東産灰胎陶器や中国産白磁の暦年代観より、11世紀後半頃に位置づけられるものであると考えられるが、再度土器器食膳具の様相について特徴をまとめ、南加賀地域での編年的な位置づけを試みてみたい。

まずは器種組成の特徴だが、定型化した平底小皿が食膳具の主体を占める段階にあることである。当資料の底面破片割合では、平底碗が平底小皿を凌ぐが、先述したように実態としては平底小皿と平底碗が同じ割合を占める状況であったろう。また、柱状高台をもつ碗・皿が一定量存在すること、輪高台碗の減少、そして内黒焼成器種が古代的技術とは切り離された形で出現し、1割以上を占めていることも特徴と言えよう。

このような組成特徴を有する南加賀地域の資料とえば、田尻シンペイダシ遺跡01大溝資料や松葉遺跡SD04中上層資料がある〔シンボジウム北陸の10・11世紀代の土器様相〕北陸古代土器研究会1997年〕。中国産白磁碗の共伴なども共通する要素であり、田嶋編年の中世Ⅰ～Ⅱ1期に位置づけられることとなる。しかしながら、各個別器種の器形や法量と比較すると、平底碗器形の違い（口径は同様の数値だが、器形についてはシンペイダシの方が底径大きく、深身で厚身を呈す特徴があり、体部の直線的に開く新型器形も出現している）、平底小皿での口径の違い（当資料は9～10cmに分布するが、シンペイダシは9cm前後に小型化しており、底径の大きな盤形の新型器形も出現している）など、シンペイダシよりも確実に古手の様相を持つ。

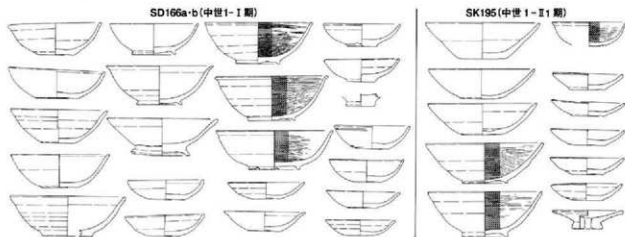


第162図 南加賀地域の中世Ⅰ～Ⅱ1期土器器(断面黒塗:田尻シンペイダシ資料、断面白抜:松葉資料、S=1/5)

南加賀資料ではシンペイダシ以前の資料となると、田嶋中世Ⅰ～Ⅱ1期の敷地天神山遺跡1号溝資料が該当する。当資料よりも平底小皿の口径が確実に大きく、器形が小皿出現期の様相を色濃く出すなど、土器器様相に大きな較差がある。南加賀で当期の良好な資料が欠落しているという点が問題であり、北加賀の資料で補えば、戸水ホコダ遺跡SK70資料や戸水大西遺跡SD166下層資料(a・b)が当期の資料としてあげられる。平底小皿主体組成や内黒焼成の増加、中国産白磁類の共伴など共通要素があるが、柱状高台器種は定着の段階にはなく、輪高台碗も当上層土器溜まり資料よりも依然として定量を占める様相にある。加えて、平底小皿の口径は口径10cm前後と若干大きく、平底碗においては口径13cm前後のひとまわり小ぶり碗形を呈するものが主体的である〔出越茂和「11世紀の土器群」『大友西遺跡Ⅱ(本文編)』金沢市埋蔵文化財センター2002年〕。以上総合すれば、当上層土器溜まり資料とは型式的に隔絶するものと評価でき、やはり、田嶋中世Ⅰ～Ⅱ1期に該当させることが

妥当と判断される（出越氏の古代後半土師器編年ではⅢ3期に該当。出越茂和「北陸古代後半における陶皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号1997年）。ただ、その中では最古段階の様相をもつ資料と位置づけられ、田尻シンペイデン資料はこれに後続する中世1～Ⅱ1期新段階資料と評価されよう。

なお、当上層土器溜まり資料からは、北加賀胎土をもつ平底小皿や輪高台碗、内黒輪高台碗が出土している。特に内黒輪高台碗c類は、口縁部で強く外反する特徴的な器形をしており、高台部が欠損するため、全形での比較はできないが、戸水大西遺跡SD166 a・b資料に類似する。中世1～Ⅱ1期に位置づけられる戸水大西遺跡SK195資料では口縁部外反しておらず、当器形は中世1～Ⅰ期の器形と評価されるものである（出越氏教示）。北加賀地域と南加賀地域の土師器様相には型式差とも捉えがちな様相差があり（北加賀の方が古い器形を残存させる傾向がある）、両地域の型式の併行関係は精査する必要性はあるが、当上層土器溜まり資料の北加賀産通常土師器の平底小皿や輪高台碗は、中世1～Ⅰ期に位置づけられる特徴を有しておらず、現段階ではやはり中世1～Ⅱ1期の中で考えるのが妥当だろう。ただ、田嶋氏が中世1～Ⅰ期の編年概要とした「Ⅴ期以降進行してきた法量規格が整備、完成される段階とできよう、それは小皿の形態の完成期ともいえる。……（中略）……小皿は一層規格化し、口径は9センチ代に縮小、……（中略）……碗Aでは12センチ前後の小皿との中間的なものが欠落、淘汰され、大型品からなり。小皿と法量区分は明確となる。……（中略）……形態では柱状高台が確実に出現し、碗Bで近畿地域の土師器ない瓦器に類似したものが顕在化する」（田嶋明人「加賀地域での10・11世紀土器編年と暦年代」『シンポジウム北陸の10・11世紀代の土器様相』北陸古代土器研究会1997年）の諸要素は、当上層土器溜まり資料に該当する部分もあり、南加賀地域資料による当期の編年指標を再検討する必要性を感じる。額見町遺跡ではH地区で当期の資料が出土しており、その辺の検討も含め、後の報告で再考したい。



第163図 北加賀地域の中世1～Ⅰ～Ⅱ1期の土師器（金沢市戸水大西遺跡資料、S=1/5）

《ピット出土土師器食器について》

以上、上層土器溜まり出土土師器食器について述べたが、ピット中からもほぼ同時期の土師器食器資料が出土している。平底小皿と内黒輪高台小皿、平底碗、管状土鍾があり、26・27・29の平底小皿は、口径9cm台程度、体部外傾器形を呈すことから、上層土器溜まりと併行期中の中世1～Ⅱ1期に位置づけられる。これに対し、30の平底小皿は口径10.5cmとひとまわり大きく、古相を呈するものである。器形的に小皿定型化段階のものとして位置づけられるが、その中でも初期の中世1～Ⅰ期に位置づけられるものとみえる。31の内黒輪高台小皿は同じピットから共伴して出土するもので、特殊な器種と言えるが、当期は柱状高台小皿の出現期でもあり、定型化以前の様相とも理解されよう。32の平底碗も口径や器形など中世1～Ⅰ期に位置づけられるものと考えられる。口径12cm台の体部がまっすぐ外傾する器形で、漆町フルミヤ3号井戸出土資料に類似する。33・34の管状土鍾は時期不明だが、中世的胎土、褐色特徴をもつもので、大型で太い形態を持つ点など、中世1期に位置づけられるものと見て大過ないだろう。このように、ピット出土のものに定量の中世1～Ⅰ期の土師器が確認されたことは重要である。包含層より出土する東濃産灰軸陶器に、丸石2号型式に遡る可能性がある、体部下位ケズリ調整で三日月状高台をもつ156が確認できており、この時期に伴う資料と判断される。

第6項 炉灶遺構、ピット及び包含層出土遺物

1. 炉灶遺構出土遺物

鍛冶炉などの手工業生産に関連するような遺構は除外して提示しているため、ここで炉灶遺構というのは煮炊きに伴う火処か、祭祀的な非日常的行為に基づく火処、または土器製塩などに伴う焼き塩するための火処も可能性としては想定される。ただ、通常の煮炊具の出土が多いことから見て、多くは日常の煮炊き行為に伴うものと理解される。出土量の比較的多い遺構は、SJ02とSJ13、SJ16で、いずれも煮炊き主体に図示してある。

SJ02は2～4の土師器長胴釜と浅鍋、5の製塩土器が出土する。煮炊具器形から古代Ⅱ2～Ⅴ1期に位置づけられ、製塩土器も同時期のものと考えられる。当製塩土器は底部丸底風となる小型鉢状器形を呈すもので、かなり薄手に作られている。

SJ13は10～14の5個体の土師器長胴釜と15の石製支脚が出土している。長胴釜は古代Ⅱ2期に位置づけられるもので、南加賀窯産胎土をもつ。いずれも胴部上位以上の破片であり、外面被熱による炭痕跡などは確認できない。ただ、石製支脚は強い被熱による赤色化が認められており、ここで煮炊きした容器類なのであろう。

SJ16は18～21の土師器短胴小釜、浅鍋、甌が出土している。いずれも南加賀窯産で、短胴小釜の平底形態や浅鍋の口縁部器形などから古代Ⅱ2期頃と判断される。甌とした19は口縁部へやや窄まり気味となるもので、口縁部下3cmにしっかりとした突帯が巡る。甌にしては大きな突帯であり、口縁部器形などは羽釜に類似する。

2. ピット及び包含層出土遺物

1つのピットからまとまって出土する遺物もないため、ここではピットと包含層出土のものをまとめて述べることにする。なお、ピットからは中世Ⅰ期の土師器食膳具が複数点出土するが、上層土器溜まり考察部分でまとめて述べているので、ここでは除外する。

a. 須恵器及び須恵質土製品

須恵器は古代Ⅰ1期からⅥ2期まで、長期間、各時期のものが出土している。最も古いものはピット出土の37で、立ち上りの長さや口径の大きさから古代Ⅰ1期古段階に位置づけられる。前回報告のA・D地区もそうであったが、今回報告地区でも古代Ⅰ1期を遡る時期のものは確認されておらず、当集落遺跡が古代Ⅰ1期に成立する集落であることを物語る。この時期に位置づけられる須恵器は堅穴建物でも決して多いとは言えないが、包含層からはⅠ1期に位置づけ可能な鉢(104)が出土する。体部中位で沈線が走り、口縁部へと内傾する器形のもので、体部下位には丁寧なケズリ調整を施すなど精製品として作られたものである。内面降灰の状態から有蓋器種と考えられ、古代Ⅰ1期の中でも新段階に位置づけられるだろう。胎土は南加賀窯南群産であり、那谷谷比羅山6号窯出土のものに似ている。類似する器形の鉢がもう1点出土している(105)。やや厚手でケズリ調整を施さない南加賀窯北群産のもので、無蓋器種の可能性がある。

他の須恵器器種で注目されるものは、122から125に上げた特殊な貯蔵具類である。

122は外面にHa類叩き、内面にDb類当て痕跡を残す厚手の大型鉢で、口縁部破片のため、詳細な器形は不明な部分を残すが、底部は丸底になる可能性が高い。中蹠成形途中に何らかの要因で成形を断念せざるを得なくなったものを、器種変更して大型鉢としたものと予想され、胴部中位で切り揃えて、ナダ調整で口縁部に仕上げたものだろう。口縁部上端まで叩き成形痕跡が残っており、それをナダ消しているのが観察される。

123は獣足装飾をした瓶類の脚部破片である。脚部は厚く踏ん張る形態で、6箇所切込みを入れて、爪の表現をしている。胴部は横軀のような個口瓶の形態であり、上部に口縁部、下底部に脚部、側面と後部に羽装飾を施す鳥形瓶と推察される。北陸では古代Ⅱ3期からⅢ期に出現し、Ⅴ期頃まで見られる特徴的な器種であり、南加賀から能登、越中、越後、そして会津、出羽にまで波及し、出羽では9世紀後半代まで当器種が残存する(吉田江美子「鳥形須恵器について」『山形考古』第7巻第4号 山形考古学会 2004年)。鶴見町遺跡ではA地区で後部破片と思われるものが出土しているが、これとは異なるタイプのものであるだろう。

124と125は甌と思われるものである。124は三角形把手をもち、把手部分に太い突帯が巡る。突帯付き甌と推察される。同様の事例は知らないが、突帯の貼付される場所は、通常は沈線装飾が施される部位にあっており、沈線装飾と同様の意味で施されたものなのだろう。125は小破片のため、確証はないが、2本の棧が渡る三孔式の底部を持つ甌と推察する。能美窯産であり、時期はわからないが、特殊な製品と言えるだろう。

この他に注目されるものとしては、片面硯や転用硯、窯道具類などの須恵質土製品がある。

今回報告した円面硯は全て園足円面硯である。ピット36の園足円面硯は、脚部に方形透かしをもつもので、南加賀窯産Ⅱ2期—Ⅲ期頃のものである。包含層126の園足円面硯は、Ⅱ2期からⅢ期に位置づけられる南加賀窯産で、脚部に縦型長方形透かしを8方向もつ。硯面は厚く、外周に溝をもつ厚重なタイプで、小型であるが熟練の製品と位置づけられる。包含層127も園足円面硯であるが、筆立て付きのもので、既に考察したように、三方に筆立ての付くものと予想される。横長方形の透かしをもつ器高の低いもので、古代Ⅱ1期に位置づけられる能美窯産のものである。S190出土やA区包含層出土のものと同一体になる可能性が高い。包含層出土の転用硯は、全て坏B蓋の転用硯(82・83)である。Ⅳ2期に位置づけられる能美窯産須恵器で、いずれも内面に磨耗痕跡と墨痕跡を持つ。当報告地区では墨書土器の出土は確認しておらず、転用硯は実用的なものと理解されよう。

須恵器窯道具としては、貯蔵具専用焼台と甑台転用品とが出土している。ピット25・28と包含層128～131はいずれも貯蔵具専用焼台で、コースター型を呈すB類に分類される。いずれも南加賀窯産胎土であり、Ⅴ期からⅥ期の須恵器窯で使われる形態のものである。底部に窯土が付着したり、口縁部に割かれた痕跡があるなど、須恵器窯内で使用されたものであり、製品に溶着したまま持ち込まれ、ここで割かれたものと考えられよう。155～158の甑台に溶着した須恵器窯土塊や溶解土片なども同様の性格を持つもので、当遺跡内で須恵器選別作業を行ったことの傍証資料となるものと理解される。また、包含層65の須恵器坏Aも窯道具として使われたものと理解される。Ⅳ2期に位置づけられる南加賀窯産で、焼成前に口縁部に削り落しと、製品転用の甑台として使われたものと考えられる。貯蔵具専用焼台と同様の位置づけがなされる須恵器と言えらる。

以上、古代に位置づけられる須恵器、須恵質土製品について述べたが、古代Ⅱ1期からⅡ2期までの須恵器は、図示したとおり多くの割合を占める。この時期は能美窯産が定量存在することが大きな特徴で、南加賀窯南群産も定量存在するなど、南加賀窯の中核生産地である北群産の占める割合が低い時期である。Ⅱ3期以降は南加賀窯北群産では統一される様相があり、須恵器供給圏や能美窯と南加賀窯の生産動向を考える上で興味深い資料を提示している。能美窯産が再び増加するのは、古代Ⅱ2新时期からⅤ2期の時期であり、能美窯で和気地区での生産が盛んとなり、南加賀窯の生産が停滞してくる時期に該当する。Ⅵ1期以降、須恵器出土量自体、減少する傾向にはあるが、確認されるものはいずれも南加賀窯産であり、能美窯の衰退を予感させる。

以上のとおり、当窯で出土する須恵器は、南加賀窯産と能美窯産でほぼ占められるが、一部北加賀窯と思われる須恵器が出土する。118の小型平瓶がそうで、Ⅰ2～Ⅱ1期に位置づけられる押水高松窯産の可能性をもつものである。胎土に大粒の石英を混在させるシルト質の胎土で、金沢末窯産の可能性もある。

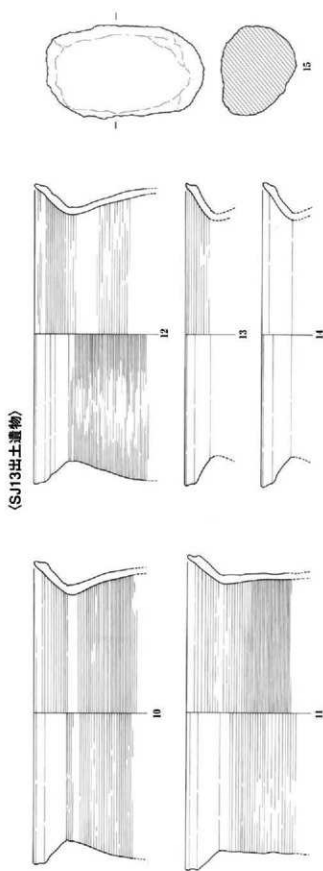
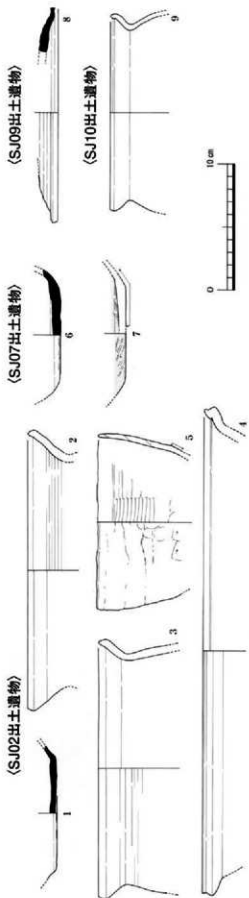
b. 土師器及び土師質土製品

ピット、包含層より出土する土師器、土師質土製品は、破片としては須恵器の量を凌ぐほど出土しているが、図化できるような遺存状態のよいものは極めて少ない。特に注目されるものとしては136の赤彩土師器がある。内外面に丁寧なミガキ調整を施すもので、南加賀窯産の胎土のものである。口縁部が外屈した後に折り返すように内屈しており、つぶれたS字状を呈す。口端部を欠損する浅溝のような器形も想定されるが、口縁部が内屈した後の器形が不明であり、丁寧な作りをする赤彩品であることを考慮すれば、煮炊具器種は考え難いであろう。金属器や施陶器模倣の器種、例えば羽釜や火舎のようなものではなかったかと考えたい。その他、管状土師や支脚形土製品、甕形土製品、甕鉢形土製品、焼成粘土塊等を図示したが、特筆するようなものはない。

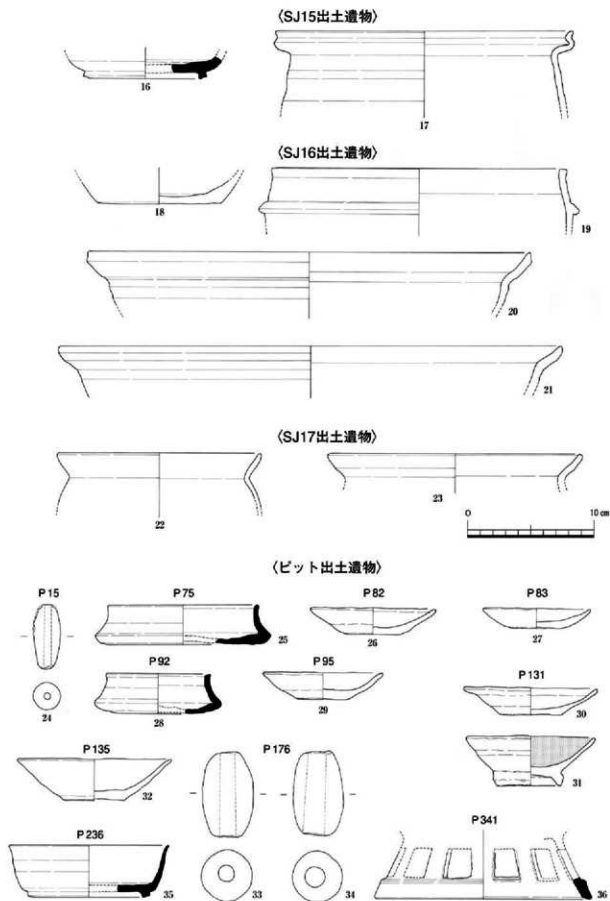
c. 石製品及び鉄製品

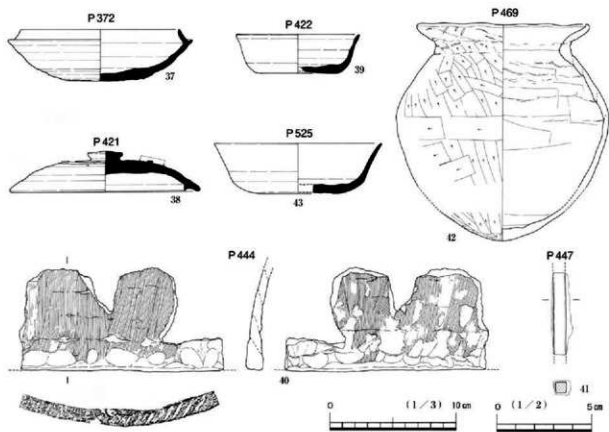
石製品は、大型から小型まで様々な砥石、鍛冶関連の金床石、造り付けカマドや簡易カマドの部材となる切石など様々だが、出土量は多いとは言えず、ここでは162の石製紡錘車についてのみ述べておく。2/3を欠損する硬灰岩製のもので、古代Ⅰ1期に位置づけられる滑石製紡錘車よりも、身厚のある形態をしている。表面にミガキ痕跡が残るなど、作りは比較的悪いが、下端面に崩れた扇状文の線刻が施されるものである。

鉄製品は、鍬、刀子、棒状鉄製品、板状鉄製品を図示した。鍬はいずれも長頭鍬で、166は柳葉形長頭鍬の基部下端を欠損する完形に近いものである。刃部断面の両丸を呈すものと予想され、施板は台開形を呈す。167の長頭鍬は、施板から基部にかけての破片で、166よりも大型のものである。施板が突開形を呈す。168の長頭鍬は小型のもので刃部先端と施板下半を欠損する。刃部が断面三角形を呈すもので、片刃形態を呈す可能性が高い。171の刀子は両端を欠損する破片だが、刃幅が2cmを測る大型のものである。間は両開だが、位置が不均等で、やや特異な形態とも言える。169は断面方形の釘と思われる棒状鉄製品、170は不明板状鉄製品である。

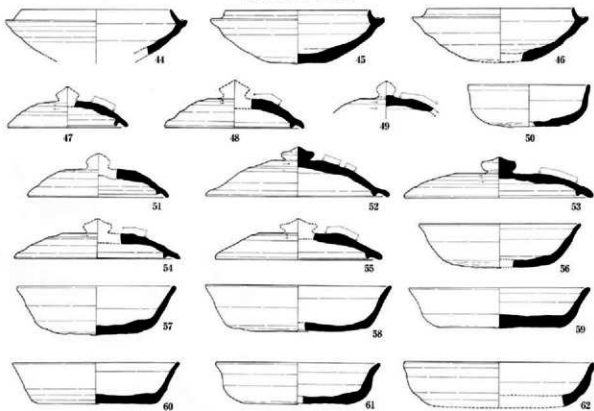


第164図 炉状遺構・ピット・包含層出土遺物 1 (SJ02, SJ07, SJ09, SJ10, SJ13, 全て S = 1 / 3)

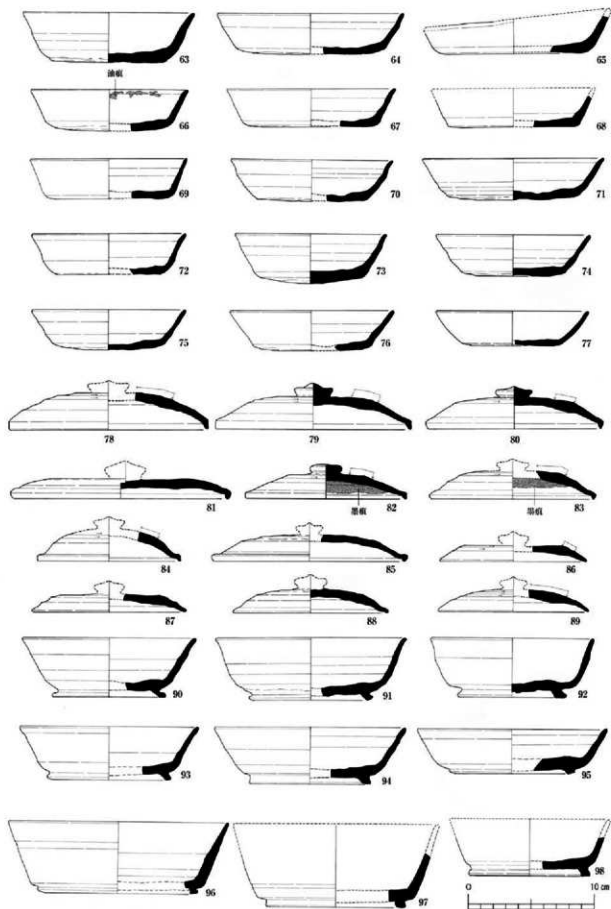




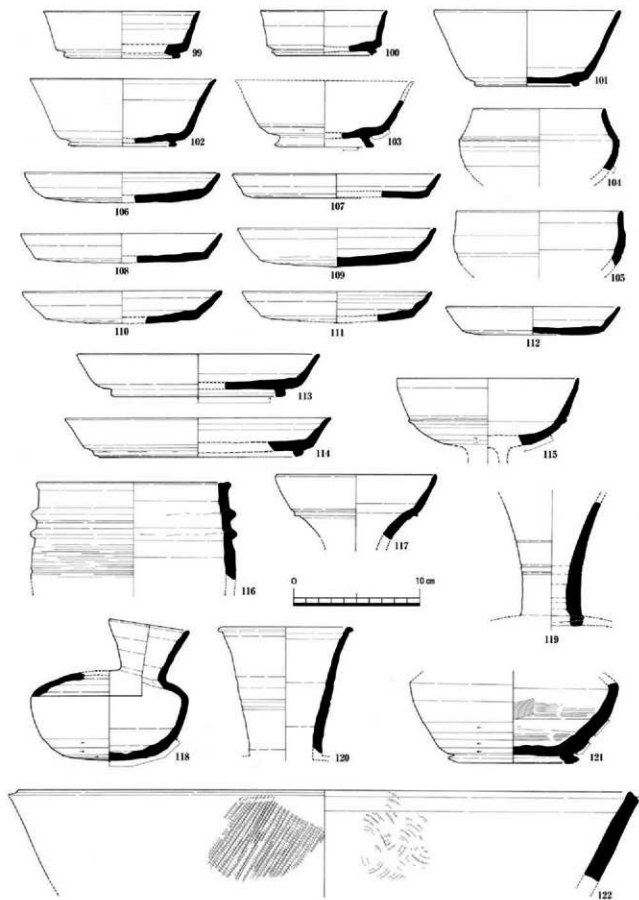
〈包含層出土遺物〉



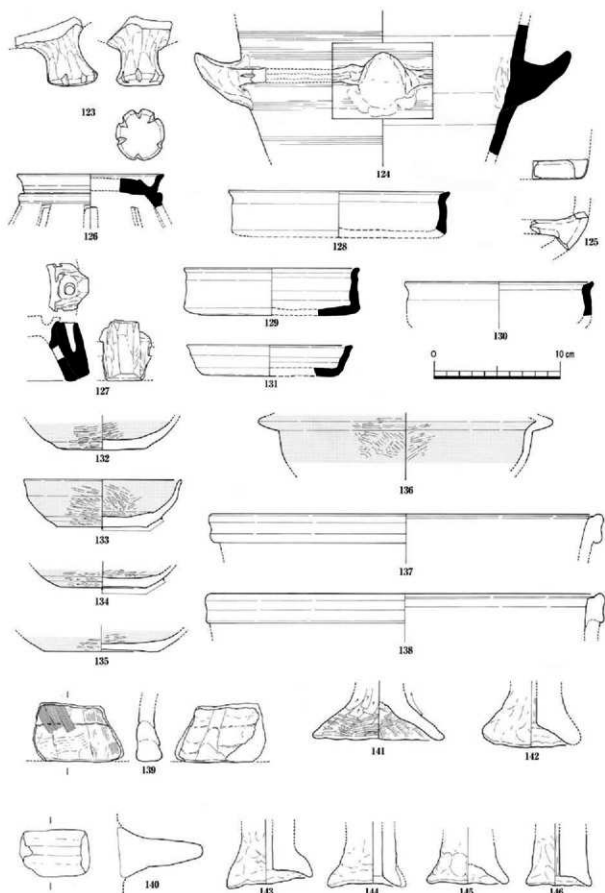
第166図 炉状遺構・ピット・包含層出土遺物3 (ピット-2、包含層-1、41のみS=1/2、他は全てS=1/3)



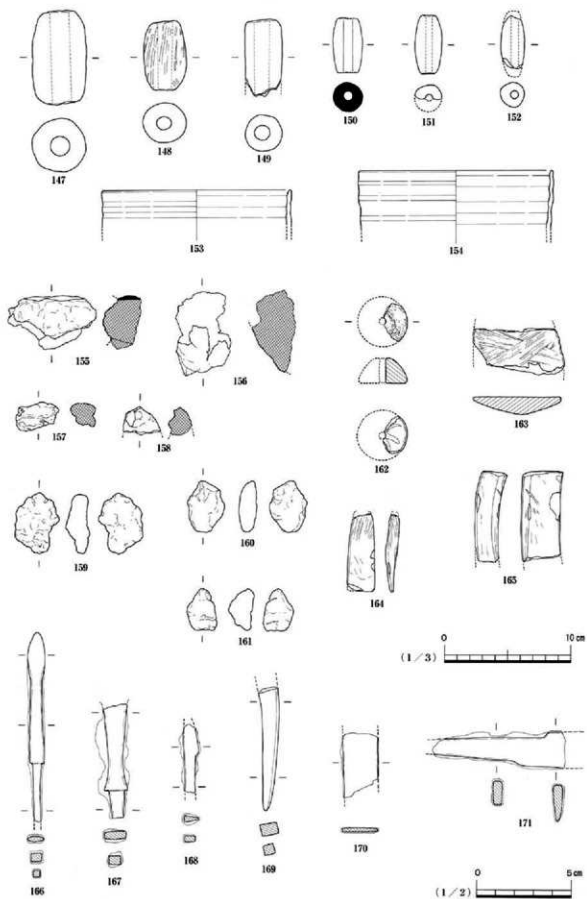
第167図 炉状遺構・ピット・包含層出土遺物4（包含層-2、全てS=1/3）



第168図 炉状遺構・ピット・包含層出土遺物5(包含層-3、全てS=1/3)



第169図 炉状遺構・ピット・包含層出土遺物6（包含層-4、全てS=1/3）



第170図 炉状遺構・ピット・包含層出土遺物7(包含層-5、166~171のみS=1/2、他のみ全てS=1/3)

付表 瀬見町道路Ⅱ報告区域出土古代遺物観察表

遺物番号	種別・名称	出土地点	遺跡	出土	物名	規格	時期	調査者	備考	保存番号
5846	129 土師 灰土器	S1607-1土坑	1291	焼成土	19197-1土坑	1.20	11-12	内務11年	焼物類, 内務調査	S1611
5846	140 土師 灰土器	S1607-1土坑	1243, 16096	焼成土	19198-1土坑	1.20	8-11	8年4月	内務, 内務調査	S1617
5847	141 土師 灰土器	S17-5	1214, 263	灰土器	25173-1土坑	1.7	11	大分4年	中分土器	S1617
5847	142 土師 灰土器	S17-5(50-50)中層	1215, 263	焼成土	179136-1土坑	1.6	11	内務1年	内務調査	S1617
5847	143 土師 灰土器	S17-5(50-50)下層	1216, 263	焼成土	30786-1土坑	1.8	11	内務1年, 内務1年, 内務1年	内務調査, 内務1年, 内務1年	S1617
5848	144 土師 灰土器	S17-7	1218, 263	焼成土	19197-1土坑	1.8	11	内務1年	内務調査	S1617
5848	145 土師 灰土器	S1607-1土坑	1215, 263	焼成土	25176-1土坑	1.35	12	内務1年	焼成土, 灰土器	S1617
5848	146 土師 灰土器	S1607-1土坑	1215, 263	焼成土	19197-1土坑	1.5	12	内務1年	焼成土, 灰土器	S1617
5848	147 土師 灰土器	S1607-1土坑	1218	焼成土	51737-1土坑	1.50	11-12	11年	内務1年	S1618
5848	148 土師 灰土器	S1607-1土坑	1218, 1611, 263, 268	焼成土	174377-1土坑	1.7	12-11	11年	内務1年, 内務1年, 内務1年	S1618
5848	149 土師 灰土器	S17-4(21-7) 11-15-19-20-21	1220, 1611, 263, 268	焼成土	174377-1土坑	1.3	12-11	11年	内務1年, 内務1年, 内務1年	S1618
5849	150 土師 灰土器	S1607-1土坑	1217, 14, 16, 263	焼成土	19197-1土坑	1.25	-	-	-	S1618
5849	151 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263, 268	焼成土	22916-1土坑	1.25	12	大分3年	焼成土	S1619
5849	152 土師 灰土器	S1607-1土坑	1317	焼成土	5851-1土坑	1.2	12-11	大分4年	焼成土, 内務調査, 内務1年, 内務1年	S1619
5849	153 土師 灰土器	S1607-1土坑	1611, 263, 268	焼成土	100615-1土坑	1.2	11-12	大分4年	内務1年, 内務1年	S1619
5849	154 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263, 268	焼成土	1375-1土坑	4.9	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	155 土師 灰土器	S1607-1土坑	1312, 1611, 263, 268	焼成土	5175-1土坑	1.2	12-11	大分4年	内務調査	S1619
5849	156 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	5175-1土坑	5.6	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	157 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	2.5	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	158 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	5175-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	159 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	160 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	161 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	5.6	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	162 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	163 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	164 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	5.6	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	165 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	5.6	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	166 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	167 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	168 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	169 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	170 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	171 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	172 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	173 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	174 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	175 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	176 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	177 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5849	178 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	179 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	180 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	181 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	182 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	183 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	184 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	185 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	186 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	187 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	188 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	189 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	190 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	191 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	192 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	193 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	194 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	195 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	196 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	197 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	198 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	199 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619
5850	200 土師 灰土器	S1607-1土坑	1311, 1611, 263	焼成土	24276-1土坑	1.2	12	大分4年	内務調査	S1619

付表 瀬川町遺跡Ⅱ報告区域出土古代遺物観察表

遺跡番号	発掘区画	出土品名	位置	形状	長さ	幅	厚	重量	備考	図番	頁番号		
521	281 瀬川-河内遺跡	521-10	1104, 437, 671, 内面	磁器(すず石)	7500-1分組	1.6	0.27	16.0g	河内ハナ		521-10		
		521-11	767-61	767, 右面	磁加磁	574-1分組	1.8	0.2	12.2g	河内ハナ		521-11	
		521-12	501-1(1層+622層下層)	14516+50044	磁加磁	2376分組	1.36	0.11		河内ハナ		521-12	
		521-13	501-1(2層)	847	磁加磁	2576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-13	
		521-14	501-1(3層)	1017	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-14	
		521-15	501-1(4層)	1117	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-15	
		521-16	501-1(5層)	1217	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-16	
		521-17	501-1(6層)	1317	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-17	
		521-18	501-1(7層)	1417	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-18	
		521-19	501-1(8層)	1517	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-19	
		521-20	501-1(9層)	1617	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-20	
		521-21	501-1(10層)	1717	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-21	
		521-22	501-1(11層)	1817	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-22	
		521-23	501-1(12層)	1917	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-23	
		521-24	501-1(13層)	2017	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-24	
		521-25	501-1(14層)	2117	磁加磁	576分組	1.36	0.27		河内ハナ		521-25	
		522	282 瀬川-河内遺跡	522-1	1105, 490	磁加磁	576分組	1.4	0.1	14.0g	河内ハナ		522-1
				522-2	1112, 461, 821, 1	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-2
				522-3	1112, 461, 821, 2	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-3
				522-4	1112, 461, 821, 3	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-4
				522-5	1112, 461, 821, 4	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-5
				522-6	1112, 461, 821, 5	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-6
				522-7	1112, 461, 821, 6	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-7
				522-8	1112, 461, 821, 7	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-8
				522-9	1112, 461, 821, 8	磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-9
522-10	1112, 461, 821, 9			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-10		
522-11	1112, 461, 821, 10			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-11		
522-12	1112, 461, 821, 11			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-12		
522-13	1112, 461, 821, 12			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-13		
522-14	1112, 461, 821, 13			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-14		
522-15	1112, 461, 821, 14			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-15		
522-16	1112, 461, 821, 15			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-16		
522-17	1112, 461, 821, 16			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-17		
522-18	1112, 461, 821, 17			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-18		
522-19	1112, 461, 821, 18			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-19		
522-20	1112, 461, 821, 19			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-20		
522-21	1112, 461, 821, 20			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-21		
522-22	1112, 461, 821, 21			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-22		
522-23	1112, 461, 821, 22			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-23		
522-24	1112, 461, 821, 23			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-24		
522-25	1112, 461, 821, 24			磁加磁	2377分組	1.86	0.16		河内ハナ		522-25		

遺物番号	遺物の名称	出土地点	遺層	出土	数量	形状	時期	調査等	署名	注目番号
5803	5803-10 磁器-片貝舟中	S803-11 10-A 目	(1)133, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	2338-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院調査員	5803-10	
	5803-11 磁器-片貝舟中	S803-14-S803上層	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	23375-1点	片貝	83-84 磁へつ中	内院調査員	5803-11	
	5803-12 磁器-片貝舟中	S803-20-21 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	5673-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院調査員	5803-12	
	5803-13 磁器-片貝舟中	S803-27 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	2337-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院調査員	5803-13	
	5803-14 磁器-片貝舟中	S803-28 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	378-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院へつ記上	5803-14	
	5803-15 磁器-片貝舟中	S803-29 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	2795-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院調査員	5803-15	
	5803-16 磁器-片貝舟中	S803-32 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	378-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院中長野調査員, 内院へつ記上	5803-16	
	5803-17 磁器-片貝舟中	S803-33 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	2336-1点	片貝	81-82 磁へつ中	内院調査員	5803-17	
	5803-18 磁器-片貝舟中	S803-34 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	378-1点	片貝	82-83 磁へつ中	内院へつ記上	5803-18	
	5803-19 磁器-片貝舟中	S803-35 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	10932-1点	片貝	83-84 磁へつ中	内院調査員	5803-19	
	5803-20 磁器-片貝舟中	S803-36 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	10932-1点	片貝	83-84 磁へつ中	内院調査員	5803-20	
	5803-21 磁器-片貝舟中	S803-37 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	10932-1点	片貝	83-84 磁へつ中	内院調査員	5803-21	
	5803-22 磁器-片貝舟中	S803-38 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	10932-1点	片貝	83-84 磁へつ中	内院調査員	5803-22	
	5803-23 磁器-片貝舟中	S803-39 作田55	(1)118, 10A, 6092, 作田55	陶師遺跡	10932-1点	片貝	83-84 磁へつ中	内院調査員	5803-23	
5804	5804-1 磁器-片貝舟中	S804-1 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-1	
	5804-2 磁器-片貝舟中	S804-2 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-2	
	5804-3 磁器-片貝舟中	S804-3 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-3	
	5804-4 磁器-片貝舟中	S804-4 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-4	
	5804-5 磁器-片貝舟中	S804-5 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-5	
	5804-6 磁器-片貝舟中	S804-6 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-6	
	5804-7 磁器-片貝舟中	S804-7 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-7	
	5804-8 磁器-片貝舟中	S804-8 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-8	
	5804-9 磁器-片貝舟中	S804-9 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-9	
	5804-10 磁器-片貝舟中	S804-10 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-10	
	5804-11 磁器-片貝舟中	S804-11 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-11	
	5804-12 磁器-片貝舟中	S804-12 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-12	
	5804-13 磁器-片貝舟中	S804-13 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-13	
	5804-14 磁器-片貝舟中	S804-14 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5804-14	
5805	5805-1 磁器-片貝舟中	S805-1 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-1	
	5805-2 磁器-片貝舟中	S805-2 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-2	
	5805-3 磁器-片貝舟中	S805-3 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-3	
	5805-4 磁器-片貝舟中	S805-4 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-4	
	5805-5 磁器-片貝舟中	S805-5 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-5	
	5805-6 磁器-片貝舟中	S805-6 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-6	
	5805-7 磁器-片貝舟中	S805-7 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-7	
	5805-8 磁器-片貝舟中	S805-8 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-8	
	5805-9 磁器-片貝舟中	S805-9 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-9	
	5805-10 磁器-片貝舟中	S805-10 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-10	
	5805-11 磁器-片貝舟中	S805-11 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-11	
	5805-12 磁器-片貝舟中	S805-12 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-12	
	5805-13 磁器-片貝舟中	S805-13 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-13	
	5805-14 磁器-片貝舟中	S805-14 1101, 883	(1)111, 883	陶師遺跡	2376-1点	片貝	82-81 磁へつ中	調査員	5805-14	

2. 掘立柱建物出土遺物

遺物番号	種別・品名	出土地点	調査	出土	品名	規格	時期	調査者	備考	記録番号
S2021	1 陶器-赤土系丸	SR020P12-135P1-45	11032	赤土系丸	高瀬遺跡	2307-1高好	1-5	野村		S2021
S2022	2 磁器-黒	SR020P1	-	高瀬遺跡	2307-1高好	黒磁器	11	高ノミ		S2022
	3 土師-灰田	SR020P2	11033	丸	10307-2高好	2-4	野	内内ナメ		S2022
	4 土師-灰田	SR020P3	11034, 11035	丸	10308-2高好	高好	野	高瀬中ノ高		S2022
	5 土師-灰田	SR020P4	11036, 11037	丸	10309-2高好	高好	野	高瀬中ノ高		S2022
	6 土師-灰田	SR020P5	11038, 11039	丸	10310-2高好	11-10	野	11-12		S2022
S2023	7 磁器-赤土系丸	SR020P6	11040, 11041	赤土系丸	10311-1高好	高好	野	野		S2023
	8 磁器-赤土系丸	SR020P7	11042, 11043	赤土系丸	10312-1高好	1-4	野	野		S2023
S2024	9 土師-灰田	SR020P8	11044, 11045	丸	10313-2高好	1-5	野	内内ナメ		S2024
	10 土師-灰田	SR020P9	11046	丸	10314-2高好	1-5	野	内内ナメ		S2024
S2025	11 土師-灰田	SR020P10	11047, 11048	丸	10315-2高好	11-10	野	野		S2025
	12 磁器-赤土系丸	SR020P11	11049	赤土系丸	10316-2高好	1-10	野	野		S2025
S2026	13 土師-赤土系丸	SR020P12	11052	赤土系丸	10317-2高好	高好	野	野		S2026
S2027	14 磁器-赤土系丸	SR020P13	11053, 11054, 11055, 11056, 11057, 11058, 11059	赤土系丸	10318-2高好	11-10	野	野		S2027
	15 磁器-赤土系丸	SR020P14	11060	赤土系丸	10319-2高好	11-10	野	野		S2027
S2028	16 磁器-赤土系丸	SR020P15	11061, 11062	赤土系丸	10320-2高好	11-10	野	野		S2028
	17 磁器-赤土系丸	SR020P16	11063	赤土系丸	10321-2高好	11-10	野	野		S2028
S2029	18 土師-赤土系丸	SR020P17	11064	赤土系丸	10322-2高好	11-10	野	野		S2029
	19 土師-赤土系丸	SR020P18	11065	赤土系丸	10323-2高好	11-10	野	野		S2029
S2030	20 磁器-赤土系丸	SR020P19	11066, 11067	赤土系丸	10324-2高好	11-10	野	野		S2030
	21 磁器-赤土系丸	SR020P20	11068	赤土系丸	10325-2高好	11-10	野	野		S2030
S2031	22 磁器-赤土系丸	SR020P21	11069, 11070, 11071	赤土系丸	10326-2高好	11-10	野	野		S2031
	23 土師-赤土系丸	SR020P22	11072	赤土系丸	10327-2高好	11-10	野	野		S2031
S2032	24 土師-赤土系丸	SR020P23	11073	赤土系丸	10328-2高好	11-10	野	野		S2032
	25 土師-赤土系丸	SR020P24	11074	赤土系丸	10329-2高好	11-10	野	野		S2032
S2033	26 土師-赤土系丸	SR020P25	11075	赤土系丸	10330-2高好	11-10	野	野		S2033
	27 土師-赤土系丸	SR020P26	11076	赤土系丸	10331-2高好	11-10	野	野		S2033
S2034	28 土師-赤土系丸	SR020P27	11077	赤土系丸	10332-2高好	11-10	野	野		S2034
	29 土師-赤土系丸	SR020P28	11078	赤土系丸	10333-2高好	11-10	野	野		S2034
S2035	30 土師-赤土系丸	SR020P29	11079	赤土系丸	10334-2高好	11-10	野	野		S2035
	31 土師-赤土系丸	SR020P30	11080	赤土系丸	10335-2高好	11-10	野	野		S2035
S2036	32 土師-赤土系丸	SR020P31	11081	赤土系丸	10336-2高好	11-10	野	野		S2036
	33 土師-赤土系丸	SR020P32	11082	赤土系丸	10337-2高好	11-10	野	野		S2036
S2037	34 土師-赤土系丸	SR020P33	11083	赤土系丸	10338-2高好	11-10	野	野		S2037
	35 土師-赤土系丸	SR020P34	11084	赤土系丸	10339-2高好	11-10	野	野		S2037
S2038	36 土師-赤土系丸	SR020P35	11085	赤土系丸	10340-2高好	11-10	野	野		S2038
	37 土師-赤土系丸	SR020P36	11086	赤土系丸	10341-2高好	11-10	野	野		S2038
S2039	38 土師-赤土系丸	SR020P37	11087	赤土系丸	10342-2高好	11-10	野	野		S2039
	39 土師-赤土系丸	SR020P38	11088	赤土系丸	10343-2高好	11-10	野	野		S2039
S2040	40 土師-赤土系丸	SR020P39	11089	赤土系丸	10344-2高好	11-10	野	野		S2040
	41 土師-赤土系丸	SR020P40	11090	赤土系丸	10345-2高好	11-10	野	野		S2040
S2041	42 土師-赤土系丸	SR020P41	11091	赤土系丸	10346-2高好	11-10	野	野		S2041
	43 土師-赤土系丸	SR020P42	11092	赤土系丸	10347-2高好	11-10	野	野		S2041
S2042	44 土師-赤土系丸	SR020P43	11093	赤土系丸	10348-2高好	11-10	野	野		S2042
	45 土師-赤土系丸	SR020P44	11094	赤土系丸	10349-2高好	11-10	野	野		S2042
S2043	46 土師-赤土系丸	SR020P45	11095	赤土系丸	10350-2高好	11-10	野	野		S2043
	47 土師-赤土系丸	SR020P46	11096	赤土系丸	10351-2高好	11-10	野	野		S2043
S2044	48 土師-赤土系丸	SR020P47	11097	赤土系丸	10352-2高好	11-10	野	野		S2044
	49 土師-赤土系丸	SR020P48	11098	赤土系丸	10353-2高好	11-10	野	野		S2044
S2045	50 土師-赤土系丸	SR020P49	11099	赤土系丸	10354-2高好	11-10	野	野		S2045
	51 土師-赤土系丸	SR020P50	11100	赤土系丸	10355-2高好	11-10	野	野		S2045
S2046	52 土師-赤土系丸	SR020P51	11101	赤土系丸	10356-2高好	11-10	野	野		S2046
	53 土師-赤土系丸	SR020P52	11102	赤土系丸	10357-2高好	11-10	野	野		S2046
S2047	54 土師-赤土系丸	SR020P53	11103	赤土系丸	10358-2高好	11-10	野	野		S2047
	55 土師-赤土系丸	SR020P54	11104	赤土系丸	10359-2高好	11-10	野	野		S2047
S2048	56 土師-赤土系丸	SR020P55	11105	赤土系丸	10360-2高好	11-10	野	野		S2048
	57 土師-赤土系丸	SR020P56	11106	赤土系丸	10361-2高好	11-10	野	野		S2048
S2049	58 土師-赤土系丸	SR020P57	11107	赤土系丸	10362-2高好	11-10	野	野		S2049
	59 土師-赤土系丸	SR020P58	11108	赤土系丸	10363-2高好	11-10	野	野		S2049
S2050	60 土師-赤土系丸	SR020P59	11109	赤土系丸	10364-2高好	11-10	野	野		S2050
	61 土師-赤土系丸	SR020P60	11110	赤土系丸	10365-2高好	11-10	野	野		S2050
S2051	62 土師-赤土系丸	SR020P61	11111	赤土系丸	10366-2高好	11-10	野	野		S2051
	63 土師-赤土系丸	SR020P62	11112	赤土系丸	10367-2高好	11-10	野	野		S2051
S2052	64 土師-赤土系丸	SR020P63	11113	赤土系丸	10368-2高好	11-10	野	野		S2052
	65 土師-赤土系丸	SR020P64	11114	赤土系丸	10369-2高好	11-10	野	野		S2052
S2053	66 土師-赤土系丸	SR020P65	11115	赤土系丸	10370-2高好	11-10	野	野		S2053
	67 土師-赤土系丸	SR020P66	11116	赤土系丸	10371-2高好	11-10	野	野		S2053
S2054	68 土師-赤土系丸	SR020P67	11117	赤土系丸	10372-2高好	11-10	野	野		S2054
	69 土師-赤土系丸	SR020P68	11118	赤土系丸	10373-2高好	11-10	野	野		S2054
S2055	70 土師-赤土系丸	SR020P69	11119	赤土系丸	10374-2高好	11-10	野	野		S2055
	71 土師-赤土系丸	SR020P70	11120	赤土系丸	10375-2高好	11-10	野	野		S2055
S2056	72 土師-赤土系丸	SR020P71	11121	赤土系丸	10376-2高好	11-10	野	野		S2056
	73 土師-赤土系丸	SR020P72	11122	赤土系丸	10377-2高好	11-10	野	野		S2056
S2057	74 土師-赤土系丸	SR020P73	11123	赤土系丸	10378-2高好	11-10	野	野		S2057
	75 土師-赤土系丸	SR020P74	11124	赤土系丸	10379-2高好	11-10	野	野		S2057
S2058	76 土師-赤土系丸	SR020P75	11125	赤土系丸	10380-2高好	11-10	野	野		S2058
	77 土師-赤土系丸	SR020P76	11126	赤土系丸	10381-2高好	11-10	野	野		S2058
S2059	78 土師-赤土系丸	SR020P77	11127	赤土系丸	10382-2高好	11-10	野	野		S2059
	79 土師-赤土系丸	SR020P78	11128	赤土系丸	10383-2高好	11-10	野	野		S2059
S2060	80 土師-赤土系丸	SR020P79	11129	赤土系丸	10384-2高好	11-10	野	野		S2060
	81 土師-赤土系丸	SR020P80	11130	赤土系丸	10385-2高好	11-10	野	野		S2060
S2061	82 土師-赤土系丸	SR020P81	11131	赤土系丸	10386-2高好	11-10	野	野		S2061
	83 土師-赤土系丸	SR020P82	11132	赤土系丸	10387-2高好	11-10	野	野		S2061
S2062	84 土師-赤土系丸	SR020P83	11133	赤土系丸	10388-2高好	11-10	野	野		S2062
	85 土師-赤土系丸	SR020P84	11134	赤土系丸	10389-2高好	11-10	野	野		S2062
S2063	86 土師-赤土系丸	SR020P85	11135	赤土系丸	10390-2高好	11-10	野	野		S2063
	87 土師-赤土系丸	SR020P86	11136	赤土系丸	10391-2高好	11-10	野	野		S2063
S2064	88 土師-赤土系丸	SR020P87	11137	赤土系丸	10392-2高好	11-10	野	野		S2064
	89 土師-赤土系丸	SR020P88	11138	赤土系丸	10393-2高好	11-10	野	野		S2064
S2065	90 土師-赤土系丸	SR020P89	11139	赤土系丸	10394-2高好	11-10	野	野		S2065
	91 土師-赤土系丸	SR020P90	11140	赤土系丸	10395-2高好	11-10	野	野		S2065
S2066	92 土師-赤土系丸	SR020P91	11141	赤土系丸	10396-2高好	11-10	野	野		S2066
	93 土師-赤土系丸	SR020P92	11142	赤土系丸	10397-2高好	11-10	野	野		S2066
S2067	94 土師-赤土系丸	SR020P93	11143	赤土系丸	10398-2高好	11-10	野	野		S2067
	95 土師-赤土系丸	SR020P94	11144	赤土系丸	10399-2高好	11-10	野	野		S2067
S2068	96 土師-赤土系丸	SR020P95	11145	赤土系丸	10400-2高好	11-10	野	野		S2068
	97 土師-赤土系丸	SR020P96	11146	赤土系丸	10401-2高好	11-10	野	野		S2068
S2069	98 土師-赤土系丸	SR020P97	11147	赤土系丸	10402-2高好	11-10	野	野		S2069
	99 土師-赤土系丸	SR020P98	11148	赤土系丸	10403-2高好	11-10	野	野		S2069
S2070	100 土師-赤土系丸	SR020P99	11149	赤土系丸	10404-2高好	11-10	野	野		S2070
	101 土師-赤土系丸	SR020P100	11150	赤土系丸	10405-2高好	11-10	野	野		S2070

付表 観見町道跡II報告区域出土古代遺物観察表

遺物番号	器物・器種	出土地点	遺跡	出土	品名	規格	時期	調査者	備考	注目番号	
SK53	64 須恵-伊豆系中	SK525+75	(1)14B, 4E13, 4E14, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	2-2	黒-白	大ナズリ	表裏1, 内天中央部付着	SK531
	65 須恵-伊豆系中	SK520+17	1115A	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1	SK532
	66 須恵-伊豆系中	SK527+37	(1)14A, 4E14, 4E17, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-2	黒-白	須へつ短中	内天側付着	SK533
	67 須恵-伊豆系中	SK53	(1)10B	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK537
	68 須恵-伊豆系中	SK55-27	(1)126, 4E12	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK535
	69 須恵-伊豆系中	SK55-28	(1)126, 4E13	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK536
	70 須恵-伊豆系中	SK53A+70	(1)112, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK534
	71 須恵-伊豆系中	SK53-28	4E17	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中ナズリ	表裏裏面, コブテ型上部中央部付着の欠片ナズリ	SK537
	72 須恵-伊豆系中	SK53-10	4E17	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中ナズリ		SK538
	73 須恵-伊豆系中	SK53-10	4E17	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中ナズリ		SK538
	74 須恵-伊豆系中	SK53A+11	1116B	須恵5B	須恵5B	3.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	内天1.5cm	内天側付着	SK531
	75 須恵-伊豆系中	SK53A+11	4E14	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	内天	SK532
	76 須恵-伊豆系中	SK53C-19	4E19	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	内天	SK532
SK54	77 須恵-伊豆系中	SK5402 A7層	(1)10B, 4E12	須恵5B	須恵5B	3.0x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	表裏裏面	SK541
	78 須恵-伊豆系中	SK54-106	4E10	須恵5B	須恵5B	2.55x1-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK542
	79 須恵-伊豆系中	SK54-109-105-107-12-1004	(1)111, 4E13, 4E14	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	3-3	黒-白	内天中央部, 須へつ短中, 内天ナズリ	内天中央部, 須へつ短中	SK541
	80 須恵-伊豆系中	SK54-29-36-40	-	4E12	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	表裏裏面	SK542
	81 須恵-伊豆系中	SK5404 100-102	(1)116B, 4E14, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	内天側付着	SK543
	82 須恵-伊豆系中	SK545	4E-22, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK545
	83 須恵-伊豆系中	SK5454	23-1, 4E10, 4E12	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	表裏	SK544
	84 須恵-伊豆系中	SK544	109-1, 57+27	石巻層	須恵5B	-	-	-	-	須へつ短中, 須恵5B	SK546
	85 須恵-伊豆系中	SK5418-102-101	(1)15A, 4E15, 4E19, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	表裏1, 内天中央部付着	SK542
SK58	86 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	87 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	88 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	89 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	90 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	91 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	92 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	93 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	94 須恵-伊豆系中	SK5806-49	1127A, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK582
	95 須恵-伊豆系中	SK5804	(1)116, 4E13	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	表裏1, 内天中央部付着, 須へつ短中	SK581
	96 須恵-伊豆系中	SK58-22-102	(1)11A, 4E13, 4E15	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	内天側付着	SK582
	97 須恵-伊豆系中	SK58-22-102	(1)11A, 4E13, 4E15	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	内天側付着	SK582
	98 須恵-伊豆系中	SK58-22-102	(1)11A, 4E13, 4E15	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	内天側付着	SK582
SK59	99 須恵-伊豆系中	SK59-60	45+146-108	-	-	-	-	-	-	表裏1, 須へつ短中	SK591
	100 須恵-伊豆系中	SK59-60	45+146-108	-	-	-	-	-	-	表裏1, 須へつ短中	SK591
	101 須恵-伊豆系中	SK59-60	45+146-108	-	-	-	-	-	-	表裏1, 須へつ短中	SK591
SK61	102 須恵-伊豆系中	SK61-7	4E12	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中	表裏1, 須へつ短中	SK611
SK62	103 須恵-伊豆系中	SK62	(1)10B, 4E13, 4E11, 4E10	須恵5B	須恵5B	1.0x0.5-1.5	1-3	黒-白	須へつ短中		SK621
SK64	104 須恵-伊豆系中	SK64-51+75	(1)124B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	3.0x1.5-1.5	1-3	黒-白	大ナズリ	表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK641
105 須恵-伊豆系中	SK64-1	1117A	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK642	
106 須恵-伊豆系中	SK64-2	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK643	
107 須恵-伊豆系中	SK64-3	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK644	
108 須恵-伊豆系中	SK64-4	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK645	
109 須恵-伊豆系中	SK64-5	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK646	
110 須恵-伊豆系中	SK64-6	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK647	
111 須恵-伊豆系中	SK64-7	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK648	
112 須恵-伊豆系中	SK64-8	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK649	
113 須恵-伊豆系中	SK64-9	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK650	
114 須恵-伊豆系中	SK64-10	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK651	
115 須恵-伊豆系中	SK64-11	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK652	
116 須恵-伊豆系中	SK64-12	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK653	
117 須恵-伊豆系中	SK64-13	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK654	
118 須恵-伊豆系中	SK64-14	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK655	
119 須恵-伊豆系中	SK64-15	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK656	
120 須恵-伊豆系中	SK64-16	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK657	
121 須恵-伊豆系中	SK64-17	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK658	
122 須恵-伊豆系中	SK64-18	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK659	
123 須恵-伊豆系中	SK64-19	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK660	
124 須恵-伊豆系中	SK64-20	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK661	
125 須恵-伊豆系中	SK64-21	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK662	
126 須恵-伊豆系中	SK64-22	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK663	
127 須恵-伊豆系中	SK64-23	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK664	
128 須恵-伊豆系中	SK64-24	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK665	
129 須恵-伊豆系中	SK64-25	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK666	
130 須恵-伊豆系中	SK64-26	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK667	
131 須恵-伊豆系中	SK64-27	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK668	
132 須恵-伊豆系中	SK64-28	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK669	
133 須恵-伊豆系中	SK64-29	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK670	
134 須恵-伊豆系中	SK64-30	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK671	
135 須恵-伊豆系中	SK64-31	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK672	
136 須恵-伊豆系中	SK64-32	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK673	
137 須恵-伊豆系中	SK64-33	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK674	
138 須恵-伊豆系中	SK64-34	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK675	
139 須恵-伊豆系中	SK64-35	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK676	
140 須恵-伊豆系中	SK64-36	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK677	
141 須恵-伊豆系中	SK64-37	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK678	
142 須恵-伊豆系中	SK64-38	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK679	
143 須恵-伊豆系中	SK64-39	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK680	
144 須恵-伊豆系中	SK64-40	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵5B	須恵5B	須恵5B	2.55x1.5-1.5	1-3	黒-白		表裏1, 内天中央部, 表裏裏面	SK681	
145 須恵-伊豆系中	SK64-41	(1)10B, 4E13, 4E11, 須恵									

遺物番号	発出-名称	出土地点	遺品	粘土	胎地	形状	時期	調査者	備考	実測番号
SK30	126 土師-須賀丸	SK3040-47-40-白子屋	1E16. 須賀丸	須賀丸	27077-1 赤胎	1.4	1-2	内務省中注, 須賀丸	赤子ヨロシ, 須賀丸	SK307
	127 土師-須賀丸	SK3029-20	1E23. 須賀丸	須賀丸	10939-1 赤胎	1.20	1-1	内務省中注	須賀丸	SK308
	128 土師-須賀丸	SK3040	-	須賀丸	10937-1 赤胎	1.2	1-1	須賀丸	須賀丸	SK309
	129 土師-須賀丸	SK3040	-	須賀丸	10937-1 赤胎	1.2	1-1	須賀丸	須賀丸	SK310
	130 土師-須賀丸	SK3040-47-130-MC-170-175-179-181	1E25. 須賀丸	須賀丸	27077-2 赤胎	2.3	1-1	須賀丸	赤子ヨロシ, 須賀丸	SK311
	131 土師-須賀丸	SK3040	胎地+14. 赤胎	須賀丸	27077-1 赤胎	1.4	1-1	須賀丸	須賀丸	SK312
	132 土師-須賀丸	SK3027-170	1E12. 赤胎	赤胎	3193-1 赤胎	1.1	1-2	赤胎	赤胎	SK313
	133 土師-須賀丸	SK3025	1E12. 赤胎	赤胎	3193-1 赤胎	1.2	1-2	赤胎	赤胎	SK314
	134 土師-須賀丸	SK3024	胎地+赤胎	赤胎	2576-1 赤胎	1.4	1-2	赤胎	赤胎	SK315
	135 土師-須賀丸	SK3022-2-20-白子屋	1E14. 赤胎	赤胎	27077-2 赤胎	2.3	1-2	赤胎	赤胎	SK316
	136 土師-須賀丸	SK3023-C	1E13. 赤胎	赤胎	10938-1 赤胎	2.3	1-2	赤胎	赤胎	SK317
	137 土師-須賀丸	SK3027	1E26. 須賀丸	赤胎	10938-1 赤胎	1.10	1-2	赤胎	赤胎	SK318
138 土師-須賀丸	SK3027	3.5-5.27-40	赤胎	10938-1 赤胎	1.1	1-2	赤胎	赤胎	SK319	
139 土師-須賀丸	SK3027	赤胎	赤胎	2576-2 赤胎	2.3	1-2	赤胎	赤胎	SK320	
140 土師-須賀丸	SK3027	1E13. 赤胎	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-2	赤胎	赤胎	SK321	
141 土師-須賀丸	SK3023-20-中野	1E16. 赤胎	赤胎	27077-1 赤胎	2.3	1-1	赤胎	赤胎	SK322	
142 土師-須賀丸	SK3019-SK3061	1E12. 赤胎	赤胎	10938-1 赤胎	1.2	1-1	赤胎	赤胎	SK323	
143 土師-須賀丸	SK3022	胎地+赤胎	赤胎	3193-1 赤胎	1.2	1-1	赤胎	赤胎	SK324	
144 土師-須賀丸	SK3022	胎地+赤胎	赤胎	2576-2 赤胎	2.3	1-2	赤胎	赤胎	SK325	
145 土師-須賀丸	SK3025	1E13. 赤胎	赤胎	2575-1 赤胎	1.4	1-2	赤胎	赤胎	SK326	
146 土師-須賀丸	SK3024	1E13. 赤胎	赤胎	2576-2 赤胎	1.4	1-2	赤胎	赤胎	SK327	
147 土師-須賀丸	SK3022-2703	1E16. 赤胎	赤胎	2576-2 赤胎	1.8	1-1	赤胎	赤胎	SK328	
148 土師-須賀丸	SK3025-1	1E15	赤胎	27076-4 赤胎	1.6	1-2	赤胎	赤胎	SK329	
149 土師-須賀丸	SK3025-1	1E14	赤胎	10937-4 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK330	
150 土師-須賀丸	SK3024-1	-	赤胎	27077-1 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK331	
151 土師-須賀丸	SK3024	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK332	
152 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK333	
153 土師-須賀丸	SK3023-1	1E15	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK334	
154 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK335	
155 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK336	
156 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK337	
157 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK338	
158 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK339	
159 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK340	
160 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK341	
161 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK342	
162 土師-須賀丸	SK3023-1	1E15	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK343	
163 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK344	
164 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK345	
165 土師-須賀丸	SK3023-1	1E15	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK346	
166 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK347	
167 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK348	
168 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK349	
169 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK350	
170 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK351	
171 土師-須賀丸	SK3023-1	1E14	赤胎	2576-1 赤胎	1.3	1-1	赤胎	赤胎	SK352	

4. 土師器焼成坑出土遺物

遺物番号	発出-名称	出土地点	遺品	粘土	胎地	形状	時期	調査者	備考	実測番号
SK43	1 土師-須賀丸	SK43-26	1E17. 赤胎	赤胎	27077-1 赤胎	2.3	1-1	赤胎	赤胎	SK434
	2 土師-須賀丸	SK43-26	1E17. 赤胎	赤胎	10938-1 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK435
	3 土師-須賀丸	SK43-42	1E16. 赤胎	赤胎	10938-1 赤胎	1.5	1-1	赤胎	赤胎	SK436
	4 土師-須賀丸	SK43-4	1E14	赤胎	10938-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK437
	5 土師-須賀丸	SK43-20	1E14	赤胎	27077-2 赤胎	2.3	1-1	赤胎	赤胎	SK438
	6 土師-須賀丸	SK43-44	胎地	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK439
	7 土師-須賀丸	SK43-29	胎地+赤胎	赤胎	10938-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK440
	8 土師-須賀丸	SK43-7-5	胎地+赤胎	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK441
	9 土師-須賀丸	SK432-47	胎地	赤胎	10937-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK442
	10 土師-須賀丸	SK43-40	胎地+赤胎	赤胎	10938-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK443
	11 土師-須賀丸	SK43-44	胎地+赤胎	赤胎	10937-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK444
	12 土師-須賀丸	SK43	胎地+赤胎	赤胎	10932-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK445
	13 土師-須賀丸	SK4421	胎地	赤胎	27077-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK446
	14 土師-須賀丸	SK44-25	1E12	赤胎	27077-1 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK447
	15 土師-須賀丸	SK44-7	1E13	赤胎	10938-1 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK448
	16 土師-須賀丸	SK44-43	1E14	赤胎	10938-2 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK449
	17 土師-須賀丸	SK44-30	1E10	赤胎	27076-4 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK450
	18 土師-須賀丸	SK44-36	胎地	赤胎	27076-2 赤胎	1.15	1-1	赤胎	赤胎	SK451
	19 土師-須賀丸	SK44-20	胎地	赤胎	27076-4 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK452
	20 土師-須賀丸	SK44-7	1E13	赤胎	27077-2 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK453
	21 土師-須賀丸	SK44-29	胎地+赤胎	赤胎	27076-4 赤胎	1.4	1-1	赤胎	赤胎	SK454
	22 土師-須賀丸	SK44	胎地+赤胎	赤胎	27077-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK455
	23 土師-須賀丸	SK4425	1E10	赤胎	10937-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK456
	24 土師-須賀丸	SK4424	1E11	赤胎	3197-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK457
	25 土師-須賀丸	SK44-4	1E12	赤胎	27077-2 赤胎	1.40	1-1	赤胎	赤胎	SK458
	26 土師-須賀丸	SK44	1E17. 赤胎	赤胎	5197-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK459
	27 土師-須賀丸	SK446	-	赤胎	27076-4 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK460
28 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK461	
29 土師-須賀丸	SK444	-	赤胎	10938-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK462	
30 土師-須賀丸	SK444	-	赤胎	10938-1 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK463	
31 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK464	
32 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK465	
33 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK466	
34 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK467	
35 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK468	
36 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK469	
37 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK470	
38 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK471	
39 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK472	
40 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK473	
41 土師-須賀丸	SK449	-	赤胎	10938-2 赤胎	1.30	1-1	赤胎	赤胎	SK474	

遺物番号	発掘区画	出土地点	図案	形状	土層	位置	規格	時期	調査等	備考	所属等
26	上層-平段坑	上層F107-040	T145, R33, R41	1110	B10	73Y07-北段	1.4	04-01	調査中	発掘中	2-843
27	上層-平段坑	上層F1026	T150, R41, R41	1110	B10	73Y08-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	2-843
28	上層-平段坑	上層F1029	T145, R33, R40	1110	B10	73Y08-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	2-847
29	上層-平段坑	上層F1030-041	T145, R33, R40	1110	B10	73Y07-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	2-847
30	上層-平段坑	上層F1030-020-020-562	T146, R33, R40	1110	B10	53Y7-北段	2.5	04-01	調査中	発掘中	2-841
41	上層-平段坑	上層F1032	R35	B10	73Y07-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
42	上層-平段坑	上層F1034-027	R35	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
43	上層-平段坑	上層F1034	R35	B10	73Y07-北段	高	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
44	上層-平段坑	上層F1036-043	R35	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
45	上層-平段坑	上層F1027-220-220	R36	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
46	上層-平段坑	上層F1047	R35	B10	53Y7-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
47	上層-平段坑	上層F1049	R39	B10	10Y07-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
48	上層-平段坑	上層F1024+135	R41	B10	10Y08-2-北	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
49	上層-平段坑	上層F1027-1	R36	B10	10Y05-2-北	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
50	上層-平段坑	上層F1027-206	R34	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
51	上層-平段坑	上層F1041	R34	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-844
52	上層-平段坑	上層F1044-306-220-120	R40	B10	73Y07-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
53	上層-平段坑	上層F1047	R41	B10	10Y08-2-北	1.4	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
54	上層-平段坑	上層F1049	R40	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
55	上層-平段坑	上層F1050	R40	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-848
56	上層-平段坑	上層F1052	R41, R41, R25	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-848
57	上層-平段坑	上層F1079-020-030	T153, R42, R47, 40	B10	73Y07-北段	1.5	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
58	上層-平段坑	上層F1032	T152	B10	10Y08-2-北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841	
59	上層-平段坑	上層F1079-261	R41, R41, R10	B10	73Y07-北段	1.4	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
60	上層-平段坑	上層F1033	R41, R41, R10	B10	73Y08-北段	北	04-01	調査中	発掘中	2-842	
61	上層-平段坑	上層F1031	R41, R41, R41	B10	73Y07-北段	1.4	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-844
62	上層-平段坑	上層F1033+135	R41, R41, R41	B10	23Y07-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	2-845	
63	上層-平段坑	上層F1050	T150, R41, R45	B10	73Y08-2-北	3.1	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-844
64	上層-平段坑	上層F1046+134	T151, R42, R41	B10	73Y07-北段	5.6	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
65	上層-平段坑	上層F1033	T152, R42, R45	B10	10Y08-2-北	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
66	上層-平段坑	上層F1049	T150, R42, R42	B10	73Y08-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-847
67	上層-平段坑	上層F1047	T153, R42, R47	B10	73Y07-北段	5.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
68	上層-平段坑	上層F1033	T150, R42, R45	B10(小石)	73Y07-北段	7.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-848
69	上層-平段坑	上層F1035	T152, R42, R41	B10	10Y08-2-北	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
70	上層-平段坑	上層F1040-69	T153, R41, R42	B10	53Y7-北段	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
71	上層-平段坑	上層F1036	T152, R42, R46	B10	53Y7-北段	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
72	上層-平段坑	上層F1036	T151, R42, R49	B10	73Y08-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
73	上層-平段坑	上層F1036	T151, R42, R40	B10	10Y08-2-北	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-847
74	上層-平段坑	上層F1040	T151, R41, R45	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
75	上層-平段坑	上層F1046+134	T151, R42, R41	B10	73Y07-北段	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
76	上層-平段坑	上層F1032	T151, R42, R41	B10	10Y08-2-北	1.4	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
77	上層-平段坑	上層F1039	T151, R42, R41	B10(小石)	53Y7-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
78	上層-平段坑	上層F1040-735	T152, R42, R46	B10(小石)	53Y7-北段	7.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-848
79	上層-平段坑	上層F1047	T152, R42, R41	B10	73Y07-北段	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
80	上層-平段坑	上層F1035	T153, R41, R41	B10	73Y08-北段	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
81	上層-平段坑	上層F1025	T150, R41, R49	B10	73Y08-北段	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
82	上層-平段坑	上層F1040	T150, R42, R42	B10	73Y08-北段	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
83	上層-平段坑	上層F1041	T151, R42, R45	B10	53Y8-2-北	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-847
84	上層-平段坑	上層F1047	T152, R42, R41	B10	73Y07-北段	5.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
85	上層-平段坑	上層F1040	T152, R42, R42	B10	73Y07-北段	7.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
86	上層-平段坑	上層F1046	T152, R42, R40	B10	73Y08-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
87	上層-平段坑	上層F1046-023	T151, R42, R41	B10	73Y07-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
88	上層-平段坑	上層F1032+134	T151, R42, R41	B10	73Y08-2-北	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
89	上層-平段坑	上層F1021-220	T151, R42, R49	B10	53Y7-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
90	上層-平段坑	上層F1028-207	T150, R41, R45	B10	53Y7-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
91	上層-平段坑	上層F1049	T151, R42, R46	B10	73Y07-北段	5.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
92	上層-平段坑	上層F1027	T151, R42, R42	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
93	上層-平段坑	上層F1034	T151, R42, R41	B10	73Y08-北段	3.4	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
94	上層-平段坑	上層F1040-493	T151, R42, R41	B10	73Y08-2-北	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
95	上層-平段坑	上層F1043	T150, R42, R46	B10(小石)	53Y8-2-北	7.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
96	上層-平段坑	上層F1038	T151, R42, R41	B10	73Y08-2-北	3.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
97	上層-平段坑	上層F1048	T151, R41, R45	B10	10Y08-1-北	2.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
98	上層-平段坑	上層F1036	T152, R42, R45	B10	10Y08-2-北	2.5	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-846
99	上層-平段坑	上層F1041	T151, R42, R42	B10	73Y07-北段	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
100	上層-平段坑	上層F1040	T151, R42, R40	B10	73Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
101	上層-平段坑	上層F1046	T150, R42, R49	B10	53Y7-北段	2.5	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
102	上層-平段坑	上層F1040	T150, R42, R42	B10	73Y07-北段	7.8	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
103	上層-平段坑	上層F1040-532	T151, R42, R42	B10	73Y08-1-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-849
104	上層-平段坑	上層F1040	T151, R42, R41	B10	53Y7-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-844
105	上層-平段坑	上層F1046	T151, R42, R41	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
106	上層-平段坑	上層F1020	T151, R42, R46	B10	10Y07-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
107	上層-平段坑	上層F1021	T151, R43, R45, 45	B10	73Y08-北段	北	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
108	上層-平段坑	上層F1023	R43	B10	23Y07-北段	3.5	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
109	上層-平段坑	上層F1045	T151, R41	B10	10Y07-北段	3.5	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-847
110	上層-平段坑	上層F1041	R41	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-843
111	上層-平段坑	上層F1046	R41	B10	53Y7-北段	1.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-844
112	上層-平段坑	上層F1045	T150, R41, R40	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-844
113	上層-平段坑	上層F1047	T151, R42, R19	B10	10Y08-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-840
114	上層-平段坑	上層F1047	T151, R42, R41	B10	53Y8-北段	3.4	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-841
115	上層-平段坑	上層F1040-20-220	北	北	10Y08-2-北	4.3	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-845
116	上層-平段坑	上層F1047	T151, R42, R42	B10	10Y07-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-848
117	上層-平段坑	上層F1022	T151, R41, R40	B10	10Y07-2-北	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-847
118	上層-平段坑	上層F1046	T151, R41, R40	B10	23Y08-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
119	上層-平段坑	上層F1049	T151, R42, R42	B10	53Y08-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
120	上層-平段坑	上層F1043	T151, R42, R41	B10	53Y7-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-842
121	上層-平段坑	上層F1035	T151, R42, R42	B10	23Y08-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-840
122	上層-平段坑	上層F1036	T151, R42, R42	B10	73Y08-北段	1.2	04-01	調査中	発掘中	発掘中	2-847

付表 額見町遺跡Ⅱ報告区域出土古代遺物調査表

遺物番号	種別・図類	出土地点	遺層	出土	各地	規格	時期	調査号	備考	実測寸法
105	磁器・陶器	3-4	11121	再調査層	5Y7.5-1黄灰	1.20	11			報告書18
106	磁器・陶器	4-25-25	1115A, 1115B	散在・小石人	2B6Y7.5-1黄灰	1.0	32	底へラリ面	横溝遺跡	報告書41
107	磁器・陶器	4-27-1上層	1116A, 1116B	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.6	32	底へラリ面	横溝遺跡	報告書18
108	磁器・陶器	4-28-1上層+中層	1117A, 1117B	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.5	32	底へラリ面	横溝遺跡	報告書18
109	磁器・陶器	4-28-1上層	1117C, 1117D	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	2.5	32	底へラリ面	横溝遺跡	報告書42
110	磁器・陶器	4-27-1上層	1118A, 1118B	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.2	32	底へラリ面	内蔵野遺跡	報告書47
111	磁器・陶器	4-25	1118A	再調査層	10Y32.5-1黄緑	1.3	32	底へラリ面	内蔵野遺跡	報告書45
112	磁器・陶器	4-25	1118B	再調査層	10Y32.5-1黄緑	1.5	32	底へラリ面	内蔵野遺跡	報告書45
113	磁器・陶器	4-28-1中層+下層	1117E, 1117F, 1117G, 1117H	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.2	31	底へラリ面	横溝遺跡	報告書18
114	磁器・陶器	4-27-2中層	1119A, 1119B, 1119C, 1119D	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	横溝遺跡	報告書46
115	磁器・陶器	4-28	1114, 1115, 1116	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.6	31	底へラリ面	報告書18	
116	磁器・陶器	4-28	1117	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.5	31	底へラリ面	報告書18	
117	磁器・陶器	4-28	1117E	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.6	31	底へラリ面	報告書18	
118	磁器・陶器	4-28-1中層+下層	1116, 1117, 1118, 1119	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	2.0	12-31	底へラリ面	報告書18	
119	磁器・陶器	4-28-1中層+下層+中層	1119E	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.5	32	底へラリ面	報告書18	
120	磁器・陶器	4-28	1115A, 1115B	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
121	磁器・陶器	4-28	1116	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	2.5	32	底へラリ面	報告書18	
122	磁器・陶器	4-28	1116B	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	3	32	底へラリ面	報告書18	
123	磁器・陶器	4-28	1116C	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.5	32	底へラリ面	報告書18	
124	磁器・陶器	4-28	1116D	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
125	磁器・陶器	4-28	1116E	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
126	磁器・陶器	4-28	1116F	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
127	磁器・陶器	4-28	1116G	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
128	磁器・陶器	4-28	1116H	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
129	磁器・陶器	4-28	1116I	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
130	磁器・陶器	4-28	1116J	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
131	磁器・陶器	4-28	1116K	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
132	磁器・陶器	4-28	1116L	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
133	磁器・陶器	4-28	1116M	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
134	磁器・陶器	4-28	1116N	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
135	磁器・陶器	4-28	1116O	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
136	磁器・陶器	4-28	1116P	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
137	磁器・陶器	4-28	1116Q	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
138	磁器・陶器	4-28	1116R	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
139	磁器・陶器	4-28	1116S	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
140	磁器・陶器	4-28	1116T	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
141	磁器・陶器	4-28	1116U	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
142	磁器・陶器	4-28	1116V	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
143	磁器・陶器	4-28	1116W	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
144	磁器・陶器	4-28	1116X	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
145	磁器・陶器	4-28	1116Y	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
146	磁器・陶器	4-28	1116Z	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
147	磁器・陶器	4-28	1116AA	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
148	磁器・陶器	4-28	1116AB	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
149	磁器・陶器	4-28	1116AC	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
150	磁器・陶器	4-28	1116AD	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
151	磁器・陶器	4-28	1116AE	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
152	磁器・陶器	4-28	1116AF	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
153	磁器・陶器	4-28	1116AG	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
154	磁器・陶器	4-28	1116AH	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
155	磁器・陶器	4-28	1116AI	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
156	磁器・陶器	4-28	1116AJ	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
157	磁器・陶器	4-28	1116AK	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
158	磁器・陶器	4-28	1116AL	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
159	磁器・陶器	4-28	1116AM	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
160	磁器・陶器	4-28	1116AN	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
161	磁器・陶器	4-28	1116AO	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
162	磁器・陶器	4-28	1116AP	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
163	磁器・陶器	4-28	1116AQ	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
164	磁器・陶器	4-28	1116AR	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
165	磁器・陶器	4-28	1116AS	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
166	磁器・陶器	4-28	1116AT	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
167	磁器・陶器	4-28	1116AU	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
168	磁器・陶器	4-28	1116AV	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
169	磁器・陶器	4-28	1116AW	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
170	磁器・陶器	4-28	1116AX	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	
171	磁器・陶器	4-28	1116AY	再調査層	2B6Y7.5-1黄灰	1.30	32	底へラリ面	報告書18	

第四章 総 括

一 三湖台地集落群の古代前半期土器様相一

1. はじめに

額見町遺跡が所在する三湖台地には、縄文時代以降、散発的な集落経営がなされるが、5世紀中頃を最後に、台地上から集落は消え、代わって、小規模円墳を主体とする古墳群が広く分布する。当古墳群は三湖台古墳群と呼ばれ、7世紀初頭頃まで供献祭祀に伴う祖納廃棄が行われていることが確認できる。この時期、集落は河川流域の平野部へ集約する傾向があり、江沼盆地には掘立柱建物を中心とする集落群が形成される。この集落群は弥生時代以降、継続性を持つ集落が多く、江沼地域の根幹を成す集落域であったと性格づけられる。さて、三湖台地では7世紀初頭の古墳群衰退、消滅とともに、新たな形で集落形成がなされる。造り付けカマドを付設する竪穴建物を主体とする集落群で、台地広くにこれまでに確認できないほどの面的な広がりをもって展開する。従来の断続的かつ小規模な集落分布とは全く異なるものであり、それは竪穴建物に造り付けカマドを付設するという新たな住居形態を採用することからも窺い知れる。加えて、額見町遺跡で確認されたL字型カマド付設の竪穴建物は、額見町西遺跡、矢野田遺跡、柴師遺跡と、台地の広い範囲で分布することが最新の調査で確認できている。朝鮮系移民を主とする移民集落が政治的な意図で計画的に移転される状況があったものとみている（望月 2007b）。

つまり、三湖台地集落群は移民系集落と性格付けできるものであり、7世紀後半の集落拡大期以降、その様相はさらに強くなる。本稿は、当台地集落における集落成立期から集落全盛期、停滞期にあたる、6世紀後半～8世紀の土器様相について、額見町遺跡及びその周辺集落から出土した土器を中心に概要をまとめ、当地域の土器編年及び地域的かつ当台地集落群としての特性などを考察するものである。

なお、本稿で述べる編年軸については、基本的に田嶋明人氏が1988年に発表した北陸古代土器編年軸（田嶋 1988）に基づくが、ただ、当台地集落群の各時期の基準資料としたものは竪穴建物や土坑の一括性をもった資料群であり、造り付けカマド周辺に一括廃棄された土師器煮炊具群が中心となる。この土師器煮炊具資料は竪穴建物様式とともに移民の生活様式を示すものであり、当台地集落の変質の様相を物語る資料と言える。基準資料としては、これに竪穴建物の下層やカマド周辺に廃棄された須恵器・土師器食膳具を加えて構成するが、食膳具については時期的にまとまりをもつ一括性の高い資料を選択した。また、単一遺構資料だけでは器種を網羅できなかった時期については、複数遺構資料で構成するものとし、その併行関係を検討する上では須恵器食膳具をその指標とした。つまり、須恵器食膳具を併行関係の根拠とするもの、一括性の高い土師器煮炊具資料の変遷様相を当編年の基軸としており、田嶋編年とは時期区分に若干の差異があることを断っておく。本稿で扱う時期は、三湖台地集落群成立期以降からとし、8世紀代までの中を上層器様相変化に重点を置いて4期に区分する。

つまり、1期は5世紀末以来の在来型とも言える伝統的な器種、器形、技法を保有する在来型土師器生産を堅持する段階、2期は従来の「在来型土師器」に、朝鮮半島や近江、丹波等の移民がもたらしたと予想される「移民系土師器」が出現するとともに、器種組成においても新旧交代の様相が見えてくる、旧来の在来型土師器生産に変質が見られる段階、3期は移民系煮炊具の在地化とその影響による在来型煮炊具生産の変質、それに付随して生じた土師器生産の須恵器窯場導入による北陸型煮炊具成立の段階、4期は在来型土師器生産の払拭と北陸型古代土師器生産体制の確立段階とする。そしてさらに、各期の中で必要に応じて小期に細分して提示する。

2. 各時期の土器様相

(1) 1期の土器様相

1期は三湖台地集落群が成立する段階であり、2期の新たな集落様相の黎明期でもある。土師器は煮炊具、食膳具ともに5世紀末以来の流れを汲む器種、器形、技法を保有する段階で、つまり在来型土師器生産を堅持する段階と位置づけられる。6世紀前半代に比較すれば、土器の中における食膳具量が増加していく段階であり、当期の須恵器生産増加に伴い、一般集落への普及が高まる。造り付けカマドの出現、普及とともに飯や手付深鍋は増加し、長胴釜の器形は長胴化を進行させる。貯蔵具は6世紀以来の流れを汲む土師器短頸壺・長頸壺が僅かに存在するが、基本的には須恵器統一様相を持つ段階であり、壺・瓶から大甕に至るまで一般集落での出土が確実に増加する。当期の中では、土師器の器種組成や成形技法などに大きな変化は認め難いが、出土する須恵器食膳

具の型式差により、田嶋編年古代I 1期古よりも古相を帯びる資料が主体を占める段階=1A期、古代I 1期古には併行する段階=1B期、古代I 1期新には併行する段階=1C期に細分できる。また、各時期において、土師器器形や組成に若干の差異も認められ、徐々にではあるが、6世紀的な要素が欠落していく。

a. 1A期 (第172図)

額見町遺跡SI19資料が当期に該当できる可能性を持つが、須恵器の出土はなく、包含層や土坑資料についてもまとまった出土が確認できないことから、額見町集落出現前段階と見るのが妥当である。念仏林南遺跡や額見町西遺跡で当期資料の確認があるが、当集落はいずれも1期内で終焉する短期集落である点で共通する。念仏林南遺跡4号住居、19号住居、21号土坑を基準資料とし(小松市1995)、同遺跡13号住居、18号住居、29号住居資料、額見町西遺跡の第3号壜穴住居、第14号壜穴住居(石川原2000)も当該期の資料と判断する。

出土する須恵器は、全て南加賀室の中核支群であるニツ梨・戸津オオダニ地区の産と推察される。那谷川流域の南加賀室南群産や能美産産は含まれておらず、両室は開窯前であった可能性が高い。底面にケズリ調整を施す坏H(1・5)も確認できるが、主体はケズリ調整を施さない大型底部円盤を叩き延ばして成形する6世紀前半以来の成形技法をもつ大型法量坏H(6~8・10・11)である。大型底部円盤技法を主とするニツ梨峠山10A号室やニツ梨東山5号室Ⅴ・Ⅵ次床では底面ケズリ調整を行うものが主体的なため(望月1990)、それよりは後出すと見るが、坏Hの丸底成形技法の一般化を指標(望月2004、165-167頁)とする田嶋編年古代I 1期古よりは古く位置づけられるだろう。当期が南加賀室南群成立前段階の可能性が高いことも考慮すれば、古代I 1期の直前様式とされる田嶋編年古墳4様式(田嶋1996)の範疇に含めるのが妥当と判断される。

坏H以外の須恵器器種では、依然として大型を呈す長脚二段三方カシの有蓋高坏18や低脚高坏でも脚部がまだ大型を呈す19など、古い形態を引きずるものが多く、古代I 1期古に先行する特徴を有している。新型器種として上げた鏡(15)の存在は気にかかるが、外面に2段沈線区画内連続突の無蓋高環的な装飾が施された器種であり、無蓋高環の脚部がとれたものとも理解できる。ただ、重ね焼きから見て有蓋器種として焼かれた可能性が高く、極めて丁寧な作りをする点から考えても、高坏と同等には扱えない。同時期のニツ梨東山5号室Ⅵ次床で出土する返りの長い扁平つまみ蓋は、古代I 1期に出現する鏡蓋に繋がる器形をしており、定型的な鏡が出現する以前に存在した金属器器種である可能性を持つ。同様の坏部器形をもつ高坏に返り蓋が伴う事例として大阪府新屋古墳出土の須恵器高坏がある。報告した藤原学氏はこの蓋を壜蓋としながらも、高坏に使われる蓋を前提として作られていると考え、坏Gの粗型になると評価した(藤原1982、502-505頁)。古代様式との画期をどこで区切るのか、議論の分かれるところだが、後述する土師器器相についても6世紀の様相を強く残しており、当土器群を古墳4様式Ⅱ2期に含むことは困難だが、古代I 1期への過渡の様相の見られる段階とし、古墳4様式Ⅲ期として新設すべきものと考えている。三測台地集落群の理解の中では、当期に出現する集落が短期で消滅することを考えれば、当期成立集落は当集落群の先行集落と位置付けられよう。

当該期の土師器は椀目の出土が少なく、6世紀代の消費地資料を見る限りでは、当期の食器具構成は須恵器が高い占有率をもっていた可能性がある。椀Hでは6世紀に定量を占める口縁部外反器形(21)が定量存在すること、高坏が全て内黒品で長脚形態、坏部が大きく開く器形をなす点、そして内黒焼成の長頸壜、短頸壜が存在することも、6世紀以来の伝統的器形を色濃く残す土師器相と位置づけられる。特に高坏はこれに先行する古墳4様式Ⅱ2期に位置づけられる吉竹遺跡18号土坑との形態変化は明瞭であるが(小松市2001)、その流れの範疇にある形態を有している。

土師器煮炊具では短脚小釜、長脚釜、手付深鍋、瓶、小型鍋が確認される。いずれも5世紀後半からの煮炊具器形、成形技法の延長線上にあるもので、外面は縦方向主体のハケ目調整、内面はハラナデ(粗形成形段階の積積み成形に伴う内側からのコテ工具痕)後の縦方向ケズリ調整による。長脚釜や短脚小釜の器形も、当期においては37・38のように胴部が張り、器内の厚いものが目立つ傾向があり、この点でも6世紀の様相を引きずる。

ただ、当期の造り付け小型陶器によって、瓶出土量や手付深鍋は増加した可能性があり、小型鍋も出土量が増す。小型鍋は古墳4様式Ⅱ期以降に出現し、1A期に定量化して



上ニツ梨東山5号室Ⅵ次床出土
念仏林南19号住居出土

第171図 鏡の粗型
(1/6)



第172図 1A期の土器群：念仏林南遺跡資料（1/6）

増加する器種であり、当地域の1期の煮炊具を特徴付ける器種と言える。内面はコテ当てによって平滑に作られているが、外面の粘土継痕跡は残したままのものが多く、粗いミガキ調整やケズリ調整で仕上げるものが主体的である。なお、1期以降に見られる煮炊具の特徴として、長胴釜、短胴小釜、小型鍋の底面に大きく記される「×」のヘラ記号の存在があげられる(写真24-54)。これ以前には確認できないものであり、その記入頻度からみても、土師器生産の量産体制に基づく組織編成のもとで何らかの管理体制下に置かれていた可能性を示唆する。土師器煮炊具にヘラ記号を記す事例は、近江地域の7世紀に顕在化することが知られているが(畑中1996、129頁)、近江では口縁部内面に記されることを一般的としているため、直接的な系譜関係にあるものではないだろう。

以上、1A期は三洲台地集落群成立の前期であるが、先述のように当期はまだ田嶋編年古墳様式の範疇にあり、能美窯成立や南加賀窯の南北2群分岐経営の直前期にあたる。古代様式成立は1B期であり、本来はその時期に大きな様式転換があるのだが、須臾器では鉢・碗等の金属器系器種が当期に既に出てくることや造付け電付設置穴建物の出現は、1B期の古代様式成立に先行する萌芽的要素と評価できる。1A期成立集落が1期の中で短期廃絶するという点でも、古代様式萌芽期の当期集落の性格がよく現れていると言えよう。

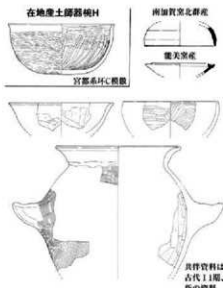
b. 1B期(第174-175図)

額見町遺跡の成立期であり、三洲台地集落群内で多くの集落が成立してくる段階である。額見町遺跡と念仏林南遺跡とは須臾器比率や土師器器形に差異があり、後者はより古い様相を引きずる傾向をもつ。額見町遺跡ではSI11、SI13、SI104を基準資料とし、SI74、SK37の資料で補完、念仏林南遺跡では3号住居、21号住居を基準資料とし、15号住居の資料で補完する。

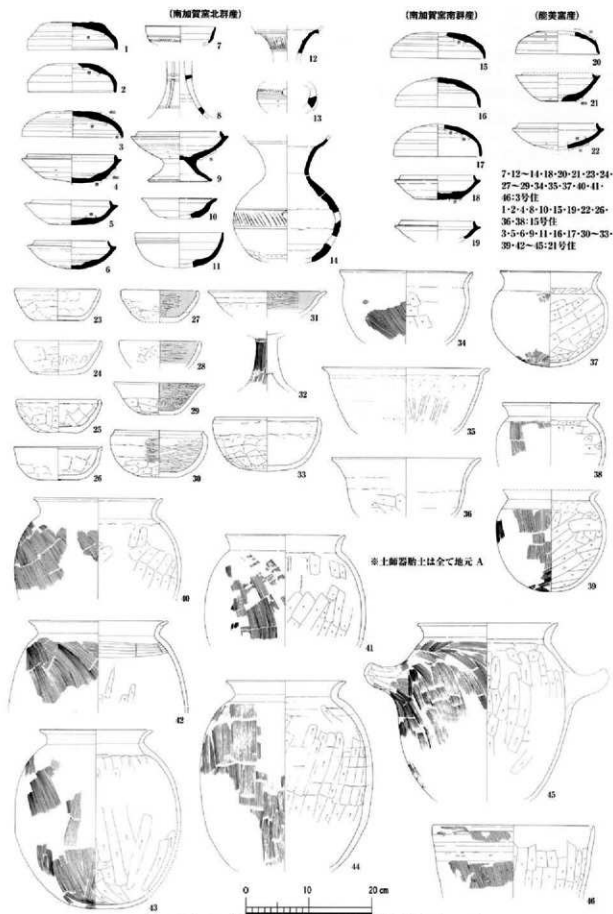
出土する須臾器は南加賀窯北群産(戸津林地区)を主とするも、南加賀窯南群産と能美窯産が定量加わることから、両窯が定量的な須臾器生産段階に入ったことを窺い知る。ただ、南加賀窯南群、能美窯ともにほぼ坏Hに限られており、須臾器生産供給は北群とは質的に差がある。念仏林南遺跡での堅穴建物における須臾器出土量は1A期と大差はないが、土師器食膳具の出土量は増加しており、相対的に見れば食膳具における須臾器率は低下する。特に額見町遺跡では須臾器食膳具率が非常に低く、遺構によって異なるが、堅穴建物への須臾器食膳具廃棄は極めて少ない。須臾器食膳具は坏H主体の構成で、定型的な有蓋鍋(鏡身b)が出現前段階と位置づけられる。ただ、金属器系の鍋や鉢は定量存在しており、坏Hの丸底成形技法への統一傾向(大型底部円盤成形の3も一部遺存)と口径の縮小化(南加賀窯北群産で身口径12~13cmを主体とするが、南群産や能美窯産は12cm前後中心)など、古代11期の範疇で捉えられる。当期の鏡は基本的に無蓋で、厚手で大型鉢鉢器形の鏡身a(51・52)と口縁部内湾気味に立ち上がる小型で碗形を呈す鏡c(11・58)がある。前者は口縁部内面に稜を形成し、体部外面には沈線文や稜、斜行ヘラ描文を施すもので、これに脚を付すタイプ(有脚鏡)が当期以降に定量存在する。高坏は当期においても長脚二段三方透かしをもつものが定量存在するが、1A期よりは減少傾向にあると言え、有蓋低脚高坏は1A期から脚部が低く開く形態となる(9)。

土師器食膳具は碗Hが1A期よりも増加する。基本は内黒品だが、ミガキ調整を施さない小型鍋と同様の作りのものが定量存在する。器形は口縁部内湾気味が主で、古墳4様式に定量存在した口縁部外反器形(29)はほぼ消滅する。また、当期は通常サイズに加えて深身器形を呈し口縁部を短く外屈させる大型品(30・66・67)が定量存在する。放射状暗紋などは施されないため、宮部系土師器坏Cとは同じに扱えないが(ただし右図のように1C期併行の在地の深身碗Hの一部内面放射状ミガキを施す精製品が出現する)、他の碗Hに比べて丁寧なミガキ調整を施す点や精選された胎土を持つ点から考えて、当期の深身碗H顕在化の背景には宮部系坏C(西1986、95-102頁)の影響が想定されよう。高坏は1A期とほぼ同様の坏部形態を保持するが、坏部口縁部の開きが弱くなり(31・69)、総体的に小型化の傾向が見られる。また新たに坏部碗形器形を呈す小型化した72が出現しており、以降は当タイプが主流となる。

煮炊具は念仏林南遺跡と額見町遺跡とで同様の成形技法をもつも



第173図 鏡細遺跡1号井戸出土土器(1/6)



第174図 1B期の土器群 (1)：念仏林南遺跡資料 (1/6)



第175図 1B期の土器群(2): 額見町遺跡資料(1/6)

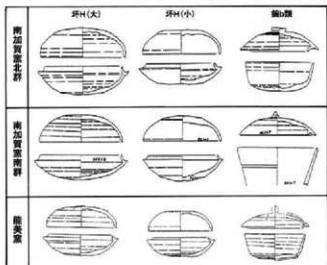
の、念仏林南遺跡は厚手で脚張り器形、額見町遺跡は薄手で脚長器形と、型式差のとも見える差異が認められる。ただ、前者が1A期から続く集落であるのに対し、後者が当期成立の集落という側面から見て、額見町遺跡がいち早く新しい器形を採用したものと考えておきたい。総体的には前代よりも長胴釜の長胴化と薄手化、手付深鍋の小型化が型式的变化と言えるものだろう。また、小型鍋と同様の成形・調整方法で、口縁部が長く外反する広口タイプ(35・36・75・76)が定量出現する。加えて外面に一部ハケ目調整を施す34も確認できており、浅鍋の祖型となる可能性を持つ。

c. 1C期(第177-178図)

当期は念仏林南遺跡の衰退期であり、2期には集落を解体し、移動または三湖台地集落群内で再編・吸収されたものとみる。額見町遺跡と念仏林南遺跡とで依然として須恵器比率や土師器器形に差異があるが、全体的には同じ方向の変化様相を持つ。念仏林南遺跡では14号住居、16号土坑を基準資料とし、11号住居、16号住居の資料で補完、額見町遺跡ではSI02、SI03Aを基準資料とする。なお、1C期として掲載した額見町遺跡のSI03B、SI81資料については、上記資料よりも後出の様相を持つものだが、1C期の時間幅の中で考え得るものとした。

当期の須恵器は1B期に比べてさらに出土量が増し、前段階より増加傾向にあった土師器碗Hとともに総体的に食器量を増す。須恵器産地では南加賀窯産の率が増し、遺跡によって差異はあるが、南加賀窯北群産を凌ぐ場合もある。能美窯産についても確実に定量供給されており、この時期から2B期頃まで南加賀窯北群産の占める率が低く推移する。須恵器食器類は坏H主体構成を維持し、まだ長脚二段三方達しをもつ伝統的な高坏(57)も存在するが、新たな器種としてつまみ蓋を伴う碗b(54・55・60・61・63)が出現する。また同時に無蓋で体部に波状文飾を持つ有脚碗も存在しており、古代I1期の様相を維持する。坏Hは全て丸底成形技法に統一されており、1B期よりも口径が縮小する。身の立ち上がりも短いのが目立ち、特に能美窯産は器高の低い扁平器形が目立つ(20~23)。本文第三章の遺物解説でも述べたが、当期の須恵器坏Hは生産地によって形態や法量に差異があり、典型的に前後関係にも捉えがちな製品が堅穴建物の中で共存してくる。念仏林南遺跡の中では明確には捉えにくいのが、額見町遺跡の特に新相に位置づけられるSI81資料では、南加賀窯北群産の52・53と南群産の59、能美窯産の62とが共存する。また、古相資料のSI02では南加賀窯北群産の中でも口径の大きい51と小型化した50が共存しており、一見複数時期の須恵器が混在しているかのように見える。しかしながら、当該期の窯跡群を見ると第176図に示すように(定型的碗bも出現で併行関係を捉えた場合の古代I1期新の窯は、北群でオオカミ2号窯、南群で金比羅山6号窯、能美で八里向山窯が対比できる、望月2004)、坏Hには大型の前形態を踏襲するものと小型の新形態とが共存する傾向があり、それは南加賀窯北群でより強く、南群、能美窯の順で弱まる傾向が看取できる。つまり、南加賀窯北群は極めて保守的、南群は保守的、能美窯は先進的な型式変化を遂げる窯場としての特徴が顕在化したものと言える。その傾向は2A期においても継承され、2B期の坏A化の段階をもって解消される(望月2004、181-186頁)。

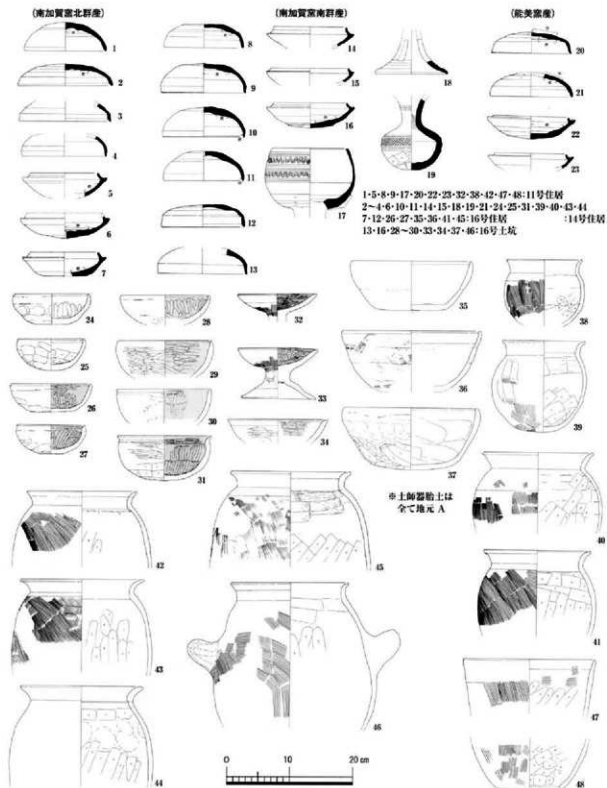
土師器食器類では碗Hが増加し、口径が105~125cmの小型品と14~16.5cmの大型品とが明瞭に法量分化していく。小型品は口縁部内湾の通常形態が口径を小さくさせたもの(24~27・64~66・72~74)で、大型品は1B期に定量出現した深身の口縁部外反器形(30・31・77・78)と深身で口縁部が内湾する器形(29・75・76)とがある。全体的に器形が丸底か小型底部を呈すようになり、体部は開き気味となる。内外面にミガキ調整を施すものが多いが、内黒品の率は低下する。碗Hは当期が出土量のピークであるが、次の段階には激減する器種であり、それは坏Hの衰退と連動したものとも言える。また、高坏については、当期の古相段階では口縁部を開く大型長脚タイプ(79・80)を一部残すが、主体は口縁部で短く外反する浅い椀形坏部の34・81・82で、



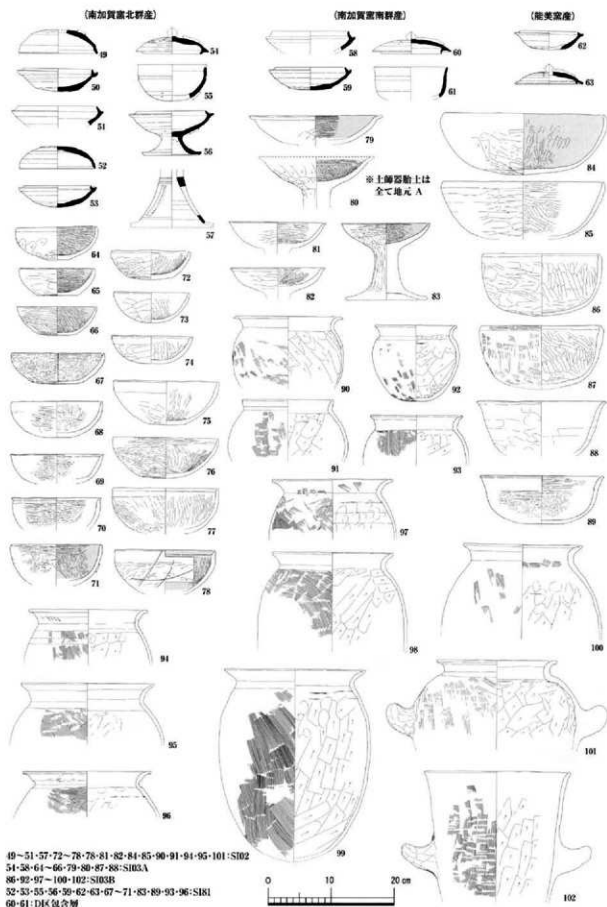
第176図 古代I1期新の南加賀の在産須恵器(1/6)

新相には83のように、坏部が小型で浅い碗形を呈すようになる。また、当期には小型低脚高坏32・33も確認でき、法量分化の様相を持つ。

煮炊具は小型鍋が依然として定量存在し、器形変化を見せないまま、広口タイプとともに複数法量を持って存在する。短胴小釜は大小の二法量が確認でき、長胴釜は前段階よりもさらに胴部の張りがなくなり、長胴化する。1B期に見られたような、念仏林南遺跡の特徴（厚手で口縁部外反が短い）と額見町遺跡の特徴（薄手で頸部屈



第177図 1C期の土器群(1): 念仏林南遺跡資料(1/6)



第178図 1C期の土器群(2): 額見町遺跡資料(1/6)

曲が明瞭で長く外反する)の差異は当期においても存続するが、胴部の張りはどちらも長胴化を志向することで差がなくなっている。手付深鍋は小型化が進行し、飯の胴部のスリム化も進行している。

(2) 2期の土器様相

2期は三湖台地集落群の中で先行して成立した集落が終焉する一方で、新たな集落が成立する画期にあたり、集落再編期と位置づけられる。土師器は1期の在来型土師器に新たに移民系土師器が加わり、その影響下で、新たな器種が出現するとともに、旧来の在来型土師器生産に変化が見られる。土師器食膳具は在来型器種が衰退、消滅する中で総体的な量を著しく減らし、日常的な食膳具様式は須恵器で構成されるようになる。須恵器食膳具をはじめとして、土師器食膳具、煮炊具様相まで目まぐるしく変化する段階であり、須恵器食膳具では1期の坏H主体組成から3期の坏A・B主体組成へ、土師器食膳具では非ロクロ輪H主体組成からロクロ成形の赤彩輪F主体組成へと変革していく始まりの画期にあたる。造り付けカマドの普及とともに土師器長胴釜は1期の中で長胴化を進行させたが、当期はその長胴器形が一層明瞭となり、手付深鍋の衰退とともに定型化された浅鍋が出現してくる。土師器煮炊具においては移民系煮炊具の導入が大きな転換を呼ぶ。移民系煮炊具の在来型での生産は、在来型の煮炊具器形や成形技法を大きく変化させ、それは3期後半に成立する北陸型煮炊具の端緒となる。

以上のとおり当期の変化は多様であり、須恵器食膳具の変化でのみ時期区分するのではなく、様々な要素での変遷を追った上で細分する必要がある。ただ、当福年輪の根幹を本稿では須恵器編年に拠っているため、該当する時期の須恵器窯資料をあてはめ、2期細分する。つまり、2A期を那谷金比羅山5号窯に併行させて田嶋編年古代I 2期に、2B期を那谷金比羅山7-2号窯に併行させて古代II 1期に位置づける。なお、次の3A期も当期に包括させる理解も可能だが、3A期の朝鮮系煮炊具在来型や土師器輪F出現を重視し、ここに須恵器を置いた。

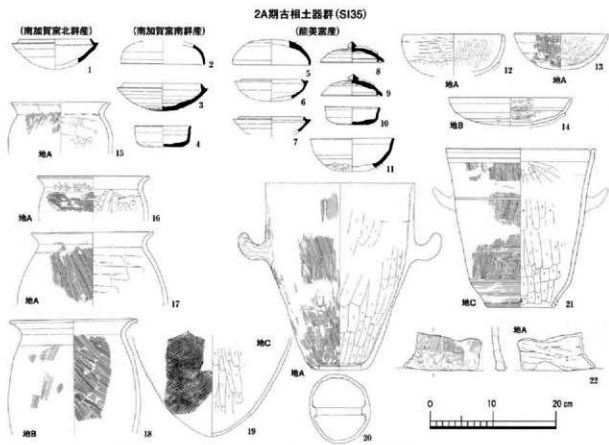
a. 2A期(第179図)

当期資料は額見町遺跡SI35、SI39資料を基準資料とする。SI39資料に1点の須恵器が共存するに止まっているため、比較が困難だが、SI35とSI39とで在来型長胴釜の器形に変化が見られることと、SI35の須恵器食膳具構成が依然として坏H主体で構成されている点、SI39出土の坏H蓋が極めて矮小化した形態になっていることを考え、SI35を古代I 2期の中でも古相に、SI39を古代I 2期の中でも新相に位置づける。

(古相段階：SI35資料)

食膳具の大半を須恵器が占めており、一部土師器輪Hが確認されるが、当器種の最終段階と言えるものである。これに代わってロクロ成形土師器輪Hが出現してくるが、当期は輪Fの祖形となる盤状器種(14)を確認するにとどまる。須恵器食膳具は坏Hが主体だが、定型化された坏G(4・8~10)が出現し、量を占める。身口徑で8cm台と当器種の最小径を測る段階で、蓋はつまみが宝珠形を呈し、返りもまだ長い形態を維持する。坏Hは能美窯で身口徑9cm台に小型化した、立ち上りの内傾する形態が出土するが、当器種の最終形態と言えるものではなく、さらに矮小化する段階が存在する。南加賀窯では北群産で身口徑11.5cm、南群産で12cmを測っており、坏Hが依然として大型法量を維持していることが窺い知れる。この時期の坏H小型化が窯場によって異なることを示す良好な資料である。須恵器産地は南加賀窯南群産と能美窯産が大半を占め、北群産は少ない状況が続く。

煮炊具では小型鍋が確認できず、長胴釜は1期の在来型技法を踏襲する17と長胴器形で内面ハケ目調整を施す18とが確認される。また、外面Ha類叩き成形で内面ケズリ調整を施し薄手の作りで底部尖底状の19が出土しており、叩き成形を施す長胴釜としては最古資料となる。胴部外面にカキ目調整、沈線を施すロクロ調整の飯(21)や調整方法は在来型であるが、底部に一本浅流しをもつ2孔式底部の飯(20)など、これまでの在来型煮炊具の系統では存在しなかった新たな形態や成形技法をもつ煮炊具が出現する。これらの煮炊具について、筆者は朝鮮系軟質土器と位置づけ、(望月1999b)、当集落における朝鮮系移民が自前で土師器生産を行った結果の産物と理解する。なお、当期に出現する新たな煮炊き具施設として、甕形土製品がある。甕形土製品については、5世紀末を前後する時期に加賀地域では導入を確認できるものの、この時期の出土は多分に祭祀的意味合いが強く、その後は断絶する傾向にある(望月2003, 266頁)。1期においても三湖台地集落及び江沼、能美地域では確認できておらず、新たな煮炊き用土製品として当期に出現したのと言えよう。調整などは在来型のハケ目調整であるため、朝鮮系移民と結びつけて考えることはできないが、当期に出現する移民系煮炊具とともに、新たに導入された煮炊き用具類と位置づけられよう。



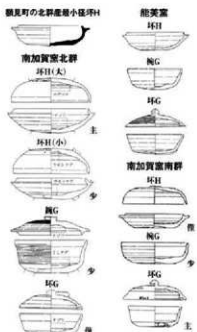
第179図 2A期の土器群：舘見町遺跡資料(1/6)

〔新相段階：SI39 及び SI26・SI29 資料〕

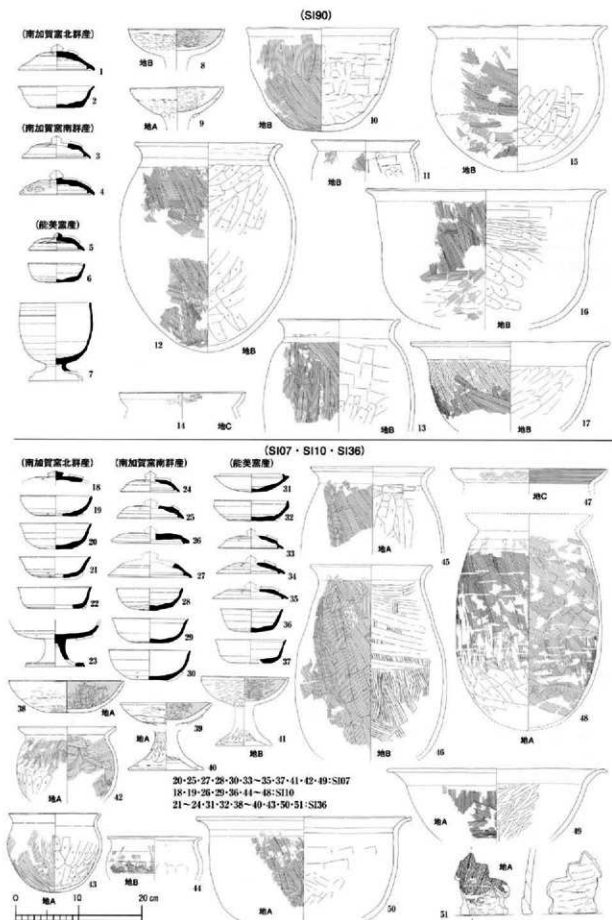
当期の基準資料としては SI39 を上げるが、これを補完する資料として SI29 の床面一括の須恵器環 G 資料と SI26 床面出土の須恵器環 G・環 H、土師器浅鍋資料を加える。SI29 の環 G は南加賀室北群産で、身口径 8 cm 台と最小径を測るが、蓋の返りは微弱化しており、つまみも低くなるなど、古相段階の環 G よりも後出の様相を持つ。また、SI26 の環 G 蓋も、つまみ形態や口径などから当期に位置付けられるものだが、南加賀室北群産のものであり、やや口径が大きい。これら環 G に共伴する環 H は、南群産の 26、能美窟産の 29 とともに、矮小化した形態を持ち、環 H の終焉段階に位置づけられる。しかしながら、南加賀室北群産環 H については、23 に上げるような依然として 10 cm 台の大型口径を維持しており、型式差のある環 H が同時併存している。南加賀室では矮小化した環 H が存在しないわけではないが、環 G が出現する段階でも、第 180 図に上げるように大型環 H が主体的に存在する。南加賀室北群資料として上げたものは戸津六字ヶ丘支群 2 号室最終床資料（望月 1999a）で、環 G の出現はあるが、依然として主体は環 H で、つまみ蓋付き器種も鏡 b 主体で構成されるなど、1 期の様相をそのまま引きずる特徴を持つ。これに対し、南群資料の那谷金山羅山 5 号室（望月・福島 1988）は一部小型化した環 H が遺存するもの、ほぼ消滅段階にあり、環 H は蓋の逆転身化した無蓋碗 G が定量生産されるに止まる。食器具の大半は環 G が占めており、その食器具組成は能美窟に近い。能美窟については当期の須恵器強を調査しておらず、詳細はわかっていない。ただ、当期の古墳供献資料（河田山 6 号墳）から類推すれば、環 G 主体ながらも矮小化した環 H が定量遺存する状況と予想される。南加賀室北群産の環 H は最小径段階でも、第 180 図左上に示す口径 10 cm 程度が最終形態であったと予想され、極度に矮小化する前に環 H は消滅したものと理解する。

以上、食器具は須恵器主体で構成されるが、この時期に須恵器系の高環 G や環 G を模した土師器が出現してくる（写真 24 - 57・58）。酸化鉄粒を胎土に練り込む赤色品で、当期の朝鮮系煮炊具と同様に軟質土器を意識した製品と考えられる。ただ、器面最終調整にミガキ調整が施されており、煮炊具同様に覆い焼きで焼成される点など、在地の中での土師器生産の延長線上にある。煮炊具は古相段階よりも、在来型長脚釜が胴部細長く伸びる器形へ変化し、定型化された浅鍋が出現する。浅鍋は内面に一部粗いミガキ調整を施すもので、口縁部外反が弱く深身を呈するなど、1 期の広口タイプ小型鍋的な様相も残す。ただ、この時期以降に定着する器種であり、当期を定型的浅鍋の出現期と考えておきたい。SI39 で確認される朝鮮系煮炊具は、古相段階同様に器形に特徴をもつ煮炊具が目立ち、出現期特有の在地化されていない様相を顯示する。ただ、外面ハケ目調整や内面ケズリ調整を併用しており、その辺が在地の土師器生産を土台に移民系煮炊具が成立していることを予感させるのである。

さて、これら土師器だが、1 期では地元 A 類胎土に統一されていた状況から、この時期に新たに地元 B 類・C 類胎土が加わる。新たに出現する胎土は朝鮮系煮炊具やロクロ成形食器具などの新規出現土師器にのみ見られる胎土で、在来型技法による碗 H やハケ目調整煮炊具は依然として地元 A 類胎土を使用している。移民系土師器生産が新たな土師器生産の在り方を生み出したものと言えるが、地元 B 類については額見町遺跡内で土師器焼成される胎土との同質性から、三湖台地内での土師器生産である可能性が高い。A 類胎土についても集落近傍での土師器生産を想定しているが、例えば江沼盆地周辺を中心としていた土師器生産から三湖台地へ移動した可能性や新たな意識の元での胎土調整が、A 類から B 類へという変化を生んだものと考えたい。科学的分析を行っている訳ではないため、確認はないが、異なる土師器生産の導入が B 類胎土を生んだことに間違いはないだろう。2 期における土師器転換様相を考える上で、極めて重要な要素である。なお、C 類胎土については江沼領域内から外の胎土と考えている。能美窟産須恵器に類似するきめ細かい白色粘土を素地としており、能美窟周辺の丘陵部胎土、能美窟近隣である可能性もある。また、1 期まで確認できた煮炊具へのヘラ記号だが、当期をもって記入が確認できなくなる。SI39 の煮炊具では在来型技法の A 類胎土にヘラ記号はあるが、朝鮮系 B 類胎土には記されておらず、これ



第180図 2A期併行の南加賀の在地産須恵器食器具（1/6）



以降、B類胎土が主流となる中、ヘラ記号が確認できなくなるのは、煮炊具へのヘラ記号記入がA類胎土の土師器生産者が保有する記号であったことを物語るだろう。

以上述べたように、2A期は伝統的な古墳時代の土器様式から、新たな古代的土器様式へと大きくシフトしていく重要な画期と位置づけ可能である。須恵器では坏G、土師器では移民系煮炊具とロクロ成形の赤色食膳具が出現する画期であり、当期の中で急速に進行し、それが後の土器様式を大きく変えることとなる。加えて、三湖台地集落群の再編時期でもあり、集落再編に伴い新型支柱型穴建物が先駆的に導入されることも大きな画期要素と言えよう。

b. 2B期 (第181図)

当期資料は額見町遺跡SI90一括資料を基準とするが、煮炊具にやや特異な器形をしたものが多く、一般化できない様相もあるため、SI07・SI10・SI36の資料で補完する。当期は2A期同様に、土師器食膳具が目立たない時期で、食膳具は須恵器坏Gを主体に構成される。2A期に続き一部坏Hの最終形態(31・32)が能美窯産で残存するが、定量を占める段階ではなく、1期の伝統的器種を完全に払拭する段階と言える。坏G身は体部立ち上がりか直立する口径9cm前後の最小径タイプが存続するも、2A期よりもや体部が外傾し、蓋は厚手で作りの雑なものへ変化する(5・6・33・36)。加えて口径11.0～11.5cm程度を測るひとまわり大型の坏G身(19～21・29・37)が主体を占めるようになり、器形は腰が丸く立ち上がるが、口縁部にかけて外反するものへと変化する。さらに、2や22のような内底面が平滑で口縁部外反する坏A器形に類した口径11.5～12cmの一群も出現しており、新たな法量の坏身が加わることで、法量分化の兆候を見始める。また、新器種として坏部鉢形を呈す高坏G大(23)が加わることも新しい要素と言えよう。器種組成図には上げていないが、SI90からは筆立て付足円面硯が出土する。坏G蓋転用硯も使われており、額見町遺跡へ黒書行為が波及した時期と位置付けできよう。

さて、2A期までの須恵器食膳具に見られた能美窯産に対する南加賀窯産の型式変化の遅れは、当期には感じられなくなるが、逆に能美窯産坏Gがより古い形態を残す傾向を見せる。先述した矮小化された坏Hを残存させるのも能美窯であり、南加賀窯の方が伝統的器種、器形の払拭が早い。この現象を招いた要因として、能美窯の食品生産意識が形態変化を遅らせたとも言えるが、2A新相段階で南加賀窯南群が見せた坏Hから坏Gへの転換の貫徹度もその要因の一つと考えられよう。ただ、当期に位置づけられる須恵器窯は、南加賀窯南群でのみ確認されているものであり、須恵器窯出土の同時期性を確認していない段階では確認に欠けるものと言えよう。

土師器は2A期同様に在来型を主体として定量の移民系が加わる段階である。2A期のような在来型と移民系間における胎土の違いは認め難く、在来型土師器の中にB類胎土が一定量を占める。A類からB類への変化は、新たな土師器生産地への移行を示すのか、土師器胎土調製方法の変化を示すのか、定かではないが、2A期に出現した移民系土師器は新たな土師器生産集団を生み出し、それが介在することで在来型土師器生産に何らかの変化が発現したことは間違いないだろう。当期はまさに土師器生産形態に変化が生じ、進行した段階と評価されよう。

土師器食膳具では2A期同様に、様相変化の伏期にあり、減少期にある。そのため、組成が見づらいが、2A期も含め、在来型の内黒焼成による輪Hと高坏Hを基本組成とし、これに朝鮮系と言えるような赤色のロクロ成形品が出現してくる段階と位置づけられる。在来型では内黒輪H(38)の器形がかなり開く輪形を呈す点と内黒長脚高坏H(39～41)の坏部小型化と脚部低下が、この時期の変化様相と言えよう。

煮炊具についても在来型を主とし、一部移民系の出現する段階である。当資料に朝鮮系は確認できないが、他の移民系として近江系煮炊具が確認される(望月2007b)。口縁部受け口状器形で胴部砲弾形を呈し、内面はハケ目調整、外面は胴部下半から底面にケズリ調整を施すもので、長胴釜(14・47・48)と短胴小釜(42)とがある。このように主体となる移民系煮炊具は異なるが(当期資料に丹波系煮炊具の確認はないが、越前地域や北加賀地域では当期に丹波系移民集落が出現しており、丹波系も移民系煮炊具の一角をなすとみられ、望月2007b)、移民系が定量存在するというのが当期の特徴と言えるものである。また、在来型煮炊具の2A期からの変化要素として浅鍋の定量存在が上げられる。当期は深身で口縁部が短く外反する初期形態を主体とし、内面に粗いミガキ調整を施すなど出現期的要素が強いが、17や49のような口縁部を長く外反する器形も併存しており、全体的に浅鍋定着の様相を見せる。長胴釜は胴部砲弾型や下膨れとなる器形のが主体を占めるようになる。当該段階では在来型に内面ハケ目調整を施すものではなく、在来型煮炊具に移民系煮炊具からの顕著な影響は認め難い。

(3) 3期の土器様相

3期は額見町遺跡内での堅穴建物増加や新たな建物様式として壁柱型堅穴建物が増えるなど、三湖台地集落群内にさらなる移民が流入してくる段階であり、これ以降8世紀前半までの間で集落はピークを迎えるものが多い。土師器は2期に出現した移民系煮炊具のうち、特に朝鮮系煮炊具が在地化し、その量を増加させるとともに在来型煮炊具は減少し、これまでの在来型土師器生産とは異なる生産の在り方が主流となる。当期の前半段階では三湖台地等地元での生産枠を超えないが、後半には須恵器窯場での生産が加わり主流となる。土師器食膳具は在来型器種が初期に残るが、同時に椀Fが出現し、暗紋を多用して宮部系土師器食膳具を志向していく。土師器食膳具は赤彩や赤色胎土調整などによる赤い土師器となり、祭器としての役割を担い、須恵器は日常の食膳具となって、その数を増加させる。須恵器食膳具は手持ち食器としての形態を持つ底部丸底の坏H、坏G器種から底部平坦な置き食器として形態を持つ坏A・坏B器種へと入れ替わる段階で、それは食器として使われる場面や使われ方が変化したことを示す。畿内では「律令的土器様式」(西1986)と呼ばれる多様な器種分化により階層性を具現化させた土器様式が成立する段階であり、当地域の器種組成は、律令的土器様式と呼べるものではないが、その影響を受けて変化を見せ始める初期段階と言えよう。次の4期には坏Bの法量分化が定着、在地化し、その中から北陸的要素を色濃く出していく。

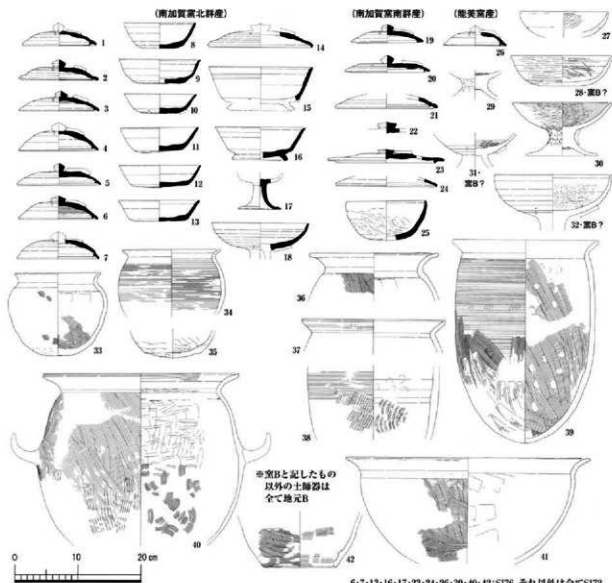
以上、当期は各器種において段階的な変化が見られる時期だが、大きく前半と後半に分け、各時期2編分し、4期に区分する。須恵器編年をもとに提示すれば、前半期の3A期は湯屋B-1号室に併行させて田嶋編年古代Ⅱ1期新段階からⅡ2期最古段階に、前半期3B期は戸津六ヶヶ丘4号室から湯屋A1-2号室に併行させて古代Ⅱ2期に、後半期3C期は戸津46号室等に併行させて古代Ⅱ3期に、後半期3D期は戸津62号室や矢田野向山1号室1次室に併行させて古代Ⅲ期古段階に位置づける。

a. 3A期 (第182図)

当期の基準資料として額見町遺跡SI72・SI76をあげ、須恵器坏Bと定型化した坏Aの出現段階と位置づけておく。坏G身は体部外傾化した器形が一部(8・26)残るが、主体は内底面が平滑で体部外傾化した口径12cm台を測る坏A化したものであり、また、底面が広く3B期に一般化する定型化した坏A身(12・13)も出現する。蓋も全体的な器形は扁平化し、扁平紐の出現など、3B期に定着する要素を見始める。ただ、主体を占める器種はⅡ1期の範疇にある坏G系統と言え、Ⅱ1期新段階からⅡ2期最古段階に該当させるのが妥当である。14・15の坏Bは体部沈線を持つ金属器系の作りのよいもので、当器種の起源的形態を持ち、Ⅱ1期の範疇で考えることに矛盾しない。しかし、SI76出土の坏B身16は高台が踏ん張る古手の形態を持つものの、全体的な器形は定型化された形態と見る。総じてSI76の須恵器はSI72よりも6・13・23など新しい様相を有しており、坏Bの定型化を考慮すれば、SI72に後出する段階、つまりⅡ2期に下らせるのが妥当と言えるだろう。

当期の須恵器食膳具は、坏A、坏Bの出現など新たな器種への転換が見え始める段階であるが、後述する土師器食膳具様相も含め、萌芽段階という位置付けが妥当である。依然として転換期の混沌とした様相の中にある段階であり、それは坏Gが主体を占めていることに現れている。ただ、確実に新しい器種組成を取り入れ、坏B、坏A主体組成への足がかりを作るという意味で、当期をもって3期とした。加えて、2期からの変化として、須恵器主要生産地が南加賀室北群主体となっていることが上げられる。2期で主体を占めた南加賀室南群産は依然として高めの比率を保つが、その一翼を担った能美窯産は激減しており、当期の終末で南加賀室南群が終焉を迎えるに伴い、4期にはほぼ南加賀室北群産へ統一される様相を生む。

土師器食膳具では在来型からロクロ成形技法へと移行する段階である。在来型は高坏に内黒焼成の29・30が存在するが、椀Hは浅い碗形を呈す小型の27へと変化しており、終焉期的様相をもつ。当期の土師器食膳具で注目されるのは赤色椀F(28)の出現である。外面は回転を使用したような横ミガキ調整、内面には線な放射状暗紋が入り、能美窯産の可能性が高い。32の高坏Gも同じ胎土であり、内面を磨き調整するが、作りや器形など当期の須恵器高坏Gと大差ない。当資料の併行期にある能美窯湯屋B-1号室では赤彩椀Fやロクロナデ調整を施す浅鍋が生産されており(第183図)、須恵器窯場での土師器生産開始を示す。これ以降進行していく土師器生産の須恵器窯場集約の端緒となるものだが、煮炊具胎土に関しては当期までは依然として地元胎土で占められる。ただし、地元胎土でも伝統的なA類胎土は在来型煮炊具の中でも伝統的な器形を保持するものに一部残存する程度で、大半は地元B類胎土が占める状況となる。



第182図 3A期の土器群：額見町遺跡資料（1／6）

土師器煮炊具は、移民系煮炊具が定着、在地化していく段階と位置づけられる。まず、朝鮮系煮炊具では後の北陸型煮炊具の器形へ繋がる34・35・37・38が確実に出現し、加えて39のような最終調整において胴部下半外面と内面全体にハケ目調整を施すという、在来型技法を併用する一群が出現する。このようなものを移民系煮炊具の在地化と評価しており、36の長胴釜も同様の位置付けがなされよう。当煮炊具は頸部屈曲が顕著で、膨張り器形を呈し、赤い発色の胎土調整を行うもので、丹波系煮炊具（望月2007b）の特徴を有するが、当煮炊具最大の特徴と言える口縁部内面のロクロヒダ状の段が弱く、在地化されたものと評価されよう。40の手付深鍋についても全体的な器形や口縁部形態から大和系煮炊具と言えものだが（三好1996）、胴下半の叩き出し成形は内面当て具を木製無紋当て具で行っており、朝鮮系との技術融合の可能性はある。在来型煮炊具との比率については出土遺構によって差があり、移民系を主体とする段階とはまだ言い切れないが、在地化されたものも含めれば、移民系煮炊具生産が定着した段階と位置づけられよう。

以上、3期成立の両期として3A期を設定しているが、両期要素としては須恵器食膳具における坏A、坏Bの出現と法量分化、土師器における定型的な赤色（赤彩）碗Fの出現と移民系煮炊具の在地化が上げられる。土師器様相変革に伴い、須恵器窯場での土師器食膳具生産が開始され、土師器の集約生産化の端緒となる。また、当期は三湖台地集落群の拡大期であるとともに、新型竪穴建物様式へと転換していく両期でもある。

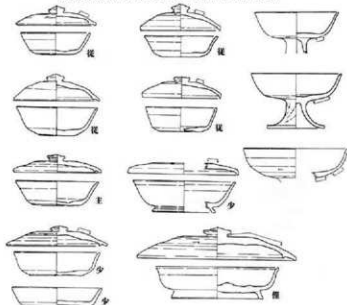
b. 3 B 期 (第 184・185 図)

当期の基準資料として須見町遺跡 S112・S117・S123・S154・SK38 をあげる。資料数が多く、当資料の中で時間幅を想定できるが、各遺構に須恵器食膳具の型式的な偏りは認め難く、当資料内での細分は困難である。出土する須恵器食膳具は古代Ⅱ2期の範疇でおさまるものばかりだが、南加賀窯北群の当期古段階資料とする戸津六字ヶ丘4号窯に対比すると、坏Aの小口径タイプや坏Gから展開した深身タイプが欠落する等、総じて新しい様相を帯びるものが主体となる。能美窯産の須恵器が当資料においても南加賀窯北群産よりやや古い器形を残しているため、比較は困難だが、古代Ⅱ2期の中でも新段階に位置づけられる湯屋A1-2号窯に近い様相をもつと言えよう。ただ、これに共伴する土師器は3A期からの様相変化に断絶感はなく、Ⅱ2期古段階に位置づけられる竈穴建物資料が存在したとしても、大勢に差して影響は生じないと考えている。

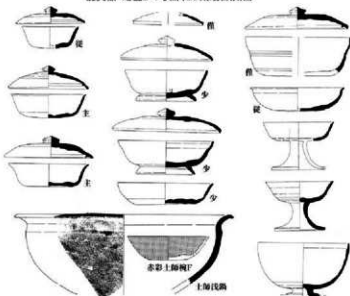
須恵器食膳具は坏G的な器種が姿を消し、坏Aと坏Bで占められる段階である。坏A身は体部外傾後口縁部で外反する器形(6~9・11・12・28・29・42~44)が主体となり、これに伴う坏A蓋は扁平化する。つまみは算盤玉状を呈すものもあるが、全体的に扁平化し、Ⅱ3期的な扁平紐(3・14)も定量見られる。また、扁平化した坏Aも定量存在し(10・13・30)、坏Bが組成の中で定量を占めてくる。坏B身は坏A身と体部器形、法量が類似する。高台はまだ高く踏ん張る形態を主とするが、34のようなⅡ3期に主体となる器形も存在する。ただ、全体的に高台は高く、深身器形を保持しており、46の金属器系タイプや19・20の体部沈線をもつ深身小口径タイプも存在する(雷丘東方遺跡第1次SD110出土類似)。

当資料では身口径20cm以上を測る特大坏Bは確認できないが、多様な法量のものが存在することも大きな特徴と言えるだろう。坏B蓋は全体的に扁平だが、丁寧な作りのものが目立ち、法量も複数存在する。高坏はⅡ1期的な小型坏部をもつ高坏G小

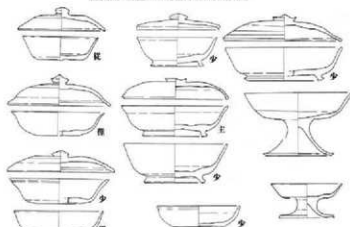
南加賀窯北群・戸津六字ヶ丘4号窯(Ⅱ2期古段階)



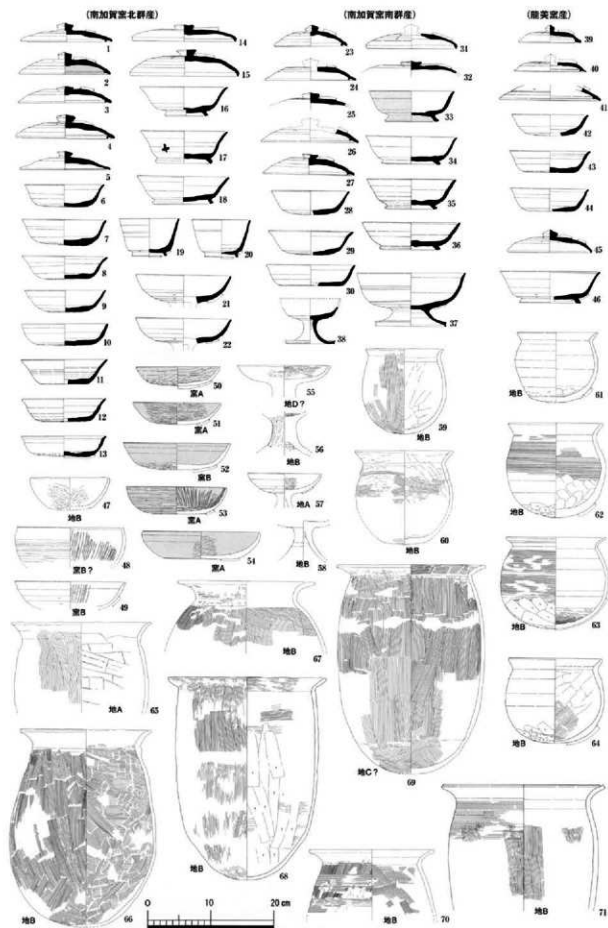
能美窯・湯屋B-1号窯(Ⅱ2期最新段階)

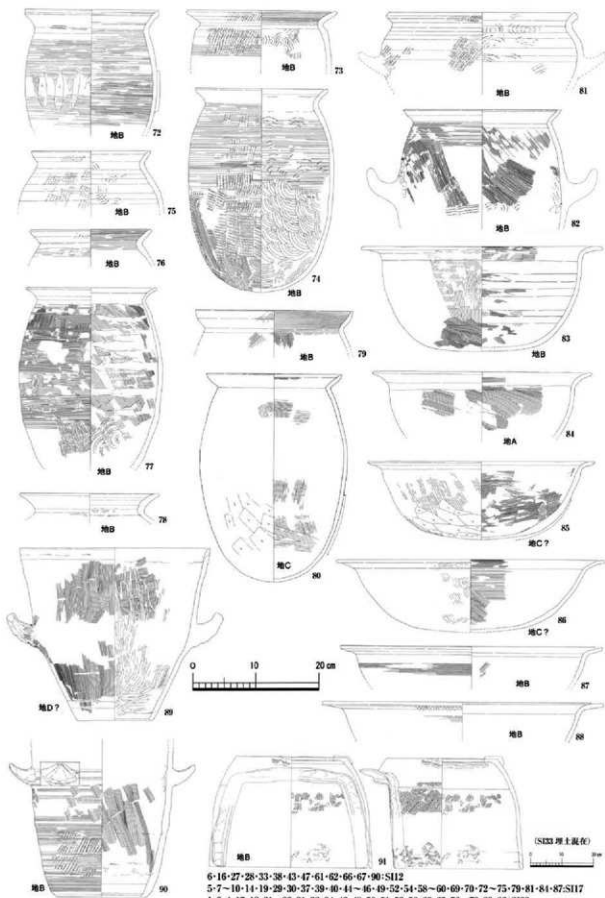


能美窯・湯屋A1-2号窯(Ⅱ2期新段階)



第 183 図 古代Ⅱ2期の南加賀の在産須恵器 (1/6)





第185図 3B期の土器群(2)：額見町遺跡資料(91のみ1/12、他は1/6)

(38) や高脚碗系の大型品 (37) も依然として存在するが、主体は浅い碗形環部を有す高環G大 (21-22) であり、Ⅱ3期にはこの器種に淘汰される。

以上のように須恵器食器の多様化に伴い、食器の出土量は確実に増加し、加えて土師器食器に赤彩品が加わる。赤彩土師器は赤色胎土調製により赤い土師器を作り出す方策から赤く発色させる化粧土を塗布し、磨き上げることで更なる赤い土師器を作り上げたものであり、赤色土師の進化型と言えるものである。赤彩土師器の出現と底部ヘラ切り輪Fの定型化は連動したものと見え、放射状暗紋に加えて、53のような螺旋状暗紋が出現してくる。ⅠC期に始まった宮都系土師器食器の完成期と言え、同時にこれら土師器産地は、従来の地元生産から窯場生産主体へと移行していく。能美窯の生産は3A期に先行的に始まるようだが (第183図)、南加賀窯での生産は当期からで、三湖台地集落群では北群産輪Fが主体を占めるようになる。宮都系環A模倣と言える口縁部内湾器形のタイプ (48-54) も一部残存するが、主体となるのは浅身で体部が開くタイプ (49-52) である。底部は依然として丸みをもつ器形であるため、宮都系環A模倣とは言えないが、この時期に見られる宮都での環Cから環Aへという主器形の交代現象に伴い、当地域でも環A志向と言える底部の大きな器形へと変化したものと考えられる。高環は伝統的な内里高環Hを依然として残し、クワロ成形の高環Gとで構成される。

煮炊具は在来型煮炊具と移民系煮炊具とで構成されるが、額見町遺跡ではこの時期を境に移民系煮炊具、特に在地化された朝鮮系煮炊具が顕在化する。ただし、在来型で構成される堅穴建物資料も依然として多く、額見町遺跡以外の三湖台地集落群ではむしろそれが大半であったと言えよう。在来型はそれまでの伝統的と言える内面ヘラナデ後ケズリ調整技法が当期も存続するもの、器形は大きく変化し、頸部括れの乏しい65や砲弾形彫部をもつ68のような器形となって、器内を薄くする。また、内面ハケ目調整で仕上げるタイプ (66-69) が定量存在しており、近江系技法の影響とも考えられよう。当期は移民系煮炊具が朝鮮系主体となる段階だが、近江系 (79-80) や丹波系 (67-78) も少ないながら定量存在する。両系統とも地元生産されることで在地化の傾向も見せるが、朝鮮系のように在地化を色濃く出さず、在地化したものが定着する前に衰退、消滅していく。

朝鮮系煮炊具は、当期もかなり故地の器形に忠実と言えるような平底器形を呈す短胴小釜 (61) や口縁端部面形成する長胴釜 (72)、三角板状把手を付し口縁端部面形成する手付深鍋 (81) が存在するが、主体は在地色を帯びるものである。最終調整にハケ目調整を併用したり、土師器的な口縁部器形を呈すなど在地化の発現は様々だが、朝鮮系の特徴的技法と言える叩き成形・カキ目調整と近江系の特徴と言える口縁部受け口器形を併せ持つ手付深鍋 (82) も出現するなど、移民系同士の融合も確認される。

また、当期は浅鍋に初期の深身器形が消え、口縁部長く外反する定型的器形のものに統一される段階である。加えて、煮炊具組成の中での浅鍋の比率は増加し、古代的な土師器煮炊具の基本組成が確立された時期と言えよう。浅鍋の技法は内外面ハケ目調整を施すものが主体だが、外面下ケズリ調整を施す85やカキ目調整を併用する87-88も出現しており、以降の浅鍋に多用される調整技法が出現してくる。飯は在来型と朝鮮系とが存在し、甕形土製品においても朝鮮系が出現する。91に上げた朝鮮系甕形土製品は器面成形に叩きを施すもので、方形の付け庇が付く。平坦な天井部をもち、掛け口を円形に切り取る特異な形態のもので、7世紀後半の韓国慶州雁鴨池遺跡で出土するものに極めて似ている (高他 1992)。国内では5世紀後半の堺市伏尾遺跡や5世紀末～6世紀初頭の寝屋川市長保寺遺跡、5世紀代の東虎川遺跡など朝鮮系移民集落とされている遺跡でも類似した甕形土製品が出土しており、かなり忠実に朝鮮半島系のもを再現したと言えるだろう (望月 2007a)。

以上の煮炊具は全て地元産であり、食器のような須恵器窯場産のものは確認できない。一部に能美窯産の可能性をもつものが確認されるが、地元C類胎土との差異については確認が持てない。

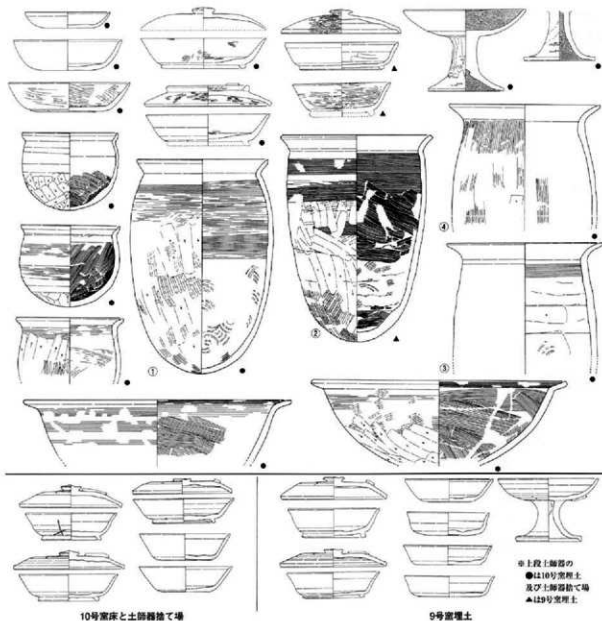
c. 3C期 (第187図)

3B期までを3期の前半とし、3C期以降を後半とする。3期は移民系煮炊具の在地化とその影響による在来型煮炊具生産の変質、それに付随して生じた土師器生産の須恵器窯場導入による北陸型煮炊具成立の段階と位置づけられているが、前半期までは食器生産を須恵器窯場へ導入しただけで、煮炊具生産の導入は後半期において達成される。3C期は一部の須恵器窯場において生産供給が開始されるが、主体とはなっておらず、3D期以降に額見町遺跡内の煮炊具は、須恵器窯場産主体化への方向性を見せる。つまり、3C期は前半から後半への転換期にあたり、食器系においても重要な様式転換が行われる時期である。

当期は額見町遺跡 S104 と SK35 を基準資料とする。須恵器食器系から古代Ⅱ3期に位置づけられるが、出土

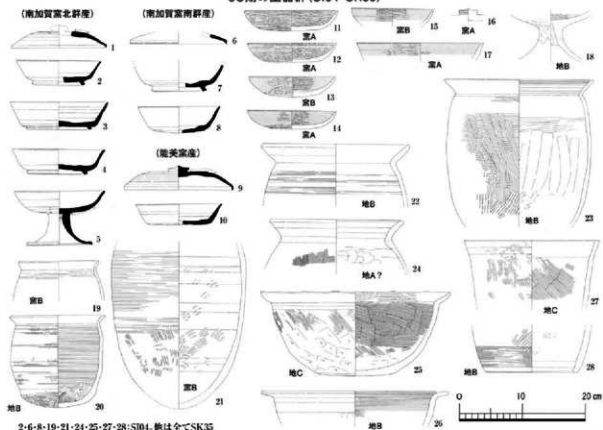
量が少なく、当期の細かく細分される空福年（望月1994）の中で、どこに位置づけるべきかを判断することは難しい。須恵器は概ね坏B主体の構成で、3B期に顕在化した多様な法量分化は取返し、一器種一法量に整理されている。産地は南加賀室北群産を主に、南群産と能美産を従にして構成される。土師器食膳具は赤色土師器や3B期まで僅かに存在した椀Hの流れを汲む器種が姿を消し、定型化した赤彩椀Fにはほぼ統一される段階である。椀Fは3B期の器形よりも底径が大きく、器高が低くなり、比較的法量もまとまる傾向を持つ。産地は須恵器空場産にはほぼ統一され、地元産は一部高坏に残るのみとなる。高坏に関しては在来型の高坏Hを残存させる傾向が強く、脚部は低くなっているが、内黒焼成を保持する（18）。赤彩食膳具主流の中で、当期の新相段階には須恵器器形を模した坏A・坏Bが出現する。当期の出土量は僅かだが、4期には定着の様相を見せる。

土師器食膳具が空場産へ統一される一方で、煮炊具は地元産が依然として主体を占める。20・22・23・26のようにハケ目調整の一部併用する在地化した朝鮮系煮炊具が主体で、僅かながら24の丹波系も確認されるが、在地化された朝鮮系煮炊具以外の移民系煮炊具は当期をもって消滅する。地元産はB類胎土が主体だが、C類も定量存在している。ただ、先行的に須恵器空場で煮炊具生産の始まる能美空産は、一般集落へも僅かながら供給していた可能性が高く、北陸型と言える形態をもつ19・21は能美産産の可能性が高いだろう。



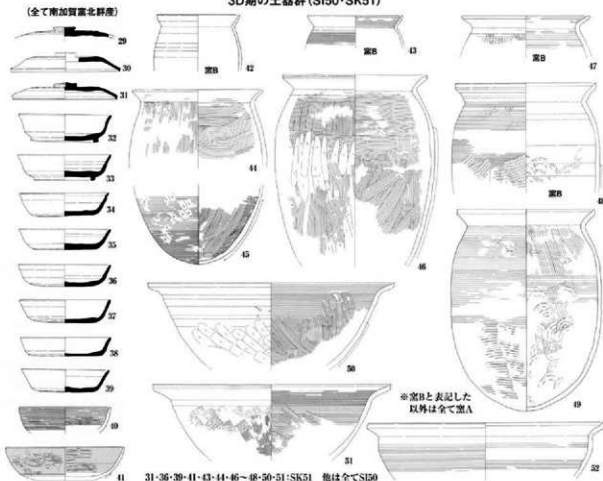
第186図 二ツ梨豆岡向山窯跡C地区出土土器（上段は土師器、下段は須恵器、1/6）

3C期の土器群 (SI04・SK35)



2・6・8・19・21・24・25・27・28・SI04.他は全てSK35

3D期の土器群 (SI50・SK51)



31・36・39・41・43・44・46～48・50・51・SK51 他は全てSI50

* 窯Bと表記した
以外は全て窯A

第187図 3期後半の土器群：額見町遺跡資料(1/6)

さて、当期の南加賀室北群でも、古代Ⅱ3期の後葉段階、戸津28号室併行期には、須恵器窯場内で土師器煮炊具の生産を開始していることが最近の調査で確認されている（小松市2005）。二ツ梨豆岡山窯跡C地区で検出した9・10号室の埋土と周辺土器捨て場には、須恵器食膳具とともに赤彩碗F、赤彩杯B、外赤彩内黒の高杯Hと高杯G、そして短胴小釜、長胴釜、浅鍋が大量に廃棄されており、当地区での土師器焼成遺構の確認はないが、須恵器窯場内に生産された土師器と見て間違いない。いずれの煮炊具も使用痕跡は確認できず、土師器生産に伴う製品選別の際の廃棄場のような遺構だったろう。当資料は赤彩杯A・Bの出現時期を示す資料であり、同時期に内黒高杯H、高杯Gが依然として生産されていることを示す。加えて、長胴釜では、北陸型煮炊具として確立した形態をもつ①と、内面ハケ目調整を併用した②、口縁部器形は在来型だがカキ目調整と底部叩き出しを行う③、器形や技法ともに全く在来型である④とが同時期に生産されていることを示しており、北陸型古代土器生産体制の成立初期の様相を示す。在来型系統の煮炊具と北陸型煮炊具として定型化した煮炊具とを同じ須恵器窯場で生産していることは、様々な出自を持つ製作者が混成するような土師器生産組織であったことを示すだろう。また、各器種において朝鮮系技法と言える胴部成形叩きを遺存させていることは、その技術の根底に朝鮮系移民の煮炊具生産技術があったことを物語ると考えたいのである。

d. 3D期（第187図）

当期は顔見町遺跡 Si50、SK51を基準資料とする。まとまった須恵器食膳具が出土しており、法量や器形などから戸津62号室（小松市1991）や矢田野山1号室1次室に併行させ、古代Ⅲ期古段階に位置づけられる。須恵器食膳具は3C期同様にご一種一法量の杯A、杯Bで構成されるが、扁平化の進行と杯A量の増加が確認できる。当期には上位の遺跡において一部、多様に法量分化した杯B組成や盤類、金属器器種を伴う食膳具組成構成が存在しており、食膳具様式は二極分化の様相を見せる（望月1994、36頁）。宮都で確立された律令的土器様式が、地方の場へもたらされたもの言え、公的な饗宴の場における食膳具組成を中心に、律令官人の階層性を具現化させる目的でいち早く導入されたものと言えよう。この二極化は4期には解消され、宮都系土器様式を在地的で受け入れた新たな土器様式を成立させていく。なお、当資料の須恵器は全て南加賀室北群産であり、これは南加賀室南群の終焉に伴う北群への集約化が図られたことを示すだろう（以下、南加賀室＝北群産を示す）。

土師器食膳具は良好な資料を得ていないが、3C期に定量存在した浅身の赤彩碗Fと41のような深身大型の赤彩碗Fで構成されると考えられる。南加賀室産で占められ、地元産はほとんど確認できなくなる。土師器煮炊具は全て窯場産に統一されている。ただ、他の遺構資料では地元B類も定量存在しており、依然として地元生産も継続している段階と見ている。当資料では44の在来型煮炊具も須恵器窯場となっており、北陸型として完成された形態を持つ48・49と在来型技法との融合をもつ45・46とが一緒に生産されていたのであろう。3C期の終末段階で見られた様相であり、3D期の中で器形がより北陸型として定型化し、4期には在来型煮炊具や在来技法を併用するものなどは収束していくのである。

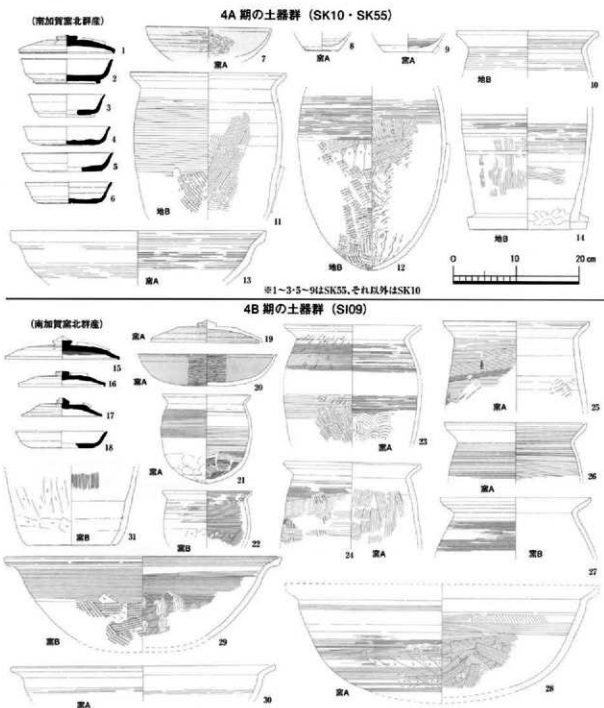
(4) 4期の土器様相

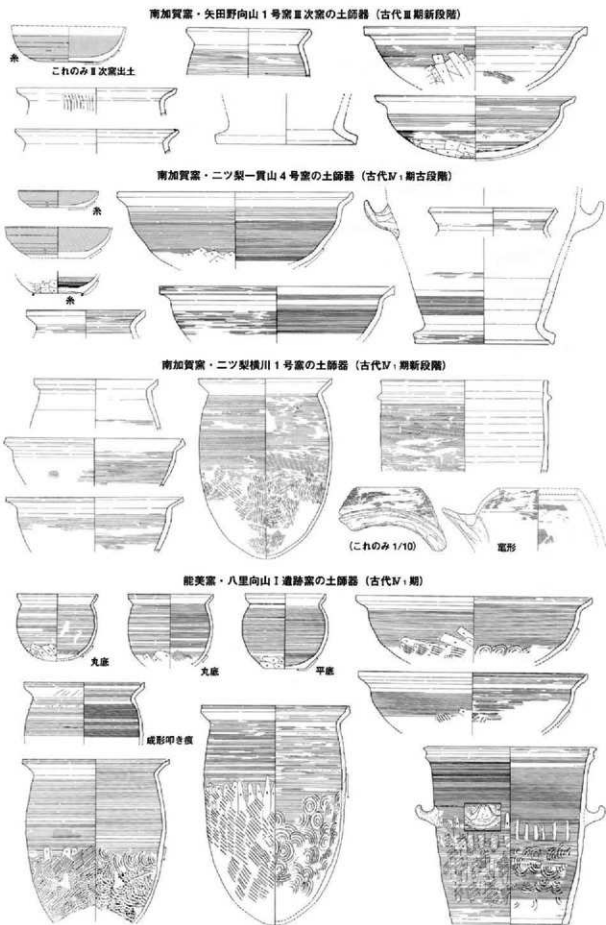
4期は顔見町遺跡内で主要な建物様式が堅穴建物から掘立柱建物へと移行していく段階であるとともに、それまで拡大続けてきた三湖台地集落群が停滞または衰退の様相を見せ始める段階である。3期の中で須恵器窯場内に導入された土師器生産が定着し、須恵器・土師器の集約生産が完成される。つまり、北陸型古代土器生産体制の確立期であり、一部一室体制の完成期とも称される（望月1997a）。また同時に、3期に導入・定着を見た移民系煮炊具や宮都系食膳具は北陸型煮炊具、赤彩食膳具として定型化し、北陸型と言える土師器組成を成立させる。当期の前半では一部在地的土師器生産が遺存する傾向を見せるが、後半には須恵器窯場産に統一され、土師器煮炊具の器形、技法を統一させるとともに、土師器食膳具はへら切り碗Fから糸切り碗Aへ移行する。

以上、当期の土器群については、大きく前半と後半に分け、さらに各期を2細分して4期区分する。各期を須恵器編年軸に基づき編年の位置付けを明示すれば、前半期の4A期、4B期はそれぞれ矢田野山1号室Ⅲ次室、二ツ梨横川1号室に併行させて田嶋編年の古代Ⅲ期新段階、古代Ⅳ1期に、後半期の4C期、4D期は箱宮5号室、二ツ梨峠山10B号室に併行させて古代Ⅳ2古期とⅣ2新时期に該当できる。なお、当期の土器群は、資料的に恵まれておらず、全体像を把握するには至っていない。このため、本稿では4期前半のみを概観するにとり、今後報告する資料が整った段階で、4期及び古代後半期の土器編年について、再度論じる機会をもちたい。

a. 4A期 (第188図)

額見町遺跡SK10を基準資料とするが、須恵器や土師器食膳具が不足しているため、SK55で補完する。須恵器食膳具はSK10で口径13.8cmを測る扁平器形の坏A(4)のみが出土するが、当器形と法量から矢田野向山1号窟Ⅲ次窟に併行する時期のものと判断する。SK55からは同時期の須恵器が少量出土するが、基本的に主要法量の坏類しか出土していない。当期の矢田野向山1号窟Ⅲ次窟資料(小松市1990)を見ると、主体をなす食膳具組成はⅢ期古段階の扁平器形をなす坏A、坏Bの小型化したものだが、新たな法量の深身器形をもつ坏Bや有台、無台の盤類、高登器形を呈す高坏Aなどが出現し、多様な食膳具組成をもつ。3D期の公的な性格をもつ窟に先行導入された新たな宮都的食膳具組成が、在地の中に浸透を見せ始める段階であり、本当の意味での在地化は4B期だが、在地化の始まりは当期と言える。ただ、その端緒は3D期の上位食膳具組成にあることは間違い





第189図 4期前半併行の南加賀の在処家生産の土器 (1/6)

なく、両期区分において若干の問題はあるものの、後述する土師器様相の変化を重視し、田嶋編年古代Ⅲ期中で画期設定することとした。

土師器様相については、底部糸切り痕をもつ赤彩碗Aと平底短胴小釜の出現を画期要素にあげる。7の赤彩碗は底部欠損するものの、体部器形から底部糸切り碗Aである可能性が高く、矢田野向山1号室Ⅱ次室では還元焰焼成された赤彩碗Aが確認できている(第189図)。3D期と4A期の中間に位置づけられる窯資料であり、当資料が糸切り碗Aの最古資料となる。これと同時に位置づけ可能な加賀市篠原遺跡7号土坑でも南加賀窯産と推察される碗Aが出土しており、定着は4B期だが、当期には一定量出現していると見て間違いなさだろう。篠原遺跡の事例ではこれに大小2法量分化した浅身器形の碗Fと、坏A、坏B、盤Aが出土しており(石川限1987、22頁掲載7号土坑出土6～15土師器)、須恵器系器種の定着を見る。

土師器煮炊具では一部調整技法に在来型のハケ目調整を併用するが、全体的な器形は北陸型煮炊具と言える定型的なものとなっており、加えて8・9の底部糸切り痕を残す短胴小釜(先述の篠原遺跡7号土坑でも底部糸切りと思われる平底の短胴小釜が出土する)、14のような端部外屈する底部形態の瓶など、古代Ⅳ期へ繋がる器形が出現する。これら土師器煮炊具の産地は、3D期で既に南加賀窯産が主体を占める様相が見られたが、当期の資料は地元B類を主体としており、依然として地元での生産が継続していたことを示す。ただ、当期の矢田野向山1号室Ⅲ次室では須恵器室内から還元焰焼成された長胴釜や浅鍋が定量出土しており、当期以降、須恵器室から一定量の土師器煮炊具が出土するようになる。南加賀窯での須恵器室内での北陸型煮炊具生産(併焼ではない)はこの時期に開始されると言え(望月1997b、116・117頁)、この点でも北陸型煮炊具生産の須恵器窯場での本格的導入を窺い知ることができる。

以上、4期成立の両期を4A期に設定しているが、当期の画期要素としては2期、3期の中で作られてきた土器様相が在地化し、地域の中で古代土器生産体制を模索する中、古代北陸型と言えるような土器様式と土器生産体制を形成することを上げる。具体的には須恵器食膳具における多様な器種組成と坏B法量分化の在地化、赤彩糸切り碗Aの出現、定型的北陸型煮炊具の成立、須恵器窯場での土師器集約生産の本格化などを上げておきたい。また、当期は三湖台地集落群の中で、堅穴建物から掘立柱建物へ建物様式が転換するとともに拡大を続けてきた集落が停滞へと向かう転換期である。これは三湖台地集落群がそれまで担ってきた政治的意図による移民集落としての性格に終止符が打たれ、新たな形で古代集落として再編が行われたことを示すものと評価する。

b. 4B期(第188図)

額見町遺跡SI09の床面資料を基準資料とする。須恵器食膳具で確認できるのは坏B蓋と坏Aのみだが、坏B蓋の3法量分化する様相や中法量の口径と器形などから、二ツ梨横川1号窯(小松市1989)に対比するのが妥当と判断した。古代Ⅳ1期に位置付けられるものであり、須恵器産地は南加賀窯に統一されている。能美窯産は4C期以降に再度増加傾向を見せるが、当期は依然として南加賀窯産で占められる状況にあったと言える。

さて、土師器であるが、食膳具では底部へら切り的大型碗Fと坏B蓋が出土する。いずれも赤彩品で、Ⅳ1期の中では古く感じる器形だが、Ⅳ1期まではⅢ期の器形を残す傾向はあり、混在品とするよりも当期資料とするのが妥当である。次に、煮炊具だが、いずれの器種も全体的な器形や法量は、北陸型煮炊具として定型化された形をもつものであり、3D期に定量存在した在来型器形と言えるものは見られなくなる。しかし、一方では24・25のようなハケ目調整等に在来型技法を残す長胴釜や21・22のような底部丸底に仕上げる短胴小釜は依然として存在しており、北陸型煮炊具としての完成期を迎えていない。産地についても当資料では須恵器窯場産には統一されるものの、須恵器窯場で検出される土師器焼成坑の数から見て(南加賀窯ではⅣ2古期になって土師器焼成坑群を形成するようになる、望月1997b)、次の4期後半をもって須恵器窯場への土師器生産集約化が完成されると言えよう。須恵器窯場で確認される土師器煮炊具についても、短胴小釜の平底化や長胴釜の在来型調整技法削減は、古代Ⅳ2古期であり、食膳具における糸切り底の赤彩碗A主体化も含め、古代前半型土師器生産はⅣ2古期をもって完成されたものと言えるのである(小松市2002、295・307頁)。

3. まとめ

以上、三湖台地集落群の土器様相と各時期の画期様相、南加賀地域須恵器室との併行関係、田嶋編年の古代土器編年軸での位置付けなど述べてきたが、以下に土器様相の特徴と画期様相の整理を行い、本稿のまとめとしたい。

(土器様相の特徴) 以上述べた土器様相の特徴は三湖台地集落群の成因に大きく関連している。当集落群は政治的な意図で計画的に移転された新興開発型の台地経営集落であり、伝統的に低地帯や河川流域に経営される集落とは、もともとの成立要因が異なる。それに加えて、移転される集団が朝鮮半島や近江、丹波などの北陸圏外からの移民を主体として構成されているという特徴から、集落内で使用される土器器蓋炊具様相はその移民たちの本貫地の様相を色濃く出し、それが在来型土器生産に大きな影響を及ぼしたとも言える。このため、当集落の土器群は南加賀地域の一様な様相とすることはできず、それが三湖台地集落群の土器様相を語る上で最も大きな特徴と言えるのである。また、当集落群は丘陵部手工業生産遺跡群と連携した平野部での手工業生産集落を経営し、工人集団の母村としての位置付けもなされる。当台地集落内で生産されたであろう土器器は移民との関連性に加えて、須恵器工人との関連性も考える必要性があり、須恵器器蓋へ土器器生産を導入する契機となっていた可能性もある。これは当地のみの現象とはいえないが、能登半島周辺も含め南加賀地域において成立した土器生産体制の変革が北陸地域の地域型とも言える「北陸古代土器生産体制」を形成するきっかけともなった可能性があると評価したい。

(画期様相) 本稿で4期設定した画期を、田嶋編年に対比すれば、1期成立の画期は古墳様式4様式Ⅱ期末に、2期成立の画期は古代Ⅰ1期～古代Ⅰ2期の間に、3期成立の画期は古代Ⅱ1期後半から末に、4期成立の画期は古代Ⅲ期古段階と新段階の間にそれぞれ位置づけられる。この中で1期成立の画期、3期成立の画期、4期成立の画期が重要で、2期成立の画期は上述した三湖台地集落群における特質的な要素と評価されよう。三湖台地集落群では重要な画期要素だが、土器様相の大勢としては小画期にあたり、3期の前半期と後半期とを分ける画期に相当するものだろう。さて、以上の画期設定は田嶋編年の画期時期と微妙なズレがある。ただ、1期成立を古代Ⅰ1期に先行して発現した要素、そして3期成立をⅠ1期中で発現すべき要素が後半まで遅れたもの、4期成立をⅣ1期の先行的に発現した要素と捉えれば、それぞれ古代Ⅰ1期成立、古代Ⅱ1期成立、古代Ⅳ1期成立の画期に相当するものであり、田嶋氏の型式概念の総論におさまるとも理解している。

以上、簡単に整理したのが、全体的には古代後半期の土器様相に関する論稿の中でまとめられている。

参考文献

- 石川昭立埋蔵文化財センター 1987 『線原遺跡』
 石川昭立埋蔵文化財センター 2000 『小松市額見町西遺跡』
 小松市教育委員会 1989 『二ツ梨横川1号窯跡』
 小松市教育委員会 1990 『二ツ梨東山古窯跡-矢田野向山古窯跡』
 小松市教育委員会 1991 『戸津古窯跡Ⅰ』
 小松市教育委員会 1993a 『狭加遺跡Ⅱ』
 小松市教育委員会 1993b 『戸津古窯跡Ⅱ』
 小松市教育委員会 1995 『念仏山道跡Ⅱ』
 小松市教育委員会 2001 『吉竹遺跡』
 小松市教育委員会 2002 『二ツ梨一貫山窯跡』
 小松市教育委員会 2004 『八里向山道跡群』
 小松市教育委員会 2005 『小松市内道跡発掘調査報告書Ⅰ-二ツ梨豆岡山窯跡-狐山道跡-』
 小森俊寛 2005 『京から出土する土器の編年の研究-日本律令的土器様式の成立と展開、7-19世紀-』京都編集工房
 高正龍・南秀雄・高橋潔・朴天秀 1992 『朝鮮半島』『第32回埋蔵文化財研究集會 古墳時代の竈を考える』埋蔵文化財研究会
 田嶋明人 1988 『古代土器編年輪の設定』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(報告編)』北陸古代土器研究会
 田嶋明人 1996 『北陸地方の古墳時代の土器』『日本土器事典』雄山閣
 辰口町教育委員会 1985 『辰口町湯原古窯跡』
 辰口町教育委員会 2001 『辰口町湯原古窯跡Ⅲ』
 西 弘海 1986 『土器様式の成立とその背景』真蔭社
 畑中英二 1996 『近江』『古代の土器4 煮炊具(近畿編)』古代の土器研究会
 福島正実・望月精司 1988 『南加賀古窯跡群の概要』『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題(資料編)』北陸古代土器研究会
 藤原 学 1982 『古墳時代須恵器の終焉-葦原からみた古墳時代須恵器終末の様相-』『関西大学考古学研究室開設30周年記念 考古学論叢』関西大学考古学研究室

- 三好美穂 1996 『部域の煮炊具-藤原京・平城京・長岡京・平安京-』『古代の土器研究-律令的土器様式の西-東 煮炊具-』古代の土器研究会
 望月精司 1990 『南加賀古窯跡群成立期の様相』『二ツ梨東山古窯跡-矢田野向山古窯跡』小松市教育委員会
 望月精司 1994 『南加賀古窯跡群における8世紀中葉の画期』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
 望月精司 1997a 『北陸における古代土器生産体制の重質と展開』『北陸古代土器研究』第6号 北陸古代土器研究会
 望月精司 1997b 『北陸』『古代の土器の生産と焼成遺構』窯跡研究会 真蔭社
 望月精司 1999a 『戸津-林地区(林窯群)の工人組織と須恵器編年』『林タカヤマ窯跡』小松市教育委員会
 望月精司 1999b 『北陸型煮炊具の出現と成立過程-加賀地域及び小松市額見町遺跡の事例検討を中心として-』『北陸の考古学Ⅲ』石川考古学研究会
 望月精司 2003 『北陸-信越地域の土器』『考古資料大観3 巻 巻生・古墳時代 土器Ⅲ』小学館
 望月精司 2004 『北陸地域における飛鳥時代須恵器の様相-飛鳥Ⅰ～Ⅲ期併行の北陸諸窯の様相を中心として-』『白門考古論叢』
 望月精司 2007a 『額見町遺跡出土の燻灰状土製品に関する考察-山陰型燻灰土製品と円筒形土製品とを繋ぐもの-』『石川考古学研究会会誌』第50号 石川考古学研究会
 望月精司 2007b 『北陸西部地域における飛鳥時代の移民集落-移民系煮炊具と竈穴建物構造、集落経営の視点から-』『日本考古学』第23号 日本考古学協会

挿図出典一覧

- 第171図:藤原1982、小松市1995を合成作図。
 第172図:筆者作図。第173図:小松市1993aを合成作図。
 第174図-175図:筆者作図。第176図-2004年4月20日掲載。第177図～第182図:筆者作図。
 第183図:小松市1993b、辰口町1985-2001を合成作図。第184図-第185図:筆者作図。
 第186図:小松市2005掲載。
 第187図-第188図:筆者作図。
 第189図:小松市1989-1990-2002-2004を合成作図。



写真1 額見町遺跡遺景斜め航空写真（西方面からB地区全景）



写真2 額見町遺跡遺景斜め航空写真（南西方向からC地区を含んで）



写真3 ①B地区北側区域の空撮垂直写真



写真4 ②B地区南側空撮垂直写真

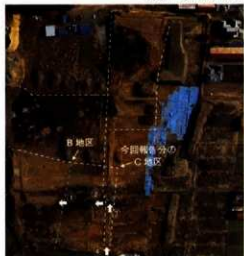


写真5 調査区位置



写真6 (上)・7 (下) B地区遺構



写真8 ③C地区北東側区域



写真9 ④C地区北西側区域



写真10 SI35 完備全景



写真11 L字型カマド全景



写真12 L字型カマド本体部分全景



写真13 セクションベルト



写真14 遺物出土状況
(SI02 遺構調査写真)



写真15 L字型カマド (煙道から)



写真16 L字型カマド覆土横断面



写真17 L字型カマド覆土縦断面



写真18 L字型カマド右ソデ断割り



写真19 SI36完掘全景



写真20 L字型カマド全景



写真21 L字型カマド左ソデ側から



写真22 掘り方全景

(SI36 遺構調査写真)



写真23 L字型カマド覆土縦断面



写真24 L字型カマド覆土縦断面



写真25 L字型カマド煙道覆土断面



写真26 L字型カマド煙道(掛樋口側より)



写真 27 SI37 完掘全景



写真 28 SI37 カマド全景

(SI37 遺構調査写真)



写真 29 SI39 完掘全景



写真 30 SI39 カマド遺物出土状況

(SI39 遺構調査写真)



写真 31 SI47 完掘全景



写真 32 SI47 カマド全景

(SI47 遺構調査写真)



写真 33 SI48 完掘全景



写真 34 SI48 カマド

(SI48 遺構調査写真)



写真 35 SI38 完備全景



写真 36 L字型カマド本体部分



写真 38 カマド崩壊時検出のカマド跡地土状況



写真 37 L字型カマド (煙道より撮影)



写真 39 L字型カマド完備全景



写真 40 カマド煙道ソア断割り



写真 41 カマド本体部分の覆土横断面



写真 42 L字型カマド煙道部分の覆土断面

(SI38 遺構調査写真)



写真 43 SI50 完掘全景



写真 44 カマド 完掘全景



写真 45 セクションベルト

(SI50 遺構調査写真)



写真 46 SI51 完掘全景 1



写真 47 SI51 完掘全景 2

(SI51 遺構調査写真)



写真 48 SI52・53B 周掘完掘状況



写真 49 SI53A・B 周掘完掘状況

(SI52・53 遺構調査写真)



写真50 SI54 完掘全景



写真51 周清完掘状況



写真52 遺物出土状況



写真53 カマドと周辺の陥床状況



写真54 掘り方



写真55 周清土層断面



写真56 カマド覆土横断面



写真57 カマド完掘全景

(SI54 遺構調査写真)



写真 58 SI66 完掘全景



写真 61 SI68 完掘全景



写真 59 掘り方完掘全景



写真 62 SI68 覆土土層断面近景
(SI68 遺構調査写真)



写真 60 覆土断面近景
(SI66 遺構調査写真)



写真 63 SI69B 完掘全景



写真 66 セクションベルト



写真 67 カマド覆土縦断面



写真 64 SI69A 完掘全景



写真 65 カマド完掘
(SI69 遺構調査写真)



写真 68 SI69A カマド被熱検出状況



写真 69 SI70 完掘全景



写真 72 SI71 完掘全景



写真 70 カマド完掘全景



写真 71 カマド復土横断面

(SI70 遺構調査写真)



写真 73 カマド加熱状況
(SI71 遺構調査写真)



写真 74 SI72 完掘全景



写真 75 遺物出土状況



写真 76 カマド復土横断面



写真 78 カマド完掘全景



写真 80 掘り方土坑1復土断面



写真 77 遺物床面出土状況近景



写真 79 セクションベルト
(SI72 遺構調査写真)

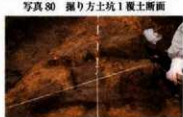


写真 81 カマド竪道ソテ断割り



写真 82 SI73I・II 完掘全景 (手前がI、奥がII)



写真 83 カマド A 完掘全景



写真 84 カマド B 完掘全景



(SI74 遺構調査写真)

写真 86 SI74 完掘全景



写真 85 覆土断面
(SI73 遺構調査写真)



写真 88 SI75 カマド完掘斜め写真



写真 87 SI75 完掘全景

(SI75 遺構調査写真)



写真 89 カマド完掘全景



写真 90 カマド覆土断面



写真91 SI76 完備全景



写真93 カマド天井崩壊土検出状況



写真94 カマド覆土横断面



写真92 L字型カマド完備全景



写真95 周溝完備状況



写真96 覆土状況とセクションベルト



写真97 カマド本体部と障壁（奥口から）



写真98 カマド崩壊土検出状況（南壁側より）



写真99 カマド煙道覆土断面



写真100 周溝完備（北壁側）

《SI76 遺構調査写真》



(SI78 遺構調査写真)

写真 101 SI78 完掘全景



写真 102 SI79 完掘全景



写真 103 SI79 セクションベルト
(SI79 遺構調査写真)



写真 104 SI80 完掘全景

(SI80 遺構調査写真)



写真 105 SI80 カマド土層断面



写真 106 SI82 完掘全景

(SI82 遺構調査写真)



写真 107 土層断面・セクションベルト



写真 108 掘り方土層断面近景



写真 109 S181 完観全景



写真 110 L字型カマド完観全景 (左側削平)



写真 111 L字型カマド建造ソナの状況



写真 112 遺物出土状況



写真 113 カマド覆土焚き口付近横断面



写真 114 カマド煙道覆土断面



写真 115 床面出土の鉄製品



写真 116 セクションベルト



写真 117 覆土断面近景



写真 118 カマド煙道掘り方とソナ断ち掘り状況

〈S181 遺構調査写真〉



写真119 SI83完備全景



写真121 セクションベルト



写真122 覆土土層断面近景



写真120 カマド完備全景



写真123 土器出土状況

(SI83 遺構調査写真)



写真124 SI84完備・貼床状況(部分)



写真125 カマド被熱と遺物出土状況



写真126 カマド周辺出土遺物近景

(SI84 遺構調査写真)



写真127 SI90完掘全景



写真128 L字型カマド本体部分全景



写真129 L字型カマド斜め写真(左壁側から)



写真135 壁周溝覆土土層断面



写真136 カマド雄道掘り方
(SI90遺構調査写真)



写真137 掘り方土坑土層断面



写真130 L字型カマド完掘全景

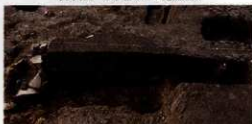


写真131 カマド覆土版土層断面



写真132 L字型カマド雄道覆土土層断面



写真133 覆土セクションベルト



写真134 掘り方完掘全景



写真138



写真139

写真138・139：上層土器だまり全景、140部分写真
（上層土器だまり 遺構調査写真）



写真140



写真141 SJ15



写真142 SJ16
（炉状遺構 調査写真）



写真143 SJ18



写真144 SB33内土器埋納ピット検出状況



写真145 SB33内土器埋納ピットのアップ

（掘立柱建物跡内の特殊遺構調査写真）



写真 146 SI37 内殿冶炉全景



写真 147 SI37 内殿冶炉の覆土断面



写真 148 SI72 内殿冶炉本体



写真 149 SI72 内殿冶炉断ち割り



写真 150 SI72 内検出殿冶炉の位置



写真 151 SJ01 殿冶炉全景



写真 152 SJ01 殿冶炉炉床近景



写真 153 SJ03 殿冶炉全景



写真 154 SJ03 殿冶炉覆土断面

(生産遺構 殿冶炉 調査写真)



写真 155 SK43 土師器焼成坑完掘



写真 156 焼成坑遺物出土状況



写真 157 覆土土層断面



写真 158 床・壁部分の被熱状況

《SK43 土師器焼成坑 遺構調査写真》



写真 159 SK44 土師器焼成坑完掘・遺物出土状況



写真 160 覆土断面



写真 161 覆土断面のアップ

《SK44 土師器焼成坑 遺構調査写真》



写真 162 SK49I・II 土師器焼成坑 完掘全景



写真 164 SK49II 遺物出土状況



写真 165 SK49II 床下断ち割り状況



写真 163 SK49I 完掘全景



写真 166 SK49I 完掘床面被熱状況

(SK49 土師器焼成坑 遺構調査写真)



写真 167 SK52 土師器焼成坑完掘状況



写真 169 覆土土層断面 (上層はSK50)



写真 168 床下断ち割り



写真 170 覆土土層断面アッブ

(SK52 土師器焼成坑 遺構調査写真)



写真1 古代I 1期の土器群 (SI38・SI74・SI75・SI81出土の集合)



写真2 古代I 2期の土器群 (SI35・SI39出土の集合)



写真3 古代II 1期の土器群 (SI36・SI72・SI90出土の集合)



写真4 古代Ⅲ期古の土器群 (SI50・SK51 出土の集合)



写真5 中世1-Ⅱ1期の土器食器具群 (B区上層土器層より出土)

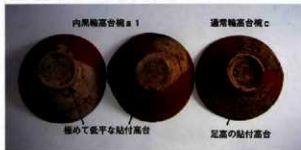
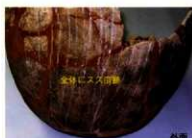


写真6 中世1-Ⅱ1期の土器器小皿と輪高台碗の内外面底部の特徴



外面



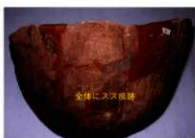
底面

写真7 I1期の在来型長胴釜地元A胎土

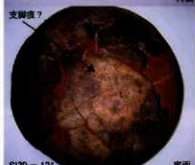


SI39-119

写真8 I2期の在来型長胴釜地元A胎土



外面



底面

写真9 I2期の在来型長胴釜地元A胎土



外面



底面

写真10 I2期の在来型長胴釜地元A胎土



外面



外面H a 叩き

写真13 I2期の朝鮮系長胴釜地元C胎土

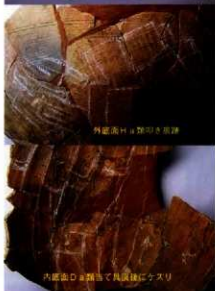


外面H a 叩き



内面D a 当て

写真12 I2期の朝鮮系長胴釜



外底面H a 叩き

写真11 I2期の朝鮮系長胴釜地元B胎土



写真14 II 1期の在来型長胴釜地元A胎土



写真17 II 2期の在来型長胴釜地元B胎土



写真15 II 2期の朝鮮系長胴釜地元B胎土



写真18 II 2期の近江系長胴釜地元C胎土



写真16 II 2期の在来型長胴釜地元C胎土



写真19 II 2期の近江系長胴釜地元B胎土



写真21 II 2期の朝鮮系長胴釜空場B又は地元C胎土



写真20 II 1期頃の朝鮮系長胴釜地元C胎土



SI50-171
上半部分 外面H a 甲き

写真22 III期古の北陸型長胴釜空場A胎土



外面



内面

写真25 III期古の在来型長胴釜空場A胎土



SI51-37

写真26 III期古の在来型長胴釜空場A胎土



SI50-171
下半部分 外面



底面

写真23 III期古の北陸型長胴釜空場A胎土



SI50-172 外面



底面

写真24 III期古の北陸型長胴釜空場A胎土

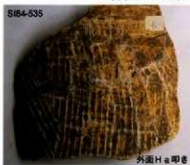


SI54-533 外面



内面

写真27 V1期の北陸型長胴釜空場A胎土



SI54-535 外面H a 甲き



内面単軸文状面

写真28 V1期の北陸型長胴釜空場A胎土



SI54-536 外面H a 甲き



内面単軸文状面

写真29 V1期の北陸型長胴釜空場A胎土

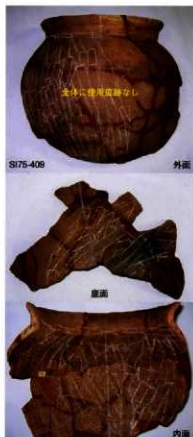


写真30 I 1期の在来型短胴小釜地元A胎土

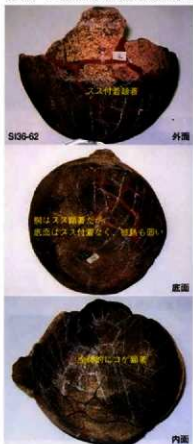


写真33 II 1期の在来型短胴小釜地元A胎土

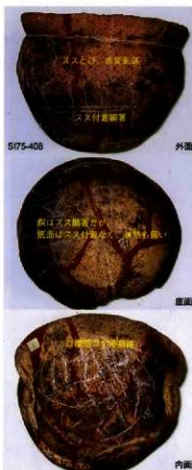


写真31 I 1期の在来型短胴小釜地元A胎土

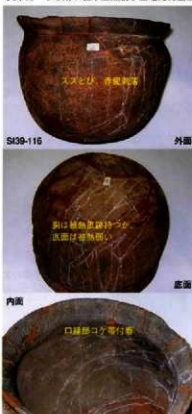


写真34 I 2期の在来型短胴小釜地元A胎土

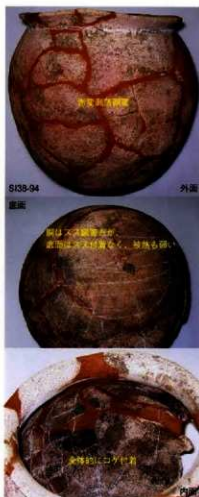


写真32 I 1期の在来型短胴小釜地元A胎土

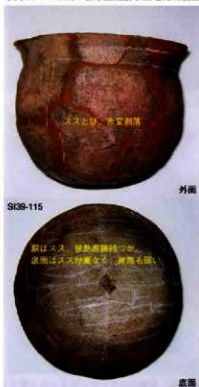


写真35 I 2期の在来型短胴小釜地元A胎土

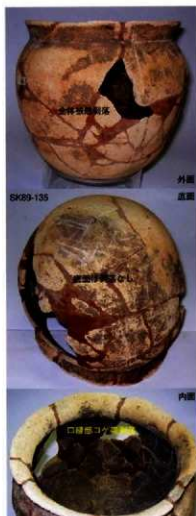


写真 37 II 1期の在来型短胴小釜地元B胎土



外面

SI76-437



内面

写真 42 II 1期新の朝鮮系短胴小釜地元B胎土



写真 36 II 2期の朝鮮系短胴小釜地元B胎土



写真 39 II 1期の朝鮮系短胴小釜地元B胎土



外面

SI72-344



外面

SI72-341



内面



内面

SI72-344

写真 40 II 1期の朝鮮系短胴小釜地元B胎土



外面

SI72-345



内面

SI72-345

写真 41 II 1期の朝鮮系短胴小釜地元B胎土



SI75-406

外面



底面



底面

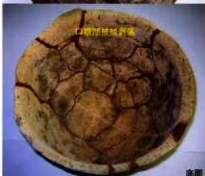


SI90-565

外面



底面



底面



SI75-412

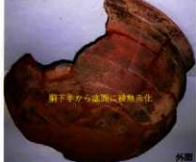
外面



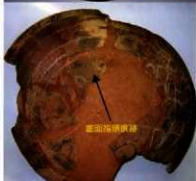
内底面

写真 45 I 1期の在来型小型浅鍋地元A胎土

SK89-140



外面



外底面



内底面

写真 46 II 1期新の朝鮮系?浅鍋地元B胎土

写真 43 I 1期の在来型小型浅鍋地元A胎土

写真 44 II 1期の在来型小型浅鍋地元B胎土

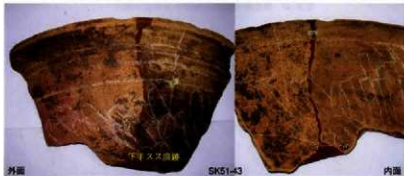


外面

SK51-42

内面

写真 47 III期古の北陸型浅鍋密場A胎土



外面

SK51-43

内面

写真 48 III期古の北陸型浅鍋密場A胎土



写真49 Ⅰ1期の在来型手付深鍋地元A胎土

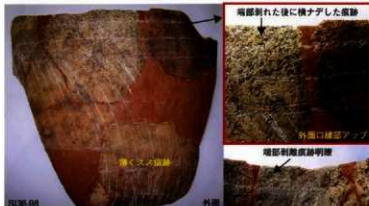


写真51 Ⅰ1期の在来型無頸深鍋地元A胎土



写真53 Ⅱ2期最古期の朝鮮系甌地元B胎土



写真50 Ⅱ2期最古期の大和系手付深鍋地元B胎土



写真52 Ⅰ2期の朝鮮系甌地元B胎土



写真54 I期の在来型煮炊具底面に見られるへラ記号「x」



SI38-100



内面

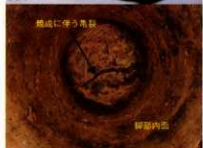


写真57 I2期の赤色高坏G地元B胎土



写真58 I2期の赤色坏G地元B胎土

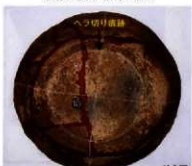


SI39-69



外面

写真59 II2期～II3期の赤色宮部系承A放射状暗紋・壺場B胎土



SI73 I-381



写真60 II2期のへら切り坏A地元B胎土



SI61-468



外面



内底面

写真55 I1期の在来型椀H地元A胎土



SI38-90

写真56 I1期の在来型椀H地元A胎土



SI46-138



写真61 II期の鉢蓋?地元B胎土



写真62 榎突状土製品地元A胎土（Ⅱ1期）



て36-127

外面



写真68 筆立て付き圈足内面視（Ⅱ1期）



し36ダマリ-27

底面

外面

写真70 葉柄部転用規（底面視）



外面

SK51-46

下面



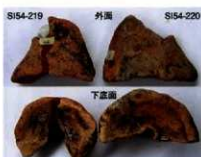
写真64 支脚形土製品
地元B胎土（Ⅲ期）

た35-126



P341-36

写真69 圈足内面視（Ⅱ期頃）



SI54-219

外面

SI54-220

下面

写真65 支脚形土製品地元B胎土（Ⅱ2期）



写真66 支脚形土製品地元B胎土

SK51-45



写真67 製塩土器窯場A胎土（Ⅲ期）

外面に木葉痕



外面

SH68-237

底面

写真71 坏B身転用規（Ⅱ1期）



写真72 环G蓋転用規(Ⅱ1期古)



写真74 須惠質轉輪車(Ⅱ1期古)



写真75 鳥形瓶足部



写真73 环A蓋転用規(つまみ打ち欠き、Ⅱ1期新)



写真76 金剛製耳環



写真77 碧玉製管玉未成品



写真78 滑石製轉輪車



写真79 須惠器密貯藏具專用燒古

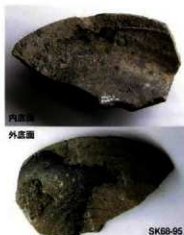


写真 80 須恵器窯内使用灰台(Ⅱ2期坏A)



写真 81 須恵器窯内使用灰台や窯土塊(製品運搬時ハフリ片)

包倉庫 155-158



写真 82 長割釜の焼成割離片



写真 83 深淵の焼成破損片(焼け弾けた部分あり)



(7世紀後半土師器焼成坑 SK52 の焼成関連遺物)



写真 84 輪型破片(外面酸化火色呈す)



写真 86 碗底部片(左:焼成割離片、右:焼成前粘土ヨジレ)



写真 85 輪型破片(焼成割離や黒灰をもつ)

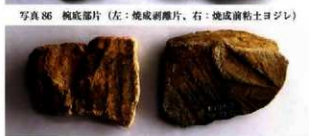


写真 87 長割釜割離片と短割小釜底部片

(10世紀後半の土師器焼成坑 SK43 の焼成関連遺物)



写真 88 轆轤焼け歪み、焼け弾け破片集合



SK44-14・15 他の外画

写真 89 轆轤破片（焼成割離や黒斑をもつ）



写真 90 W1期土師器片の焼成道具使用（破面にも酸化火色もつ）



写真 91 轆轤の焼成道具使用（焼成前粘土ヨジレあり）



写真 92 焼成道具使用の焼成粘土塊

《10世紀後半の土師器焼成坑SK44の焼成関連遺物》



写真 93 轆轤焼け歪み、焼け弾け破片集合



SK49-34・35・45・46 他

写真 94 轆轤破片（内外面に大きな黒斑をもつ）



SK49-50 他

写真 95 轆轤破片（内外面酸化火色呈す）



SK49-71 - 72 他

写真 97 罎鉢状土製品



写真 96 浅皿（焼け弾け痕あり）、長胴釜破片



SK49-76

写真 98 焼成道具使用の焼成粘土塊

《11世紀前半の土師器焼成坑SK49の焼成関連遺物》

額見町遺跡 II

- 串・額見地区産業団地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 2 -

発 行 日 平成 19 年 3 月 30 日

編集・発行者 小松市教育委員会
文化課 埋蔵文化財調査室
〒 923-0801 石川県小松市園町ホ 62 番地
(TEL) 0761-24-8132

印 刷 英文堂印刷

Excavation Reports of the Cultural Sites
in Nukamimachi Sites
Vol. II



S172出土圓足丹圓鍋とS190出土華立て付圓足丹圓鍋

2007. 3. 30

Komatsu City Board Of Education